

優生保護法と優生思想を考える

産む産まない産めない

- 見えない〈道〉 優生保護法の系譜をたずねて 斉藤千代
- 優生思想のない国 スウェーデンにおける性の自己管理 ヤンソン由実子
- 母の権利と胎児の権利 アメリカの中絶自由化運動 バーバラ・イエーツ
- ヤマギシズムの優生思想 哲学しなければ闘えない 新島淳良

これからどうする優生保護法

岩月澄江・金住典子・金子みつ
堂本暁子・原田恵理子・福本英子
松原純子・松本恵美子・ヤンソン由実子

- インタビュー／加藤シツエ・田中寿美子・田中美津ほか
- 連続討論会から3・13集会まで '82優生保護法改悪阻止連絡会の歩み

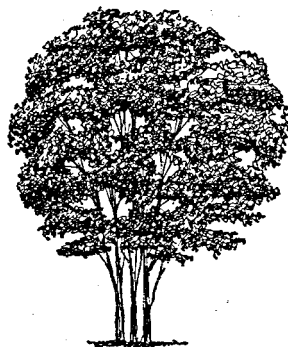
アンケート調査・妊娠・出産・中絶——そして優生保護法

事実に基づいて真実を考える——あごろ

11	論文と教育(切) 調査●主婦が学ぶということ 伊藤雅子 討論●女と教育を考える 佐田智子ほか ¥75.0	10	解説●法律の中の女性 金田典子 調査●夫婦同氏をどう考えるか 記録●名古屋放送女子定年制 女と法(口) ¥75.0	9	論文●働く女と主婦の接点 神田道子ほか 調査●働く女と主婦の実状 討論●人口抑制と産む性 青木やよひほか ¥43.0	8	研究●既婚の母の子殺し考 武田京子 討論●産む性としての女 駒野陽子ほか ルボ●子殺しの現場を訪ねて 子殺しを考える(切) ¥38.0	6	討論●婦人運動をすすめるために 資料●各国の母性保護 紹介●運動する人々 報告●解放への道 海外の婦人たち 運動をすすめるよう ¥35.0	4	記録●何かしたい主婦のために 記録●向かいたい主婦のためのセミナーから 紹介●壁を破った人びと 資料●二つの差別裁判を考える ¥30.0	3	調査●団地の主婦の解放意識 解説●脱主婦意識をめぐる 藤原房子ほか 討論●二分二乘法 伊東すみ子 主婦の解放 ¥20.0	2	調査●働く女性の地位向上をめぐる 討論●女性と能力 貞閑静ほか 研究●女性はずな管理職になれないか 女の解放 ¥20.0	1	女が働くこと(切) 随想●女が働くこと 松谷みよ子ほか 調査●共働きの現状 報告●働く女は過保護か 赤松良子ほか ¥20.0																		
20	論文●女性解放と雇用平等法 論文●女性史におけるリブ 水田珠枝 資料●労基法研究会報告/雇用平等法案 ¥130.0	19	論文●日本近代の国家と女性 中島邦 討論●日本の女性解放運動 小沢遼子ほか 資料●優生保護法をめぐる経過と論議 ひろがる女性解放と雇用平等法 ¥80.0	18	ルボ●いま女性解放は(切) 資料●女性差別に関する国連条約ほか 討論●日本の女性運動をどう展開するか 女にとって子どもとは(切) ¥130.0	17	論文●女性の生涯学習への一提言 高野フミ 発言●女子成人教育の問題点 中山宣子ほか ルボ●女子が学ぶ場所 手記●私の学習 いま女性解放は(切) ¥78.0	16	研究●「しあわせな結婚の実態」J・バーナ ード 手記●私の結婚 巖谷丁子ほか 紹介●文化人類学から見た結婚 祖父江孝男 女と生涯学習 生涯教育 ¥75.0	15	調査●日本の著名企業100社の女性差別 論文●女性と専ら専門職 天野正子 概説●女子労働市場の現況 正木直子 女と結婚 ¥75.0	14	研究●新女大研究 エリザベス・マウア 発表●「女の記録」人選作 高橋三枝子ほか 資料●婦人問題企画推進会議の議事録から 職場の中の女性差別(切) ¥75.0	13	記録●国際婦人年国内集会と行動計画 調査●ちまたから見た国際婦人年 討論●国際婦人年とメキシコ集会 女の記録 ¥75.0	12	記録●メキシコ会議とトリビュン 感想●メキシコ・キューバー私たちの旅 資料●世界行動計画/メキシコ宣言ほか 国際婦人年国内集会と行動計画 ¥75.0	21	論文●親離れ子離れ考 伊藤雅子ほか 手記●私にとって母とは 漆田和代ほか 調査●著名企業144社にみる男女差別 子と母の関係を問う ¥110.0	22	手記●いま女の働く場は 鈴木恵子ほか ルボ●「保護派」と「平等派」の接点求めて 資料●女性差別撤廃条約/各国の保護規定 女たちはいま変わる ¥120.0	23	記録●コペンハーゲン会議とフォーラム ルボ●女性差別撤廃条約の批准へ向けて 資料●国連婦人の十年後半期行動計画 女と戦争 ¥150.0	24	研究●女はこうして侵略戦争に巻き込まれた 報告●フェミニズムと戦争/平和と女性解放 年表●十五年戦争と女 手記●女と戦争 女と情報 ¥150.0	25	研究●ファシズムと情報 中村智子●女と戦 争と情報 加納実紀代●つくられる女 駒尺 喜美 資料●ILO156号 情報公開法 いま女がモノを言うということ ¥150.0	26	みずからのごとく 寿岳章子●自立の心理 学 しままよこ●女と社会的伝達 井上輝子 報告●各地に高まる反戦反核運動 いま平和を支える ¥150.0	27	緊急発言●手をさぐりていいの 遺 言●イカサの翼 井上寿南●原爆の図は私の 言 丸木俊●伊藤野枝のこと 伊藤ルイ 産む・産まない 産めない ¥180.0	28	調査●妊娠と中絶 優生保護法と優生思想 高橋千代●母の権利と胎児の権利 パーラ ・イエーツ●性の自己管理 ヤンソン由美子 教育の荒唐を考える(予定) 子どもたちは、なぜ荒れるのか。荒れている のは、子どもたちだけか……。 ¥180.0	29	論文●女性解放論と反省 田中寿美子 資料●労基法研究会報告/雇用平等法案 雇用平等法 ¥130.0

産む 産まない 産めない

あこら 28 号



優生保護法改「正」の波紋は、水面から水底へ、深く広くひろがった。

産めないときにも産むことを強制される日が訪れる……というだけではない。女たちの△中絶△を罪から免れさせていた法にひそむ△優生思想△が、陽光のもとにさらされた。

「健常者」の△産まない選択△は、「障害者」の△産めない△状況を基盤に許されていたことに、女たちは改めてがく然としている。

いま、改「正」推進は△休止△しているが、△阻止△し得たわけではない。同様に、池の表は静かに見えても、いったん波立った女たちの心が落ち着いたわけでもない。問題の原点へ、事の本質へ……。いま、自らの胸に強いライトをあてはじめた女たちの鋭い自己批判は、やがて大きなエネルギーになっていくだろう。それは、あらゆる差別の構造そのものにさえ迫る力となるかもしれない。

特集●産む・産まない・産めない

見えない〈道〉

優生保護法の系譜をたずねて
見たこと・考えたこと

斎藤 千代 4

ヤマギシズムの優生思想

哲学しなければ
聞えない

新島 淳良 74

母の権利と胎児の権利

アメリカの中絶
自由化運動から

バーバラ・イエーツ

109

優生思想のない国

スウェーデンが目指す
「性の自己管理」

ヤンソン由実子

122

AGORAZEIN

これからどうする

岩月澄江

堂本 暁子

松原 純子

金住典子

原田恵理子

松本恵美子

143

優生保護法

金子みつ

福本 英子

ヤンソン由実子

◆人口妊娠中絶の歴史的背景

大林 道子

196

◆共に生きる―「障害者」教育の現場から

今橋

明 205

◆堕胎罪の変遷と今後の展望

金住

典子 212

◆優生保護法改「正」への公開質問状

柴谷

篤弘 220

アンケート調査●

妊娠・出産・中絶―そして優生保護法

314

優生保護法について五政党の方策を聞く……

313

この人に
聞く

まず何よりも避妊を 戦前でも98%確実……

加藤シヅエ

170

阻止以後こそ危機の時——今こそ運動の再編成を……

田中寿美子

181

△負△の窓から見つめつつしどろもどろ生きる……

田中 美津

188

手記◇私にとって産むこと・産まないこと

塚崎美和子・五十嵐愛子・阿部ひろ江・田島由理・大原立……

236

インタビュー●優生保護法を考える人びと

細田英理子・加納文子・前田朋乃・森川早苗・山田洋子……

224

報告●私たちの取り組み 北海道・三多摩・京都・山口・福岡・佐世保……

255

連続討論会◆河野 誠・いつわりの生命尊重論を斬る……

289

◆藤島宇内・改憲勢力と生長の家

公開質問状◆全議員に聞くⅡ優生保護法改「正」をどう考えるか……

308

報告◆3・12全国交流会◆3・13全国総決起集会……

269

阻止連の
活動から

窓 国籍法改正中間試案を考える／男女平等法制定を要求する……

354

●新聞切抜帖……

324

●あこら読書室……

365

●あこらのあこら……

370

資料

1 世界各国の妊娠中絶に関する法的規則……

4 優生保護法の改正に反対する要望書……

381

2 国籍法改正中間試案……

5 母性の福祉を推進する議員連盟規約と名簿……

383

資料

3 婦人差別撤廃条約早期批准要望……

6 生命尊重議員連盟名簿……

385

見えない◇道

——優生保護法の系譜をたずねて 見たこと、考えたこと——

斎藤千代

優生保護法改「正」を阻止しようとする動きは遼原の火のように全国に拡がり、時勢に関心のある女の人たちの間では、かなり共通認識ができてきました。要点をまとめたパンフ類も次々につくられ、問題を学習している人がどんどんふえてきています。

しかし、この問題は非常に根が深く、簡単なパンフでは、なかなか説明しきれるものではありません。反対署名を集めようとしてもげんな顔をする人が多く、「おろせなくなるのよ、困るでしょう」と説明すると、やっと署名してくれるという声も聞きます。

一方、生長の家を中心とする推進派の署名は、「生命を守る」をスローガンに掲げているため、「いいことだ」と思う人が少なくなく、もう七、八百万も集まったとか。女の運動をしている人の中にも、まちがってこちらに署名をしたという人がいるほどです。

子どもを産むというからだの仕組みを持つ女にとって、中絶は大変な問題ですが、少し突っ込んで話をしてみると、墮胎、間引き、避妊、家族計画と産児制限などの区別を知らない人も多く、知っている人でも、「経済的理由で中絶ができなくなつては大変だ、生活防衛のためにたたかわなくては」という認識が大部分のように見受けられます。

たしかに問題は、昨年三月、参議院予算委員会で村上正邦議員が優生保護法の中絶を認める条件の中の「経済的理由」の削除を提案し、森下厚相（当時）が、「前向きに検討する」と発言したことからの出発しているわけですが、「経済的理由」云々は、氷山の一角のように私にはどうも思われてなりません。

といって、お前はどれだけ事の本質を知っているのかと問い返されると、一瞬、ことばを失ってしまいます。

◆ 浮浪者殺しに加担していた私

こう思うのは、私なりの深い後悔があるからです。

二月五日、中学生が浮浪者を襲った、あの事件を聞いたとき、私は呆然としました。

ごはんがのどを通らないとはこんなことか、と思いながら、数日、ぼんやりと彼らのことを考え続けていました。

ニュース解説者が、襲った中学生の母親の半数が働いていること、七割が離婚家庭であることを、さも「原因」であるかのように告げるのを、耐えられぬ思いで聞きました。

母親が働いていれば、子どもには十分な庇護を与えられないでしょう。まして離婚ともなれば、親子ともども、どんなにボロボロになっていることでしょう。社会が誰よりも温かい手をさしのべなければならぬ子どもたちを特別視する世間。その中で子どもたちはどんなに傷ついたことか……。落ちこぼれないほうがむしろ難しいとさえ言えるかもしれないと思うほどです。

その落ちこぼれの彼らが、誰の目にも落ちこぼれと映る浮浪者を襲った。「浮浪者は臭いし、きたないし、征伐していいと思った」と、彼らは語ったそうですが、日ごろ自分たちに言われ続けていることをしただけではないのでしょうか。

美しいもの、速く走れるもの、勉強ができるものは「良し」とし、そうでないものは「悪し」とする考え方。その「優生思想」を法律にした「優生保護法」に、自分はどれだけ反対してきたか、と考えたとき、私は、まぎれもなく殺す側に加担している自分を感じました。恥ずかしい、と思いました。

「と、私に、私はどれだけ優生保護法を読みこなしてきたというのでしょうか。」「優生」とは何か、「保護」とは何か、一つひとつ、陽光の中に取り出して調べたことがあったでしょうか。自分の魂に、ほんとうに引き寄せて考えたことがあったでしょうか。」

私は、十年前の学習会で、優生保護法が「国民優生法」を受け継いだものであること、「国民優生法」はナチスドイツの「断種法」をまねたものであること、条文に新たに「精神的理由」が加えられると、思想的に「危険」と体制側から判定されたものは中絶や断種を強行されるおそれがあること、などを学んだとき、驚くと同時に、その恐ろしさが「わかった」つもりになってしまっていたのでした。

もしも本当に「わかって」いたら、そして私自身、心の底に一かけらも優生思想がなかったら、この、世にもいまわしい法律の廃止のために、もっと早くから、もっと熱心に取り組んでいたでしょう。

それにしても、ものみなすべて新しくなった（ように感じられた）戦後に、優生保護法がつくられたのはなぜなのか。戦前の国民優生法、あるいはその原典といわれる民族優生法とはどういうものだったのか。そして優生思想とは何なのか……。本当に「わかる」ためには、めんどろでもそれを一つひとつたずねるほかない、と思うようになりました。

優生保護法の源流をたずねる旅が始まりました。それは、思いのほか長い旅になりました。各駅停車で、しかも支線が多く、あちこち乗り換えを間違えては変な路線にまぎれこみ、行く手は少しも見えず、もうやめようかと思ったことも何度もありました。しかも、行けども行けども「わからない」ことばかりです。「わからないことがやっとわかった」とも言えるいまの私が、人様にお話しするのは大それたことですが、旅の中で見たもの、見えかけたものについてお話ししながら、一緒に考えていきたいと思います。

◆ 優生保護法のふしぎ

すべて法律は、その第一条に「目的」を記していますが、優生保護法の第一条を覚えていらっしゃいますか。「この法律は、優生上の見地から、不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護することを目的とする」

十年前、この最初の一行から、ひっかかって考えるべきだった、と、今にしています。

「優生」「不良」「母性」「生命健康の保護」——考えてみると、どれもわからない。だいたいこの文章の前半と後半は、何のかかわりがあるのでしょうか。私は、「優生」と「母性保護」をいっしょにして「優生保護法」という名をつけた、と思っていたのですが、人によっては「優生」を「保護する」法律だと言います。どうも、こちらの意見のほうが多いんですが、どちらにも受け取れるあいまいさがあります。

さて、内容をよく読んでみると、全文三十九条、そのうち「母性保護」に関わりがあるらしいのは、十四条、十五条の、妊娠中絶に関する部分だけ。あとは全部「優生」と「優生手術」に関することです。

外国の人たちが条文の英訳を読んで「Maternity Protection Law かと思ったら、Eugenic Protection, それも Sterilization Law じゃないの。日本にまだこんなひどい法律があったの!」と、びっくりするんです。ユージェニック・プロテクション・アクトとは、文字どおり、優生を保護する法律ですが、ステリライゼーション・ロウとは、断種法なんですね。中絶を認める母性保護条項と断種法が共存しているのに驚くのです。「しかも強制断種があるなんて」と言われて、よくよく読み返してみると、たしかに強制断種の条項があるんです。第四条に。「医師は、別表の患者に優生手術を行なうことが公益上必要と認めた場合は、本人や配偶者の同意を得なくても申請できる」

その別表には、多くの精神性疾患も掲げられています。とすると、もしも、その種の病氣と認定されたら申請される!

よく診断書を方便に書いてもらうとき、「ノイローゼ」と書いてもらうといい、なんて言いますね。精神性疾患は外からはわからないから。ということとは、逆に言うと、そういう病氣でなくてもそう認定されて特殊な扱いを受ける危険性もあるわけです。本当に病氣だった日航の機長さんが、「そうではない」と言われた、その逆の可能性も……。

この部分こそ戦前の「国民優生法」の生き残りだ! と憤慨して「国民優生法」を読むと、おや、こちらにはないのです。条文の第六条に入っているのですが、施行令では、全文削除されている。——とすると、どう考えても、「優生保護法」は改悪です。人権が尊重されるようになったはずの戦後に、なぜ……。

——そのふしぎを、どうしてもたずねたくなりました。

ともかく、そもそのコトの起こりという「民族優生法」の成立ちから、戦前の帝国議会の議事録について、一つひとつ調べてみることにしました。

◆ 荒川先生、大演説のこと

「民族優生法」という名が、議事録に最初に登場するのは、第六十五帝国議會。一九三四（昭和九）年一月二十七日です。

提案者は、荒川五郎ほか一名。条文は全部で七条の、ごく簡単なもの。第一条は「民族の優生を保護助長し、悪質遺伝を防止根絶するを以て目的とす」。そして、そのために断種を行なうこと、その対象は、凶悪犯、遺伝性精神病、各種中毒症、ヒステリー、重症の結核や癩患者であること。誰でも結婚には「健康証明書」が必要で、前記の患者で断種を受けていない者や、梅毒に罹って治っていない者は結婚できない、といった内容です。

約一か月後の二月二十二日。衆議院でこの法案が取り上げられました。

まず条文を朗読、提案者の荒川五郎氏が、提案理由を説明します。

ところで、これが長いんですね。「説明」なんてものじゃない。演説。それも大演説です。でも、聞いてみましょう。荒川さんって、どんな人か、知るために。

「諸君、今や教育の施設は一般に大いに備わり、医術・衛生のことはますます発達進歩しつつありますのに拘らず、不良児、悪漢は次第に殖え、病疾虚弱の者は日に増加しつつありまして、この不景気窮乏のどん底にあつて、ひとり刑務所と病院とは満員大入りの繁昌を致しておりますことは、国家の恥辱であり、民族の不幸損害は少くないと存じます。これが原因たる、教育の欠陥、指導階級の放縱、社会環境の無秩序及び風土・氣候・習慣・人種等を無視したる栄養や、体育法等の錯誤、その他幾多の原因もありましょうが、それ以外に於て、なおより以上に大いなる原因は、父祖血統の遺伝によることは、今さら説明を要しませぬ。諸

君。凶惡にしてなおすことのできにくい悪性を先天的に持つて生まれ、またその毒惡症体にして療することを得ざる惡疾を遺傳されて生まれたる、いわゆる精神的異常児、もしくは身体的異常児に対しては、特別の施設教導を致さなくてはなりません。

しかるに從來わが国におけるこれら育児の施設は、経費の關係上、ただわずかその一小部分を、感化院・少年救護院・矯護院等に收容するにとどまりまして、大多数はこれを普通児・正常児とともに一斉画一的に、共同苗的に收容教育している現状であります。かくの如きは、人の密集団に悪性のパチルス（ウィルス）を投げ込み、共同苗代に害虫を放つが如きものでありまして、その正常児童に及ぼす影響はきわめて甚大なるものがあり、また、その、国家社会を害することは実に測るべからざるものがあるのみならず、本人にとつても、本人の自らなせる原因でなくて、かく社会の擯斥（ひんしゅく、排斥）、国法の刑罰を受け、この世の中を味けなく、不愉快に、窮屈に、不幸に終わらなくてはならないことは、実に惘然に耐えない次第でありまして、社会はその惡を憎み、その病を忌んで、これを擯斥しますけれども、これはむしろ大いに同情すべきことではありませんまいか。

よつて、かくの如き、本人も何ら社会の幸福をうけ得ざるのみか、終生の不幸、災厄に終わり、社会もまた（この）ために大いなる損害・迷惑をこうむるようなものを、この明るく正しく愉快なるべき世の中に招致しない方法、すなわち惡種遺傳の防止根絶方法を講ずることは、社会の改善向上のために、また民族の淨化強成のために極めて大切なことと存じます。

諸君、從來わが国におけるこれら民族保護に関する法律は、わずかに婚姻に際して、三等親より上の結婚を禁止し、また年齢の点において男子十七歳、女子十五歳という制限を設けていること、ならびに身体上の制限は、種痘やその他強制注射等、ほんの一部的の制度（が）あるにとどまっておりますが、しかし外国に於ては、つとに大いにこの民族保護の問題に注意を加えまして、米国の如きは、世界の自由国をもつて誇つてゐる国柄なるにもかかわらず、民族血統の淨化に重きを置きまして、法律をもつて「結婚制限法」を設け、オハイオ州の如きは遺伝病患者の結婚を禁止、梅毒患者の如きは医師の診断によつて完全に治癒したという証明を提出しなければ結婚を許さざることを規定し、また精神病者や重症の結核、重症のヒステリー、なら

びに発病中の患者は結婚を拒絶することを規定しているのであります。また女子が誤ってこれらの病氣を持つ男子の種を宿した時には、相当の手續きをもってこれを墮胎せしむることと致しており、また殺人・強盜その他これに類する凶悪なる犯罪者は、みなその遺伝を予防する目的を以て、男女とも処刑の一条件として、これに去勢術を施行することにしております。その他、スウェーデン、ロシア、ポーランド、カナダその他にも、これに類する法律を施行して悪性悪疾の遺伝を防止するにつとめ、またドイツは「劣性人断種法」を制定して、精神上または身体上甚だしき悪症状を具有し、人種劣悪なる遺伝を子孫に与うるおそれある者に對しては、強制を以てその生殖力を絶滅する手段を施すべき旨の法律を制定し、昨年七月二十五日これを發布して、本年一月より実施を致したのであります。

これら遺伝病者の去勢施術は、多くは男子のこう丸または女子の卵巣を取り去って、彼ら天賦の性能も、人生の本能愉樂すらも奪ってかえりみない強制手段、すなわちいわゆる去勢術でありまして、かの學術文化の開けない時代に支那その他に行なわれた宦官の施術とほとんど同じで、それが文化の進んだ今日にもなお行なわれつつあり、しかも宦官は自由意志で自ら進んで行なうのでありますのに、これは強制的に強行していることは、一面からみればずいぶん野蛮的とも申すほどの正政な国法であると申してもよろしいであります。

しかるに今や医術の進歩とともに、これが施術法が大いに改善せられまして、去勢術のような荒手術を行なわないでも、男子の精系もしくは女子の輸卵管に結紮術を行なうて遺伝を防止し、またレントゲンの深部照射手術でその目的を達することもできるようになりまして、これらの医術はこれを施しても男女の天賦の本能を失わしむることなく、依然として本来の性欲愉樂を満たさしむることを得るのでありますから、したがって今日に於ては、国家としても民族全体の保護のためにこれが去勢をなし得べき理由があるのみならず、また本人としても、自分の本能的一時の満足を得んがために、悪性悪病を遺伝することの甚しき罪惡無慈悲であることを感ずる良心の悩みを安んぜしむることも得る次第であります。

諸君、私は多年養育奉仕に一身を捧げまして、国運の進歩、民族の向上に微力を致しておるのであります。が、さらにこれが根本にさかのぼり、民族の惡種遺伝を防止して、民族血統の淨化、国民性格の優秀化を図

り、これが健全なる発達を助長し、以て雄偉剛健なる国民を長養し確立したいと、多年熱心研究の結果、この案を提出した次第であります。

中にはこの案の実行に関して危ぶまれる人もありますが、しかし今や各国とも民族的競争は最も烈しく、いずれの国も鋭意自国の国民の優秀化に努力しつつあるときで、一日遅れば一日の国損は少なくないのです。決してこれは漫然と等閑に看過すべき問題ではないと思うのであります。実に一日を緩うするを許さない大問題なるを信ずるのであります」

どんな顔の人でしょうね。写真を探してみました。

まず目につくのは、額の深い縦じわ。細おもてに細い銀ぶちめがね、そのめがねの奥から鋭い目が光っている——そんな感じのおじいさんです。

慶応元年（一八六五）生まれというのですから、この時は六十七歳。五十年前のその頃としては、今の八十歳くらいの感じでしょうか。話せば話すほど、のり、に、の、る、という感じです。

演説は、まだまだ続きます。もう紹介はやめてもいいのですが、このおじいさんの面目ますます躍如、という感じがしますので、要約してお伝えしましょう。

「子を産むということは、民族の優生と重大な関係がある。民族の優生上、最も重きを置かねばならぬことなのに、漫然と慣習のままに放置されているのに驚き入る。たとえば生まれ立ての子を洗う習慣があるが、母の暖かい胎内から全く異なる空気の世界に出ただけでも大変化、大激動なのだから、変化に順応して保護しなければならぬのに、空気よりもなお硬い湯で洗うのは初生児を虐待するものである。オギアアの第一声は、彼が境遇の大変化に驚いた驚愕の叫びなのに、元氣な証拠だなどと平気で聞き流しているが、このくらい残酷なことはない。さらにかみそりをあてて頭を剃るといふ悪習もあり、これは山間部などを除いても改まったが、頭を剃ることと硬い湯に入れて人間の荒い手でもみ回すとはどれだけの違いがあるだろう。これを研究する者がいないのは残念だ。

さらに一層注意したいのは、医師や産婆がいなくては多くは子どもを産めないという母親の心理状態であ

る。優生学上最も研究すべきことではないか。昔から親の心は子に移るといふ。母の強い依頼心やひどい恐怖心は、どれだけ胎児の心性を動かすかわからない。古来、英雄や大人物の多くは貧者の子弟だが、貧者の母は、憂いたり依存する余裕もないし、気にもせず平然として産む精神が子に移るのだと思う。今日、貴族や富豪の子弟などは、意思は弱く、依頼心は強く、やくざな者ばかりで、富家の子には馬鹿が多い。これらは皆、胎内から柔弱に、依頼心強く産みつけられたことが大いに原因になっていると思う。

この法案も、政府案でなくては、という人もいるが、政府に依頼していたのでは、いつのことになるかわからない。このような依頼心が最もよくないと思う。もちろんこの法案は我が国初の試みだから決して完璧とは思わない。民族前途のために真剣なご研究を願いたい。

民族の問題を優生学的に考えると、人間の性質はもちろん、病氣や行動も、単に病理や心理等、医学や解剖だけの問題ではない。脳の働き、頭脳の研究から出なければならぬ。人の心は人さまざまだが、それは顔の形や頭脳の形に表れており、頭脳の形や顔貌を熟知することが第一であり、心身相関の根本を究めなくては、靈妙な人間の本質を解釈することはできないと思う。優生学の根拠もここにある。母の心理は人間社会の根底をなす。本案の根拠も、決して医学や精神病学のみでは判断されないことが多い。社会の状態や環境さえ人の性質行動に大いに影響するのを見ても、親の精神や行動が子に多大の影響を与えることは明らかである。わが日本民族の優秀化に努力することは、国家に忠なる第一である。忠誠の念に富む諸君のご配慮を切に懇請する」

やっと大演説が終わりました。拍手が起きます。しかし、質問は皆無。「健康保険法中改正法律案はか一件委員」に付託するという動議ががその場で出され、「異議なし」の声で可決されます。

◆ もしも産児制限されていたら、この世にいなかった

「健康保険法中改正法律案はか一件委員」とは、おかしな名前ですが、当時は厚生委員会とか社会労働委員会といった名前はなく、それぞれ法案の名で呼ばれていたようです。小さな法案は、何々ほかの、ほかとし

て入れられたのですね。

この委員会は二月七日から開かれていましたが、ほかの中に「民族優生保護法案」が加わったのは、三回目から。そして、七回目の三月三日に、やっと議題に上ります。

ここでも冒頭に提案者が説明するわけですが、荒川先生、またも口を開けばとまらない感じの大演説になります。

「前回の私の説明を官報で読んで、各方面から共鳴・激励が続々寄せられた。それだけでも、議員生活三十年、教育奉仕と民族問題について考えてきたかいがあつたと感激する」に始まって、「何人も結婚に当たっては相手の血統を重視するが、国家は全民族の血統を純正、清潔にすべきだ」と、民族優生の必要性を語るに説き、産児制限を糾弾。「私は名の如く五男。産児制限されたら生まれていなかったらう」と本心を語り、広島の中の貧農の子として、いかに苦学力行したか。人は貧乏人の子だくさんと言ってあわれむが、貧乏人ほど自立心が強い。いまの社会の指導層もほとんど貧家の子である。人の現状を見て将来を占うことはできない。貧乏人の子を制限したら、富豪の子ばかりの世の中となつて、世の中はもっと悪くなる」と、話はエスカレートする一方です。

さて、拍手で終わった演説には、今度も質問は皆無。次の議題にあつさり移ります。この日、内務大臣後藤文夫氏もご出席のこの委員会、委員会全体が何となく改まった雰囲気ではありますが……。

さて、次に議題に上がったのは委員会としては九回目の三月二十六日ですが、この日は議題が目白押し、この法案は、とうとう審議されないうまま立ち消えになります。

ところで、すこし風変わりな、でも一徹そうな荒川先生、どうも教育者のような口ぶりですが、やはり日大付属中学(今の高校)の校長先生でした。『市町村制改正理由』『戸籍法通解』『地方制度通義』『手形法正解』『普通要義』など、法律関係の著書もたくさん出しているところを見ると、かなり勉強家なのでしょう。『少年救護院法』の提案者でもありますし、この二年後には「皇曆紀元に関する質問」をして、今の皇紀は神武天皇の即位年を示すもの、始祖はイザナミ・イザナギで、神武天皇ではない、と、総理や文部大臣を突き上げ

て、回答をもらっています。民族優生保護法案の上程も、同じ憂国の思いに立つものだったかと思われます。

二年半前の一九三一年「満州事変」勃発。翌三二年「上海事変」。そして5・15。六月に特高が設けられ、国防婦人会が生まれる一方、東北・北海道は大ききん。都会は相次ぐ労働争議。さらに翌三三年には、国際連盟脱退、滝川事件、神兵隊事件、思想取締まり強化。人暗い日本Vの幕明けの時代です。東北の女たちが売られ、性病は急増していくなかで、荒川先生なりの、懸命の「起死回生策」とも受け取れないではありません。

◆ ますます意気込む荒川先生

信念の人、荒川先生は、翌一九三五（昭和十）年、第六十七帝國議會に、またも同文の「民族優生保護法」を提出します。前年意気込んで提出した法案が、審議されないままに終わったあと、社会不安はつのる一方。東北の冷害はいよいよきびしく、国家の財政も窮迫。陸海軍が予算復活をめぐって大蔵省と渡り合うという情況。それもこれも、「害虫」に無用な国費を食われるから。諸外国は早くから優生法を実施している、一日遅れば一日の国損、と、あせる思いが目に浮かぶようです。

二月九日受付けられた法案は、十六日に議題に。しかしこの日は順番が来ないうちに時間切れ。二十一日になって、ようやく登壇、趣旨説明の機会を得ます。

ことしも前年同様あふれる憂国の思い。「社会悪」を根源的に絶つ「救国の法」をこそと、情熱傾けての説明に、さらに次の一言を加えたのは、前年の軍事費削減問題がこたえていたからでしょうか。

「国家予算中の軍事費の額の巨きさが問われ、富国の勸業費（産業育成費）が強兵の国防費に伴わないという議論は、この議場でもしばしば出たが、国防軍事費は国家の自衛維持のためにやむを得ないもの。しかも青年を強壮、かつ規律的・能率的に養成し、産業もうるおし、決して非生産的なものではないが、悪人や病人のための費用は、軍事費どころではない巨額のうえ、国家民族の不利益をもたらす大問題である」

この三日前、議場は美濃部達吉博士の天皇機関説攻撃で騒然となったばかり。荒川翁の大音声が、耳に聞こえる思いがします。

拍手をもって迎えられたこの提案は、即日、「衛生組合法案はか四件委員」に付託され、一週間後には、早くも委員会での討論に入ります。

前年とちがって、今度は質疑応答も活発です。

まず、一番手は青木亮貫。ヒトラーに似たチョビひげ。目玉もギョロリと大きいこの人は、同じ民政党。軍医あがりの病院長で、共同提案者の一人でもあります。

「断種法は米独はじめ各文明国で認められているが、早発性痴呆症の家系からナポレオンやニーチェが出た例もある。政府の見解を聞きたい」

「趣旨には賛成だが、結核や癩などは遺伝しない、遺伝の制定が難しい、など、内容に疑問があり、保健衛生調査会で審議中である」——大森内務政務次官の答弁は慎重です。

警視庁の検疫医から開業医となった野万次郎は、政友会ながら

「問題は、司法・文部その他多方面にかかわる。内務省から独立した衛生省が必要。私は大いに賛成。十分研究してほしい」

と助太刀。しかし、岡田衛生局長は

「ドイツでは一昨年「遺伝病防止法」をつくった。デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、カナダにもこれと似た法律がある。米国も二十七州で実施している。各国の法律の状況については、ここに詳細な調べがある。我が国でも保健衛生調査会で特別委員を挙げて深く研究しているが、遺伝の範囲を確定することは困難である。外国の事例はあるが、我が国で今日実行できるかという点、すこぶる自信がない」

と消極的です。荒川氏は、「私はこの問題を研究すること、すでに二十年に及ぶ。現在国家の仕事は悪人と病人のために費やされていると言ってもいい。殊に教育の如きはあたかも共同苗代へ害虫をばらまいて、その害虫と闘っているようなもの。根本から血清浄化を」と、自説を繰り返して強調。ことが「教育」に飛び火したため、山樺文部参事官も引き出され、

「優生な民族の保持発展には異論がないが、本法の教育上の影響については協議研究してないのでお答えしかねる」と、とまどい顔です。

荒川先生は最後に特に発言を求め、

「前回は私の説明だけで終わったが、今回は政友会の中野種一郎君や、野方君のような専門家まで誠意をもって賛同下された」と大感激。「しろうとの私がつくった案なので不備な点も多い。どのように大鉦をふるって下さってもいいから、成案となるようにお力添えを」と、深く頭を下げます。石坂委員長は、「本委員会では十二分に審議を尽くしたい」と約束して、この日は終わり。

約束どおり、三月二十二日、ふたたび議題に上りますが、当日は娼妓取締法案で大荒れ。他の案は全部流れ、以後議題に上ることなく、会期切れとなります。

◆ 三度目の挑戦

さて、「どんなに直して下さっても結構ですから、法案として成立するような条文にして下さい」と、三拝九拝した荒川五郎に協力する人が現われたのか、第七十帝国議会に三たび姿を表わした「民族優生保護法案」は、第一次、第二次案の条文七条が十四条にふくれ、法律の体裁をかなり整えています。

まず、「遺伝ではない」という指摘が多かった、凶悪犯・結核・癩・ヒステリーが断種の対象からはずされ、精神病とか不具と称されていたものの内容が「精神薄弱者、癲癇者、精神乖離症者、躁鬱病者、ハンチントン氏舞蹈病者、強度ナル病的性格者、遺伝性盲者・聾者、又ハ強度ナル身体的畸形者」と、具体的に列挙されるようになりました。

また、「保生断種」という「荒川造語」に代えて、断種の方法を、「精子又ハ卵ノ、輸精管輸卵管ノ通過ヲ不可能ナラシムル手術ヲ謂フ」と、わかりやすく規定しています。

実施は「強制」から「申請制」に代わり、本人のほか、「戸主、法定代理人又ハ保佐人、官公立ノ精神病院・刑務所・矯正院又ハ教護院ノ長」が行ない得ること、ただし、本人（無能力者の場合は、その配偶者と法定代理人（又は保佐人）の同意が必要、と定めています。

申請先は優生審定委員会（保健衛生に従事する官吏と医師若干名で構成）。委員会は三月以内に適否を審定して内務大臣に具申し、大臣は必要な者に一月以内に断種をさせるが、施術者は大臣の指定した医師が指定

した場所で行なう。関係者は、秘密を守る義務があり、違反すれば六月以下の懲役又は五百円以下の罰金刑を受ける、と、審査機関や施術についての規定も明確になりました。

提案者は荒川五郎外三名。この三名の氏名は不明ですが、前回の提案からまる二年、諸外国の法制も十分参考にしてつくられた感じがします。

提出は一九三七（昭和十二）年三月四日。三月三十一日、三十五件の中の二十一番目として議題に上りますが、この日は、予算はじめ、産業組合法案、百貨店法案、自治監查法案、労働組合法案、小作法案、理容師法案など、大きな法案が目白押し。深夜十一時四十二分、十八件まで終わったところでついに「翌朝十時から審議」となりました。

しかし、その直後、林首相は抜き打ち解散。荒川五郎氏の夢は瞬時にしてついでえす。

「最近衆議院における審議の状況はきわめて誠意を欠き、重要法案の施行を阻む」と、陸軍大將林銑十郎は「議会刷新の急務」を訴えますが、二月、広田内閣を引き継いでみたものの、議会が思うようにならないいらだちの中、軍刀をふるったもの。「万歳の声もなし。非常時解散の異風景」と、当時の号外は伝えています。

あれから二年、非常時、非常時、の声高まるなか、ロンドン軍縮会議脱退、2・26、日独防共協定、と、右へ右へと旋回するなかでの非常時解散ですが、このへん非常時Vにこそ、荒川先生のボルテージはますます高まったはず。大東文化協会常任理事、日大理事、全国私立学校協会理事長など、二年の間に肩書もぐんと増えています。面目一新した法案の提案理由のなかに、法案の背景や共同提案者も浮かび上がったように、と、史料を追う身としてはちょっと残念です。

が、第二十回総選挙で荒川五郎は代議士の議席を失い、以来、姿を消します。

◆ 精神医療関係者の本音

しかし、同じ「民族優生保護法案」は、翌一九三八年一月二十五日、第七十三帝国議会に、またも姿を現わします。

荒川と同じ民政党の医師、八木逸郎の単独提案です。

条文は、前案で内務省と記されていたところがことごとく厚生省に変わった（この年二月十一日、厚生省が発足）ほかは、一言一句同じですから、前回の共同提案者の一人が、あるいは八木だったのかもしれない。

しかし、八木は、議場には姿を現わず、三月十二日の第一議会には、代わって「賛成者」として青木亮貫が、提案理由の説明を議長に求められます。

青木は第六十七帝国議会で、荒川の二度目の提案の「共同提案者」の一人に名を連ねている人ですが、なぜか甚だ冷淡です。「簡単でありますから、自席からお許し願います」と、ことばどおり「簡単に」片づけてしまいます。

「現在、わが国の躍進と国運の伸展は、優良なる民族に依らねばならぬことは今さら議論（の余地）がありません。これがためには、あらゆる劣等なる遺伝的疾痛、もしくはかようなものに類似しますものに向かつて優良性を与えるべき一つの法案であります。詳細なることは、他の機会に提案者から申し上げることと存じますから、簡単に案の骨子だけを申し上げまして、提案者に、代わった次第であります。ご協賛をお願いします」

代役とはいえ、荒川五郎の大熱弁に比べますと、何とも熱のない発言ですが、直ちに「民族優生保護委員会」に付託され、審議に入ります。今回は前回とは打って変わる活発な討議となります。

☆①厚生省に優生課を設けたが、政府提案の用意があるのか。断種法ではない代案、たとえば米・独のような、劣悪人種との結婚禁止法の研究状況は？ ②政府案は、強制か。申請制か。③原案には遺伝が不確実なものも含まれているが、政府案も同じか？ ④精神病者に対する断種は医療行為として認められないのか」

工藤厚生政務次官「①諸種の調査はしているが、断種法を出すという前提に立っての調査ではない。人間を試験台にのせること、二年や三年で結論が出せる問題ではない。学問そのものが疑問である。結婚証明書は社会的問題になる。個人の意志で交換するなれないが。②以上のような状況なので、任意か強制かも、もちろんまだ結論が出ていない。始めるとしても任意からが当然だろう。③学者はよくいい加減なことを言う。範囲は慎重にしたい。④本人が望んで行なったものは本人も医師も無罪。私の友人にも実施者がいる」

☆「①現在の調査内容は？ 優生課設置は、民族優生について確信を得たからか。②本人が希望すれば無罪とは本当か。精神病学会では断種の希望が強いが、傷害罪になることを心配している」

厚生次官「①優生について調査する必要があると認めたから設けたが、調査はまだ進んでいない。②希望すれば無罪。精神病者は自分の意思がないから、他が強制することとなる。よほど慎重にしないと人権問題になる」

司法省刑務局長「②治療として行なうものはもちろん医療。優生として行なうものは、刑法学者の意見が二分している」

☆「精神病は時々治る。治った時に申請しても問題か」

久山司法政務次官「精神病者に対して行なうのは刑法上責任を問われる。事理弁明能力があり、本人の意志なら問題ない」

☆「本人が望む自殺でも、それに力添えすると罪になる。パースコントロールも社会経済学的には罪だ」
厚生次官「常識的方法なら断種は罪ではない。梅毒で睾丸を摘出することもある」

司法次官「母体を救うための堕胎は罪ではない。強姦常習犯が陰茎切除を申し出、妻の同意を得て実行された例もある」

☆「解釈をあまりゆるやかにすると、堕胎も罪ではなくなる」

☆「民族優生のための手術は、自己の利益に反する。憲法の身体権、自由権をおかす」

司法次官「断種は公序良俗に反しないかぎり違法ではない。この法案の範囲なら、憲法違反ではない」

☆「この法律ができると、あらゆる断種が無罪になるのか」

司法次官「現行法で取締まられていたものが取締まれない結果になる」

☆「政府は賛成でないという印象を受けたが、その理由は」

高野予防局長「精神病患者数は昭和十一年まで八万六千四十七人。遺伝と相当の関係があることは認められているが、慎重に考えたい。文化に伴い精神病が増加、対策が必要だが、断種の目的を優生学のみに限定するか、保安・社会・経済の問題を含ませるか、一つの問題と思う。対象の範囲、手術の方法、適否の判定機関、

費用の負担等の問題もある。ある特例を断種することで民族の衛生状態を改善できるかどうか。強制断種のドイツで、何年後かに精神病患者が明瞭に減れば議論の余地はないが、まだわからない。断種でなく、隔離等でも目的を果たせる。強制断種を行なうと、社会のある層に強く当たることになり、思想上の影響も心配。遺伝学は人間についてはまだ研究不十分だ」

☆「断種法は人倫上忍び得ない。別の方法はないのか」

予防局長「環境改善がある。避妊の方法もある。世界の流れは、断種と保護の二つに分かれている」

☆「精神病の中で遺伝が確実なものは」

予防局長「日本にはまだ資料がない。外国の文献では、両親とも精薄は60—90%、片親なら33—54%、精神乖離病は、両親なら53%、片親なら10%だが、普通の人にも3.5—4.5%は発生する。人間の遺伝は複雑で、エンドウ豆のようにはいかない」

☆「断種は安全か。性生活に影響しないのか。アメリカでは三十年の実績があるが」

予防局長「手術は簡単で安全。性機能も変化しない」

☆「社会のある層に強く当たることにならないか、という発言があったが、現在、精薄は貧困者に多い」

予防局長「強制断種になると、社会のある層に特に強く運用される心配もあると言ったのである。イギリスなどでは社会の責任において保護しようという議論もある。精薄が貧困者に多いという統計はないが、放置すれば社会の落伍者になろう。有史以来数千年もたつのに、逆淘汰は行なわれず、精神病が蔓延していないのは、弱者劣敗の結果だろう」

☆「有罪の範囲について再度確認を」

司法参与官「刑法三十五条で、職務による行為は傷害罪としないと定めているが、弁識能力を欠く者に断種した場合は、別の法がなければ罪となる。決定的な解釈は大審院（今の最高裁）の判例にまっぴかないが、まだ出ていない。司法省としては断種は医療行為として認めていない」

☆「とすれば、どうしても断種法が必要。精神病関係者の悩みが解決しない」

予防局長「癩患者には不妊手術を行なっている。司法省は、これは公序良俗に反し不说っているが、精

神病の場合は不明確となるので、この法案の意義がある」

☆「幼少時に手術を受けた者が、その事実を知らずに結婚すると、結婚サギにならないか」

村松久義（提案者八木に代わって回答）「個人の自由権は、国家のため社会のためには譲らなければならない場合もある。たとえば極悪人の生存の自由を尊重すれば死刑はできない。手術の適否は審査会で審査するので、結婚サギは起こらないと思う」

刑法局長「欠点のある体を隠して結婚する例は多いが、サギ罪にはならない」

☆「精神病は遺伝とも限らない。子孫を残すことは、国が論じるべきではない。この法は人格を無視するもの。法制局の答弁を聞きたい」（回答なし）「政府は何の答弁も用意していないのに、委員を頭から抑えつける。委員会を打ち切ろう」

といった経過で、四回重ねた委員会も、またも会期切れ。内部の意見がまとまらず、報告書も出せないままです。

この回注目されるのは、議員提案であるにもかかわらず、政府側との攻防に終始していることです。年初に新設された厚生省は、各省庁はか多くの反対を押し切って設置されたもの。一月設置の予定なのに、十二月になっても「社会保健省」の省名にさえ異論が出、「厚生省」「更生省」と二転三転したあげく、暮れも押し迫った二十四日、ようやく「厚生省」におちついたという経緯があります。その厚生省に、フタをあげてみたら「優生課」が出来ていたという怒りも感じられます。

といって、応答をみるかぎりでは、民族優生保護法案に最も懐疑的なのはむしろ厚生省で、精神病者と遺伝の關係は不明確な点も多いと、法案の後ろだてになっている遺伝学者たちにも不信を抱いているようです。また、保安その他に利用されるのでは、というおそれも率直に表明しています。答弁に立った次官や局長の個人的見解も含まれているかもしれませんが……。

ここで争点になっているのは「断種は医療か」という問題ですが、もしも「医療」と認められれば、ことさら断種法の必要はないという見解も成り立つわけで、医療に含ませたい厚生次官と、事理の識別能力のない精神病者に対する医療は刑法の傷害罪となるとする司法次官の間で、火花が散ったりしています。

医療に含まれた場合は、善意に解釈すると、ことさら断種法をつくらずにすみませんが、悪用すれば、医療の名のものに濫用されるおそれも生じるわけです。後にクローズアップされる避妊手術としての断種を、この当時の厚生次官は「自分の友人も行なっているし、世間公認のもの」として語っているのが注目されます。一方、「精神科医からの要望が強い」と、繰り返し発言しているのは、医系議員たち。この法案の支持基盤の一つとして、精神疾患関係者の存在が浮かび上がります。

しかしともかく、委員会の、「本格的調査を」の声を受けたかたちで、会期直後の四月には、日本学術振興会に「民族衛生に関する第十一特別委員会」が設けられ、成案へ向けて一步を踏み出すことになります。

◆ 五度目の正直を目指して

「民族優生保護法案」は、この年の末、第七十四帝國議會に、またも姿を現わします。

条文は、前回に同じ。提案者は八木逸郎と村松久義（宮城二区、民政党、弁護士）。

翌三十九年一月三十一日、本會議。村松は、「本来なら八木が説明すべきだが、健康がすぐれず、自身、医師である八木は、自分の余命が幾ばくもないと判断、若い私に説明の代行を依頼した。八木の民族を憂うる熱情に動かされて、民族優生のために、本案の成立に協賛を得たい」と前置きして、次のように述べます。

「本来の根幹は第一条―第三条に示されているが、思うに生物の進化は、遺伝素質に對し、後天的環境が働いて遂げられるものであり、環境の重大さももちろん認めるが、遺伝素質はより決定的な要因である。今日すでに低下の傾向にある日本民族を民族優生の立場で食いとめたい。

文化が発達すると、その余弊として、自然淘汰に適者生存の原則とは反對に、不適者がはびこることとなる。知識階級の晩婚、産児制限の傾向がふえる一方、社会施設、社会立法の完備、医学の発達により虚弱児の生存が可能になったため、相対的に優秀な人の割合が減っている。社会施設、社会立法の改善はもちろん喜ばしいことではあるが、わが民族の将来のため憂慮に耐えない。

現に昭和元年（一九二六）六万余人だった精神病患者は、同五年、七万三千人、同十年、八万人と増え、今や十万人を超えている。「良貨が悪貨を駆逐する」というグレシャムの法則は、わが民族にもあてはまる

である。エジプト・ギリシャ・ローマ・インド等の古代民族の滅亡は、いずれもグレンシャムの法則による逆淘汰に基づくものだが、これを防ぐ唯一の道が民族優生学である。断種はあまりにも残酷ではないかという声もあるが、実際はごく簡単な小手術、数分で済しかもほとんど血を見ない、絶対安全の手術ですむ」と、いわゆる八逆淘汰Ⅴと八精神病患者Ⅴの増加を軸に、民族主義を強調した、荒川五郎にやや近い主張を展開します。

これに対し、すかさず、「議長指名の十八名の委員に付託」をとの動議が出、八木逸郎、村松久義、山川頼三郎、田子一民らが即日指名されます。

◆ きかせた八木アビール

七十三議会には病欠を続けた八木逸郎（文久三年生まれ、この時七十五歳）は、委員会には、ようやく姿を見せ、自分がなぜ「身命を賭そう」とするかを切々と訴えます。

「私は医者二十年、専門は眼科だが、へんびないなかのため、開業後十四、五年は、いわゆる「八百屋」で、町の人びとの家庭医だった。ところが、親しくしている資産家の娘さんがてんかん持ちで、年頃になっても結婚できない。そこで、親が番頭に因果を含めて、むこになってもらったが、そのむこが、ある日、深刻な顔をして私を訪ねて来た。私たちの間に子どもができたら、その子がかわいそうだ。私のようにむこ養子になるものがいればいいが、でないと、その子はいへん不幸な生涯を送ることになる。どうしたものか」と。これが、私が遺伝を考える始まりになった。

現在、精神病対策は貧困で、私の県（奈良）など、公立、県立、私立とも精神病院はない。やむなく一室を囲って、外から食事などを与えているが、これは富裕な者ができることで、貧しい人びとは非常に困っている。そこで断種してほしいと言われても、医者は治療が仕事。予防までする権利はない。非常に悩んでいた時に「民族の血を清く」と説いている本を読んだ。

とはいえ、立法化については非常に悩んだ。明治二十三年に議会が出来て以来、議員提案は何千となく出ているが、成立したものは十二、三しかない。それも、貴衆両院を通過したものは、政府がだいたい同意を

与えて法案にしたものである。このような「もてあそばされる法案」にはしたくないし、自分の名を売るために提案するような不まじめなこともしたくない。そこで、東京でこのことを専門にしておられる、大学の専門家や大審院の検事、東京市の精神病関係者などのグループにはかつて、二年も三年もかかってこの案を出した。したがって、しいて言えば、政府と妥協するというか、厚生省が求めないなら、しばらくさしひかえてもいい。とにかく、まじめに扱われる法案にしたい。貴族院に送られても、例のとおり委員会は開かず、九十九までは審議未了にされてしまうということにはしたくない。実は衛生局がまだ内務省にあったころ、非公式にそれぞれの役人にお願ひしたこともある。厚生省に優生課まで設けられ、前の厚生次官も、なるべく成立させたいと非公式に申し出て下さった。優生課の前の課長は、われわれのグループにも入り、課の技師を連れて来て研究された。昨年は、私一人で提出、委員会の委員長になったが、病気のため委員会がなかなか開けなかった。今もめまいがしているが、法案成立に全力を傾けたい」

東大を出てドイツに留学という経歴を読んで、八木という人を、何となく權威主義的な「医学博士」として想像していたのですが、写真を見ると、いわゆる「議員顔」ではない、いかにも気の弱そうな、誠実そうな感じです。とつとつと語る彼のことは、多くの人の胸を打ったのではないでしょうが。

八木を支えるように、厚生省予防局長も、「昨年、研究費を予算に計上した」と、ことばを添えます。政府提案を暗示する雰囲気です。

民政党と対立する政友会の山川頼三郎は、しかし食い下がります。

「提案者の意図はわかったが、結果は志とちがうことになる。たとえば、五人の子がいたら五人とも発病するの。とかく医者は人間を動物として見るが、それなら、伝染病患者は牛馬同様殺せばいいはずだが、国は何百万倍もの費用をかけて治している。人間の権利を守るのが法律ではないか。精神病を治す、という提案なら賛成するが。」

グループで研究したと言われるが、あのグループは、医術と民族優生だけをモットーにしている。だいたい医者は、職業癖があり、独善家が多い。手術は安全なのか。また関係者に守秘義務を設けているが、医師法に守秘義務があり、特に設ける必要はない」

八木「施設は必要だが、たとえば癩病院に入ると、たちまち周囲に知れる。癩は血統と思い込まれているから、どこの家でも大金を出して放逐し、家出と見せかけている。施設だけで救われるものではない。手術はごく簡単なもの。二、三日ばんそう膏を貼って抜糸すれば治る。後の影響もない。守秘義務は設けたところで完全とは言えないが、設けないよりはいい」

山川「断種法で民族優生が可能か。たとえば天下国家を憂う人は憂うつ症ということで断種され、国家は真の人材を失うことになる」

八木「遺伝のパーセントによって施術するもので、すべてに施術するわけではない」

社会大衆党の河合義一（兵庫三区、農民運動家）は、「八木を尊敬している」と前置きして、「人間に欲情がなければ、子育ては苦痛で、生殖しないだろう。子孫繁栄は必要」と述べ、「先日の村松発言で、社会施設や社会立法がふえると劣悪者がふえるという話は間違っている。おかげで、この法案までが悪いものと誤解されて困っている」と村松を批判します。

第三回は二月十六日。委員十人が出席。ふたたび山川の質問から始まります。

「みるに耐えない癩患者でも交接する。精神・身体の優秀をどこで決めるのか」

八木「委員会等各方面から検討する」

司法省刑事局長「ある種の犯罪防止には有効適切と思うが、人権も考慮しなければならない。凶悪犯の断種には医業界も反対している。各国の実情を研究したい」

八木「それでは二十年三十年先のことになってしまう」

山川「子どものうちに施術しても性機能が成熟するか」

予防局長「相当成熟してから行なうほうが望ましい」

山川「いわゆるお家騒動の危険がある」

八木「審査会があり、簡単には施術できない」

予防局長「癩の場合は、夫婦の片方にだけ施術する。現在患者数二万、収容者は八千にすぎない」

樋口善右衛門（愛知二区、政友会、製菓業）「癩患者は自らを恥じ、ほとんど表に出ない。緑日などに醜をさらして乞うても、わずかな銭しか得られない。それよりも保護を加えるべきだ」
北 玲吉（新潟一区、民政党、著述業）「ブラトンは、頭がよく体格の非常にいい者に多くの妻を与えれば理想国家が得られると言ったが、今はそれが不可能。悪い者を淘汰すべきだ」

第四回は逐条審議に入り、罰則に「故なく」（施術した場合）の三字を入れるだけの修正で可決、本会議に回ります。

◆ 政友会の反対を押して可決

委員会では反対発言が続けていた山川は、「この法案は不合理な点が甚だ多く、種々の弊害を伴う」と、最後まで強硬に反対します。「①申告制では弊害が大きい。つまり、子孫の前途を憂うる良心的な者が申告し、本当の悪人は申告しないため、善人が減り、悪人はふえることになる。②申告制では意図的な断種を行なうことができるので、家督を継がせたくない子には断種を施すこともあり得る。お家騒動の原因になる。③避妊術に利用する者がふえるおそれがある。日本の発展は人口増加率の高さに負っている。避妊に利用する者がふえると、国運隆昌を阻害する。④第四条によれば、戸主または保護者の独善的申告で幼年者の断種が行なわれるが、断種された者が成年に達したとき、申告者をうらむおそれがある。精神薄弱者は凶悪犯罪を犯しやすいのに、彼らのうらみを買うようなことをするのは恐ろしい。⑤秘密主義に反対する。幼少時に断種された者が、外見上りっぱな大人になって結婚すると、相手は人間のいせものをつかまされたことになる。したがって断種は強制法でなければならず、公開されなければならない」の五点が理由で、刑罰として課している米国や、ユダヤ人に強要している某国の例を参考に、「強制法」と「公開制」を主張しました。が、起立採択の結果、山川の主張は容れられず、委員会原案どおり、第十四条の頭に「故なく」を加えることを議決、即日、貴族院に回されます。

貴族院では審議未了になりましたが、衆議院の可決により、「民族優生保護法案」は、「国民体力審議会」で本格的に検討されることになり、「政府提案」への道が、ここではっきり敷かれます。

◆ 加えられた人口政策

東大教授永井潜ら、専門家と有識者を集めた「国民体力審議会」の、三九年末の答申に基づく新しい法案は、第七十五帝國議會に、政府提案として、一九四〇年三月八日、提出されます。

全文二十条。まず、第一条に示された目的は、「悪質ナル遺伝性疾患ノ素質ヲ有スル者ノ増加ヲ防遏スルト共ニ健全ナル素質ヲ有スル者ノ増加ヲ図リ以テ国民素質ノ向上ヲ期スル」ことです。前年の、「我が民族ノ優秀ナル素質ヲ保護シ」は除かれ、「民族優生保護法」は「国民優生法」と名を変えましたが、その本質は、あくまでも国民民族優生です。同時に、目的の後段に、「人口増加」が新たに加えられ、従来の議員提案とは全くちがった「人口増加政策」の柱としての姿を明らかにしました。

一方、前段の「断種」については、人權の点で前案より配慮された面もあります。戸主や刑務所長・病院長等の申請は認められなくなり、本人の申請が原則、それも本人および配偶者の同意が必要で、本人が二十五歳未満の場合または心神耗弱者は父母の同意が必要と、慎重にし、自分で申請できない心神耗弱者に限って、配偶者または父母が申請できることに改めています。

審査は、地方と中央の二段階にし、地方優生審査会の決定に不服な者は三十日以内に申し立てれば、中央優生審査会で再審を受けられる仕組み。「断種」というあからさまな名称も、「優生手術」と、やわらかく言い換えられています。

その反面、強制措置も明文化されました。本人が著しい悪質疾患の場合、配偶者も同じ疾患に罹っている場合など、「公益上とくに必要と認められた時」は、必要な同意が得られなくても申請されることが、また、手術が必要と認められた女子がすでに妊娠している時は、必要な同意を得て人工妊娠中絶ができる、と、初めて「強制断種」「人工中絶」を導入すると同時に、「該当者以外の者に対し、生殖を不能とする手術や放射線照射、もしくは妊娠中絶を行なう時は、予め他の医師の合意を得、行政官庁に届け出ること」と、避妊手術や中絶に、大きなくさびを打ち込みました。

六年前、最初に荒川案が出されたころは、日本は人口過剰に悩んでおり、満州侵略も過剰人口対策の一つ

として打ち出されたという状況がありましたから、荒川案には、むしろ「悪質者減らし」のニュアンスがありますが、日中戦争が泥沼に入り、ノモンハンでも敗れた日本にとって、「一銭五厘で召集できる生きた兵器Ⅱ人間」の増産は急務となっていたからでしょう。提出四日後に早くも開かれた第一読会での厚生大臣の提案趣旨に、人口政策は如実に示されています。

「国民優生法案の目的と致しますところは、国民素質の向上を図り、これによって国家将来の発展を期せんとするのであります。この目的を達成致しますために、一面に於ては、悪質なる遺伝性疾患の素質を有する国民の増加を防遏致しますとともに、他面に於ては、健全なる素質を有する国民の増加を図らんとするものであります。（中略）興亜の大業を完成し、将来ますますその発展を期せんがためには、わが国民の優秀性を保持するはもとより、ますますこれが増強に努むることは、今日喫緊の要務と存するのであります。我が国民体力の現状を見ますに、近年その低下の傾向を見受けられるのであります。その素質もまた自然にこれを放置しておきます時は、次第に低下するのではないかと懸念せらるるのであります」

このためには、「環境の改善による後天的素質の向上を図るだけでなく、先天的素質の改善が必要」と強調して、「不健全なる素質、殊に悪質なる遺伝性素質の増加を防ぐために」優生手術が必要、と力説したあとで、大臣は「これに関連すること」と断わって、

「避妊手術または妊娠中絶等の如き行為の濫用せられ、することを嚴重に取締まり、以て健全なる素質を有する国民の人為的の減少を致しまする原因を除き、人口増加にも資せんとするのであります」と、不妊手術や中絶の取締まりを明言します。条文の目的の第二に掲げられている「人口増加」が実は主目的であること、「悪質な」者は淘汰し、「優秀な」者は人為的に増やそうとする「産めよ殖やせよ」政策に、大きく乗り出したことを物語っています。

この最も大きな「変更」には、なぜか全員が目をつぶります。

質疑のトップは「民族優生保護法」を推進してきた村松久義。政府案をさらに補強するような「結婚奨励策」を提案します。

「先ごろ月給七十円以下の多数児家族には月二円の家族手当が支給されることになり、近く第三種所得税に

扶養家族控除が認められようとしているが、この程度の対策で人口増加率を維持できるとは思えない。まず結婚奨励策を思い切って行なわなければならない。独身税を賦課して晩婚を防止し、結婚資金を貸与して奨励する。ことに多数児童家族には税制改革とともに賃銀及び俸給政策による保護、教育費の国庫負担、児童保険の創定等、積極的な政策が必要」と、人口政策を疑うどころか強化する発言です。

「今日、生活難、社会不安より来る産児制限は想像以上にび漫しており、将来も続くなら、欧州諸国のように人口の減退を生ずるのではないかと憂慮に耐えない。その半面、我が国と境を接する支那、ソ連邦では、日本の人口増加率をはるかに凌駕する大人口増加となっている」と不安を訴え、また、花柳病（性病）の蔓延が甚だしく、年間十四、五万人の死者を出しているうえ、生殖不能となる者も多い、その対策をどうするのか」

「花柳病以上に対策が遅れているのは精神病であり、十万の患者のうち施設に入っている者は二万、他は座敷牢に入っているか野放し状況で、発作的殺人事件が相次いでいる。この対策をどうするか」

「精神病対策の一つとして、結婚管理法（優生結婚法、結婚健康法）が必要ではないか。世界でそれが無いのは、フランス、ベルギー、ルクセンブルグ、バラガイ、タイ、エジプト、支那など数えるほどしかない」と、ぶち上げたあと、次のような点に、世人や専門家の疑念があるので、明快な回答で疑念をはらしてほしいと問いかけます。

「一、今日の学問の程度を以てして、真の遺伝なりや否や、強度なりや否や、悪質なりや否やが判明する程度まで進歩しているか。

二、天才と狂人は紙一重と言うが、狂人を失うことによって天才も失うおそれはないか。

三、日本は家族制度の国だが、子種を失った者の先祖の祭は誰がするのか。家族制度の精神を破壊するものではないか。

四、将来医学の進歩発達によって精神病を治療することができるようになるかもしれないのに、取り返しのつかぬことにならないか」

これに対し、厚生大臣は、さすがに、結婚管理法などは軽々に定められないと反ばくしつつも、多数児家

族の援助、花柳病・精神病対策等も積極的にすすめる、人口対策としては「消極的にすぎる」この法案を補いたいと公約。四つの疑問に対しては、「①遺伝の確実性については現在の学問で十分である。②天才と気狂いの相関関係はないが、精神病者で天才の素質を併せ持っている者もある。そういう人には優生手術は行なわない。③祖先の祭は養子によって受け継ぎ得る。④精神病は治療し得るものが多いが、当人が治っても、素質が子孫に遺伝するので対策が必要」と、回答します。

質問二番手は、政友会の曾和義式。大阪の小学校の代用教員を振出しに、小学校校長となり、『河陽新報』を創刊した人です。

「悪質な素質は一代でつくられるものでもなければ、一代で解消し得るものでもない。『優生』の方法は断種だけではないはずだ。日本民族はさかのぼれば一つの祖先に帰し、一木一草をもあわれむのが日本精神なのに、小さい魂の生まれ出る可能性を絶つというのは日本主義に反する。国家は、結核・癩病・花柳病などの罹患者を治療すべきなのに、財政難を恐れて血統を絶とうとしている。また女子が妊娠中なら中絶させるというが、生ませて育ててみたらどうか。国は神国、民は神裔（神の子孫の意）、神の御末を断種するとはユダヤ思想である。」

また、優生手術の申請者に医師が含まれているが、最近の医師は、基礎も病理も死体解剖によって学ぶため、唯物的で霊的考え方のない人が多い。このような医師が申請するのは恐るべきことだ。法案は、国民体力審議会によって審議されたから安心だと言うが、一学問、一専門家であれば安心とは言えない。日本精神を持っているという保証はない」

と、八日本精神Vを繰り返し、「この法案は消極的にすぎる」と結びます。

「消極的にすぎるというが、避妊手術や、妊娠を回避する人心の動きに対し、故なくして手術を行なう者は厳罰にするという積極的な項を設けている。また、国民は網の目のように上代からつながつているというが、だからこそ一点腐蝕しているところはつくろって、悪影響がないようにしようとしている」と、厚相は人口政策Vを強調。

杉山元治郎（社会大衆党、大阪の歯科医、農民運動家）は、法案を、「我が大和民族の優秀性を示すもの

としてご同慶にたえない」と、たたえたりえて、

「①精神病患者は昭和十二年度で九万九百九十五人、白痴低能を加えても二十五万人にすぎず、総人口からみて大した数ではない。また学者の中には、この法案の対象患者は多くは遺伝的には劣性因子だから、一人残らず断種しても十四代で半数、三十代で四分の一になるにすぎないと言う者もいる。それよりも積極的な人口対策が必要で、まず結核対策を考えてほしい。昭和九年でも十三万一千五百二十五人が死亡、現在は死亡十四万、罹病者は百四、五十万を超えていると思う。政府は、「結核予防法を改正している、予算も増加している、体力国家管理法もつくる」とおっしゃると思うが、どんなに体力を検査し、病気をみつけても、治療施設と、誰でもそれを利用できる制度がなければ役に立たない。結核は、年間十五億で十年間に半減、二十年間に三分の一に減じ得ると専門家は言っている。国家財政上困難なら、せめて「結核保険制度」を実行する意志はないか。

結核に続いて死亡率が高いのは、下痢・腸炎（年間十二万七千人）肺炎（十二万四千人）で、特に農村に多い。無医村の絶無を図り社会保険制度を確立すべきではないか。

本案の対象から、アル中、特に梅毒をなぜ除いたか。日本がまねをしたがるナチスドイツの遺伝病予防法にも、合衆国の結婚禁止法にも、アル中が入っている。アル中の遺伝についての研究もある。また遺伝性梅毒は、乳幼児で2—4%、児童10%、感化院の子は20%もある。寒心すべき状態だが花柳病予防法提出の意志はあるか。

癩は、癩予防法を改正して優生手術を行なおうとしているようだが、この法で十分ではないか。それよりも施設の増加、待遇改善（現在一日二十銭未満）と研究所の設置が必要」と、

と、社会施設、社会立法の必要性を強調しますが、厚相は、「結核対策にはできるかぎり力を注ぐ。下痢・腸炎・肺炎の死亡率は低下している。アル中・梅毒は遺伝ではないので除いた。花柳病予防法改正は準備中。癩については別の機会に答える」と、型どおりの答弁に終ります。

滋賀県の産婦人科医、田中養達（時局同志会）は、質疑に名を借りて、痛烈に政府を批判します。

「この法案は、実際に便利であり、必要でもあるが、取扱いを誤ると悲喜劇を生じる。医学上から見ても、体の一部を傷つけて生殖機能を停止するのは、ある意味で殺人である。医学は人類の生命の肯定から始まるから、厳密には医学の否定となる。

①日本ではまだ精神病の遺伝関係については調査が出来てない。根拠となる調査があるなら示してほしい。医学は非常に進歩したが、精神科はまだ未開の分野が非常に多い。ひょっとすると政府はドイツなどの統計を基礎にしておられるのではないかと心配する。遺伝の法則はあるかもしれないが、疾病の遺伝は民族によって違う。外国がこうだから、統計がこうだから、が根拠では、非常な間違いが起ころはせぬかと心配する。

②昭和十年には八万ほどの精神病者が日本にあった。実際は二十五万と言われるが、この二十五万人を一時に断種しても、一割の二万五千人になるのには二千年かかる。予防でいくのか断種でいくのか。どちらに重点を置くのかうかがいたい。予防するとすれば、早期診断も隔離も治療もしなければならぬ。大金がかかる。ここになぜアル中の断種をお入れにならないのか。学説の定まっていない精神病の遺伝関係でさえ、思いついてこんなことをなさる勇氣に敬服するが、精神病の一番の原因は酒なのに、それが入っていない。これでは仏つくって魂入れずであらう。アル中を加えても、金はかからない。しかもこの病氣自体は確実に防ぎ得ると思う。精神病の場合はそうはいかない。精神病の家庭の子は、親や近親が精神病だという憂うつな家庭に育ったことが、たまたま素質と合致して発病する。だいたい精神病の直接の原因は梅毒と酒で、これがなければ精神病はうんと減る。これは日本の統計にすでに示されている。しかも、この梅毒にかかる危険性が一番多いのは一杯飲んだ時である。とすると、酒が一番の原因ということになるのに、かんじんのアル中を除かれたことを遺憾に思う。

この案には、誰かも指摘されたように、積極面がない。おやじが一杯飲んでクダ巻いてる家と、おやじさんがごちそうでも買って来て愉快に晩さんをやってる家と比べたら、どちらの子どもがよく育つか。いま国家が一番要求している人間はこれであり、これなら一銭も使わずに国民素質の向上をはかり得ると、私は深く信じている。

全体、政府は酒をどう考えているのか。新聞を見ると、今年は酒ききんで困っているが、多少配給できる

ようになったと、凱歌を奏したようなことを書いているが、これでは酒は必需品だという考えを植えつけるようなものだ。せっかく厚生省が出来ても、こんな気持ちでは政府は何を目指そうとしているのか。

第二に、酒をどうするおつもりか。厚生省もご承知のとおり、酒にうんと水をまぜる。そのため腐らぬようメチールアルコールを入れるので、盲目になった人が出ている。経済警察は小商人を闇取引で引っ張るが、彼らは闇はやめてもらいたいと言っている。どこかに大きな奴がいる。それを押さえないければならぬ。酒は値上がりするだろうと見込んでいる大闇がどこかにいるのに、それを押さえないからメチールを入れることになる。年々この議会上程される二十五歳禁酒法をなぜおやりにならないのか。厚生省が出来て、国民の医事行政、健康を憂うというご親切があるなら、ぜひ二十五歳禁酒法をつくってほしい。今までは酒屋の反対があつてできなかったが、今は酒そのものがない。絶好の機会である。総理大臣が「断乎何何」という声明を百遍お出しになるより、一つでいいから実行に移してほしい。世界に例のない体力管理法案もやがてお出しになるようだが、何万法律をお出しになっても、体力低下の源を防がなくては何にもならない」

多くの人が内心手を叩いたのではないかと思うこの名演説を、吉田厚相はやりわり受けて、「調査の段階にもいろいろございますが、政府と致しましては、相当の調査の基礎の上にこの法案を立案致したのでございまして、それらのことは、他の機会に改めてお示し致すことにしたいと存じます。二十五歳禁酒法案は十分考慮させていただきたい」と、逃げます。

同じ時局同志会の弁護士、北浦圭太郎も鋭く追い討ちをかけます。

「①「国民優生法」という名はりっぱだが、優生手術は人体を傷害するもので、身体自由権を侵害する。しかも、これを地方長官や厚生大臣が審判するのは憲法に違反する。逮捕・監禁・審問・処罰は、人民に反社会的行為があつた時にのみ認められているのに、何らの反社会的行為のない者に傷害が加えられてよいのか。憲法では「日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ権ヲ奪ハルコトナシ」と定めている。親子・親族・夫婦・相続関係にまで重大な影響を及ぼすことを、牛や馬を処分する行政処分によって決定す

べきではない。地方長官は畜産組合、牛馬検疫等ではいかような処分をされてもいいかもしれないが、子孫を絶滅する大事件を裁くのは憲法違反であり、時勢がいかように変化しようとも、断固として戦わねばならない。

②刑法では、自然の分娩に先立って胎児を母体外に排出すれば堕胎罪として処罰しているのに、この法案で三か月以内の胎児処理を奨励するとは何事か。堕胎は現在でも、糊口の困難などによってよく行なわれており、特に三重県山間部では昨年十一月、百名を超える被疑者が検挙され、いずれも有罪とされた。山間へき地で産物がたりないため、徳川時代から因習になっていたものを嚴重に処罰する反面、堕胎及び堕胎以上のことを奨励するとは何事か。刑法上の処罰事項は刑法に規定しているからこれを罰し、本法案に於ては国家のためにこれを許すのだという簡単な説明では承知できない。人間の浅薄な知恵で、奇形の子は奇形児、精神病者の子は精神病者なりと断定するのは首肯できない。

③奇形児はどかわいいのは親心の常なのに、この法案は人情にもとる。仁政ではない。

④本人が申請するのでは不徹底となり、実効は期しがたい。然らずとも法律命令の盛なること、今日より大なるはない。降り続く春雨の如く毎日毎日、あるいは商工省令、あるいは大蔵省令、あるいは各府県令等々、いかなる専門家といえども国民の頭に注がれる法律命令を理解し、知ることは困難な状況にある。本法案のように幾多の矛盾撞着を含むものを、会期切迫の今日提案せずとも、案を練り直して出直すことが賢明と信じる。

⑤本法案では故なく優生手術を行なった時は一年以下、人を死に至らしめた時は三年以下の懲役となっているが、優生手術については今日まで処罰されなかったのか。

⑥近來厚生省は「生めよ増やせよ」との通俗のスローガンを以て人口の増加を図ろうとしているが、民族の消長に関わり、かつ人道上の重要な法案を提案する前に、全国の遺伝学者を動員して研究すべきだ。国立遺伝研究所を設立して大いに研究し、学問の基礎の上に立って後に提案すべきではないか。

この痛烈な質問も、しかし、至って簡単にかわされてしまいます。

「①悪質の遺伝性疾患の遺伝を防ぐ手術を行なうことを法律を以て規定するのは憲法には反しない。

裁判権を侵すものでもない。審査会の慎重な審議こそ妥当で、裁判所が取扱うべきことではない。

② 本法案でも「故なき墮胎」を認めるわけではない。従来の法制と全く矛盾しない。

④ 原則として任意。任意によりがたいやむを得ざる場合にはじめて強制手段をとるという慎重な手続きとなっていることは、むしろ重要である。

⑤ 従来、判断基準が明瞭でなかったのを、今回の立法で明瞭にした。

⑥ 研究機関については十分考慮したい」（以上厚生大臣）

「②墮胎は弊風であり、今後、根絶したい」（内務政務次官）

こうして、細部の検討は委員会に付託されることになり、議長が即日十八名の委員を指名、翌日、委員長に八木逸郎を選出します。

◆ 最後まで大もめの委員会

舞台が「国民優生法案委員会」に移ってからも、議論は紛糾します。

① この法案では「子種を絶つ」ことになる。祖先の祭祀を重んじる我が国の家族制度に反するのではないか。

（家族のうちの該当者だけに施す。家族全員に施行するわけではないから、血統は絶えない。現在でも、廃嫡、養子などの制度がある）

② 遺伝病もいずれば治療が可能になる。現在でもある程度は治療できるのに、施術するのは残酷。（現在の医学では治療不可能な者だけを対象とする。治療によって症状を抑えることはできるが、遺伝素質そのものは変えられない）

③ 精神病は環境に影響される。中でも酒害と関係が深い。酒害防止で抑制できるのでは。（環境の影響もあるが、根源は遺伝素質にある。優生手術以外に根源的な方法はない）

④ 第三条の各疾患が、確実に遺伝病だという証拠はあるのか。（外国の文献と、厚生省の全国三千の精神病家系調査結果を提出）

⑤ 精神病・癲病等の収容施設の拡充が先ではないか。（もちろん拡充するが、本制度なしでは遺伝病対策は

不十分)

⑥実効を期し難い。それよりも環境対策に力を注ぐべき。(短時間に効果をあげることは難しいが、国家将来の発展のため十分な効果がある)

⑦積極的方策として、結核、花柳病、癩、下痢・腸炎等に力を尽くすべき。(本年の予算にも計上、今後とも力を尽くす)

⑧優生手術を受けたことを秘密にすると、結婚相手が不都合。(秘密主義の原則はあくまで守るが、実際上の不都合な点は、施行に際し十分考慮する)

⑨性欲亢進、減退等の悪影響はないか。(すでに癩患者等に相当実施しており、外国の実例も多いが、ほとんど全く影響はない)

⑩第十四条の妊娠中絶は、百%疾患者だという証明がつかぬかぎり行き過ぎではないか。(優生手術に相当すると決定した以上は、一歩進めて行なうのが当然。実際上の適用は極めて少数と思われる)

⑪第三条に該当する疾患は、それぞれ病名を列挙すべきではないか。(規定の方法については専門家の意見を聞き、十分調査研究したうえで決定した。適当と思う)

⑫精神病はすべて遺伝という考えはおかしい。(ことごとく遺伝ではないが、相当の部分は遺伝病であることは確実)

朝十時から夕方六時七時まで、激論が重ねられること七回、三月十九日、ようやく修正案がまとまります。

①第四、五条の、父母の同意を必要とする年齢を、二十五歳から三十五歳に引き上げる。

②第十四条(妊娠中の者が適用者と指定された場合は人工中絶する)を全文削除。

③優生手術を受けた者が結婚しようとする時、先方から問い合わせを受けたら答えなければならないという「通告の義務」を加える。

最後に社会大衆党の杉山元次郎は、「慎重な施行を望む」ほか五つの希望条件を出しますが、決議には至

らず、付帯決議「強い酒精中毒に対する施術の可否を権威ある調査機関を設けてすみやかに調査すること」を可決、翌三月二十日、衆議院を通過します。

◆ 最後の抵抗―建部遯吾

貴族院。戦後生まれの方には、ふしぎに響くでしょう。二院制と言っても、今の参議院とは全く別のもの。貴族またはそれに近い人びとだけが議員になれた特権階級擁護のための議会が、衆議院の上にあり、衆議院を牽制していたのです。

当時の議員名簿を聞くと、まず皇族の名がずらり十六人、続いて公爵十六人、侯爵三十七人、以下、伯爵十八、子爵六十六、男爵六十六人、「多額納税者」が六十四人、そして学士院会員四人、「勅選」による学識経験者が百二十七人。八木逸郎が、「議員立法は貴族院に回っても、ほとんど握りつぶされる」と嘆いたのも、なるほどと思われまします。

今回は「政府提案」とはいえ、「本邦初の」「重大な趣向」のこの案、成立するでしょうか。

三月二十三日、いよいよ第一読会です。吉田厚生大臣は、提案理由を説明、今度が六回目の提案であること、国民体力審議会の答申に基づくものであることなどを述べて、「会期切迫の折柄ではございますが、何卒御協賛あらむことを」と、切望します。

質問に立ったのは、勅選議員の建部遯吾（研究会）。社会学者。東大の教授から衆議院にも立った人。「十三の疑問がある」と口を切ります。

①個人の生命の延伸は年齢に関わるが、系統生命の延伸は世代に関わる。個人の生命は、自他殺、死刑などで、系統生命は避妊・墮胎・断種等で断絶し得る。死刑や断種でなく、まず感化とか病気の治療を優先すべきだ。死刑と言ひ、断種と言ひ、一度断ずれば取返しがつかない。

②良質と悪質は程度の差で、品質の正負ではない。強度かつ悪質な身体疾患の例にあがっている盲目・啞・白子を見てもそれは明らかだ。盲啞は社会の損害ではない。有用のやや小なる者を有害と認めるのは論拠の

誤りである。

③未完成の学説を根拠とし、調査もすこぶる不完全なのに、それを以て取急ぎ実施に急ぐのは、その思想の根底に不十分な欠陥があることを自ら暴露するものではないか。

④目的の二番目に「健全なる素質を有する者の増加を図る」とあるは人口増加策の意か。とすれば羊頭を掲げて狗肉を売るものである。

⑤目的の第二を表わすのは第十六条（注Ⅱ不妊手術の禁止）だけだが、これに第十七条（注Ⅱ不妊手術または中絶を行なう時は、他の医師の意見を聴き、かつ届出る）が続くのは、羊頭狗肉の一例と見られるおそれがある。

⑥産児制限の黙認、不取締まりは、衆議院の特別委員会でもしばしば応酬されたとおり。ある種の器具売薬は認められているのに、目的の二を掲げるのは矛盾する。

⑦社会心理を通しての社会的効果・社会的影響は、この問題では特に広い考慮を要する。雷同の心配はないのか。

⑧第二目的を掲げながら「生殖を不能にする手術」が六回、「妊娠中絶」が七回、「優生手術」が二十四回も出てくる。産児制限に火をつけるものではないか。

⑨最近三十五年間に各国の人口自然増加率の低下は著しい。人口千人につきイタリーは13・2が12・8、ドイツ15・5↓7・1、米国14・4↓6・1、英本国11・0↓3・2、フランス1・2↓マイナス0・4に減少しているが、各国で盛に行なわれている断種法と関連していないか。

⑩この法律は、効果がないうに喧伝されているインシュリン療法を思わせる。マラリア療法よりも残酷猛烈な療法を思い浮かべる。

⑪質の悪い目的や策動に悪用されるおそれがある。

⑫医学の建設的進歩が困難な中で、消極破壊行為の頻発が社会的症候としてあるが、本案は国民の意気を阻喪させるものではないか。

⑬衆議院の速記録を拝見すると、（質疑は）痛切また適切と感じた。本問題の社会的・優生的問題と、人口

問題についての政府委員の御答弁は、甚だ遺憾ながら、支離にしかつ不徹底が多い。綿密な御検討のため十分な時日を費やし、十分な自信をもって出直す必要があるのでは。六度目の提案というのに、政府側答弁は、どう拝見しても完全ではない。本問題そのものがまだ十分成熟していないことを裏書きするものではないか。

衣の下のヨロイを鋭くついた質問に、厚生大臣は答えます。

「①系統生命を絶つことに対し慎重に、とは、もとより政府も考え、自らも取調べ、審議会の意向も聞き、各方面の有識練達の士にはかったものである。

②良質悪質は必ずしも程度の差とは考えない。最も悪質な遺伝性盲や聾啞は、本人の不幸はもとより、家族・国家社会の不幸であるから、生まれてくるのを防止したい。

③本法案の基礎となる遺伝学・優生学は、この法案の基礎として活用しに耐えるだけ発達している。しかし実施については慎重を期したい。

④健全な素質の増加を図る条文としては第六条がある。今日優生手術と称せられる操作が理由なく行なわれ、人口減少の一因となっているが、法文を以て明らかにしていなかった。その濫用を厳禁し、厳重な制裁を以て臨む。

⑤十七条は十六条の手続きを規定している。この手続きをふまず、あるいは違背した者は嚴重に取締り、処罰しようというものである。人口増加はこの法案だけでは図れない。保健衛生・国家経済・産業・教育政策・あらゆる面で図るよう全力を注ぐ。

⑥産児制限が社会のむしろ中以上の階級で行なわれているのは憂慮にたえないが、法案を以て取締まるのは難しい。健全な次代の国民を多数得ることは、大切な御奉公の道だということを教化指導したい。

⑦新奇を好む、あるいは反動的反対には十分戒心を加えたい。その動きについての心配は私も同感。

⑧人口減少に連なる用語の頻発については注意したつもりだが、国民は現実を目をおおってはならないと思う。

⑨各国の人口減少と断種の関係は、各国とも考慮しているので、別の機会にお耳に入りたい。

⑩ (回答せず)

⑪ 施行に就ては悪用されぬよう、周到に配慮する。

⑫ この種の事の断行には勇氣がありながら、他(のことの実行)には勇氣がないという印象を与えることはない。今日のような時世では、必要な事は万難を排しても行なわねばならない。

⑬ 政府としては十分な検討をし、自信を以て提案した」

ここですかさず戸沢子爵が、「重要法案なので十五名の特別委員に委ねたい」と動議、その場で、公爵島津忠承など九人の華族と、下村海南ほか六人の勅選議員、多額納税者が任命されます。建部は加えられません。

◆ 悔いを千載に残さざらんことを

特別委員会の内容を、委員長、野村益三子爵は、三月二十六日、本会議で、次のように報告します。

「①このような任意申請制度は外国にはない。②同意申請が原則。③申請及びその手続きに周到な規定を設けており、人権じゅうりんはない。④不妊手術、中絶を第十六、七条で禁止し、違反する者は相当の制裁を加えることとしたので、人口増加にも貢献する法案である。以上を認めたが、次のような質疑応答があった。

① 今日の遺伝学で確認できるか。将来変わることはないか。

② 遺伝説は定説か。(現在の学問の進歩に基礎を置いている)

③ 軽快した者にも科すのか。(軽快するなら遺伝ではない)

④ ドイツではアル中や性的異常者も加えているようだ。(アル中を対象とするのは時期尚早。性的異常者は「病的性格」に含まれる)

⑤ 性能研究所のようなところで十分審査すべきでは。(国民の自覚による自主申請が原則)

⑥ 大本教の如きは、まさしく本法を適用してもよい。むしろ進んで去勢すべきだ。

⑦ 強制法にせよ。(現在強制去勢は七か国、申請と強制の併用は四か国。刑事政策としては研究の余地がある)

⑧ 優生家系は積極的に保護せよ。(人口問題研究所と近く開設の厚生科学研究所で研究する。各府県教育会

に依頼して資料は集まっている。百九十五人の専門医が三千家系を調査した。今後も引き続き調査する。

⑨術後の成績は。(平均所要時間は十分十五秒。健康には無関係。男性はむしろ健康増進、性欲や性生活の心配はない。女性の大部分は変化がないが、好転、低下がそれぞれ少数みられた。癩患者一千三名の実験では、手術後不眠を訴えた者41%、四日以上臥床したもの21%、健康に影響がなかった者65%、増進3・6%、低下5・8%。性欲は不変55・6%、増進4・8%)

⑩現在、癩收容所はわずか十七か所、收容人員一万にすぎない。絶滅対策は。(鋭意努力中。御内帑金も仰いでいる)

⑪実施に慎重を期してほしい。(今年度は準備期間。施行は明年度から)

⑫外国のやき直してはない、日本の方策を。施行は慎重に。(精神病者、身体欠陥者は約百二十五万人だが、強度、悪質な者二十五万人のみを対象とする。本年度は三万円、来年度は百万円を計上、一度に二十五万円ではなく、順次実施する。初年度は約二千人)

最後に以上の討論をふまえて議決したという「希望決議」を読み上げます。

一、本法の重大性に鑑み政府は本法の実施に当り常にその社会に及ぼす影響につき深長の注意を払い又本法の目的を達成する方法等につき一層の研究を為すべし

二、優生思想の啓発に当り本法制定の趣旨を周知せしめ徒らに社会に不安の念を懷かしめざるやう特に留意すべし

三、中央及び地方に置くべき優生監査会の組織につき慎重に注意し又委員の構成につきては特に考慮すべし

討議に入り、建部遯吾は、ふたたび、強烈に反対します。

①系統生命観に欠裂を与え、産児制限に拍車をかける。

②人口減衰は系統生命観の減衰によるもの。危険が倍加する。

③子の百%に遺伝されるのは、両親が全く同じ遺伝素因を持つ場合だけ。発現率は多くは四分の一以下。

④ 一人の悪質者を恐れて三人を失うのか。
⑤ 有用度が低いというだけで抹殺するのは人口政策と矛盾する。
⑥ 各国の断種と人口衰微は因果関係がある。

⑦ 未完成の学説を根拠とし、良質人口の増加を擬装している。社会心理の普遍法則を無視、欧米諸国の重要事実を閑却している。個人観に偏り、普遍的な社会認識に欠ける。急拠制定する必要は全くない。むしろ癩病く減にこそ全力を。

と、細かく理由を述べて、「広き視野、確かなる基礎に立ちて、悔いを千載に残すことなからんことを切に祈る」と結びます。

◆ 国策を支えた下村海南

ここで推進の力となるのが下村宏（通称海南。勅選議員。通信官僚から台湾総督府総務長官へ。後に朝日新聞論説委員としても活躍）です。

「この問題はきわめて重要なにもかかわらず誤解されている。言うまでもなく、良質の人口増加は国力の飛躍となる。維新以後の躍進は人口増加に負うもの。停滞の徳川時代は人口も停滞していた。しかし近時増加率が漸減、平均年齢四十五歳は欧米より十五歳短い。人間にはプラスとマイナスがあり、マイナスの最たる者は精神病者、犯罪者で、多くは遺伝による。よって各国は優生法を施行しているが、最も成果をあげているのはドイツである。先の大戦で二百万の壮丁を失い、戦後八十万の餓死者を出したドイツは、このままではポーランドにも劣ると、結婚と多子を奨励、体力増強、人口増加に励み、オリンピック参加五十余か国中第一位となった。これが前大戦の戦勝国英仏がドイツに脅威を感じている理由である。

ドイツは優生運動、断種法を最も手広く行なっているが、それは「プラス人口」を増やし、「マイナス人口」を減らすものである。ここにドイツの断種法の趣意書を朗読する（朗読）。

私は二十年ほど前、『人口問題講話』でもこの問題を切言した。私が関心を持った契機は、少年時代、近隣の長男が発狂、長女は相思の人との結婚が望めなくなり自殺、相手の男も自殺、発狂者を出した家の母も

入水したのを見たからである。

私に松波寅吉という親友がいた。私の妹をめあわせようとしたが、てんかんがあるからと固辞して独身を貫いた。彼は医者で、弟も医者だったが、弟は結婚し、普通の子女を得た。もしもこの断種法があったら、彼も人なみに結婚できたろう。このように上流階級でものわかった人ほど自制し、下級の者は無邪気にどんどん子を産む。断種は申請ではなまぬるい、強制せよとか、犯罪者の刑とせよ、断種でなく去勢を、の声も聞くが、一考に値いする。

断種を避妊に悪用することは、十五条、十八条で規定され、従来の無制裁から前進した。家までが絶えるという心配に対しては、養子制度がある。どんな名家でも子孫がきちがいではしょうがない。

この重大法案が会期切迫の時期に提出されて十分論議されないのは遺憾だという建部博士の説はもっともだが、私の賛意は、来年なら、あるいは再来年なら変わるといってもいいし、遺伝性精神病が減少するものでもない。今回の事変（注Ⅱ日中戦争）で国民の中堅となるべき若い人たちが多数死に、あるいはいろいろな病気をもらって体位が低下したのみならず、内地には若人がいないため出生率が減っている。これは戦時には致し方のないことで、結婚年齢晩婚化の傾向を早婚に戻すのも一策だが、まず乳児死亡率を外国なみにしたい。そのためには育児知識を普及させることである。次に小中学生の結核対策に留意すれば、平均年齢は五十歳にはなろう。

一方、雑草の根を絶つことである。ドイツもスウェーデンも、断種を高めてから出産率が向上した。悪質者は減らすべきである。

今回の法で避妊手術は罰することになったから、断種で人口が減る分は増えるだろう。

しかし根本は国民が自覚し、思想的、肉体的に伸びなければ意味がない。民衆にこの趣旨をよく理解してもらいたい。あらゆるものには利害が伴うことを心得て、本案の成立を希望する」

吉田厚相がことばを添えます。「本法案の実施につきましましては、政府は決してこれのみで成果をあげうるとは思っていない。あわせて各種の積極的な方策をとる。委員会の決議を十分尊重したい」

もはや反論はありませんでした。

「これにて討論は終わりました。本案の採決を致します。同意の諸君の起立を請います」

「過半数と認めます」

議長、松平伯爵の宣言に、西大路子爵が「直ちに第二読会を」と呼びかけ、植村子爵が「賛成」と叫びます。

「本案の第二読会を開きます。ご異議がなければ、全部を問題に供します。本案全部、委員長の報告どおりでご異議はございませぬか」

（「異議ナシ」と叫ぶ者あり）

「御異議ないと認めます」

「直ちに第三読会を！」ふたたび西大路子爵の声。そしてまたも「賛成」と植村子爵。

「本案の第三読会を開きます。本案全部、第二読会の決議どおりでご異議はございませぬか」

（「異議ナシ」と叫ぶ声あり）

「ご異議ないと認めます」

議事録はここで終わっています。

一九四〇年三月二十六日、「国民優生法」はここに成立。五月一日、法律第百七号をもって公布されます。が、実施は、翌四一年七月一日。実施にあたり、第六条、強制断種の項が全文削除されたのは、貴族院の希望決議が生かされたのでしょうか。

◆ ついに越えた〆点▽

この間と、その後の状況を、当時の『東京朝日新聞』に追ってみましょう。

〔戦時色を彩る優生法案（40年3月13日）〕 衆院本会議は国民優生法案の論戦に一日を費やした。本議会で少ない国祉民福に関する法案の一つとしても、この法案は「断種」という人生の重大施術の当否を決する特

殊な意味を持つ点が注目をひく。しばしば議員提出の形で提案されたと同性質の本案が、政府提出として議院に見えるに至ったのも、戦時下における人口問題の重要性がもたらせる情勢の変化であろう。四角四面な政治経済論が普通の議場では、人生の機微にふれるこの日の論題に、聴く者は肩をほぐして傾聴したが、田中義達氏(時局)の話の運びの巧さが特に面白かったのは、あながち同氏が医師出身というためでもあるまい。

〔内閣初の議會を完了 国内態勢の整備成る いよいよ新秩序建設に邁進〕(同3月27日) 米内内閣初の第七十五議會は、会期を二日延長したが、二十六日中に、握りつぶしとなる「ガス用木炭会社法案」と「瀨予防法中改正法律案」の二法案を除き全部成立を見、同日をもって聖戦下三度目の通常議會は結末を告げ、二十七日には閉院式が舉行されることになった。

最終日の二十六日は、定刻、貴族院本會議を開き、前日委員會で可決された臨時資金調整法改正案・公債追加發行法案、事變行實交付公債法案・石炭配給統制法案を可決したのち一旦休憩、午後再開して、木炭供給調節特別會計法案・自動車交通事業法改正案・農産物検査法案・輸出農産物会社法案を逐次可決後、現内閣の政策を織り込んだ明年度第二次追加予算案を上げ、二荒芳徳伯(研究)松本蒸治氏(無所属)の質問があつて可決成立、最後に国民優生法案を上げ、建部遯吾氏(研究)の反対論があるが多数をもって可決成立し、同院で審議中の追加予算案ならびに十件の政府提出法律案全部の審議を終了し、いずれも成立、午後五時終了の予定である。

かくて今議會は、百五億に達する一般会計ならびに臨時軍事費予算案および各特別會計予算案と、百十件にのぼる政府提出法律案中二件を除き百八件は貴衆兩院を通過成立して、支那新中央政府(注Ⅱ汪政權)成立による新事態に即応すべき国内態勢の整備を完了し、東亜新秩序の建設に邁進すべき諸般の準備が整えられるに至った。

〔「結婚難」へ千円の補給 四児を産めば返却ご無用〕(41年3月24日) 一億人口の確保の国策に呼応し、厚生省では近く「人口局」を新設の上、強力な人口政策を展開することになり、かねて省内各局を督励して具体的施策の立案を命じていたが、独身者や子宝部長にはしごく耳よりな「婚費貸付」「子宝手当」の二制度の試案が社会局の手でまとまった。これは銃後国民の結婚奨励と出産増加をねらったナチス張りの制度

で、従来の、単に「生めよ殖やせよ」の掛け声ばかりでなく、さらに一歩進んだ、国家がこれから結婚する若人や多子家庭に、必要に応じて資金を投げ出し、「子宝翼賛」に拍車をかけようというもの。

婚費貸付は、男子三十歳女子二十五歳未満で新世帯を持つ者に、千円まで無利子貸与、結婚後十年間に月賦償還させる。赤ちゃんが生まれれば一人につき四分の一ずつ、ごほうびに天引き、十年以内に四人産めば全額ご破算になるというありがたい仕組み。しかし無制限ではなく、男女とも心身健全で、悪質な遺伝性疾患や性病、中毒者など、いわゆる優生結婚に該当しないものはお断わり。

〔六人目から月十円 子宝手当〕（同3月24日）十五歳未満の子は六人目から一人につき十円を支給、また十五歳以上の進学希望者で優秀な者には「教育資金」を贈る。

〔「血の証明」なくば結婚を許さず 優生結婚法』の準備〕（同5月13日）七月から実施される例の国民優生法は、悪質な遺伝性疾患を持つ者を任意に「断種」させ、国民素質の向上を図るのが目的だが、新しい優生結婚法は、一歩進んで結婚すべき男女をことごとく優生鉄則にはめこみ、純後国民の血の純潔を確保するもくろみ。当局の案によれば、今後結婚届を出す場合、優生的に見て男女双方が健全な体質であることを証明する医師の「健康証明書」がなければ正式に認められないキツイ制度。悪質遺伝を持つ者は優生手術をすませなければ結婚できないのはもちろん、性病、アル中等も治療証明のない者は結婚できない。全国各地に「優生結婚指導所」を設け、優生結婚の相談、指導も行なう。

〔展開される「民族戦」 七月一日実施の「国民優生法」〕（同6月1日）大和民族の質的増強をめざす「国民優生法」はいよいよ七月から実施される。東亜共栄圏諸国の盟主として、「民族戦」の覇者たらんがためには、日本民族の量的増強とともに国民素質の強化も必要、この「質」を確保する画期的人口政策である。

（以下、内容を詳報）

〔これなら優生結婚 雛型示して若い男女を指導〕（同6月4日）厚生省優生課では吉岡弥生・竹内茂代氏ら、医学界の権威二十余名を招いて「優生結婚指導協議会」を開き、雛型を決定、「優生結婚指導書」を印刷、各結婚相談所、保健所、各種団体に頒布する。

〔産児制限にも鉄槌 七月一日実施の優生法〕（同6月7日）……同法は遺伝性疾患の追放ばかりでなく、

人口政策の立場から、合法的な産児制限に鉄槌を下している点が注目される。従来とかく医師に断種手術やレントゲン照射を依頼する者少くなく、医師も自由に扱ってきたが、今後は「避妊」を目的とする行為は固く禁止される。また妊婦が病気で出産が危険な場合は、従来は医師一人の考えで妊娠中絶を行なえたが、他の医師の意見を求めるとともに地元府県当局に届け出ることを規定。医師がなれあいで行なう形跡があれば、直ちに指定医を派遣して確かめる。

〔国民優生法該当者は三十万人〕（同6月7日） 国民優生法は七日公布、施行細則も十三日ごろ公布されることになった。第六条の強制申請による優生手術は当分施行を延期するが、現在優生手術に適當と認められる者は約三十万人、本年度は申請件数三千件に達すると当局では予想している。

戦争への入道▽は、ある地点で「引き返し不可能点」に達すると言います。

男性の「機能」にかかわるもの、「家系」にかかわるものとして最も憂慮された国民優生法は、こうして、反対、推進それぞれの人の思わくを越えたものとして機能していきます。法案通過の時期は、その、見えないう「引き返し不可能点」の時期にあたっていたのではないのでしょうか。成立の前日、聖戦貫徹議員連盟結成、四日後、汪兆銘国民政府樹立、四月、国民体力法公布、米穀強制出荷命令発動、六月、近衛、新体制推進の決意表明、七月、大東亜新秩序・国防国家建設方針決定、八月、全政党的解党終了、九月、町内会整備、北部仏印侵略、日独伊三国同盟調印、十月、大政翼賛会発会、十一月、大日本産業報国会創立、十二月、情報局官制公布、翌四一年一月、戦陣訓、三月、国防保安法公布、四月、日ソ中立条約調印、日米交渉開始、五月、予防拘禁所官制公布、七月、南部仏印侵略、八月、重要産業団体令公布、九月、翼賛議員同盟創立、防衛総司令部設置、十月、第三次近衛内閣総辞職、そして十二月八日――。

議事録は、治安維持法下とはいえ、まだ議会の中に最後の言論の自由が、そして政党の残骸が残っていたことを物語っています。一つの関門が突破されたとき、あとは、なだれのように傾斜していったのです。多くの反対を押し切って強行されたこの法案は、しかし皮肉なことに、その第一の目的である入悪質遺伝の防遏▽にはほとんど効用を果たさず、一九四七年、優生保護法に代わられるまで、入優生手術▽の実施数

は五百三十八人(申請数八百二、調査数二万一千五百八十)、また、第二の、最も主要な目的であった△優良国民の増加▽は、多くの出征者、戦死者を統出する中で、増加どころか減少の一途をたどります。

そして、精神病は遺伝するものか、断種よりは環境整備こそ重要ではないか、との叫びを証明するように、この法の施行中も、また、この法を受け継いだ優生保護法が今も施行される中でも、精神性疾患は増えこそすれ、決して減少はしていません。

◆ すべてを結んだ△優生▽の糸

ところで第六十五議会のやや荒唐無稽な荒川案から一つの法案が出来ていく姿を見ますと、この間の、荒川案、八木案、政府案は、一本の糸で必ずしもつながっているわけではなく、それぞれの底流は少しずつちがっていることがわかります。大まかに分けると、次のようなことになるでしょうか。

(1) 荒川——優秀な日本民族の発展をはかりたいという使命感。しかし、現実には、性病、ハンセン氏病・精神疾患等がまんえんしているというあせりと怒り。→△害虫▽△ビールス▽にも相当する凶悪犯、精神疾患の除去が治療法。これらの病原は△遺伝▽するゆえ、△断種▽を行なわなければ△根治▽できない。病原菌を除去せずに△教育▽を行なっても、国費の濫費。(教育者、民族主義者の立場。根底にあるのは教育不信だが、自らは意識していない)

(2) 八木——精神病者とその家族を救いたいという使命感。しかし、適切な治療法がないというあせり。精神病は遺伝という誤認。→遺伝を断ち切るためには△断種▽が必要。(地域医療の臨床医の立場。根底に医療不信があり、自らもそれを認識している)

(3) 村松——日本民族発展の願望(使命感ほど強くはない?)。性病・ハンセン氏病・精神病等のまんえん。△劣等者▽ほど繁殖力が強いという△逆淘汰▽の恐怖。→△断種▽による制圧。立法化の必要。(法律家の立場。法治主義)

(4) 厚生省——疾病発生率減少の願望と責任。性病・結核・ハンセン氏病対策の急務と、治療法の確立してない精神病対策へのあせり。国家の要請としての出生率増加。→次善の策としての△断種▽(効果は必

ずしも期待していない？）。出生数増加のための避妊手術と中絶の禁止。（臨時機関として特設された立場。衛生局以来の疫学的視点と、国民の増産および品種改良の責任）

賛成者、推進者は、多くはこの混合型。混合の度合いはいろいろですが、そのニュアンスのちがいを統合していくのがA優生Vです。しかも、反対論者もまた、基本的にはA優生Vを支持している姿が見られます。それは戦後の優生保護法と、どのようにかかわっていくでしょう。

◆ 女性を含む社会党議員でつくった戦後の第一次案

現在の「優生保護法」が出来たのは、ご承知のように一九四八（昭和二十三）年ですが、その前に、社会党案によるもう一つの「優生保護法案」があったと言います。

戦後、帝国議会から国会と名を変えた、その第一回国会に、それはたしかに提出されました。

提案者福田昌子外二名（加藤シヅエ、太田典礼）。一九四七（昭和二十二）年八月二十八日提出、十月一日、衆議院本会議の議題に上っています。

法案は六章二十七条。第一章総則第一条には、次のようにA目的Vが記されています。

「この法律は母体の生命健康を保護し、かつ不良な子孫の出生を防ぎ、以て文化国家建設に寄与することを目的とする」

目的の第一に、A母体の生命健康の保護Vが掲げられ、国民優生法の主目的であったA国民素質の向上Vは、A文化国家建設Vに置き換えられています。

第二条は、国民優生法では「優生手術」とされていた手術の名称を、「断種手術」と改称し、具体的に内容を示します。

「この法律で断種手術とは、永久に生殖を不能にする手術を意味し、男子では精管、女子では卵管の切断又は結紮などを示す。放射線照射とは、永久に生殖を不能にするレントゲン線ラヂウム線など放射線の照射を意味し、去勢量照射を指す」

第二章は「任意断種」。その対象の筆頭に掲げられているのが、「妊娠分娩が母体の生命又は健康に危険を

及ぼすおそれがあるとき」です。二、三、四、は、いわゆる「優生」で、「本人又は配偶者が悪質な遺伝性素質を持っているとき、本人たちにはなくとも近親者に多く、子孫に遺伝の恐れがあるとき、遺伝性は明らかでなくとも、悪質な病的性格、酒精中毒、根治しがたい徴毒をもち、生まれ出る子に悪影響を及ぼすおそれのあるとき」を対象にしていますが、五に、「病弱者、多産者又は貧困者で、生まれ出る子が病弱化し、あるいは不良な環境のために劣悪化するおそれあるとき」が加わっているのが注目されます。そして第四条で、本人と配偶者の同意が必要であること、未成年又は心神喪失者の場合は親権者又は後見人の同意をもって代えうることを規定しています。

第三章は「強制断種」。常習性犯罪者、精神病者、癩患者のうち、裁判所、精神病院長、癩収容所が必要を認めた者は、それぞれの長が申請し、優生委員会が判定すること。判定が下った時は、本人と配偶者の同意がなくても施術できること。その費用は国費とすることなどを定めています。

第四章「届出並禁止」では、手術は医師のみが行ない得ること、医師といえど理由なくして行なつてはならないこと、術後に保健所に報告する義務があること、などを定めると同時に、被施術者が結婚しようとする時は、相手に要求されれば事実を告げなければならないとしています。

第五章「一時的避妊」は、永久避妊である断種に対し、いわゆる「避妊」の自由化を認めたものです。医師の施術を認めると同時に、医師以外の者の避妊と、衛生上有害な避妊器具の製造・販売・貯蔵を禁止し、行政庁が取締まるとしています。

第六章「妊娠中絶」では、次の二つの理由がある者に、中絶を認めています。一つは、「胎児の父が、任意断種または強制断種に該当する者であり、母体の生命または健康に危険を及ぼすおそれがあるとき」、第二は「強姦その他不幸な原因に基づいて自由な意志に反して受胎した場合で、生まれ出る子が必然的に不幸な環境に置かれ、劣悪化するおそれがあるとき」で、いずれも、本人と配偶者の同意を義務づけていますが、強姦が登場するのは、戦後の世相を物語っています。

第七章は、この法律に違反した医師と、医師でない者が施術した場合などの罰則であり、最後に付則として、国会通過一か月後に施行すること、施行と同時に、国民優生法ならびに有害避妊用器具取締規則を廃止

することをうたっています。

敗戦の翌々年らしい、平明な口語体の文章ですが、ここで新しく主張されているのは、「避妊の全面的な自由化」と、「母体の生命・健康に危険がある時、病弱者・多産者又は貧困者で、生まれ出る子の病弱、劣悪のおそれがある時」に、「永久避妊手術Ⅱ断種」を、また、「強姦その他自由意志に反する不幸な妊娠」に「中絶」を認めたことです。

◆ 子どもができると生きていけない

提案者のうちの二人、加藤シヅエさんと太田典礼さんは共に八十歳を超えるご高齢ながらご健康で、ご記憶もたしかですが、お二人にうかがったこの間の事情として、「避妊や中絶を認めなければ、どうにも暮らしていけなかった」世相があったという点では一致していました。

一挙に四割も狭くなった国土にあふれる復員兵と引揚者。復員ベビーは続々誕生する一方、町はパンパンと呼ばれる街娼で原色にいろどられていた当時の風景は、私の目にも鮮やかに残っています。住宅難は今日ではどんなに想像しようとしてもできないほど。親子六、七人で一と間暮らしなどというのはザラでした。家主は神様で、赤ちゃんが生まれようものなら追い出されるのが当然。京都の産婦人科医として日夜中絶を依頼される太田さんと、戦前から弾圧に抗して産児制限運動を続けていた加藤さんが、まず、避妊と中絶の合法化に立ち上がったお気持ちには、よくわかります。お二人は、戦前の産制運動の同志で、太田さんは八太田リングVの開発者としても知られる人です。

筆頭提案者の福田昌子さん（故人）は、太田さんも加藤さんも、「立案の途中から加わった」と言っておられます。この方は、大阪の済生会病院の産婦人科医、手術の名手として聞こえた方ですが、郷里福岡の県知事（社会党）のたつての懇願で立ったという政治には全くのしろうと。太田さん同様、臨床医としての経験から、やむにやまれず加わられたものでしょう。ご遺族の話では、毎晩深夜まで議員会館にこもり、法律書と首つびきで、「わからないわからない」を連発しながら、原案作成に悪戦苦闘していた姿が忘れられないということです。

法律専門家が加わってなかったからでしょうか、条文はどれもたいへんわかりやすく、医学者の手に成るものだけに、率直、簡潔です。しかし今日の私たちの目から見ると、戦前のA優生Vが依然として残っていること、しかも強制断種に強化されているのがふしぎです。

その理由を、太田氏は「あくまで国民優生法の代案として出し、これによって墮胎罪を空文化しなかったからだ。世界に中絶法がないあの時期、新しい法律をつくるのは不可能だった」と述懐しておられます。「優生保護法」という名は太田氏の命名だそうで、A優生VとA母性保護Vの二つの要素を盛り込んだことを示した、と、太田氏はA優生Vを「自分は中絶自由化同様、重要と考えた」と、誇らしげに語ります。太田氏ほどの思いではないにしても、議場での加藤さんの提案理由説明にも、それはうかがわれます。

◆ 今は子どもを産みたくない！

十月六日厚生委員会に付託された優生保護法案の実質審議は十二月一日開始。加藤さんは、次のように訴えています。「この優生保護法案は、他の多くの法案とちがひまして議員提出であるということに非常に意義があると存じます。

ご承知のように、戦争中は国民優生法という法律が出ました。これは名は優生法と申しておりますけれども、立案の精神は、軍国主義的な生めよ殖やせよの精神によってできた法律であることはご承知のとおりであります。その手続きが非常に煩雑で、実際には悪質の遺伝防止の目的を達することがほとんどできないでいる、ということは、この国民優生法ができてから今日まで、実際どのくらいの人がこの法律を利用したかという報告を見ますと、よくわかることでございます。

また、現行法の国民優生法は、むしろ出産を強要することを目的と致しておりますために、実際に出産が適当でない人が出産をのがれるようないろいろな医学的処置を医師に求めることを不可能にする結果、国民、殊に妊娠、出産を致さなくてはならない婦人たちが非常に苦しんでおるといふ現状でございます。

殊に現行法では第十六条において、断種手術並びに妊娠中絶の届出制を致しておりますので、断種を受けるべき者、あるいは中絶の処置を医師に受ける当然の理由があると思われる者でも、その医学的な適応症が

非常に煩雑な届出を必要とすることになっておりますので、その結果、婦人たちは非常に苦しんでおるとい
うのが現状でございます。

この法案提出の目的は、第一条の総則に書いてある簡単な条項がすべてを説明しております。すなわち第
一条に、「この法律は母体の生命健康を保護し、かつ不良な子孫の出生を防ぎ、以て文化国家建設に寄与す
ることを目的とする」と申しておりますが、これはこの法案すべてを説明しておると思います。

元来、今までも、母体の生命・健康を保護するとか、不良な子孫の出生を防ぐというようなことは広く言
われておったのでございます。けれども、実際の母体の保護の方法をどういうふうにするか、あるいは不良
な子孫の出生を防ぐ方法はどうかということになると、非常に消極的な方法のみを選んでおったのでご
ざいます。

今日、世界の医学は非常に進歩しております、衛生の見地からは、すべて事が起こってから処置すると
いうやり方は、非常に旧式なことになっておりまして、生命の健康を保護するためには、むしろ予防医学の
見地から処置をしなければならないというのが、文化国家の諸外国がやっておるところでございます。わが
国の医学界の現状は、予防医学に非常に立ちおいております。したがって私どもは、あくまでもこの
予防医学を全面的に採用しまして、母体を保護し、優良な子孫を産みたい、ということを主張いたすものでご
ざいます」

加藤さんは続いて、「目的はそうだが、事が断種手術や妊娠中絶に及び、また避妊処置は医師のみが指導
することを特に明記している関係上、この法は産児調節案だと見られており、必然的に日本の人口問題と多
くの関連をもって考えられているが、提案者としては、日本の人口を減らすとか増やすという結論をすぐ
下すことは決してできないと信じている」と強調し、「ただ、日本が人口過剰なのは誰しも認めていること
であり、欧米の民主主義国が、文化国家の建前として、人口問題に一定の計画性を持っている反面、非文化
国家ではふえようと減ろうと計画性をもっていない状況を見るにつけ、この法律が日本の将来の人口に一種
の計画性を与え、文化国家の建前を日本に備える一つの方法となると信じる」とつけ加えたあとで、「しか
し私どもは、人口問題との結びつきよりも、如実に迫っている母体の生命保護、健康増進、生まれてくる子

の優良を求めたものであり、その点に重点を置いてほしい」と、特に念を押します。そして、「今日、食糧はたりず、四百万世帯が住むに家なく、家のある者も、屋根の下に住んでいるとはいえ、四疊半や六疊に、二世帯も三世帯も雑居している。燃料も衣料もない状態のもとで婦人が妊娠し、出産し、育児しなければならぬ」と訴えた加藤さんは、「多くの婦人たちが声をあげて、今は子どもを産みたくない、できうるならば、もう少し、住居や燃料、食糧などの問題に余裕ができてから、愛するわが子を産みたいと言っている」と、切々と結びます。

ここにあふれているのは、庶民、ことに女性の立場に立ちながら、窮状を救いたいという切なる思いであり、国家による人口政策をあくまで排除しようという姿勢も、はつきりと示されています。しかし同時に「優生」に対する認識も、傍点の部分に明らかです。

加藤さんの記憶によれば、この説明には、さぞたくさん質問が出るだろう、出ればあかも言おう、こうも答えようと、三人で大張り切りで待機していたのに、質問は一つも出なかった、ということですが、議事録を調べますと、この日は十一時十五分開議、国民優生法だけを討議する予定だったのが、砂糖の配給に関する緊急質疑が先に入り、これに時間を費やし、加藤スピーチが終わった時は十二時十五分。時間切れで、議長が次回を約し、そのまま審議未了になっています。

もしも、ここで質疑応答が繰り返されていたら、提案者の意図はもっと明らかにされ、あるいは相対的に「優生」の部分がかすんだかもしれませんが、逆に、敗戦国日本だからこそ、その必要性が強調されたかもしれません。記録が残されていない今となつては、推測も不可能です。

◆ マッカーサー司令部の干渉

ところで、提案に至る裏話として、加藤さんは「総司令部の圧力」を伝えています。「総司令部公衆衛生福祉部長のサマス大佐が、日本の人口対策として①移民②食糧増産③産児制限を発表したところ、マッカーサーのもとに米国のカトリック信者たちから抗議が山のように舞い込んだ。次期大統領選出馬を目指すマッカーサーは、驚いて、サマス大佐に圧力をかけ、同大佐は、家族計画問題はもう手を切ったと述べた。この

影響で、政府関係者もおびえるようになった」というのですが（一七五ページ参照）、太田氏の記憶はちがいます。「司令部の圧力はない。むしろ協力的だった。なぜ二つの要素を盛り込んだ法をつくるのか、二つを別々にすればよい、というアドバイスを受けたが、新しい法律をつくるのは非常に困難だったので、国民優生法を変えるというかたちで、提案した」というのです。今となつては八藪の中Vですが、総司令部に対する気兼ねを「厚生大臣に人口問題で質問したのに、一言の回答もなかった」と例証する加藤さんの記憶が、必ずしも的を得ているかどうかは疑問な気がします。

一松定吉厚相は、十一月二十九日の本会議で、多賀安市議員の「人口問題に関する緊急発言」に、かなりの時間を費やして答えているのです。「今日の食糧事情では産児制限問題が起こることは言うまでもない。しかし現在十五歳から六十歳が人口の八割を占めている状況では、産児制限をしても十五万から六十万減るだけで、十四、五年たたなければ効果がなく、人口問題の解決にはあまり期待をかけられない。学者の意見も分かれているが、等閑に付すべきものではなく、厚生省としては十分研究調査を続けている」と述べて、「産児制限と受胎調節、堕胎を誤解しているようだが、現在、受胎調節は放任、堕胎は法律で禁じられ、断種は国民優生法で認められている。が、今日、人口問題と産児制限を直ちに緊急対策とすることは政府としては考えていない」と公式見解を発表しています。消極的姿勢ではありますが、といって、総司令部に対する決定的な遠慮を示すと断定するのは難しいのではないでしょう。

◆ 参議院の保守系議員にのっとられた優生保護法

ともかく太田典礼氏は、第二回国会へ向けて、着々準備していたと言います。「司令部の諒解を得ていたし、当時は司令部のOKをもらっていれば必ず国会は通ることになっていた」と。

ところが提出直前、参議院の谷口弥三郎議員（民主党、熊本、産婦人科医）が、産児制限に関する質問書を内閣に提出したうえ、「あなたの方案には原則的には賛成だから、通過するように協力したい。しかし急進的すぎる点もあるし、参議院で出したほうが通りやすいと思う」と交渉を受けたと証言します。審議未了になったとはいえ、人の法案を横どりするとは、と、太田氏は、あきれもし、憤慨もしたそうですが、中に

立つ人もあり、超党派で衆参両院に同時提出し、参議院先議とすることに、やっと同意したというのです。当時のヤミ堕胎は目に余るものがあり、危険を防ぐことは、誰の目にも急務でした。「医師のみを合法」とすることは、医師の生活を守ることでもありましたから、参議院でも医師出身議員たちが法案を練っており、結局それに力負けしたというところでしょう。とにかく通して、だんだんに改正していけばいいと最後には思うようになった」という太田氏のことは真実だと思いますが、ここに大きな問題が残ったのではないかという気がします。

◆ 「国民優生法」を強化した「優生保護法」

ともかくこうして社会党案を修正した優生保護法案は、一九四八年六月十二日、衆参両院に提出されます。提案者は、参議院が谷口弥三郎（民）竹中七郎（民）中山寿彦（民）藤森真治（緑風会）の四名、衆議院が福田昌子（社）太田典礼（社）加藤シヅエ（社）武田キヨ（民）柳原亨（民自）大原博夫（協同党）の六名で、加藤、武田氏以外は全員医師です。十名の共同提案と言っても、中心は谷口氏ら産婦人科医。国民優生法による中絶や避妊手術の非合法化で、戦中、戦後、堕胎罪にふれる危険にさらされた医師たちが、医師の手術を合法化することに何よりも重点をおいたものでした。

原案の修正は、参議院厚生専門調査会委員中原武夫氏によって練られたというのですが、保守系議員の提案が軸になったためか、第一回国会の社会党案よりは、国民優生法に近いものになっています。

目的の第一に掲げられていた「母体の生命健康の保護」は第二に下がり、「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する」ことが第一目的となりました。しかも、社会党案で出した「強制断種」は残され、「近親者にその素質を持っている者が多く、子孫に遺伝の恐れがある者」という表現は、「四親等以内に悪質遺伝を持つ者」という、「優生強化法」になったのでした。

◆ 国家による出産管理の確立

提案理由を、参議院本会議と衆参両院厚生委員会では谷口弥三郎、衆議院本会議では福田昌子が説明して

いますが、両者の説明はほとんど同じで、第一回国会の委員会ですえた加藤シヅエの、「今この時期には産みたくない、と婦人たちは叫んでいます」という切々たる響きは消えています。

一九四八年六月十四日、参議院厚生委員会で、谷口弥三郎は、次のように述べます。

「我が国は敗戦によりその領土の四割強を失いました結果、甚しく狭められた国土の上に八千万の国民が生活しておるため、食糧不足が今後も当分持続するのは当然であります。総司令部のアッカーマン氏は、「日本の天然資源はまだ十分開発されていない。科学を発達利用すれば八千万人口までは自給自足しうる」と言っております。我が国の人口は、昨年十月一日調査で七千八百十四万余、本年の自然増加は百二十万、引揚者総数は七十万のため、総計は八千四万となり、すでに飽和状態です。

しからばいかなる方法を以て政治的に対処するか。第一に考えうるのは移民の懇請ですが、毎年百万人以上の移民を望むことは到底不可能ですので、幾分かずつでもよろしいから大いに努力して懇請すべきであります。

第二は未開懇地開拓、水産漁業の発達による食糧増産、第三は産児制限問題であります。これはよほど注意せんと、子どもの将来を考えるような比較的優秀な階級の人びとが産児制限を行ない、無自覚者や低能者はこれを行なわないため、国民素質の低下、すなわち逆淘汰のおそれがあります。すでに逆淘汰の傾向が現われ始め、たとえば精神病患者は昭和六年約六万人、人口一万に対し九・九八が、昭和十二年には約九万人、一万につき十二・七七にふえ、失明者も同様の傾向です。また浮浪児にしても、従前は、その半数が精薄と言われていたのが、福岡・佐賀の浮浪児収容所の成績を見ますと、おのおの八〇％に増加しております。したがってかかる先天性の遺伝病の出生を抑制することが、国民の急速な増加を防ぐ上からも、また民族の逆淘汰を防止する点からも極めて必要であると思いますので、ここに優生保護法案を提出した次第であります」

お気づきのように、理由①②③はサムス提言と同じ。そして次に展開される「逆淘汰」の理論は、あの荒川五郎以来のもの。ちがっているのは、帝国議会時代の「国民の増加を図る」が、「急速な増加を防止する」になったことです。

「決して人口対策として提出するのではない」と、声をからした加藤さんや福田さんの思いは、「民族優生」

△国家による人口管理Vに、みごとに変わっています。提案者に加藤・福田・太田の三氏も、もちろん加わっているのです。

厚生委員会での審議は、参議院は六月十四日、衆議院は六月二十三日から始まりますが、委員会はどちらも、一、二回だけ。ほとんど形式的な討議に終わっています。

主な質疑応答を拾ってみましょう。

〔参議院〕

◆医師は医師会が指定するのではなく、優生保護委員会が指定すべきでは。（医師会は任意加入だが、医師の技術、施設を最もよく掌握している。委員会は審査をすればよい）

◆医師会に公的医療機関の人が加わらないと審査が偏ることになる。（役員には官公署からも入っている）

◆手術の結果も知らせるのか。（事実の報告にとどまる）

◆それでは国民の信頼はおけない。（医者は月報で、入院、外来を全部届け出ることになっている）

◆秘密保持義務に医師が入っていない（以上姫井伊介、緑）（医師や弁護士は職業上の秘密を黙秘する義務がある）

◆強姦まで審査を要するのでは、申請しないだろう。人に知られるのを好まないはず（三木治朗、社）

（医師一人の認定だと、範囲が広がるおそれがある。強姦かどうかは、医師にはわからない）

◆妊娠または分娩が母体の生命にかかわるというのは、うその申請もできる。また配偶者が知れない時は本人の同意だけでよいというのは私生児を意味する。やすやすと手術するのは風紀上問題（小杉イ子、緑）
（まず民生委員が判断し、そのうえ委員会で審査する。委員会には判検事もある）

〔衆議院〕

冒頭、谷口議員が、国民優生法は任意断種のため目的を達していない。また戦時中は母性を犠牲にして健康を問題にせず出生増加を第一にしたが、新憲法のもと、人権尊重の意味から母体の健康保護法が極めて重要であると思ひ、ある程度中絶を認めることにした。また各地に優生結婚相談所を置き、優生上の見地から

不良な子孫の防止と、受胎制限の知識を普及したい。と、趣旨を説明。

◆両親とも健康で、子だくさんの場合は。(身体的適応症として非常に考えたが、貧困という理由は加えなかった。何人も産んで母体が弱った場合は適応となる)

◆容色が衰えるというので、金持は何万円出してでも避妊手術や中絶を実行している。貧困者対策は。(以上、田中松月、社)(その点も深く考えたが、貧困を理由に認めている国は世界のどこにもない。一昨年、ノルウェー、スウェーデンにも中絶法が出たが、貧困は削られ、身体的適応だけになった。この法案が通ると各地に優生相談所が出来る。長屋にまで出かけて行って、受胎調節指導する)

衆参両院とも、以上のような枝葉末節の質問に終わっています。そのほか、「不良な子孫とは何か」(優生上の不良は悪質な遺伝性疾患を指す)、「白痴は絶対的に遺伝か」(両親とも白痴なら七二%は遺伝する)が出ただけで、六月二十三日参議院を通過、二十八日衆議院で可決成立します。議事録は二万字に満たぬ短かさ。四十万字を越える帝国議会のそれと比べ、審議がいかに簡単だったかを物語っています。

この第二回国会は、政治資金規正法、人身保護法、軽犯罪法、麻薬取締法、公衆浴場法、旅館業法、興行場法、医師法、薬事法など、重要法案が目白押し、会期延長に延長を重ねています。そのいよいよ会期切れ寸前に提出されたわけですから、審議が急がれたのもわかりますが、当時の新聞を見ても、優生保護法のことは全く出てないんですね。女の問題に非常に先鋭な婦人民主新聞でさえ、ほかの法案とコミで簡単な紹介があるだけ。いよいよ施行という時にも、一段分で五センチ程度の短い記事が出ているだけです。当時婦人少年局にお勤めだった田中寿美子さんも、当時のことは全く記憶がないとのこと。女に深いかわりのあるこの問題が、女の視点なしに論議されたことは、委員会での女性議員の発言が、「生命の危険があるなどというのは口実にも使えろ」とか、「配偶者が不明の場合は本人の同意のみでよいでは風紀びん乱になる」などという悲しいものであること(しかも本人は助産婦)からもうかがえます。

この年七月十三日公布、九月十一日施行と、成立から一年三か月、実施に慎重を期した国民優生法とは比較にならぬ早さで実施されたこの優生保護法が、翌四八年の第五回国会で、妊娠中絶の適用範囲を「本人または配偶者が精神病または精神薄弱である者」「妊娠の継続または分娩が身体的又は経済的理由により母体の

健康を著しく害するおそれのある者」に拡大されたこと、さらに三年後の第十三回国会で、「中絶は指定医師の認定だけで行なえる」「婦人に手術を行なうことができない場合は、その配偶者に優生手術を行なえる」ように改正され、事実上ほとんど中絶や避妊手術が自由化されたことは、ご承知のとおりと思います。その後、いくつかの小さな改正はありましたが、基本的な変更はなく、「堕胎罪」によって本来罰されるはずの中絶と、「傷害罪」に該当するはずの永久不妊手術が、この法律によって合法化されるというかたちで、日本の女の中絶は罪を免れてきました。

一つの法で罪となるはずのものを、他の特別法で救済することを、法律用語では「違法性を阻却する」と言うそうです。簡単に言えば、酸をアルカリで中和するようなもの、ということになりましょうか。そんなめんどろなことをしなくても、堕胎罪を廃止すればよさそうなもの。占領下とは言え、キリストが七つの大罪に数えた姦通罪さえ廃止された戦後日本の刑法大改正に、なぜ便乗できなかったろう、というのが、優生保護法のもう一つの大きななぞですが、刑法改正案は、ちょうど、社会党案が提出されたころ、提出されており、逆に言えば、優生保護法が準備されていたからこそ、堕胎罪にはあえて手をつけなかったとも考えられるのではないかと思います。政治のかけひきに不慣れたったと言えはそれまでですが、考えてみれば、姦通罪の廃止も、大もめの未成立したこと。堕胎罪が確実に廃止されるというメドはなく、「優生保護法によって堕胎罪を事実上空文化しようと思った」という太田氏のことばには、とにかく一刻も早く立法を、という当時の情勢が偲ばれます。

また、太田氏が総司令部にふしぎがられたという、八二つの目的をもった法Ⅴの先例は、すでに国民優生法に示されているのですね。この法律がⅧ国民優生ⅤとⅧ人口増加Ⅱ中絶、避妊手術の禁止Ⅴの二つの側面を持っているばかりでなく、第二の目的が実はⅧ傷害罪の違法性を阻却するⅤのものであったことは、第七十三帝国議会特別委員会での長い応酬に明らかたとおり。「別の法によって違法性を阻却する」ことと、「一つの法に二つの顔を持たせる」(建部遯吾の言う羊頭狗肉)知恵を、先例によって学んでいたわけで、太田氏たちに、特別の抵抗感がなかったのも、わかる気がします。

しかし、一番根本的なのは、全員がそろって、何の疑問も挟まなかったばかりか、戦後の立法ではむしろ

強化したハ優生Vの考え方です。荒川五郎以来連綿と続くハ優生Vを、ここで考えてみたいと思います。

◆ よりよいものを目指すハ優生V

辞書をひもとくと、「優生」は、本来の日本語ではなく、eugenicの訳、とあります。eugenicを英語の辞書であたってみると、これがまた、本来の英語ではないんですね。ギリシャ語のeu(良、善)と、genic(発生)を組み合わせた「造語」となっています。このことばを造り出したのは、英国人フランシス・ゴルトン(一八二二—一九一一)。進化論で知られるチャールズ・ダーウィンの従弟です。

ご承知のように、「進化論」は、キリスト教の根強い西欧諸国では、神を冒とくするものとして、激しい非難を受けたのですが、ゴルトンは、「自然淘汰」の考え方に、強い感銘を受けたと伝えられます。彼は、自然淘汰の法則を見つければ、「人工淘汰」が可能になるのではないかと考えました。そして、ヒトの法則を解明するために、家系調査に手をそめました。「優秀な」家系と、「劣悪な」家系の差はどこにあるのか、平凡な夫が優秀な妻との間には優秀な子どもたちをもうけたのに、平凡な後妻との間には、平凡な子しか得られなかったのはなぜか……。これらの研究の結果、彼はカギが「結婚」にあること、「よい」結婚を重ねれば、「よい」ヒトを「発生」させることができる、と考えつき、それを、ユージェニックス(優生学)と名づけたのです。「優生」はもちろん当て字ですが、絶妙の訳と言えます。

彼がユージェニックスの文字を初めて使ったのは、一八八三(明治十六)年の『人間能力の研究』“Inquiries into the Human Faculty”の中ですが、「優生」の考え方そのものは、一八六五(慶応元)年の『遺伝的才能と天才』“Hereditary Faculty and Genius”に、すでに示されていたようです。六九年には、『天才遺伝論』“Hereditary Genius”で、それをいっそう明確にしています。

ところが、この思想は、明治の初期に早くも日本に入っているんですね。紹介者は福沢諭吉。

明治十四年(一八八一)の、福沢諭吉著『時事小言』には、すぐれた人、知恵の遅れた人の例をあげて、「……人生の天賦に斯く強弱の差あるは決して偶然に非ず。父母祖先の血統に由来するものとして、草木の種子、魚鳥の卵、種馬、種牛の事実を見て証す可し。人類生々の理も之に異なるなきや明なり。……余は多

年此に所見ありて、血統婚姻論の材料を集めて特に一書を著さんとする其際に當て、偶々英國の学士「ガルトン」氏所著の能力遺伝論の一冊を得て之を閲するに、先づ吾心を得たるものなり」と、『天才遺伝論』の概要を早くも紹介しています。

この文章を読むと、論吉は、ゴルトンの影響というより、もともと、「血統と能力」に関心があり、ゴルトンの説に、我が意を得たり、と喜んだようすが伺われますが、あの有名な、「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」(『学問のすすめ』一八七二)が書かれたわずか九年後に、「人生の天賦に斯く強弱の差あるは決して偶然に非ず」ということが出てくることに胸をつかれます。

「自分はもともと能力と遺伝とのかかわりに関心があつた」と、彼が自称するとおり、実は彼はこれより六年前、「人の上に人をつくらず」を書いた三年後に、早くも、「能力遺伝限界説」を唱えているのです。

「……人間の能力には天賦遺伝の限界ありて、決して其以上に上るべからず、牛馬の如き其良否は二、三歳のときに識別すること易しといふ、人生の遺伝に異ならず」(『教育の力』一八七五—六)と断定し、ただ、知恵は外形では判断できないため、「人学べば智なり」と、勉強さえすれば能力が伸びるもののように考える人が多いが、「是は大なる間違ひにて、人の子の天賦に智慧の定度あるは、馬の子が良否に約束ある如く、力士の昇進に際限ある如くにして、いやしくも其の達すべきに達したる上は毫も其の以上に出づるべからず」と、言い切っているんですね。

この「能力限界説」「能力遺伝論」は、後の『福翁百話』にも繰り返して出て来ます。そしてそれは、「人種改良論」と結びついていきます。

「……近年家畜類の養法次第に進歩して就中その性格性質を改良すること甚だ難からず、要は唯血統を選ぶにあるのみ……扱人間の性格性質も……其世々遺伝の約束に於て些少の差ある可らず。人畜正に同一様にして、薄弱の父母に薄弱の子あり、強壮の子に強壮の父母あり、……此事実果して違ふことなしとすれば、爰に人間の婚姻法を家畜改良法に則とり、良父母を選択して良児を産ましむの新工風あるべし」(『福翁百話』「人種改良」一八九六(明治二十九)年)

この年、荒川五郎は三十二歳。すでに日本大学を出て教職に油がのつていたころ。福沢諭吉と言えば神様

のように思われていた当時のこと、荒川が読んだとしても、ふしぎではありません。

しかし、福沢諭吉は、断種にまで言及しているわけではもちろんありません。断種と結びつけた荒川式優生学には、「民族優生思想」が色濃く感じられます。これはどこから伝わったものでしょう。

◆ 利用された「科学」

ゴルトンの「優生学」は、思想というよりは、本来、あくまで科学でした。家系調査を繰り返すうち、彼は、「祖先遺伝の法則」「子孫復帰の法則」を考え出しました。子は親の血の0・5、祖父の0・25、曾祖父の0・125を受け継ぐことを、正規分布曲線や相関係数を使って研究したわけです。遺伝の研究に双生児が意味をもつことに最初に注目したのも彼です。

しかし、科学は、「発展」とか「進歩」の名で、常に政治に利用されるもの。ゴルトンが家系調査の中でおとした最も基本的な誤り、「優秀」と「劣等」の判定は、それぞれの国の「政治」が、勝手に拡大再生産することになりました。

ゴルトンは、「優秀」の例を数学者の家系に、「劣等」を犯罪者や売春婦の家系に求めたのですが、犯罪や売春は遺伝より環境に影響されるのではないかという批判は、発表の当初から強かったのです。

しかし、ゴルトンの「優生学」は、メンデルの法則（奇しくも彼はゴルトンと同じ一八六五年に発表していました）が、一九〇〇年に評価されるようになったとき、広い支持を受けるようになり、「優秀」なのは上流階級、「劣等」なのは下層階級、すぐれているのは白色人種、といった考え方を吹き込むのに利用されるようになりました。同時に「遺伝」の強調によって、精神薄弱、精神性疾患、犯罪性癖などが「遺伝するもの」として、忌みきらわれるようにもなってきたのです。

一九〇七年三月、インディアナ州でつくられた「断種法」は、アメリカ各州だけでなく、広く世界に広がり、三〇年代には、英仏を除く主だった国々で採用されていたことは、荒川演説や衛生局長の答弁にもみられるとおりですが、アメリカでは、特に人種差別に露骨に利用され、北欧諸国は結婚禁止法を早くから採用して、「階級的優位」や「人種の優位」を保つことに利用しました。

しかし、三〇年代になって急激に断種法が普及したことで、世界に満ち満ちた軍拡路線が無関係とは言えないことは、荒川五郎が「これでは世界に後れをとる」と痛憤している姿からも、十分想像できると思います。

「優生」への思いが、個人の血統にとどまる間は、まだしも無難でしたけれども、「民族の血統」の「優生」を図ろうとする「民族優生」になったとき、それは、軍事大国化と必然的に結びつくものになったのではないのでしょうか。

◆ 根深い日本の中の優生思想

私は最初、福沢の『人種改良論』を知ったとき、ある種のショックを受けましたが、しかし考えてみると、彼は、「人の上に人をつくらず」と言ったからこそ、容易に「人種改良」に移行し得たのではないかと思うようになりました。

維新に先がけて渡米した福沢は、恐らくそこで大きなコンプレックスも経験したことでしょう。「人の上に人をつくらず」は、本来、人種差別、階級差別をはじめとするあらゆる差別の解消を目指すことばでしたが、その時すでに彼の中に、「下の者も上の者と入れ替わりうる」という発想が芽生えていたとしたら、彼の尚商富国論が、富国強兵論を結果的に支えていった過程も、うなずける気がします。

欧米に学ぶことによって近代化を図ろうとした日本は、その最も手っとり早い方法として「混血」を考えたことは、津田梅子らを派遣させる際の、「混血よりは優秀な女性の教育を」と唱えた森有礼のことばかりも偲ばれます。その森も、教育した女性を登用するというものでは決してなく、いわば、「いい子種のためのいい女性」が目標だったわけですから、思想としての「優生」は、すでに内在していたのではないのでしょうか。

「優生保護法の源流をたずねる旅の途中で、何度もうけそうになった」と、私は最初に申しましたが、それは、調べれば調べるほど根強い、私たちの内側の「優生」思想に、いやでもつきあわなければならなかったからです。今日、GNP世界二位となった日本の高度成長も、まさしくこの意識があったからこそ可能だ

つたと言えます。明治以来の「追いつき追い越せ」意識を可能にするものとして、多くの日本人がとびついたハ優生学Vに、複雑な思いを抱かずにはいられません。

後に国民体力審議会委員として、国民優生法起草の中心となった東大教授永井潜は、一九一五（大正四）年には『人種改善学の理論』でゴルトンの説を紹介、三〇（昭和五）年には日本民族衛生学会を創り、雑誌『民族衛生』と『優生』を発刊しています。さらに三五（昭和十）年には結婚衛生普及会をつくり、「ナチスドイツの血の純潔に習って大和民族の純潔を」と提唱しています。

一方、後藤龍吉らによつては、大正末期に日本優生学協会がつくられ、一九二四（大正十三）年には、雑誌『ユージュニックス』（翌年『優生学』と改題）を発刊、後には『優生運動』も発行しています。

家畜や植物の品種改良に威力を発揮した「優生学」に、人種改良による国力増強の夢を、民族主義者荒川らが託したとしても無理からぬこと、それは冷害、不景気に悩む当時の日本人にとって、受け容れられやすい思想でもあったのでしょう。

国会における長い討論の中にも、残念ながらハ優生Vそのものへの疑問は出ず、遺伝学ないしは優生学の信憑性が問われたに過ぎませんでした。「優劣は程度の問題ではないか」と問いかけた建部遯吾にしても、基本的には人口政策（国益優先）を肯定しており、恐らくクリスチャンとしての立場から、断種に抵抗したのではないでしょう。

優生保護法の基礎をつくった加藤・福田・太田の三氏も、それぞれ、いわゆる「名家」の出。「よい結婚」を重ねてきた家柄であり、ハ優生Vには何の疑問もさしはさまなかったのは、当時の平均的日本人としてむしろ当然だったかもしれません。太田氏は、今もむしろ積極的な優生論者で、「精神病質その他の悪性遺伝を人工淘汰することこそ、ヒューマニズム」という固い信念を持ち続けておられます。

私は最初、なぜ社会党の婦人議員が加わりながら、あの優生保護法を、と疑問でしたが、平等を望む社会主義者だからこそ、優生を志向した意味が、少しずつ見えてきた思いがします。たとえば加藤氏にとって、平等は、貧者が救済されることでした。

貧富の差が解消することは、究極的にはもちろん望ましいことですが、それは、貧困がハ悪Vだから打破

するのではなく、等しく人間である条件として、△貧△が問われるべきではないのでしょうか。長い彷徨の末に、私は今、△平等△とは△共に生きること△と、ようやく思い至っています。それは、弱者は弱者としての、みにくい者はみにくい者としての美しさを認めることであり、自らの△負△の部分、決して恥じないことであろうと。

「経済的条項」の保守に、どうしても納得できない気持ちが残るのも、ここに起因しています。人は経済的条件が満たされれば、限りなく産むべきものでしょうか。自然に放置するとき、人は二十人の子を産み得るということですが、そのとき、人は△人△たり得るのでしょうか。一九四〇年の女性の平均年齢は四九・六歳、四・五人の子を持っていました。末子が小学校を卒業するともなく死んでいった日本の母たち。いま、平均二・一人、末子の結婚を祝福し、自らの老後を生きる女たち。——どちらが人の名に値いする生活でしょうか。

私は、避妊技術の開発は、蒸気機関の開発にまさるとも劣らない△文化△だと思っています。かつて避妊は特権階級の秘法であり、避妊術を知らない者は△間引き△（嬰兒殺）をするはかありませんでした。その避妊にしても、誤った行使の中で多くの女たちの命が奪われてきました。多産多死から多産少死、そして少産少死への歴史は、多くの母と子の命の犠牲の上に築かれたものであることを忘れてはならないと思います。

多産も少産も、日本では今は個人の自由にかまかされていますが、それはたとえば隣国中国で少産が強いられる中で自由であること、インドでは多くの男たちが「断種」を強制されていることも、同時に決して忘れたくないことです。

女が、子の数と出産の時期を選択する権利は、世界人権宣言にも、女性差別撤廃条約にも明記されていますが、それは女が自分の人生を選択し、自らのいのちを守ることを、最低の線ですらうとしているものです。

しかし、出産をコントロールする技術は、あくまでも△科学△です。科学の人体への適用という、最もきびしい倫理をとまなうものであることも、また忘れてはならないと思います。

かつて遺伝と称された病気が遺伝ではないことが次々に証明されていく反面、肝炎ウイルスが母から子へ伝わる経路など、新しい事実も日々解明されています。ここに、万が一にも△優生△の思想が入り込めば、

遺伝子操作や精子銀行・卵子銀行は当然の事実になっていくでしょう。その時、人は人々Vたりうるのでしょうか。優生保護法をめぐる問題は、また、すぐれて科学と人間の問題でもあるのです。

◆ ナチスドイツのまねではない

「国民優生法はナチスドイツの断種法の模倣」ということは、使われて久しくなり、私自身も安易に流用していましたが、二つを厳密に比べると、多くの類似はありますが、模倣とは言い切れない相違点も数多く発見します。ドイツの断種法(以下ドイツ法と略称)には、その目的に「国民素質の向上を期する」といった人種優生V思想は掲げていませんし、本人の申請制を原則としています(七五ページ参照)。

国民優生法制定にあたって、諸外国の類似の法律を各委員に配布したことは議事録にもあり、ドイツ法そのものの模倣というよりは、同時代の多くの法の一つとしてドイツ法も参照した、というほうが、より正確ではないかという気がするのです。ドイツ法自体が欧米では後発であり、あるいは他国の法律に学んだものと想像されます。(同時代の各国の同種の法を、私はまだ入手していませんので、断定はできませんが)。

ナチスドイツのこの断種法は、その後五次にわたる施行令で改められ、たとえば施術の医師はアーリア人に限るなど、人種差別の色を濃くしていきますが、それとても法律の条文としては、目をそばだてるほど苛酷なものではありません。

私はむしろ、このような法のもとに、年間五万六千人もの断種が強行されたことに恐しさを感じます。運用され得る法があるとき、人政治Vは、それをどのようににも利用する実例を、ナチスドイツは示してくれたように思います。「ナチスドイツの断種法をまねしたもの」ということは、いかにも説得力に富んでいますが、私は、今後はこれを使わないつもりです。優生保護法は「何かの人々Vに似ているゆえに」人々Vなのではなく、その内包する思想のゆえに問題にしていかなければならないと思うからです。

◆ もしも、差別の風土がなかったら

「優生保護法の源流をたずねる旅」は、こうしてはがらずも「戦争への道をたずねる旅」になりました。

一見、ちがうことのように見える法律が、一つの目的に利用されていく生きた例もここに見ました。厚生省の局長が心配した、「一つの法の存在そのものが社会に影響を与える」ことの重さもまた知った旅でした。

旅が、最初の小さな宿場にたどり着こうとする日、私は、衆参両院それぞれの議事録の終わりに、法案に可決した人びとの署名があるのをみつけました。

〔衆議院〕 福田昌子（社） 武田キヨ（民） 山崎道子（社） 松谷天光（社） 最上英子（民） 近藤鶴代（自）
太田典礼（社） 有田二郎（自） 山崎岩男（民） 榊原享（自） 師岡栄一（社） 大石武一（自） 野本品吉（国民協同） 松本真一（社）

〔参議院〕 河崎ナツ（社） 井上なつゑ（緑） 小杉イ子（緑） 木内キャウ（民） 宮城タマヨ（緑） 谷口弥三郎（民） 今泉政喜（圓） 田中利勝（社） 三木治朗（社） 池田宇右衛門（自） 小林勝馬（民） 山下義信（緑） 米倉龍也（緑） 草葉隆円（自） 藤森真治（民） 中平常太郎（社） 姫井伊介（緑） 千田 正（無所属懇談会） 中山壽彦（自）（民は民主党、自は民主自由党、緑は緑風会）

そして、本会議で可決した日、それに賛成した人びとの名も。——高良とみ、赤松常子、奥むめを、尾崎行雄、羽仁五郎、荒畑寒村、金子洋文……。なつかしい人びとの名が見えました。

この人びとに、私は自分のいのちを託したことを、ずしんと、腹に沁みて思い浮かべました。一票は、「いのちを託す」ということだったことが、今こそ胸に落ちました。

最高裁の判事の投票の際には、必ず、それぞれの判事がかわった判決が公布されます。選挙公報にも、前・元議員の場合は、かわった法律と、その賛否を必ず書くことにしたら、一票の重さは、私たちにあってはんとくに痛切なものになるのではないでしょう。か。たとえばいま、サラ金規制法がつくられようとしているけれど、それは金融資本がサラ金に融資し、より利益を得るためのもの、そして、結果として、毎日のように多くの自殺、他殺、強盗、放火を出していること……。あなたはそれを見過ごしていられるのか、あなたは平気で加担できるのか……。もし成立したとき、「力及ばなかった」とか、「何々党の独走」などと責任を転嫁することなく、どこまでもどこまでもあなたは追いつけるのか……。一人ひとりの議員さんの胸ぐらつかまえて、聞いてみたい気持ちになりました。「いのちを守る」「民族を守る」演説を、いやという

ほど繰り返して読んだ後だったからでしょうか。

最後に、もう一つ、浮かんだ顔があります。顔と言っても、その顔写真を見たわけではないのですけど、十九歳の少女です。冒頭にふれた浮浪者殺しの記事がのった、同じ紙面に出ていた人です。

被ばく孤老と同棲、そして殺人。死体と何日か同居。どう考えても凶悪犯。救いのないひと。

でも、その子の中学時代の女教師は、テレビで、ぼつりぼつりと語りました。「あの子は、ハンカチの洗いか方も知ってなかったですね。……自分の髪の毛の洗い方さえ。……家庭訪問してもね、どうしても、ただ、この家にいる、というだけで、イヌかネコほども思われてませんでしたね」

父親が「外で生ませた」子だそうです。「本妻」に引き取られて、ボチとかミケほども情けをかけてもらえなかった子ども。

老人と仲よくしたくて、まちがえて殺したのかもしれませんが。トラがじゃれるようにして。

こんな子は、生まれてこなかったほうがよかったのでしょうか。「凶悪な血」は、あるいは「精神薄弱」は、父親か母親の「遺伝」でしょうか。「遺伝学」とか「優生学」は、それほど確かなものなのでしょうか。生みの母は、どこで、何をしているのでしょうか。その父と、どうかかわり方をしたのでしょうか。その時、男を拒める体力、拒める状況があったのでしょうか。

産んで、自分で育てていけたら、乳飲み子をかかえた女が働ける職場があったら、十分な収入が得られたら……、手放すことはなかったら、という気がします。

それよりも何よりも、未婚の母をあなどらない、「標準的な暮らし」だけが「良い」とされる社会でなかったら、母と子と一緒に暮らせたかもしれないですね。そして、精神病やハンセン氏病が「家系」として忌み嫌われる風土でなかったら、八木逸郎も、身命を賭してまで、民族優生法の成立を願うことはなかったでしょう。

長い長い苦しいたたかいの末に、部落解放運動の人たちが、「しない、させない、許すまい、心の奥のその差別」を、新しいスローガンに掲げた気持ち、しみじみと伝わってきました。

民族優生保護法（1934、

5年）第一、二次荒川案

〔目的〕 民族の優生を保護助長し、惡質遺伝を防止根絶する。

〔手段〕 「保生斷種」を行なう。

〔対象〕 殺人・強盜その他凶暴な犯罪者、精神狂症、遺伝的腦脊髓病、早発性痴呆症等で遺伝のおそれのある者。諸種の中毒症、ヒステリー、遺伝性不具、結核、ライ病等の重症者等、優生學上不正常児のほか産むことができないと認められる者。

〔前条の者の子を妊娠した時〕

法医審判を経て墮胎させる。

〔結婚の禁止〕 すべて結婚には健康診斷書が必要。斷種該当者で斷種を受けていない者、性病患者は結婚できない。

〔罰則〕 健康診斷書の偽造・偽って結婚した時・本人又は家族が虚偽の申し立てをした時・施術を拒んだ時・許可証なしの結婚は、一年以下の禁錮か罰金刑に。

民族優生保護法（37、38、39年）

第三次荒川案、第四、五次八木案

〔目的〕 我が民族の優秀な素質を保護し惡質遺伝を防遏する

〔手段〕 斷種（輸精管又は輸卵管を通過不能に）する。

〔対象〕 精薄、てんかん、精神分裂、躁うつ、ハンチントン氏舞蹈病、強度の病的性格、遺伝性盲・聾又は強度な身体奇形で遺伝のおそれが強い者。

〔申請〕 本人又は戸主、法定代理人、官公立精神病院・刑務所・矯正院・教護院の長

〔本人の同意〕 必要。無能力者は配偶者、法定代理人の同意。

〔判定〕 優生診定委員会（厚生大臣の任命する官吏と医師）が申請後三月以内に協議する。

〔実施〕 指定医が指定した場所で行ない、術後三十日以内に委員会と大臣に報告する。

〔罰則〕 関係者、施術者は守秘義務がある。違反すれば六月以下の懲役か罰金刑。

國民優生法（政府提案）40・3・26成立

〔目的〕 惡質なる遺伝性疾患の素質を有する者の増加を防遏すると共に健全な素質を有する者の増加を図り、國民素質の向上を期す。

〔手段〕 優生手術を行なう。

〔対象〕 遺伝性精神病、精神薄弱、強度かつ惡質な遺伝性病的性格・身体疾患・奇形、四親等以内に上記該当者がある者、及びそれが相互に結婚した時、精神病の子をすでに持つ者。

〔申請〕 本人（心神喪失者は父母又は配偶者）、精神病院長、保健所長も、同意が得られれば申請できる。

〔同意〕 本人及び配偶者の同意が必要。三十五歳未満の者、心神耗弱者、配偶者不明の時は父母。父母不明の時は戸主、戸主不明の時は親族会。

〔申請先〕 地方長官。手術の内容を、本人及び同意者が諒解している旨の証明書を添付する。

〔判定〕 地方優生審査会。不服なら中央優生審査会に申し立て。裁決は厚生大臣。

〔実施〕 指定医が指定場所で行ない、経過を地方長官に報告。費用は国費。

〔禁止〕 避妊手術、妊娠中絶は要否に関し他医師の意見を聞き、届け出る。急を要する時は例外。

〔罰則〕 禁止事項を行なった時は一年以下の懲役又は千円以下の罰金。致死の場合は懲役三年以下。関係者が秘密をもらした時は懲役六月以下又は罰金千円以下。

優生保護法（社会党案） 47年

〔目的〕 母体の生命健康を保護し、不良な子孫の出生を防いで、文化国家建設に寄与する。

〔手段〕 ①任意断種②強制断種③一時的避妊

④妊娠中絶

〔対象〕 ①妊娠分娩が母体に危険を及ぼす時。遺伝性精神病・精薄・病的性格・身体疾患・奇形の持主、又は近親者に多い者。遺伝は不明でも病的性格・アル中・梅毒がある時。病弱者・貧困者で、子が病弱・劣悪化のおそれがある時。（本人と配偶者の同意が必要）

②常習性犯罪者・精神病院長・癩收容所長が必要と認めた者で、優生委員会が適当と認めた者。（本人及び配偶者の同意は不要）

③対象を限らない。

④父が①②該当者の場合、強姦その他自由な意志に反した妊娠。（同意は必要）

〔判定〕 ②は優生委員会で審査。

〔届出並禁止〕 ①②は施術後一週以内に届け出る。施術者は医師に限る。被施術者が結婚する時、相手の要求があれば事実を告げる。衛生上危害のある避妊器具の製造・販売の禁止。

〔罰則〕 規定に反して施術した医師は懲役二年以下又は罰金三万円以下。医師でない者の施術は懲役一年又は一万円以下の罰金。

優生保護法（超党派提出） 48・6・28成立 48・9・11実施

〔目的〕 優生上の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに、母体の生命健康を保護する。

〔手段〕 ①任意優生手術 ②強制優生手術 ③人工妊娠中絶

〔対象〕 ①本人又は配偶者か、その四親等内に、遺伝性変質症・病的性格・身体疾患又は奇形を持つ者。本人又は配偶者が癩病の時。妊娠又は分娩が母体の生命に危険を及ぼす者。すでに数人の子がある者。

②別表疾患の羅患者で施術が公益上必要と認められる者。

③本人、配偶者又は四親等内に遺伝性疾患がある時。癩患者。妊娠の継続又は分娩が身体的（又は経済的）S24追加）理由により母体の健康を著しく害する時。暴行・脅迫による妊娠。（①③は本人と配偶者の同意が必要）

〔判定〕 都道府県優生保護審査会（委員十人以上）が行なう。再審査は中央優生保護委員会（二十五人以上）が行なう。委員長は互選。

〔届出・禁止〕 優生手術または中絶は、翌月十日までに理由を付して届出る。被施術者は結婚の際、要求があれば話す。職務上の秘密は厳守する。またこの規定外の避妊手術を禁じる。

〔罰則〕 有資格者以外の者が避妊指導をした時は罰金十万円以下。厚生大臣の認可を得ない優生保護相談所開設は罰金五万円以下、職務上の秘密をもらした者は懲役六月以下又は罰金五万円以下。規定外の避妊手術は懲役一年又は罰金十万円以下。人を死に至らせると懲役三年以下。

〔受胎調節の実地指導〕 医師又は知事指定の助産婦・保健婦・看護婦。

〔優生保護相談所〕 優生保護の見地に立つ結婚の相談、遺伝その他優生保護上必要な知識の普及向上、受胎調節の普及指導を行なう。都道府県及び保健所を置く市は設置義務がある。

遺伝疾患者たる子孫を防止するため
の法律（ドイツ、33・7・14）

〔目的〕 遺伝疾患者で、子孫も悪質
遺伝に悩むことが医学的経験に照らし
確実に予期される時は断種し得る。

〔対照〕 失天性精薄、精神分裂、躁
うつ病、遺伝性てんかん・舞蹈病・盲
聾・遺伝性の重度の奇形、酒精中毒。

〔申請〕 本人（無能力者、満十八歳
未満は法定代理人とするが、後見裁判
所の許可が必要）が原則。断種の意

義・結果につき教示を受けた旨の医師
の証明書を添付する。申請は取り下げ
ることができる。医師及び病院・監護
所・刑務所の長も申請権がある。

〔判定〕 遺伝健康裁判所（判事、医
師、遺伝健康字に通曉した医師、各一
名）非公開。本人の出頭が必要。採決
は多数決。決定書には、決定又は却下
理由をつけ、構成員が署名、申請人に
送付する。決定後一か月以内は上級遺
伝健康裁判所に抗告できる。

裁判費用は国費。

〔施術〕 ドイツ国の免許を受けた医
師（後の施行令でアーリア人に変更）
で任命された者に限る。断種決定以前

で手術は禁じる。術後、報告書を提出
する。費用は健保。非加入者は医師料
の最低料金までは国庫負担。

〔禁止及び罰則〕 本人の承諾がない
場合は行なえない。関係者は黙秘義務
があり、破った者は一年以下の輕懲役
又は罰金刑。

第一次改正（35・6・26）

◆ 抗告期間十か月を十四日に。

◆ 断種対象の女子が妊娠中の時は、承
諾を得て中絶し得る。ただし胎児が
六か月以後で生存能力があるが、中
絶が妊婦の生命に危険を伴う時はこ
の限りではない。

第二次改正（36・2・4）

◆ 断種法は外科手術に限定しない（レ
ントゲン照射も含む）

第一次施行令（33・12・5）

◆ 遺伝疾患者が高齢その他で生殖能力
がない場合、手術が患者の生命に危

険を及す時、隔離され生殖行為が行
なわれない時は断種の申請を禁じる。

◆ 満十歳未満は禁じる。

◆ 断種は生殖器等を除去することなく、
精系又は輸卵管を変位、不通又は離
断して行なう。

◆ 収容所長自身が医師でない時は、申
請に際し収容所医師長の同意が必要

◆ 医師が、遺伝疾患や重い酒精中毒患
者を発見した時は届け出ること。

◆ 必要な場合は断種該当者を六週間病
院に強制入限させることができる。

◆ 裁判所で断種の決定が下りると、二
週間以内に手術を受けるべき旨、書
面で連絡する。この際、場所も指定
できる。

◆ 手術は国又は地方団体の病院で、科
学に十分通曉した医師が行なう。

◆ 手術が生命・健康に関わる場合は一
時中止できる。

◆ 対象者が生殖行為の行なえない収容
所に自費で入っている間は中止。

（以下略）

質問 A 戦前の「国民優生法」は、すんなり成立したものだと思ひこんでいたので、驚きました。

☆ 調べてみて、実は私もたいへん驚いたのです。しかし、男性議員たちがなぜあれほど騒いだかというと、△断種Vにショックを受けているわけです。それをやられたのでは、男としての生きがいがなくなる(笑い)と。死刑以上に残酷だと受けとめている。保安処分に使われるのではないかと不安も出ています。

今の優生保護法も、男の方は「女だけの問題」と考えておいでだから、あまり関心がないけれど、ナチスドイツがユダヤ人対策に利用したように、どのようにも運用され得る法だということがわかれば、男の方たちも、もっと真剣に考えるのではないのでしょうか。

その納得できないことを、最後にどうして納得したかというところ、「精神病が出ると一家破滅する」という事実なんです。質疑応答の中で、「子孫のために」ということが出たとき、ある人が、「子孫のためじゃない」って、すごく反論するんですね。「自分の子孫は断絶するんだ」と。(笑い)。反対のもう一つの大きな柱は、「家制度」ですが、結局、精神病が出たらおしまいだということで納得していく。ですから、最終的に成立を支えたのは、「血統」を重視し、「劣悪者」を差別する日本国民すべてだとも言えるような気がします。

この当時でさえ不信を持たれていた「遺伝学」は、いま抜本的に洗い直されていますが、「精神病」に対する恐怖は日本の社会の中にまだまだ根強い。ずいぶんもののわかったはずの人が、優生保護法がなくなると精神病が野放しになるのでは、といった疑問を出します。精神病患者が犯罪を犯すと新聞に大きく出ますが、それは珍しいからで、統計的には普通人の犯罪率のほうがずっと高いのです。しかしマスコミが騒ぐと「恐ろしい」ということになる。この当時の新聞にも精神病患者の犯罪が大々的に報道されて、恐怖を与えています。けれども、今日の犯罪のひき金は、むしろ覚醒剤やサラ金。その陰に暴力団や巨大な力がある……。

B 優生保護法の根ざす問題は、非常に深いんですね。

☆ 調べながら、ほとんど絶望的になりました。私たちの意識の底に巣食っている「差別」を洗い直さないかぎり聞えないという気がしています。障害者差別、堕胎や間引きの歴史も洗い直したい。それに「女」がどう関わってきたかも……。考えたいことは山ほどあります。みんなで問題の根を掘り下げてみませんか。

(一九八三年二月二十五日、△あごらVと△婦人問題懇話会女性史部会Vの共催による学習会での発表「優生保護法と優生思想」に、後の調査を加えてまとめたものの一部です)

ヤマギシズムの優生思想

——哲学しなければ闘えない——

新島 淳良

ぼくは、山岸会というところに、まる五年間いました。ここにおいでの方で山岸会という団体の名前ぐらいは聞いたことがおありの方はいらっしゃいますか。あるいは山岸会の特別講習研鑽会というのを受講された方はいますか。まだ、いらっしゃいませんか。その山岸会がいまなんで有名かと言いますとね、東京都における共同購入の食品の中では、鶏卵に関しては、山岸会のシェアが一番で、圧倒的にたくさんでているんです。東京だけじゃなくて全国だと、今の新しい数字は知りませんが、二十万世帯ぐらいが山岸会で作っている食物を定期的にとっているわけです。牛乳、卵、鶏肉、豚肉、牛肉、パン、お茶、推茸、そんなものを作っている団体なんですネ。

ぼくが大学の教師をやめたのが、一九七三年です。だからちょうど十年前ですね。十年前の三月にやめる少し前から、山岸会に入りまして、さっき言いましたように、まる五年間いたんです。

鶏と同じく人間も品種改良できる

優生思想という言葉から、一番先に思い浮かべるのは、山岸会の優生思想なんですネ。ここに山岸会の特別講習研鑽会を受講された方が、一人もいらっしゃらないということなので、一冊の本をご紹介します。

う。

『ヤマギシズム社会の実態』という本です。山岸巳代蔵という人が口述筆記させたものです。

山岸会というのは、一種の宗教団体みたいなものなんです。いわゆる教祖にあたる山岸巳代蔵さんという人は山岸会を作ってから七年くらいしか生きていなかった。昭和二十八年——一九五三年ですね、山岸会という会はできているんです。そこにおそらく、全国から十万近い農民が加入した。それも副業として鶏をうまく飼うには、どうしたらいいかという、その技術にひかれて入ったという会で、いまのようなコミュニケーションではないんですね。当初のような会としての山岸会は、もう現在、存在していません。

その農民たちに対して、山岸イズム養鶏特別講習研鑽会を始めて、そのテキストとして作られたのが、この本なんです。この本は現在でも、山岸会の特別講習を皆さんが受けられますと、受講料の中に、このテキスト代も入っていますので、必ず一人一冊ずつくれるんです。

しかしこれは、門外不出ということ、他の人に絶対に読ませてはいけません。それから、例えば他の宗教ですと、ふつうの出版社から市販されますね、宣伝の意味で。ところが、山岸会は、絶対に出しません。中の人でなければ読ませてくれない。かろうじて、特別講習会を受けた人に配られるだけという、たいへん神秘めかしたやり方をとっているわけです。

それも道理なんですよ、この本の一番最初にこういうことが書いてあるわけです。

△前言葉（まえことば）▽——これは序言ということ。

「私はいま、これについて全貌を述べる時期ではないと思います」——初めにまず、こういう書き出しなんです。

「これは現在の社会機構や観念、思想とは、はなはだしくかけはなれ、規範を脱し、あるいは逆潮を呈し、政治経済、法律、道徳、習慣等を根底から改定するものであり云々」という前書きが続きましてね、要するに、とてもふつうの人には理解できないし、それをうっかり読まれると、非常に誤解されるので、だからまだ全貌は語れない。そのパラグラフの一番最後は、

「だから0の位、零位に立って理解してもらいたい」

つまり、先入観をいっさいとばらって、理解してもらいたい。わかりやすい言い方で言えば、いっさいの既成観念をいかにはずすかという、その訓練を二週間かけてやるのが、山岸特別講習研鑽会なんです。

最初のうちは、ぼくの想像ですけれども、鶏の飼いはこういうふうにしなけりゃいけないっていう、社会通念みたいなものが日本の農民の中にこりかたまっていますね。たとえば、鶏のえさは、一日何回このくらいの量をやるというようなことが決まっていたわけでしょう。

山岸会の鶏の飼い方というのは、確かにそれとはちがうですね。とても食いきれないくらいのえさを、ポーンとやるんですよ。だから一回だけやりゃいいんです。あとは寝てればいいっていうこういうふうなやり方なんです。その他いろいろ飼い方から育て方まで、みんなちがうんですけれども、ただそのとおりにやるとたいへんもうかる。現に山岸会はもうけているわけで、卵一キログラム、四百五十円——ふつうのは、いま二百何十円でしょう。まあ倍くらいの値段で二十万世帯が、毎週一キログラムずつ買っているんです。それだけいい卵だということで売れているわけですね。

もうけようと思った農民がくると、おまえの考えている既成観念をみんなはずさなければ、山岸イズムがわからない。イズムがわからなければ、稲も作れないし、鶏も飼えない、牛も飼えないぞ、ということ、講習をやるわけです。

そこで、じゃあ何をそんなに、もったいぶった秘密のことがあるのかといえますと、終わりのほうに「人種改良と体質改造」という章があるんですね。

それが実は優生思想なんでありまして、山岸会ができた当時、あらかじめ講習を受ける前に全部読んでいと、受講者に配ったから、昔は全部読まされていたはずなんです。いまは、講習会でもそのところは絶対読まないようにしております。そういうのも、くれるんですからみんな読んじゃいますけどね。こういうふうな内容です。

末はクレオパトラかエジソンか

まず、「人種改良と体質改造」という題ですが、「人種改良」という言葉は、優生学という言葉の翻訳

として、日本でふつうに使われていた言葉です。人種改良学と言っていますが、手元にある百科辞典をひきますと、*eugenics* という言葉の訳に優生学または、人種改良学とあります。人類という種を改造するという意味ですね。そこを読んでみます。

「人間という生物は、案外うかつなもので、他の動植物に対しては、いぶん思いきった改造を加え、新しい品種を作り出す。その特徴を高揚してきたにもかかわらず、かんじんの人間自身の問題には、すこぶる狭い考え方で、排他的な純血至上主義や、人間冒瀆観等、因習、道徳、宗教観にとらわれ、罪悪のように恐れ、たまたまそれを取り上げて研究し発表された著述等は、歴史的、民族変遷史や学説、理論にとどまり、人為的、積極的に実際に応用、一般化されたのは、まだ微温的な優生法にとどまり（これが書かれた頃はね、すでに優生保護法ができてゐるわけです）基本的改良は、ほとんどないようである……云々」

とまあ、こういうような調子で書いてあって、悪文ですからね、これ以上読んでもしょうがないんです。

その次の章が、「百万人のエジソンを、千万人の釈迦、キリスト、マルクスにまさる人を」です。こういうとりあわせが、おもしろいのですが、

「私は、遺伝、繁殖学的、及び人為的自然環境変異理論を基礎とした（みんなこれ、はったりです）計画的、積極的人種改良を急速かつ現状に即して理論と實際を結びつけた方法にて、実施せんとするものです。

私は、キリストや釈迦が残した足跡を直接みていないから、後世の人たちよりの、間接的資料からみたものにすぎませんが、彼等は先天的に、そうとう、すぐれたものを持って生まれてきたように想像しても、間違いないと思います。また、あの人たちがでなくとも、あれらの人に劣らぬ人も世界の各地に実在したと思いますし、その秀でた遺伝因子は、直子はなくとも、傍系にあったものが、現代の誰かに組み合わされて、伝承されてあるかとも思われます」

どうも悪文ですね。要するに、その優秀遺伝因子を持った人同士が結婚して、優秀な人ばかりが残るようにしたらいいんじゃないかということを書いているわけです。そして、山岸さんという人は、醜い女性はかわいそうだと思つたらしく、そのことはかり書いてあるんです。そういう人を一人もいなくすることが大

切である。みんな楊貴妃やクレオパトラ——この人の基準は、いつも楊貴妃とクレオパトラなんです——
のような人ばかりが生まれたら、なんと幸せであろうか。男にしても、醜男に生れたら非常に不幸なんで、
そうでないようになけりゃいかん、と言っているんですね。

これは、たわいもないっていえばそうなんです、山岸会を作った当時は、その幹部連中はどういう人たちかという、ほとんどが小学教師か農民なんです。一般会員には、都市の人たちはほとんど含まれていないんです。この文章をまとめた人もね、私、会って話したことがあるんですけども、退職した小学校の校長なんです。だから、これは、山岸さんの思想というよりも、日本の農村の学校の先生方の思想がそうとう入っているだろうと思います。階層的にみればですが。

山岸さんという人は、小学校は出ましたけれども、それ以上はどこにもいったことのない人です。京都の養鶏家として有名になった人で、京都の養鶏組合の組合長かなんかを務め、戦争中、ヤミ飼料を購入してつかまったことがあるという、そういう経歴はありますけれども、文字どおり稲と鶏に徹した人。鶏を飼って、その糞でいい米を作ったという篤農家の一人にすぎません。ですから、この百万人のエジソンをの思想は、山岸さんの思想か、周囲にいた小学校の校長先生たちの思想か、それはわかりません。ほとくの会った人たちは、みんな今でも、熱烈にこの考えを持っております。もう平均年齢は八十近い人たちですね。で、具体的なり方は書いてありませんが、私の聞いた話を紹介しますとこうなんです。

まず、非常にすぐれた遺伝因子を持っていて、容貌端麗にして、身体強健とみなされる女性とですね、まだ試験管ベビーの考えがなかったものですから、できるならば、湯川秀樹先生——その頃は湯川先生が一番頭がいいと思われていたものですから——湯川先生と実際に性交して、精液をいただくということなんです。そうして妊娠するでしょう。そしたら、ただちに人工妊娠中絶をしましてね、今度は、子宮だけは大へん頑丈な女性——非常に失礼な言い方かもしれないけれど——に、移植しろということです。そうすると優秀な精子と卵子でできた子どもを産むでしょう。

男性の精子は、ほとんど無限に存在するけれども、女性の卵子は三百個か四百個ぐらいしかないんです。が、ま、山岸さんは、三百五十ぐらいって言ってますから、三百五十人子どもが産めるはずだ、こういうん

ですわね。

だから、非常に極端な例をあげれば、三百五十回人工妊娠中絶をしまして、胎児のためにおなかを貸すという、丈夫な女性——これ、なんていうんですか、ホストマザーですか——のおなかで育てて、頭は湯川さんのように、そして顔は楊貴妃かクレオパトラのように、そういう男性と女性を大量に作っていく。それを何世代も何世代もやっていくことによって、本当に幸福一色の理想社会が実現するだろうという構想をもっていた。これが山岸さんの考えた理想社会なんです。ですから、山岸さんが実際その生活の中で考えたことも同じであって、プロポーズするときは、「ぜひ、あなたの卵子と私の精子を結合させて、優秀なる二世を産みたいと思うかどうか」と、まあそうやって、口説き落とされて関係を結んだ女性が、五十人いるのか百人いるのか、非常に大勢いるわけです。

初期はフリーセックスを実行

初期の山岸会は、現在と大変ちがうんです。現在の山岸会は、全共闘くずれの若い人たちがやっています。大学院、それも哲学科などというところをでたような人たちが、幹部の中にいます。

現在の山岸会と当時の山岸会とは、出身階層とか、ものの考え方など、ずいぶんちがうんですけれども、初期のメンバーについてだけ言うならば、メンバー同士、全部乱交しております。みんなそれぞれそフリーセックス、夫婦交換、そういうことを全部したそうです。で、その古い人たちは、そのことについて、実際してみたが、山岸さんの言うようないいことはちっともなかった。また、優秀な子は生まれるはずがないんです。ちっとも変わらなかったという事で、それは今はやっていないんです。

だから、現在もテキストにそのとおりのことは書いてありますけれど、ここはもう講習会では読まない。一番最初に、これから大へんなことを言うぞ、まだ全貌を言う時期じゃあないぞと言っているにしたいしたことないじゃないかと思うかもしれない。しかし、この考えを否定する考えはまったくありません。いま、時期が悪いと、こういうふうに考えています。中曽根さんみたいに、まだ時節じゃあないところ思っているんですわ。今はファッショでいくわけにはいかない。そういう考えなんです。

私が山岸会に入りました時は、山岸会の中では中核と革マルが、特講会場で握手したとか、各派がみんなそろって一緒に仲良くやっているとかね、そう言われてた時代で、朝日新聞などでも連載で、山岸会に入っていく全共闘の若者たちの特集を組んだりした、そういう時期だったんです。

会の中では、完全な共同体というか、コミュニケーション生活で、ものすごくよく働くんですね。朝はふつう四時から五時に起きます。労働時間は無制限ですから、夜部屋に帰るのは九時ぐらいになるでしょうか。職種によって休み時間などもちがいますがすけれども、まあ、年中無休で、給料は全然なしで、ブライバシーはまったく保証されていない。といってももちろん夫婦は個室に入っているのですけれど、風呂なんかはお風呂屋さんみたいなものです。だんだん経済的に豊かになるものですから、ちゃんとした温泉みたいに風呂だけは立派ですが。

食事なんかも、ぼくが入った頃はね、おかずっていうと、煮干がただバツと出してあって、それにしょうゆをかけて食べるというふうなもので、うどんは必ず、素うどんしかでませんでした。現在では私どもの家の食事より多少ましなくらい、ぜいたくな食事を食べている。それは、さっきも言いましたように、全国の二十万世帯が山岸会を支えているからです。

とくに、有吉佐和子さんの『複合汚染』なんかがでてからは、山岸会の野菜は農薬を使ってない、農協の配合飼料なんか使っていないということ、非常に人気があるんです。実状は全然そうじゃあないんですけどね、みんな信じていますから。ぼくも五年いまして、だんだんおかしなことに気がついたという、ずいぶん間のぬけた話なんですけれども、六年ほど前にそこを出てまいりました。もっとも、まだ私の娘がそこにおりましてね、ひそかに警戒しているんですが。つまり百万人のエジソンをつくるためにさわるやつがいなかと思ってるね。

これはまあ、自己紹介みたいな話で、それもないへん、しまらない経験をしたという——。だからぼくは、優生思想っていうのは、ごく一部の悪い人たちが考えているものだとは思わないんです。よく週刊誌なんかについているでしょう。優秀な血統の人、例えば、学者一族というか、おじいさんが学者で学者の娘と結婚して、それがまた学者を産んだというようなね。あるいは大財閥同士が結婚して、有能な経営者が一

族に百人も二百人もいるとかね。そういう系統図みたいなのがあるのでしよう。だからボンヤリとね、「あ、あの親の子をもらっちゃだめだ」とこういうふうなことを考えてるわけで、そういう素朴な考え方から、山岸さんもこういうことを考えたんだらうと思います。

これは現在、山岸会ではやっていないんですから、過去のことに思われるんですけど、案外そうじゃないんじゃないでしょうか。

「優生」の語源は「すぐれたものを発生させる」

さて、優生思想の話に入ります。

私の専攻は、一番最初は中国語学だったんです。中国語の教師をやっていたのが一番長いんです。で、どうしても言葉に興味があるので、「優生」という言葉を調べてみましたのでご紹介いたします。

優生学というのは、「eugenic」という英語がもとになっております。はじめの「eu-」、これは接頭語として、つまり「良い」です。「好」という字でもいい、善悪の「善」でもいいですが、要するに「良い」という意です。反対の概念というのは、「dysgenic」といいます。「dys」のほうは主として学術用語として使われる場合に、「悪い、悪の、劣等な」という意味です。「eu」というのは、ちょうど日本語で「優」なんです。その次の「gen」は、遺伝子のゲノムとかゲンとかいうのと同じです。発生するっていう意味です。「eugenic」の「ic」これは「——的」ですから、つまり「すぐれたものを発生させる」という意味でしょう。

これは、いつ頃できた言葉かっていうと、そんな古いことじゃありません。正確に年代もわかっていません。「eugenic」という言葉ができたのは一八八三年で、ゴルトンというイギリスの遺伝学者の書いた『人間諸能力の研究』という本の中で初めて使われたのです。自分がつくった言葉である、とゴルトンが言っております。

彼は、『種の起源』を書いたチャールズ・ダーウィンのいとこにあたります。ダーウィンが『種の起源』を書いたのものごく刺激をうけて、遺伝学のほうへ入った人です。この人の優生学についての専門の本

は『Essays in Eugenics』（一九〇九年）で、優生学についての唯一の学問的な体系的な本とされておりす。

そのゴールトンはほかにいろいろなことをしているんです。例えば、犯罪者を割り出すのに初めて指紋を採用したとか、最初に書いた本、『天才の遺伝』（一八六九年）は、山岸巳代蔵さんとまったく同じような考え方を示しています。つまり、ヨーロッパの歴史上、調べられる限りの天才的な頭脳を持った人の家系を調べていくと、偉い人ばかり出ているということを『天才の遺伝』で明らかにしたわけです。優生学という言葉は、そういうところからきたわけですね。

いま申し上げたようなことは、みな相互に関連があるんです。例えば「gen」に「e」をつけた「gene」は「遺伝子」のことで、「genome」これは一つの細胞の中にある半数染色体（バブロイド）とその中にある遺伝子とをあわせて言う。だから卵と精子には、それぞれ「genome」は一つずつ、受精卵と体細胞には二つずつということが書いてある。

それから、「genealogical」は、いまの言葉に「logical」という言葉をつけて合成語にします。「家系、家系図、系譜」という時は、「genealogical table」ですね。「genealogical tree」は「系統樹」などみな関連があるわけです。もちろん「generation」もそこからきており、「子供を産む」というのが元の意味で、そこから「生殖、発生、産出、生まれ出る」とこととなり、そこでぼくらがふつうに使う「generation」は「一代、一族、一門」という意味になります。

だから、「generative」は「発生の」とか、「生殖の」という意味になる。そしてもう一つ「general」も、まったくそれとつながりがあって、「一族、ある属」に共通することです。「general」は、具体的に言いと「特殊的、部分的、地方的でない」という意味です。

つまり、優生思想と言った場合には、この「general」なものを優先させる、つまり特殊的、部分的、地方的なものを優先させないという思想とつながってくるんじゃないかと思えます。要するに、優秀なものを発生させるための学問、そしてその全体を優先させるという考え方です。

今度は日本語のほうになりますが、まず優生思想の「生」は「生物」の意味じゃあないかと思うんです。

「生命」の意味ではない。生物と生命とはどこがちがうか。ものすごくちがいます。ぼくは正反対のものだ
と思う。そういうことを武谷三男さんが詳しく書いていらっしやいます。その生物と生命の区別を無視して
優生のことを論じると火傷するんじゃないかという感じがあります。それが一つ。

それから「優」の問題です。さっき「良」とか「好」とか「善」とかいいましたが、良と好は「良好」と
いいすし、たいして意味のちがいはなく、どちらも「良い」です。もう一つの「善」は、善悪の「善」で
「良い」というのとは全然別の意味じゃないかと思うんです、ぼくは。

たまたまぼくは、生活の中の哲学、仕事哲学をやっているんですが、どうも「善い」と「良い」というこ
とは、ちがうんじゃないかと思っています。そこで、「善と悪」ということと、「良いと悪い」とはど
ちがうか、「生物」と「生命」はどうちがうか、などから考えてみたいと思います。

優生保護法の問題について書かれた『あごらミニ』の71号に、こういうことが書いてあります。

「性という最も個人的、かつ人間的な部分にも国家が介入し、私たちの生活を見えない糸でがんじがらめに
していくそのやり方は、まことに巧妙です」とありますが、「性というもの」が、最も個人的かつ人間的部
分と言いきれるかどうか、彼らは全然そうは思っていないわけですから。個人的な面もあるが、しかし国家
とか人類とか、そういうものにも関係してくる。だからこそ国家が介入して当然だと思っているわけでは
う。

それから、ぼくはもう一つの面をも考えるわけです。

個人的、かつ人間的な部分に国家が介入してはいけない、ということはないんですね。これを考える時に
はね、何が悪か、何が善かということを考えておかないといけないんじゃないかと思うわけです。良い、悪
い、それから善と悪、それから生命と生物、優生の優（それは「よい」という意味ですから、「eugenic」の
[eu]）そういうことを、ひとつひとつ当たっていかなくてはいけないと思うわけです。

ヒトと動物はどこがちがうか

私が山岸会を作った老人たちに聞いてわかったことは、山岸さんという人は、鶏の品種改良では大きな成

果を挙げた人なのです。山岸何号を作るとか、一年三百六十五日のうち、三百六十何日は卵をうむ鶏とか、そういうものをつくったわけです。

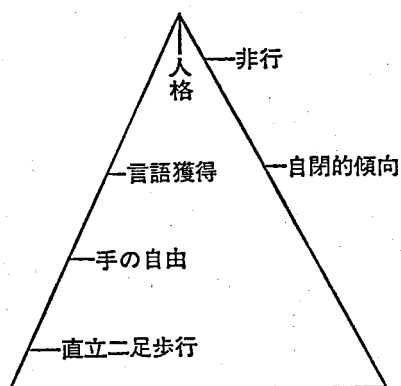
すぐれた鶏がつくれるものなら、すぐれた人間をつくってなんで悪いのか、それこそヒューマニズムだと思っているわけでしょう。ですからその場合、根本には人間と生き物を同じに考えているわけです。これはもつと淵源が古いんです。

例えば、中国の古い思想の本で『莊子』というのがあります。莊子というのは、老莊思想というでしょう。老子、莊子の思想で、莊子の哲学の根本は人間と生物、生物と無機物をまったく一視同仁にみる考え方で、差別というのは人間と生き物を差別し、生き物と無機物を差別するから起こるのだ。すべての差別をなくすためには、人間とそれ以外のものとの差別を取り払わなければいけない、そういうことを言っておりまゝす。無差別の思想、差別反対の思想、それが形を変えて、いま生態学とか人間中心反省などといっています。仏教でも、非常に濃厚に同じような考え方がありまして、輪廻の思想などは、人間が蚤に生まれかわったり馬に生まれかわったりするんでしょう。その間に区別を設けてはいませんね。生き物はみんな殺しちゃあいけない、蟻も踏んづけてはいけないなんて言いますが、それは人間と動物を生物としては同じものであると、そこに目をつけているわけです。

例えば、ヒットラーなんていう人はね、この人は菜食主義者で、絶対に動物を食べてはいけないという信念に燃えて、一生動物を食わなかった人ですよ。だけど、あれだけ大勢の人を殺すのは平気でしょ、まさに優生思想の権化ですね。

優生思想の権化みたいな人に、生き物は蟻一匹殺さないっていう人が多いのです。山岸会なんかでは、アメイバー赤痢菌といえども一緒に共存しなければいけないとかね。まったく人間と他の動物との共存を考えていて、そこがまた人気のあるところでしょう。か。「人間中心ではない」——なんか新しいように思えるところがある。だからこの考え方は、決してヒットラーとか山岸会だけにあるものではないということです。

くわしくは省きますが、仏教思想、古代中国思想、日本の神道思想は、人間と他の生物と連続でとらえています。みんな人間は他の動物とちがうことは承認しますが、さてどこがちがうか、と問われると、人間の



ほうが発達しているとか、せいぜいその程度なんです。人間と他の動物のちがいはどこにあると思いますか。一番ちがうのはどこか、その答えを何と出すかによってそのあとはみんなちがってくる。だからぼくは今日の話は、自分の田圃に水を引いてしまえば「哲学しなければ聞えない」という題をつけたいと思っています。そういうところを押さえておかないと、うまくいかないんじゃないかと思っています。

ヒトの言語と動物のことばは本質的にちがう

優生思想は、インドや中国や日本の古代、もちろんヨーロッパの古代にもありますが、人間と人間以外のものとを区別しない考え方は、さかのぼれば非常に広く普遍的に存在していた。まさに「General」にあったわけです。そして個人より全体を優先させる思想「Generalism」という考え方も、ずっと昔からあります。人間と動物とは本質的にちがうんだ、だから人間のほうが偉いとか、いいとかいうのではないんですね。

そこで、科学的にどこがちがうのかということから考えていきます。そこがずれると、片方は優生思想になっちゃうとぼくは思うんです。

今度の優生保護法改悪のことを考えている人たちというのは、まず根本的なものの考えとして、人と他の動物とのちがいがどこにあるのか、生物と生命のちがいがどこにあるのか、きちんと考えているのか。そのちがいをまちがって選択したことから、末端にいくとそれこそユダヤ人大虐殺というところにまでいってしまうんじゃないかと思っています。

図をかいて説明しますと、だんだん生物が進化してまわりまして登りつめて、あとはどんどん落ちていくという図なんです。人類が直立二足歩行できるようになるまでは、祖先は木の上かなんかに住んでいたらしいんですが、二本足で立って歩くようになった。さらに手の自由を獲得し、そして言語や人格を形成した。まあ、こんな

ふうにしてだんだん発達進化してきたんですね。

だいたい、優生学という考え方は先程申しあげたように、進化論がなくては絶対に出てこない思想なんです。これは、ダーウィンのすごい影響のもとに生まれたのです。十九—二十世紀にはどんな思想家でも進化論の影響を受けてない思想家はありません。

それでは今度落ちていきますと、人格形成ということがなければ当然起こらないことが起こってきます。それは簡単に言ってしまうと、子どもの非行とか大人の非行です。非行というのは読んで字のごとく、非人間的なことをやる。殺人とか傷害とか強姦とか、それから自殺です。人格を形成した人間が非行に走る、人格を形成した人間が自殺する。そういう意味です。だから動物は自殺しないといわれています。象は死が近づくと自殺するっていうのは伝説だそうで、そういうことはないそうです。

それでは言語を獲得するということ、それが失われるというのはどういうことを考えてみましょう。自閉的傾向——傾向などとあいまいな言葉を使ったのは、自閉症はどこで認定するかむづかしく、学説もクルクル変わっている、広く自閉的傾向としておきますが——は、子どもによくみられますが、あまりしゃべらない、あまり考えもしない、コミュニケーションを断つ。大人の場合もやはりそうです。年をとっての自閉的傾向、これが言語喪失の意味であることは、あとで申しあげたい。それから手の自由を失う。直立二足歩行が失われるのです。

これの実例は、一九七八—一九七九年に三十四項目の質問事項をつくって、全国で約八百の小学校、中学校、高等学校にアンケートをしたんです。その結果は、NHKで一九七九年の十月に放映されて大きな反響を呼び起こしました。この記録は『子供の体はむしろ壊れている』と題して出ています。

ここにも書いてありますが、たとえば、足でちょっと石をけろうとしたらすぐ骨が折れたとか、すべり台からすべりおりたら骨が折れていたとか、「そういうことが目立ちますか」というのに対して「最近非常に目立つ」と答えたものが、九〇％あったり、それから、「朝礼の時に毎朝かならず何人もの生徒が倒れますか」とか、そういう種類の項目をずっとあげていったのです。十年前に似たような調査をした人があるそうですが、十年前にはまったくなかった新しい傾向が急に出てきているといえます。それについて、正木さん

という人は、直立二足歩行が失われ、手の自由が失われていくその前兆として整理されています。

ぼくが話したいのは言語の事なんですけれども、一つはね。たとえば、ノーベル賞をもらったフリッシュの『蜂の研究』を読みますと、蜜蜂がダンスをしますとね、西北西の方向に約何キロの地点に、どのくらいの量の蜜源がある、つまり蜜を採集すべきお花畑があると、ダンスで知らせるわけです。しかもそれが非常に正確である。東南、二キロの地点にアカシアの林があるというようなことを教えるわけでしょう。で、そういうのも言語だとされている。つまり、動物も言語を持っている人か非常に大勢いるんです。

そういうふうにして、猿にも言語があるとか、求愛の時はこういう言語を使うということが、生態学者によってかなり詳しくわかっていくわけです。それが人間の言語とどこがちがうかですが、この言語の獲得とか喪失とかいつているのは、そういう動物の言語といわれるような言語の意味じゃあないということなんです。そこが一番重要な点だと思います。簡単に言ってしまうと、動物の場合は個体の情報、人間の場合だったら個人の情緒ですね。情報じゃあないんです。個人の情緒・気持ちを表現することができる。情緒ですから言いかえると喜怒哀楽ですね。

なるほど、すばらしい言語を鳥は持っている、犬も持っている、猫も持っている、蜜蜂も持っている、蟻も持っているんですね。けれどもそこで表現されているものは、絶対に個体の気持ちではない、それが決定的な違いなんです。それでは何を伝えているのかというと、「群れ」に、その「種」に役立つ情報を伝達しているんです。言語は言語でも、その「種」に、つまり「eugenic」の「gen」に役立つ情報を「general」に伝達している。

世間では、言語というのは、シンボル化された、擬声化された情報の伝達手段が言語であるという、こういう言語観を持っています。他の動物もみんな、あれはシンボルですからできるんです。ついこの間、朝日新聞に、チンパンジーにワードプロセッサを使わせるとか、コンピュータを使って意思を伝達させる実験が進められていると出ていましたが、擬声化された、シンボル化された言語は簡単に習得できるんです。

しかしながら重要なことは、それにもかかわらずチンパンジーは、個体の情緒を伝達することはできな

い、これが重要なことなんです。だからふつう、ぼくらは擬声化された、シンボル化された情報を伝えるほうが高級だと思っているが、そうじゃあないんです。その程度ならチンパンジーくらいになると、動物にも習得できるんです。それにもかかわらず、人間なら誰にでもできる、自分の気持ちを伝えることはできない。自分の気持ちを伝えられなくなるのが、自閉的傾向、言語の喪失になるわけです。人間の非人間化です。もう一度言いますが、シンボルによる情報の伝達が言語であるとするならば、例えば『チンパンジー言語を習う』という本によりますと、バナナを表わすのに黄色でもないバナナの形もしていない、例えば水色の三角のカードを使って「これはバナナという単語だよ」とこう教えると、チンパンジーは覚えるわけですよ。すると「私はバナナを欲する」と、ちゃんとカードを使って並べられるんです。そしてバナナを指して「これはオレンジですか」と、こちらでカードを並べてやると、「これはオレンジではなく、バナナである」とカードを並べられるんです。だからそんなことなら、チンパンジーにもできるんです。しかし個体の気持ちは伝えられないということですね。

「社会」という言葉も、「動物の社会」とか、「蜜蜂の社会」とか言いますが、その社会というものが「種」に有効な情報を伝え合える範囲の社会ということならば、人間も社会を持っている、猿も、蜜蜂も社会を持っていると言えるんです。しかし、そういう意味でいいんだろうかということなんです。

人間で言いますと、いま遺伝生物学が非常に発達していますので、ミクロでいえば、人間と他の動物との間に区別はないんです。ご存知のようにどちらも二重螺旋線（らせん）の秘密で解明された、たんばく質の情報为基础になっている。だから遺伝学をちゃんとやった人から見ると、人間と動物との間には区別がなくなってしまう。だからそういう考え方はたいへん多いのです。フランスのパスツール研究所の所長で遺伝生物学でノーベル賞をもらったジャック・モノーという人が『偶然と必然』という哲学書を書いたのです。むつかしい哲学の本なのに三十万部も四十万部も売れ、パリでは行列ができたといわれているほどです。日本語版もみずす書房から訳出されて何十版も版を重ねていますが、この本では人間と動物の区別がまったくない、よくない本で、武谷三男さんが徹底的な批判をしています。

優生思想というのは簡単に言ってしまうと、こういう「人間の言語とは何なのか」については考えていな

いのです。動物の言語と同じだと思っています。また社会とは何かということも考えていません。人間と動物は同じだと思っています。そこがまずちがう。人間の言語、それが人間を人間たらしめている一番の基礎だとばかりは思いますが、それは次第に失われつつあるところに優生思想があると思います。

物の存在を証明するには特定の「時間」が必要

次に優生思想を支えている哲学の第二についてお話ししましょう。

生物、無生物に関係なく「物」があるとしています。ここにピーナツというものがある。これと同じような意味で「人間」というものがある。あるいは私という人間があるとしています。その時、その物の運動について考えてみると、ピーナツだったらどういふことが運動になるでしょうか。徐々に腐敗しつつあるかもしれない。それから私のほうは、いくらじっとしてたたて体の中では細胞がめまぐるしく動いておりますね。また、月とか太陽とかいったものも運動しておりますね。しかし、常識では、物と運動の關係は偶然的なものと思われています。動かなくともその物は物だと、そういう考えです。たまたま動いているにすぎない。例えば、犬がここに寝てるとするでしょう。寝てたて動いていたって、もちろん犬だと思わけては。例え

そこをちょっと進めます。どんな物も瞬間的存在を持つ、こう言いかえてみます。つまり時間というのはいくらでも短く分割することができるはずですね、理屈では。そうすると、どの瞬間においても人間は人間である。ピーナツはピーナツである。水素の原子は瞬間においても水素原子である、人間は人間の諸性質をどの瞬間にも持っている、水素原子はどの瞬間にも水素の性質を持っています、決して他の物、例えば窒素ではない、こういうふうになら最近まで考えられてたんですね。

ところが二十世紀になり電子論が登場してから、すべての運動と物はまったく偶然的なものではなくて、必然的なつながりを持つ、そしてすべての物は瞬間的にはそのものではないっていうことになったのです。つまり電子の活動というのは、非常に目まぐるしく、素粒子の段階になりますと一秒の十マイナスイナ乗というような短い瞬間に、ある素粒子は生まれ、消えてしまふんです。定義風に言ってしまうと、何らかの物が存在するということは、その固有のリズムを持った運動が、一サイクル終わったところで言えることである。

だから、その特有の運動が行なわれるだけの十分な時間の長さが、どんな物の存在にも必要である。少しむつかしい言い方になったかもしれないが、要するに瞬間的には、その物が何であるかわからない、ということが電子レベルではわかつてきたのです。

そのことをわかりやすい例を使って説明するとどういうことになるか。たとえば、人間の動作というものを考えてみますね。よくやるでしょう。片手を上に挙げてなぐるような格好をする。そうすると相手はなぐられるかと思つて防ごうとする。ところが挙げた手はなぐるためでなくて、頭をかくために挙げたんです。でも片手を挙げかけただけじゃわからないから勝手に誤解してしまいます。頭をかくて初めてわかるわけです。瞬間的には、片手を挙げたところを写真にとると、誤解する人は誤解しますが、実は何の動作かわからないんです。だからスナップ写真でパツととると、死んだ人か生きてる人か、眠っている人かよくわからない。場合によってはスナップ写真では人形だつてわからないかもしれない。

そこに物がある。人間がいるということがわかるためにはその固有のリズムを持った運動が、完結するまでの長さが要だということなのです。みんなそれぞれ、その物の存在には特定の時間が、実は必要だと、単純なことですけれどそう言えます。

そこでなぜ、これが優生思想の哲学と関係するかと言いますと、優生思想の哲学は、これは瞬間的にもその物がなんであるか、もうわかかと思つている思想です。そういう常識的なものの見方を背景に持っております。さっきいったゴルトンという人は十九世紀の人で、ダーウィンと同世代ですからそう考えたのも無理もないんです。科学はそこまで発達しておりませんでしたから。

胎児は「物」か「人間」か

優生思想の考え方からしますと、たとえば三か月の胎児がいるとすると、この三か月の胎児が人間であるかどうかを、どうして判定しますか。あるいは零歳児、これを人間であるかどうか、どうして判定しますか。植物人間はいつたい人間であるかどうか、非常に重い障害で、例えば脳がない、これは人間であるかないか、どうやって判定しますか。こういうことが起こるでしょう。しかし、彼らはこれをいとも簡単なことで

あると考えるのです。

それは、例えば水素の原子だったら、それを成り立たせている諸要素（素粒子理論というところの）のうちどういう要素が、どんな大きさのものがどれだけ、どういう形で組み合わされているかということがわかれば、それで「あつ、これは水素」「これは窒素」とわかると思っているが、今はそうじゃないことになったんですね。つまり、優生思想のもとになっている物の考え方は、物か人かすぐにわかると思っている。だから、あの人たちの場合でいうと、精子は人間じゃあないが受精するともう人間なんです。もう彼らには簡単に判定できるわけです。受精してもまだ細胞の数は、分裂して三十二個だとか、六十四個ぐらいの段階では、どこが頭になるやらわからないでしょう。そこで、ある部分を傷つけたら頭がなくなつたとすると、もうその段階になつたら人間だといふかもしれない。けれども果たしてそういうことが言えるかどうか。

では、もう一方の見方で、人間とは何であるかを考えてみますとね、そこでは人間であるかどうか可能性においてしか存在していないんです。一歳でもそうです。二歳でも人間かどうかわからない、人間じゃあないと判定することはもつとできない。しかし、人間になる可能性はありますね。

言語獲得っていうのは胎児にはまだないですね。さらにもうちょっと上の段階の人格——人格の定義はむづかしいですが——となりますとその一部分であると考えられる人権について言えば、一番最初にアメリカの独立宣言の中で人権という考え方ができて、自由、生命、幸福の追求という柱がうち出されましたが、たとえばその幸福は何で計ることができるか、優生思想の側は、幸福というものを——これを「もの」というと抵抗あるかもしれません——を、瞬間的存在を持つと考えているから「ああ、幸せだな」と瞬間で計れると彼らは思っている。しかしアリストテレスはすでに「幸福というものを計るのに必要な時間は、その人の一生である」とこう言っています。

幸福であるかどうかは、生涯の終わりにわかる。その生涯が三歳かもしれないし、八十歳かもしれないけれど、それではなくてはわからない。その生涯を通してみて「ああ、人間的であった、人間らしい人間であった」とか「だいぶ非人間的なヤツだった」とかいう評価が決まるだろうと僕は思います。だから、この点に

ついで言いますと、人間であるかどうかということ、幸福であるかどうかということを、山岸さんであつたら、醜女、醜男に生まれたら即不幸、とこう決めてるわけでしょう。

ぼくなんか先天的に胃腸が弱かったし、結核になったり再発したりで高等学校もやめました、こういう病氣など持ったら不幸になるにちがいないというのが彼らの考え方です。まるでリトマス試験紙を入れるとバツと「ああ不幸だ」とか瞬間的にわかると思っている。幸福や不幸のようなものを判断するために、絶対に必要な時間をまったく考慮しないんですね。

胎児なら、まだ人間じゃないということも言えませんが、胎児ならすでに人間であるとも言えない。で、そういうことを考える基礎には、生物と生命についてのあいまいな観念があるんじゃないかということなんです。

「生命の尊厳」ということ

そこで、生物と生命なんですが、いま分子遺伝学は非常に発達しましたので、ジャック・モノーとかルヴォフとかノーベル賞をもらったような人たちが、それに基づいた奇妙な人間観というか、哲学を発表してそれが受けているというのが現代です。

それを一言で要約してしまうと、生物で一番重要なものは何か、それは複製ということだということです。つまり人間が同じ人間の持っているすべての特徴、例えば目は二つだとか鼻の穴は二つだとか、手足の指は五本だとか、心臓は左についているとか、いわゆる先天性精神障害を持たないとかそういう同じものを複製するという、これが一番大切だと、そう考えるわけです。

たとえば、ある程度までいくと成長も止まるなど、人間は極めて精密にプログラム化されていますが、どの人間も人類という種として、同じであって、猿の子は猿、兎の子は兎、蛙の子は蛙、というように、その複製機構が一番重要だというわけです。これは生物学の立場ですが、そうすると人間と人間以外のものの区別がなくなっちゃうんです。

つぎに、今度は生命ということを考えてみますが、生命の一番大事なことは何かというと、一番重要

なことは「死ぬ」ということです。

生物では死は問題になりません。複製が問題なんです。だから個体が死んでも同じものが複製されていけばいいんです。人類全体の種というものが複製されていけばいい。猿にとって一番重要なのは、猿という種の存続であると勝手に人間が考えているわけです。猿はそうは思わないでしょうが。では人類も永遠に生き残るのがいいのか。

それは個としての人間尊重の哲学ではありません。人間の言語は、個人の情緒を伝えるという機能を獲得していたんでしたね。個人の喜怒哀楽から見たら許しがたいわけです。いくら「種」で存続したって嬉しくないんです。それは悲しい、腹が立つ。個の立場に立ってのみ生命の尊厳ということが言われるのです。

生命の尊重ということが、優生保護法改悪論者からも言われるそうですが、その時に彼らが考えているものは存続する種なんです。つまり生物としての観点なんです。一人一人はみんな死ぬというそのことを重要視してないんです。

ぼくらはみんな死ぬけれど、一生かけて幸福になろうとしているわけです。一生かけて人間になろうとしているわけですね。個になろうとしているんです。なるほど、ぼくらは直立二足歩行もできる、手の自由も、言語も獲得し、それで人間になろうとしています。一番大事なのは人間になることなんです。死ぬまでに、ね。一生、一つしかない。それが生命尊重ということだと思えます。たとえば自分の子どもに、非常に重症な――優生保護法で規定されているような――、つまり任意に中絶してもよいというような障害があるとわかっていてもあえて産む、そういう選択が可能なわけですね。一生をかけて一緒に幸福になろう、こう決めたとすれば、それが生命の尊厳であり、つまり人間尊重です。

それに対して、果たして人間以外の動物には生命の尊厳があるか、ぼくはないと思う。生物としての存続はある。個体の生死もある。しかし生命の尊厳はないと思います。

また、ちょっと『あごらミニ』から引用させてもらいますとね、みんなたいへんおもしろく読ませていただいたんですが、山内さんという方が書いている「私たち自身の命と暮らしを」というのがありますね。この中にこういう一節があります。

「ひとたび転勤命令が出れば、一週間後に本人は任地へ、二週間後には家族が身の回りを整理して、と、それまで構築してきた生活をまるごと壊される形で、泣く泣く転居していった友人を何人も見てきた。私自身、夫の転勤という事態にどのように対するかを突きつけられている。私自身の経済的自立も含めて、日々混沌の中にいる。やっとつながりのできた周囲の人々と、様々なことを試みていく中でこそ、少しずつ開けてきている気がする。これ以上転居を繰返し、周囲とつながりのないまま、子どもを三人、四人と持ったとしたら、私の人生は切れぎれの惨たんたるものになるばかりか、もし病気にでもなったら、それはもう『生き死に』の問題ではないだろうか」

ここに「生き死に」という言葉があります。これが生命の問題だと思ふんですね。これを普通の言い方をしたらどうなるか、死んだも同然、命が失われる、と言うと思います。ここに書いてある、人生が切れぎれになったということなんです。そのように命という言葉を使った時には、人間の尊厳、それがなくなったら人間じゃなくなるってことだと思ふんです。それでも、人間としてそんなこといっても「お金が入ってくるのならいいじゃないですか」などと、そういう人もいるんですよ。一番自分が命だと思っている仕事を奪われ、死んだも同然と思っているのに、ですね。

そこには、生命と書いてはいない。しかしその前には体制側が「生命V」という語を使うところ書いてある。「村上正邦議員の『優生保護法の改正をなぜ急がなければならないか』を読んだ。そこには、産業社会ひいては国家に貢献する強健な生命と、それを再生産する生命だけを尊重(?)しようとする意図が明確に表われている。……彼らの言う「生命V」には、人間らしく暮らしたい、生きたい、と願う「生命V」は含まれず、国を富ませる手段としての頭数でしか、人間がとらえられていない」

つまり、村上議員たちのいう「生命V」の観点からは「転勤命令を受けても、両親や妻に相談してから、と答える」「社の方針が意にかなわない場合はさっさと退職し、転職をはかる」のはけしからんというのでしょう。「過保護人間が多くなっている」のが、優生保護法を改正しなけりやならない理由なんです。同じ生命というコトバを使っているでもその意味するものは正反対なんです。この場合は「社」が問題になっているでしょう。会社は永遠ですっていうのと同じなん

です。会社は永遠ですというとかバカバカしく聞こえ、人類は永遠ですというとか非常に高尚に聞こえますが、実は同じことなんです。もう少し前の時代には、家系、血統を絶やさないために、個人はみんながまんしろ、したいこともするな、特に女性にはそれが強要されたわけですね。

最初、ちょっと申しあげましたように、辞書によると、「General」とは「特殊、部分的、地方的でない、常にその群全体、全員にかかわる」そういうこととあるので、これは「general」な思考なのです。そういうところでは命は問題になっていない。生命の尊厳と言っているけれど、その内実は「生物の尊重」なのです。だから非常に非人間的な哲学がそこにはあるんじゃないかと思われまます。これは三番目です。

「良い」「悪い」と「善」「悪」はちがう

それから四番目に、ここのとこで国家論ということになるんですが、その前にちょっと「良い、悪い」ということを、かたづけしておかなくてはならないんです。

中国語で「良い」というのは「ハオ」っていうんですよ。「ニイハオ」のハオなんです。これは「都合がいい」という意味です。たとえば、「この道はハオツォ」といいますと「この道は歩くのに都合がいい」という意味で、訳すときは「この道はいい道だ」と言うんです。歩くのに都合がいい、でこぼこがない、舗装されている、そういう時は「ハオツォ」というのです。

この意味の「良い」というのは、実は利益がある、ということ、得するっていうこと。そういう意味で日本の良いという言葉も、ごく普通に使われています。「良い」っていうのは「都合がいい」で、この系統でみますと人権っていう考え方も都合のいい考え方です。被支配階級にとって、弱者にとって都合のいいことなんです。福祉政策、都合がいいんです。子どもを産んでも教育費を国で出してくれる、老人は国が世話してくれる、老人ホームを作ってくれる、都合がいいんです。そういう意味で「良い」のです。だから「悪い」っていうのは「不利だ」っていうことです。そういう意味の「良い悪い」があります。このことを、ぼくはちっとも批判するわけじゃありません。ただそういう「良い、悪い」と「善悪」はちがうことだと思っっています。なぜ、いまそういう議論を出したかといいますと、これも『あごらミニ』に、「不良なる子孫をつく

らないために」その優生保護法が作られたとあるでしょう。「不良とは何であるか」ということを、日下恵津子さんという方が書いていまして、「ここである不良とはなにか、誰にとって不良なのか」とありますが、その場合の良い悪いというのは、都合いい、悪い、利益、不利益でしょ。支配階級にとって不利益とか、会社にとって不利益でしょ。

つぎに、「善悪」ですが、これも結論だけを言ってしまうと、「善」というのは、全体と個人——全部人間のことなんです。この全体というのは二人でも、三人でもいいんです——の一致です。全体と個人の利害が完全に一致することはないでしょう。人間は言語を獲得していますから、私はこれがいい、私はここに腹が立つ、私は悲しい、私は楽しいなどとそういうのをぶつけ合うわけですね。しかし、個と集団の利害の完全な一致点を見出して、それによって行動することを「善」と呼びます。この定義に従いますと「悪」が極めて明確に定義されます。全体の名において、個の同意を得られないことをやったのが「悪」なんです。全体の同意が得られずに、個の情緒、思想に基づいて他を傷つけたら悪なんです。だから二人の場合だったらどちらの意見を独断専行しても悪なんです。

例えば、強姦がなぜ悪いかと言いますと、片方は同意していないからです。殺人の場合もそうです。傷害の場合もそうです。殺されたり傷つけられたりすることを、片方は欲していないんです。「善悪」とは、都合のいい、都合の悪いということと別のことであると思います。これは、ヘーゲルが善悪について明確な定義をくだしているの、哲学史のほうでは常識ですが、日常生活では全然常識になっていませんね。

善とは都合のいいことの最大範囲のうんと広いものだ、都合のいいことの延長なんだとこう思っています。もう少し限定すると、優生思想を持っている人たちの根底にある倫理観というのは、全体の和が善なんです。彼らの善は「和を以て尊しとなす」ですね。これはもちろん道家の思想です。日本固有の思想でも聖徳太子の思想でもないんです。

それではその「和」とは何かというと、圧倒的多数の意見が同じ場合は、少数者が妥協すべきであるということですね。少数者が半数に近いような場合は、両方から妥協すべきであるという考え方が根底にあるわけです。だから日本で伝統的な村、あるいはそういう日本の集団の中で、第一に尊重されたのは、そう

いう「和」です。だいたい日本の国名を「やまと」っていうでしょう。「やまと」になぜ「大和」という漢字をつけたのか。それは道教で一番大事な徳性が「大和」だからです。道教から持ってきて「やまと」と読ませたのです。例えば、家族が五人いてそのうち三人か四人が同じ意見なら一人はあきらめる。二人、三人くらいに票が割れたら両方とも少し妥協せよ。片方が大きく妥協したのに片方がまだつっぱっていると「おかしいんじゃないか」となるわけですね。そういう考えが根底にあるのです。そのようにして一致点を見出したならば、あとはその一致点について誰も留保は許されません。それに反対してはならないということなんです。これがふつうぼくらの倫理観です。

この日本人の代表的な、「General」な倫理観に立った場合、少数者がみんなの一致点に不服で、ひき続き反対するというような自由は認められない。つまり一致点に立つ行動に参加しない自由を「悪」としているわけです。そこが西洋の考えとはちょっと違います。ヘーゲルが考えたような善悪観に従うと、実際に行動する場合についてまで、完全に同意が得られた場合だけ「善」なんです。

そういう倫理観の立場からすると、人権という考え方がそもそも「必要悪」と言えます。憲法とか、世界人権宣言とかそうしたものも含めてです。すべて国家に我々が期待することは「必要悪」なのです。なぜかというと、例えば強姦事件があったとして、強姦した人は罰せられたくないですよ。したくしてんだらうから。しかしされたほうは、もう表現することができないくらい怒っているわけですね。その場合、国家が強姦者を罰するとしめすと、さっきの定義に従えばそれは「悪」です。片方の強姦者の意志は無視され、完全な一致点が得られていないんですから。

しかし、ぼくらはそのことが必要であると判断します。なぜかという、そうしなかったならば弱者は人間になれないからです。悪であることはわかってるが、いま必要である。そういうもんだ、とぼくは思います。

優生保護法の場合も同様に言えます。他人に堕胎を強要することは、明白な悪です。こういうものは罰するべきだと思います。ただしその罰することも善ではない、善だからやるのではない。やはり悪なのです。僕はちょっとおかしい質問を自分で自分にしてみました。「善はいいことか。悪とはいいいことか」善はい

いことかどうかわかりませんね。人によっては善は大へんよくない。独裁者ので、皆を自分の意のままに従わせようと思っている人には悪というのは都合がいいです。そうしてみると悪はわるいかどうかかわらない。善もいいかどうかかわからない。僕は善悪と、良い、悪いは別のことだと思っているんです。

こういう立場をとりますと、妊婦の羊水をチェックして、先天性の精神異常があることがわかったからもう産ませない、とそういうことは強く批判します。「本人が受けたくないという検査なんか、受けさせるな、そういうことを強制するのは悪だ」そういいます。でも、経済的理由の項目だけを削除するということについては、何も判断できません。ただ多数決で強行という形でその法律が作られるということについてはそれはすべて悪である。それも不必要悪ですね。

現在のぼくらの生活では二人の間ですら「善」はなかなかむづかしいんです。それにくらべて「悪」の方は実に簡単にできます。不一致であるにもかかわらず、さっさと実行しちゃう、こんな簡単なことではない、悪は実にやさしい。

そこでぼくらにできることは、善を求めてしかし善は実現できず、悪だけはしないで済ませる、これはできることだと思う。これは善でも悪でもないんです。つまり意見の一致が得られない場合には、得られないことを確認するだけでいいんです。同様に、国家についても一番重要なことはそれだと思えます。なぜかというと、二人の間ですら善は非常にむづかしいんです。もう三人になったら完全な一致がいかにもむづかしいか。それには最大限に言葉を使わなくてはならないでしょうね。心というのは、絶えず細かく変わるんですから、その変化をもまた絶えず伝えてなければならぬ。昨日と今日はまたちがってしまいうから、そういう微調整をしていくことが、二人でさえむづかしいのですから、一億一千万人となるとできるはずがありません。だから国家のやることは九九%、悪なんです。そしてそのうちのごく一部は必要悪なんです。例えば人権を守らせるような法律とかはね。

人権と国家

さて、最初にちょっと考えたのですが「性という最も個人的、かつ人間的な部分に国家が介入」するのは

けしからんということは言えないのじゃないか。全部に介入してはならないということはない。介入して結構なんです。なぜならば、人権という考え方には、この国家介入の要素が含まれているからです。

これは、アメリカの独立宣言からその後の人権宣言と呼ばれているものの全部、『世界人権宣言集』（岩波文庫）に収められたそのどれを見ても、人権思想が持つ一番重要な柱は、人権を犯したものに對しては国家が罰するという考え方です。

たとえば強姦した人、殺人者など、そういうふうな形で基本的人権を犯した人には、それに対して国家が処罰する。これが人権思想です。だからどんな人権思想にも、最初から国家の介入が含まれています。ですから選挙権というのはどういう意味かというと、人々を強制的に投票所へ連れて行って、さあ選挙しろ、とするのじゃなくて、選挙権が保証されているということは、選挙妨害をする人、投票所へ行こうとするのを暴力で止めようとする人を国家が処罰することを言うのです。

それが人権でなければ、国家の介入は必要としません。ぼくらが何を人権と認め、何を人権と認めないかということは、それを侵された場合、どうしても国の力で処罰してもらいたいと思うこと、それに限られるわけです。そうでないものは、人権と呼ばないほうがいいと思えます。これは人権の一つの意味です。で、もう一つの人権の意味は、個人の生き方、具体的に言うところと幸福です。「生涯を通じて、幸福を追求する」という、その人間的な活動そのもの」です。これは普通、人権と呼ばれているけれど、生命の尊厳とか人間の尊厳とかいうこととはほとんど同義です。しかしこれは、国に処罰を要求することとはちがいます。つまり国家が介入すべきものではありません。これは人権と呼ばないほうがいいんじゃないでしょうか。それこそ人間の尊厳、生命の尊厳とか、あるいは善の追求とかでいいんじゃないかと思えます。

優生思想の持ち主に宗教家が多いでしょう。まだ国じゅう全部一つの宗教になっていませんけれど、できればあわよくば、国中全部同じ宗教で統一して国家宗教にしてしまいたいと思っている人たちから、発想が出ているというのが特徴です。要するに彼らはどういう国家が望ましいかというところ、ヒットラーや山岸会も同じですが、悪そのものの国家を目指している。その悪は先程から言っている善悪の「悪」です。

ついでに言いますと、マルクス主義の国家観というのは、国家というものはその本性上悪である。つまり

抑圧的であることを認めているんです。その点では一つ穴のムジナなんですが、多少ちがうところは、プロレタリア独裁というのは最後の悪で、この最後の悪によって悪を制し、それによっていっさいの抑圧というものがなくなる。殺人も暴行も強姦もなくなる社会がくるんだ。こういうところがちがいますが、要するに国家というものは、少数意見を抹殺してしかるべきだという考えが根底にあります。だからソ連や中国などで、むしろ非常に大量の人権抑圧という事態が起こるのも、根本的には哲学の問題でしょう。

その上で優生思想の持ち主たちは、いわゆる健康者、金持ち、要するに力のある者、そうした多数者の支配を勝手に「善」とよんでいます。そして多数者つまり金持ちなど力のある者の利益を「人権」と宣言するわけです。その対極にある人々の利益を反国家、「悪」の名義で侵害しようとするわけです。社会主義の国は多数者であるプロレタリアートの利益、これを「善」と宣言しているところがちがいますが。

多くの国家観としては、国家はマルクスが考える通り、「いかなる善もなし得ない」、そう思います。大勢の人間の完全な行動の一致は期待できませんから、何かやれば必ず「悪」になる。ただし「必要悪」としてね。殺人者や強姦者を処罰するというようなことだけをやる国家（ほとんど夜警国家に等しいが）だけ認めて、国家は倫理から切り離すべきだと思います。だから国家に関しては部分否定で全面否定はいたしません。必要悪と繰り返し言いましたけれどね、この必要悪は弱者が人間になるために必要なのだと思います。これも『あごらミニ』を読んで感じたんですが、「いま、早急になすべきことは何かと言えば、当然ながら福祉政策の充実だと思われる」と福祉政策のことがでてきますが、ぼくがいま考えているのは、多数意見にはならないと思いますが、国家は絶対に善は成し得ないんですから、福祉や教育、そういうことは国家がやるべきことではないと思っています。刺激的な言い方ですが、福祉予算、教育予算は零でもいいとぼくは思っています。

なぜかと言うと、個人や企業（学校や国家も）から援助を受けることは、非常に気が重いです。縛られるし抑圧されます。感情面でも割切れない。大部分の人がそれをとても都合のいいことだと思っているからそれに従っているだけです。

最初に話した「時間」のことにもどります。いま、援助を受けるのはいいことだと思っているんですね。

たしかに年間何万円かの援助を受けていて、五年とか十年とか、そのくらいの幅でみると得をしていると思えます。それは悪かもしれないけれども、大へん良いこと、得をしたところ思っているんです。けれど少し長い時間の幅で見ると、得かどうかわからないんです。たとえば、明治以来日本人は貯金で得したことはありません。貯金よりもインフレのほうが必ず大きいし、戦争が起こってバアになっちゃうんです。

もしも、福祉予算や教育予算をたくさん求めても、それを執行するためには行政的に膨大な人員がいるのです。さらにそれを管理監視するための膨大な人員が必要で、それはいうまでもなく国家の力を増大させるんです。その国家の力は、それによって一部の人間の気持ちを押しつぶす「悪」の力なんです。悪に手を貸すもんじゃないかという気がするわけです。

[Q & A]

A 学者とか評論家の方のお話を聴くと、いつも全くとんでもないと思うんです。今のお話で、自分の頭の中では漠然とあるものがかかなり整理されたところもあって、とてもよかったと思っているんですけども、それじゃ私がこれから生きていく上で、現実にはどうしたらいいんだ、というふうに具体的なものを模索する時になると、すぐにぶつかるとですね。思想的には、しごくもつともだと思ひ、賛成できる面もたくさんあるわけですが、悪く言うのと、「ことば遊び」と言えなくもない。とても失礼かもしれませんが……。

理想と現実には確かに違うにしても、理想は掲げてなきやいけない。でも現実には目の前にあるわけで、そういう部分に関してはどんなふうに考えていらっしゃるのか、ぜひお聞かせいただきたいと思っています。

☆ 『あごろミニ』71号の編集後記に、「改正側の論理に直感的におかしいと感じるのは簡単だ」が、それに対する反論が、説得力を持ちえないのは、「表現の未熟さ、ひいては論理的な考え方の未熟さ……」とありますが、全くこのとおりだと思います。

この表現というのは英語のエクспレッション、——インプレッションの反対語ですね。で、インプレッションというのは、要するにはたから入ってくるんですね。ぼくみたいなおかしいことを言うヤツの言論が

ジャンジャン耳から入ってくるわけです。いろんな本だとかいろんな意見が。こう思え、とか、さあ反対しろとか、プレッシャーかけてくる。インプレッションが多すぎるんですよ。ここで大事なことは、「表現」のほうなんです。出さなきゃいけないわけです。そして言語とは何であるかと言うと、エクスプレッションなんです。その道具なんです。エクスプレッションすることが言語活動なんです。だから何をしなければならいかって言ったら、あなたのものを出すことしかないと思います。だれの耳にもよりでつかく入る、そういう一般理論を期待しなきゃいけないんです。それはファッショ的な考えですね。

大事なことは、何を入れるか、じゃない。何を出すかなんです。それが人間の「表現」なんです。ぼくはこういう所へ来ましてね、言いたいことを言っているわけです（笑い）。でも、それはね、ぼくさんの運動なんです。活動なんです。

B 個と善と、それから種と命と、その区別がスッキリした感じがします。そしておそらく個々の行動を起こしていくのは、やっぱりひとりひとりが感動しなくてはならないのだということがよくわかりました。

山岸会には、あるユートピアを感じる人も少なくないと思います。今までの社会通念としての女性と男性の役割分担が、かなり解放されていると期待していましたが、あまり実現されていないとするとそれはなぜでしょう。子どもを産むことも自分で決められないのですか。

☆ まず、山岸会の中で結婚するには、その調正機関の命令によって結婚させられるのです。不適当と認められることもあります。つぎに子どもを産む場合は、必ず産んでいかどうかを研鑽会が調べ、全員一致が出たらよいことになっています。実際の研鑽会というのは、先程ぼくが言いましたほんとうの「善」をめざすようなものだと思っていましたが、現実では昔の村の寄り合いのようなもので、大多数の人の意向には少数意見は自分を抑えて従わなくてはならない、そういう一致を作り出すための手続きに外ならないもののようなのです。

C ユートピア思想にはたいいていの場合、優生思想がありますね。

☆ そうですね。プラトンから始まるのでしょうか。聖書にもありますから、どちらが先でしょうね。

フリーエとかトーマス・モアのユートピアもそうです。モアの方は少しひどいでしょ。夫婦になろうとす

るとまず素裸になってお互い見合いをしなきゃならない。馬などと同じように。そうして裸でしつかり調べて、そのユニットピア集団の永遠の存続のために、劣生分子を排除しようということですね。

D ヤマギシズムの優生思想についてうかがいましたが、ご自身は山岸会の中で活躍なさりながら何も気づかれませんでしたか。あるいは若い学生や左翼運動家などには、彼らの中に選民思想というか優生思想を受け入れる素地があるんじゃないでしょうか。

☆ ぼくは最初のうちは、ヤマギシズムの優生思想のようなことに、はつきり言って関心がなかったのです。以前、八個人史を聞くVという会をやったとき、もとの山岸会のメンバーを次々に呼んで、「どういっわけで山岸会に入ったのか」「どういっわけで抜けてきたのか、どういっ所に一番反感を持ったか」というようなことを話してもらったことがあります。その中で一番ショックキングだったのは、大阪案内所で強制的な命令結婚をさせたことでした。いやいやながらも命令です。

△ 原理研究会Vとたいへん似たところがあるんですが、山岸会は三十余りの支部というか共同体が、かなりそれぞれ独自の実験ができるようなシステムになつてゐるのです。優生思想も山岸已代蔵直系の考え方の人と、若くて組織の命令には絶対服従タイプのメンバーとの考えが一致して、強制的に結婚させたりしましたが、結果としてはうまくゆかず、破れましたね。

ぼくは優生思想にだけでなく、非常にたくさん疑問を抱いたのです。一番多いトラブルは、働かない者、働けない者に対して過酷すぎるのです。外からは見えない障害——たとえば精神障害のような——を持った人が、朝おそくまで寝ていたり作業に出ないと、幹部がズラリと枕もとに坐っておどすとか、初めは信じられないようなことがいろいろあるんです。それも、進歩的な教育雑誌に関係していた小学校教員などが、一番執拗にやりましたね。左翼運動家の中にも選民思想があるのですね。

D すると、優生思想の基本にはやはり生産第一主義があるのですか。

☆ ありますね。人類とか日本とか山岸会とかいっう組織全体の生産をあげるということです。養鶏が一番もうかるので「花の養鶏部」といっう言葉がありましたね。同じ作業でも、炊事や洗濯はもうけにつながらません。洗濯の部に配置されている男子は一人もいませんでしたよ。育児は保父ができた段階で、男性も配置さ

れ、炊事もごく少数の男子がおります。四百人くらい一緒に住んでいますから、洗濯物も膨大にあり、天気よくない日の乾燥室なんか、終日地獄のように暑い。

E 女性から文句は出ないんですか。

☆ 文句のある女性には、山岸会から出されるか、自分から出てしまいます。中での改革なんか考えられませんが。

有吉佐和子さんの『複合汚染』という小説が連載され始めた頃から、山岸会の生産物を組織的に購入しようという、進歩的な人たちのおかげで、急激に増産するようになり、絶対に休めなくなっていました。朝四時頃から夜九時くらいまでが普通の日の作業時間です。

F そこでは、「人間」はどういうふうと考えられていたのですか。

☆ 新人類、あるいは生物学上の「新種」になるべきものと考えられていました。観念的には、自分たちはそういう人類のための「種子」となるんだ、という感じですね。

F 女の人は劣生的な位置づけだったのですか。

☆ そうですね。確かに洗濯は女性だった。炊事もだいたいそうだし、育児も九〇%以上女性がやってたようです。ただ、あそこには家事が大ざらいで外の仕事が好きだという女性が大勢いるんです。そういう人たちが養鶏をほとんどやりました。養鶏部は男子が少数です。うたい文句としては、老人の世話も、子供の世話も、炊事、洗濯もしなくてよい、養鶏だけ。好きなら農業などやってればいいというんですがね。幹部の人が、消費者団体とか婦人民主クラブの人とかに自慢していたことは、集団保育で、生まれて間もなくでもみんな面倒みるから、母親がほとんど出張もできるなどということでした。便利や自分の都合だけを求める男、女性のエゴが、女性の劣生的な位置づけを下から支えていたといえるでしょう。

山岸会というところは、配置転換をよくするところで、将棋の駒のように人を動かすのです。一度に一万から二万羽も鶏がかえるくらいの鶏舎を三日くらいで建てたりするものですから、何百人かの働き手を人海戦術のようにどっと移動させたりもするのです。何百人もの人が朝早く起きて鶏舎を建てるわけですから、そりゃ壮観です。大学の先生がゼミの学生を連れて見学に来て、そういう所を見せられるでしょう。そうす

ると、話に聞いた人民公社ってのはこういうのでしょね、などとみんな感激して帰ってゆかれます。

G 先生は五年もいらして、どの辺で会から出ようと思うようになられましたか。

☆ ぼくの場合は、幸福学園という独立王国を作っていました。他からの影響はほとんど及ばないのです。その点では暮らしよくて、いわば強者の楽園といえます。ぼくにとって都合のいいところだったので会の矛盾に気づかなかったのです。初めの三年くらいは独立王国を作る過程でした。それから全国を毎日遊説してまわっていました。幸福学園という義務教育にとられないフリースクールをつくろうということです。

それから、山岸会に入るには全財産を必ずお金に換えてから、会に入れるのです。ですが、その頃は印税が入りましたので個人の口座を持ち、税金も自分で払っていました。山岸会で、そういう独立王国はよろしくないと、強硬な意見があったそうです。本部へ配置転換になり、行ってみると矛盾ばかりでね。本部に一年半いる間にいろいろ感じて出ることに決めたのです。

F そういう、出した財産は返すのですか。

☆ 全く返ってきません。全部没収になるわけです。似てるといわれるイスラエルのキブツでは、退職金を出しますが。だから、山岸会にはすごいお金があります。宗教団体がどうやって成り立ってゆくかをまのあたりに見たような感じでした。しかし山岸会が一番強調することは、みじんも宗教ではない、我々は科学である。科学とは研鑽である。全員が話し合いをして、その結果にだけ従うのが科学である。それに対して正しいものはこれ、と、あらかじめ決めてしまい、それに基づいて指図するのが宗教である、と強調します。

内部にいて疑問を持ったり、批判したり、改革したりすることは一切お断わりです。本を読んだり、理屈を言うこと、それから引用もだめ。たとえ山岸さんの言葉であっても。疑問を持たない人がふえてるってことは、恐ろしいことです。

ぼくは最初、共同体とかコミュニケーションとかにはほとんど関心がなかったんですが、入ってから日本の代表的なコミュニケーションをまわってみました。新しき村から、大倭紫陽花邑、日本の福祉のメッカといわれている心境同人共同体——これは戦時中に天理教から除名された教誨師が創ったもの——、そのほかいろいろ見てまいりました。

心鏡共同体などは、今の日本が世界に誇れる、うまくいってる共同体——福祉施設——として評判になっているところなんです。現在三百人くらいの精神薄弱の人を収容していて、外国からもよく見学者がきます。ふすま製造と国費で生計をたてているんです。それぞれにホテル並みの個室があり、大手のデパートと契約して生産しています。作業をする人は精神薄弱者で、白い共産村などと言われ、精神薄弱の子を持った親はみな、ここに子どもを入れたがりですから、なかなか順番がまわってこないようです。

そこは、優生思想との関連でいえば、全員結婚させてもらえるのです。結婚に先立ってみな、優生手術を施され、ホテルのような部屋に夫婦で住み、ふすまの製造に従事しています。ふすまで生計が立っていても、福祉施設の認定を受けていますので、いらな^いとい^うことも国庫からお金ができますから、住まいなどを豪華にしているようです。結婚も、自由意志で好きな人とできます。

なぜか成功している福祉施設は関西に多いようですが、同じ奈良県の、山岸会と並び称せられる大倭（おおよまと）おおよまと教という宗教です。あじさい^いの村長は、日本で最も成功している重度重複障害者施設、菅原園の園長を兼ねていますが、国の費用で施設がつくれ、その経営を任されています。問題は全く起こらないようですね。

山岸会とのちがいは、大倭は完全に一族だけで固めていて、共同体のメンバーをふやさないんです。三十人なら三十人のメンバーにしておいて、菅原園とか特別養護施設とかを五つくらい持っていて、所長や理事長とかには共同体のメンバーになり、看護婦や指導員は、ふつうに給料を払って、地域の家から通ってくる。しかし、共同体のメンバーに関するかぎり、財産の完全な共有という物質的基礎はみな同じです。山岸、心鏡、大倭、みなそうです。これが全体主義的な思想を生み出す物質的基礎です。それと同時に優生思想の物質的基礎です。

F 日本人全体の中にある優生思想のようなものは、どこでどういうふうにつくられていったとお思いますか。

☆ ぼくは、日本人は徹底的に差別する民族だと思いますよ。おそらく世界で一番差別する民族ではないですか。なぜかという、みんなが日本語をつかう点で「平等」だからです。それはそれだけのことなのに、

観念的には全部平等のはずだと思っている。だから差別しても平等だと思ひこんでいて差別を自覚しない。自覚するのはどういう時かというところ、徹底的に差別されてる者が反抗して、それでわかるんですね。

山岸会でも、平等の面には一番神経を使っているんです。幹部も住まいや着るもの、食事など差別してはいません。その意味では、日本中で最も平等な未来を先取りしている集団だという一種の誇りを持つてゐるわけです。だから、一番差別に気がつかない。しかし幹部は完全に権力を独占していますよ。これは日本の差別構造の縮図です。

G 障害者という概念は何をもって規定したらいいでしょう。

☆ 権力者は「障害者」をつぎつぎに定義しなくてはなりません、その場合、どういうものの見方、どういう原理にたつて、何のためにそう定義しているかを批判するのが哲学でしょう。これに対して自分たちの原理や考え方に従えば、どういう概念になるか、言葉としてはどういう言葉をたてるべきか。そこまでやらないと、憤懣だけが残るのじゃないですか。

精神的、肉体的に何らかの障害を持っていて、それが生活に不自由な場合を一応障害者と定義していいんじゃないか。僕も胃腸が弱いとか、肺が悪いとか、そのほかいろいろ障害をもつけれど、生活のしかたをそれに合わせた形にしていますからちっとも不自由は感じていません。だから今のぼくの場合だったら、いまぼくが選んでいるような生活ができなくなったときはじめて、それを妨げたものに対する闘いがでてくると思います。権力とか経済的事情などでできなくなったとすれば不当なことだから、それに対し闘っていくかききやいけないというふうに思います。とすると、障害者差別の前にある種の生活形態を強制するということがあるのじゃないですか。権力はその生活形態ができないものに「障害者」のレッテルをはるのです。

F 人間が進化して、直立二足歩行するようになりましたが、老人というのは、だんだんそれが失われていくわけですね。

☆ 進化した人類をそれ以前の動物と区別する指標として図（八十五ページ）を掲げましたが、それは手が不自由になったり二足歩行ができなくなるという個体の問題ではなく、あくまで、四千万年という時間のス

ケールで見ているのです。人間の背筋力が弱くなるとか、転ぶと骨を折りやすくなったということは、四千万年の進化の歴史という時間のスケールで見ても、その重要性ははっきりしてきます。

言語も、種全体に通じるシンボルの体系としてしか使われなくなっている。まるで蜜蜂の情報のように。それは四千万年前に逆もどりすることになるのではないか、ということ。それに対し、年をとって体がきかなくなるとか、呆けてくるとかという問題は、これは人間の一生ですから、五十年か六十年の時間の幅での問題です。

F その時に、一つの「進化」と考えていらっしゃいますか。

☆ 「進化」というと、そこに価値の上下があるようですが、ほかにどんな言葉があるのか。中国語には「演変」という言葉があるんです。これだと進むとかおくれるっていう感じがなくていいでしょ。人類という種がなぜ生まれてきたか。それが直立二足歩行と手の自由と、言語の獲得をしましたが、また演変して人間以外のものになっていくわけでしょう。しかし、厄介なことに人類は科学技術文化という、もう滅びないものを持っています。人間以外の生き物になるんですから――。私はそういう事態は嫌ですね。

最初の山岸会の話にもどりますが、変な子が生まれたら山岸会に迷惑がかかる、っていう考え方は強いんですね。鶏の場合は特にそうですから、どんどんつぶしてしまいます。だから、どんなことがあっても産まないほうがいいという考えなんです。山岸会の中のある人が、水俣病の問題が起きたときこう言いましたよ。「あれだけ水銀飲んでも水俣病にならない人もいるんだ。少なくとも病状の重い軽いはあり得る。一番根本的な解決策は、水銀を飲んでも水俣病にならないような人間をつくることだ。水銀に強い男と水銀に強い女の子をつくるのだ。カドミウム汚染があれば、カドミウムに強い同士を結びつける。要するに、人種改良がなければだめだ」と。

(にいじま・あつよし著述業)

(一九八三年三月十六日「あごら学習会」より)

母の権利と胎児の権利

——アメリカの中絶自由化運動に参加して——

バーバラ・イエーツ

私の日本語は下手ですから、途中で「手伝って下さい」と言ったら、翻訳してくれる人、お願いします。それではお話ししましょう。

私がアメリカで、女のからだを知る運動に参加したのは、一九六八年からです。ベトナム戦争中のことですが、一年間に戦死するおびただしい兵士の数と同じくらいたくさんの女の人が、違法な中絶の危険を冒して毎年死んでいたのですから、中絶する権利を獲得することは婦人運動の中でも最も大切だということが、アイオワ州だけでなくアメリカ全国でわかってきたわけです。

アメリカには、ずっと以前から、中絶を禁止する法律がありました。そのため、合法的に中絶手術を受けることができないので、妊娠したけれども産みたくない、あるいは産むわけにいかない女たちは、自分で中絶していたのです。たとえば、アルコールを入れて沸かしたお風呂に入るとか、洋服かけを使うとか、いろいろなことをやりました。その結果、たくさんの女が死にました。私の母も十八歳の時、違法な中絶をしたのだそうです。一九七四年ごろになって、婦人運動で女の人からだを知る運動がひろがってからはじめて、母はそのことを私に打ち明けてくれました。

アメリカで中絶が禁じられていたのは、なぜでしょうか。キリスト教でも、プロテスタントは必ずしも中

絶に反対しているわけではありませんが、カトリックの圧力が非常に強いのです。十三世紀の有名な神学者、トーマス・アクィナスは、小さな男の人がからだの中に入るのだと信じていましたので、人間の生命は受精の時から始まると教えました。そういうわけで、カトリックの考え方では、生命は受精の時に始まると信じていますから、中絶は「殺し」です。胎児殺し、殺人です。だから、中絶に反対するのです。そして、最近また、カトリックの圧力が強くなってきました。

また、プロテスタントの中でも、聖書の天地創造説や奇跡を文字どおりに信じ、進化論を全面的に否定しているファンダメンタリスト（保守主義福音派）は、カトリックと同じような考え方で、中絶に反対しています。

しかしとにかく、妊娠したけれど産みたくないという人たちは、現実にはたくさんいます。それでも、上流階級や中産階級の人たちは、自分で中絶するということはせず、スウェーデンなど、ヨーロッパに行って医師に相談します。違法な手術ですから、五百ドルも千ドルもかかります。二十万円です。大変でしょう。貧しい人たちはそんな大金を払えないから、自分でいろいろなことをしなければなりません。その結果、ベトナム戦争の戦死者と同じくらいたくさんの方たちが、毎年死んでいったわけです。一九六八年ごろは、ベトナム戦争反対の運動がさかんでした。反戦が一番大事なことで、私も思っていましたね。たくさんの方たちがどんどん死んでいましたから。——しかし、同じようにたくさんの方たちも、墮胎のために死んでいたのです！

●胎児は生命を持った人間でしようか

一九七三年に、ロイ・v・ウェイドという事件がありました。ロイ・v・ウェイド (Roe v. Wade) が、政府に対して、中絶の権利を確立するように要求して訴訟を起こし、最高裁判所は、それを認めたのです。

一方、ジョージア州の未婚の若い女性が、中絶を希望するのに認められなかったので、訴訟を起こしました。すると最高裁判所は、女のプライバシーの権利と胎児の生きる権利を秤にかけて考慮しました。

日本では、優生保護法によって、中絶ができるようになったわけですが、アメリカでは、憲法の「人民の

基本的人権に関する宣言」の修正第一条、これは言論の自由に関することで、そこから「プライバシーの権利」が導き出されるわけです。だから最高裁判所は、女の「プライバシーの権利」と胎児の「生きる権利」とを秤にかけたのです。

ところが、そこで疑問が出てきました。「胎児は、生命を持った人間ですか？」——最高裁判所は、それに対しては答えることができない、という判断を示しました。それは哲学的な問題、宗教的な問題であって、自分で決めるほうがよいことであり、裁判所が決めることはできないというわけです。しかし言論の自由ということとは、「人民の基本的権利に関する宣言」の修正第一条にある、一番大事な権利。したがって、プライバシーの権利は、一番大事な権利です。そして、中絶の問題は、プライバシーに関することです。だから、女の人がお医者さんと相談して、中絶するほうがよいと決めることはプライバシーの権利である。と最高裁判所は説明しているのです。

しかし一方では、胎児が生きる権利もあります。ただ、胎児とは、いったい何か。この哲学的な問題について尋ねても、アメリカの医師会も、はっきりした答えを言うことはできませんでした。いろいろの宗教、キリスト教もユダヤ教も仏教も、はっきりした説明をすることができません。

胎児は、本当に生命を持った人間でしょうか？ アメリカのいろいろな医師会では、胎児は女のからだの一部と考えることはできるけれども、成長するにつれて変わるものだと言っています。そこで最高裁判所は、妊娠六か月以後の胎児は、母親のからだの外で生きることができるようになるので、その権利は守らなければならないと判断しました。

判決によれば、妊娠三か月までの妊婦は、クリニックで、あるいは医院の外來で、医師と相談の上、中絶することができ。三か月を過ぎてからの中絶は、母体の危険を伴うので、入院したほうがよい。けれども六か月以後の中絶は、母体の危険が非常に大きくなるだけでなく、胎児はすでに生きる権利を持ち、その権利を尊重することは、もっとも大切になるので、中絶は許されない、ということ。これは、非常に重要な判例になりました。

これは、アメリカ憲法の、人民の基本的人権に関する宣言の修正第一条に基づいて下された判決ですが、

せまい意味のように思われます。たとえば、十八歳未満の女については、中絶の権利を認めていません。また、中絶するかどうかの判断について、胎児の父親の権利に触れていません。その後一九七五年、イリノイ州での判例では、これに触れています。もちろん父親の権利もある。中絶することに反対してもかまわないが、一番大事なのは女のプライバシーの権利である、と言っているのですが、自分のからだを自分で管理する権利として認めているわけではありません。婦人運動としては、自分で自分のからだを管理する権利があるはずだと言っていますので、この点については問題が残っているように思われます。

ところで日本では、人間の生命が始まるのは、いつからだと考えられていますか？ また、そういうことが問題になっていますか？ 妊娠二十四週目から、とか、六か月以後とか、生まれた瞬間から、とか、いろいろ意見があるようですが、先日、どこの宗派か忘れましたが仏教のお坊さんが新聞に、中絶はいけないということを書いていましたね。女の人として、仏教的な観点からは、どう思いますか？（水子供養といったことがこのごろ喧伝されているのは商業政策的なもので、仏教は、概して寛容ではないかという声があった。）

●カトリック信者も感謝した、フェミニストの診療所

一九七三年の九月、エマ・ゴールドマンが、クリニック・フォー・ウイメンというのを創りましたので、一九七五年までは私も、ほかの十人の仲間と一緒にそこで働きました。このクリニックは今でも続いています。

ここでは、中絶手術のほかに、カウンセリング、妊娠テスト、婦人科一般の相談、マッサージなどしており、人口五十五万の小さな町でしたが、毎日二十人から五十人ぐらいの人が来ました。私は、二年間に五百回の中絶を手伝いましたが、そのうちの二〇％はカトリックの信者でした。カトリックの考えでは、受精の時から胎児は生命を持った人間ですから、中絶は殺人です。大変なことです。それでも、カトリックの信者が二〇％も来たのです！ 大抵は中年の既婚者で、すでに子どもが三、四人いました。カトリックなのでずいぶん苦しんだようですが、もうこれ以上子どもは要らないというのでそのクリニックに来たわけです。あ

とで教会に行つて、ゴメンナサイと言つて許してもらつたかもしれません。私も十八歳の時までカトリックでしたから、よくわかります。カトリックの宣伝では、中絶などすると大変なことになる、と言っています。が、そんなことはありません。全然違います。私は、クリニックで中絶した人たちに、「困りますか」と聞きました。が、「全然困りません。安心しました。これで、ほつとしました。ありがとうございます。ありがとうございます」と言っていました。

もちろん、中絶の権利を獲得することはとても大事なことです。が、中絶というのは、いつでも、最後を選ぶべきことです。だから、まず避妊することが大切です。学校でも避妊のことを教えていますが、実際には一般に避妊の知識がありません。私たちのクリニックはフェミニストのクリニックですから、二、三時間かけて、避妊の方法の説明やカウンセリングをしていました。中絶してほしいと言つて来る人たちに、どんな方法で避妊したかを聞いてみますと、「避妊？ ああ、時々コンドーム、時々くすり。でも本当は、よくわからなかった」と言うのです。びっくりしましたが、これは現在でも同じ状況だと思います。私たちは、四、五人のグループをつくつて、避妊やセックスのことを話し合ふのです。みんな参加して話し合い、避妊の必要がわかると、大部分の人はピルを選びました。ピルの副作用なども説明するのですが、それでもピルと、そのほかではIUDを選んでいました。でも、そんなふうにし話し合いをしてもまだ避妊のことが納得できない人が、二〇%か三〇%ぐらいはいて、やっぱりピルもIUDも使わないのです。

私たちのところでは、中絶の費用は百ドル、二万円ぐらいでした。ヤミ中絶の費用が一般に二十万円から三十万円するのに比べるとずっと安いのですが、それでも払えない人は分割でもいいことにしていました。私たちのクリニックに来るのは、大体が中産階級の白人でした。一九六二年ごろから起こった黒人の権利運動・フェミニスト運動を「第二の波」（「第一の波」——一八九〇年ごろのフェミニスト運動・労働者の階級運動——に對して）と言っていますが、この運動の結果、一九七三年に、中絶が必要な貧しい人は、いつでもタダで手術を受けることができるようになりました。これは大変な福音だったので、一九七七年に「ハイド修正案」が通過したため、中絶に関する国の援助が打ち切られました。反動です！ 現在、アメリカでも日本でも反動がありますから、絶対にがんばったほうがいいと思います。

そういうわけで、とにかく一九七三年からはアメリカでも中絶することができるようになりましたが、貧しい人や、十八歳未満の人は、まだ困っています。十八歳未満の場合犯罪になるという法律がはっきりあるわけではないのですが、お医者さんはこわがっていますから、未成年とわかったら、多分中絶しないでしょ。私たちのクリニックでは、「十七歳ですが……」と言って来たら、「そう、十九歳ですね」と言って中絶しました（笑い）。別に問題は起こりませんでした。

でも、ある時、こんなことがありました。十七歳の女の子がお母さんと一緒に来たのです。お母さんは、絶対に中絶しなさいと言うのですが、彼女自身は、産みたいし、ボーイフレンドと結婚したいと言うのです。私は、これは彼女の決めることだから、中絶するわけにいかないと言いました。親は怒りましたが、これはプライバシーの権利を守るべきだと思います。

またこんなこともありました。胎児の父親が来て、中絶はダメと言うのです。それで私は言いました。「外に出て、待っていて下さい。父親にも胎児に対する権利はあるけれども小さいのです。女の、中絶するというプライバシーの権利のほうが優先します」。

● 優生思想は白人を守るためのもの

実は一九七三年よりも前に、一九六八年ごろから、私はロサンゼルスで、セルフ・ヘルプという運動を始めていました。フェミニスト・テクノロジー、この言葉は私が作ったのですが、ロサンゼルスのフェミニスト・ウィメンズ・ヘルスセンターで、キャロ・ダウナとリリアン・ロックマンが考え、全国を説明して回ったのです。それで、グループを作って始めました。一九七三年以前は、もちろん中絶は違法なことでしたから、自分たち、セルフ・ヘルプのグループで中絶したのです。妊娠初期、生理がなくなってから二―三週目の時期に、メンストリュアル・エクストラクション（通経）という処置をします。これは、早期の中絶というのかどうかよくわかりませんが、だから、カトリックの女の人も安心してできますね。私は、私のセルフ・ヘルプのグループで、十二人ほど中絶しました。世の中では、みんな本当に困っていたのです。それで私のところに電話で、「中絶することができると聞いたのですが、お願いします」と言ってきます。しかし実は、

ちょっと危ないと思っていましたから、よく話してあげました。それでも「お願いします、お願いします」と言って来ました。チューブとコレクション・ジャーを使って、ヴァキウム・アスピレーション・アボーション（真空抽出中絶法）というのをします。日本でも、妊娠十二週未満にはする方法だと思っています。危険もあるので、私たちはとても気をつけて、慎重にやりました。女のグループで励まし合って、一生懸命にやりましたので、幸いにして問題はありませんでした。もしつかまったら、刑務所に行かなければならなかったと思います。フランスでも、「タダ、安心、だけど違法な」という中絶をグループでやっていたようですね。

ところで、法律で許さないばかりに違法な中絶をして、そのために死ぬのは黒人やプエルトリコ人が多かったにもかかわらず、「第二の波」のとき、中絶する権利のための運動に参加したのは白人ばかりでした。なぜでしょう。

アメリカの歴史の中で、避妊の運動が始まったのは今世紀の初めごろで、一九一〇年から、アメリカの優生運動も始まりました。マーガレット・サンガーさんは、日本にも二度来ていますが、最初は社会党と一緒に働きましたね。だから初めは、避妊に力を入れていました。ところがだんだん、優生思想を取り入れるようになりました。優生思想は、もともと白人の種族を守るために出来たものです。そして一九三二年には、二十六州、アメリカの半分もの州で優生保護法が制定されています。しかし、「不適」とは何ですか？ 不適な人とは、誰ですか？ 誰が決めるのですか？ 私は不適ですか？ あなたは？（笑い）

優生運動では、白人の種族を守るためには、黒人や、ヨーロッパからの移民の子孫が多すぎると考えていました。だから黒人の側からすれば、不妊手術は、大量殺りくにも等しいものであると思ったわけです。昔から、黒人やプエルトリコ人は、自分で中絶しようとしては、ずいぶんたくさん死んでいきました。アンジェラ・Y・デービスさんは、『女性における人種と階級』（"Women, Race and Class" 1980）の中で、「白人の中産階級の人は、産みたくないから中絶する。だけど黒人は、産みたがっていた。しかし生活が苦しいので産むわけにはいかない。それで違法の中絶をしていた」と書いています。そしてある時期はタダで中絶することもできたのですが、ハイド修正案が通過して、タダの中絶はできなくなりました。しかし不妊手術

はタダです。だから今日では、貧しい人たちは二つの選択しかできなくなつたのです。タダで産むか、タダで不妊手術するか、どちらかです。黒人の女の人は、病院で、タダで産むことができます。あるいは、タダで不妊手術を受けられます。けれども中絶するためにクリニクに行けば、ヤミの費用が二百ドル、三百ドルとかかるのです。

優生学派は、白人の種族だけを守ることしか考えないのです。サンガーさんも、しまいには、白人の種族を擁護することだけを考えていました。残念でしたね。中絶の権利を獲得する運動に、黒人やブエルトリコ人があまりかかわらなかつたというのは、こういうわけがあるからです。そのことに留意しなければなりません。——もちろん、現在はがんばっています。エマ・ゴールドマンのクリニク・フォー・ウィメンのようなウィメン・コントロール・クリニクは増えています。

『ナショナル・ウィメン・ネットワーク・ニューズレター』の「女の健康情報」によると、アメリカでは、現在、八三％の人が中絶の権利を守ることに賛成しています。ハイド修正案に反対する人もたくさんいました。アメリカで一番有名な「ギャラップ」と、『ニューヨークタイムズ』の調査によるものです。

もちろん、カトリックの圧力団体による反対も強くなっています。ローマ法王は世界中どこに行っても、妊娠したら必ず産まなければいけないと言っていますが、それはファシストですよ。自分のからだです。自分のこと、自分のからだのことは、自分で決めなければなりません。もちろん第一に避妊すべきですが、完べきな避妊法があるでしょうか。カトリックの圧力団体は女のプライバシーの権利を侵害していると思います。ずっと前、七〇年の中絶デモの時、カトリックの女の人が、「中絶の権利がありますか」と言うので、「ハイ、あります」と答えたら、彼女は私にパンチをくらわせました。私たちのクリニクを始めた時も、「あなたのクリニクをこわします」「爆破します」と電話をかけて来ました。カトリックは、数の上では少ないですがお金持ちですから、パンフレットを作つて配つたりします。中絶の写真を作つて、「生きてた！」などと言っています。全然ウソです。中絶は殺人である、と書いたリーフレットを、時々、私たちのクリニクに来ている人に配つたりしています。

でも七三年以後、私たち婦人運動をする側では、ロー・v・ウェイドの判例を使って、論理的に戦えるわ

けです。アメリカ議会でも、最高裁判所の判断に反対したら大変ですから、中絶の権利獲得運動を励ましています。中絶は女の「最後の選択」の権利です。不妊手術をしないと、回復不能になりますが、中絶は、また産むチャンスが残されます。そこが決定的にちがうのです。(拍手)
何か質問ありますか。

A 中絶は悪いことだという思想が国民の中にあるのを正すために、アメリカでは、哲学的な論争があったとか聞きましたが、具体的に教えてください。

☆ 一番大切な方法は、パブリック・ディベイツです。(註、欧米には、public debates と呼ばれる公開討論の習慣があり、重要な問題は、そこで討論される)

A どんな形の公開討論が有効でしたか。

☆ テレビを使った討論など、効果的でしたね。

B 日本人は言葉をたたかわすのが下手なので、論争が成立しない。特に、中絶というようなセンシティブなことだと話さないんです。

☆ どうして中絶がセンシティブな話題なのですか。

B それは、男と女の関係がいい関係でないということが、ひとつあると思います。つまり、妊娠するというのはセックスがあるからです、そのセックスがハッピーな形であるかどうかということに関係があると思うんですが、日本人はセックスにふれるような話はしたがりません。で、日本の女はセックスのプライバシーを持っているかという問題になるわけですが、結婚生活の中でも強姦がありますね。

☆ そう、そう。アメリカでも。

B フリーなラブの関係でも、今晚セックスしないと嫌われるかもしれないというような、いい関係でないということ、中絶に関して話したくないということと関係があるんじゃないかと思えます。だから、性教育の中身として、まず、男と女のいい関係ということが大事ではないかと思うのですが、アメリカでは……

☆ しかし、男が力を持っている社会では、性教育は實際上、役に立ちません。アメリカでは学校で性教育をしますが、「避妊のことも聞いたけれど、よくわからなかった」と大抵の人が言っています。アメリカでも、セックスの関係で、女はコントロールできません。

でも、アメリカでも立ち上がり始めました。すべてが変わり始めています。私は、すべてのことが変わらなければならぬと思っています。私が言いたいのは、今までのような性教育では、女と男の関係を変えはしません。たとえば、大抵の人はセックスやコンドームのことを知っています。だけど、「オー、真の愛。だから、ぼくはコンドーム使いたくない」と言われると、「OK、OK」となる（笑い）。なぜなら彼女たちは強くないし、自信がないから……。

B. 性教育というのは、もちろん避妊のこともあるけれど、人間関係をオープンにしなければならないと思うんです。

☆ 人間関係というのは愛です。現在のような社会のあり方では、私たちみんなにとって、愛のある人間関係は不可能です。これがスタートです。どうしてかと言うと……。

B 脅威なのよね。家族という従来のパターンを守ることによって今の産業とか国家とかを作っている保守的な人から見ると、新しく多様な生活があるんだ、それぞれの成熟に応じて、それぞれの問題ですよ、と言いついたら再生産ができないから、それは困る、と。今私たちが勉強しているような思想が一般的になると脅威なのよ。

☆ だから、軍国主義がまた強まっていることと、中絶する権利への反対運動とは関係ありますよ。私は、変化に興味があります。男は仕事、女は家庭、男が決定、女は受け身、それでは減んでしまっています。でも、新しい世界が近づいています。神は死んだ。家族は崩壊します。私たちは、新しい考え方を探っているのです。

B スウェーデンでは、それを家族の崩壊と見ないで、個人の誕生と見るのよね。女も、個人になって誕生するという考え方。

C 日本の場合は、個人というところから何かが成り立っている社会でなくて、最初から集団で成り立って

いるという社会背景があると思うの。だからたとえば、いくらかあ天下にしてくれても、社会的には全く認められてない。そういう中で女が運動を進めていくのは、アメリカやヨーロッパでするよりもよっぽど大変。私たち自身の革命をしていかなければならないと思います。だからつくづく、非常にむなしいうところがあります。

B でも、それじゃダメなのよ。西洋社会でも、男だけが個人だったんですよ。女は個人でさえなかった、マスとしての女というものだけで。そういう意味で、例えば、スウェーデンでは女が離婚すると、「女の人個人になった」という言い方があるくらいなの。だからそういう集団から、一人一人顔を持った、佐々木さんとか加藤さんとかが出て来る変化の過程を、技術として知識として学べば、武器とすることが出来るかもしれないと思うわけ。

C 時間がかかるけど、していかなければいけないと思うんです。思いながら、後ずさりをし、またもう一回思い直してやっていると形なんです。

A だから、そういうブライバシーの部分まで来るだけでも、とても大変だと思うし、男とか女とかじゃなくて、個としての人間を確立していくためには、男の人も含めてやっていかなければ不自然なんじゃないかというも思ってるんです。

D それとね、日本の場合はアメリカと同じで、必ず資本主義とぶつかるところに来る、というか、全体の制度、つまり男は仕事、女は家庭、ということが最も有効労働だった、そのためにどのような社会を作ってきたか……。

☆ だから資本主義にも絶対反対しなければならないと思います。

E だけど共産主義の人も、こういう家族の形態を支えていますね。「健全な家庭」の維持に一番熱心なのはむしろ共産党じゃないですか。だから彼らは「健全」の中身を問うフェミニズム運動には、必ずしも好意的じゃないんです。上の指令を疑ってはならないので。

☆ Yes, Yes, but, (笑い) 社会主義の国にも女に対する抑圧があるのは、それは社会主義のためじゃなくて、社会主義になる以前の人間の歴史、男と女の成り立ち合いというか、そこにはひとつのパターンが出

来るわけで、制度が新しくなっても、それまでの人間のパターンが変わらないから、今の社会主義国においても、資本主義国における男と女の関係とそれほど違わないということではありませんか。だから、たとえ明日、日本が社会主義国になったとしても、男と女の関係が突然平等にやるというわけにはいかない。百年も二百年もかかるでしょうね。

E ただ、私は、マルクス、エンゲルスの思想の中にある、たとえば、家庭が労働力の再生産の場であるという言い方が、やっぱりすごく問題だと思うの。だから日本の共産党なんかでも、ソビエトでも、すごくプレッシャーかけてますね、女の運動に。なぜなら、個としての「女」という考え方を進めていくと、どうしても今の社会の労働の単位そのものが問題になってくるでしょう。

F でもそれは、修正させていくというか、やっぱりそういうものが存在するから、避けて通るわけにはいかないと思うんですよ。

☆ 中国なんかの場合、仕事なんかの面では全然差別なしで女の人をどんどん取り入れるシステムがあるにもかかわらず、意識の面ではまだまだ百年ぐらい昔の儒教的な考えにしばられていて、一人しか子どもを産むことができないのなら、できたら女の子はほしくないというような傾向があるそうです。キューバの場合にしても、制度的には全く問題がないのに、人々が伝統的な男優先の観念にしばられているのであって、人びとの意識が変わらないかぎりダメなようです。でも、フェミニズムというのはやっぱり社会主義と連帯して進めなければならぬと思いますよ。

E 長いことそう思っていたけれど、幻想の部分があったのじゃないかな、と、このごろだんだん思うようになってきたんです。一度ゆっくり、とことん考えてみたいと思ってるのですけど。

B その点、スウェーデンという国はとても面白い実験をしている国だと思うの。と言うのは、経済は資本主義だけど、政治は社会主義をとり入れてやってるわけ。そして、子どもを産むのは女だけど、生まれた瞬間からの子育ては、男とか女とか関係なく、親なら誰でもできるということで割り切っちゃった。だから今、スウェーデンの子どもたちは、全く新しい時代に育っているわけ。男の人が子どもを引き受けて育てている、そして女の人は全く自由に、自分の好きなように人生計画して暮らしているという、そういう生き方を

良しとした社会があるわけなの。私たちみんなに代わって実験している国が。

E そういう意味だったらすごくよくわかるけど、その話は、今度またゆっくりすることにしましょう。

☆ 私、ひとつ質問があります。もし優生保護法改正案が通ってしまったら、どうしますか。

A チャンスだと思えます。なぜかと言うと、皆のエネルギーを結集してたたかえるわけです。優生保護法そのものが、ものすごく悪いから。

☆ それはわかりますけど、もし改正案が通って、すぐにも中絶できなくなったら、婦人運動としてはどうなるかということ。もちろん、優生保護法には絶対反対しなければなりませんけど、現実には違法な中絶をやりますか？

A もちろん、避妊が重要ですけど、努力しても失敗し、しかも産めない状況だったら、私は、堕胎罪でつかまってもかまわないと思う。どんどんつかまって、みんな女たちで刑務所がいっぱいになったら困るでしょう(笑)。

☆ オー、それ、いいですね！ ハイ、ハイ、ガンバッター(笑)。

G ここまで追いこまれたら、むしろ逆襲するエネルギーが湧くと思うの。

☆ それで、もし通らなかつたらどうですか。

A そしたらもちろん、優生保護法そのものと堕胎罪の廃止に向かって運動します。今まで日本の女がやってこなかったのが怠慢なのだから、やらなければいけないと思います。

☆ そう、私たちもおなじです。レーガン政権になってから、E R Aや中絶の自由化に、すごい圧力がかかっています。女の運動に対する圧力と、軍国主義は深い関係があります。一緒にたたかきましょう。

(ばーばら・いえーつゝ合衆国の二つの大学で英文学と法律を勉強、弁護士資格を持つ。詩人。仏教・合気道・ヨガ等を学ぶため来日中。ハあごら英語教室V講師)

(一九八三年三月十日「あごら学習会」より)

優生思想のない国

——スウェーデンの中絶法と性教育がめざす「性の自己管理」——

ヤンソン由実子

私かなぜ、きょう、スウェーデンの中絶法の学習会をするかということ、それをまずお話したいと思います。先日、△優生保護法改悪阻止連絡会▽の学習会に呼ばれて、日本の中でのこのような動きというのは、一体どういうんだろう、国際的にみればどういうふうに位置づけられるのか、を知りたいということでしたので、私は、「優生保護法」という、優生思想を保護する法律をもって、それで中絶を許している、このようなやり方は国際的にみて、実は日本にしかないんだという指摘をしたんです。

そんなバカな。じゃあほかの国々ではどうなっているの、というわけで、ほかの国々の法律を調べましたのでご紹介したいと思います。

女性解放運動の「第二の波」

まず墮胎罪ですが墮胎罪は、大体二十世紀初頭にはほとんどの国が法制化しているんですね。キリスト教、回教などの宗教、あるいは政治的な体制とも関係ありますけれども、現在、いわゆる先進国、あるいは近代国家となっている国々で、法体制が完備していればいるほど、墮胎罪はかなり早く、ある国においては十八世紀の頃から、おそくとも二十世紀初頭にはすべての国が、と言っていいくらい足並みを揃えます。そ

してこの墮胎罪というものは例外なしに、母親が自分であるいはほかの人の手を借りて胎児をおろしたならば、犯罪であるとしているわけで、こうなると、みごもつたら必ず産まなければならぬ、いわゆる「子宮の国家管理」という言い方があるわけだけれど、そういう性質のものですね。

しかし、当初の、どんな条件の場合でも、すべて墮胎した者には墮胎罪が適用されるという絶対性は少しずつ崩れ、これこれの場合は処罰されないという例外事項が増える方向に、ここ十数年世界の動きが変わってきています。

その動きが特に激しい勢いをみせたのが一九六〇年代の後半からです。第一次女性解放が参政権の獲得だったとすれば、六〇年代の後半から七〇年代の初めにかけて起こった新しい動きは第二の女性解放の波と言われています。この女性解放の新しい波と、墮胎罪への突き上げというのは、実は、全く表裏一体でありまして、自分のからだや、自分の人生を自分自身で決めるといふ決定権を確立しようとした新しい「第二の波」は、当然、墮胎罪の廃止を要求することになるわけですね。このような動きが功を奏した国々においては、墮胎罪の中の例外事項として中絶が認められるという段階ではすでになく、女たちの突き上げが墮胎罪そのものを撤廃し妊婦が中絶を望めばそれを認めるという法制度をつくらせているわけです。

そのようにして中絶法をつくらせるのに成功した国々は、フランス、イタリア、オーストリア、デンマーク、イギリスなどですが、ヨーロッパで一番早かったのがイギリスで、一九六七年です。これはただし、条件つきの中絶法です。やがて無条件に中絶を認める国も出てきました。そしてそれらの動きの中で、一番最たるものの例、しかも私が具体的に一番よく知っている例としてスウェーデンという国があります。

今日は、その法律の中身をケーススタディしたいと思います。

スウェーデンの中絶法

最初にスウェーデンの中絶法、次にその法律の周辺、そしてスウェーデンのRFSSU（全国性教育連盟）の「中絶に関する事実、評価、意見」の三つの話をしたいと思います。スウェーデンにも「妊娠中絶の自由化は神への不遜な行為である」とする生命尊重論がありますが、それに対する強烈な反駁意見もご紹介しま

しょう。私たちの運動に今すぐに役立つ理論だと思います。

スウェーデンは非常にラジカルな国で、特に男女平等問題においては世界の実験国という見方もあるのですが、中絶法は一九七四年六月発布、七五年一月一日から有効になりました。その原則は、女性の意志表示があれば中絶を許す、ということなんです。条文を追って説明します。

まず、妊娠十二週目までは、その女性の要求があれば中絶することができます。つまり中絶の理由は一切問わないということです。(第一条)。

次に、十二週以上十六週目まではソーシャルワーカーによる個人的な事情の調査の上で中絶ができます。この調査は、適当な中絶方法をとるため、あるいは何か特別な理由があって中絶ができない状態にあるのではないことを確かめるために行なわれます。(第二条)。

十八週を超えると、これは社会庁(日本の厚生省)の許可が必要となります。中絶のための明らかな理由がある場合にのみ認められます。胎児が母体の外で生きていける、つまり単独生存できるとみなされる週に入ってしまった場合は、堕胎はできないということです(第三条)。

ただし、第一条、第二条の場合でも、中絶か、母体の生命、あるいは健康を損なう恐れあり、と医師が判断し、中絶措置を拒否した場合は、社会庁が検討します(第四条)。

第五条では、中絶は、スウェーデン人女性、あるいはスウェーデン国内に居住する女性に限られるとしていますが、社会庁が特別ケースとして認めることもある、とちょっとフレキシブルな条件をつけています。そして、中絶措置は、医師の資格をもつ者だけが、国立病院または社会庁が認める病院施設においてのみ行

スウェーデンの中絶法 一九七四年六月十四日発布 SFS nr. 五九五

(訳責 ヤンソン由実子)

§1 妊娠中の女性が中絶を要求する時、妊娠十二週目までは中絶の措置を許す。ただし、その女性が病気で、中絶が彼女の生命または健康に著しい危険を伴う場合は不可。

§2 すでに十二週以上たっている場合は、その女性の個人的事情を調査した上で、また、上記の§1の但し書きに当たるものがない場合、女性の要求があれば十八週目まで中絶を認める。

上記の調査は、適当な中絶方法をとるため、あるいは、何か特別な理由があつて中絶ができないような状態にいてのではないことを確かめるためである。

§ 3 十八週目を経過した妊娠の中絶は、社会庁の許可がなければならない。許可は、中絶のための明らかな理由がある場合にのみ与えられる。

胎児が母体の外で生きていけると見なすことができる場合は上記の許可は与えられない。

§ 4 § 1あるいは§ 2の期間の中絶措置が拒否された場合は、社会庁が検討する。

§ 5 中絶は、スウェーデン女性、あるいはスウェーデン国内に居住する女性に限り許される。社会庁が特別なケースとして認める場合もまた許される。

医師の資格を持つものだけが中絶措置を行なうこと。

中絶は国立病院または社会庁が認可した他の病院施設においてのみ行なわれるべきこと。

§ 6 妊娠が病気または身体的理由で女性の生命あるいは健康を著しくおびやかしている場合は、§ 3の第二項の規定にかかわらず、社会庁は許可を与えてよい。

ここで認める病気または身体的理由による中絶は、女性に事故のおそれがあつて延期できない場合には、§ 3・§ 5の規定にかかわらず、医師資格を有する者によつて行なわれてよい。

§ 7 社会庁が決定した中絶に関する決定については申立てができない。

§ 8 中絶に関係した者は、それによつて知りえた個人の事情について、他言してはならない。一九七五年法 nr. 七四七

§ 9 医師の資格を持たずして、故意に他人に中絶を行なった者は、不法中絶として罰金または懲役を最高一年まで科される。

この第一項のいう不法中絶が悪質であつた場合は最低六か月、最高四年の懲役が科される。中絶が悪質であつたか否かの判断には、犯罪が繰り返し行なわれていたか、金銭のためか、あるいは女性の生命と健康に危害を与えるものであつたかに、特に留意すべきこと。

不法中絶の試みに関しては、刑法二十三条にある通りの責務が科される。

§ 10 医師が§ 4または§ 6の第二項に問題がない場合、§ 3または§ 5の規定を故意に無視した場合は、罰金または懲役最高六か月が科される。

この法律は一九七五年一月一日から施行され、同時に一九三八年三一八の妊娠中絶に関する法律は廃止される。

なうこととしています。

例えばアメリカのウイメンズクリニックのような所で、医師の資格をもたない人がやったりした場合は、不法行為であるということで、取り締まりの対象になるわけです。

妊娠が病気または身体的理由で、その女性の生命、健康を著しくおびやかしているとみなされれば、胎児の単独生存が可能な週に入っていても中絶は認められます。さらにこの場合の中絶は、女性に事故の恐れがあつて延期できなければ第三条と第五条にかかわらず、医師資格を有する者によってなされてよい(第六条)と、さらにフレキシブルに認めています。

次に、社会庁の中絶に関する決定については申し立てができない、最終的なものであると言っています(第八条)。

そして、中絶に関係した者は、それによって知り得た個人の事情を他言してはならない、と緘口の義務を定めています(第九条)。

医師の資格をもたない者が故意に中絶を行なった場合は、不法中絶とみなされて、罰金または懲役が科されます。さらに、その不法中絶が繰り返し行なわれたり、金銭を目的としたり、女性の生命と健康に危害を与えるものだったかどうか、特に注意すべきだとあります。不法中絶は刑法の適用をも受けるわけです(第九条)。

中絶法の最後の項目は、医師が第三条、第四条、第五条、第六条の規定を故意に無視した場合、つまり正当な理由があるのに中絶手術を拒否した場合は、罰金または懲役を科されるということです(第十条)。

この法律の特徴は、全く独立したものであるという点です。ほかの法律に統合された形の場合——例えば母子保健法の一部に中絶が盛り込まれるというような場合——、主たる法律が変わる時に、手を加えられる危険性があるわけですね。スウェーデンは一本立ちした法律であるという点が非常に特徴的なんです。

この新しい法律は同時に二つの同意事項を条件として成立しました。一つはバースコントロール、つまり避妊のカウンセリングの徹底と、避妊教育の徹底ということです。避妊手段そして性教育の徹底、この二つ

を必ず同時に実行することを条件に、中絶法は成立したわけですね。

中絶法ができるまで

そこで、一九三八年から七五年の間生きていたスウェーデンの元の中絶法はどういうものだったかと言うと、これはあくまでも刑法の堕胎罪の例外事項だったんですね。つまり、堕胎罪を免れる条件を列挙しているわけです。その条件とは、①医学的、②社会医学的（近親相姦、強姦等）、③人道的、④遺伝的（優生思想）、⑤胎児の障害、の五つです。そして①の女性の生命、健康に危険が予想される場合は、妊娠二十四週目まで中絶を認める。その他の場合は二十週目まで。それは二人の医師、または、社会庁の許可を得なければいけないとしていました。

ところがこの中絶法は次第に手を加えられ、六三年頃には現在の私たちよりもかなり自由というか、制限が緩和された妊娠中絶の状況があったと思われます。しかし、あくまでこれは、官僚によって許可され、あるいは手続きされ、という手間もありましたので、結局、年間一、二万のヤミ中絶があったということです。

六〇年代後半になると、中絶是非論というのが、女性の社会進出とあいまって激しく討論されるようになりました。そこで政府としては、それまでの制度が、果たして現状に見合うものであるか否かを調査するために委員会をつくります。その名もズバリの「中絶委員会」には三つの目的をもたせました。それは①中絶に関する法律が現在どのように適用されているか、また人々の要求に合ったものか、②将来の中絶法は、どのような性質のものが考えられるか、③中絶を避けるためにとるべき国家のメジャーは何か、の三点です。

そこでおもしろいのは、スウェーデンという国は委員会をつくる時にいつも、各党の代表者、労働界の代表者、そして女性の意見発表者を入れるんです。で、最初は大体、男女半々ぐらいだったらしいんだけど、最後の頃は、女性の意見発表者がたくさんだれ込んで、委員会がかなり女性のウェイトの高いものになってしまったということです。

その委員会は六五年から六年間にわたって調査し、その結果を七一年に「中絶への権利」として発表します。それは、女性の意志があれば、タイムリミットをおかず、要するに出産までの、すべての期間の中絶を

許可しよう、というものでした。全くの自由化ですね。その報告書は次に、婦人会議、心理学者、法律家からなる専門委員会、諮問委員会にかけられ、ここでもカンカンガクガクの討論が行なわれました。その結果、結局、タイムリミットはつける、しかし女性の意志だけで中絶を認める、ということになりました。

それが新中絶法の骨子になるわけですが、同時に政府は、中絶委員会の調査を助ける形で、作業グループというものをつくりました。そこでは作業を細分化させまして、①中絶を避ける手段、②産婦人科医の中絶の受け入れ態勢、という細部にわたるチェックを始めたわけです。

結果は、受け入れ態勢は現規模のままで可能であると同時に、新中絶法は、避妊手段の強化という背景なしにはあり得ない、という結論が出たわけです。新中絶法成立の条件の一つはこういう形で出されたものなんです。

自由化しても中絶は増えなかった

それでは、中絶が自由になったスウェーデンの中絶件数の推移をみてみたいと思います。まず言わなければならないのは、スウェーデンは人口わずか八百万の国だということです。日本の人口はその約十五倍、ということをお頭にに入れて考えて下さい。

1960.....	3,000件
1965.....	3,000
1970.....	24,000
1973.....	26,000
1974.....	30,000
1975.....	32,000
1979.....	34,000

中絶法はなくてもすでにかなり自由化されていた七〇年が六五年の八倍、そして七三年、七四年と押せ押せに上がってくる数字は、とても多いように思うし、そして、いわゆる中絶自由化反対派は、ほら見たことか、自由化するとみんなが中絶を避妊の手段にするのだ、というふうなことを言うんだけど、実は、十四歳から五十五歳までの妊娠可能な女性千人の中絶率は、七三年、二〇・二、八〇年、二〇・二であるということ。つまり、その年齢層の女性が増えたということですね。七〇年の二万四千件という数字は、このころ、女性解放運動などの突き上げもあって規制がゆるやかになったためということです。

口だけじゃなく金も出した政府

さて、新中絶法の制定と同時に、さまざまな行政手段をもって、中絶法がうまく機能するように中絶カウンセリング、あるいは避妊相談、情報の提供、避妊手段の国家扶助などを実行しましたが、これは、各地方自治体の医事担当課が管轄し、責任をとるということで、具体的には母性保護センター、学校、助産婦などに権限を与えています。それから先程もお話ししましたが、全国性教育連盟(RFSU)という非常に強力な団体もあります。避妊だけじゃなく、中絶カウンセリングもあるんですね。

そして、このような場合、政府はかけ声だけで終わらないように、具体的に国家扶助を与えたということが、非常に強力なテコ入れになっているようです。例えば国民健康保険の適用、つまり相談は無料になりました。相談を受ける側には国がお金を支払うわけですね。単なる相談だけじゃなくて、そこでビルの処方箋を書いたり、リングやペッサリーも無料で入れてくれる。そういうことに対し、国が援助する、予算があるということなんです。とにかく絵に描いたモチじゃダメなのね。行政指導するんだったら、まず予算をさいて責任管轄下の部署をつくって、お金払って、資格者をつくって……というふうなやり方をしないで、ただ基本ラインを出して一生けん命かけ声かけたってダメ、ということが、ひとつここで学べるんじゃないかと思います。一九七五年で年間三千万スウェーデンクローネ、つまり約十億円が、避妊、中絶カウンセリングのための国家予算なんです。

中絶するなら十二週までに

新中絶法施行後の状況をみると、中絶の九〇%が早期、つまり十二週目までに行なわれています。本人の意志のみで中絶できる期間ですね。十二週から十八週までの、ソーシャルワーカーによる相談は、特に心理的原因で中絶が難しくなるとか、あるいは心理的な後遺症をさけることを目的としているようです。

日本で大もめにもめていた胎児の命ということですけれども、スウェーデンでは二十四週までは単独生存が不可能とされています。国際的には胎児の重さが五百グラム以下大体二十二週目まで。さらに胎動が初め

て感じられるのが十八、二十週目であり、胎動を感じた後の中絶は、特に心理的にみてリスクが高いので勧められないともありました（政府発表資料による）。

国家の手から個人の手へ

新中絶法について一番特筆すべき点は、本人の意志によって中絶が行なわれるということ、つまり今まで国家の規制をうけていた子産みが、個人の手に委ねられるようになったというわけです。国家による子産みの規制、という言い方は少し耳慣れないかもしれないけれども、要するに、こういう理由で中絶させていただきます、とお伺いを立てるという考え方そのものがやっぱり一つのファシズムというか、国家規制であるとする考え方があるわけで、そこから離れたところでの子産みの個人化ということが言われています。

それでは、スウェーデンの人口問題はどうかだろう、という面を見てみると、他の西洋先進国同様、人口減少ということを最も深刻に悩んでいる国なんですね。だから人口増を願うならば、子産みを自発的なところで任せるということは、本当は大変苦しいところなんだけれども、そういう国家の人口政策とは全く別の個人の人權、プライバシー、人生計画というところに、この子産むか産まないかの焦点を当てたという意味で、スウェーデンは非常に画期的な法律をつくった国である、と言えるところなんです。

つまり、日本で子産みとなると常に一番問題になるのは「国家政策」、次に「倫理・宗教」ですが、問題にさえなっていないけど私たちは問題にしたのが「子産みの個人化」ということです。それは基本的には個人の決定する枠内のことであるというわけで、私たちは主張しているんですけれども、この三番目をまさにスウェーデンは大きくクローズアップして法律をつくったんですね。

産みたくない人に産むことを強制しない

七五年にこの法律が施行された後も、反対の議論はありまして、それも八〇年頃には出尽くしたというところですが、じゃあ、中絶自由化に反対するのはどういう人たちか、ということをちょっと調べてみました

1、基本的態度

RFSUは、中絶自由化・擁護の立場をとったとき、次のような倫理的見解「受精卵、それよりすこし発達した胎児、あるいは、母体の外で単独で生きることのできない胎児を、産み出された子どもと同格に扱うことはできない」を基礎においた。この倫理的判断に同意できないなら、いかなる場合の中絶も反対ということになる。

生きている子どもを殺すことに同意するものはいないのは当然である。もし、胎児に、生まれた子どもと同じ保護が必要であるとすると、なら例え強姦のあとの中絶でさえも許されないことになる。

(1)生命の尊重に関連して、注意を喚起しておきたいことがある。生命の絶対性を倫理的土台にして、中絶の自由化に反対する人々および集団は、急進的平和主義者とか兵役拒否者であったためしがない。それどころか、このグループの人々は、一貫して、強力な防衛、効率的殺戮手段の必要性を説く者たちである。論理と実態に一貫性がない。

(2)中絶の自由化を信ずる我々は、言うまでもなく、中絶は困難な状況における非常解決手段と見なしている。それ故、中絶件数が減少する強力な態勢づくりが緊急であると信ずる。しかし、中絶の減少ということが、産みたくないという女性の意志に逆らって、産ませることによって得られるものであってはならない。

(3)目標は、生まれる子どもは、どの子も歓迎され、望まれる子、でなければならぬ。これの反対は、子どもたちの育つ環境、将来のことなど、問題がでてくることは調査(See: Rita Lieston, Elisabeth Lager Crang)済みである。

2、七〇年代後半、新中絶法以後の中絶状況

一九七四年—三万六三六件、一九七五年—三万二五〇〇件、一九七九・八〇年—各三万四五〇〇件。この数字から、中絶件数が増えているようにみえるが、実際は妊娠可能な年齢層の女性が多くなっているの、比率はほとんど変わっていない。

十五歳—四十四歳の一〇〇〇人の女性のうち、中絶率は一九七五・七九年ともに同じ二〇・二である。中絶法ができてから、中絶件数が増えたという批判はがい然性がない。

中絶経験者の数は、三十歳以上の女性に多くなっている。一方、十代の中絶は減少している。この点でも多くの中絶自由化反対者の言うことは事実反している。

三万四〇〇〇人の中絶を受けた者のうち七五%は初めて、つまり四人のうち三人までが、初めての中絶経験である。一八%が二度目、三回以上の者は七%であった。ひんばんに言われているような、多くの女性は中絶を避妊手段として使っているという主張は間違

っている。全体的にみて、大多数の人は避妊手段を講じていたが、運悪く、失敗したというケースである。三万四〇〇〇件の中絶数は妊娠のおよそ四分の一が中絶されていることをあらわしている。(スウェーデンの出生児数は年間十二万人)。これは、ノルウェー、デンマーク、イギリス、アメリカ合衆国など、避妊や中絶に関して、わが国と同じような態勢の国々の数字とはほぼ一致する。これは、ギリシャのように中絶が禁止されている国に比べると、ずっと少ない比率である。生まれる子どもの数は、中絶件数の半分であるという、ギリシャ、イタリアの例もある。ギリシャでは九百万人の人口のうち、二十万—三十万件のヤミ中絶がある。

3、旧中絶法の間違っていた点

中絶の是非を、女性自身が決めるのではなく、他のものが決めたため、不必要な官僚仕事が多え、その結果、

①毎年一万—二万のヤミ中絶が行なわれた。お金のある者は高いお金で中絶を受け、お金のないものは自分で編織でつきさしたり、事故や健康を害する危険があった。旧法は、典型的な階級社会的法律であった。

②官僚仕事の遅延の結果、中絶が早期に行なわれず、遅れて行なわれる事態がいつも起きた。その多くは十六—二十週目に行なわれた。しかし、今では九〇%が母体にとっても、病院にとっても安全な十二週目までに行なわれている。

③中絶許可を与える者の個人的意見によって裁量される。道徳的に批判されたり、女性にとって屈辱的なものだった。

中絶カウンセラーや医者が全力を尽して客観的な扱いをしても女性は正直に話せるものではなかった。なぜなら、中絶許可を得るため、自分は弱くて、力が足りないから助けて欲しいという態度をとらざるを得なかったから。

4、中絶を減らすための三つの道

(1)子どもが住みやすい社会——まず社会変革によって子どもが両親にとってマイナス(負担)ではなくプラスとなる政治を行なうこと、例えば、両親の労働時間を六時間に。失業の解消、子ども援助金、保育所増設等々。

(2)中絶に関し、よりよいカウンセリング(例えば、本当に女性自身の決断であることをはっきりさせる)を、中絶前だけでなく、中絶後も。

(3)性と共同生活および避妊手段についての、より緻密な情報活動を地域的活動の中に入れる。

中絶自由化を信じる者たちは、また、より徹底した共同生活教育と避妊教育を要求する者たちである。これは全国的にも言えることであるが、奇妙なことに、この必要性とは、中絶数の増加に大騒ぎする人々によって、指摘されることがめったにないのである。ここにも中絶反対者たちの意見に矛盾がある。この点は討論において、もっと、つきつめていくべきであらう。

た。例えば生命尊重であるとか、人口が減る、モラルが乱れるとか言う人たちがいるわけですが、それらの理由づけがいかにも今の日本の保守側の理論づけと相通じるところがあるんですね。それで、それじゃ、そこをバッチリ抑えた文章がどこかにないかなあ、と思って調べたところ、全国性教育連盟が出している声明文が手に入りました。一九八一年ですから言うまでもなく新中絶法導入後のものですね。『中絶に関する事実、評価、意見』という声明文ですが、これは非常に、もう笑いたくなるほど愉快というか痛快にズバリ言っています。

「基本的態度」としてまず、「母体の中にある子ども」つまり胎児と、「産み出された子ども」は、同じ人格、同じ人間の命ということでは話すことはできないのだと言っているわけです。そしてそれをさらにダメ押しする形で生命尊重にふれています。生命の絶対性を唱えるグループは一貫して強力な戦争推進論者たちである、論理と実体に一貫性がない、とズバリ言ってるんですね。そして次に、困難な状況下での非常解決手段としての中絶を減らす態勢づくりを急がなければならないが、それを、産みたくない人に産むことを強制することによって得てはいけなと言っています。これは本当にそうですね。さらに、中絶自由化の目標は、生まれる子どもはどの子も歓迎され、望まれる子どもでなければならないというのが原則である、ということです。

二番目に、「新中絶法導入後の中絶状況」が述べられています。中絶法ができてから中絶件数が増えたという批判は、事実には反すると言いつつ、次に中絶経験者の実態にふれています。中絶が多いのは三十歳以上——これは大体において結婚していたり、夫婦生活を営んでいる人たちですね。一方、十代の中絶は減少。そして中絶をした人の七五%が初めての人の一八%が二度目。三回以上はわずか七%にすぎないと、数字をあげています。中絶を避妊手段としている、といった主張の間違いが実証されていますね。

次に、出生児数、年間十二万に対し中絶が三万四千というのは、つまり出産数の中絶数よりも多いということは非常にノーマルだということです。中絶を禁止されている国、例えばギリシャでは、人口九百万人のところ、ヤミ中絶が年間二十万から三十万件に及んでいる。結局そういうことですね。

そしてさらに旧中絶法の間違っていた点に言及しています。それはズバリ、女性自身が決めるのではなく

った点です。その結果、金のある者はヤミ中絶、貧しい者はより危険な手段をとるほかない、という典型的な階級社会的法律であるとしています。また中絶許可を与える官僚仕事が遅延するため中絶がおそくなりがちで、十六週から二十週になる場合が多かった。現在では九〇%が十二週までに行なわれ、母体にとっても病院にとっても非常に安全である、ということ。反省の第三点としてくわしく書いているのが、中絶許可を与える者の個人的意見によって裁量されるということです。為政者に対し弱い者の立場で許可を得る、というふうにしななければならないのは、非常に屈辱的なことである、と言っています。

子どもも大人も住みやすい社会が中絶を減らす

最後に「中絶を減らすための三つの道」を示しています。その一つは、子どもが住みやすい社会を社会変革によって実現しよう。具体的には両親ともに六時間労働、失業解消、子ども援助金——十六歳までの子どもに対する育児手当金のようなもの——の増額、保育所の増設。その二は、中絶に関するカウンセリングの充実です。「女性自身の中絶意志の確認」は、これは、スウェーデンでも本当に大論議を呼んだところだし、今でも文句を言う人もいます。

実は私は、七五年にはもう日本に帰っていたんだけど、ここところはつれあいと大口論した覚えがあります。つまり、子育てをする男でも、子どもがほしいということを決めるアクセスがないのか、というのが彼の主張なのね。日本と違って子育てをする男がいる国でも、やっぱり最終的に女だけで決めてもいい、ということ。確かにスウェーデンの男たちには不満かもしれない。ただ日本の場合は、本当に女たちで決めていいと思いますね。というのは、未だに子産みだけじゃなく子育ても絶対的に女がやっているんだから、もう、四の五の言わせないという気がするんだけど(笑)。

そして性と共同生活および避妊手段に関する情報活動については次のように提案しています。例えば各婦人教室とか、青少年の集団、若者教室というような、地域の中に、中絶とか性に関する情報センターをつくり、そこに根をおろさせようと。

そしてこの声明文の最後に、RFSUの議長、ハンス・ネステイウスはひと言、一矢を放ってこの文章を

終わらせています。「中絶の自由化を信奉する人たちは、同時に中絶をしなくてもいいような態勢づくりを要求する人たちだ」と。だから避妊教育であるとか、共同生活、つまり男と女の関係、性と人間関係というもの、の情報をもっと多くし、教育をするということを提案し、それを求めているのはこの妊娠中絶自由化側の人たちであって、そうじゃない側の人たち——数字が増えたのだ、非行に走るのだ、それから生命の尊厳だの言う人たち——は、それじゃ中絶をしなくてもいいような態勢をつくらうじゃないか、というところにはちっとも加担しない。それはなんとという矛盾だ、と指摘しているわけです。ここにも中絶反対論者たちの意見の矛盾がある。討論においてもっと突き詰めよう、と言っているんです。

私たちの今の日本の運動のなかでもすぐに反論として使えそうな、このようなユニバーサル理論がありましたので、おもしろいと思いますご紹介しました。

しつこく、どこまでもしつこく運動を続けよう

中絶法だけをとりあげればこういうことなんですけれども、スウェーデンという国はもちろん、国そのものが人口八百万人であるというところで、小回りの利く政治体制なんです。国民的な規模で何か一つ話題になると、マスコミ——新聞、テレビ、月刊誌、その他、ありとあらゆるところでそれをとりあげ、徹底的にやるんです。ヨーロッパ流のしつこさというか。日本人はすごく熱するけど、すぐに冷めるでしょう。こんどのことだって、もしも「改正案」が国会に上がらなかったら、きっと忘れる人たちが増えてくると思うんですけど。

それがあの人たちは、もう絶対に忘れない。いつまでもいつまでも、それを繰り返し繰り返しやるわけですね。私たちは、何事もサラリと水に流すとか、丸くおさめるという、日本人の美德（と考えられているもの）を捨て去らなければ、この運動はできないと思うんです。しつこい女でなければ絶対にやっていけない。忘れない、絶対に忘れないで、時期がくればまたギャーギャー騒ぐ。騒がない間はずっと勉強していくとかね。小回りの利く国であれだけの情報をバッチリ押さえるんだったらば、小回りの利かない国での情報活動は、それこそよっぽど強い意志で続けていかなければならないと思うんです。

経済的自決権をもつから出産の自決権もある

日本では、フェミニズムというものと人工妊娠中絶とがちとも組み合わされていけないけれども、日本以外の国では、女性解放運動と人工妊娠中絶権の獲得というのは、表裏一体、ズバリそのものなんです。だから避妊教育であり、人工中絶を最終的に選ぶ権利を女性が握る、これ女性解放運動の行き着く先として必ず、当然のことなんです。

なぜ当然か。それはまさに女性の自活権というものと密接な関係があるからだと思います。つまり、自分が、一人一人が経済力をもつて生きる個人であるということ、今までのように扶養し、扶養されるという男女ではなく、女性はまず、経済力をもった一個人であるということをはっきり、社会制度の中にとり入れた国がスウェーデンなんです。だから中絶法が必要なんです。人間はまず労働人であり、経済的に独立した一個人である。経済的に独立するためには人生計画が必ずなければならない。つまり労働し続けることが計画的な人生のための、絶対に抜けてはならない条件なんです。ですから、出産も子育てもその人の経済に見合ったものでなければなりません。経済的な自決権をもっている人間が、出産に対しても自決権をもつ。労働と子産みは切り離すことはできないものだというわけです。

そこで、スウェーデンでは、人工中絶を認めさせる法律とともに、さまざまに法体制を変えてきています。つまり、税制を変えましたね。扶養家族を全部なくした。一人一人の個別課税なんです。奥さんは収入がないと食べていけないから、失業手当をもらうなり、求職のための講座を受けるための手当金をもらうなりする。常に労働人になるための人間という大前提なんです。現在はまだ労働人じゃなくても、すべての個人は健康であり、大人である限り労働する、これがまず第一の前提。そこで当然、人生計画が出てきて、そこに子産みという問題が出てくる、そういう手順です。

中絶だけをとりあげて、中絶をもって女の権利をうんぬんしてもピンと来ないのが日本の私たちの現状だと思ふけれど、それは恐らく、日本の女が経済的な独立人になっていないということを、とりもなおさず、やっぱり示しているんじゃないかと思うわけです。

中絶は「選ぶ」権利

それから、先日、△あごろVの学習会でバーバラさんのアメリカのE.R.A.（男女平等憲法修正案）の話聞いていて、私の中でストーンと落ちたものがありました。それは何かというと、イギリス、アメリカはじめ西欧諸国での中絶を求める権利、つまり墮胎罪を撤廃し、中絶を成立させようという女たちの理論づけの骨子となるスローガンね、それはいつも「選ぶ権利」なんです。例外なく、フランスでもスウェーデンでもそうなんです。

この選ぶということは何なんだろうと、私ずーっと思っていたわけです。彼女の意見はこうでした。一人の女が妊娠した。結果は、産むか、産まないしかない。どういう状況であれば産まない選択ができるかを考えた時に、絶対に選べない、産めなくなるといふことがあるんです。それは何か。不妊手術です。つまり、産むというのが「生」であり、不妊手術は「死」なんです。不妊手術をしたら妊娠することができない。だから子どもを産むことができない。だけど中絶は、妊娠することができる女性の、望まない妊娠の中絶で、どちらにも行ける、生にも死にも行ける、最後の権利を選ぶことができる権利だから選ぶ権利なんです。中絶を選ぶ権利を女性に委ねている、つまり産むか産まないかということがそこで選べるわけです。もしも不妊手術であれば、産めないという答えしか出てこない。はじめから不妊手術でも、出産でもないもう一つの選ぶ権利が、やっぱり中絶にはあるんだということが、私はその時にわかったんです。中絶という行為は当然のことながら最終的には死につながるわけだけれども、そこには、もしかすると産むかもしれない、という可能性も残してあるわけです。だから選ぶ権利なんです。選ぶ権利を中絶という言葉で代弁させているのは、そういうことだったんだ、と思ったわけです。

「性の自己管理」が性教育の最終目標

最後にもう一つ。私は、スウェーデンの中絶法を勉強した時、やっぱり法律以前に、それじゃ、スウェーデンの人たちが性というものをどう考えているのか、それをみないで法律の話だけでも、そこにま身

生きている男と女たちが浮かんでこない気がして、いろいろ調べたら、とてもいい資料が見つかりました。それは、国の広報機関から出されている『スウェーデンにおける社会と性』というパンフレットで、とってもおもしろいことが書かれています。

性教育の目的は「女性に性を自己管理させる」ことだと言うんですね。その自己管理の内容というのは、今までの男優先、女はあと、というパターンでは女はいつも性において被征服者であるというわけですね。そうではなく、性においても自発的な人間、自分が望む時に性行為をする、それが性の自己管理なんです。その一番大事なことをまず教える。それがなぜ一番大事かというと、それこそが人間の尊厳、そして人間の人間らしさというものの基礎であるからだ、というわけです。そのことを徹底的に教えることが、最終的に性の商品化をなくす道だ、と言っているんです。

また、性生活というものは、結婚しているか否か、つまり制度によってからめとられるものではないとも言っています。日本の文部省ならば決してこうは言わない(笑い)。性の個人化ということを教えているわけですね。これを私なりに解釈しますと、人間の成熟——性的な成熟、精神的な成熟も含めて——は、非常に個人差が大きい。ある人は十七歳で成熟して性生活をもち得る。ところがある人は三十五歳にならないと、あるいは三十五歳になってもまだ、自発的な性関係がもてない。六十歳でももてない人もいるかもしれない。結婚を境にして、この日から性関係、性生活がもてますよ、これ以前はもてませんよ、こういうことがいかに人間を規制しているかということも、性の自己管理と関係がありますね。つまり性の解放とは、個人の発達度において、その人のプライバシーで、その人の責任において性生活をもらいたいことであって、結婚制度あるいは何歳だからということとは関係がない。性教育の中に道徳を盛りこまないほうがいい、というわけです。この点はスウェーデン国内でも非常に激しい論議をよんだところらしいんだけど、性教育の内容は事実にとどめ、モラルとか規制はできるだけ個人に任せる方向が望ましい、つまり性行為をどう評価するかは、個人の判断に任せるという指導が望ましいとされているということです。

自立、自助の国には優生思想はない

中絶ということを考える時、必ず性行為があつて出てくる問題ですから、その性行為がどのような社会的状況下でなされているか、それに対する社会の判断はどうかということと全く切り離しては考えられませんか。スウェーデンという国は、中絶法ができた国、職場における男女平等法ができた国、また税制にしてもさまざまな社会的な条件が非常に大人向け、というより個人向けに出来ている国なんですね。自分を自助する個人。最終的に家族によって助けられるというような、他助、他力本願じゃない個人というものを褒めたたえ、その個人を社会のベースにおくということをよしとした国である。そこらへんが日本と大きく違う点だと思いますね。

個人の問題となるとこの頃いつも言われることだけど、母親が働き始めた、子どもたちが非行に走る、すべてこれらの元凶は妊娠中絶を許す制度であるかのような、とっても飛躍した言い方がある。つまり母親の、あるいは女性の解放がとりも直さず家族の崩壊につながる、という考え方が日本中でキャンペーンされているでしょう。それはなぜか。日本は「家族」を、社会を構成する最小単位としているからなんです。だからその最小単位が壊れることをものすごく恐れるわけです。だからこそ家族の崩壊であり、家庭の崩壊なのね。ところがスウェーデンでは、女が個人になる、つまり、経済的な独立権を得、性を自己管理し始めることを、家族の崩壊とは呼ばずに「個人の誕生」と呼ぶのね。私は毎年何か月かをスウェーデンで暮らし、いつもそこで、もう本当にそうなのだ、個人の誕生なのだ、と心から思い、その熱い思いで日本へ帰って来て、新聞を続くと、夜中に火事があつて子どもが焼け死んだりすると、母親はどこに、というふうに、まるで母親一人で子どもを育てるかのように、育てるところかつくったのも母親一人だったみたいで、一体、男はどこに、という気がするんだけど(笑い)。

そういう意味では、この二つの極端な国の間を毎年、私は行ったり来たりしていて、非常にイライラするんだけど、でもみんなと一緒にやって行きたいと思います。(拍手)。

A 「経済的理由」に固執するのは女性解放の立場から言えば、どうしても自殺行為に思えるのですが……。
☆ 日本の女性解放から考えると、優生保護法の五つの中絶条件のうち、優生思想に基づいたものが三つで、あと二つは社会的であり、身体的、経済的理由ですね。けれども中絶という共通項があるばかりにあと二つは無理して入れられた。そのために女たちは、その二つは欲しいけれども、優生思想そのものには反対なんだ、となるわけです。ですから、三月十三日のデモの時でも「優生保護法改悪反対」つまり「優生保護法を守りましょう」と言う一方で、「優生保護法撤廃」を、次のスローガンで言うわけです。これを同時に言うのはすごく苦しい。なぜならば、優生思想には反対である。それと同時に経済的な理由であれ何であれ、今、女性を選べる権利が少しでもあれば、残しておきたいとはね。

削除阻止という後手のやり方じゃ向こう側にいつもイニシアチブをとられるのね。だから、そうじゃなくて、これはこれで今、獲得しているものだから守らなければならぬ。そして、その運動とは全く別のところで、ストーンと中絶法というものを打ち上げて、いつかこれをドッキングさせるといふようにしないといけないのでは。運動のエネルギーがすべて阻止へ流れてしまうといつまでも向こうの出す条件の中でしか動けない。

優生保護法撤廃、堕胎罪撤廃と言うからには、その代案をつくるための動きの中に、私は少しでも入って行きたい。

B 欧米では、社会革命の中で、人権意識に目覚めた女たちが自分たちで中絶の自由を獲得したという歴史があった。日本ではなぜ中絶法を私たちが考えなかったか。男女平等も自分たちの力でかちとったわけじゃないし……。意識が大きな問題じゃないかしら。

☆ でもね、楽しいことだと思うんですよ。それこそ二十年ぐらい先に射程をおかなければならないかもしれないけど、日本の女たちの人権意識が本当に確立された時に、その証しとして中絶法ができる。気が遠くなるような長い作業かもしれないけど、不可能じゃないと思うのね。それは外からの圧力とか内からの圧力とか、いろんな形で出てくると思うけど、一番大事な「幹」となるのは私たちの意識であって、その意識がないのに外から与えられたんじゃないんです。だけでも、「時期」というものがあって、外からのインパ

クトが流れを変えることもあるんです。

「国籍法」というのがあるでしょう。みんなは国籍法は自分たちにはあんまり関係がなくて、外国人と結婚した人だけに関係があると思っている。私自身もそうでした。ところが、国籍法を読むと、「日本国民の男子が国籍を継承できる」とあるんです。

私は、たまたま日本人じゃない人と結婚したからといって国籍を変えることはない、と思っている人間だから、日本人のままいわゆる「国際結婚」をしているわけです。つれあいと子どもは外国人登録していて、住民登録をしているのは私一人、つまり、私は一人で住んでいることになっているんです。つまり、私たちの親子関係を示す文書は、どこにもないんです。その理由は、母親である私が子どもにも国籍を継承できないということなんです。外国人と結婚したから日本人の女性の女性が国籍継承権をとりあげられるわけじゃないんです。そうじゃないの！ 初めからそんなものはない。皆さんの場合は夫が日本人だから気がつかないが、私の場合にははっきりわかる。ただその違いだけなのね。

そのことを私は『国際結婚』という本の中に書いたり、△国際結婚を考える会▽△国籍法研究会▽ともども発言し続けてきたわけです。

そして、ちょうど婦人差別撤廃条約にも、国籍の父母両系主義がうたわれているため、国籍法がどうしてもそれにひっかかる。しょうがないから男女平等法にしようという動きに変わって、この二月一日法務省が父母両系主義の試案を発表したんです。それは本当に時の流れというか、時が熟して、私たちの発言がストンとドッキングしたということね。

中絶法も、私たちがグッと固めていって、そして何かの形で国際的に、あるいは国内的にクローズアップされたその時に、墮胎という問題を人権との関連においてバーンを出すことができるかもしれない。もちろん、歴史を変えるなんてことはなかなかできないことだと思います。でも国籍法で言えば、私たちの発言が時の流れにうまくドッキングして、法律を変えることができたんですね。

C スウェーデンも、一九三〇年代には、優生保護法があったわけですが、優生思想は、現在もう全くないのでしょいか。

好評19刷 ことばが 劈かれるとき

竹内敏晴著 1500円

こえの問題は、発声器官だけの問題でなく、からだ全体の問題である、からという立場から、著者の実践を通して書かれた。言語障害者、親、教師等に読みつかれ語りつかれるロングセラー。

重版出来 女性と天皇制

加納実紀代編 1700円

日常生活と天皇制の関わりを、世代、職業、暮らす地域の異なるさまざまな女性たちが、自分の生活をのぞきこむようにして書いた。天皇制に対しこれまで欠落していた新しい視点を堀り起こした。

『思想の科学』

●女性問題特集●

いま、主婦とは何か
1977年5月号 340円

生命を表現する女たち
1978年8月号 340円

女が大地に立つために
1980年8月号 460円

社会構造としての性差別
1981年2月号 480円

なぜ恋愛か？
1982年1月号 520円

女が女を見る
1982年5月号 580円

「母親」は必要か
1982年11月号 570円

伝記に見る女の子
1983年4月号 640円

雑誌B.N.の送料は、1冊50円、2冊60円、3冊70円、4冊以上小社負担。

思想の科学社

東京都文京区後楽2-16-2
電話813-1745 振替東京5-89072

☆ 完全にはないとは言えないでしょうが、言えば反発される状況ですね。この二、三年タカ派の人たちが、国家財政の面から、身体障害者のための予算が大変な負担だから、今後は羊水チェックを徹底的にやって、障害児を産まないように規制しよう、と国会内で動いたのね。それに対する反応は非常に大きく、私が昨年夏スウェーデンに行った時は、すでに一年数か月にもなるのにまだ討論が続いていて、新聞のコラムなんかにも週に一度ぐらいの割で出てくるわけ。それは、具体的にはダウン症を対象とするものなのだけれど、障害者の側からは、生存権を奪われるということで、大変な突き上げがあるということです。

この問題、とても複雑だと思ったのは、スウェーデンのように社会福祉が徹底していて、身障者への住居手当、職業訓練、そして介護人の給料も十分に支払われる国であつても、次のようなケースがあるんです。希望者は三十五歳から羊水チェックを受けられるのですが、三十四歳と数か月だったため羊水チェックを受けられなかった女性が、子どもを産んだら、ダウン症だった。そこで彼女は裁判所へ訴えたんですね。生まれた子どもは可愛いが、おなかの中にいた時には中絶を選べたはずだ、というのが彼女の意見なわけです。それに対しては、反対意見が少なく、賛成意見がほとんど新聞に載る。母親たちの側から、やっぱり苦労が多いし、ほかの子どもたちにも大変な負担をかける。羊水チェックの段階でわかれば、産まないにこしたことはない、という声が出てくる。そこらあたりが非常に難しいところね。(やんそん・ゆみこ「文筆業」)

(一九八三年三月二十四日「あごろ学習会」より)

これからどうする優生保護法

岩月澄江

(’82優生保護法改悪阻止連絡会)

金住典子

(弁護士・婦人共同法律事務所)

金子みつ

(衆議院議員)

斎藤千代

(あごら編集部)

堂本暁子

(TBSディレクター)



原田恵理子

(優生保護法改悪に反対する
三多摩の女たちの会)

福本英子

(文筆業)

松原純子

(東大医学部講師)

松本恵美子

(’82優生保護法改悪阻止連絡会)

ヤンソン由実子

(翻訳家)



司会・あごら編集部

●優生思想そのものが問題

編集部 優生保護法改「正」案の今国会会程は、一応見送られる状況になりましたが、といて問題が終わったわけではありません。私ども『あごろ』編集部では、「経済的理由の削除阻止」だけでいいのだろうか、問題の本質はむしろ優生思想そのものにあるのではないかと考えて、四回の学習会を重ねてきましたが、その集約として、今度は、会員以外の方もお迎えして、問題の本質や、これから展覧を話し合ってみたいと思います。

まず、この問題をそれぞれどう受けとめたかというあたりからうかがいたいのですが。金子 私ども社会党で一番問題にしているのは、「優生」を保護し、「劣生」を淘汰するという思想が、いまだにこの法律の中に残っているということ。優生保護法という名前そのものがおかしいし、全面的にひっくり返さなければ、と考えると、一九七四年の六月に、「受胎調節・人工妊娠中絶及び避妊手術に関する法律」を、党内で第一試案としてつくり、「受胎調節・人工妊娠中絶・避妊手術は個人の意志によって行なわれるべきだ」とい

うことをはっきり打ち出しています。それ以来、ずっとこの考え方で来ています。いま出されている改「正」案に対しては、ことしの党大会で全面的に反対、と決議しました。党としては意志の統一がなされています。できればこの第一試案を練って、皆さんの意見を頂き、さらに検討を加えて第二試案を作り、国会に上程しようと考えています。

この法律の改正は、過去に何回か出ていますが、その中身は受胎調節指導員の任期を五年ずつ（時限立法なので）延ばしてきただけです。その時にこの問題をぶつけようと思ったのですが、皆ふれたがらない。逃げ腰でした。

編集部 皆とは誰ですか？

金子 国会の中の委員たちです。正式の場ではなく話し合ってみることがよくありますが、これはふれたくない、ということがよくわかるんです。

編集部 なぜでしょう。

金子 めんどうで難しいということね。おかしいと思うのは、この問題は婦人の問題だと

理解している。男の議員さんたちは……。ヤンソン 「受胎調節・人工妊娠中絶及び避妊手術に関する法律」では、党全体の同意がとれている、とおっしゃったけれど、男性議員もよく理解しているのですか。

金子 ああ、そのこと？ 私が所属している社会党の社会労働部会では、説明してわかってもらいました。それ以外の人は教育するチャンスがあったわけではないので、ことしの党大会で提案し、説明して、党として改「正」案に反対決議をしたわけです。率直に言っても全議員が本当にわかっているかどうかはわからない。ただ今度は、男の先生のところにもぜひぶん質問が来てるらしい。こちらにも電話がかかってきます。その後の動きはどうなってるかと……。いいチャンスなので話をしています。

斉藤 ところが地方議会では、革新系の議員も改「正」案推進決議に加わってるところがあるんですね。何が決議されたのかよくわからなくて、生命尊重ならいいだろうと……。松本 日野市もそう、松戸市も……。

金子 ええっ、ほんと！

ヤンソン 党の方針は地方に伝達されるわけですね。その時になぜ伝わらなかったかとい

うと、子産みの問題は婦人問題、婦人問題は男性議員がタッチしなくてもいいという暗黙の慣習があるからじゃないですか。

金子 そうね……。慣習と言っているいかどうかわかりませんが、たとえばトルコ風呂の問題、個室における異性による役務提供をや

● 遺伝子操作の危険性も考えよう

福本 私は前回の時は、まだ自分のことで精いっぱい、問題を深く考えてなかったんですが、今は、AあごらVの説と同じく、優生思想そのものを成り立たせている土台を見なければいけないと思っています。

何でしょうがないかというと、生命の尊厳そのものは当たり前ですが、それを優生保護法の上のせて言う、生命尊重の意義がうさんくさくなる。玉虫色に変わってくる感じがします。中絶するかしないか、そこだけ見たのでは問題の本質を誤る感じがする。私自身、生命尊重をもってこられても、反論するにも反論のしようがない、たとえば向こうは、受胎の瞬間から生命が始まると言っているわけですが、その瞬間から始まるのではない、という論法にうっかり足をとられて入っ

めさせるよう、公衆浴場法の一部改正案を国会に提出してあるんですけどね、こういう問題の場合でも、これは女性の問題と考えるのね。とんでもない、これは男性の問題よね(笑)。そういうふうに一事が万事、与党といわず野党の中にもあるんですね。

ていくと、遺伝子操作と体外受精が入ってくる。いま体外受精をやっている日本産婦人科学会が、その論拠をどこに置いているかという

● 中絶は人間の基本的権利

ヤンソン そのとおりですね。新しい科学の分野でまだ合意がとれてないところを論拠にしては危ないということは本当によく覚えておかねばならないと思いますね。

今度の中絶の問題でスウェーデンの制度を少し調べてみました。ところが、法律の名はズバリ中絶法。しかもどんな条件もつけない。理由を言う必要がないんです。意志の表明と、十二週間以内であること、母体の危険の有無はもちろん医師がチェックしなければ

と、オギャーと生まれるまでは人間でないと言ってるんですね。受胎の瞬間から生命が始まるのはおかしいという論の延長として、体外受精や遺伝子治療がいいということにうっかりすりこんでいく。医化学的な危なさがあるんです。遺伝子治療は受精卵を使ってやるわけだし、状況としては遺伝子管理、出産管理につながっていく。胎児をチェックする流れになる。生命尊重論とか、胎児はいっから人間かという議論にうっかりのるといけない。そのためには優生思想そのものを見ている感じがしてしまいます。

ならないし、病院で、資格のある医師が中絶しなければならぬという条項はあるけれど、何を根拠にするかというその根拠は、まさに女性の意志だけという法律が世界ではつくられているんです。

日本からみると極端な例かもしれませんが、今のうちに、何かの条件に合えば許されるのでは、その条件を変えられる度にあわてふためくことになる。条件に縛られることなく、人間の基本的な権利である、個人が決める

ることである、という観点で、中絶の問題を考えていくことを私は提案したいんです。

婦人問題として、女を、所属しない、従属しない性、という目でとらえていくと、どうしても経済的な自立が必要になる。その経済的に自立した生活は自分のパンは自分で稼ぐという生活をつくるためには、人生を計画する決定権がそれぞれの個人になければならない。妊娠や出産で障害を受けない生活、最終的に女の権利が確立しなければ、いつまでも、あなただけの人生になってしま

●十年後に、また繰り返したくはない

松本 私は、これは大変だ、こわい、ということで運動を始めたわけだけど、簡単に言い切れないことがたくさんあると思う。

たとえば「中絶するのは人生を決定する一つだ」という言い方をしたとき、「何の保障もないところでは権利ではない」という言い方もあると思うのね。性の問題とか、男と女の関係とか、経済の問題とか全部ひっくるめて考えていかないと語れない。——語れないことはないけど、ギューッと煮つまったところに中絶の問題があるのだな、と感じる。私

う。決して国家が管理すべき問題ではなく個人の問題です。どんなに人口が衰退して国や産業が衰えようと、国家が介入することではない。スウェーデンも、他のヨーロッパ諸国と同様、人口が減少してきている。そのなかで中絶を認めるのは自分の国の経済力を弱めるという見方もあるかもしれませんが、コンピュータ時代で、人間の数イコール国力という考え方を要する新しい段階に入っているときに、人口論を持ち出すことはおかしい。生命論者の盲点ではないでしょうか。

は、それはやはり女にかけられた攻撃だと思うし、私はそこから出発するしかない。現実的に、今でも狭い女の生き方を、もっと狭くしていくものであると思う。

「経済的理由の削除」を阻止できたらそれでもいいのかと言われると困るけれど、まず阻止する。阻止する運動を女たちがつくっていくなかで今後の運動が方向づけられていくんじゃないか。堕胎罪撤廃、新しい中絶法をつくるという新しい展開していくには、運動をするなかで女がどういうふうに物事を考えて

いくか、実行していくかということに今後がかかってくると思っています。

優生保護法改悪反対運動を始めてもう一年になるんだけど、最近よく思うのは、この前はまだ大学一年で国会にも後ろのほうからトコトコついて行ったんだけど、十年たって今度もまた同じ問題をやってるでしょう。ここで阻止しても、また十年たつと同じことをやるんではくやしいんで、具体的に何をやるのかを考えていかないとまずいな、と思っています。



●自分のからだは自分で決めたい

岩月 「産む産まないは女が決める」というスローガンを旗に掲げて集会などを開いたわけだけど、それに対して意外と反発する女の人が多かったのが私にとっては驚きだった。「相手の男も決める権利がある」とか、男が、「自分も子どもに関わっている」なんて言ってくる、からだは女性のものになってないということを表わしているにすぎないと思うわけ。自分が痛い目にあうんだし、自分からだをコントロールしながら出産に臨んでいくのだということを見せざるを得ない、これに関してだけはそこだけ自分のものだ、と思いはらんでる段階では自分のものじゃないという意識は、国籍法の父系主義と同じものがまじっている気がする。つまり、精子と卵子では精子のほうがランクが高いというような考えが反映されていると思う。それは何を下地にしているかというと、今までの、女の道、女の人のすべきこと、があるんだと思う。私なんか中絶したとき、相手の親から「孫を殺した」というんで何日も正座して「女の道は何か」というのを聞かされたんだけど（笑い）、

家を守り、夫を助け、子どもを育てるという女の道にひたっていると、「自分のからだは妊娠したんだ、自分の一番いい条件のときに出産するんだ」ということに気がつかない。「妊娠させていただく」「育てさせていただく」ことをやりこなすことでしか女が評価されないとどこに置かれていたことが払拭されてないから、女が決めることができないんです。今度の優生保護法のことでも実際にどう説明していいのかわからない。まず優生思想の話をすると、たいいていの人は、そんなバカなことではないと言うけれど、それは自分が普通の子どもを産んでいるからで、「自分の子は障害者でなくてよかった」ということがポロツと出てきたりする。望んで望んで子どもを産んだという人だと、やっとちがう意見が

●障害者と敵対しない運動を

原田 優生保護法を女性の権利の問題としてとらえるべきだとは思いますが、私自身障害者施設で働いてまして感じるのは、ス

出る。つまりそれほど大部分の女はハズミで子どもを産んでいる（笑い）んで、まずは私たち自身が、望んで子どもを産む、自分のことは自分で決めるということが先。こうなると、新しい中絶法をつくるしかないのではなにかと思う。優生保護法の後手に回るんじゃないって、何を主張したいかをこちから出して討論していかないと、自分のからだを取りもどせないことになるし、お情けで少し使いやすい法律をつくっても仕方がない。これまでに女の人の置かれていた土壌を見きわめるためには、中絶法というショッキングなことばを出し、その中身は実はこうということなんだとやっていくほうがいいと思うの。今の性差別は全部同じルールなのだから。一番先に手をつけるのは、やはり、自分のからだは自分が感じ、自分が知っていくことだと思う。後手の阻止よりも、何を主張したかを打ち出すべきだと思ってます。

ウェーデンの国のあり方と日本とは天と地ほどの差があることです。

スウェーデンの福祉が最高のものだとは思

いませんが、障害者も一人の人間として生きていくことが当たり前だと考える国と、優生保護法が存在する日本のように、障害者は人間ではない、基本的な人権が認められていない国では、もともととの地盤がちがうように思います。そういうことと、女性が自分の権利を

● 誰でも「望まない妊娠」

松原 私は産婦人科の専門ではないんですけど、主として医学的な立場から考えてみたいと思います。

私自身主婦であり、子どもを産み育ててきたわけですが、女は十三、四歳で初潮を迎えてから、五十近くまで、毎月月経があり、約三十五年も生殖能力があるわけです。でもその期間の中で、自分のからだの状況から考えても周囲の条件から考えても、本当に子どもを産んでもいい、育てていけるという期間は、ごくわずかに限られています。まして私どものように働く女性にとっては、産みたい時は非常に限られている。それ以外の時は原則として家族計画をしなければならぬわけですけど、かなり専門知識があつて注意深い女性でも、妊娠という行為は夫との共同作業のわ

主張していくことが決して敵対視し合うことになってはいけないうし、他人を踏みつけにして自分の権利を主張することは決してあってはならないことです。そこを含めて考えていかないと、ちょっとおかしいなアという気がするんです。

の可能性がある

けですから、厳密に条件を合わせたコントロールが必要で、完全な避妊対策を実行したとしても、ちょっとした手ちがいでも本意な時期に妊娠する可能性があるわけです。私自身も中学生のころは妊娠の恐ろしさを知らずに生活してたんですけど、恋人ができる年齢になってからは、特に未婚の時は、父母にも言えず毎月ひそかに心配してたという経験があります。いよいよいつ産んでもいいという状況になつても、自分自身が産みたくないという時もあるし、本当の自分の責任において子どもを育てたいという、最も人間らしい判断をする時でも、現実にはいろいろなことで本意な妊娠をしてしまう可能性がすべての女性にはあると思うんです。仮に私が完ペキな避妊の知識を持っていたとしても、なおかつ医

学上のおとし穴があります。一〇〇%確実な避妊法はまだないと言われてるんです。コンドームなんていうのは大変安全だと言われてますけど、女自身がつけるわけではないし、接着の仕方などで安全でなくなることもあるんですね。ですから、経済的理由以外許されないというのは非人間的なことだと思う。今回の問題から政治的な問題を仮に除いたとしても、優生保護法の問題は女自身が言わなければいけない性質のものだと考えています。

もう一つの問題は、現行の性の退廃が法律でなおるものではないということです。もっと大きな社会構造や教育システムとか男女のあり方から来ているわけですから、法律だけ改めてもなおるものじゃない。私もフェミニストだと思ってますから、もちろん女権は大切だと思ってますが、そういうものを理解しない一般の人でも、いま言った二つの理由だけでも十分理解できるわけで、できれば一部の先鋭的な反対運動よりも、女性自身に問題の最も当たり前のところを理解していただくのが大事なんじゃないか。そういうことをきかけとして女自身が自分の性をみつめて自分自身の発言をするという地道な運動に発展させていったほうが、結果としてはフェミニ

ズムの目的に近づくのではないかと、私は考えています。

岩月 自分自身の性を見つめて、ということは、産む性を見つめてということですか。

松原 いいえ、産む性というより人間そのものの、ということですよ。人間というのは、何を

● 人権が侵される社会基盤に脅威を感じる

金住 自身は、十年前の時は動きとしてだけとらえていて、今回はじめてトータルな意味で考え、真剣に取り組んでいるということですよ。

最初に驚いたのは、性差別撤廃条約に我が国も署名しておきながら、性差別撤廃条約の精神に反することをパッとやれるという日本の法意識、文化意識。ハレンチもいいところなのに、なぜ起きるのかということですね。世界の流れが変わっている時に、根本はちっとも変わらず、形だけいいかっこうするために動く体質が日本に強烈にあるのかしら、と。いま問題になっている平和をどうやって守るかといったことと、ある部分で深く結びつく問題で、よほど腹をすえて考えていかなければならないな、というのが第一点です。

するのにも自分の心と頭を使って行動するというのが、女にとっても男にとっても基本的な大事なことでしょう。女としてよりも人間として自分の行為に責任を持つためには、このような法律があると困るのではないかと思います。

私個人の仕事を含めた生き方から言うと、私は弁護士として人権を守って戦っていくというのが仕事であるわけですけど、私の人生から考えるなら、女であるという部分はやはり不可分に存在している。そんな中で人権を守るという職業をトータルに統一していくという姿勢ですと生きてきたわけですが、女の人権をすっきりと確立させて考えていくのは、何と難しいことかと思えます。法律家である私がこんなことを言うと、「何だ」と言われるかもしれません、実際の問題として本当に難しいと思うんですね。少し前に、雇用平等法案をめぐって「保護か平等か」という問題が出てきた時でも、母性を大事にするれば平等をどこか犠牲にすべきだという感覚がずっと出てくる。今回の問題でも、「胎児の

生命尊重」ということが世論ですーと流れると、「女性の人権」なんていう考え、女が中絶に追い込まれる立場などは吹き飛んでいく。

もっと恐ろしいのは、高齢化社会になって人口政策だということになると、何かそっちのほうが重要なことになって、国家があつてこそ国民の人権があるような発想が生じてくる。基盤が私たちの中には否定しがたくあるのではないかと痛感することです。自身は自分の生き方として、一人の人間として女性としての生き方をふみしめながら法律という人権を結びつけて生きてきましたが、法律家として感じはじめていることは、第二次大戦前までの人権と戦後の人権を、質的にちがうものとしてきちんととらえるべきではないかということですよ。というのは、世界人権宣言、また日本国憲法では、平和ということとは全人類の生命を守っていくことだという、正に普遍的な人権思想に立って、平和のためには基本的人権を確立し、認め合うことが大事だとうたっている。基本的人権の確立と差別撤廃は不可分な関係にあるということを、憲法の前文でも世界人権宣言でも明確にうたっている。そのへんの思想の転換というか発展をも

う一遍深める中でこの問題を考えていくと、男とか女ではなく、今の世の中全体のありよ

うまで展望した人権論が深まっていくのではないかという問題意識を持っているのです。

●当事者ぬきの法案に不安を感じる

堂本 私も十年前にはあまり知らなかったのですが、今回はテレビの取材を通じて、背中がゾクゾクするほどこわいな、と思ってる」とこ

ろです。



第一の理由は、政治と国民の考えがズレることは往々にしてあることですが、今回のように極端にズレることはない、ということです。優生保護法関係の委員会には、できるだけ出てみました。そこで展開されていることと、皆さんが話し合ったり議論されていることとがあまりにも違いすぎる。その極端な差がこの問題の一番のこわさだと思っています。たとえば予算期になると、必ず私立学校とか米の問題とか、利益代表の陳情団が出てくるわけですが、今度の場合は、女性ではなく宗教団体の陳情で女性の問題が討議され、そこに、当事者である女性、医師、看護婦、助産婦、保健婦がいない。へ生長の家Vには医師も看護婦もいるかもしれませんが、全国的な規模で医師会や看護協会が反対しているなかで、法改正の方向に政治が進んでいく。この問題を六十年やってこられた加藤シズエさんが、「選挙の度にこの問題は出てくる」

とおっしゃってましたけど、目の前に迫った統一地方選挙、参議院選挙を前にしてのキチガイ的な行動なんですね。なぜかという、金と票が動くということなんです。金をもらったほうは、何としても約束を果たそうとするし、そこには当事者としての女性が浮上してこない。自民党の中にも反対する議員連盟ができましたけれども、なおかつ問題が隠密に進んでいる。なぜオープンにされないのか。オープンにされさえすればいろいろの討議される場があると思うんですけど、審議会にもかけられない。厚生省も両方からギャンギャン言われてどっちにも何も言えない立場に立たされている。すべてが隠密に進んでるんですね。

きのう、福岡に行つて向こうの事情を聞いたんですが、福岡でも、ある日突然、誰も知らない間に県議会に提案が出された。で、あわてて婦人団体とか医師とかが、もう二十四時間ぐらいいし時間がなかったらしいんです。各議員を回つて説得し、与党も切りくずして、四十四対四十四に持ち込んで、たった一人の婦人議員が事情を説明してやっと審議終了にしたというんです。そういうふうに抜き打ちに、全く知らないところでバツと出され

て知らない間に議決されちゃう。福岡の場合でも、女の人たちが各議員のところを回った
ら、「ああ、そういうことですか。誰々さんに頼まれたので賛成しようと思っていたところでした」と、内容も知らず、「誰それに頼まれた」ということでどんどん決まってい

てた内情がわかったわけです。
どここの市町村でもそうで、ただ産婦人科の医師がいるところでは何とか食い止めた。市町村段階から国政レベルまで、一年か二年かけてそういう根が張りめぐらされてきてるんです。

● 自分の内なる優生思想を洗い直したい

斉藤 皆さんがおっしゃったように、この問題は本当に根が深い。にもかかわらず、みんながどれだけ知っているかということですね。

この問題が浮上した時、私が真っ先に思ったのは、しまった、というか、やられた、という気持ちです。十年前、田中寿美子さんが、「優生保護法はナチスの断種法に学んだ国民優生法の流れをくむ天下の悪法だ」と強調しているらしいのを聞いて、なるほどと思い、『あごら』の8号、19号などでも繰り返し取り上げたのですけど、私自身、からだの細胞のすみずみまでしみわたる考え方をしてなかったというのを、すごく恥づかしく思いました。高齢化社会、軍拡路線の中で再浮上した、というふうにはすぐにピンと感じるのだけれど、なまじ表層的な知識があるということ

は、かえってモノを見えなくする、痛覚をにぶくすると、反省しています。この問題を本当の意味で「知っ」たら怒らずにはいられないと思うし、怒れば行動せずにはいられないでしょう。九年前、火種があることを知りながら、提案が否決されたことに安心してしまっただけ。それはなぜか、と考えると、優生思想が、社会にも、そして私自身の中にも満ち満ちているから、というように思えてならないんです。

この優生思想というのは、調べてみると、ダーウィンの進化論、メンデルの遺伝の法則、そしてマルサスの人口論と、さまざまな思想を基にしているのですけれども、それだけではない、もっと奥深く人間の胸にひそむ差別の思想と言いますか、少しでも劣ったものは

いやしむ思想、自分だけは這い上がりたいたいという気持ちと深く結びついてるんですね。自分がこの九年間、積極的に行動しなかったのは、自分自身の中にもやはり優生思想があるからではないか、それをとらえ返し、洗い流すことが何より必要ではないかという気がしています。

そういう意味で、私は「経済的理由の削除阻止」だけでたかうのはおかしいと思っていますし、「生命の尊重とは何か」を、本当に考えたいと思っています。

さつき原田さんが、中絶法がつくられたスウェーデンと日本では社会の基盤そのもののがちがうので横すべり的には考えられないとおっしゃったけど、たしかに、日本では独立した一人の人格を認めるということが確立していない。誰かのベアとしての女でしかないというのが一般で、そんな中で女自身にも未熟な部分もたくさんある。私たちが提唱する中絶法が国民的コンセンサスを得るためには、女や障害者の自立を阻害しているさまざまなものを取り払っていくことと同時に、女が本当の意味で自立し、自律することも必要ではないかと考えています。とても大変なことですけど……。

●燃えあがった火は見えなくなったけれど

編集部 一人ひとりの立場からだけでも、たくさんの問題が出てきました。どの一つをとっても、一晩かかっても討論し尽くせない内容ですの、**「これからどうすればいいか」**に焦点をしばって話し合ってみませんか。

まず「話したいことは山ほど」とおっしゃる堂本さんに、取材の過程でごらんになったこと、お考えになったことなどをうかがってみたいと思います。

堂本 この九年間なまけてたということを私も非常に反省してゐるんですが、九年前と事情が違っているのは、自民党の中にも亀裂があるということでしょうか。とくに医者とか看護婦、保健婦といった人たちがたいへん怒っているということですね。産婦人科医の立場と女性の立場はたいへん違うところもあるけれど、なおかつ産婦人科医というのは女性の実態を一番知っている。だからその現場で言われることはズシンと来ますね。妊娠五回中絶三回子ども二人といったカルテがダーッと並んでいて、妊娠二回、子ども二人というようなカルテはバラバラとしか入ってないの

を知ってる医師たちは非常な憤りを持っている。福岡県で県議会に立っている社会党の女性議員の運動に、産婦人科の医師が必ず来て応援している。社会党のほうでびっくりしているんです(笑い)。

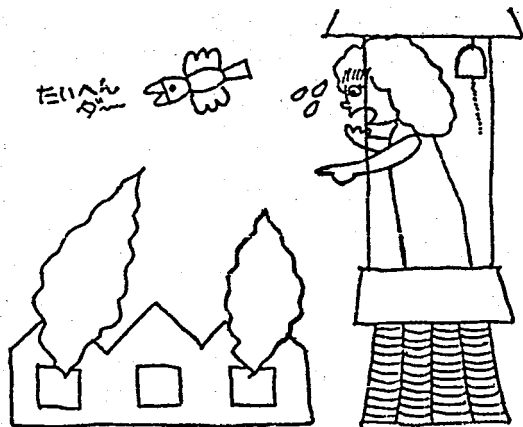
もう一つ、政党、宗派、イデオロギーを超えて女性が団結しているということ。四十八団体が動き、リブと関係のない婦人グループも動いている。婦人の人権と言うか、基本的人権の本当に根源的な部分がないがしろにされるということに危機を感じている。高度経済成長の中で家族が変わった、性文化も変わった。いろんなものが変わったのに対応して、女性の自立とか、医学的なあり方でも、先取りするくらいに対応して、住みやすい社会をつくる足がかりにしなければならぬのに、明治に逆行するような傾向があることに非常に危機感を持つと同時に、今までと違った動きをしている。生きやすさを求め、ごく当たり前の権利を求めて、イデオロギーを超えての胎動がある。政党とか運動を超えて……、こういうところから逆に新しい動きが芽ばえ

るんじゃないかという気がします。

ただ、あまりにも時間がない。この間、自民党内の賛成派と反対派がけんか別れになったあと、賛成派が「今度の臨時国会では間違いない出すぞ」とエレベーターのところでわめいてたそうですけど、向こうはもう本当に爆発的になっている。それに対して女性がこの際本当に爆発できるか。もう時間もないし、今という時しかない。この機をはずしたらどうなるのだろうかと思う。そのためには、いろんな形で火をつけていかなければならない。どんどんどんどん燃やしていかなければならない、というふうに思っています。斉藤 阻止に成功した、やれやれ、では困るんですね。改悪される、火事だ、火事だ、ということで大騒ぎした。それはよかったんだけど、一応火が見えなくなった。鎮火じゃない、隠火、潜火かしら(笑い)。だから運動としてはすごく難しい時期に来てるんじゃないでしょうか。火事だ、火事だ、と言っている時はわりと大同団結できるんだけど、これからは本質論をよっぽど押さえておかないと小さな違いだけが目立つことになりやすい。堂本 火事だ火事だって騒ぐでしょ。だけどその火事を消しに行かないのよね。発見はす

る。あすこも燃えてる、燃えてるって、火の見やぐらにさがって見てるみたいだね。だけど飛んでって消さないのね。そこに問題があると思う。

ヤンソン 飛んでって消す主人公になる、その自信がないっていうか……。今まで、飛んでって消すのは、自分の人生を自分の手で握ってた人たちだけじゃないか。水を汲むのをお手伝いするのさえ、ひょっとしたら邪魔か



もしれないって(笑い)いうあり方が問題。

金住さんが、第二次大戦前と後と、人権意識の違いがあるとおっしゃったけど、日本の憲法は変わったけど、社会通念はどれだけ変わったか。日本のような集団心理の国、個人主義を大手をふって主張できない国で、はたして人権意識が根づくだろうか。それを私たち一人ひとりの中に問わなければならないと思う。

堂本 そのチャンスではあるんですね。今こそね。今という時以外ない。

斉藤 こういうせっばつまったところで考えないと、女の人の自立なんて言っても、絵に描いた餅ですものね。

スウェーデンでなぜ中絶法が可能かという、すべての女が経済的に自立していて、自

●「中絶法」をつくる一

方、ヤンソン あるラジオ番組で、厚生省の役人は、「この問題をどう思いますか」って聞かれて、「もう十年待ちましたからね」って、スバッと、それだけ言っていました。だから今度通らなくても、必ず、十五年待ちましたから、二十年待ちましたからって、絶対言い

方、性教育を

始めると思うわけ。

その時に、「それっ」て言うんで水を汲んでたんじゃ、いつもいつもシーソーゲームですからね。火を消す準備をしている人はいくつも必要だけど、同時進行で中絶法をつくる。中絶法という名前にするかどうかは別とし

助の精神があるということが、優生思想そのものをね返してるんだな、と、この前ヤンソンさんの話を聞きながら思ったんだけど、障害者は障害者なりに生きる道があり、みんながそれを尊重することで優生思想をなくしていつて。だから、中絶法ができたんですね。その違いを無視して中絶法を形だけつくろうとしても、また「翔んでる女が勝手な法律をつくらうとしてる」なんて悪宣伝の材料にされる危険がある。本当の意味での国民的コンセンサスを得るためには、女の人たちがまず自分を知る、自分のからだを知る、そして自分のからだを自分で管理するということをきちんとやっていかないと、共感を得にくいし、法律ができて、ほんとに私たちのものにはなっていないと思いますね。

て、独立した法律として作ると、これが墮胎罪撤廃にもなるわけ。墮胎罪にぶつけるよりも優生保護法にぶつけるのがいいと思うの。優生保護法をつぶして中絶法をつくれれば、当然ながら墮胎罪は存在できない。

「経済的理由削除阻止」というのは、あくまでも優生保護法の一項目を活かすことにすぎない。代案ではないわけですよ。やっぱり代案を出さなければ。

金子 だから、「受胎調節・人工妊娠中絶・避妊手術に関する法律」を提案する必要があるわけよ。

ヤンソン ところが二月に発表された、社会党の「女性のための行動プラン」では、その少し前に田中寿美子さんが四十八団体の集会でおっしゃった新法案の提案の線は後退して、「問題なので検討する」という、非常に押さえた表現になってるんですね。また法案そのものも、だんだん聞いてみると、七四年の時のままだということだし……。

金子 新しい試案を皆さんのご意見を聞き、ぜひ完成させたいと、検討しているところで

金住 まだ完全に安全な避妊法がないという条件の中で、中絶法が必要なわけですが、一

方では、人間が性行為を行なうというのは、まさしく人間的なことなんだから否定するわけにいかない。それをもっと豊かに展開させるためには、人権思想が不可分なわけだけど、それを含めた性教育もすめながら中絶法を出していかないと、日本では抵抗が強いんじゃないかという感じがするんです。両立でいいかないと。

金子 そうね。それは、いま構想を練ってる法案の中にたたみこめるのよね。この法案は

●中絶法をつくるだけではないのか

岩月 国会というのを見ると、私たちの知らないところで、しかも当事者の女のいないところで話されたり、差別撤廃条約にはメンツだけで署名して精神を尊重しないとか、そういうふうにして出来てくる法律はすぐあると思うのね。そのなかで優生保護法の改悪に対しては火をつけた。火は広がった。これから何か見えるっていう時に、私なんかはポコッと法律が出てこないわけ。中絶法だっ

て、そりゃ墮胎罪が撤廃になって優生保護法が撤廃になれば、後は医者がかもうけないようにとか、女のからだを守る法律が必要だとは

基本的人権を土台にしてるから、まず、目的のところで、人工妊娠中絶は女性の意志で行なうということをはっきりうたい、この目的を実現するために、性教育の問題とか、避妊の具体的な指導も含めていきたいと思ってます。

七四年案では、夫の意見を聞くということになってましたが、それは女性の意志で決めるというのとは矛盾すると思うので、改めした。

思うんだけど、内実が伴わない法律をつくらたてしょうがないと思うわけ。私たちの意見が反映されないところで物事が決められていくという現状を認識したうえで、いま全国的に広がった運動をどうしたらいい方向に持っていくかっていうと、私は、「法律には法律」じゃないって気がする。何ていうかなア、何だろう。

金住 何だろう。

岩月 何だろう。私は運動論のほうが……。

堂本 それはタマゴとニワトリの関係で、私たちが求めている理論が何かきちんとわかっ

たうえでそれが法制化されれば一番いいわけでしょう。それを求めて運動していくわけだから、まず、そのタマゴの部分を引きちとつめていかないといけないと思うのね。

福本 いきなり法律論議を出されても、私の中でも飛躍があつて、自分の法律になつてこないって気がするんですね。いま火がもぐつたとしたら、次の段階でやらなきゃならないことは何だらうなつて考えてみると、法律つくる前に、障害者との連帯ができるかどうか、もう一つここで問うてみなきやいけないって気がするのね。なぜかつていうと、今の段階で中絶法をズバッとつくつたとしたら、障害者団体から必ず反対が出ますし、私でもやっぱり反対すると思うんです。

というのは、障害者自身の人権も、優生思想も、そこで何も問われなと思うんです。

私、厚生省にしつこく何度も行って、その、私が一番気になる部分を聞くんですけれども、つい一週間ほど前も、「経済条項を削除するだけじゃないんだ」と、はっきり明言したんです。この次には必ず胎児条項を入れるんだと、かなり力説してました。生長の家は胎児条項入れることにはちつともこだわってなくて、経済的理由だけ削ればいいわけでは

けども、厚生省のお家の事情から言えば、それだけで改正する気はさらさらない。厚生行政とはなじまないんです。必ず胎児条項が入つてこないかと改正の意味がないんです。

斉藤 同じ優生思想でも、厚生省が言つてるのは、狭義の優生学というか、品種改良論みたいな立場で、障害児の発生を減らそうとしている。一方、生長の家は、日本人は神の子である、神の子を産めよ殖やせよという優生思想なんです。生長の家は進化論を認めてないので、論理的に追いつめていくと矛盾することになるわけで、誰でもそのおかしさを論破しやすいし、そんなに大勢の人はついていけないけど、厚生省的な、一見科学的優生思想のほうが本質的には恐ろしいって気がしますね。

福本 生長の家は火つけ役でいいんですね。あれだけに目を奪われてると、物の本質を見失つてしまふ。

金子 生長の家の考えには財界の人たちが相当賛成してるでしょう。はっきり紙に書いた声に出したりはしてないけど、人口問題との関係で資金の安い若年労働力の増加をねらってるわけですね。

ヤンソン 中年以上の日本人には、日本人は

特別な民族だという選民意識みたいなものがあつて、「生命の尊重・日本の繁栄」と言うとか、無意識のうちにバツとつながるものがあるって、有無を言わず、ウンこれだ！ ということになるんじゃない。

金住 私、きょうはじめて中絶法をつくらうというおもしろい提案を聞いて、こんなに問題が山積してる時期に、それを提案することの意味って何だらうって、さつきからずっと考えてただけで、その意味と、できれば可能性を出しあつてみませんか。でないと、いま現在のたたかい方の意味が読者にピンとこないんじゃないかしら。

斉藤 私たちは、中絶法を成立させて、優生保護法と堕胎罪を廃止することを考えてるわけだけど、この二つを廃止すれば、中絶法は全く必要ないという声も聞きますね。そのへんはどうなんでしょう。

金住 十年ほど前に、刑法改正案から初めて堕胎罪撤廃が審議された時、堕胎罪と優生保護法を撤廃すればあとはもういらぬ、胎児の人権尊重部分は傷害罪で十分じゃないか、という意見があつたようですね。傷害罪があるから、わざわざつくらなくてもいいというのも一つの案だと思うんですね。

松本 何ですか、その、傷害罪って。

金住 堕胎罪の保護利益には、母親の人権を保護する部分と、母体の保護、それから胎児の生命を尊重する部分があるというふうに言われているわけです。その中の胎児の生命尊重ってことから言えば、やっぱり非常に悪質な母親も父親もいるじゃないかと、他人がわりに堕胎させるってことや、医師だって協力することもありうるじゃないかと、きわめて人権侵害的な例を一応頭に入れておかなきゃいけないわけです。そういう場合、何で罰するかというと、現在は、胎児の場合は、子どもが体外に露出した時から殺人罪が適用されるんだけど、露出する以前は、堕胎罪がなければ、傷害罪では難しいんじゃないかってことも出てくるわけです。胎児の生命尊重を考えると、やっぱり法律をつくって、その部分があまり濫用されないようにするか、あるいは今の刑法に胎児尊重の条項を入れるべきかな、って気はするんですけど。

堂本 私、ヤンソンさんの中絶法の話を何度も聞いてしまったものですから、全くサラのところから発想できないんだけど、やはり全く中絶法的なものなしではすまないんじゃないかという気がするんですね。ヤミ中絶の恐ろ

しさを非常に感じるから、医師の罰則は入れたほうがいいんじゃないかと。それから、生命はいつから認めるかっていうこと。フランスもスウェーデンも、イギリス・アメリカも皆、十二週間くらいまでは母体の一部として考えて、ドイッだけが少し遅く、十四週だったか。とにかく非常に微妙で軽々には言えないんだけど、やはり慎重に考えたい。もちろん、あくまで現代社会の中の医学としての生命、人権で、宗教的なものではないはずだけど、生命重視の発想は持つべきだと思うんです。

もう一つ、金子先生が社会党案に性教育を盛り込むとおっしゃったけど、全くそれは重要だと思えます。この前も衆議院の予算委員会の質問で、日本の文部省は性教育に一銭もかけてない、数員養成コースにもないってのが明らかになったんだけど、諸外国では教員養成過程にきちんと入れてるんですね。ある性教育の専門家は、量子力学まで習った人がやさしい理科の教育をするか、それともやさしい理科しか習ったことのない人がやさしい理科を教えるかといった違いだと言われたんだけど、そのところは文部省できちんとやるべきで、厚生省の中に入れられたのでは、

せいぜい三時間とか、保健婦さんに聞け、とかってことになると思うんです。そんな簡単なことではなくて、小学校、中学校、高等学校の教育の全部の過程の中でどう考えるかという位置づけをしないかぎり解決しない。政令、省令、付帯決議という形ではなくて、あくまで専門行政として重視すべきだと思うです。

避妊の問題も、母子保健法をいまいじって、避妊の相談を、保健婦さんと産婦人科医との連帯の中でやっていくべきだし、女性の労働のあり方みたいなものもかわってくるし、各省にまたがる総合的な法改正をしていく中で中絶法を考えていくべきではないか。社会党で法案を出しになるなら、文部省では何、労働省では何、総理府では何、といった全体のバランスの中で、刑法の問題も含めたらうえでの案を出していただきたいと思うし、私たちが理想のビジョンをえがくのだったら、やはりそういった位置づけをふまえたうえでの中絶法を考えたい。中絶法だけに何かを盛ればいいというものではないと考えますね。

斉藤 「人間」をどう考え、どれだけ大切にしていけるかが基本ですね。

● 黒い雨を防ぐつもりで汚染されている

金住 斉藤さんは、自分の中の優生思想と戦わなきゃいけないって言われたけど、優生思想をたたくって、容易なことじゃないと思うんだけど、なぜそういうふうの問題をとらえられるのか、そのへんの問題意識がよくわからない。話してください。

斉藤 話せばとても長いものになるし、別に書いてますので、その部分は省きますが、私は、「改悪阻止」という言い方そのものに抵抗を感じてるんです。改悪と言うと、優生保護法そのものがないもののように聞こえるけど、「憲法改悪」というのとは違うでしょう。優生保護法の大部分は、明らかに断種法ですね。国家にとって望ましくないものは根だやしにすると明記してる。その望ましくないものの、不良なものは、遺伝性の精神病や奇形である。しかも一族四等親内に血筋がある時は優生手術断種をする、と。一応申告制が原則だけれど、これはもう、障害者差別の極致。その恐ろしい法律に便宜的に中絶法がくっついてるのが、もともとナンセンスなんです。たとえて言えば、墮胎罪という黒い雨

を防ぐのに、優生保護法という傘をさしてるようなもの。その傘は一時しのぎにはなるけれど、強力な放射能を発してて、いつのまにか全身が侵されるのに、さしている当人は一向に気がついてないってことでしょう。

「経済的理由の削除」というのは、その傘に穴があくということ。穴があいたんじゃ黒い雨をもろに受けることになるというんで大さわぎになったわけだけど、問題の本質は黒い雨にあるわけだし、もっと恐ろしいのは、黒い雨を防ぐつもりでさしてる傘だということ。しかも、その傘による被ばくというのは、すぐには目につかない。長い時間をかけて、ジワジワと全身の細胞に広がる。そのうえ、自分が侵されても痛みも熱もないし、自分は病んだとは思わない。それどころか、りっぱな傘を持っているエリートだと思いきんで、傘をさせない人の痛みには、どんな無関心になっていく。それがすごくこわいんですね。私自身も、「優生思想」という傘に汚染されている部分がすでに多分にあると思うし、だからこそ、優生保護法に本気で怒って

こなかったのだろうと、すごく反省してるんです。

福本 全く同感です。優生保護法自体が障害者差別、人種差別なんですね。いまおっしゃったように、墮胎罪という黒い雨を防ぐために、障害者が差別される法律によって女が救われているという、何とも心の痛む状態がある……。

斉藤 障害者差別だけじゃないですよ、女自身も差別する法律だと思うんです。強者の論理に立ってる法律ですから。

福本 せんじつめればそうなんですわ。やがて胎児チェックが認められると、女性と男性に振り分けられるでしょう、胎児条項がある



と。差別の重層構造なんですよ。そこを問わないでモノをしゃべっても、結局向こうの意図するとおり、女のほうからもの考える人と、障害者の側から考える人が分裂する。斉藤 すでに広島などで分断が始まったと聞いて、心を痛めてるところです。

岩月 いろんなところでそんな話が出てると思うのね。それは向こうにとって一番いい形で、私たちにとっては最悪の状態なんだと、みんなわかっていながら亀裂になってるのね。私なんか運動やっててまず思うのは、この時点で反対するかってこと。阻止運動が全国的に広がったのは、法律がいいとか悪いとかいう問題じゃなくて、堕ろせなくなる、だから困るんだというところからもちろん始まるんだと思うの。で、どこで反対するかというのは人さまざまで、運動なんてのは共同確認とるのさえもすぐもめるくらい、それぞれやってる位置がちがうわけじゃない。ただ、今は法律改「正」に反対するということでは共闘できる。障害者のことも共闘できると思うのね。それ以上に、じゃ、どうしているのか、十年後にまた出てこないためにどうしていくのかという時に、その違いがあらわになってくるんじゃない？ だから私は、ど

の時点で反対してもいいと思ってるし、優生思想が見ぬけないで反対してる人は間違いだ、ということではないと思うのね。最後にどうなるか、私よくわからないんだけど、一応問題は広げた。じゃどうするのかという時、それを目指してどこまで自分の問題としてやっていくかというのが、一番運動の大事

● 女も障害者も踏み込み合って考えよう

福本 これからどのステップに行くかを、非常に象徴的に乱暴に言いますとね、医師会のほうにいくか障害者のほうにいくかが別れ道だと思うんです。医師会は、今は改悪に反対してるけど、はじめから優生学的な発想です

し、優生保護部会の井上英二という人類学の大家なんて、遺伝子治療やりたくてカリカリしてる。必ず優生学的な思想のほうに行くわけですよ。

ヤンソン そこらへんのところはよくわかるんですけどね、さっきおっしゃった、「中絶法には障害者は反対するでしょう。私も賛成できない」っていうのがのみこめないんです。

福本 方向性としてはもちろん中絶法に行く

なところと思うのね。今までは法律が改悪されるぞ、さあ何とかしなくちゃってとこで一致できたんだけど、これから私たちどこで確認して、どの地点でやれるか、うんと共同の確認がとれば、女が一つ前進したと言えるのかってところが、これからの私たちのすごい問題になると思うね。

べきだと思うけど、思想を深めず、飛躍があつては、せっかくの方向がぶちこわしにならないかと言う意味です。

岩月 私はこう見るのね。十年前には、私はいわゆる「性非行」と言われるものに走る適齢期だったんだけど、アレにはあんまり興味がなかった。自分が産めないってことがわかってる時に妊娠したら、それは中絶するしかないし、それは自分が選ぶんだし、もしかしたら死ぬかもしれないことも、自分で選ぶんだから自分で決めていいって、すぐくはつきり思ってたわね。なのに十年たってまた出て来た時には、お蔭様でいろんなことがすぐく見えてきたの。人にバツと話す時には、たとえば相手が中絶した人だったら、今度改悪される

と、私たちは牢屋行きになるというのは何とも納得いかないではないかと言う。すると彼女は、その法律そのものに縛られていたんだということに初めて気がつく。一方、中絶経験のない人には、優生思想があることのナンセンスを話す。さっき斎藤さんが、優生思想は差別の源になってるのではないかとおっしゃったけど、女差別とはもう一つ別の優劣思想があるってこと。自分ンちで飼ってるシヤム猫が雑種とまざらないほうがいいと思っていた気持ちを、優生保護法のミーティングに出ることによって、あ、そうか、家にとじこめたのは間違ってたど気がついていくような形でのアプローチをしていく。

私たち、こういうのイヤだね、イヤだねって、はねていくけど、じゃ何がほしいのかという時に、私たちにとって安全な中絶法を得られる状況そのものを——法律でなくともいいんだけど、自分たちでつくらないとどうしようもないんだと。優生保護法の中に、もう一つ、「優生」つてものが含まれてて、阻止連の中にも、障害者も、そうでない人もいるんだけれども、自分はどうなりたいかという自分の主張を盛り込まないと、単純に産む産まないと言われても、なんか自分と違う

気がする、遠いってことになるでしょ。中絶するしかなかった、あるいは中絶するだろことが自分にとって否定できない人間にとつてみれば、それをどうやって解放したら自分の手に入れられるかって時に、障害者の人は十把一からげに入れられてるんだから、自分たちはこういうのがほしいって言わないとどうしようもない。一方女の人たちは自分たちのことだけ言わずに、どういうふうに関連するかっていうのを作ればいいわけで、少なくとも今の優生保護法の中に入れられてしまっている人びと、つまり健康な男子を除く人び

●障害者が子宮を摘出される現実の中で

原田 産む産まないは女性が決める、というか、それは基本的人権だという場合に、その女性とは「健康な女性」を大前提として語られがちであるということにまず問題があると思うわけ。障害を持つてる女性が、自分の意志で産みたいと思った時にはたして産める社会かというと、決してそうではないわけで、私たちが女として、産む産まないということを基本的な権利として確保するということは、障害を持つている人たちが、どんなに重

とが、自分がどうありたいかというのを話したほうがいいと思うんですよ。女であり、人であるという立場で改悪を阻止しようと話す段階では即座に中絶法のことと語っていかないと次のものが見えない。障害者の人にしてみれば、「これは女の問題であるが」などと問わずに、自分たちの部分を真っ先に入れていって、たとえば雇用の問題とか、老人になった時に自分と人と、お互いに保障し合えるにはこういう形でなくっちゃということを言っていないとほんとうに内実のあるものにならない。

い障害の人でも、自分が産みたいという意志を出した時に、誰も決してそのことに対して敵対しないで、受け入れていくということが、とりわけ女性の中でできなければ、「産む産まない」は女的基本的人権にならない。たとえば私は、産む産まないは自分で決めて、子どもを持つてますけど、自分はそう生きている、障害者の産む意志を受け入れられないなら、基本的人権として生きる力にはなっていないと思うんです。障害者が子宮を

摘出されたり、不妊手術を受けさせられると

いうことが現実にあるわけですが、だからといってそのことに私たちが、どうもすみません、と言って謝ることで何ができるわけでもないし、あしたからそういう状況を変えられるかといったら、変えられないと思うわけ。

自分の日々の暮らし方というか、自分の生活の仕方を変えていかなければ、そういう人と連帯するというのは、非常に難しいと思うわけです。

斉藤 全くそのとおりですね。気の毒がったり謝るんじゃないくて、自分自身を変えないと……。

岩月 私は今の発言の、「とりわけ女性が」というところに非常にひっかかるんだけど。

原田 女性の障害者がそのことを自分の声として言えるように、とりわけ女性が、健常者である私たち女性が保障しようというところに踏み込まなければ、やはり敵対していくことになるのではないかと思うわけです。

岩月 それでもまだ疑問があるの。なぜ、「とりわけ女性が」なの。権力の中核を握っているのは男なんだから、彼らこそもっとあと押ししなくちゃ。私たちはもちろん当然のようにやるけど、何も女性を強調する必要はな

いし。

それから一つだけ言わせて。障害者の人が「産む産まない」を選択できないじゃないかとおっしゃるけど、たしかにそのとおりだけど、その前に、彼女たちや彼らが、いま自分の住んでる場所や、入ろうと思う施設を何一つ自分で決定できない状態にいることのほうが、もっと本質だと思うの。

金住 そんな言い方すると、言いたいことがほかへいくんじゃない。障害者だけじゃなくて、女一般、同じ状況にあるわけですよ。産む産まないは基本的人権だと言いつつも、たとえ堕胎罪を撤廃し、優生保護法を撤廃し、中絶法をつくったとしても、人権を法律として確立するというだけの話であって、そこから先の保障、決定権の中身までいったら、まだまだ同じような基盤があると思うの。

岩月 言い方が悪かったんだけど、私自身は、たとえばどこに住むか自分で決められるわけ。どの学校へ入るのかってのも。でも障害者は、自分がどこに住むか、どこに移動するか決定できない。そういう自分が決定できないことの中に産む産まないが含まれてるってことなのよ。

原田 そういう障害者差別の現状がどうのこ

うのってことじゃなくて、私が言いたいのは、障害者が子どもを産むことを否定されるというのが優生思想の端的な表現じゃないかと思うので、そこを強調したわけ。いわゆる障害者差別は数え切れないほどあるけど、どちらを先行させて戦うべきとか、そういうことを言ってるんじゃないくて、障害者差別に対しては、どういう女性であろうと男性だろうと許さないという立場に立って戦わなくてはいけないわけでしょう。ただ、女が産む産まないの自己決定権を主張する時に、その主張が障害者の生存権と敵対しないようにしないてはいけないのではないかと思ってるわけ。

金住 ちょっと質問したいんだけど、敵対する、と思ってるじゃないか。

原田 「敵対しない」と言うことは簡単だけれど、「敵対しないもの」として、運動としてふくらませていきたい、と言ってるわけ。

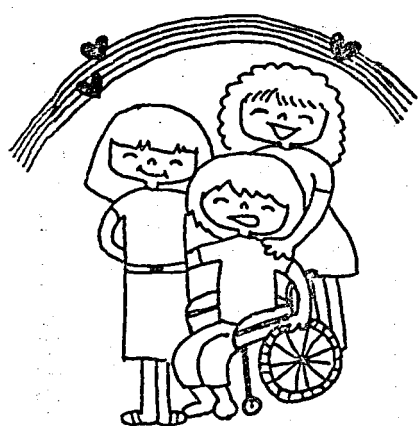
金住 あ、それならわかる。

岩月 原田さんが最初におっしゃったことがとても印象的だったんだけど、スウェーデンのように、福祉が個人に十分に還元されている国、障害を持った場合には、もう一つの福祉を与えられるものとして還元されている国でできる中絶法と、いま、中絶法だけを取り

上げてやっていると、だいぶへだたりがあるってことね。

斉藤 私は、優生保護法の問題は、女だけの問題だとも、障害者だけの問題だとも思っていないけど、すべて問題が起きる度に、差別されている側にも一番大きな圧力がかかるということは事実ね。だから、同じ被差別者として、障害者の問題は即、女の問題というふうに心にひびくわけ。

阻止連の3・12討論集会で「女と障害者」分科会に出たら、司会の方が、「では女の立場としてはどうですか」という聞き方をなさ



るので、とても残念だった。「女」と「障害者」を、区分しないことがまず大事なような気がするの。もちろん、受けている重圧には大きな差があるけれど、女を差別する社会は障害者を差別する社会だし、朝鮮、沖縄、部落を差別する社会だと思うわけ。

部落の問題などでも、聞けば聞くほど、ひどい話ですね。結婚できない、就職できない、それこそ産む産まない以前の問題が山ほどある。それを「福祉政策」として、家を建てたり学校を建てたから、問題はひとつも解決しないどころか、一般住民との亀裂を生んだりした。その苦い汁を吸って、解放運動の人たちが、「しない、させない、許さない、心の奥のその差別」というスローガンを掲げはじめたことがとても象徴的に思えるんです。女だろうと障害者だろうと、生まれがどこだろうと、みんな同じ人間なんだということが、本当に当たり前のことにならないかぎり、基本的には何一つ解決しないでしょうね。

堂本 障害者との問題は、いかにその原点に立つか、中途半端なものが残らないようにするか、ということだという気がするんです。その考えに立てば、女と障害者を分けて考える必要は全くないんで、障害者の人のほうが

カッソとくるのはその部分だと思うの。

女が、女であるという立場を乗り越えて出ていくと同時に、障害者も、障害者であるという立場を乗り越えて出ていく。その時、どちらも甘えがあっちゃいけないと思う。人間としての平等ということは、基本的にはそういうものだと思うから。障害者だけが優遇されて、という思想のうえで女のほうがアプローチしていくんじゃないくて、障害者のほうも、女の人たちがどんなことで運動してるかを乗り越えれば、一番基本的な部分で一緒のはずで、別に分ける必要はないと思う。

もう一つ先の話をすると、経済条項の削除阻止という場合には、そういう原点に立った法律は出てこないだろうという気が、私、非常に強いわけです。さもないと、今度は産婦人科のほうからは必ず胎児条項が出てくるでしょうし、そこで、医師のほうにつくか、障害者のほうにつくか、という分裂が必ず出てくる。婦人の中も、いませつかく芽生えている、右も左も、上も下も、連帯してやっていこうという胎動が分断されてしまう。運動の先を見越した本当のビジョンをどうやるか、というのが、いま一番かんじんなところではないかって、感じてるんです。

●女性議員をもつとふやさなくては

ヤンソン ところで、いま、女性議員のほとんどが私たちに賛成してくれてるってことは、とても心強いことなんですけど、各政党の婦人議員が超党派で何か提案するというのは可能なんですか。

金子 女性だけじゃできないの。それぞれの党に働きかけて、党の問題として扱わなきゃならないの。

国会の中には、衆参合わせて婦人議員懇談会というのがあって、そこで超党派で問題を論ずるわけです。「党派に関係ない問題だから、どこの党派も、これについて賛成しようとか反対しよう」という問題があると思いますね。たとえば、さっきの公衆浴場法の一部改正。これは婦人議員懇談会で、全婦人議員が改正しようということに決まってる、それぞれの党に持ち帰ったんだけど、自民党でつぶれたの。他の党は全部賛成したんだけど。

ヤンソン 優生保護法については？
金子 やりましたよ。全部一致して、その場ですぐ厚生省に反対決議を出した。

ヤンソン その後の各党の具体的な動きは。金子 社会党だけだわね、決議案出したのは。よその党は、はっきりしてない。そこらへん問題があるの。

斉藤 五政党の政策を聞く会に出たんですけど、民社党なんか、ひどかったですね。まだ具体的に提案されないものに、こちらから案をつくるわけにはいかないって。

ヤンソン ひどかった！ほんとに。

金子 ひどい。ぶちこわしばかりされるの。斉藤 これから中絶法を出していても、大変ですね。

金子 今度の問題でも、自民党の村上さんたちが地方議会に呼びかけて、草の根運動方式というか、まず地方レベルで採択していったでしょう。ひどいやり方だけど、やり方としては上手よ。

斉藤 あつというまに全国で九十九議会もが可決しましたものね。反対のほうは五十だけど、よくも五十も反対決議ができたと思心してるんです。運動が強かったからだけど、統一地方選挙の前でなかったら、こんなにも

くはいかなかったでしょう。私、今度くらい、女が一票を持っている重みを感じたことはない。もし女に参政権がなかったら、どんなに請願しても、こんなに早く反対決議の可決はされなかったでしょうね。

一同 そう、そう。

斉藤 それと同時に、地方議会に、いかに女の議員が少ないか、ということもわかった。堂本さんがお話しになった福岡の県議会の場合でも、定数八十九で、女性議員はたった一人。そのたった一人が火の手を見つけて、婦人団体に応援を頼んだので、みんなでワツと手分けして、一人ひとり議員さんをくどいて歩いた。八あごら九州Vの人から聞いた話でも、ほんとに間一髪で阻止しようです。女の議員がいることがどんなに大事かということ、そして私たちが知らないところで物事がどんなふうにとんどんくられたい変えられたりするかってことを、今度くらいドラマチックに見せてくれたことはない。

金子 ほんとに、そう。千葉県の柏だったか、十月に賛成決議したのが、十二月には反対決議。ひっくり返しちゃった。

堂本 ほんとに、女性議員を出さなきゃだめ。ひっくり返したところは婦人議員が入ってる

わけ。ところが、ひっくり返すところまではいかなかったけど、止めたのもいっぱいあるでしょ。福岡県のように。ところが市議会や町議会で、女性議員のいないところは、いくら外で運動しても止まらない。だから九十九までいった。絶対、女の議員を入れておかないと、まずい。

斉藤 私は、それだけに心配してるんです。これで選挙に負けたら、どれだけ巻き返しがあるかわからないって。この間の『朝日』の「天声人語」にも、「優生保護法で寝た子を起こしたか」なんて書いてあったけど。

堂本 なぜ女に参政権を与えたのかって（笑い）。

斉藤 だから、いま私たちが持つて一票をどう行使するかってことが重大。ほんとにもう、危機感いっぱい……。

堂本 女が出てきたばっかりに、出た釘を打つみたいな感じでやられる心配がある。

松本 それが問題なんじゃないの。

斉藤 それなのに、残念だけど、女の一票が自分を守ることとなかなか結びつかない。この前のダブル選挙の時だって、選挙、選挙っていうと、若い人たちに怒られちゃって。シラケってムードだったでしょ。あの時は、シ

ラケるのがリブだ、みたいなところさえあって。自分の生き方を決める根底の問題を棄権

●性関係の持ち方に問題が

堂本 外国では党派を超えて団結する。個人でも政治活動に参加できるってことだけど、一つの共通項を核に、障害者も私たちの仲間として、産むほうの性がグーッと（主張を）押し出せる力が日本にないとしたら、本当の基本的な自立がないんじゃないかって気がする。中絶の現場を取材してみると、来る女の子、来る女の子、主体性がないのね。「彼が何て言うかで決めるわ」とか、籍はどうするのって言われりゃ、「入れてくれると思うんですけども」とか、何ともね、出てって、「あなたしっかりしなさい！」って、どなりつけてやりたいくらい（笑い）。そういう現実をこの一か月見せられて、本当に心細くなるんですよ。むしろしっかりしてるのは、五十代以上の、堕胎罪で本当に苦労した人たち。それに比べて、今のティーンエイジャーからちょっと上の人たちって、ほんとに主体性がない。そういうところに女が押し込められてしまったんじゃないかって、そのへんま

するなんて、それこそ自立を否定することじゃないかと、私は思うんだけど。

で考えてしまった。どんなに思想が違い、意見が違い、いろんなことが違ってても、この問題ではとにかく女性が一致して自分たちでがんばらなかつたら、全部がすぐダメになるんだ、というところで、アメリカでもフランスでもがんばったんだと思うけど、（日本では）共闘するって、ほんとに難しいわね。ヤンソン なぜこんなことになるかっていうと、男と女の間に、同じ文化がないからだと思う。だから、ほとんどのコミュニケーションがない。女は女同士でうなずきあって、痛みをわかちあって……（笑い）。そういう女たちの頭ごしで男が問題を決める。今は法律の上で女は成人ということになってるけど、旧民法の、女は何十歳になつても未成年、という考えがしみついてる。そういう男を自分たちの中に引き入れていかないと、女・子どもは自分には関係ないってことになる。子を産むというのは自然にバツとできるわけじゃなくて、必ず男との関係があるわけだけ

ら、人間全部が共有する問題だという把握の仕方をしてほしい。

性というのは、十七歳で成熟する人もいるし、三十五歳、四十歳になって成熟する人もある。それは結婚の制度とは関係なくて、その人の性生活はその人の生活というか、モラルというか、考え方が確立しないと。何しろ、結婚によって性関係を結ぶのが正式、それ以外は全部隠れて(笑い)、というような文化の中で、どうしても、男はやるもの、女はやられるもの(笑い)という構造が出来てくると思うのね。やるほうは、とにかくやっちゃえ、失敗したら勝手に片づけろってことになってくわけでしょう。そこらへんのコミュニケーションをきちんとやってかないと。

斉藤 女は弱いからいたわらなくちゃ、ということでなくてね、お互いがどれだけの関係をつくるかってことね。この前四十八団体が厚生省と話し合った集会上、自民党の大石千八議員が出て来て、「妊娠させるだけでも女にすまないことなのに、まして中絶しちゃいけないなんてんでもないことだ」ってぶったけど、あれは、全く救済思想。

堂本 そう、そう。

金子 対等な人間として女を認めてないとこ

ろが基本的にあるのよ。

斉藤 女が対等に認められてないという話で一つヒントが浮かんだんだけど、性差別撤廃条約を批准するためには、雇用平等法とか国籍法とか、国内法をいろいろ整備しなきゃいけないわけだけど、優生保護法や堕胎罪はあまり問題になってないでしょう。あの批准とのからみでクロースアップしていくと、PRしやすいんじゃないかしら。

金住 ああ、そう。私もさっきからそれを考えてたんですよ。

●遺伝子操作時代に対応できる法律を

堂本 法律に関連して思い出したんだけど、厚生省も、福本さんがおっしゃったように、経済的理由だけでなく、もっと抜本的に改正が必要だって言ってるんだけど、それはここで言ってるような、性差別・障害者差別を含めた見直しが必要というんじゃないかって、たとえばハンセン氏病が入ってるとか、精神病者対策としての優生ということばは、三十年前のドクターは使ったけど、今は使われないとか、そういう時代おくれの部分の総合的手直しだって気がするんです。ことばは似てるけ

金子 それはいいですね。

斉藤 国民的コンセンサスを得やすいんじゃないかなと思うんです。四十八団体などの比較的保守的な婦人層にも理解してもらえるでしょうし。——四十八団体なんだろうと、リブ系の人は小ばかにするけど、今度でも、四十八団体が動いた、ということばは、やっぱりとても大きな圧力になったと思うんですよ。何しろ三千万票持ってるんですよ。あのへんが動くような、わかりやすい見せ方をしたいですね。

ど、内容とか本質とかは違う。

福本 それとはまたちょっと違う意味であって、行政上の人口の資質低下を防ぐ意味での見直しが、かなりウェイトを占めてる。だから胎児条項を入れなきゃいけないわけです。

斉藤 疫学的な立場に立って、人間の不良品の発生を防ごうということですね。

福本 いわゆる優生学なんです。

金子 井上英二さんなんかが研究費もらってやってますね。

福本 ですから、私は、優生保護法も堕胎罪

もなくった場合に、厚生省が喜ぶと思うんです。ある意味では。なぜかと言いますと、胎児チェックをやったがつてるんだけど、堕胎罪があるために、大っぴらにはできない。

それから、もう一つは、体外受精やりますとどうしても失敗が出ますでしょう。遺伝子治療もしたい。その場合も、堕胎罪の存在がかなり邪魔になってくると思うんですよ。規則するものが何もないと、かなり無制限にやられる危険がある。受精卵に対して遺伝子治療やりますでしょ。受精卵そのものが実験材料になってる。そのへんにも目を向けて中絶法をつくらないと。

松原 この動きの背後に、レーガンの好みがありますね。生長の家と全く一致する倫理観の持ち主でしょう、彼は。そういうものに日本、の古い層が何となくひかれてるというようにところがあるんじゃないですか。

堂本 レーガンをバックアップするハモラルマジョリティV(宗教団体)があるんですね。

ヤンソン 理論の持っていき方が、手引き書でもあるんじゃないかと思うくらい似ている

(笑い)。

堂本 アメリカも、地方議会から固めていきますし。

松原 時期的にも、ちょうど昨年の初めころからだし、アメリカは優生思想が強いでしょう。

斉藤 望ましくない人種は減らそうという人種差別と結びついてますね。レーガンになって、避妊に補助金が出ていたのが打ち切られ、不妊手術は無料になった。このため、貧しい黒人とかブエルトリコ人は、不妊手術に追い込まれている。

もともと、世界で初めて断種法をつくったのはアメリカなんです。一九〇七年にはもうつくられてる。一九三二年までの実施数が二万五四〇三人だと、国民優生法の提案理由の中でも言ってます。ドイツの断種法が有名だけど、つくられたのはドイツは遅くて、三年。でも一年で五万六千人に実施した。その大部分はユダヤ人です。

こういう歴史的な背景があるうえに、遺伝子操作とか体外受精の問題まで新しく出てきたわけですね。医学者としての松原さんは、このへん、どうお考えになりますか。

●堕胎罪は憲

金住 中絶の問題でやっぱり一番もろに悩ん

松原 やっぱり自然の勢いとしては胎児チェックにいくでしょうね。注射針を入れて羊水を採取すれば、いろんなことがわかる。染色体の構造もわかるし、集団検診もやる気になればできるところまでできます。技術的には昔よりずっと簡単にできるんですから。そういうことを女性自身はあまり考えてないから気がついてないと思うけれど、可能性としては考えておいたほうがいいと思います。

もともと、いきなり、優生保護法が遺伝子制御になります、なんて言われたんでは、普通の女性にはわかりにくいけれど、順序立てて話せばわかるわけで、そのへんの普及運動が大変ですね。

斉藤 きょう急病でご出席になれなかった助産婦の三森孔子さんがおっしゃってたんですが、普通の奥さん方に話しても、なかなかわかってもらにくい。いわゆる運動をやっている人だけがわかる運動じゃなくて、もっと皆がわかる運動にするにはどうしたらいいかということも考えてほしいって。

法違反

でるのは女性、それも多くの場合、主婦です



よね。今は経済的理由があつて、非常に柔軟に医師の判断にゆだねられてるけど、それがなくなったら堕胎罪が適用されるというのを突きつけられたら一番ショックを受けるのは主婦でしょう。主婦の状況というのは、実際には合法的強姦と言ってもいいくらい状況が多い。私が職業上扱うケースでもものすごく多いんです。そういうのに耐えに耐えているし、性的にも教育的にも経済的にも、すべて受け身に立たされて、自分の人生とか、自分の人権とか、そういう感覚すら日常の中で持ち得ないようなところに置かれてる。それに日常では気がついてないんだけど、何かのきっかけで、自分は抑圧されてるんだな、その抑圧はどこからくるのか、と考えはじめる、と、優生保護法の優生思想が見えてくる。法

律の強権で女たちが生まれてから死ぬまでの性を管理している。自分たちの自由をジワッと奪っている、って。
 斉藤 だいたい堕胎罪なんて憲法違反なんじゃないんですか。行為の原因は男女双方にあるのに、結果は女だけ罰せられるなんて。
 金住 そうです。そうです。
 斉藤 訴訟でもしたらおもしろいと思うんですけど、どうでしょう。
 金子 売春防止法だって憲法違反ですよ。
 金住 ただ、実際には、正犯に妊婦がなってるだけで、それをほう助した罪も一応刑法の中にあるわけです。だから処罰しないわけではない、って逃げられる。斉藤さんが言われるように、原因は両方じゃないか、男女双方を入れるべきじゃないかっていう立て方にな

ると、……でも問題がよけい出てくるでしょう(笑い)。

斉藤 大いに問題が出るかと思うんですけど(笑い)。男の人たちは、優生保護法も堕胎罪も、自分たちとは関係ないことだっているでしょ。「経済的理由を削除する」ということは、代わりに精神的理由が入れられる可能性を持つんだし、そうなると、ナチスドイツみたいに治安維持法的に利用される可能性もあるよ」と言う、ええ、大変だ、と聞き耳を立てる。これは女だけの問題じゃないということをもっと徹底させれば、運動もずっと広がっていく。十万人集会、二十万人集会にも持つていくでしょう。

松本 堕胎罪は現在ほとんど適用されてないでしょう。

斉藤 ほとんど死文化してますね。だから、「経済的理由をはずせば刑務所行きだ」とおびえないで、皆で牢に入ればいいと思うんです。母、祖母、おみな、牢に満つるまで。年間六十万も百万も牢に入ったら、それこそ堕胎罪そのものがどんなに公序良俗に反するものかわかるでしょう(笑い)。

福本 私もそれを思ってるんです。運動にはお遊び的要素があってもいい。堕胎罪に、男

も罰せられるという条文を加えるキャンペーンを張るとか、一切の中絶を禁止するとか……。

金住 これは大変（一同大笑い）。

福本 男性が困るわけでしょ。

堂本 一億総刑務所行き（笑い）。

金住 斉藤さんの言われた憲法違反論は、墮胎罪撤廃、中絶法制定運動の中で当然展開されてくるからおもしろいかもしれませんがね。

斉藤 ビクビクしないで性根すえてね。

福本 それが一番わかりやすいし、障害者とも一緒にできるし、ちょっと遊んでみてもいい……（笑い）。

斉藤 みんなで牢の中で本でも書きましよう（笑い）。ただ一つ言いたいのは、障害者の人は結婚できないみたいな思い込みがあるでしょう、その段階からすでに差別があるというところ、ヤンソンさんがおっしゃったように、本当にいい男女の関係が基本だということ。いい関係のほうが避妊も成功するんじゃないかと思うんです。今度の私たちのアンケート調査でも、中絶経験者が思ったよりずっと少ないんですね。いい関係だと、そこまで追い込まれないですむんじゃないかしら。強姦的状况だと、避妊は難しいんじゃないかなア。

岩月 阻止連でも中絶は少ないんですよ。避妊は女の思想だって、みんな確認し合ったんだもの。もっと避妊できないのかねって話になった時、それは関係性の問題じゃないの、って話になったの。男と女がどこまで平等でやれるかっていうのが避妊の局面として出るから、自分をはっきり打ち出す。相手も打ち出すだろう。その関係性を抜かしたら、一〇〇％安全な避妊法があっても、それはそれだけでしかない。女の思想が大事なんだって。一％失敗して妊娠してしまうほうがいろいろ話せるし、いい関係になる（笑い）という話も出た。避妊薬だって一〇〇％安全なのがほしいけど、逆に（妊娠は）チャンスっていうか、ためす、いや、ためすんじゃない、固める……（笑い）。

斉藤 女の人たちが今まであんまり抑圧されてたから、「女の決定権」を強調して、「産む産まないは女の権利」って、言いたい気持ちにはよくわかるけど、このことばにはひっかかる人も多いということは率直に受けとめて、「産む」より前の段階を大切にしたい。「みごもるみごもらないは女を選択」といった言い方をするほうが、共感を呼びやすいんじゃないかしら。

岩月 産むことを女が本当に選んでいれば、産まないことを選ぶというの、すごく納得できると思う。

ヤンソン 産む産まないにあんまりスポットライトをあてすぎると、性が人間の再生産の行為になっちゃう。曾野綾子さんたちモラリストの言うように、子どもを産むつもり性だけが正当化されて、それ以外はあやまちだから、みごもったらその罪をあえて引き受けるというような理論が出てくると思うのね。

私は、性イコール出産じゃないと思う。部分的なイコールだと思うし、性生活をどう持つかというのは、本当にその人の個人の人生だと思ふ。

斉藤 このへんが日本では未分化なのね。だから、中絶の前には妊娠がある、妊娠の前には性生活がある、その前には個人の自立と、それに基づく生き方の選択がある、というふうに、前に前にさかのぼって考えたほうがわかりやすいし、コンセンサスも得やすいんじゃないかしら。

金住 そう思います。

ヤンソン そのもっと前に、生きるってことがある。

斉藤 そうそう。結局、生き方の選択。

岩月 産むことを女が本当に選んでいれば、産まないことを選ぶというの、すごく納得できると思う。

ヤンソン 産む産まないにあんまりスポットライトをあてすぎると、性が人間の再生産の行為になっちゃう。曾野綾子さんたちモラリストの言うように、子どもを産むつもり性だけが正当化されて、それ以外はあやまちだから、みごもったらその罪をあえて引き受けるというような理論が出てくると思うのね。

私は、性イコール出産じゃないと思う。部分的なイコールだと思うし、性生活をどう持つかというのは、本当にその人の個人の人生だと思ふ。

斉藤 このへんが日本では未分化なのね。だから、中絶の前には妊娠がある、妊娠の前には性生活がある、その前には個人の自立と、それに基づく生き方の選択がある、というふうに、前に前にさかのぼって考えたほうがわかりやすいし、コンセンサスも得やすいんじゃないかしら。

金住 そう思います。

●わがち合う社会を目指して

松原 今の産業社会の分業思想を一番端的に表わしているのは性別役割分業だけれど、男性の社会でも、分業が徹底しすぎると、競争社会を生み出し、人間疎外になっていくということが認識されて、いろんなところで揺り返しが出てきてるでしょう。痛み分けの思想とか、緑の党とか、自然とのつながりをよく考えるというエコロジ的な発想とか。役割を分けるんじゃないくて、互いに協力して分担する中で地域や職場のエネルギーを結集しようという発想が、もうフェミニストだけでなく一般の男性社会の中にも育っていきつつあります。差別に抵抗する視点、障害者の痛みをわかつというのと、女ひとりが悩むんじゃないくて、男女が共有してわかつという視点が、今後の時代を生きるために絶対必要な哲学になってくると思うんです。これは未来への動きに逆行していかないわけですから、結果的には未来は明るいと思う。けれども、当面、現象的には非常に複雑なからみあいがある、しかも大多数の女性が、それについて知らないんですね。

金住 知らないから、提起すればいいじゃない。

斉藤 それぞれの人がそれぞれ自分のことばで語っていけばいいんじゃないかしら。

たとえば私は、横浜の浮浪者殺しを聞いた時、ああ、優生思想だな、と思ったし、社会の一人として、優生思想を支えている私は、正に殺した側にいたという思いで胸がかきむしられた。そのことを一番強く感じるのも、そこから話なんです。優生思想って、広義には輪切りの思想でしょう。いいものと悪いものを輪切りにする。悪い者、弱い者として切り捨てられた者は、はい上がりにくくなっている社会。そういう構造を法制として端的に示しているのが優生保護法じゃないか、というふうに話すと、わりにわかつてもらえるんですね。中絶にしても、「やはり人間の生命の抹殺という部分はあるという気が私はどうしてもするけど、あなたはどいう思う」っていうふうに聞くと、若い人たちが、「私たちがきたらおろすのは当たり前、みたいに思ってたけど、そうじゃなかったんですね。あれ

は最後の手段なんですわ」って言う。そこで、「中絶が望ましくないことだとしても、それは国家が管理することでも宗教が介入することでもない。その責任と権限は自分にあるんじゃない」っていうふうに話す。私は、そういうふうに話す時、一番思いをこめて話せるし、ことばが自然に出てくるからそう話すんだけど、一人ひとり、ちがう言い方があるでしょう。自分の中絶体験から始めた方がいいし、それぞれ自分のことばで話せばいい。聞いてて本当に共感できることは共有してはいい。きょうだって、これだけ大勢の方が集まってくださったのだから、「評論するより行動」で、さっそく私たちにとって望ましい中絶法を考えることを始められるとうれしいですね。

ヤンソン そうですね。いろんなところで、今のような条件つきの子産みが国家管理されていることのおかしさがわかるようなスポットライトをあてて、周りもすっかり明るくなって、周りのみんなも、やっぱりおかしいと気がつく状況をつくりだしていきたいと思いますよ。制度だけでは仕方がないという考え方もあるけど、私は、制度と意識は表裏一体だと思うし、この先どんなに意識が変わっても、制

度が元のままだったらだめだし、どんないい制度ができてても意識が元のままだとだめだと思うから、私たちが自己変革していくと同時に、やっぱり政治家に働きかけたい。それがだめなら自分たちが政治家になるくらいの覚悟でね(笑い)。

堂本 マスコミがこの問題を拾いきれない最大の理由は、女性記者が少ないってことです。私はたまたまテレビ局にいるから、国会の中をいつでも取材できるわけ。ところが今度の問題ではじめてがく然としたんだけど、この間、四十八団体と厚生省の懇談会の日、衆議院では性教育の問題を共産党の婦人議員が質問した。私は、どっちに行こうかな、と思つて、まず衆議院に行つたんです。そしたら非常におもしろいわけ。ここに記者がいたらトップ記事が書けるなと思つた。私は放送したんですが、そこに政治部記者なんて一人もないわけ。次に四十八団体の集会に行つて、報道関係というところに名前を書こうとしたら、二十何人、女の記者が来てる。ああ、この二十何人が「はしご」してればねえ……と残念でした。

ところが、そうできないからくりになってるんです。だいたい国会には帯用証がなければ

入れないし、国会でいつどういふことをやるかという情報は政治部どまりで婦人部までは回つてこない。優生保護法の院内の取材は本当に一人でしたよ。ずーっと一人だった。だって男の人は関心ないから。で、婦人記者が来るかつていうと、政治部に婦人記者は一人もいない。

金子 ホワイトハウスは半分婦人記者だそうです。

一同 それも問題にしなくちゃ。

堂本 予算委員会、防衛、外交、財政には腕ききの男の記者がダーッと入つてゐる。厚生、労働にはいない。

ヤンソン やつぱり、あらゆる分野における男女の共同参加が最終目標ですよ。ね。「結果の平等」を問題にしなきゃだめだわ(一同うなずく)。

斉藤 ところが結果の平等どころか、行動計画でも、たとえば国や自治体の審議会の婦人委員の目標が割でしかない。

ヤンソン 社会党の行動プランにも、女性議員をふやす目標として一〇%から二〇%と書いてある。達成ノルマじゃなくて当面の目標が一〇ないし二〇%なんです。ずいぶん謙虚ね(笑い)。せめてフィフティフィフティ

でなくちゃ。

斉藤 潜在意識がおのずと出てくるのね(笑い)。

ヤンソン 少なくとも二〇%は女の人が座らせていただきますという態度じゃない。

金住 権利意識の問題ですね。

金子 もし数字で書くのなら、フィフティフィフティを目標にして、何年計画で何年目には二十にするとか三十にするとか書くべきよね。

ヤンソン あ、そのおことは聞いて安心しました(笑い)。

編集部 話はいよいよ佳境に入るところですが、予定の時間を大幅に過ぎてしまいました。

今度の問題で、いろいろ大変だったわけですけど、これをきっかけに女の問題が見えやすくなったこと、マスコミの中に、そしてまた政治の中に、女がどんなに少なく、それがどんなに悪影響を与えてるかということまで、こんなにもまさまざと見せてくださった生長の家さんに感謝したいと思ひます(笑い)。

金住 何はともあれ感謝!(笑い)。

松本・岩月 冗談にでも、絶対感謝なんかしないわ、私たちは!

(一九八三年三月二十五日、あこら読書室で)

加藤シヅエさん (日本家族計画連盟会長)

まず何よりも避妊を

——避妊は戦前でも98%の成功率

優生保護法再浮上を、最も複雑な気持ちで受け止めている一人は、加藤シヅエさんだ。人も知る産児制限運動の推進者。戦後の優生保護法誕生にも深くかわり、家族計画連盟会長として今も第一線に立つ八十六歳。言わずにはいられない、という思いが、ことばが、あふれ出る。

加藤 この前のも、今度のも、新興宗教の動きですね。私は、新興宗教というのは、宗教の中には数えておりません。その新興宗教の方がいちずに思い込んで、人のいのちが大切だって、表看板にして……。裏は、選挙になる度に、あの宗教団体には票がごっそりありますので、それをもらうために、わざわざ問題にしているのです。あの団体の頭になる方がたいへんご高齢で、自分の生きてるうちにこれを……とおっしゃってるのを引き受けて、その団体の票で当選なさっている議員が毎回選挙の度にお騒ぎになる。つまり名目なんです。優生保護法の一部を変えることと、人のいのちが大切ということは結びつかないと思います。ですから「動機はなはだ不純」というふうに、私は断定いたします。

自由民主党という政党は、票がとれるとなると、動機が何であろうと利用いたしますから……。そこへもってきて、前の厚生大臣

が、何もわかってない人で、「無知なる厚生大臣」と私はあえて言いたいくらいですが、いま表にあらわれているおもしろくない社会現象だけを取り上げて、経済条項を削除しよう、なんて、ほんとに幼稚な解釈で約束しちゃった。政党としては、大臣がそう言ったからということで、村上議員が中心になって騒いでるわけです。

今度の厚生大臣は、もうちっと思慮のある方らしくて、どうも反対が非常に多い、これを向こうに回して是が非でも通すべきではないとお考えになったようです。署名は推進が多く、反対が少ないそうでございますが、調べてみると両方に署名してる人も多いらしい。話になりませんよね、その不まじめさ！何でも自分の立場で考える、全く見識のない改悪運動というはかありません。

多産ゆえに貧しい人々を見て

——それに対していち早く、反対声明を出しになったわけですね。

加藤 はい。家族計画連盟の会長としての私の考え方は、「女性が妊娠するとかしなやかは、母親の健康や経済的な事情とか子どものしあわせを考えて、子どもの数や、出産の間隔を、避妊によって自分で決定する」ということです。今日、医学が十分に発達して、避妊方法は非常に進んでおりますから。

欲しくない子をやたらに産んでも子どもが不幸になるから避けたほうがいい、というのはアメリカのマーガレット・サンガー夫人が提唱された運動の趣旨です。

今から六十年ほど前ですが、夫人は当時巡回保健婦として貧民窟を巡回していて、いつも心痛めるのは、親父が失業したり、病氣だったり、酒飲みなのにもかかわらず、次から次へ子どもが生まれ、まことに悲惨な状態にあることでした。もう産みたくない、命が続かない、という母親の悲惨な声を聞いて、何とかいい避妊の方法を……と考えて、医者に頼んだところ、「ご亭主があるのに産みたくないなどと勝手なことを言う女は屋根裏にほうりあげろ」と、ひどいことを言われ、女を侮辱するもはなはだしいと、公憤にかられ

て、それなら自分が避妊の方法を研究しよう、と思い立たれたのです。わらにもする思いでヤミ堕胎に走って命を落とす母親も少なくなかったもので、これは人命にかかわる問題だと。

サンガー夫人はしかし、この仕事は医者の仕事と決め、クリニックに医者を招いて、ご自身は啓蒙活動に専念されたのですが、アメリカというのはプロテスタントの国。「セックスはピューリタン思想に相反するから口にしない」というのが当時ありまして、夫人の活動はワセツ行為として逮捕され、働いている方も何人か逮捕されて大騒ぎになりました。それがきっかけになって、アメリカの世間を大きく驚かせる運動に発展していったわけです。サンガーさんがバースコントロールを唱えられた精神は、避妊という知識は医者が普及すべきだ、ということなのです。出来てしまったものを置ろせなどということは一言も入っていない。中絶と避妊の間にはハッキリ線を画す、というのが、いつも出てくる言葉なんです。私はその言動に感銘を受けて、家族計画運動を生涯の仕事にしようと思うようになったのです。

ちょうど二十三歳、アメリカの学校に学んでいたとき、アグネス・スmedリーさんのお引き合わせでお目にかかったのですが、「自分の性生活をコントロールする方法を知らなくては、女性は自分自身を解放することはできません」と、美しいお声で実にさわやかにおっしゃったのが忘れられません。私は十七歳で結婚してまもなく、三池炭鉱の住宅で三年ほど暮らしました。一日十二時間、地下九百尺の地底で、男は一日十八銭、女はさらに安い日給制で共働き。何の保障もない働く人たちが、次から次へ子どもを産んで苦しんでいる姿を見ましたから、「貧しい母親と、多産の中で苦しい生活をしいられている子どもたちのために、どうしても広めねばならない運動だ」と、絶対に信念を曲げないサンガーさんのお気持ちに、ほんとうに感動したのです。

三池ではね、夕方、サイレンが鳴って仕事が終わると、みんな地下から上がってきて風呂で体を洗って家に帰ります。そうすると、もう六時半すぎ。男はむしろの上でゴロンと寝そべって休養をとりますが、女は帰るやいなや天びん棒に桶がついているのをかついでお水を汲みに行き、それでお米をとぐ。子どもたちは、託児所も何もないんですから、おなか

すかして、じっと待っています。お母さんが帰ってくる、それはうれしそうにとりがらんですね。するとお母さんは、「ああやましい、このガキ。待てないかっ！」てなぐりつけちゃうの。子どもがキヤッフと言って逃げ出すと、髪の毛ふり乱して、薪を持って追いかけていくんです。もう地獄絵でした。しかも皮肉なことに、貧しい家庭ほど子どもなんですね。

墮胎罪は今も眠っておりますけど、当時はまだ存在してまして、巡査が聞きつけますとすぐ逮捕する。それでヤミのヤミでやる。これは事後が非常に危険で、婦人の命をも落とすような恐ろしい手術だったわけです。

上陸不許可で思わぬ大宣伝に

—それで、サンガー夫人をお招きになったのですね。

加藤 いいえ、あれは『改造』の招待です。当時『中央公論』と並ぶ非常に次元の高い総合雑誌でしたが、毎年お一人ずつ、世界で一番進歩的で、一番ポピュラーな方を日本にお招きになった。最初がバートランド・ラッセル博士、次がアインシュタイン博士、三回目

がサンガー夫人でした。サンガー夫人は大変高クランクして下さったわけですが、日本政府はビザを出さないんです。当時は富国強兵。兵隊さんと、低賃金で働く産業労働者の大群を必要と考えてましたから、産児制限なんてとんでもない、って。でもサンガーさんは、九歳の次男を連れて船にお乗りになった。「一度こうと思ってスタートしたことは、万難を排しても前進するのが私の哲学だ」って。

この船には、ちょうどワシントン軍縮会議の加藤全權大使以下も乗っていらした。いわゆる5・5・3で、日本の軍艦が減らされることに決まった時ですから、「軍備を減らせ」と言った国から、今度は人口も減らせという女が来る」って、日本政府は絶対上陸させない構えでしたが、ジャーナリズムの格好の話題になりました、毎日記事がのるんです。サンガー夫人は三児の母だとか、監獄に入ってた、ヨーロッパに亡命してた、とか、頼んでも書いてもらえないと思うほど、至れり尽くせりの記事が二週間にわたって出ました。すんなりビザを出していれば、産児制限ということばが、あんなに日本国中、津々浦々に広まることはなかったでしょうに。

夫人は、船中で全權大使の御一行に講演を

なさったそうです。それで、これは危険思想ではないって理解して下さったそうですが、大正十一年三月十日、船が横浜に着いても、ビザがないので上陸できない。私は八方手を尽くしました。全權のお一人もお口添え下さったそうで、「十日間だけ。産児制限はいっさい口外してはならない」という条件つきで、やっと上陸許可が出ました。

さあ、我が家にお迎えしようと、人力車にお乗せしますと、車夫が夫人に話しかけたんです。「私たちは子どもが多く、お米は高く、とても生活が苦しい。貧乏人の子だくさんに対する答えをもってきて下さって、ありがたい」って。すると、横にいたお巡りさんまで、「貧乏人の子だくさんを助けて下さる方は大歓迎だ」って言うんですよ。サンガーさんはもう大喜びでした。

—講演会は医学関係者に限って許されたそうですかね。

加藤 改造社では、そのころ東京で一番いい講演会場と言われたYMCAホールを借り切って準備していたのですが、産児制限の話はしていけないということになって大困り。結局夫人は他のテーマでお話しになり、講演会は一回きりでした。けれども、ほうぼうのグ

ループからご招待があり。内輪の集まりにあちこちいらしたし、お医者さんだけの集まりの時は詳しくお話をされましたが、まあ、無事でした。当時は言論の自由がなくて、私服の刑事がついて回るんです。私は刑事を入れたくないと思って、ずっとドアを押さえていました。

——通訳はガントレット恒子さんや山本宣治。ガントレットさんが、性関係の訳に口ごもられたとか、山宣が後にサンガー批判をしたとか、聞いています。

加藤 ガントレットさんは、やはりビューリタン思想でいらっしやいましたから、初めのうちは、何かいやらしいもの、不潔なものと思っていられしんですが、だんだん理解して下さって、その後ずっと私の運動を支えて下さいました。

山宣の批判には、非常に腹立てたんです。

「新知識として何も得るところはない」なんて。何でもけなせば自分がえらく見ええると思ってる。サンガーさんは、ご自分のからだに犠牲を払ってるんですよ。逮捕されたり、ハンスしたり。それだけからだ張ってやってるのに、山宣さんや安田徳太郎さんがけなすことないじゃないですか（憤然と）。

——抗議はなさらなかったのですか。

加藤 しません。私はブルジョア的人間だもの。プロレタリアでないものは人間でない、って考え方ですから、あの人たちは。実に失礼ですよ。産児制限運動だって、「労働婦人のために」で、「婦人のために」ではないんです。その考えは、今の社会主義にも受け継がれてます。今日、社会党が地盤沈下した原因もそこにあると私は思います。私はあくまで、「婦人のための」産児制限を唱えて来たのです（ますます憤然と）。

戦後の女の窮状を見るに見かねて

——それほど「女性のための」避妊に打ち込んでいらした先生が、戦後、優生保護法をおつくりになったのは、なぜでしょう。

加藤 私の運動はあくまでも避妊で、中絶ではなかったのですが、戦争に負けまして、帰還兵は帰ってくる、引揚者は帰ってくる、食糧も家もなく、子どもがいれば部屋も貸してもらえない。やっと借りた部屋も、子どもが産まれるとすぐ追い出されるんです。でもその頃は避妊が普及してなくて、出来てしまふ。するとヤミの堕胎に走るといふことが多かったのです。それで、戦前からの産児制限

運動の同志の太田典礼さんと、避妊を徹底的に普及する法律をつくらうということで、議員立法として出したのです。議員立法には三十五名の署名が必要で、それだけの署名を集めて出しまして、厚生委員会で審議されることになりました。厚生委員会の委員長は保守党の方でございましたけれど、公正に扱って下さって、議題にのせて下さいました。

私と太田さん、途中から加わって下さった福田昌子さんの三人は、質問が出たら、こう答えよう、ああ答えよう、と勇んで待っていたのですが、議題にのぼって、委員長が、「この議題についてご審議願います」と言っても、誰一人発言する方がないんです。それで、「質疑がないようでございますから、これは次回に回します」と言って下さった。これはご親切で、次回に回せば、きっと準備して発言もあるだろうとお考え下さったのですが、次の回も、どなたもウンともスンとおっしゃって下さらないのですから、委員長が、「ご発言がないようでございますから、これは後回しに致します」とっておっしゃった。後回しにするということは、流れちゃうということです、そのまま流れ去ってしまったのです。——一九四七年の、第一回の提出の時のこと

ですね。でも、なぜ発言がなかったのでしょうか。

加藤 占領下のことで、議員立法を出すにも、GHQの諒承が必要でしたので、提出の前にGHQ経済企画局の厚生問題のキャップ、サムス大佐にお目にかかってご説明したのです。大佐は、よくわかった、とおっしゃって下さって、まもなく、「日本人の人口問題の将来について」というメモを正式に発表なさったんです。これには、日本の人口過剰対策として三つあげられていました。第一は移民ですが、これは相手国の諒承が得られなければどうしようもない。第二は工業化。ヨーロッパの例を見ても、工業化が進めば出生率は下がる。第三が家族計画の普及でした。私たちの意見は受け入れられた、と喜んだのですが、これがアメリカに伝わりましたら、カトリック勢力からマッカーサー元帥のところに電報がどんどん来たのです。家族計画をすすめるなんてとんでもない、と。元帥は、やがて帰国して大統領選挙に出馬するご計画でしたから、アメリカのカトリック勢力を敵に回したら大変なことだと、あわててサムス大佐に、「それはもういっさい言ってはいけない」と厳命なさった。大佐は、家族計画は

「ハンド オフ」（もう手を切った）って。以来、みんな黙りこくっちゃった。

当時は片山内閣で、厚生大臣は民主党の一松定吉さんでしたが、私が予算委員会で、「日本の家族計画をどう考えておられるのか、どういう対策を持っていられしやるのか」と質問しましたら、「何も答弁はございません」とおっしゃった。「考えはあるが、今のところ対策はない」とおっしゃるのならわかりますけど、指令部のおふれで、震え上がったたのですね。何でもマッカーサー元帥の顔色見ながらやってましたから。

——俗説では、優生保護法は、混血児対策、強姦対策として、マッカーサーが裏面で促進した、と言われていますが。

加藤 そんなこと全然ありません。歴史っておかしいのね。混血児が多いなんて現実があったものだから、勝手に結びつけてしまう。恐ろしいことだと思いますよ。

ま、こういうことで、私どもの提案は流れましたが、ヤミ堕胎はふえる一方でしたので、谷口弥三郎さんほか何名かのお医者さんの参議院議員が、「危険で見ると忍びないから、優生保護法の中で、指定医のところで人工妊娠中絶が合法化されるようにしよう」と

言い出したんです。これは地区と中央の審議会の審議を通れば中絶できるという原案でしたが、そんなところに申請して、判こをもらってうちに、おなかの子がどんどん育って五か月くらいになり、中絶には手遅れになるというので、二つの審議会を一つにし、後に「経済的理由」でも中絶できるようにしたのです。何と言っても経済的理由が一番多かったものですから……。

でも、それもほんとはおかしいんですよ。誰が経済的理由があるとかないとか判断できるのか。お医者さんが判定しようにも資料がないでしょう。だから本人が言えば、「ああそうですか」と受け入れるだけの話で、あまいなことなんです。が、当時は大部分の方が経済的理由だったというのも確かなことなんです。

それで数がどんどんふえまして、最高は昭和三十年の百十七万、お医者さんの倉がどんどん建ったと言われたものです。ザル法です。数はもつと多かったと思うんです。優生保護法指定医という看板の出るところに駆けこめばいいわけですから、ヤミで危ない手術をしてもらうよりはいいということ、毎年二十万ずつふえたんです。

本当は避妊法が同時に普及されればよかったんですけど、それではお金にならないので、お医者さんはそちらには骨を折って下さないんです。それで一般の方が、いい加減な方法でなさるから、みんな失敗しちゃって、完全な避妊法がないってことが流布されるようになったんですね。中絶、中絶ってお



っしゃる方の中には、避妊法がないからって言う方がありますが、安易に結びつけてはならないと思うんです。

人体模型で具体的に説明

私はニューヨークのマーガレット・サンガ
ー・クリニックで三か月実習しましたけど、こ

のクリニックは、医者、社会運動家、ケースワーカーなど、いろんな方が、完備した設備、完備した方法で相談に応じていました。そこでは、まず、くわしいカルテをつくるんです。経産婦かどうか、何人産んだか、お産はどんな状態だったか、子どもの健康や夫婦の関係はどうかとか、月経周期とか、実にくわしくね。宗教も書くんです、アメリカは。

で、それに応じて具体的に指導するんです。初めは一つのクラスで、一般的な常識を教えて、それから、妊娠とはどういうことかというのを、スポンジゴムでつくった人体模型で説明するのです。女性の下腹部がバツと割れる仕組みになっていて、子宮はどれくらい大ききでどこにあり、膣はどうなっているかというのを具体的にを見せて、どこでどうして着床するかを理解させます。着床しないように防ぐには、こういうフタをする。このフタをどうはめれば落ちないかって、自分ではめてみさせます。コンドームはこういう理由で使うとか、薬はこういう作用をするとかいう知識も教わったあとで診察室に入り、一人ひとり女医さんに内診を受け、千差万別のからだにに応じて、からだに合った器具を選んでもらう。自分で入れてみて、はずれている

と、どこがはずれているか、どうしたらちゃんと入るかも教えていただく。しかも一週間後には必ず来て、もう一度チェックしてもらう、というのですから、九八%の成功率だったわけです。ピルのない時代ですすよ。

ベッサリーは主にオランダ式のダッチベッサリーですが、経産婦などで子宮口が変形している場合には、英国のドクター・ストーンが発明されたものを使いました。どちらの場合も、必ずゼリーを併用するんです。ベッサリーは一年間保証するんですが、ゼリーは、毎回これくらいを使用しないといけないと指示する。そしてカルテに、どの種類のベッサリーをあてがった、ゼリーはどれだけ渡した、と記入します。その方の性交頻度も記録されていますから、ゼリーがなくなった頃になっても補充しない方には「責任を持ちません」と言っている。だからいい結果が出るんです。私の相談所でも、そのとおり実行しました。

通信販売も家族に内緒で

——日本でも、成功率は九八%でしたか。
加藤 ええ、九八%でした。みんなとても真剣でしたから。背水の陣を敷いて実行しまし

たもの……。避妊の理由を聞いてみますとね、自分の夫は高等教育を受けられなかったので低い地位に甘んじている。だから子どもは数少なく産んで高等教育を受けさせたいというのが約八割、中には、農家で、妊娠すると働かざるを得なくなると言っておしゅうとめさんの機嫌が悪くなるので苦勞するとか、貧しいのでお産婆さんと呼ばず、自分ひとりでお産をしたけれど、こんな恐ろしい思いをするのならもう産みたくない、という方も相当ありました。

ですから皆さんほんとに真剣で、ゼリーがなくなる頃になると、必ず書留で注文が来ましたね。で、小包で送るんですが、うちに送ってもらっちゃ困る、留守に他の人にあげられると困るから、これこれに……と連絡先を知らせてきたり、差出人が家族計画普及会では郵便局でうわさになるから、誰それにくれとか、いろいろ気を使ったものです。

——避妊の普及はかなり抑圧されていたというのですが、問題はなかったのですか。

加藤 いいえ、避妊しなきゃいけないなんて法律はありませんもの。ただ、産めよ殖やせよが国策だから、新聞などで大っぴらに広告されては困る。ところが、避妊の方法を知ら

ないから、月経が止まった方（妊娠した人）がたくさんいるわけです。そういう方をねらって「月やく」という三行広告をいっぱい出すんです。「お悩みの方はどこそこへ」って。そこへ行きますと、わけのわからない座薬か何だかくれるんだそうですよ。効きっこないわけでしょう。もっとよく効くのって、だんだん高いのを売りつけて、一番高いのも効かないと、「あなたこれ妊娠してるじゃありませんか。うちでは妊娠してるのまで堕ろす薬はつくってません」とおどかさすんです。

ドイツから入ってきたサンプーンという錠剤の避妊薬もありました。これはベッサリが使えない方にだけ使うんですが、新聞の広告が「墮内殺菌用」になっていました（笑）。この薬は墮内に入れると、中のしめりけで錠剤から泡が出て、子宮口をふさぐというわけでしたが、そんなにうまく泡が出ないことも多くて、安全ではなかったのです。ですけれどこれは市販されましたから誰でも買える。

買って、お薬はのむものだと思ってのんだら、胃からあぶくが出たなんて（笑）。害がなかったからいいようなものですが、避妊の方法というのは、そんな薬を買っ

てきたくらいで目的を達そうなんてのは虫がよすぎますよ。自然は（子どもが）できるよりにつくってるんですからね。それをさせまいとするんだから、こちらだって相当骨折らなきゃうまくいかないわけです。

そのほかにも、いろいろと、効果のない方法を婦人雑誌なんかに取り上げまして、噴飯ものの方法をアメリカ式などと大々的に宣伝したり。危ない方法もあったのです。精虫は酸に弱いというんで梅干し療法なんてのを大的に書き立てたこともありました（笑）。これはまあ、危険はありませんけど（笑）。

つまり教えさせないから、みんながへんなものにまどわされて、ひどい目にあったという事です。

——それでは、正しい知識を教えて、成功率九八%という相談所は、押すな押すな盛況だったでしょうね。

加藤 そうですね……。なにぶん宣伝ができないので、私の所でやるとという情報の流れないんです。そのころ新聞に「悩みごと相談」というのがあって、河崎なつさんと山田わかさんが一つずつ持ってらした。山田さんはあまり賛成して下さらなかったのですけど、河崎なつさんは、子だくさんの相談が来

ますと、「品川区大井金子山の石本静枝に相談すると親切に教えてくれる」って答えて下さったんです。そうすると、数日後には郵便箱いっぱい手紙が来まして、それからロコミでふえたんです。それよりほかに普及の方法がなかったんです。

——一日に何人くらい診てらしたのですか。

加藤 十二、三人でしょうね。週二回開いてました。後はみんな通信です。女が歩ける時代ではありませんでしたから。問い合わせがあると、図入りのわかりやすいパンフレットをお送りして、ほしうと言つてこられた方には、体格とか出産経歴などをくわしく書いていただくようにして、それに基づいて、大体これくらい、というのを送りましたのです。くわしい説明書をつけて。

——からだに合わない場合もあったでしょうね。

加藤 だいたい合いましたね。身長、体重とか、出産経験とか、お産の経過とか、詳しく聞きますと、平均というのがあるんです。日本は同一人種ですから、あまりちがわないんです。アメリカみたいにヒップが一メートル以上もある黒人がいたり、ほっそりした方もいる国では、サイズもいろいろ大変なんです。

けど、日本人は五種類で大体合っていました。

——費用はどれくらいですか。

加藤 安いものでしたよ。二円五十銭くらいでした。器具代・薬品代ともですから、たいへんお安かったと思いますよ。ほんとの実費です。うちでつくってましたから。

——えつ、石本男爵の邸内で、ですか。

加藤 ゼリーは、うちの台所で、私がつくりました。サンガーさんから頂いた処方案で。大きなお釜を買つて来て、煮て作ったんです。チューブ詰めの機械をアメリカから買って、詰めるのも、うちでしました。

ベッサリーには苦勞しましたね。ピアノ線やらせん状の輪をつくつて、今度はゴム工場に行つて、それをゴムの中に何回か浸すんです。そうして出来上がったものを一つひとつ精密検査しました。水を入れてね。ちょっとでも穴があったら役に立ちませんから。

——知識階級の方は来なかったのですか。

加藤 ええ、来ません。恥づかしいから。来るのは中産階級およびそれ以下の方です。——いろいろ聞かれるのが恥づかしい、というのでしょうか。

加藤 今はテレビでほんとにひどいもの見せて、平気でそれを見てアハハと笑つてる奥さ

んの姿まで映つてますけど、当時はしゅう恥心というものがありませんでしたよ。

——しょう恥心は、暮らし向きにかかわらず誰でもあったと思いますけど、知識階級の人の方が、避妊に失敗しても何とか産んでいけるということだったのでしょうかね。

加藤 それに、裕福な方はお妻さん持つことも自由ですからね。奥さんが「産むのはいいんだ」と言えは、お妻さんのとこに行けばいいんだし。私の友達なんか、知らない間に五、六人の庶子が籍に入つて、ご主人が亡くなつたら、財産をみんなそちに持つていかれたり……。ほんとに明治三十年にできた家族法というのは女を徹底的に無視したひどいものでした。それで私も参政権運動や廃娼運動に関わったのですが、女が人間として扱われてないってことは、上流階級の方だって身をもつて体験されたと思います。心の中で反抗してても、表立って言えないだけで……。だから上流階級の方は、終わりは必ず自殺でした。むしろ上流階級のほうにいろんな問題があったのですけど、辛抱するより生きる道がないのですもの。家を出ても、お里だつて入れてくれませんよ。「出戻りがいるなんて、家の恥だ」って。しかも、子どもを置いて出ると

いうのが、その頃の女にはできなかったのです。どんなにつらくても……。

今は、優生保護法の問題でも、経済的理由で中絶できないのはけしからん！ 中絶は女の権利である！ というところにだけ運動の中心が行って、若い方にはまたそれがアビールするようになってますけど、中絶によって女性の権利が守られるなんて、おかしいじゃないですか。女にはもっと尊い美しい使命があるんです。

——というのは、子を産み育てることですか。

加藤 女は男より劣った性ではないんです。女の肉体は、農作物の豊穰を意味するくらい豊かなものだと思われてた。土に根ざしたところで妊娠し、子育てしたんです。

——だからこそ、その豊かな性を、自分で選択して産みたい、中絶は、やむを得ない場合の最後の手段として保障しようというのが、今の運動だと思いますが……。

それほど中絶に反感をお持ちの先生が、どうして優生保護法を推進なさったのでしょうか。「貧しさからの解放」ということだったのでしょうか。

加藤 そういうことは特に言いません。言う

とイデオロギーみたいになっちゃうから。

私はあくまで「中絶」でなく「避妊」

——いちばんふしぎに思うのは、優生保護法の条文は国民優生法の条文と、ほとんど変わってないどころか、むしろ強化されていることなんです。

加藤 国民優生法というのは非常におかしい。ナチスドイツの「血の純潔」でつくられた断種法をまねしたんですけど、日本人には必要ないんです。日本人は同一人種ですから。なのに、何でもヒトラーのまねをしてつくったんです。それと、やたらに断種して人口が減っては困るというので、その二つの思想を入れてつくったものです。当時は女は発言権がなくてどうしようもなかったわけですが、それにチョンと中絶法をくつつけた優生保護法は、非常におかしい。

——それなのに、なぜ、新しい法律案が出されなかったのでしょうか。

加藤 法律というのは、全く新しいのをつくるのは難しいんです。一部改正という形でやると、わりに楽にできますけど。だから安易な道をお医者さん（議員）たちが選ばれたと思う。私は不服でした。みごもる前の対策で

ある避妊を素通りして中絶を考えるのは順序が逆だと思いましたが、お医者さん出身の議員は非常に多くて、そのうえ、中絶手術ができるのは医師会が指定した医師に限るという点に医師会も大いに賛成してましたから、まあ仕方がないって。谷口さんは、こんなことは医者のすること素人の知ったことじゃないって態度でしたし、実際にヤミ堕胎に走って命を落とす人が多い状況でしたから、次善の策と思って賛成したわけです。

——素人がくちばしをはさむな、ということだったのですか。

加藤 そんなことはおっしゃらないけど、参議院で法案をつくる時は、参議院の法制局へ相談するわけです。要綱や条文はそこでつくってくれるのですが、谷口さんはどんどんそこで相談なさって。政府与党でし。私たちにいちいちご相談なさることもないわけです。私は避妊を言い続けてきた人間で、中絶じゃありませんし。

戦前、貧民層の人たちの中絶を助けていた馬島潤さんが訴えられて、安部磯雄さんなどが弁護にお立ちになった時も、私は「堕胎と避妊は全然別問題です。堕胎を弁護すると混乱を来しますから、そういう立場はとりま

せん」って、貫きとおしたんですよ。

——優生保護法の中には、全国に優生保護相談所を設けて避妊の相談に応じるということも含まれていて、それが唯一の改良点ですが、現実にはなかなか実行されていないようですね。

加藤 全国の自治体の保健所、たしかに八百か所ほどで避妊の方法を教えるということになってるんですが、実行してない。だいたい避妊の知識がないんです。お医者さんがいても、産婦人科のお医者さんじゃないし、あまり関心もないという方では積極的に行って下らない。恥をしのんで聞きに行ったら、「何しに来たんですか」なんて言われて、びっくりして帰ったり(笑)。いまだにそんな状態なんです。

家族計画連盟では、毎年優生保護法実地指導員の講習会を開いて、三、四百人参加があるんですが、多くは自治体に勤務してる方で、昔の助産婦さんのように自由に戸別訪問して、気軽に相談のつてあげるというわけにはいかない。それで、いい加減方法を学んで、あるいは怠けて、まア間違ったら堕ろせばいいっていうので中絶が多い。中絶が多いというのは、はなはだ残念なことなんです。

こんなふうに二回も改悪の問題が起こったのに、家族計画連盟は怠慢だったと反省してるんです。ただ反対だ反対だと言って食い止めても、本当の趣旨、——婦人と子どもたちの健康としあわせを守る——を徹底させて「避妊はできないものじゃない、できるものです」というところまでもっていき、ちゃんと予算もつて、保健所にもいい指導員を置くというところまでぜひ持っていきたいと思います。

家族計画連盟も、国際家族計画連盟に加わって、東南アジアの避妊指導のお手伝いなどはしていますけど、国内は出産率も下がったことだし、というのであまりやってなかったのを、今回反省してるんです。若い女性たちがあんなに真剣に立ち上がって阻止したのを見て、感銘を受けましたし、これからどうしたらいいか、婦人たちの意見をたくさん入れて、研究しようということを決めました。

日本のように、こんなに急激に出生率が下がった国はないんですね。しかも、優生保護法による中絶、という、おかしい方法でね。優生保護法が出来たあと、一九五五年に、日本で初めて国際家族計画連盟の国際会議が開かれたんです。この本部はロンドンにあり

まして、日本にあった馬島さんの会とか、私たちの会とかを全部統一して、日本家族計画連盟という名にして国際組織に加わったんですが、外国のそれぞれ一流の方が代表としていらっしゃって、皆さん変な顔して私たちをごらんになるんですね。日本人って、何と倫理観の希薄な国だらうって。「アボーションフリーパス」(と抑揚をつけて)って、皮肉な言い方でね(笑)。恥ずかしい、いやな気持ちでしたな。戦争に負けてどうしようもないって。ま、とにかく馬鹿にされたと思います。

ところが、六七年にロンドンで会議があり、お開きのパーティが開かれたとき、顔見知りの英国代表が、息せききって駆けつけた。何かいいものでも持ってきたみたいな顔して、「いま国会で中絶法が通った」って、大変ないいものを得たような顔をなさったので、私は変な気持ちになりましたよ。自分の国で通ったって自慢してらっしゃるなんて、何という変わりようだと思って……。その後、アメリカでも、「憲法で保証されている」という判例が出たり、世界じゅうどんどん変わってきて、ああ、世界っていうのは変わるものだと、つくづく感じましたね。世の中ってものは、変わるものですよ、ね。

*

さだまさしの『関白宣言』が大好き。

「明治の女の生き方でしたから」と。

その一方、「女の家庭における役割は、平等の立場に立って、選べばよいと思う」とも。

避妊は、あくまで「女の自立」の第一歩。

「すべての女が自主的に避妊を選ぶ日を」という六十年の思いはひとすじで純粹無垢である。

一九三七年、人民戦線の大検査があったとき、「避妊をすすめる△危険思想▽の持ち主」として、二週間の獄中生活を送った。相談所のカルテもすべて持ち去られ、やむなく閉鎖したという。しかし、「家宅搜索というのは実に徹底的なものです」と、淡々と語る語り口には、「後ろは振り返らない」という信念が感じられる。「後ろを振り返ることは簡単なんです。心が安らぐんです。でも、人間は、幾つになっても前を向いていなくてはならない」と。

人生に目標を持ち、それを貫きとおした、あくまでも聡明なこの方は、いま、国際規模での避妊の普及にも情熱をそそぐ。「中絶じゃない、避妊ですよ」と、避妊の二字に力をこめて。

(千)

この人に聞く 太田典礼氏は 月刊『あごろ』に

優生保護法成立もう1人の生き証人、太田氏は、ご病気でインタビューを中断しました。ご回復を待ち、インタビューを続け、月刊『あごろ』(旧『あごろミニ』)に掲載する予定です。(月刊『あごろ』は購読料年3000円)

人間の科学社

〒101 千代田区神田小川町3-10
営業部 03 (813) 5271

● 堕させたり産ませたり勝手はさせない ●

悲しみを
四六判 256頁
780円

裁けますか

■ 中絶禁止への反問 ■

日本家族計画連盟編

時の政府の都合で個人の、とりわけ女の意味が尊重されるべき領域に迄介入しようとする動きに、しわよせを一身に負わされる女の立場から対決。

中絶は
太田典礼編
四六判 72頁・400円

殺人でない

母体の保護に半生をかけた編者が、優生保護法改悪に狂弄する勢力の企みに真向から挑戦、現実を見据えた医師の立場から科学的にその不当を衝く。書店にない場合は直接小社へお申し込み下さい。

田中寿美子さん (日本社会党副委員長・参議院議員)

阻止以後こそ危機の時

——いまこそ運動の再編成を

十年前の優生保護法改悪阻止に、参議院議員として大活躍なさった田中寿美子さんは、七四年、廃案に持ち込むとすぐ、「阻止以降」を見越して「受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術に関する法律案」を作成。この問題には誰にもまして熱意をお持ちだ。

「今度の動きが出たとき、真っ先に思い出したのは、田中先生のことです。十年前、「優生保護法は天下の悪法」と、激しい口調で話してくださったとき、そうだそうだと、頭ではわかったつもりになったのです。でも、もし本当にわかってたら、優生思想にもっと立ち向かっていたろうと、女の運動にかかわる一人として恥じ入っているところです。」

田中 あの時分は、思想性までさかのぼる動きはあまりなかったでしょう。でも、今後のたたかい方はそういう方向に向かわないと。

今回ひっこめたのは、自民党内の推進派と反対派が分裂しているうえ、女たちも反対しているというので、党内に検討委員会を設置した結果、選挙に不利なので、次期国会に向けて体制を組むことにしたわけでしょう。選挙が終わったら、すぐ反撃が来ると思うんです。ことに私が気にしているのは、玉置和郎の第一秘書の寺内弘子が今度の参院選に出ることです。生長の家の幹部で、生政連の副総裁の

奥さんでもある人。衆議院に回る玉置の身代わりに、全国区で立つんですが、自民党は当然、上位に格づけするでしょう。右翼の宗教政治連盟に勤めてた人で、四十七歳。これは怖い人ですよ。

怖い秘書がいるな、と思ってたら、玉置を看視するために送られて来た人らしいの。筋金入りの理論家です。村上正邦なんかは理論的に非常に弱いし、玉置も理論がないけど、この人は働き手で、しかも女ですからね、とてもうかうかしてられない。

自民党の婦人議員は反対申し入れをしたけど、理由は、「時期尚早」とか、「慎重に扱うべきだ」とか、基本的な反対ではない。自民党内の反対派の勢力は弱いんです。だから、次の選挙で中曽根が勝利したら、「やってやれ!」と、どんどん進んでいく。谷口雅春のもともとの主張は、帝国憲法の制定と優生保護法の強化でしょう。これは必ずセットになっ出てくるし、寺内と村上が組んで進める

だろうと、私は非常に危機感を感じています。

だから、今度盛り上がった運動を解いたらいけない。むしろこちらが攻勢に出ないと。

この際にこそ、優生保護法を廃止して人工妊娠中絶法をつくれという運動に切り換えていかなければ非常に危い。反対運動してる人たちが、この点を意思統一していかないと……。

昭和十六年から実施された国民優生法は、

ゲルマン民族の血の純潔を守れと、ユダヤ人虐殺の口実にしたナチスドイツの断種法をまねたもの。障害ある者は断種手術、優秀な者を残し、劣者ははろばせという思想でしょう。

こういう民族主義的な思想は、日本人に多分にあるから、「日本の兵力や労働力を守るためには優秀な者だけを残そう」という考えには、与野党を問わず賛成しそうな雰囲気がいっぱいあるわけ。婦人議員でも、扇千景や山口淑子は、生命尊重何が悪いかって、生命尊重議員連盟にも入ってる。背後にある思想を見ぬかないと危険です。

新しい中絶法を早急に準備して

——まず、優生保護法そのもののおかしさを言っていきたいと私たちは思っています。

田中 優生保護法の条文の「目的」を読むと、

おかしさがわかりますね。世界でも断種が残っているのは日本とドイツだけ。個人の権利としての人工妊娠中絶は、もう世界の趨勢です。フランスのような、カトリックの国でも、ミッテランになってから八〇％は経費を国で負担している。母性を守るためには、国家がそれくらいのことをしていいと思いますね。

人工妊娠中絶法は、七四年の党の試案を叩き台にもっと簡素化すればいい、と思ってます。目的は、「母性を守る」でも、「女のからだを守る」でもいい。そのために時期を一定期間内にしたり、手段の安全性や費用を国が保証する、避妊や妊娠・出産の相談にも応じる、といったことを盛り込む。これなら、そんなに大変な法律じゃないんです。たいていの国のも簡単でしょう。私たちの七四年案は、優生保護法に少し引きずられたところがあるので、そこを削るか、母子保健法に入れるかする。

——母子保健法に入れるのは問題、とも聞きますが。

田中 あまり賛成でない人もいるし、優生保護法に対抗させるためには、むしろ独立の法律を出したほうがいいかもしれません。

ただ、私が心配してるのは、それを出したために、この際、優生保護法をもっと強化しようという動きが出ること。精神的理由や胎児条項を入れようとか、結婚・妊娠の指導まで打ち出しかねない。だから、出されても対抗してたたかえるような勢力をこっちがつくっていかないといけない。ほかの野党や自民党の中にも、この問題がわかる人がいますから、こちらの勢力をふやして議論を巻き起こしたいと、私は思っています。

十年前のことを少し思い出したんだけど、七二年にはあまり審議もされずに終わってましたね。七三年になって、「優生保護法改正か」とマスコミに出たころ、アメリカではNOWが出来た。中絶法とERAの二つで、女たちが右から左まで結集したんです。七三、四年と、私も二度アメリカに行って、もうかなり下火にはなっていたけど、なまなましい状況を見ましたが、それが日本にも影響して、リブの人們が大きな運動やりましたね。エブリン・リードさんも、「アメリカでやっと中絶法を獲得したというのに、日本はせっかく持っている中絶の合法化をなくそうなんてとんでもない」と講演したりしたけど、今度も女が運動していかないと、男は、「いい子孫を残す

のは必要だ」みたいなことになるでしょう。

「優生保護法は好ましくない法律だけれど、あそこには中絶が合法化されてないからやむを得ず守るという非常な矛盾をおかしている。改めて、自分たちを守る法律をつくらう」という方向に婦人運動の体制を組み直していかないと、向こうからやられる。ことに中曽根政権が強固になればなるほど心配です。一応阻止したからといって、とても安心はできないということ、警告していかないと。

森山真弓さんが言っていたように、自民党の反対派の人たちも、「何で厚生省の精神衛生課長が出てくるのかわからない」というくらい、優生保護法そのもののさえわかっていない状況ですからね。軍拡路線、憲法改悪路線と結びついてるんだ、小さい問題じゃないんだ、と言っていきたいですね。

産む側だけに重い責任が

——同時に、墮胎罪も問題にしたいですね。

田中 子どもを、産みたい時に、ほしい数だけ産めない状況に対して、それは女が自分で決めることだという個人の権利も主張しなければいけないけど、もう一つ、相手となる男の責任は何も問われてないということは、運

動として考えていきたい。

村上議員なんかあんなこと言ってるけど、たとえば年に二百万人中絶があるとしたら、それをどう育てるのか。どこかに集めて兵隊にでもする気なのか……（笑い）。

十代の性の混乱とも結びつけてるみたいだけれど、男女が対等な人間として性関係を持つことなども、研究課題として考えていきたい。校内暴力の陰に隠れてあまり報道されないけど、中・高生の女生徒の犠牲も問題にしないと……。墮胎罪は廃止すべきです。

——性教育や避妊相談所が不完全で、中絶だけを責められても、と思いますね。根本に、男女の不平等ということが、どうしてもあるような気がします。

田中 女は産む性を持つることによって犠牲を強いられるんですからね。

戦前も、結構みんなやってますよ。私だって、戦前二回、戦後一回、経験があります。

たいていの人は経験があると思うの。口に出しては言わないし、いいことだとは思ってないけど。……戦前なんて、麻酔かけないから、そりゃ苦しい。もう大変な苦しみでしたよ。

——いわゆるヤミ中絶しかできなかったわけですね。

田中 そりゃ非合法だわね。私は中野にあった医療生活協同組合でやりました。左翼の病院で、ま、医者がやってくれましたけど。結局、いい避妊法がなかったんです。あの頃は。

今でも世界じゅうで、生活の苦しいところとか難民ほど、子どもをごろごろ産んでは死なせてる。非常にアンバランスな世界です。

私も、中絶がいいと思ってるわけではないけれど、ないと困るんです。産まれるのにまかせてたら、女は生涯何もできないでしょう。

江戸時代の間引きでも、生活苦からだけじゃないと思うんです。産む性をもってる女は、非常な重荷を負ってますよ。だから当人が欲するなら、安全な方法で中絶できるようにならないと。

——できれば中絶でなく、避妊が成功すればいいわけですけど、一〇〇％安全な方法がない現在、最後の手段として、ということですね。ところで、受胎調節も含めた中絶法試案が七四年につくられながら、今日まで目の目をみなかったのはなぜでしょう。

田中 この十年、向こうの動きもなかったでしょう。策動はあったけど、で、うっかり出して寝た子を起こすことになりはしないかという考えがありました。中絶法がそんなに必要



だという考えも党内にはなかった。そこまで考えてなかったような気がするんですけど、今度の問題が起きてから、私は、優生思想が危いなアという感じがしてきたんです。もうだまってる時じゃない、という気がします。厚生大臣は、「倫理的、宗教的に研究する」と言ってますけど、むしろ「人権」として研究してもらいたい。大臣の話からでは、「受胎の瞬間に生命は始まる」という説を宗教家はどうか考えるかといったことを持ち出して胎児の生命を尊重しようとしているのか、それとも産む性である女性の健康や個人の権利を守ろうとしているのか、さっぱりわからない。そういう関係者を動員して、研究に長い時間を

かけようとするふしはあるんですが、女性の側で、この問題を深く考えていけないと——
——厚生省は疫学的な立場で、心身障害者の出生率の低下をはかっているともいわれますが。

田中 だから十年前は、自信をもって羊水チェックを持ち出したんです。七三年の五月に審議が始まったのだけど、二十三日に衆議院の委員会を通る時は、反対論に修正されて羊水チェックは削除して参議院に持ってきた。あの時は障害者の方たちがずいぶん運動しましたものね。リブの人たちも子どもをおぶって、一緒に何度も国会の議員面会所にいらっしゃったし。

あの年は、与野党の対決法案が非常に多かったのです。勢力も保守伯仲、野党も多党化してなかったの、九月二十四日まで、対決法案を全部継続審議にしました。それで、翌年の七四年には参議院から始まったんです。当時私は社労委員で、社会党が委員長をとったので、絶対に流そうと、ちょうど雇用保険法改悪と必死にたたかった時でしたので、一緒に廃案にしたいんです。そういうほかの法案があると一緒に流しやすいんですけど、あれ一つだけ出て来たら、とても……。

精神障害者をつくる社会こそ問題

——女や障害者の立場に立つ人の議席をふやすということがほんとに大事ですね。今度も選挙前なので何とか阻止できたけど、これで負けたら大変なことになりますね。

田中 自民党は、党内で賛否分裂しては困るというので凍結したんだけど、選挙前だからです。署名も七百万集まったというし、そこまで来たものを投げ捨てるわけがない。寺内さんが出て来たら大変なことになりますよ。

——私たちの側で、国民的コンセンサスを得ることが必要なんです。そのためには運動の方法はよく研究しないと、また、「翔んでる女が騒いでる」式の逆宣伝の材料にされる心配がありますね。

田中 中絶法には官僚の抵抗も、きつとありますよ。厚生省の公衆衛生局に精神衛生課というのがある、今はそこで所管してるでしょう。自分らの存在をおびやかされることには猛然とたたかうと思います。それも頭に入っておかないと……。

我妻（栄）さんなんかは、中絶法にしないで母子保健法に入れるのが一番簡単ではないかとおっしゃってますね。母子保健法になる

と、母子衛生課の所管になるけど、優生保護法は精神衛生課に生き残っていく可能性もあるわけです。

あれはそんなに強い課じゃないけど、官僚機構というのは、一つでも所管を失うことに抵抗しますからね。精神衛生課は、現実には精神衛生上問題になってる人のめんどろを、もつとみてくれればいいんですけどね。

——優生保護法廃止の話をする、精神障害者が野放しになると心配する人も意外に多いんです。優生保護法で防げる問題ではないのに……。事件が相ついでるものですから。

田中 無作為に人を殺すというのは、たしかに大問題だけど、麻薬や暴力団の問題が背後にあるわけでしょう。世紀末的な社会問題が重なって出て来てるので、優生保護法で防げるような問題じゃないですよ。社会全体の荒唐を中絶と結びつけるんでなくて、本当に人間らしく生きられる社会をつくりましょ、ということでは解決しないよ。

精神障害者の増加は、自然破壊や、薬品、合成化学製品の問題とか、ストレスの増加とか、人間がおっとり豊かに生きられなくなった中で起こってる現象ですよ。精神障害者を淘汰してしまえ、なんていう考え方は、

荒唐そのものを支えることになる。人間の生き方、社会のあり方を考えないと。

——この問題は、考えれば考えるほど、ほんとに大きな問題ですね。

ところで、これほどの優生思想が、なぜ、戦後の法律に受け継がれたんでしょう。一九四八年の原案は、加藤シヅエさんや福田昌子さんが中心になってつくられたということですが。

田中 当時のことはよく知らないけど、やっぱり戦時中からの、「優秀な民族であるべきだ」という思想があったんじゃないですか。

四六年に初めて婦人参政権を行使して、婦人議員が出て来たんだけど、食糧難だし、人口政策的な意味もあったと思います。

——それにしても、それから三十五年、いまだに温存されているというのは、日本の中にも、社会党にさえ、人権思想が確立してないということではないでしょうか。

田中 残念ながらそれはありますね。今度の反対声明でも、産婦人科のお医者さんたちの、必ずしも純粋な気持ちだけではないし、人口政策的な立場に立っているものもあるようだし……。

ただ、加藤（シヅエ）さんなんか、低所得

層がポロポロ子どもを産んで苦しんでのを見て産児制限を言い出した人だけど、今回もいち早く反対声明を出して、世界人権宣言の中に、産む時期と子どもの数を選択する権利が保障されている、と言ってますね。

——七四年の各種の反対声明を読み比べてみると、今回は「人権」がずっと鮮明になっているものが多く、十年間の進歩は感じます。ところで、四八年には、田中さんは婦人少年局に、もういらしたわけですね。

田中 そうです。四七年の九月に婦人少年局が発足、翌年の三月末に山川（菊栄）さんを訪ね、ほとんど即日採用されたので……。

——では、まさに当時の目撃者でいらっしやるわけですが、何かご記憶は。

田中 ありませんね。全然ありません。あの頃は、労働基準法を女子労働者に説明して歩いたり、新民法で男女平等になりました、と農村に話して回ったりで、優生保護法なんて記憶にもないの。加藤さんたちは産児調節をずっとやってらしたから、関心が深かったでしょうけど。

——翌四九年に、「経済的」理由が認められ、五二年に、当人と配偶者の意志だけで、医師が認めれば中絶できるようになったわけですが

けれど、そのへんのご記憶は？

田中 その頃のこと、まるで記憶にないの。七三年に騒ぎが始まってからですよ。本当に気がついたのは。

——先生はどの方でも、婦人問題としてのご認識はなかった……。

田中 私ほどだなんて……。私が最後に中絶したのは五一年か二年ですけど、それでもその頃はそういうこと考えなかった。その時は一応麻酔してやりましたけど。

妊娠を避けることの難しさというのは、これはもう……。性関係でいうのは、お互いの感情の高まりということもありますし、本当に安心できる状態にしておかないと……。

性関係を持ったことのある女の人なら、わからぬはずはないと思いますね。

——避妊を続けるということ、ものすごい緊張関係を伴いますからね。

田中 そうです。だから避妊法の開発は、ぜひやってもらわないと。

——私たちの今度の調査でも、方法はコンドームが最多数。これは相手の協力がないとできませんし。軍事情などを、こういう研究にこそ回してもらいたいものですね。

それにしても、婦人少年局でさえそうだと

すると、一般の女性に優生保護法の危険性がわからなかったのは、むしろ当然ですね。

田中 ええ、当時の婦人少年局なんて、労働問題と、新しくできた婦人の権利を説明して歩くのが精いっぱい、地方の婦人少年室も、四七年の九月から四八年いっぱいくらいまで

かかって人員を埋めたんです。「幹部には男を入れる」というのを山川さんが抵抗して、女で埋めるのに時間がかかったんです。

私たちも、自分自身苦しめられながら、そういう問題について考えてこなかった。女自身、自覚しないで犠牲に耐えてきた。今度初めてでしょう、ほんとに本物になってきたのは。

——底辺が揺がったのを感じますね。ただ一つ残念なのは、この前は障害者と連帯して運動したけど、今度は気まずい空気が出てるところがあるんです。これは本当に共通の問題なんだし、何とかしてその共通の部分を深め合

っていききたいと思ってるんですけど。

田中 今回は、(向こうも)「経済的理由」だけにして、直接障害者をアタックしてないから……。

——問題の本質はもっと根深いところにあることを、何とかして伝えたいと思ってます。

田中 小集会でも勉強会でも何でもするといいですね。私も七月で議員をやめますが、党の婦人対策委員長は党大会まで続きますから、基本政策の中に何とか盛り込んでいきたいと思っています。

＊

三十年前、初めてお会いした田中さんは、絹糸のように細く、両刃のカミソリのように鋭い感じの方だった。風雪に洗われて、いま、大樹のようにどっしりと大きい田中さん。

その風雪の中に、三回の中絶体験があたりだったことを、今回初めてうかがった。情念に裏つけられた理論の重みが胸を打っていたのだと、いま思いあたる。一日も早くご健康を回復されて、活動最前線に再び立つて下さるよう、祈ってやまない。(千)

第一回国際女のセミナー

6月17(金)18(土)19(日)

国立婦人教育会館で

日本在住の世界のフェミニストたちと平和・中絶・売春・労働などについて語り合う集いです。参加費6000円(宿泊費2泊分込み)。お申し込みはへあこらV国際セミナー係(東京都新宿区新宿1の9の6)へ。

あざやかな女たち

佐田 智子著

二〇〇円

「人生八〇年の時代に、これからの日々を、いかに充実させて生きるか。」「朝日家庭便利帳」連載の、様々にあざやかな生き方をしめす女性三九人との対話。

「平和」の風景

朝日新聞社会部編

一四〇〇円

このところ、にわかに高まった「軍靴の響き」を、様々な事象にとらえて注目をあびた朝日新聞連載記事に大巾加筆。八〇年代初頭の反動状況を克明に記録する。

「政治」の風景

朝日新聞社会部編

一四〇〇円

突然、暴走しはじめたかに見える中曽根軍拡路線の背後には、どんなことが進行していたのか。自民改憲案など重要資料を満載して、82夏以降の朝日連載に付す。

教科書と子どもたちの未来

山住 正巳編著

二〇〇円

教科書を換えようとしている勢力は子どもたちをどのよつな時代に導こうとしているのか。検定の実態を告発する数々の証言と市民の激しい怒りの声を収める。

衛撃のルボノ 1500円
ベトナム枯れ葉作戦の傷跡

曹田 隆史著

すずさわ書店

東京都新宿区矢来町56

振替・東京3-138354

女の人権を考える

女の性と中絶

優生保護法の背景

優生保護法の「経済的理由」削除をめづつて、中絶せざるをえない生活状況と女の人権を考える。

【主要目次】

- 1 優生保護法の背景
戦争への道づくり 吉武輝子
中絶すれば牢獄ゆき 中下裕子
水子供養と靈魂救 落合哲子
 - 2 中絶と女の状況
女たちの生きにくさ 田辺聖子
貧しさゆえのおとし穴 野地せい子
主體的な性と性を求めて 宮子あずさ
 - 3 管理される性と性
人種改良の目論み 福本英子
ふりわけられる子どもたち 福島みどり
女性解放と中絶 ヤンソン由実子 ほか
- 社会評論社編集部編／1500円

わたしとあなた

愛つて性つてなんだろう

大井清吉監修

好評発売中／1200円

ちえおくれの人たちを対象にしたスウェーデンの性教育書を日本の実情にそつて監修した、はじめてのテキスト

社会評論社

東京都文京区本郷2-5-10 ☎03(814)3861 振替東京7-89969

この人に聞く

田中美津さん（鍼灸師）

〈負〉の窓から見つめつつ しどろもどろ生きる

十年前の優生保護法改「正」に対決して、その名を轟かせたハリブセンVこと新宿リブセンター。先頭に立った田中美津さんの名も、まだ記憶に新しい。

あれからメキシコへ。三年前帰日以来沈黙を守る彼女は、一旦は取材を拒否した。

「私って、とても忘れっぽいんです。それに、今は、デモとか集会より、もっと日常感じる怒りや疑問を大切にしたいと思ってますし……」

それなら、ますます聞きたい。会いたい。とにかくインタビューにこぎつけた。

——今は、△子育てのお美津Vという、もっぱらの評判ですが……。

田中 あたしって、法とか権利とかいうようなところより、哲学というか、心の問題にどうしても関心がいつてしまつて、何年かやつてるうち、私は運動家としてとても不適であるという結論に達したんです。

それに、世の中、抑圧が網の目みたいに、やっぱり張りめぐらされてるんですね、今も。

保育園で、「学校に行くようになったら大変よ、大変よ」とお母さんが言う。何が大変なのかわかんなかったんです。したら、入学案内が来て、「給食は二十分で食べることに。鉛筆はBを使うこと……」。全部命令調なんです。そして最後に学校を飾がらないように書いてあるのね（笑い）。

ごはんを二十分で食べられない人はどうな

るのか。私なんかから見れば、ごはんをきつとくんで食べることは、とても大切な意味があるように思えるのに、早めし早くそつて感じて……。

——実は、うちの娘がそれで落ちこぼれちゃったの。トイレの紙なんかも折紙みたいにきちつとたたむ子で、保育園ではそれでも何も問題にならなかったけど、入学したら給食が二十分で終わらない。余った分は毎日持ち帰されて、ほら、こんなに遅れますよ、と。「先生、あの子はエンジンがかかるのは遅いけど、必ず完走します」と言うて、「そもそもお母さんが働いてるのがよくない」という話になる（笑い）。相对評価ってこわいですね。田中 何でも、みんな、みんな、って。みんなとちがうものは切り捨ててる発想。障害児差別の裏表だと思ふんですね。

——みんな、って言うのは、つまり、特定の標準で考えた平均値。それに合わないものはおかしいって言うのは、これこそ優生思想だと思ふんだけど。

田中　だからあたしは子育てにかまけてる(笑)。なぜ一人ひとりのお母さんが、どうして鉛筆はBでなきゃいけないの、って考えないのか。学校は息子の皮膚をきたえるためにハイソックスはいけない、ソックスを、でしょ。でも、はいてないのはみつともない、といってくる。そしたら、一人のお母さんが手をあげて、「あの、入学式だけはハイソックスでよろしいでしょうか」(笑)。

私たちの闘いの網の目が、いかに粗すぎるか……。人間はひとりひとり違うんだ、という当たり前の感性が失なわれているのに、問題が問題として見えないことが大きな問題。

優生思想って、たとえば合理主義とすぐくつながってると思ふんです。高度成長っていうのは、快適な生活を求める。みんな快適になれる、もって快適になれるって思っ、いま女の人たちも、より快適な生活を求めて頑張ってることがありますね。それ自体悪いことではないけど、やっぱり「快適」の中身を、自分個人としてごまかしのないところ

確かめていかないと。

この間、ある集会で、「私は不都合ないから籍を入れてません」って、ある方がおっしゃった。今までだと聞き過ごしてきた気がするんだけど、しどろもどろに怒ってしまったの。私は籍を入れてないんだけど、不都合がすごくあるの。この前も「何度言ったらわかるのか!」って、いきなり隣の男がどなりこんできた。何のことだかわかんなくてボカンとしてたら新聞紙をビシャッと投げつけた。もう、殺されるんじゃないかと思ったくらいすごく怖かった。子どもがうるさいって言うんだけど、うちが母子家庭でなかったら……ってやっぱり思うわけですよ。そういうときそんなに気軽に怒らないだろうと。ひがみかもしれないけど、一人で子どもを育てててことは、ときに不安で、またすぐ不都合なことが多いと思うんです。だからこそ籍を入れないっていう気持ちがあるわけ。あたしはずいぶんいい加減な女で、できれば三年寝太郎で生きたい、自分だけ蜜なめたいって気がいつもある。

たとえば病気になるでしょ。一週間くらい寝込んでやって。すると、日常子を預かったり、ハリを打ってあげてるような人でも、ラモ

ン君はお風呂に入ってるのかしら、とか、ごはんはどうしてるのかしらって考えてくれるような人、ほんとにいないんですよ。それは彼女個人の問題じゃなくて、家族のものが、ものすごい求心的な集団で、家族のことにしかイマジネーションがいかないような構造があるんじゃないかと思うんです。結婚生活の中のセックスがつまんなくなるっていうのは、多分イマジネーションが奪われているというのとつながってるんじゃないかと思うんですよね。そういうふうなことを考えると、あたしがかるうじて、ああ、あの人何食べてるのかとか、その程度考えられるのも、子どもと二人でチルチルミチルミに抱き合っていて、心細く暮らしてるせいだと思ふんです。かるうじて、って感じするんですよ。ほんとにえらいことは何も言えなくて、やっと未婚で子どもを育ててる、という不都合な八窓Vを持ってるがゆえに気がつくっていう……。それは私の存在の一番基本的なところにかかっている八窓Vだからだと思ふんですけど。

不都合がないっていうけど、籍っていうのは入れれば入れたで不都合で、入れなければまた、不都合っていう性質のものじゃないかしら。そしてその不都合さを感じる中でしか、

見えてこないものもあるはず。そういう意味

で女の人の解放って言うとき、失うことは得ることだということに腰をすえてほしいって感じがあるんですよ。被害者意識だけじゃなくて、何とか這い上がろう、だけじゃなくてね。

中絶の選択って言うけど、私は個人的には選択なんかしたくないって気持ちがすごくあるんです。人間の生命の選択でしょう。そんな選択は、私はようできない、という感じがあるわけですよ。日本は一九四八年から中絶してるんですけど、欧米の女たちと同じところに立って論理を展開するわけにはいかなーと思いますよ。それだけの痛みが、私たちにはもうあるはずだし。何を得たのか、何を失ったのかという検討を、きちっとすべきではないかと思うんですよ。じゃないと、権利も自由も今の世の中に巻き込まれちゃうみたいー。

死んだ人たちの上に生きてる私たち

——三十五年かけてつくった△窓Vがあるはずですよ。ところで、十年前の闘いのことは忘れた、っておっしゃったけど……。

田中 うーん……。関心のあることは忘れないですよ。

——どんなことを……。

田中 たとえば国会闘争はいやだったっていうことね。国会に、しょうがなくて駆けつけたけど、いつも、こんなことしたくない、という思いがあったし。

——マァ！ とても喜々として見たけど。ご自慢のミュージカルもユニークだったし。

田中 冗談じゃない。あたし、体がものすごく悪かったもんですから、それもつらかったし。あたしは、中絶っていうのは子殺しだと、個人的には思ってるんです。梅の芽が、梅の芽だから梅じゃない、っていうのは、やっぱり私には納得できないのね。冬の寒いころ、

ほんのちよつと出てますよね、ほんのちよつと。それが、小さいから梅じゃないとは言えないと思うんですよ。だから、何週間から胎児か、っていう論争は、どうしても、こう……。それで納得してる人はそれでいいでしょうけど、あたしは胎児はやっぱ命だと思ふし……。

死んだ人たちの上で、生きている人びとが築いてきた歴史でしょう。徳川三百年なんて言っても、支えてたのは間引きですよ。三百年間人口がほとんど変わってない。戦争もね、人口調節の役割を果たしてきたし、病気で

死ぬ人もそうだし、交通事故で死ぬ人も……。

全部死なないで生きたら人口が多くてやっつけられない。そういうことをやりつつ生きてきたんだと思うと、女の権利とか女の選択というふうに言ってしまうと、その重さを共に背負うはずの男がすごく楽になるという気がする。もちろん科学技術が避妊に力を入れるべきだとかってことはあるし、最終的には女の中から損傷を受けるんだから、女が最終的には選ぶということはあると思うんですけど、絶対、男を引き込みたいっていう気持ちがあるんですよ。

——私も、女の問題だけかな、人間の問題じゃないかなって、ずっとこだわってて。産む産まないは女の権利っていうのも、どうしてもひっかかる場所がある……。

田中 だから、しどろもどろにしか言えない問題って、あるんですよ。

——阻止連なんかも、前に比べたら、みんな、なんかすごくシャッキリしなくなった。問題を、自分の中で、自分のことばでしゃべりだしたから、そんなにすっきり言えなくなつたみたい。人口政策も、本当に完全な悪なのかしら。すごくわかんないんですよ。ただ、あんなふうに、国が主導してくるから抵抗が

あるんでしょ。一つのパンを十人で分けるのか、五人で分けるのか。十人で分けたら生きていけないみたいのが、人民の声として出てくるのなら、まだ納得できるけど。

中絶の問題にしても、どういう立場に立つにしても、国はとにかく黙ってくれ、みたいな立場があるんだけど、「国」っていうのを認めてる以上は、国が出てくるんでは……。

子どもにとっては女は加害者

田中　とにかく、一番苦しむのは当事者だと思ふんですよ。やっぱり女は産む性だと思ふんです。女に子宮があつて、男にはないんだから、自然の定めというか、桜は四月に咲くっていうくらいの意味でね。だのに、「産ませられる」とか、「産まねばならぬ」とか、「まだできないの」とかの抑圧がすごくて、ね、私たちは子どもとかかわりで生きがたくさせられてしまつてるんですね。で、中絶の権利！　って、誇らかに言うのは言いにくいんだけど、ほんとに大変なんですよ、権利って。もちろん、権利をちゃんと行使できるだけの主体になろうと思つてるけど、今の中絶のやり方を見ると、生長の家につけこまれてしまうようなところが、私はありますと

思うし。水子地蔵なんてすごいブームだですよ。中絶って、たしかにさせられてしまった中絶だと思ふんですね。とにかく学校教育そのものが、自分で選ぶということを教えないですから。

小学校の入学案内に、「勉強において一番必要なのは聞く態度です」って書いてある。「最後まできくと聞きましよう」って。

ね、どう考えたって、一番勉強が身につくのは、疑問があつたら手を上げること、発言すること、恥をかくことでしょう。ただ聞いて、聞きっぱなしじゃないはずなのに、教育が子どもの自発性を奪うことを目的に成り立っているようなところがある。日本の教育というのは、一貫してずっと、「臣民を育てる」発想があると思ふんです。だから、あなたはそれがいいかもしれないけど、私はこれが好き、っていうような個の主張が普通にできる世の中として成り立ってないと思ふんです。それどころか、みんな同じようにしなければはじきとばされるって感じ。

避妊ひとつとっても、避妊なんて言うと、処女じゃないって思われるんじゃないかと心配し、結婚しても女は王子様とかかわりの中で幸せになれるという幻想があるから、す

べて夫が言いださなきゃ何もしない女が多い。それで結局妊娠しちゃって、生活できないと。自分で選んだ結婚でなかったり、自分で選んだ妊娠でなかったりすれば、女はいつまでも被害者として存在し続けるんじゃないかと思ふんです。

でも社会との関わりでは被害者でも、子どもとの関わりでは絶体加害者だと思ふんです。だけどそう感じないから水子地蔵にお参りする。あれは、我と我が身に涙してると思ふんです。「かわいそうな子ども」っていうのは、「かわいそうな自分」とだぶってる。

悲しみが、「失うゆえに、悲しみゆえに得るのだ」という感じで生かされる人生じゃないでしょ。いつまでも失い続けていくだけの人生。拡散していくだけの……。そういう中で子どもに対してすまないっていうのは、自分の中の過ぎてしまった日々に対してのくやしきであつたり、みじめさであつたり、すまなさであつたりするんじゃないかって気がするんです。だから私は、こんな社会だから墮落して当然っていうけど、どんな社会かってことを明らかにしていく必要があるって思ふんです。そして、子どもに対してはあくまでも加害者であることを直視して、女ぐるみ、男

ぐるみの、人間の問題にしたい。

——それをしていかぎり、たとえば新しい中絶法をつくっても、国民的コンセンサスはとても得られない。

田中 私たちが権利とか選択を本当に自分たちのものにするには「みんな同じ」の安易さから一刻も早くぬけて自分の意見を言うことが当たり前になるような世の中つくりえないとね。優生保護法そのものがなくなつて、中絶法になつたとしても、やっぱり法律は法律ですよね。日本は選択しないで、ごはんつぶがくつつきあうように生きてることで居心地のいい世の中だから、そういう意味では、日本人であることにあたしは絶望的なんですよね。

——うーん……。私も……。いや、でも、絶望したら運動はやれない。希望は持ってるんです。すごくしんどいけど。だから、時々、とても落ち込んで、もうヤメたつて言いたくなつて……。

ゴキブリと人間は対等

田中 私は楽しいこと好きなんです。過去にやつてよかったと思つてるのは、リブ合宿とミュージカルとリブニュースくらいです。

ニヒルなのかな、やつぱり、いま幸せであ

りたい。いつかくる解放はどうでもいいんです(笑)。

メキシコの呪術師のことはなんだけど、私たちがゴキブリを殺そうとするとき、私たちを殺そうとしている手が左肩の上に見える。だから私たちと、殺されるゴキブリは対等であると。多分そういうもんでしょ、命つて。だから、きょうライスカレー食べて、「ああおいしい、幸せだなあ」つてことがだいじ。だつて幸せつていうのは「状態」でしかないですからねえ。これこれを持ったら幸せですよ、なんて保障できるもんじゃありません。それにみんなが目覚めたら、権力にとつてはすごくこわいと思うんですけど。

——本当にそう。国や社会が「いい」と思っているもの、いい学校とかいい就職とかいい結婚なんて、私たちとは関わりがない、と開き直つたときが一番こわいでしょうね。

田中 私なんか自由奔放で、見方によればやぐざつぱくやつてきたわけなんですけど、メキシコに行つてね、やつぱり自分はどうしようもなく日本人だと思つたんです。よく、本音、本音、つて言つてたけど、私たちの本音つていうのは、ほどよい本音でしかないのね。うちの子どもの父親は、非常にメキシコ風

の人間でね。私とけんかすると、私のつくつたものに毒が入つてるんじゃないかと思うわけ。なぜかわかんないけど、そのとき、向こうの心の中が切りとつたようにわかつたの。それで、彼は子どもをひよいと抱き上げて、「ほうらどうだい、おいしいの食べるかい」つて、食べさせて、私のようすをうかがつた(笑い)。

その男は一方でそういうことをしておきながら、じつは、生命保険に入つて、受取り手子どもにしてるの(笑い)。私なんかもう啞然とするけど、多分両方とも本音なのね。死ぬんだつたら誰か先に、つて思つてるし、自分が死んだら子どもに、とも思つてる(笑い)。一人だけキー買つてね、あいつ食べたいだろうと思いがらニヤニヤしながら食べるのか(笑い)日本の本音のスケールでは、とても考えられない(笑い)。

本音つて、なぜ言うのか。それは、私たちは個人であるつて、多分言いたいんだらうと思ふんです。だけど、私たちはやつぱり個人じゃないのよねえ、この国では。この国は国中が、家族みたいな国だと思うの。そういうところで権利だとか選択だとか言つてることの大変さを、もっと深刻に受け止めましょ

って言いたいわけ。

——本当にそうだと思うな。だから、欧米の直輸入では何も解決できない。

私、はじめ、欧米のリブが、あのカトリシズムと闘って中絶をかちとったすごさに感嘆したんだけど、だんだん、これは参考にならないと思うようになったの。日本の仏教は、やさしいっていうか、いい加減っていうか、悪い者ほど仏に近づく、みたいなところがあるでしょ。カトリシズムのあの強権に立ち向かって人間の回復と闘ってきたヨーロッパの歴史なんて、追体験などできっこない。それより、日本型風土の中の日本型思考を洗い直



して、いいも悪いも含めて考えるしかない。

と思うようになったの。ところが、これは、何となく敵が見えにくいよね。でも、まぎれもなく、一人ひとりの心に、より早くとか、より美しく、とかっていう思いはある……。考えてるうちに、だんだん落ちこんで(笑い)。

なぜ笑っちゃいけないの

田中 闇の中からしか見えないものであると思うんです。それがアメリカ資本が入ってきて、ドーナツ屋とかフライドチキンとか、何かこうこうと明るくなって(笑い)、暗いもの、不潔なものはダメってことになってきた。

この間保育園で演芸会があって、小さい男の子の話し方がかわいかったので、お母さんたちが思わず笑ったら、その子が涙ぐんだんですって。そしたら、以来、催しがある度に、「子どもたちは一生懸命やってるんです。絶対に笑わないように」って(笑い)。あら、ほんとにまじめにおっしゃるんですよ。大人の笑い声で子どもが傷ついたとしても、それも大切な体験じゃないかしら。いつも傷つかないように大人たちがガードしてるわけにいかないでしょ。そんなふうに過保護な一方で、いやなことがあっても、いじけちゃいけない、

他人より遅れちゃいけないって言うから、子どもたちは心身症になるんです。

今の世の中、いじけるって当然でしょ。いじけの中から伸びるしかない。いじけるだけいじけられる子はまだしも可能性があると思うの。いじけちゃいけない、いけないって子は、人の見てないところで、人のざぶとんとったりする(笑い)。

負の部分、暗いものを排除するって考えが学校にもあるでしょ。いじめられっ子は、うまくことが言えないとか、五円ハゲがあるとか、貧乏だとかでいじめられる。その中に障害者も含まれている。

——私なんか典型的ないじめられっ子だったからよくわかるけど、いじめられるとおびえるのね。すると、ますますいいカモになる。

歯向かう人は絶対にいじめられませんよ。

でも、昔はそれなりに仁義があつて、いじめても、まァこのへんまで、みたいなところがあつたけど。

田中 昔は、たとえば笑われて傷つくなんてことに対して、子どもがすべき体験だって受け止めることがあつたでしょう。はいはいをあまりしない子は、よく立てないんですって。それがこの頃は、ろくろくはいはいしな

いで、立つてフラフラ歩いてる。心の問題でも同じよね。

——恐ろしいですね。性の問題でも、すぐ「心身のアンバランス」っていう言い方するけど、大人になるためにはいろんな体験をしなければいけないのに、心身ともに抑えこむから、かえっておかしくなるような気がしますね。一方では町に刺激があふれてるし。

それにつけても、優生保護法で「四親等に及ぶ」って言ってるのが、ほんとに腹が立つんです。草の根分けでも障害者を探し出して撲滅しよう、みたいな恐ろしさ。

あたしはあたしの枝ぶりで生きる

田中 それ、世の中全般的根底のところであつてるんですね。女が選択する、というとき、何を選択するか。重荷を選択する、というのを選択のうちで。不都合がないから選択するんじゃないくて、不都合こそが実は私たちをジャンとさせたり、豊かにしたりするという面がある。それはエコロジの問題とも関わらると思うんです。

——うーん、エコロジはそうだけど、中絶は、重荷だから、だけじゃないのでは。百人いれば百とおりの理由が恐らくあると思うん

です。自分の心にあまり向かい合わないで中絶する人もいるかもしれないけど、向かい合つて中絶した人が、その理由を書き出して行つたら、本当の真実が見えてくるんじゃないかしら。

田中 体験したら快くなかった。で、もうやめた、というような、しめつぱくない中絶の選択もあるしね。

——水子地藏拝むより。そのほうがずっと供養になる。

田中 私がそれなの。メキシコでヤミ中絶を受けたから、もうこりこりって感じて。

——ヤミ中絶？ こわかったでしょう。

田中 こわいも何も……。終わって名刺もらつて、なんか字が書いてあるんで辞書引いたら、「心臓専門医」（笑）。ガックンって感じ。

私の場合、避妊の失敗で八月に産んで十一月にまたできた。産後の肥立ちがすさまじく悪かったもんですから、体のなかで炎症を起こしてる部分をとる、っていう感じに近い中絶でした。だから、今度できたら絶対に産もうと思っています。

——ある集会で、「中絶経験者は？」って話になったら、半数以上が手をあげた。でも、

その理由になると、「最初は言いにくかった」とか、男と女の関係が自分自身のものになつてないんですね。だから、中絶法案つくつても、自分が自分の人権を見つめるっていうところがないと、あまり幻想持てないな、って気がします。

田中 とにかく、避妊は男に、してもらいたいですね。

——男は外に出てるし、簡単なわけだし。

田中 でも、おれはしてるからとか言つて、ひっかけるのも出てくるかもしれないし（笑い）。証明書出すと国家管理になるし……（笑い）。へんなどこへ使つてるお金を避妊の研究に回してほしい。

——ほんとにそう。軍備費で避妊法開発するとかね。生理の手当てだつて、昔はずいぶん不衛生だったわけだけど、女の科学者がふえてから改良されたし。女の学者にどんどん研究費出すとか、性教育をきちんとするとか。

女子中高生の被害がずいぶん出てくるのね。あの時期の男の子って、性衝動が強いでしょ。愛じゃないんだけど、女は愛だと思つてしまふ……。

田中 家庭の主婦も、そう思ってますよ。とにかく、女は男によって幸せになるっていう

幻想があまりにも強くて、それが最終的に確認できるのが性行為である、って思ってる。

——欧米のリブの人たちがほとんどンレズビアンになりますね。なぜか、初めは全然わからなかったけど、この頃、すごくわかる気がする。

田中 女たちの絶望を感じますよね。

あたし、今後は産む、って言ったけど、中絶体験だけじゃなくて、東洋医学やってますでしょ。人間というのは自然の一部で、そして自然というのは人智を超えてある、って思うんです。人体は小宇宙で、大宇宙と呼ばれるこの宇宙と関わり合っている、っていうふうに東洋医学では言うんです。人間が生まれるのは満ち潮のときだし、ベニハナっていうのは赤いから心臓の薬だろう、腎臓は黒いからアズキみたいに黒いのは腎臓の薬、とか昔の人は考えてた。これがみんなどんビシャリなんです。子どもが生まれるっていうのも、やはり人智を超えたことであり、そこに人類は畏怖の念持ったり、祈ってきたり、ということがあったんだらうと思うんです。

天から授けられた、という点では胎児もだんばも同じだと思う。だからたんばと一緒に生きたいっていうのと同じ意味で、胎児

とともに生きたいっていう思いがあたしにはあるの。

でも自然の中にはベンベン草もあれば桜もあり、女もそうだと思う。ベンベン草の人生は、子どもを持つて生きることかもしれないし、桜のほうは、持たないことが自然で生きていくってことかもしれない。実際に子どもを持たないから、子どもやたんばとともに生きてないなんていえないでしょ。そんなもんじゃない。あたしはあたしの枝ぶりで生きる。それぞれに、それぞれの生き方があっていいと思うんです。

*

九年前、ビル解禁を叫ぶハ中ビ連Vに対し、ハリブセンVは激しくわたりあった。女のからだを、男からだけでなく、一切の権力から取り戻せ、と。女、男、子ども、自然、の対等な関係を強調した。世界のリブのどれとちがう、日本型発想だった。

あれから美津さんはメキシコへ、そしてまた日本へ。三年間の東洋医学の研修、卒業証書を手にしたその日に、私たちは会った。子どもの夜尿症や女の生理痛のクリニックを開きたいという美津さんと、心とからだの問題を考えていきたいという私たちは、いま、一

緒に一つの間を持ちたいと模索している。うまくいけば、秋には、小さなクリニックが開かれるかもしれない。
(千)

女のからだを考える場を

田中美津さんの「子どもと女のからだ育て」——へらはるせVの構想に、私たちはすっかり共鳴しました。

からだがコチコチだと、心もコチコチになる、心にしこりがあると、からだもあちこち悪くなる……女の解放とからだの関係は不可分なものだと、ずっと前から、からだやお産の教室を開きたいと考えていたからです。

そのためのハ場Vを、探していましたが、とりあえず、七月十四日から、ハあごらVの一隅でスタートすることにしました。

美津さんの治療を受け、からだのときはぐし体操や合気道をしたり、避妊法を具体的に学んだり、みんなでおしゃべりでさるハ場V。——一緒につくっていきませんか。

人工妊娠中絶是非の歴史的背景

大林 道子

懷胎セルニ流産ノ術ヲ求メテ毒ヲ服スト云ヘドモ其驗無クテ遂ニ
平カニ生レリ、

十年前に審議未了のまま廃案となった優生保護法改正問題が、また政治日程に上がった。その経過、政治的意図、改正に伴う結果の予想、医学的見地からの問題点などについては多く論じられているので、この小論では、日本での中絶への姿勢・考え方をふり返って見、また、比較的新しく、人工妊娠中絶がモラル上の論争となった合衆国の中絶是非の意見の一部を紹介してみたい。

日本における人工妊娠中絶への姿勢

十二世紀前半に成立した『今昔物語』に、次の記述がある。

今昔播磨國ニ飭磨ノ郡書写ノ山ト云所ニ性空上人ト言フ人有ケリ、本京ノ人也從四位下橘ノ朝臣善根ト云ヘル人ノ子也、母ハ源ノ氏其ノ母諸ノ子ヲ生ムニ難産ニテ不_レ平ズ、而レバ此ノ聖人ヲ

平安時代にすでに、「流産の術」すなわち人工妊娠中絶があったことを示している。しかも、「難産ニテ不_レ平ズ」と、産婦の安全を理由としての中絶だったのである。

避妊・中絶は、古今東西、普遍的に存在していたことが、記録や人類学の調査などによって知られている。

江戸時代の中絶黙認

日本では、墮胎・間引の風習が頻繁になったのは江戸時代以降といわれ、多くの記録が残されている。

江戸後期の農政学者、佐藤信淵（一七六九—一八五〇）は、その昔『農政本論』に、墮胎・間引の実態を次のように述べている。

世上に婦人の懷胎すること多しと雖ども、貧なる者は養育することは能はずして、或は赤子を陰殺し、或は毒針等を刺し墮胎することあり、予四海を遍く游歴して審かに其風俗を探索するに、何れの国も墮胎陰殺の禍多く、大抵十室の邑にても小兒を賦害すること年々兩人に下らず、悲べきの最たり、然れども厳しく此を禁ずるときは、或は小兒を育るがために老人を餓しむるの禍あり、人々誰か己が子を受せざる者あらんや、然るに自ら己が兒を殺すに至ると云ふは、皆飢寒に迫て止むことを得ざるの策に出づ。⁽²⁾

悲しむべきことだが、貧窮ゆえに止むをえないことだというこの考え方は、同様の多くの記録に見られる。そして、多くの藩では、人口減少とそれによる農地の荒廢を憂え、墮胎・間引の防止策として、教化や福祉政策を実施している。

室直清著『窓のすさみ』に、

庄内の民、東国のならひにて、子生して三四人にも及べば、まひくとして殺し捨る事を、老臣水野大膳元朗深く憂ひ、さまざま思ひけれどもとかく改めざりければ、貧民の養ひがたきものをゑらび、その子五才なるまで扶持米をあたふ事に成りて、此風改りぬとぞ。⁽³⁾

と、その福祉的施策による間引防止の成功を伝えている。しかし、一般民衆の墮胎・間引への態度は、生活困窮の中でこれを当然のことと見ていたようである。佐藤信淵は『經濟要

録卷十四』に、

今の世に当て陸奥、出羽の兩國ばかりにても、赤子を陰殺すること年々六七萬人に下らず、然れども此れを驚歎して罵る者の有ることを聞ず。⁽⁴⁾

と、人々のこの風習への日常的受けとめを、ある非難をこめて見ている。こういった中で、幕府や藩の姿勢は、これに人口政策・經濟政策として注目することはあっても、風紀や道義上の問題としてのアプローチは比較的に薄かった。その中で、僧侶を中心とする人道上の取りくみとして、民衆教化の手引書がかなり出されている。以下は、その一つの武蔵秩父菊水寺により、一八五七年に出された『辺土民間子孫繁昌手引草』の一部である。

田舎にては、所によりて、貧乏人に子供の多きは、身代のかせなりとて、産みおとしたるとき、口を塞ぎ尻を押へてひざにしき殺し、又は産ぬさきに飲ぐすりさしくすりにて流すを、子返しといひ、又子まびきともいふ。扱／＼いたわしきことなり。いかにむごい親なればとて、吾子をころすを、瓜茄子を押つぶすやうにころえて、かわゆひとも不便とおもはぬは、あまりどうよく成ことなり。他人を殺してだにげし人になるものを、ましてかはいがらねばならぬ筈の子を、親が殺しておそいか速いかその報ひがなくて済むべきや。是がそのむくひなりとて、しらせがないゆ

ゑに罪も報ひもないと思ふは愚なり。子供が多くて貧乏な者もま
まあれども、是は生れ村の貧にて、子ゆゑにびん乏するにあら
ず。……万物の靈たる人間が鳥獸だにせぬ、子返しをするは、余
りなげなき事なり。子返しをする者、老人にてもあれば、其村
のふ吉なり。近所隣親縁者友達などに、左様のものあらば、早
く異見して止さすべし。捨おくは無慈悲なり。⁽⁵⁾

仏教者らしく因果応報を説き、村落共同体の中での相互規
制を要請する常識的説教といえよう。「しらせがないゆゑに
罪も報ひもないと思ふは」と、処罰がなかったことをうかが
わせるが、実際には、この手引草が出されるより前の天保十
三年（一八四二）に至って、ようやく幕府は墮胎の禁令を出
している。それは「猥に墮胎せしものは江戸拾里四方追放」
というもので、江戸住民に対しては、この法を適用したが、
さほど厳しいものと思われず、どこまで実際にとりしまれ
たか疑問である。それにこれは江戸に限られていたので、全
国的にみるなら、上の手引草にあるように、刑法上の追及は
なかったとみてよいであろう。

幕府は、天保十三年の禁令以前も、個々のケースによつて
墮胎を裁いている場合がある。それは、墮胎によつて妊婦が
死亡した場合や、特に重い刑を科せられたのは、不義の妊娠
を墮胎して妊婦が死亡した件で、愛人の男が死罪となつてい
る。この場合、墮胎に対する刑罰というよりは、御法度であ

つた不義の方が罰せられているのである。

江戸時代を通じて墮胎・間引は、幕府によつても藩によつ
ても、大目に見られ黙認されてきたのである。それは、人々
の窮状を察しての現実的政策であらうし、また、為政者とし
ても、民衆の個々の口べらしを、むしろ積極的に受け入れざ
るをえない人口問題があつたであらう。江戸中期の儒学者荻
生徂徠（一六六六—一七二八）も、「地を量つて民を置く」こ
とを説き、筆者不詳の『豊年税書』には、

身分に過て子供養ひ置き……兼而人別帳を見て分限過たる人数
の者……僉議の上能々教戒すべし⁽⁶⁾

とある。効果的な避妊法をもたなかった当時、分相應に子の
人数を保つためには、墮胎や間引の方法しかなかったのでは
ある。幕府は、民衆の自発的な出生抑制を黙認することを通じ
て、江戸時代を通して人口増殖をくいとめることができたの
である。参考のため、全国人口調査の行なわれた享保十一年
以来の人口推移を次表に示す。⁽⁷⁾この人数は、武家・公家・非
人等を除く百姓・町人・社人・僧侶の総数である。

墮胎・間引は、いくつかの藩においては、人口減少に伴う
生産力の疲弊を憂えて諸々の策をとらしているけれども、
全体としてはこれを黙認した。そしてそのことは、江戸時代

表 江戸時代の人口推移

年 号	男	女	計	指 数
享保11(1726)	—	—	26,548,998	100.00
〳 17(1732)	14,407,107	12,514,709	26,921,816	101.40
延享元(1744)	—	—	26,153,450	98.51
寛延 3(1750)	13,818,654	12,099,176	25,917,830	97.62
宝暦 6(1756)	13,833,311	12,228,919	26,061,830	98.17
〳 12(1762)	13,785,400	12,136,058	25,921,458	97.64
明和 5(1768)	—	—	26,252,057	98.88
安永 3(1774)	—	—	25,990,451	97.90
〳 9(1780)	—	—	26,010,600	97.97
天明 6(1786)	—	—	25,086,466	94.49
寛政 4(1792)	—	—	24,891,441	93.76
〳 10(1798)	—	—	25,471,033	95.94
文化元(1840)	—	—	25,517,729	96.12
〳 13(1816)	13,427,249	12,194,708	25,621,957	96.51
文政11(1828)	14,160,736	13,040,067	27,201,400	102.46
天保 5(1834)	14,053,455	13,010,452	27,063,907	101.94
弘化 3(1846)	13,854,043	13,053,582	26,907,625	101.35
嘉永 5(1852)	14,160,736	13,040,064	27,201,400	102.46
明治 5(1872)	16,796,144	16,314,652	33,110,796	124.72
大正 5(1916)	26,813,000	26,648,000	53,461,000	201.37

(『墮胎間引の研究』P.47~48より)

を通じて三十五回も襲った飢饉や苛酷な年貢のとりたてにより、自然増殖にまかせていたら養いきれなかったであろう人口増の抑制の機能を果たしてきたのである。

間引の多かった田舎に対して、都市部においては墮胎が盛行し、多くの狂歌や黄表紙などに諷刺されているように、中條流の女医・産婆等が、墮胎の術を専らにするようになるのである。

近代国家の生殖コントロール

以上のような江戸時代の墮胎・間引の風習を一掃すべく、明治政府は、発足早々の明治元年十二月二十四日、次のような太政官布告により、産婆への規制を図る。

近年産婆之者其売薬之世話又ハ墮胎之取扱等致シ候者有之由相聞ヘ以之外之事ニ候元来産婆ハ人ノ生命ニモ相拘不容易職業ニ付仮令衆人之頼ヲ受無余儀次第有之候共決テ右等之取扱致間敷管ニ候以来万一右様之所業於有之ハ御取組之上屹度御咎可有之候間為心得兼テ相達候事

明治新政府の墮胎禁止の第一歩が、産婆の取り締まりから始まるのは象徴的なことである。産婆は、江戸時代すでに、女の職業として確立していた。その産婆が、明治七年（一八七四）、文部省より東京・京都・大阪に「達」として出された医制により、その業務は国家の統制下に入っていくことになり、ライセンス制の新産婆の登場となる。そして、これは明治三十二年（一八九九）の「勅三四五産婆規則」により、よりいっそう、全国的に組織化されていく。

近代化を急いだ明治新政府は、富国強兵を政策の中心課題とする。人口コントロールに直接に関わる産婆に国家が規制を加えてくるのは必然的成りゆきであった。

明治七年の医制の「達」の後、各地に組織化された産婆教育において、明治十六年（一八八三）、新潟県立新潟医学学校附属産婆教場第一回卒業生で内務省産婆免許をうけた笹川美寿は、明治二十五年、『産婆十三戒』に、産婆の道を示す。それは、一から十三まで、純良・温和・忍耐・清潔など産婆の指針となるべき箇条に、短いコメントをつけ、それぞれの箇条を短歌でしめくくっている。その第十三に次のようにある。

第十三 結備 凡ソ産婆ノ業タル小ニシテハ一身一家ノ盛衰大ニシテハ富国強兵ノ原素タル産兒ノ生命ヲ司ル至重ノ職業ナリ故ニ産婆ハ渾テ此十三戒ノ趣旨ヲ固守シ身体ト生命ヲ犠牲ニ供シ力ノ及フ限り其職分ヲ尽スヘシ

国の為 人の為には 厳すら とはさざらめや 身を碎きても⁽⁹⁾

新技術を身につけ、国家の富国強兵の目標と一体化した使命感に燃えた模範的新産婆の面目躍如たるものがある。

この富国強兵の政策を、もっと露骨に主張したものに、呉文聡の『墮胎論』がある。彼は、国威を拡張するためには人口増加が必要で、そのためには領土も拡張しなければならぬと説き、日本の指導者層に人口増殖政策を自覚させるため『人口政策』という小冊子も書いた。『墮胎論』の中に次の言がある。

日本では十五万人ばかり死産がありますが之れを氣付けて小供を無事に産むやうにしたならばどうか、幾分か之れ等の世話をやるやうな会でも出来ましたならば十五万人の中で少くとも七万人以上は助かるだろうと思ひます。七万人も助かれば十年も経つたならば一戦さが出来る。¹⁰⁾

まさに、人々弾丸の考えで、それを最近の論者のように胎児の生命の尊重とかでカモフラージュしないところが、明治人らしい率直さである。

大東亜共栄の名の下にアジア侵略を行なった十五年戦争の最中の昭和十五年（一九四〇）、厚生省社会局は、優良多子家庭の表彰を実施した。その趣旨を「国家及民族の隆替がその国人口の増減に直接至大な關係を有することは改めて申す迄もない所」と説明し、被表彰者の条件四項目を列挙する。

それは、満六歳以上の嫡出の子女を十人以上育てた親で、しかも戦死天災地変による死亡以外の死亡者を一人でも出した失格というものである。

また、太平洋戦争突入後の昭和十七年（一九四二）、厚生省人口局は「人口政策確立要綱」を創り、東亜共栄圏建設のため「我国人口の急激にして且つ永続的な発展増殖」を喫緊の要務として、具体的な方策をたてる。それは「今後の十年間に婚姻年齢を現在に比し概ね三年早むると共に一夫婦の出生数平均五児に達することを目標」として、その方策を列

挙するのであるが、その中には、二十歳以上の女子の就業を抑制する方針をとるか、独身者に税負担を加重する政策をとる、など、戦争遂行のため、国家が結婚・生殖を支配していた事実が見られる。

富国強兵・国威拡張政策は、多くの尊い命を犠牲にして、昭和二〇年（一九四五）の敗戦をもって破綻した。

植民地からの引揚げ、兵士たちの帰還で、狭い国土に人口過剰と食料不足に悩む戦後の日本は、人口抑制策に転換し、また占領下の特殊事情から「民族の純血」を守ろうと公然と中絶を強要したりした。そういった背景の中で優生保護法は生まれた。しかし、この法の下で、日本の女性は、産むか産まないかの自由を事実上確保したのである。

*

以上、大急ぎで、歴史をふり返ってみて、中絶の政策が、常に女の利害を素通りしてきたことを知らされる。今回はふれえなかったが、わずかに大正期の社会主義者たちによって唱導された産児調節の主張に、母体の健康への関心が現われるが、これらは軍国主義の大きな力の中で圧殺されていく。

また、識者の中絶論も、おおむね男の意見であり、産婦・女医・産婆の側からの真の女の声は聞こえてこない。女たちは、常に非難され、支配され、取締られる側にあったのである。

日本に、生殖を女性自身でコントロールするという明確な権利意識が現われてくるのは、優生保護法改正案が国会に上程された一九七〇年、リブ運動の中においてであろう。

日本より中絶規制の厳しかったアメリカ合衆国では、中絶是非の論争、法廷闘争、中絶自由化の運動も、より先鋭的な形で現われた。次章では、その一端をみてみたい。

アメリカ合衆国における中絶をめぐる論争

合衆国では、一九七〇年以前には、中絶は論争の対象とはなりえなかった。中絶に関してモラルの問題が喚起され、中絶に関する広い範囲のアプローチが出てきたのは一九七一年以降のことである。紙数の関係で、論者の主張をいちいちあげての論争紹介はできないので、代表的と思う意見・姿勢について、いくつかの意見を一まとめにして紹介する。

全米女性連合（NOW）が、一九六八年に掲げた基本的人権宣言八項目の中には、両性の平等の権利を規定する憲法修正の要求や雇用の平等の要求などと共に、中絶に関する一項目がある。「刑法典から、避妊情報を得る手段を制限することや中絶を管理する方策や法律を取り除くことによって、女性が自分の生殖の生涯をコントロールする権利」というものである。中絶を女性の基本的権利として要求しているのである。

中絶反対論者の論理はおおむね次のようなものである。

胎児は person (権利義務の主体として認められる個人) である。すべての person は生命の権利を持つ。

ゆえに中絶は殺人であり、それゆえに常に悪である。

フェミニストの中絶支持論を要約すると次のようになる。

「女性の自分の身体への権利は、常に無視されてきた。たとえ胎児が person であり、そしてそれゆえに生命の権利をもつていようが、その生命の権利には、他の人間の身体をその承諾なしに使用する権利を伴うものではない。もしもある人が腎臓病で他の人の身体に連結しなければ死んでしまうとき、身体を提供する人の承諾なしにそれができるだろうか。このアナロジーは、生命の権利は、生命を手に入れるのに必要なものなら何でもであろうと、生命への権利を保証するものではない、ということをおわかってもらいたいのである。このことが考慮に入れられるなら、中絶は常に悪であるという考えには従えないはずである。もっとも、それは、中絶は常に正当化されるということではない」と。

また、女性の「決定の権利」を説明して、

「決定は、その決定によって重大な影響をうける人、その人のみによってなされるべきである。そしてその人とは、母親であつて、国家ではない。両性のただ一方のみが赤ん坊を産むことができるのだ。この生物的事実は、産む産まないに伴う恩恵と危険は両性に平等に発生するのではないということ意味する。自由・正義・安全／生存の基本的価値のうち、安全／生存は最も優先的な価値であるとしば言われている。身体を提供者はその人が強制されないで自発的に承諾するのでない限り、他の福利安全の

ために、その提供者の身体の安全が犯されるべきではない。生殖機能は、男と女に均等でなく、女は妊娠を遂行するかあるいは中絶するか危険性を負っている。それゆえに、彼女の自分自身の危険を選択する自由と彼女自身の person の安全を選ぶ自由は、男が親であることを選択する権利に優先する」と。

それまで、中絶が法やモラルで規制され、しかもそれらを支える宗教的ドグマの勢力は、日本にくらべてはるかに強く、女の自主的決定が困難であつただけに、女の中絶の権利の論拠も「産む産まないは女の権利」という単なる主張のみでなく、権利の根拠を提示して説得力をもつ。

一九七三年、最高裁の判決が、中絶の自由を事実上認めた後、各州の反応は、この判決を支持する方向と妨害する方向とさまざまであつた。その動きの中で中絶反対論も危機感をもつて強まってくる。それは、胎児の生命と人間性という先に述べたもののくり返しである。たとえば、

胎児の中絶は、罪のない生命を奪うことを意味し、もしこのことが受容されるならば、人間は、それによって人間とされているところのモラルの感性を失う。

と。合衆国で中絶反対の急先鋒は、カソリックのドグマだとみなされている。ところが、中絶への法的規制の経過をたどつてみると、決定的役割を果たしたのは宗教勢力ではなかつたことが浮かび上ってくる。この経過については、合衆国の

産婆の消長として稿を改めて紹介したいが、今、簡単にその経過を述べておく。

十九世紀初期には、中絶は合衆国で広く受け入れられていた。そして事実、宗教家たちも中絶を産児制限の一形態とする一般の考え方を共有していた。それが一九〇〇年までにすべての州で刑法によって禁止されていく。その主体は宗教家ではなく、医師であった。その頃、組織されつつあったアメリカの医師会は、医師会に入会した「免許をもつ」医師が、開業を独占するため、それまで中絶に同情的で中絶の施術を行なっていた産婆を出産・中絶への関わりから追い出す形で中絶禁止の法制化を進めていった。つまり中絶が犯罪となっていくのは、「婦人科医学の進展」と平行している。中絶反対の十字軍は医者によって先導されたのである。

そして、すでに避妊・中絶を日常的に行なっていたプロテスタントの先住民は、多産なカトリックの新移民によって数によって凌がれるという恐怖をもち、医師会の意志とあいまって、中絶禁止の立法化へ圧力をかけたのである。このようにして、産婦と産婆による比較的自由な生殖のコントロールが、医師と政府によるコントロールへと移行していったのである。

合衆国では、一九七三年の中絶の合法化以後も、いくつかの組織的な合法化反対運動があった。たとえばウィスコンシ

ン州では、組織された医師会・弁護士会が合法的中絶実施妨害の運動をしている。もちろん、中絶合法化を促進した勢力の一部に、産婦人科の医師たちがあったのも確かである。

一九七三年の最高裁の判決で、法律上中絶が可能になった現在の合衆国で、問題となっているのは、一九七七年の最高裁の判決「必要でない医療サービスに州や連邦が費用を支払うことを拒否することができる」という条項の結果である。この判決の翌一九七八年には、低所得層女性の連邦からの医療給付による中絶数は、二十五万から二千四百に急減したと推計されている。そして厚生省のある職員は「医療給付の中止は、非合法の中絶に関連した死亡と併発症を増加させるだろうし、そして、貧しい女性に関する膨大な社会的・財政的コストが必要となってくるだろう」と発言している。このように現在の問題の焦点は、貧しい女性には中絶はますます危険で——安いもぐりの中絶に頼るため——ますます近づがなくなっているという事態である。

最後に、合衆国の中絶に関する世論をみてみよう。

全国世論調査センターの一九七二—一九七五年の四年間の調査結果は、中絶に賛成する率は、

①母親の健康・胎児の異常・強姦による妊娠を理由とする
中絶……賛成八〇％以上

②貧困・非嫡出・計画外妊娠を理由とする中絶……賛成五

〇%以下

となっている。それが、一九七六年以降になると、大部分の人が「妊娠三か月」までの中絶に賛成する。つまり最高裁の判決を全面的に支持するようになる。

*

以上、日本については少し長い歴史をふり返り、合衆国については主としてここ数十年の中絶是非の論争をたどつてみた。両者の中絶への姿勢に違いを見るが、歴史の過程において、ある類似の動きをも見出すのである。その一つは、中絶が犯罪として規制されていく過程における産婆と医師の位置である。日本でも合衆国でも、中絶に同情的であった産婆が、中絶禁止の法制化の動きの中で、規制され追放されていく。すなわち、中絶禁止の法制化の進行と医療の制度化・組織化の進行との並行現象である。

日本の助産婦は、合衆国と違って、産婦人科医学の進行に伴って消滅するということもなく、明治の新産婆、第二次大戦後の新制度の助産婦と、その業態は変化してきたが、営々とお産の現場に関わってきた。その助産婦諸姉こそ、生殖のコントロールに大きく影響を及ぼす今回の優生保護法改正の動きに対して、最も強い発言力を持ちうるのではないだろうか。

注

- (1) 最近のものとしては、①ジュリスト、1978年11月15日号、p 18、29、医学からみた人工妊娠中絶をめぐる諸問題、我妻堯、②ジュリスト増刊号 No. 25、1982年、p 132、139、リプロダクションと法、我妻堯、③朝日新聞、9/11、9/18、9/25付、中絶を考える、上・中・下、④シンポジウム、人工妊娠中絶を考える、昭和57年9月27日、於朝日ホール、丸本百合子氏の発言、⑤「優生保護法改悪とたたかうために」1982年9月、「82優生保護法改悪阻止連絡会」など
- (2) 「墮胎問引の研究」社会事業研究所 p 14、15に所収、昭和11年刊。
- (3) 同上 p 18
- (4) 同上 p 18
- (5) 『日本婦人問題資料集』第六巻「保健・福祉」ドメス出版、昭和53年刊、p 73、74所収。
- (6) 『徳川時代に於ける「子おろし」の研究』徳田彦安『歴史地理』第48巻3号・4号、1926年。『日本婦人問題資料集』第六巻、p 110所収。
- (7) 『墮胎問引の研究』p 47、48。
- (8) 『看護六法』新日本法規、p 607。
- (9) 『産婆十三戒』笹川美寿、蒲原宏氏所蔵「日本婦人問題資料集」第六巻、p 118所収。
- (10) 「墮胎論」呉文聡『国家医学会雑誌』1907、『日本婦人問題資料集』第六巻、p 114所収。

(「助産婦雑誌」一九八二年十二月号より転載)

(おおばやし・みちこ)

共に生きる

「障害者」教育の現場から

今 橋 明

一九六八年から現八三年三月まで、まる十五年間、「肢体不自由養護学校」とよばれる現在の職場で働き、それ以前の十五年間の一般学校での体験と併せながら「障害児・者解放運動」の一翼をささやかながら担い、七二年、第六十八国会に厚生省より提案された優生保護法改悪の前闘争などにも、わずかながらかかわった体験を持つ者の一人として、以下、いくつかの視点から考察を進めてみたい。

優生保護法改悪案国会上程一時断念をこう見る

三月中旬がやま、と言われ、全国の反対運動参加者の強い抗議・意思表示・注視の集中した今回の改悪案上程が、官僚サイドで一時断念されたのは、一応「欣快である」と言える。

だがこれは、あくまでも「一時断念」であって、上程を全くあきらめきったわけでは毛頭なく、選挙ぶくみの現実的国会状況、中曽根内閣登場後の数々の軍拡政策の破綻やほころびがちらつく現況の下で、イデオロギー政策としての側面を

持つこの法案のやや強引な上程がもたらすデメリットなどが計算され尽くし、一時的な上程断念となったのであって、次回はいよいよ巧みな上程を、上程する側の矛盾のない、人民への抑圧と支配が貫徹する政策として出されて来るのであらうと考えられる。

そして次回は、母子保健と母性保護と障害者抹殺の人口政策が、スマートに、矛盾なく整理されて提示されるだろう。身体障害者福祉法の抜本改「正」を「優生思想」で、まぶしくるみつつも、なお「優生思想」を感じさせないだけの融和

政策をふりまき、融和主義に加担し、同調するグループや政党をさらに肥大化させつつ、「融和」「優生」を鋭敏に感知する感性を、物と制度と思想によって鈍磨させながら、そのために、民生と福祉と教育・医療を駆使しつつ攻撃し、その集大成として、頃合いを見て上程して来るであらう。体外受精は不妊症の夫婦にのみ行ない得ると宣伝しつつ、障害の発生予防政策を深めているように、生命倫理を尊重すると言いつながらP4を勧め、ビル解禁をキャンペーンしつつ、IQ尊重の精子銀行を準備する、といった政策が、陰微に進行されているのが現実なのである。

女性差別・障害者差別・優生思想そのものを我々の周辺から駆逐し、克服し、制度や政策から放逐しようとしてきた今回の運動の担い手である我々の側は、しかし若干の時間をかせいだわけである。この間に培わねばならぬものは膨大なものである。

以下に述べる内容や課題が、批判されながら、より強固なものとなり、共有されることを望むものである。

現況下の「優生」問題の考察と

我々の生き方レベルでの諸課題について

さて、この課題について記すとき、まず触れねばならぬの

は、次のことであらうか。

我々が「優生思想」を克服し、根絶し、優生保護法の改悪や法そのものの存在を認めない、とするときの、我々の生き方が、どうあらねばならぬかがきびしく問われ、その生き方レベルにおいて具現し、貫くことでしか、実証できない性質のものである、と考える。

我々が、今日までの「優生学」のあらかたを否定し、「優生思想を根絶し、その上で生き続ける」ということの「展望」は、まさしく、『弱者・劣者とよばれる人々と、ともに、積極的に生きぬく』ということに尽きよう。

「優生学」は、「適者生存」を、原理的に明らかにすることにより、「不適者不生存」をうちたて、「不適」な者への、究明・探求・対策・措置の放棄を、「科学」や「政治」の名で免罪してきた。「自然淘汰」の名において、弱者・劣者の「淘汰」を正当化してきた。「淘汰」のうしろめたさ、または「淘汰」を認めてしまうことの無力感・罪悪感を、「自然」という表現を冠することによって、人為的なものをあたかも自然現象であるかのように言いつくろってきた。

企業災害を「公害」と表わすことで、あたかも自然な災害であるかのように錯覚せしめる手口と酷似しているし、それ以上の犯罪性を指弾せずにはいられないところでもある。

我々が「共に生きる」と言うとき、まことに当然のことな

がら、従来、弱者・劣者・不適者とされてきた人々と「共に生きる」ことを引き受ける（ひっかぶる）ことを意味している。

「淘汰」を認めてきてしまった我々を、自ら深くいましめ、鞭うちつつ、お互いが淘汰しない・されない関係をつくり出し、淘汰しない・されない関係を切り結ぶことが可能な物質的条件、制度的要件をつくり出し、打ち立てなければならぬ。「類的に生きる」ということは、そのようなこと、そういう内実の具現なのだと思える。

したがって、我々が「共に生き、類的に発展し合う関係や条件を打ち立てる」と言うとき、これも当然のことながら、人口問題・資源問題・食糧問題・エネルギー問題・生産と所有・富の分配・政治体制・階級制度・民族問題・倫理・科学、などなどの諸課題に達着する。むしろ、これらの諸課題の解決や見通しの上に、優生思想の否定や「共に生きる」ことが成り立つ、とさえ言えよう。

これらにまつわる論究は、今回与えられたテーマの核心ではないので、「側面の重要な事柄であり、これらの点をふまえながらの実践課題であると認識している」ことだけを記しておく。

我々が現時点で行ない、検証し合う運動や実践の中で、先に掲げた「生き方」のレベルの課題をからむ問題点と考えて

いることを、いくつかの実例を通して考察してみたい。

「ハモンを呼ぶだろうね」と、親しい友人が言った。その実例と考察のあらましを語り、意見を求めた時の、友人の言であった。

「ハモン」もやむを得まい。「優生思想」を否定し、生き方の具現のレベルで検証し合う問題であれば、お互い、「波紋」を超えて打ち立てねばならぬ。波を越え、次の波を呼びこみ、のりこえ、遙かを目ざすための考察や提言としたい。

事例1 ある県の反優生集会の折、婦人科の女医がこの

ようなことを言っていた。「優生保護法改悪が成立したとき、墮胎罪の適用は必至である。現状ほど甘くない。

中絶を必要とする者は、ヤミ墮胎を求めて医師を訪れるだろう。ヤミ墮胎は、医師も患者も同罪である。私は我が身がかわいいから、ヤミ墮胎には加担しない」

集会実行委の構成団体のうちのひとつとしての団体代表としての意見発表である。

※1 83・3・6（日）H県H市にて。

※2 刑法第29章212条126条関連参照

さて、83・3・13の反優生全国集会目前、厚生省サイドの改悪案国会上程の懸念濃厚というホットな時期の、ホットな

アジテーションということを十分加味してみても、この意見には肯定し難いものを感じてしまったことである。改悪阻止を強烈にアピールしたいあまり、「悪法成立の暁には、もう何もできない。我が身がかわいいから」と言ってしまう表現の中に、本人自身の生き方の質的なありようが、極めて鮮烈に露呈されたと見てとってしまったからである。

八身をかわいがりたい者たちが、微力を尽くして闘ってきた。身をおかひがらうような発想では聞いきれぬことも聞いを通して理解しかけた。身をおかひがらうことのできる逃げ道のある立場の者も、ギリギリ逃げ道のない者も、共に切り拓く突破口や展望を求め合うはずの集会に、「悪法のタガをはめられる。墮胎は同罪。私は知りません。何もしません」と言ってしまったと同じことなのだ、と捉えたのである。前段のアジテーションが、正統である、と思えただけに、彼女の今後の自らの生き方のレベルにこのことを置いたとき、重ね合わせた像が歪んでしまった、という点で、残念であった。

かつて、日本の教師たちは、数多くの「教え子」を戦場へ送った。侵略の戦場であれ、解放や独立の援助のための戦場であれ、自らの教育の対象者を、「法」によって戦場へ送り出す教師は許されぬ。後輩である我々は、先輩教師たちの誤ちを繰り返さぬための努力の継承と発展を担い、「再び戦場へ送らぬ」ことを血盟し、「建て前化した」と手きびしい批

判を浴びつつも、歯ざしりしつつ、日教組の不滅のスローガンに掲げ貫こうとしているところでもある。

戦場へ送らぬ努力を、自らの生き方のレベルで、どう具現し、実践するのか、しているのか。

反優生で、共どもの闘いに参列した市民も医師も主婦も、反優生を貫き通す生き方のありようは何か。共に探り合い求め合う発言の応酬であってほしかった、としみじみ思ったことである。

実例 2

同会場でのY女史の講演と、その後のありようのある部分におごりを感じ、憤りを持った点について。

「……大事なこの部分の話だから、眠らずに聴け。このぐらいの人数なら、誰が眠っているか、みなわかる、云々」とのこと。

「眠る者が見えるのなら、眠らずに目を見開くように、話の本旨そのものも、話術も、磨こうとすることのほうが、壇上で叱咤することよりも先決ではないか」と、同世代の一人として、強く思ったことである。

講演後の質問に対して応じようとしなかったことにも、「反優生」の戦線の亀裂と考えるものを感じさせられ、寒心に耐えぬところであった。

女性解放と障害者解放と反優生の三つをからめ、包摂

する話として、二時間近い熱弁、多々苦勞、と言いた
いところであったが、その直後の、障害者サイドの質問
や問題提起を、講演内容と重複するから、として応じよ
うとしなかったこと。見かねた参加者（八共に生きるV
教育実践を、困難な状況の中で行なっている三十代前半
の男性教師）が、憤りを抑えながら、応じるように申し
入れるが、それには切り口上で対応しつつ、くだんの障
害者への対応は見られぬまま、という場面には、心凍て
つくものを感じざるを得ないことである。

講演は単なるアジェンションにすぎぬのか。この半年間、
各地での話も、活字も、ほとんど同じネタですこしてきたと
言われるY女史。したがって話そのものは、相応の迫力あり、
山あり谷ありで、是としても、肝心の生きざまのレベルでの
ありようが、講演内容やテーマとの異和感を持たせてしまっ
たのでは何にもならない。まさしく「百日の説法屁ひとつ」
である。共に闘い、行動や展望を共有しようと、近県からも
参加し、なお埋めつくせぬ課題を引きずって来ている人々、
障害者解放運動と女性解放運動、両者の側に、一層もつれる
影を投げかけてしまったのでは逆効果であり、ここにも両者
の特質を止揚・発展させる質的な契機・条件の提案や説明が、
より明確なものとして要請されていると感じたことである。

事例3

Y県における全県反優生集会（83・2・17（日）
でのこと。

障害者自立の運動をすすめ、赤堀闘争を支援し、障害
者の介助なしバス乗りこみ運動の中心であり、就学運動
支援などを担っている、自立障害者グループの一人の発
言。

「介護を通してしか障害者問題は理解できぬ。健全者の
側からの障害者解放運動へのかかわりは、介護をぬきに
してはあり得ないのに、介護の健全者が、女性解放運動
や他の運動に去っていく」云々の主旨の発言を数回くり
返した後、「自分も精神障害者だが、この会に参加の皆
さんは、僕が精神障害者であることを口外しないでほし
い」と結んだ。これまた、心凍てつく発言であると身構
えた直後、司会者が、「反優生の運動と同列に、刑法改
悪・保安処分運動が進行している現状の中で、発言者の
要請には、参加者の適切な配慮を」と、極めてスマート
にくくってしまい、二重のうっ屈したものを感ぜさせら
れたことであった。

△優生思想の根絶と粉砕を運動や目標の中心にきっちり位置
づけ、女性解放・障害者解放・労働者解放の課題を包括し、
男と女のありようの変革をも、併せすすめようVとするY県

の運動は、その当初からの着眼や視点が、全国的な運動の中でも、ひととききわだった彩りを添えていたと思われる中で、

このグループは、八回に及ぶ阻止連絡会全県反対集会の実行委員会にも一度も出席せず、当日のみ、数名が会場中央に陣どり、冒頭から、「健全者の障害者への差別性は、介護にかかわることによってのみ免責される」調の、彼らの従来からの硬直した主張をこもこもに唱えるのみで、そのことだけのために参加したのか、と、事情を知る心ある者のひんしゅくを買っていた矢先のことである。

今日の「状況」のもとで、「精神障害者であること」を白日のもとに曝して日常生活を営むことの至難さを否定する者は多くあるまい。しかし、△障害者であること、女性であること、労働者であり、主婦であり、市民であり、学生であることとを、お互いに何はばかることなく曝らし合いながら、各々の持てる力を出し合い、一つのものとして闘いぬく▽ことが、今、要請されていることでもある。障害者であることを「破戒の主人公、丑松」ばりに「かくして」、共に闘おうとするその本質は何か。主張され提言されねばならぬのは、△かくさねばならぬ状況のきびしさや、策動の悪らつさ▽であり、その指摘の上に立つ、△共に闘うことへの具体的な提起▽であつたはずである。

発言者の△口外しないで▽発言は、反優生全県集会全参加

者への不信表明であり、自分たちのグループだけが、最大の（状況や政策からの）被害者であるという錯覚やおごりの上に成り立っていたし、「参加者の配慮を」と、スマートにくくった司会者の司会の方向は、優生思想再編成攻撃と同時に仕掛けられている「刑法・保安処分を知っている」という知識の根源とはなり得ても、全参加者をして、「発言者が障害者であれ非障害者であれ、共に生き、闘おう」という認識に達し得る司会進行ではあり得なかったと率直に思う。

司会者が全参加者に「適切な配慮」を要請すべきは——「口外しないで」に應えるため、口外しないことを一人一人の参加者に要請することではなく——「発言者が危惧している精神障害者への保安処分攻撃が優生改悪と同時に進行している事実と、その認識の的確さ」をアピールし得るよう要請すべきであつたと考えたところである。

このあたりの評価などについては、当日あとの交流会、寄せられたアンケート、三月末に開かれた中間総括などでも、引き続き論議されているところであり、若干流動的であるが、筆者としての見解や考察は上記のとおりであり、不十分な点は、今後の△波紋▽を通して、さらに強固なものにしたいと念じるところである。

最後に、我々が「共に生きる」ことを目ざして引きずりつ

つ、さまざまな諸課題を結合させて運動を進めていこうとするとき忘れてならぬ、ひとつの教訓を挙げておきたい。

それは、我々が、東の金井（康治）闘争、奈良の梅谷（尚司）闘争、山口の吉田（倫太郎）闘争、西の河原（暁子）闘争と仮に名づけ、それぞれの特質に立つ多彩な位相を示しつつ展開されている、これらの就学・自立の運動から『優生思想粉碎・根絶・共に生きる生き方の追求と展望』を打ちたててきたし、今後それもそれに負うところが多いと考えることである。

金井康治君の父親は、康治君の文字板による表現や、困難なマヒ性の言語主張を通して、康治君の主張が全く正しいことを確認し、自らの社会認識と重ね合わせて捉えたとき、康治君の要求により添い、共に要請する側に立てたと、しみじみ述べ懐かれた。（八〇年三月、下関集会にて）

吉田倫太郎君の父親も、やはり倫太郎君の要求や主張が、

子どもとして当然の要求であると認識し、電通労働者としての自らの生き方と認識が重ね合わされたところから、行政の不当なあり方に対して、倫太郎君の適正就学を貫く運動に出席されたし、「倫太郎が健体児であったなら、今日の教育状況が、今ほどよく見えなかったかもしれない。彼の存在が私の意識を決定した」と言っておられる。

我々が『共に生きる』ことを具現しようとするとき、数百年で出生した「未熟児」君や、八一年三月出生のベトナム戦争で米軍が使用した催奇性物質ダイオキシン散布による障害児、胎児性水俣症の、小頭症の、無脳症の、合指症の人々と共に生きるということであり、共に生き続けられる、物質的・制度的条件の確立をも併せ運動し続けるということなのである。

（いまはし・あきらⅡ養護学校教諭）

女性のための能力開発グループ／東海BOCでは、東海地方の主婦たちが力と時間を寄せあって、次のような仕事をお引き受けします。

各種企画、調査、取材、編集、校正、コピー、撮影、テープおこし、モニター、宛名書き、清書、調理、デザイン。

BOC
TOKAI
052-971-3201

墮胎罪の変遷と今後の展望

金住典子

刑法の墮胎規制の緩和（人工妊娠中絶の合法化）は、一九二〇年のソウィエト刑法をさきがけとして今や世界のすう勢となりつつある。しかし、我が国のように、緩和の規定を刑法とは別個の法律（「優生保護法」）に置いているのは、外国にも例がないとされる。しかも、優生保護法は一九四〇年、戦時体制下で、ナチスの「断種法」を基本にしてつくられたという「国民優生法」の上に、刑法の墮胎罪の緩和規定を加えて昭和二十三年に制定されたものである。もともと国民優生法は、子どもを劣生と優生に選別し、優良な子孫を増やし、「劣悪な遺伝を防止する」という優生思想に基づく人権無視の法である。戦後制定された、基本的人権と平等権の法思想を原理とする憲法とは、根本的に矛盾する法思想に基づいているものである。現行の優生保護法は、母体の生命健康

の保護を法益とする、刑法・墮胎罪の緩和規定としての「中絶法」と、優生思想に基づく「優生法」とが、まるで神と悪魔を抱きあわせるかのように制定されている法である。

ところが、優生保護法はもとより、墮胎罪の存在を知らない人が少なくない。既婚女性の二人に一人は中絶の経験があるといわれているのに、中絶の許可条件を定める優生保護法の名称すら知らない人が多いというのは、第一に同法が定める中絶許可条件の認定が医師に委ねられていること、第二に、実際に行なわれている中絶の九〇％以上が同法十四条二項四号に定める「経済的理由」により弾力的になされてきたことによる。つまり、産婦人科の医師さえ認めてくれば、妊婦本人とその配偶者（内縁の夫を含む）の同意により、「通常妊娠二十三週以前」（厚生事務次官通達、一九七五年）の「母

体外において生命を保つことができない時期」の胎児については、ほとんど中絶が自由に行なわれてきたといつてよい（現行優生保護法の関係条文『あごろ』19号参照）。要するに、中絶規制の法の存在すら知る必要がないほど中絶が自由に行なわれてきたといえる。

けれども、法体制としては、この優生保護法十四条一項各号に違反して行なわれた人工妊娠中絶は、刑法の堕胎罪の適用を受けるしくみとなっている。（下段の刑法第二一二条ないし第二一六条の堕胎罪の各条文参照）

刑法三五条には「法令又は正当の業務によりなしたる行為はこれを罰せず」とあるので、優生保護法の第十四条一項の一号から五号までの中絶許可条項は、法律により、刑法の堕胎罪の違法性を阻却する場合を定めたものと解されている。この刑法三五条が刑法の堕胎罪の緩和規定としての優生保護法を結んでいるわけである。

我が国で最初に堕胎罪が制定された旧刑法（明治十五年制定、明治十五年から四十一年まで施行）以来、現

行刑法（明治四十年制定、明治四十一年より施行）の堕胎罪を経て、現実に堕胎罪の適用をうけて有罪になった者は、別表のとおりである。戦前は「産めよ増やせよ」の富国強兵政策の下で、堕胎も厳しい規制をうけ、毎年ずっと三ヶ台であ

堕胎罪第一審有罪人員
(司法統計年報)

年次	人数	年次	人数
明37	293	昭14	188
38	307	15	119
39	367	16	144
40	294	17	83
41	377	18	不明
42	508	22	不明
43	672	23	68
44	580	24	69
大1	639	25	44
2	630	26	33
3	605	27	15
4	545	28	7
5	不明	29	7
6	497	30	5
7	563	31	4
8	387	32	5
9	306	33	4
10	340	34	2
11	266	35	1
12	258	36	3
13	215	37	0
昭14	171	38	7
1	418	39	3
2	308	40	1
3	193	41	2
4	170	42	0
5	178	43	6
6	223	44	2
7	121	45	0
8	143	46	0
9	280	47	1
10	249	48	0
11	254	49	0
12	127	50	0
13	103	51	0

第二十九章 堕胎ノ罪

第二一二条（堕胎） 懐胎ノ婦女藥物ヲ用ヒ又ハ其他ノ方法ヲ

以テ堕胎シタルトキハ一年以下ノ懲役ニ処ス

第二一三条（同意堕胎） 婦女ノ嘱託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得テ

堕胎セシメタル者ハ二年以下ノ懲役ニ処ス因テ婦女ヲ死傷ニ

致シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ処ス

第二一四条（業務上堕胎） 医師、産婆、薬剤師又ハ藥種商婦

女ノ嘱託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得テ堕胎セシメタルトキハ三月

以上五年以下ノ懲役ニ処ス因テ婦女ヲ死傷ニ致シタルトキハ

六月以上七年以下ノ懲役ニ処ス

第二一五条（不同意堕胎） ① 婦女ノ嘱託ヲ受ケス又ハ其承

諾ヲ得スシテ堕胎セシメタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ

処ス

② 前項ノ未遂犯ハ之ヲ罰ス

第二一六条（不同意堕胎致死傷） 前条ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ

死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ処断ス

ったが、戦後、優生保護法が施行されてからは、とりわけ中絶の合法化に大きく道を開いた現行法の改正がなされた昭和二十七年以降はほとんど皆無に近く、昭和四十八年からはゼロとなっている。起訴されたものの中には、刑法二二二条の自己堕胎罪の起訴例はみられず、起訴されているのは、同意堕胎罪、業務上堕胎罪のみである。堕胎犯罪の起訴にあたって最も考慮される要素は、①堕胎方法の妊婦に対する危険性、②堕胎施術者における営利性、常習性の二つである。起訴されている裁判例は、いずれも堕胎施術の不手際や施術後の措置が十分でないため、妊婦を死傷させているケースである。

アメリカでも、堕胎罪についての刑罰権の行使については、実務上、堕胎施術者だけを起訴しており、しかも堕胎行為の結果、妊婦に対して医療機関の治療を必要とする程度の重い後遺症等を生じさせた場合のみ起訴しているという。

我が国も、実情としては同じであるが、一つには、通常堕胎はひそかに行なわれるので、堕胎犯が発覚するのは、妊婦の致死傷という重い結果の発生によってであるという事情もある。

堕胎罪と嬰兒殺

以上のように我が国の堕胎罪は、現行の優生保護法の存在

により、むしろ母体の生命健康に危険な方法で、しかも営利的、常習的に堕胎が行なわれた場合のみ適用され、ほとんどの場合中絶は自由に行なわれてきたものである。

けれども、同法十四条一項四号の「経済的理由」が削除されれば、現在行なわれている中絶のうち九〇%以上のものは違法な中絶となつて、堕胎罪の適用をうけるおそれが出てくる。

そこで、簡単に現行の堕胎罪の内容にふれておきたい。

刑法第二二二条の自己堕胎罪の主体は、懐胎の婦女すなわち妊婦に限られる。堕胎とは、自然の分娩期に先立って人為的に胎児を母体外に排出することであり、妊娠の月数は問われず、妊娠一か月でも堕胎罪となる。しばしば、妊娠四か月未満は堕胎罪が成立しないように言う者があるが、これは、墓地、埋葬等に関する法律が認める埋葬等には、妊娠四か月以上の死胎を含むとされ、これを堕胎罪成否の基準であるかのように誤解しているためである。堕胎したのち、胎児が母体外で生命を保っていたとしても有罪は成立する。堕胎後に存在する胎児（嬰兒）を殺したときは、堕胎罪と殺人罪の両方が成立する。

刑法第二二三条の同意堕胎、同意堕胎致死傷罪は、妊婦の嘱託（依頼）または同意を得て、刑法第二二四条に列举される医師等の者以外の者が、堕胎させたときに成立する。嘱託

をした妊婦は、本条の教唆犯で処罰されるのではなく、刑法二二二条の自己堕胎罪で処罰される（刑法六五条二項）。妊婦を教唆して堕胎を承諾させたうえで堕胎するときは、刑法二二二条の自己堕胎罪の教唆犯が成立するのではなく、単純に本条の罪となる。たとえば、妊婦の夫が、妊婦をそのかして堕胎を承諾させ、妊婦が堕胎した場合である。

しかしながら、胎児の父が産むのを喜ばなかったり、生活に困るからと妊婦がひとりで堕胎しようなときは、胎児の父は、教唆や幫助などの従犯も成立せず、自己堕胎罪はもとより本条で処罰されることもない。妊娠は男女の性交による共同責任であるのに、「産めないから」と困って堕胎した責任は、主として妊婦が負うというのは明らかに不公平である。しかしながら、この不公平を憲法十四条の男女平等原則違反であるとして争った裁判例は見当たらない。

刑法第二十四条、二二五条については、条文を読んでいただけば十分であろう。

要するに堕胎罪は、胎児が母体内にある時に、自然の分娩期に先立って、薬物その他の方法を用いて、胎児を母体外に排出するものであり、その結果、胎児の生命が失われるか否かを問わないものである。

これに対して、胎児が母体から独立して殺害の対象たり得べき状態になった時、つまり母体から一部露出したのちに、

その胎児を殺すときは、刑法第一九九条の殺人罪となる。嬰兒殺ともいっている。法定刑からもわかるように、堕胎罪と比較して質的に異なるぐらゐり重い罪である。

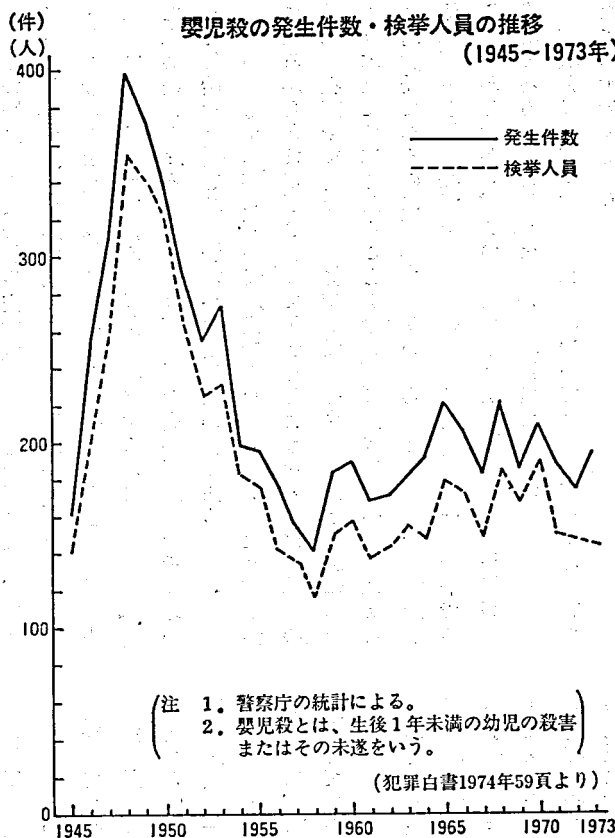
我が国では嬰兒殺というのは、殺人罪の一部を構成し、裁判例からいうと、通常一歳未満児の殺害をいう。イギリスの嬰兒殺法（一九三八年）は、生後十二か月未満の自分の子に対する殺害を嬰兒殺とし、西ドイツ、イタリア、オーストリア等では、分娩中から分娩後二十四時間以内の子殺しを嬰兒殺としている。

このように生後間もない嬰兒と出生後一定期間を経た子どもに対する殺害とでは、とくに加害者である母親の心理に決定的な違いがあることから嬰兒殺が区別される。一般に母親が子殺しに至るといふことは異常なことであり、嬰兒殺は、生活困窮者や私通した若い女性が行なうことが多く、また、産褥精神病や生殖精神病などの精神病との関連が深い。その後の乳児に対する母親の殺害行為は、ほとんどが自殺の道連れ的心中未遂や種々な精神障害（分裂病やうつ病など）によるものである。

どの国でも一般に、子どもを欲しない母親の犯行として、堕胎は都会での、嬰兒殺は田舎での間引き手段として行なわれてきた。

我が国の戦後における嬰兒殺の発生件数と検挙人員の推移

嬰兒殺の発生件数・検挙人員の推移
(1945～1973年)



は左図のとおりである。敗戦後の急激な増大には、明らかに生活困難と現行の優生保護法制定前の中絶規制とが影響していることがうかがえる。統計資料によれば、一九七〇年に警察に検挙された嬰兒殺のうち、第一審有罪者はわずか二・九%の六名にすぎず、全員刑の執行を猶予されている。

墮胎罪の保護法益の変遷と

墮胎罪廃止論

そもそも墮胎は、近代に至るまで犯罪ではなかった。古代社会では、生まれた子、生まれようとしている子は、両親の財産と考えられていたので、墮胎とか新生児の殺害は犯罪とはされなかった。ギリシャ時代には、墮胎は人口の急激な増加を抑制する自然な方法として考えられていた。ローマでは、墮胎の処分は家父の権力と警察官の取締りに委ねられ、国家的刑罰を科されなかった。また東洋の法律には墮胎の罪が見当たらないといわれている。我が国でも江戸時代には、「子おろし」(墮胎)「間曳」(嬰兒殺)が社会的慣習といわれるほどさかに行なわれていた事実がある。江戸時代後期には、江戸に限って墮胎業者の取締まりを目的とする禁令が出された。墮胎が処罰されるようになってのは旧刑法の墮胎罪制定以後のことである。明らかに、富国強兵策の重要な柱である人口増加政策として制定された。

近代人の犯罪観のなかに墮胎や胎児殺を導

入したのはキリスト教である。フランスの一七九一年の刑法は、墮胎罪を殺人罪と並べて規定し、婦女の同意の有無を問わず、墮胎させた者は二十年の鉄鎖刑に処したが、自己墮胎は処罰していない。一八一〇年の現行刑法は自己墮胎も犯罪としたが、殺人罪から切り離して、傷害罪と並べて規定し、軽罪とした。我が国の旧刑法はフランス刑法を受け継ぎ、墮胎を傷害と並べて軽罪として規定した。薬物その他による單純墮胎罪を一月以上六か月以下の重禁錮とし、妊婦による自己墮胎と第三者による墮胎と同じ重さの罪とした。ここには、墮胎罪の保護法益を妊婦の生命健康ではなく、胎児の生命に置く考え方が濃く出ている。ボワソナードは、旧刑法草案等の説明において、「母体内の子はすでに母体から区別される人であり、墮胎は人の生命の侵害である。ただ胎児の将来の生存可能性は常に不確実であり、したがって墮胎は胎児の生命そのものというよりはその生存の機会を奪う行為である。その意味では墮胎の社会侵害性は嬰兒殺に比べて明らかに少なく、また明日に生命を持つ存在に直面しない行為者は、その計画の実現に際して抑止されることが少ないから、その反倫理性も小さい。諸国の刑法が墮胎を嬰兒殺よりもはるかに軽く処罰しているのは、この点を考慮したものである」と述べている。

明治四十年に制定され、四十一年から施行された現行刑法

は、第一に妊婦自身による自己墮胎と第三者による墮胎を区別し、後者の罪を重くした。すなわちここには、墮胎罪の保護法益が、胎児の生命健康だけでなく、妊婦の生命健康をも加えたものであることがうかがえる。戦前の刑法の解説書には、墮胎罪の保護法益をまず胎児の生命健康に置くものが多く、母体の健康も加えているとはいえ、どちらかというと、人口政策的目的や性風俗の保護と並べてという考え方に立っている。

戦後は新憲法の基本的人権と男女平等の原理により、墮胎罪の解釈も当然のことながら質的変遷をした。保護収益を、なによりも母体の保護に置く考え方が多数となり、これに胎児の生命健康を加える考え方があがるが、胎児の生命健康のみに置く考え方は少数派である。

ところで、すでに一九二〇年のソヴィエトにおける中絶合法化法をさきがけとして、一九三〇年代にはこれが北欧諸国に波及するという動きを背景に、我が国でも戦前から、墮胎罪廃止が叫ばれてきた。瀧川幸辰博士は「元来、胎児は母体から分離するまでは母体の一部分であって、独立の存在を有するものではない。この独立の存在を有せざる胎児を殺す目的で、自然の分娩期に先立ち、これを母体外に排出する行為が墮胎である。これは往々にして母体の健康を害し、生命に危険を与える。この意味において犯罪としての墮胎の本質は、

ひつきょう母体に対する傷害罪にはならない」とし、この見地から、自己墮胎、同意墮胎を不可罰とすべきことを主張された。そのほかにも、早くから法律家、婦人団体も含め、同様の廃止論が盛り上がり、一九四〇年に公表された刑法改正仮案で自己墮胎罪の刑を軽くするという成果をもたらしたが、結局は戦争拡大のなかで、かえって墮胎に対する法規制は強化されることとなった。

しかしながらこの墮胎罪廃止論は、法制審議会刑事法特別部会における刑法改正案審議の過程で再燃することとなった。昭和三十六年十二月に発表された「改正刑法準備草案」をうけて十年余に及ぶ審議の結果、昭和四十七年四月に答申された「改正刑法草案」（下表参照）は、自己墮胎につき罰金刑を加えたのは、とくに現行法と基本姿勢は変わらないう。けれども、その準備草案立案過程と審議の過程を通して、自己墮胎と同意墮胎罪をめぐる不要論と存置論が応酬され、結局、存置されることとなった。その理由は主として「生命の尊重及び性秩序の維持」にあり、現行優生保護法があるので、諸外国における墮胎規制緩和に遅れをとっていないというところにあったようだ。この時、日本弁護士連合会は、「草案」に対して、自己墮胎と同意墮胎および新設の営利墮胎については削除せよという意見を公表している。

第二十六章 墮胎の罪

第二七三条（墮胎） 妊娠中の女子が、薬物を用い、又はその他の方法で、墮胎したときは、一年以下の懲役又は五万円以下の罰金に処する。

第二七四条（同意墮胎） ① 妊娠中の女子の囑託を受け、又はその承諾を得て、墮胎させた者は、二年以下の懲役に処する。

② 前項の行為をし、その結果、女子を死傷させたものは、五年以下の懲役に処する。

第二七五条（営利墮胎） ① 営利の目的で、前条第一項の罪を犯した者は、五年以下の懲役に処する。

② 前項の行為をし、その結果、女子を死傷させた者は、六月以上七年以下の懲役に処する。

③ 前二項の罪を犯した者に対しては、情状により、五十万円以下の罰金を併科することができる。

第二七六条（不同意墮胎） ① 妊娠中の女子の囑託を受けず、又はその承諾を得ないで墮胎させた者は、六月以上七年以下の懲役に処する。

② 前項の罪の未遂犯は、これを罰する。

第二七七条（不同意墮胎致死傷） 前条の罪を犯し、その結果、女子を傷害した者は、一年以上十年以下の懲役に処する。女子を死亡させたときは、三年以上の有期懲役に処する。

時代にふさわしい中絶法を

さて、第二次大戦後、世界人権宣言にうたわれているように、基本的人権尊重、男女平等の人権思想は、平和を守ることと固く結びつけて確立されてきた。とりわけ「性の不平等」(女性だけが妊娠、出産するという)を女性の人権抑圧の手段としてはならず、「産む」「産まない」の決定権を女性に認めるという人権思想が確立されてきた。テヘランの人権宣言(一九六八年)、国際婦人年世界会議で採択された世界行動計画(一九七五年)、女性差別撤廃条約(一九七九年)において、出産についての自己決定権、家族計画は個人の基本的権利であり、夫婦が平等にこれを行使用すること、個人と夫婦はそのための情報と手段を持つ権利を有し、国家がこれに介入すべきでないことが宣明され、諸外国で中絶の自由化が推進されてきた大きな背景となっている。

要するに今日では、出産や家族計画の個人的権利の尊重や母体の生命健康の保護の最大尊重と抵触する、胎児の生命の尊重は譲歩をよぎなくされつつあるといつてよい。

したがって我が国の堕胎罪と優生保護法も、こうした趨勢にふさわしい改正を要請されているといえよう。結論としては、現行の堕胎罪は、これをすべて廃止すべきであろう。ちなみに、現行の堕胎罪の保護法益は、母体の生命健康が優

先するとされていることは異論のあるところであり、他方刑法では、自殺や自傷行為は不可罰とされているのだから、右のような人権思想のもとではいっそう、自己堕胎、同意堕胎罪はこれを不可罰とするのがむしろ当然といえよう。医師でない者の中絶を禁止し処罰する規定を設けるだけで十分であると考ええる。(これは、「中絶法」のなかに規定すればよいと思う)その他の処罰については、現行の傷害罪(業務上過失致死傷を含む)で足りるのではないだろうか。

それと同時に、「国民優生法」をベースにした、現行優生保護法を廃止し、この中から人権としての中絶法だけをすっきりと制定させる必要があろう。その際には現行法のように妊婦、障害者や病者、経済的困窮者であるなどの個別的、差別的理由の一切を排除し、母体の生命健康の保護という人権保護基準で統一される必要があると考ええる。

(この稿は、本号掲載のAGORAZEIN(一四三ページ)をふまえてまとめたものである)

(かなすみ・のりこ 弁護士)



優生保護法「改正」への公開質問状

柴谷篤弘

伝え聞くとところによれば、現在日本では現行の優生保護法の改変をめぐって、多くの議論がなされているようで、その焦点は、現在妊娠中絶が許可される条件のひとつに認められている「経済的理由」の項目を削除しようという考えかたにあると理解いたします。この問題に関し、改訂を推進しようという意見の内容を、たとえば日本教文社編『胎児は人間でないのか——優生保護法の疑問点』（昭和五十七年十一月）について見ますと、そこには問題の本質に対する生物学的理解の不足が明らかに認められます。

私は日本で教育を受け、学位を取得し、国公立大学の教員として勤務した経歴をもつもので、現在長期にわたって国外に居住しておりますが、右のような事態を見て、ここにこの問題に関心をもつ方々の理解を深めるために、公開質問状を提出することにいたしました。私は生物学専攻の科学者で、現在それによって職をえており、研究分野は分子生物学から発生生物学にわたっております。

*

優生保護法の改変を支持している人々の意見のうち、生物学に関する部分については、受精卵をもって人間生命のはじまりとし、その正常な発生を人為的手段で停止させて、生まれてくるべき新しい人間の生命を奪うのは殺人にひとしいのではないか、という論議にこれを要約することができましよう。

しかし生物学の知識に照らしてこの問題を考えてみますと、右のように簡単化して人間の発生現象を解釈することは妥当ではないということができます。

まず第一に、今日おこなわれている議論では、人間において、精子と卵子という二つの細胞の合一をもって、「受精」と表現しているようですが、これは事態をいじらしく簡略化していると申さねばなりません。父性と母性生殖細胞、すなわち精子と卵子の結合は、「受精」であり、二つの細胞の合一によって生ずる一個の細胞は受精卵であります。受精卵は細胞分裂をくりかえして多細胞になってゆきますが、人間をふくめて哺乳類ではこうして生じてくる分割細胞の大多数は

胎盤をつくるようになり、将来独立して生きた個体を形成するのに用いられるのは、全体のなかのむしろ少数の細胞にしかすぎません。しかもこのような分岐における、細胞の発生運命の決定は、通常卵―胚の細胞数かなりふえて、三十二―六十四個くらいになったときにおけると考えられるので、はじめから人体をつくる細胞がはっきり区別されているわけではありません。そしてこのように胚の細胞の発生運命が分岐した時点（受精後約一週間）で、胚は子宮の内壁に「着床」する用意ができています。そして着床がうまくゆけば、母体は妊娠したことになるわけで、「受精卵」というのは、この出来事を指していることばであるように思われます。

着床までの期間は、人間の成熟卵―胚の発生を母体の外で進ませることが、現在では技術的に可能となってきました。そのため「試験管ベビー」とか、ヒトの胚についての生物学的実験、あるいは当面使用しない胚の棄却、流用、冷凍保存などの、従来人類が当面しなかった問題が出てきて、種々の論議がおこなわれております。しかし着床の段階以後、妊娠全期間の三分の二をすぎるまで、人間の胚―胎児を、母体―子宮の外で発生・発育させることは不可能です。着床後急激に完成する胎盤は、母体から胎児に栄養を移す器官で、そこでは胚由来の組織と、母体由来の組織とが、密接に組合わされており、これを由来に従って分別することはできても、分

離することは不可能と申すべきでしょう。したがって通常いわれるほどには、胎児は母体から独立しているわけではなく、母体の生命が断たれれば、胎児の生命を救うことは、妊娠七か月ぐらいまでは、現在のところ不可能であります。胎児の「人権」と母親の人権とが抵触したとき、母親の人権を優先させる根拠は、ここにあります。

このような、ヒトの発生の初期における、新しい個体の誕生の確率を追いますと、受精卵において三分の一、着床後（二週間）で四分の三、受精後六週間で五分の四、十八週間で九七パーセントというふうにながります。したがって母親は通常、自然に生まれてくる子どもの数の少くとも二倍の数の受精卵を「殺して」いるわけです。

また、受精卵はかならずただひとりのヒトに発生するわけではなく、発生の初期の状況により、二人以上のヒトに分離発生する可能性もあり、また二個以上の初期胚の合一によってひとりのヒトが生じうることも可能であることが、生物学的にはたやすく理解できるようになってきております。したがって、人間の発生の初期段階においては、一個の胚に対して、一個の人格を対応させることは、原理的には不可能であって、現実の事態は、はるかに不分明なものであります。したがって、受精卵をもって人間生命のはじまりと見なすことは、人間のもって生まれた独得さという点から見ても、

また人間へと発生してゆく確実さから見ても、これを決定的な一点と見なすことはできません。「生命」という観点からすれば、精子も卵子も生きており、受精卵、したがって人間の生命は、原初の生命体からずっと連続したものであって、人間の生命が、受精卵において突如として開始されるものではありません。したがって、受精卵をもって人間の生命のはじまりとするという論議は、一個の便宜的な定義たりえても、科学的あるいは客観的な根拠をもつわけではないのであります。問題は、しだいに人間になる確率を増しつつある、連続した過程のどの点をもって、ヒトと見なすか、にかかるわけであります。

これを逆から見ますと、何ゆえにわれわれはヒトをヒトと見なし、それを動物のようにある程度自由に殺してもかまわない、という考えをしりぞけるのでしょうか。それは人間には自意識というものがあり、自分の生を自分で意識し理解する、したがって、そのひとの生が、そのひと自身に所属し、他の人間の自由にすることは許されない、という考えにもとづくものでありましょう。われわれはまた、すべてヒトという同じ生物種に属し、そのあいだには生殖行為が成立し、同類意識があつて、相互に愛慕し、相互に理解しうる存在であると考えられ、それが他のヒトの意識や感情についての類推

を可能にするために、自ら殺されることを望まぬ人間が、他の人間の生命を断つことを望まぬ、という事態につながるのだと思います。

このような自意識の発生は、インパルスの伝達を可能にする神経細胞の結合、および脳の形成にもとづくものであり、個体の自発的な運動と、刺激に対する反応性を指標として、その始原状態の形成を類推しうるものでありましょう。このような観点からすれば、自意識すなわち「自己」の発生は妊娠三か月以前にさかのぼることは不可能とされます。他方「自己」の発生は、主観的には個人における記憶の開始の時期とも考えられ、これは誕生後一年をはるかに過ぎた時点と仮定せねばなりません。したがって、自意識の形成の時期を人間の生命の起点と見なすのであれば、それは妊娠三か月から誕生後一年以上という長い期間にわたり、その間あとになればなるほど、その確実性が増してくると考えざるをえず、またこの問いについて、生物学的に確実な時点を定めることは、すくなくとも当分の間は不可能と考えておかねばなりません。したがって、この問題については、社会的、歴史的条件により、人間の判断の基準は変わりうるわけで、その決定には、政治的要因が、きわめて強くかわることを避けるわけにはゆかないだろうと思われまします。ですから、いつの時代にあつても、この問題について法的・社会的に、ひとつの発

生段階をきびしく決定論的に指定することは、常にいちじるしく政治的な行為であって、そこでは、これを支持すべき科学的事実の重みは比較的小さい、と言わねばならぬと思います。

現行の優生保護法改変のための論議においては、ともすれば右のような生物学的事実が無視され、あるいはその公表がおさえられ、討議がさまたげられ、むしろ逆に科学的な専門用語を濫用して、大衆を煙に巻く傾向さえ見られます。その一例として、前記『胎児は人間でないのか』八六―八八頁の、前日本医師会長武見太郎氏の意見のなかには、「バイオエシックス（生命倫理）」、「社会生物学」などの用語が見えますが、ここでは、これらの語は、その本来の意義をはなれて、勝手にちがった意味に転用されております。正しくは、バイオエシックスとは、分子生物学その他の生物学の発展によってもたらされた、新しい技術を人間に適用するさいの倫理的基準に関する研究課題をさしており、社会生物学とは、動物の社会的行動を、個体の行動を規定する遺伝子の生存競争による自然淘汰によって説明しようとする学問分野で、そのひとつの延長として、人間の社会的行動（婚姻、戦争など）をも、遺伝子の自然淘汰による進化の結果と見なそうという学派のいとなみを意味します。これらのいずれも、優生保護法における「経済的理由」の削除という当面の問題とは、直

接の関係を持ちません。

日本は目下科学技術立国ということで、科学研究振興が叫ばれているようですが、それにともない、社会の問題に科学知識による考察を導入することが要求されると思います。しかし右に述べましたような問題について、現在日本の国公立大学の生物学研究者のなかで、権威ある意見を求めるにふさわしい学者はきわめて少ないのではないか、という気がいたします。これはおそらく政府の手落ちであって、技術的振興政策と同時に、社会と科学の界面についての問題を専攻する科学者の養成にも、意を用いられるべきだと思います。

右に開陳した意見につき、一般大衆の優生保護法改訂の問題についての討議のうえで参考になる点にお気づきでしたら、しかるべき形で公表していただければ、大方の態度を定める上で、有益と思われるので、よろしく御考慮のほど願います。

昭和五十八年一月八日

（しばたに・あつひろ）オーストラリアCSIRO（国立科学産業研究機構）分子細胞生物学単位、上級主任研究員

（注）柴谷氏は同文の公開質問状を、厚生大臣、内閣総理大臣、厚生省精神衛生課、公衆衛生審議会優生保護部に提出した。しかし編集部からの問い合わせに対し、精神衛生課では、五月四日現在いずれにおいても受け取っていないと回答、再度コピーを送付してコメントを求めたが、得られなかった。

いのちを守る女たち

どの町にも女たちがいる。やさしくて、したたかな…

息の長いイモづる式学習会を

北海道優生保護法改悪阻止連絡会 細田英理子さん



「女と男の関係と子どもを持つ決意とはイコールではないと思うのね。愛の確信というか、共に生きる決意というのね。妊娠・出産によって逆規定されるべきではないと思うの。子どもを産んでみたいとは思いうし、育ててみたい。だって、△あごろ△には子持ちでステキな人がたくさんいるものね。でも、子ども

の父親になると、どんな人間関係を編んでいくかが何と言ったって先決問題。それなしに子どもなんて……」

数年前、当時の恋人との関係に、なにか異和感を感じて悩んだ。違うんじゃないかと漠然と感じていた。それが何なのか、どこが違うのか、その時はわからなかった。

「自分が相手とどんな関係を作っていたいたいのかが、自分でも見えていなかったのね。居心地の悪さだけがあって……」

相手が見えず、自分自身も見えず、さりとて決定的なトラブルもなく、ただ流れていった日々。いや、見えないからこそ、トラブルを避けて、闇へと自分を追いやった日々。△あごろ△に出会い、さまざまなイイ女に出

会い、活動に参加していくプロセスを通じて、かつての居心地の悪さが何だったのかが少しずつ見えてきた。

「△あごろ△で子持ちの女たちに出会って、ずいぶん影響をうけた。男や子どもとの良い関係というのは、自分を発見して、まず自分自身と良い関係を作らなきゃだめなんだってことがよくわかった。こんな関係もあるんだと思ったら、イジイジしていた自分が本当に馬鹿みたいに思えてね。たかだか二十いくつかそこの女が、一つも間違わないなんて考えられないよね」

正直な人である。自らの体験に重ねて、迷い、悩み、苦しむ女を追いつめる優生保護法改悪に憤る。

△アジアの女たちの会△のメンバーが買春観光のスライドを持って全国を歩いた時に、優生保護法改正の動きがあることを聞いてきた。「たいへんなことになる」と、帰札するとすぐ「女たちの反安保連統講座」の中で「人権をふみにじる法改正」の講座を組み、△Y

さんの会V(子殺し裁判の支援をしてきた)のメンバーが中心になって阻止連結成を呼びかけた。細田さんは結成から関わった一人。「すごく身近な問題だと思ったのね。私の場合は、たまたま中絶しなければならぬ破目に陥ったことはないけれど、今までも、これからも、いつでもあり得ることだと思うの。一〇〇%の避妊法がない限り、いつでも妊娠の可能性があるわけで、本当に私自身の問題だという感じだったのね」

数々ある改悪反対のスローガンの中で「女には産めない時もある」というスローガンの優しさが好きだという。北海道の阻止連では、産む産まないは女の権利ということは強調していない。誤解されやすいからだが、細田さん自身、こういう言い方はあまり好きではないようだ。女と男、女と子どもの優しい関係には、権利とか義務とかいう言葉の持つ堅さが似合わないからだろうか。

阻止連のメンバーは、北教組の書記、障害児学級の教師、新聞記者、学生、パート労働者、学童保育の指導員、主婦など、多彩。三十歳前後がほとんど。男性も二人おり、その頭張りぶりは女性メンバーをしのぐほど。

街頭情宣、シンポジウムなど、この半年間

の活動を通しての反応は――

「じっくり話すとなりの人なら大体わかってくれる。特に、私と同じくらいの年代の人は、身近な問題、自分の問題としてよくわかるみたい。感触としては良いわけなんだけど、改悪の動きがあることや、優生保護法、堕胎罪の存在そのものを知らない人がほとんどだったのね。知られていなさ過ぎるの。男の人?特に妨害されたことはないけど、関心も示さない。自分のつれあいや友だちなど、身近な男たちにもっと話していかなければと思う」

優生保護法は、実にたくさん問題を生んでいる。優生思想・障害者問題・女の状況をめぐる問題等々。これからの課題として、阻止連では、これらの一つ一つを深めていくために「優生保護法をつぶすために、イモズル学習会」を計画している。

「現行の優生保護法の改悪阻止を越える視点を獲得しないとな。優生保護法そのものを問い直していかないと。そういうレベルで運動を展開しなかったら、今回もし勝っても、きつとまた狙われると思うのね。クチャコミ程度でも周囲に呼びかけて、息の長い学習会にしたい」

ふだんはむしろ温かい人なのに、優生保

護法の話になるとたいへんな迫力である。

一月二十三日のシンポジウムでも、すでに優生思想についての問題提起や、女の状況をめぐるリアルな問題提起はされていた。そのシンポジウムの報告と主張を収めたパンフレット『優生保護法改悪を阻止するために』を二月末に発行した。全国のAあごらVの皆さんに読んで欲しいと言う。

＊

細身。そして何よりファッショナブル。赤や黄色の原色からモノトーンまで、実にさまざまな色とデザインを見事に着こなす。着ることを素直に楽しむ人だ。現在、Aあごら札幌Vの運営委員。アマチュア劇団の団員でもある。阻止連関係のスケジュールがハードなため、なかなか思うようにいかないが、週に一日は家でゆっくり過ごすようにし、土・日はできるかぎり遊ぶ予定を入れる。「遊ばなかったらやっていられないんじゃないかな」と笑う。しっかり遊ぶ人でもある。

女子高校の養護教諭になって十年。「満足な性教育すら行われていないのに、法で中絶を規制するなどもってのほか」と、先生としての目も確かである。

(細谷洋子)

ハンストを通して見えたもの

優生保護法改悪を阻止する学生の会 加納文子さん

三月八日、正午、厚生省前にテントがはられ、女子学生たちがハンストを開始した。

「優生保護法・堕胎罪の強化というのは、からだにかけられた攻撃なんだということを示したい」と言うハ優生保護法改悪を阻止する学生の会Vの女たち七名。二人ずつ四十八時間交代のリレーハンストを、十三日までの五日間、たくさんの方援者に囲まれて全員元気にやりとげた。

その中の一人、加納文子さん。未来の中学校社会科教師。

厚生省の前で、大きな腫をいっばいにみひらき、怒りと緊張を小柄なからだにみながらせて厚生省側の対応を激しく非難した次の瞬間、今度は、右に左に飛び躍ねながら「われらゆるがず」を歌う。

*

——まずハンストにいたった経過や、やってみてどうだったかを聞かせて下さい。

私、今まで優生保護法がよく知らなかったんです。街で優生保護法指定医って看板を見ても、何のことだろうと思ったり、何で中絶・避妊手術じゃなくて優生手術なんだろうと思うくらいで。

だから今度の改悪問題を新聞で読んだときも、まず思ったのは、性の国家管理っていうことより、中絶が禁止になるんだということ、自分の問題として、すごく不安っていうか、困るなっていうことでした。それから、これは障害者の差別を強化することになるんじゃないかという恐れ。この二つで、あつ、これはおかしいんじゃないかと思いだしたんです。私、小金井市にあるハ差別と自立を考える女たちの会Vっていうのに入ってるんだけど、そこでどういうことなんだろうと話し合ったり、十年前のときのことを聞いたりしたのが、この問題に関心をもったきっかけでした。

阻止連（82優生保護法改悪阻止連絡会）に参加して、みんなと学習会をしたり抗議行動したりしていくうちに、「改正」案の国会提出期限といわれた三月十三日に向けて、ハンストをしようかということになりました。

私たちがあえてハンストという方法をとったのは、話題性だとか、世間に対する一つのデモンストレーションだとかいう手段としての面よりもむしろ、今の優生保護法を改悪するということとは、私たち自身の、女性の命と生き方を抹殺することなんだ、からだにかけられている攻撃なんだ、ということを示したいところからでした。

女たちはひとりひとりでは、いろいろ考えていても、女たちの問題っていう形で話す場所ってとても少ないと思うんです。だから、みんなが集まって話せる場、草の根的に地域でやってる人たちが、いろんな形で一つになっていける場、そんな場があったらいいね、というので二十四時間解放のテントをはってハンストに入ることにしたんです。

ハンスト自体は、最初はやっぱり経験もなかったので不安でした。みんな食べるの好きだし（笑）。だけどやってみたら、体調的にもつらくなかったし。

テレビで見たとか、デモには来れないけどって言って、本当にたくさん、のべ約四百人の人が支援に来てくれて、話ができたのはうれしかった。テントの周りに夜はビニールシートをはったから、みんなの熱気で暖かでした。悲憤感に訴えるというやり方ではなく、生き生きと明るくやりたかったんです。

マスコミはすごく興味本位で、「ルンルン女子大生の叛乱」なんていう見出しで取り上げたり。「女子大生がやってる」という面からだけ扱っていて、反発を感じました。でも女性記者の方たちは、いわゆる取材ってことだけじゃなくて、支援っていう形で関わって下さったり、取り上げて下さって、やっぱり違うなっていう感じがしました。

——ハンスのテントでは毎晩遅くまで討論会が行なわれたと聞きましたが、あなたが先程おっしゃった交流の「場」としてのテントの成果があったわけですね。

ええ、交流という意味ではとてもいいものが得られたと思っています。

毎晩必ず討論会の時間を作って、支援に来てくれた人たちと話し合いました。障害者の方たちも来てくれたので、優生思想とか、障害者のおかれている状況、とりわけ女性障害



者の、施設でおかれている状況についてなど。障害者の方にとっては、優生手術ということがあるので今回の問題は本当に切実です。身体にかけられた攻撃なんだってことで、すごくなまなましいものがありました。

それから、おんな性、おとこ性について。「産む、産まないは女の権利」というスローガンについて男はどう思うか、というところから話が始まったんですが、男の人からは、自分の問題でもある、女の人の気持ちはわかるつもり、という声もありましたが、わかるなんて言って欲しくない、との発言が女たちから強くできました。望まない妊娠だった場合は、そこに至ってしまった過程を含めて女と男は話し合うだろうし、産むのであれば当然育てるということがあって、男も子育てに関わっていくということを含めて女と男は話し

合うと思う。そういう意味で、両方の話し合いというのは過程としてはあると思います。

でも、女と男は独立した人格なんだから、意見の対立することがあるっていうのを前提にすべきだと思うんです。そして意見が対立した場合、最終的に選択するのは女だということ。

今まで女と男の関係では、お互いに思いやるというか、わかってあげる、わかってもらうみたいな関係が優しさとして捉えられてきたと思うんだけど、そうじゃないんだ、そういう優しさの陰には、女っていうのが男とは独立した人格であるっていうことが抹消されてきた歴史があるんだ、それぞれ違うんだ、わからない人間なんだというところから出発しなければいけないんだ、ということですよ。今なお女は選ばれるものとして存在してると思うし、そういう性差別社会の中で、とりわけ女が選ぶってことを言っていくということは、女と男の関係を問い直す意味も含めて大切なことだと思っています。

討論をしていて、女と男は違うんだ、そして人それぞれ違うんだというのを強く感じ、そこに到達するのが大変な作業だなとも思いましたが、ハンスをやった本人にも、それを取り巻く学生の会のメンバーにも、自分の

問題として自分の立場から本当に今後やっていける、という確信というのかしら、そういうものが残ったという意見が後の反省会でも出ました。

——それ自分が自分の立場から自分の言葉で考えていくことによって、はじめて他の立場の人との連帯への道が開けてくる、ということだと思ふんですが、あなた自身、今後どういうふうに、この優生保護法の問題を抱えていこうと考えていらっしゃいますか？

今までの運動って、何か大同団結されることが重要視されすぎて、目的化されてきたような気がするんです。だけど、前にも言ったように、私は別個に進んでいくしかないと思ってるから、違うものがあるんだって認識したお互いが誤まることなく敵を見すえて、いかにきっちりフォロースしていかけるかということが重要だと思えます。でないと論議が「踏み絵」的になってしまふ。今のありのままの自分なり、その人その人なりの矛盾をかかえた存在をそのまま認めて、どつか疑問のあるところから少しずつ変わっていく、そういう方向性を大事にしたいと思っています。ハ学生会の会Vでは隔週一回ミーティングをし、各大学での取り組みを中心にした機関紙

も出したいと思っています。

それから、私たち自身の中にある男に対する幻想、結婚幻想をもっとつき崩していきたい。幻想がすごくあるんです。思ったより根強いっていうか。その幻想を叩いてかからないと、「平等」っていても、さっき言った「優しさ」にとりこまれてしまふ。

私の行ってる大学で、今回の問題をきっかけにハあいVっていう女ばかりのグループを作ったんですが、話してみると、みんな自分のからだに不安を持っている。

自分のからだを考える時、特に性については男が判断基準なんですよね。タンポン入ると処女膜が……とかね、みんな男の価値感でしょ。確かに女が自分のからだを知らなさすぎるんだけど、それにけなげに悩んでる。私自身もそうだったけど、「セックス」なんて人前では言えない。好奇心はすごくあるんです。で、現実の問題になってくると不安でたまらない。私は妹と話したりしたけど、女どうしで「アレがね」とか「ナニが……」とか話してるうちに、次第からだのこと、性のことが言えるようになってきて、少しずつ男にも話ができるようになってくる。女どうしで話していけるというのが、男にも話し

ていける第一歩だと思うから、ハあいVも女だけのグループにしたんです。

今は、女どうしでそういうことを話し合う場、自分のからだを自分の個というところから話していく場を通して、自分がとらわれている幻想をつき崩してゆく作業を積み重ねていきたいと思っています。

——改悪反対運動の中からは、具体的に私たちの望む中絶法を作ろうという動きも出ています。

私は、いらないもの、困るものをいったんもっときっちり否定して、女のおかれています現状、男と女の関係性というものを考えていかなないと、「平等」「中絶法」と言われても紋切り型の言葉しか出てこなくて、そこに力が感じられないものになっていくんじゃないかという気がするんです。

方向として中絶法を作っていくこうとすることは必要だと思うけれど、たとえばスウェーデンの場合なんかと比べても、中絶法に至るまでの過程がまったく違うわけですし。私たち自身が、どこから変えていかなきゃいけないのかってことを検討していくことが大切だと思います。だから、まず優生保護法、堕胎罪の撤廃を要求し続けていくつもりです。

(中山紀代子、嶋田ゆかり)

日本の女もやるウ!

'82 優生保護法改悪阻止連絡会 前 田 朋 乃

—阻止連誕生のいきさつと経過をます—

昨年三月十五日、新聞のちょっとした記事が発端でした。その時私は入行動する会Vに入りに入っていました。十年前の騒ぎを知っているメンバーがその記事に敏感に反応し、すぐさまジョキの中に入憲法改悪II優生保護

法改悪に反対する会Vをつくって学習会を続けました。そして、入行動する会Vとハイコールの会Vが共催で「7・17マザーテレサの仮面をかぶったヒトラー」という集会をもったわけです。その結果、八月末には、これはもう女の力を結集して阻止しなくてはヤバイ、となり、阻止連の結成となりました。

その間にも、敵もなおなお盛んという感じで、テレビコマーションナルを流したり、地方議会への請願、署名集め、と動きが活発化。こりや、もうちょっとがんばらなくちゃ、ということで、「11・3産むのは女(わたし)たち、産まないと決めるのも女(わたし)たち」

を開く一方で、十二月地方議会へ向けて請願・署名集めに本格的に取り組みました。それはなぜかという、厚生省が「経済的理由」の削除に向けて欲しがっている国民的コンセンサスとは、地方議会への請願、そして署名の数なんですね。

生長の家など改悪推進派は「生命尊重」という言葉だけで組織的にワーツと署名を集めることができるでしょう。そこで、私たちとしても地域で動いていないと、このまま力で押し切られてしまう、という危機感が高まったわけです。でも、私たちには私たちの「生命尊重論」があって、それを訴えるためには、百万言費やしても足りない……。『胎児は人間じゃないのか』という攻撃に対しても、やっぱ、まず自分たちが産む、産まないを選択するんだ、としっかり言えなきゃいけない。それが今年二月—三月の連続三回の学習会へとつながっていったと思うんですね。

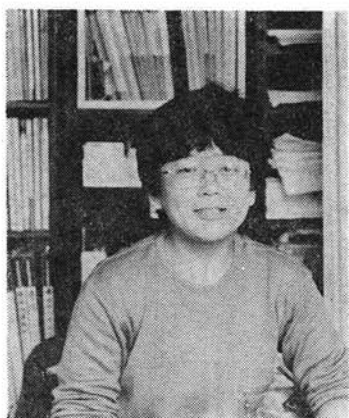
—その学習会の成果がああ全国の集会に表われたと言えと思っていますが。

地方議会への働きかけをはじめ、個別的にみんなのすごくがんばっていたわけですが、一度、きっぱりと、私たち女はこんなに反対しているんだというコンセンサスを、質的にも量的にも結集したような大きな集会をやっておきたい、と準備にかかったのは二月に入ってからでした。準備段階の時間的余裕はなかったけれども、十二日の交流会なんかもうあんなに大勢来てくれて……。

—3・13は、ひさびさにすごく気持ちのいい集会でした。

雨が降らなげえ。つくづくそれが悔しいんですけど(笑)。でもすごかったですよね。女の集会であれだけ大勢の、いろんな立場の、いろんな地域の人たちの報告や発言。やったかいがあった! という手応えを感じました。一番の手応えは、障害者の女の人の「堕胎罪を撤廃しよう」という声が出たことですね、やっぱ。

私たち健常者の女は、優生保護法撤廃、堕胎罪撤廃を唱えるわけだけど、これまで障害者の運動では、優生保護法は問題にするけれども、堕胎罪についてはあまり語られていな



かったと思うんです。十年前にはいわゆる胎児条項ともからんで、健常者の女は健常者の女だけで、障害者は障害者で聞つて、対立する図式ができてしまった。話し合いはあったにはあったけれども、結局は、別々に運動するしかなかったわけですね。発言するの男がほとんどだった……。ところが今度は障害者の女が立ち上がった。

——今回、開く方向が少し近づいた理由は何だと思えますか。

やっぱり七五年の国際婦人年の前後から、女たちがいろんな分野で活動してきた成果というか、その蓄積が如実に出たのかなあ、と思うんだけどね。例えば障害者の女たちが、障害者であることと、そして女であること、

その二重にこうむる差別と取り組もう、という運動の形が出来てきているんです。その意味でも、女の運動が一步前進してきたことを感じさせるんじゃないかな。

それで決議文では、「憲法改悪・優生保護法の改悪を許さない」に「優生保護法・堕胎罪撤廃」をプラスして、それを採択したわけだけれど、ところが、それを今後、どうやって実現していくかということは、フェミニズム全体から考えなくてはいけない。かなり内容の厳しいきつい運動になるだろうとは思うけれど。

でも、一応、具体的に掲げる目標のようなもの、しっかりした方向が出たという点でもやっぱり、いい集会だったと思うんです。もちろん反省点もたくさんありますけれど。

——例えばどういうこと？

短いアピール、アピール、アピールで終わつた感があることとか、特に、障害者の参加への配慮が足りなかったことね。雨の中で車イスは相当、きつかっただろうなあって思うし、トイレはかなり離れていたし……。

——そういうことは私たちみんなの責任なのね。そうやって日常通しているわけだから。で、彼らたちのアピールも、残念ながら聞きとることが

できなかった。でも私たちはやっぱり聞きたかったわけですね。彼女たち自身が語るのはもちろん当然なわけけど、一緒に来ていた人たちがもう一度繰り返してくれるとか……。

うーん。でも基本的にはやっぱり、その人が語る言葉そのものを私たちが聞きとりたいというのがあるんですよ。彼女たちの言葉を聞きとれないということは、日常生活での接点の少なさの表われ、とも言えるんじゃないかな。それとね、今回の集会は、特に障害者だからということで呼びかけたわけではないのね。話し合う機会は何度かあったわけだけど……。

だから私なんか、当日になって障害者の人たちが来てくれて、しかもアピールしたいというので本場にうれしかった。

——「産む、産まないは女の権利」というスローガンに対して、障害者の側から反発があったと聞きましたけれど。

そうですね。その言葉にはすでに、健常者の女という前提があるんじゃないか、つまり障害者の産めない状況を全く無視している、というわけです。それについて私たちは、「産まない自由が奪われた時、産むことの選択はない」と思うし、「産めない女がいるってこと

は、産むことも自由ではない」。つまり障害者であれ健常者であれ、産むこと、産まないことについては、その人自身が選びとれることをね、追求していきたいと思う。だから、こういう気持ちに通じていないとすれば、まだ話し合いが足りないとも思うんです。

——阻止運について、反対運動の広がりと深さについてはどう感じられていますか。

いろんなところから手紙なんかをたくさんもらって思うことは、私も九州のど田舎で育ったからよくわかるんだけど、地域で活動するというのは、すごくしんどいのね。私だったら地域ではなんにもできないと思う。それが、立派にやりとげている、すごいエネルギーをもった女たちがいるのね、全国に。一人でもやっている。がんばればやれるんだなあって、逆にすごく励まされる。彼女たち、日常の感覚の延長で、平和を脅やかすものに対して闘うとか、まやかしの生命尊重論に対しては、自分自身を問い直していくとか、やっぱり何ていうのかなあ、とにかくすごい。これは、日本の女、やるなあ、という感じですよ、ホント（笑い）。

——「中絶したら監獄行き」というビラの文句に対する反応はどうでしたか。

あれは一部に不評を買いました（笑い）。どんな言葉で呼びかけるか、というのはとても難しい。地域や年齢層によっても反応が違ってくるんですよ。私たちとしては通りを歩く人たちが、エッと驚くようなビラを、ということで選んだ言葉です。やっぱり、土地柄に合ったビラを用意できればいいと思うのね。

ここに集まっているものでも、それぞれに地域色があつてね、すごくいいのがあるの。だから今後も、各地域の連絡センターのような機能を維持していきたいとも、話し合っているところなんだけど。

——それは阻止運が今後、目指す姿ですか。

阻止運とは一体どういう組織なんだろうというところが一つにはあるんだけど、まず、東京を中心としたグループであり、自分の主張でやっていきたい。たまたま東京に住んでいるから得られる情報を集めるとか、直接行動に訴えるとか、東京でしかできない部分をやるわけですよ。そして、私たちが入手した情報を知りたければどうぞ、あなたの地域の情報も送って下さい、という形ですね。全国の女たちが連帯してやっていけるように条件づくりをする場に、ここがなれば、と思っているんですけれども。

運動そのものの方向性としては、中絶法案を目指すことになると思うんだけど、私の個人的意見では、阻止運がそれに取り組むのは、まだちょっと無理なんじゃないかな。当面は「改悪阻止」でいいと思う。全く新しく中絶法をつくる会Vみたいなグループが名乗りを上げることも大いにありますけど。

敵はやっぱり巧妙だし、ものすごい力をもった組織だし、今国会こそ上程されなかったけれど改悪の動きは着々と進んでいる。このことを改めて認識して、とにかく改悪派の息の根を止めなくては！夏の選挙では改悪推進派を国会から追い出さなくてはならないし、運動はこれからです。

私は阻止という行動が必ずしも受け身的、保守的なものとは思わないのね。阻止行動を通じて女たちは予想以上の副産物——しぶとさ、パワー、鋭さ等を手に入れたつある。

レーガンの中絶禁止法はアメリカの女たちが阻止した。あれはレーガンの政策にすごい打撃を与えたということ。だから優生保護法「改悪阻止」は、やっぱり中曽根政権に打撃を与えて、私たちの運動が社会を変える大きな力になる。やっぱりがんばらなくちゃ、と思っているところです。（宮前・嶋田）

「障害者」との共闘こそ勝利への道

広島優生保護法改悪阻止連絡会 森川早苗さん

「殺されるかもしれない、という危機感があるのよ」「自分の女としての人生を、自分で選択しながら生きたいし、産まないことを、今は、選びたいと思っているから」「やりたいうことがいっぱいあってね。精一杯、それをやっている今の生活を誰かによって壊されるのはいやだから」

なぜ優生保護法改悪阻止をたたかうのか、との問いに森川さんはこう答えた。

彼女の職業はカウンセラー。あくまでも女性の立場を持つカウンセラーとして、企業に働く女性たちの相談を受けている。そして彼女は、「戦争に反対する広島・女たちの会」のメンバーとして、学習会や集会を主催するほか、会誌『戦争はいけん』を定期発行し、最近では、教科書問題、中谷康子さん自衛官合祀拒否、給食センター問題、優生保護法等をとり上げ、周囲の人々に女としての反戦運動を広めているし、女の図書室と同居（借家

の半分に彼女が住み、半分が、十人ほどの女たちが維持する、女性問題専門の図書室となっている）し、四六時中、女たちに「場」を提供している。

彼女が、今、選んで生きているその生き方が、なんと開かれたものであることか。

*

「男もマンリブをやればいいのよ」

改悪阻止を、なぜ「女の問題」と見るのかとの問いへの答えである。「経済的理由削除は、女にかけられた差別攻撃だと思ふのよ。女は、被差別の主体として、女の運動をつくりあげんといけん。ウーマンリブだって、新左翼運動の中から『これじゃあ女は解放されん』と飛び出した女たちがおこしたわけだし。個々の、今、生活をしている女たちの言葉が、侵略阻止、帝国主義打倒といった言葉に封じ込まれ、女たちの自発的な運動がいわゆる政治運動、革命運動に引きまわされるの

がいやなんよ。男たちは、なぜ女たちが女だけで運動をやったがるのか、その原因をよく考えて、一緒にやりたかったら男もマンリブをやればいいのよ」というわけだ。けれど、名言である。

*

広島連絡会の構成団体は、戦争に反対する広島女たちの会のほか、女からだ自主講座、79女たちから、女性史の会、児童扶養手当を十八歳に引き上げる会、海田主婦読書会、広島女子大学女性解放研究会、優生保護法改悪に反対する女医の会、刑法改悪に反対する百人委員会、婦人民主クラブ、全国障害者解放運動連絡会議広島協議会、デルタ女の会、の十二団体となっている。

参加した、それぞれの団体の熱意があればあるほど、連絡係として、とりまための役をする彼女の荷は重い。

二月の初め、たまたま広島へ出向いた日に連絡会がもたれたので、参加させてもらった。広島青い芝の会との、とても厳しくて重大なやりとりを聞くことができた。

「医療が進むにつれて、或々の存在は奪われていっている」「中絶に、どんな理由があったとしても、それを一つでも黙認すれば、我々



自身が障害者殺しを認めることになる」「我々は堕胎も、避妊も認めない」「優生思想は、合理思想だ。優生思想こそが、子どもを産みたくない原因のすべてである。それ以外に産みたくない理由があれば出して欲しい」と広島青い芝の会のA氏。

森川さん、そして十人あまりの女たちの顔がゆがむ。連絡会で二度、各団体に持ち帰っ

て数度、考えに考え抜き、話し合いに話し合いを重ねた問題なのである。

当日は参加していなかったが、青い芝の会の女性メンバーからは「一〇〇%の避妊は歓迎したい」「年子が続けば精神的にしんどい」「強姦の場合は、産んでも、子どもを見れば思い出すので産みたくない」などの発言があったという。青い芝の会の、男性と女性の間、微妙な違いがみられるのだ。

ボツリボツリと女たちの声が出る。

「避妊さえ優生思想だというのは納得がいかない」「私たちは、産みたくないとさええないのか」「青い芝の会が、私たちに、すべて産めというのも『強制』ではないかしら」「『障害者』の叫びを全力で受け止めても、考え抜いても、どうしても「女の選択権」を引っ込められないのだ。

二時間あまりの討論の結果、広島青い芝の会は、連絡会には参加せず、できるところで共闘してゆこうということになった。

連絡会の、そして森川さんの出した一応の結論はこうである。

「優生思想、『障害者』に対する差別意識が、私たちの中に、まったく皆無であるはずはなく、現実には、『障害児』だから中絶するとい

う女たちがいる以上、『障害者』からのつきつけを、女たちはもちろん、男たちも、健常者はすべて受け止めなければならないだろう。一人一人が、A産むV/A産まないVの内実を問い直すことが、必要だと考える……」

三月十三日、代々木公園に結集した全国の女たち、仲間たちも、それぞれの地域で、自らの優生思想との対決を迫られつつ、女性解放の運動の一つとして、「中絶の権利」を確立しようとしていた。デモの隊列から途中で抜け、博多行き最終の新幹線に乗り込んで、彼女にインタビューしたのだけれど、「森川さんも、広島の人たちも、よく、あれだけ青い芝の会の主張を受け止めたねえ。しんどかったでしょ」と思わず口に出してしまった。

「うーん。もう終いには『知らんわ』という気持ちじゃったけど、一番難しいここを避けて私たちの『中絶の権利』はないし、『障害者』と敵対することは支配者の思うツボだから。——全面的に共闘するところまでいっていないのは残念だけれど」

女たちと「障害者」たちの共闘しか、優生保護法撤廃を成功させる道はないと思う。

森川さんガンバレ！

（森川万智子）

自閉症児者の社会的自立をめざす

千葉県自閉症児者親の会連合会 山田洋子さん

——八菜の花会／とはどんな会ですか。

千葉県の自閉症児親の会に年長児部会というのがありました。その中の三十名ほどが集まって、現在ある施設では十八歳になれば出なければならぬのでそれ以後の処遇をどうするかということなどを話し合い、施設を親の手で作ろうと集まった会です。現在ある施設でも生きてゆくためにはそれなりの指導をしていくけれども、心を重視した指導とか、親の希望どおりの指導ということになるとやはり親が立ち上がらなければいけないのではないかと集まったのです。準備期間も含めて一年半で、今年一月十五日に正式発会になりました。

——高広君が自閉症とわかったのはいつですか。

おかしいなあと思っていたのは一歳半ぐらいで、三歳の時病院の検査ではっきりわかったのです。それで集団生活をしたほうが社会性を身につける上でも言葉の面でもいいだら

うというので、兄弟三人一緒に保育園に通い出したのです。幼稚園では一言のもとにこわられたのですが、保育園では障害児だからといって拒否するのはまちがいで、集団生活の中でびる可能性があるというので仲間としてうけいれてくださったのです。この二年間というのはとても成長しましたし、貴重だったと思っています。

——高広君の現在と将来の設計は？

身辺自立は多少時間がかかってもできると思いますので、いま特に困るということはないのです。ただ社会的自立は難しいのです。自閉症の場合は対人関係にいろいろ問題があるのです。ただ、いま九歳ですので思春期を境にどう変化するかはわからないので、見通しはたてないことにしています。わからないのです。私が施設づくりに参加したのは、単なる収容のための施設では好ましくないとおもったからです。施設の側に協同作業所と



か農園をつくって、大きくなってから働けるようにしたいのです。一般社会で働くということにはつながらないとおもいますが。

——彼の協力度は高いとお聞きしましたが。

うちではちゃん洗いか洗濯をやってくれたり、あとは親の会の活動等も一緒にやっています。父親でも中にはもう全く関係ないよ、って方もいらっしゃるんです。けれど子

どもは母親だけの子でもないわけだし、いくら障害児だからといっても父親がほんとに逃げちゃいけないんですよ。父親が母親を支えてあげない限り、子どもはよくならないんです。

——学校教育等でいま感じてらっしゃることは。

普通学級で障害児が学ぶということは、障害児のためだけではなく普通のお子さんのためにもよいと思います。共に学ぶことがたくさんあると思うのです。たとえば「高ちゃんもがんばっているんだから僕たちもがんばろう」とか、いたわってあげようとか、やさしい気持ちももたえてくれるとおもいます。自然にやさしさとか思いやりをもち、助けあうんだということなどを小さいうちから知っていれば、国際障害者年で、障害者を理解しようとか、いたわりましようなどというキャンペーンなんかもういらなくなると思うんです。同じ障害者といっても、身体障害者の場合は比較的理解されやすいのですが、情緒障害者は理解されにくく、たとえば、電車等に乘ってさわいだりなんかした時、親のしつけが悪いなあという冷たい視線を感じることがよくあるんです。

——周囲にのぞみたいことは？

いろんな問題行動をおこす可能性はあるんですが、そういう時だまって見守ってほしいとおもいますね。いろいろおっしゃってくださる方がいますけれども、親は日々悩んでいるわけですから長い目で見守ってほしいということは多いです。自閉症といってもその子その子によって障害も違うし、対応もいろいろです。

——最後に「命を守る」とはどのようなこととお考えですか？

よく障害児をもったということで自分のなかにこもってしまう方もいるんですけど、それがいけないとおもいます。同じ境遇の人たちと励ましあうことはできるはずですよ。するとものの見方が変わってきて、親子心中のようになにも子どもを殺さなくともよくなるんではないかしら。障害は重いけれども少しはよくなる可能性はあるわけです。心を広く明るくもって。いくら障害児といっても自分だけの子どもではないわけです。社会の中の一員でもあるわけですよ。生産性というものは持たないかもしれないけれど、社会に役立つということはあると思うんですよ。

*

△菜の花会Vでは施設づくりの資金集めと、

一般の方たちに理解の輪を広げる意味もあって、バンティストッキングとハイソックスを販売しています。施設づくりの土地の下見等も着々と行なわれております。

自分たち親が若いうちに、年をとってしまわないうちに、ある程度のお金をだして忙しい思いをしても、とにかく親のエネルギーを結集して施設をつくらうと動き出したのと。ただただ胸うたれる思いでした。一日も早く施設ができるといいですね。

(横山玲子)



のびやかな性を生きるために

塚崎 美和子

——日本の女性は、しばしば自らが女として生まれたことが幸福であったかと問うことがありますが、あなたは女として幸福でしたか。

ええ、もちろんです。私は、自分の人生にとっても満足しています。

私は大へん運がよかったと思いますけれど。自分の望んだ人生を得ました。

私に子どもがなかったことも悔んでいません。しばしば子どもたちとの断絶、敵対、無関心、心配事をもつ母親を多く知っていますから。……もちろん、とてもうまくいっている親子もいます。でも私は自分の子ども以上といっているほどの若い女性たちとの暖かい友情を得ているので幸福です。女として母でないことは不完全だという人もいますが、それは男性のマシズムで、男性については、子どもをもっていないから、たとえばサルトルに子どもがないから人間として不完全だという人はいないでしょう。でも女

性の場合すぐ子どものことがもちだされます。

女性自身の選択で子どもに代わる他のものを選んでよいわけで、それによって満たされた人生をもつこともできると思います。

長い引用になったが、これは、雑誌『潮』（昭和49年8月号）に載せられたボーヴォワールのインタビュー「『愛の同盟』四十五年目の決算」の一部である。

ボーヴォワールはサルトルと結婚も同棲生活もなかったが、女と男の関係であり続けた。私は高校生の頃、結婚しない男女の関係があること、そして、そのために創作活動が続けられていることに新鮮な感動をもって、二人に憧れの気持ちを抱いていた。

妊娠、出産、それに続く育児の期間、誰かの援助や保護がなければ、なかなか乗り切れないのが女性たちの現状である。

その期間の援助・保護という役割を、社会かその子の父親である男たちに女は求めてきたわけで、結果的に産む性であることが、女の男への隷属をひきおこした。

隷属か自立かと女性たちは迷い、ボーヴォワールのように、自立のため、家庭をもつことを拒否し、子どもに代わる他のものを人生の目的に選ぶ能力のある女性たちは、産まないことを肯定的に選択した。

*

私はボーヴォワールに一時、憧れたけれど、彼女のようにすっきりと子どもに代わる他のものを人生の目的にというは

ど、自分自身に対して自信もなければ確信もなかった。いや、むしろ、自分自身の不在感、不安感、霧の中にいるような手応えのなさ、何も見えてこない苛立ちの中で悲鳴をあげていたのが大学卒業前後であった。その頃、私は自分の進む方向を納得のいく形で創り出せないでいた。気持ちの不安定さと同時に、女であることのアイデンティティも揺れていた。

自分の人生の中に結婚をどう位置づけてよいものか悩み、女(産む性)であることで何か引き裂かれていくような感覚にとらわれていたから、縁談とか男性からのプロポーズにはアンビバレントな気持ちで動揺が深まるばかりだった。生物としては確かに生殖年齢を迎えていたけれど、社会的存在として自分の位置が築かれていないことの矛盾はともつらいものだった。

私にとってすべてが危機だった。観念的な思考をぐるぐる重ねては、袋小路の中で泣いていた。感情と理性がこんなにもずれてしまっ、どうしてよいかわからなくなった時、突如、「子どもを産みたい」という想いが突きあげて来た。自分を突破する出口を求めていた私には、子を産む母になるという未知の体験こそが自分の確かな存在感を取り戻す唯一の活路のように思われた。「死」へ向かう意識をなんとかしてでも「生」へ切り替えたかったのだと思う。

子を産めば今の自分が乗り越えられる。生命に支えられて強くなれるという予感。しかし、もちろんまだ学生という状態で、客観的に言って「母」になれる条件はなかったから、自分で自分の中に渦巻く情念を抑えるしかなかった。

妊娠・出産で自己の肉体を媒介にして最も手応えのある充実感を得られるにちがいない。女であることをそのまま生理的に生きる生き方もあるのだ、という思いに支えられて、どうかその時期を乗り切ったから、後に初めて妊娠した時は、自分自身がどんなふうに変化していくか楽しみであった。

*

自立のため子どもを産まないことを選択したボーヴォワールは全くお手本にならず、子どもを産むことを含めて女であることを提示しようとしてくれた森崎和江さんの幾つかの著作に私はすがりつくようにして、自分の心を整理していた。森崎さんの『第三の性』を愛読していた私は「肉体をしぼる苦痛にも似た快楽」「性の自己消費的な自己性愛の高潮」とやらを体験できるのかしらという期待で、わくわくして出産を迎えた。二十四歳。十年前のことである。

しかし、麻酔なしの自然分娩だったので、肉体を切り裂くような陣痛をたっぷり味わうことになった。性の快感は夫と共有できるのに、産みの苦しみは女である私だけが担っていて、とても彼に伝えられるものではないように思った。夫との一体感を求め続けていた私は、一体どこか、私は私自身だと知らされ、ショックだった。

夫の存在が意識から消えて、痛みの中に自己をまかせてしまおうと、不思議なことに痛みが和らいだ。意志の力と関係なく繰り返される子宮の収縮の不思議さ。それは、何ごとも意識のもとにコントロールしたいと思っていた私自身を越えて、「生物」としての私の内なるリズム感であった。自意識

というやつかいなものにとらわれていた私は、この時の感覚のなまなましさを忘れることができない。

分娩室の空気を震わせる大きな産ぶ声をあげて息子が生まれた。産ぶ声とともに赤ん坊の体全体が桜色に染まっていくなを見た時、その生命の美しさ、汚れのなさに、私は文句なく感動した。つい先程まで私と共にあった存在が、一個の生命となってこの世に存在するということの晴れがましさと重さで言葉を失っていた。

しかし、その夜、病室に戻った私を襲ったのは、私が期待した産み終えた充実感や自分を突破したという感激ではなかった。

涙がポロポロ流れて来て、さびしさがあとからあとから押し寄せてきた。何ということでしょう。出産とは子との出会いであるとともに、まぎれもない分離体験だった。自分の中から新しい生命を放つこと、——それは別れの原型なのだと気づいた。

私には陣痛の苦しさと同様、この別れのさびしさも夫と共有できる質のものではないように思えた。恋をし、性の楽しさを知り、夫と共有しあった時間は、私に人間存在のさびしさを忘れさせてくれたのに、その重ねあった性の集積が私を再び孤独に突き戻すとは！

子を産めばきつと輝くような世界が開けてくるだろうと、私は自分の閉塞感をなぐさめていたのに、また、ひとりですべてに立ち向かわねばならないのかしらと、泣けて来た。

その後、私は子育ての中で、子どもからたくさんのおを手渡された。生命の輝きに照らされて、どんなに私は救われたかしのれない。別れの原型としての出産・分離体験があったからこそ、育児の一日一日がかけがえのない日々となったのであろう。

子どもの存在によって見えてきたもの、教えられたものも多い。また私は、子どもによって育てられたとも言える。現在、小四と小一の二児の母になった私は、産める性であったことを心から嬉しく思っている。

自己の選択によって、産まぬことを選び、その代わり専門分野で自己実現をはかることができた、あるいはできる女たちは、生理的に産めば産むことのできる性を抱えていることで、ある種の明かさがあるように思う。

*

福祉総合相談所に勤務していたころ、養子縁組を求める老農婦が訪ねて来た。金沢市の郊外で狭い農地を耕しながら一家を守ってきた彼女は、貧しさとその激しい労働ゆえ何度か流産し、一人も子どもがいなかったという。六十歳を越えたと思われるその老農婦の節くれたった手には、永年の労働の激しさと生活のしみが深く刻み込まれていた。

「どうして養子がいらないのやろ……十七か十八の男の子が欲しい。家を継いでもらいたいや……」と繰り返す彼女を前に、「用紙に登録しておきましたから……。早く養子が決まるといいですね」と答えながら、何の展望も示すことのできない無力さを私はかみしめていた。相談所としては、労働

力として子を求めるとか、老後のために子を求める夫婦には、施設の子を養子にしない方針であった。

体力も衰え、老後の生活を心配しながら、自分たち老夫婦のことをみてくれる跡取りを求めて何度も足を運んでくるその人は、きつと夫からも子を産めない女として責められていたのではないか。夫婦で相談所を訪れたのではなく、いつも彼女ひとりでやって来ていたところから私はそんな風に想像してみたのだが……。

*

病弱である、流産を繰り返す、子宮摘出手術を受けた、貧困のための中絶という手段によって産むことを断念した不幸な性体験によって男たちへの不信を植えつけられ、自己の性を開花させえない女たち。肉体的・精神的障害のため性を生きることを拒否されている女たち……。数えあげれば、無数の女たちが、女の性を充分生きることなく——そのことだけでも充分不幸なのに——そのうえさらに、「女は産んで一人前」という社会的重圧の前で、「石女^{いしにょ}」という屈辱のレッテルをその背にベタリとはられている。

「産む」「産まない」を選択するという自由すらなく、「産めない」という不幸をその女だけがまるで「罪」のようにひっそりと背負って生きている。

ボーヴォワールは「産まない」ことを選択したし、私は「産む」ことを選択した。養子を求めて来た老夫婦は、「産めない」「不幸を生きて来た」「産む」「産まない」「産めない」ことに派生するさまざまな問題は、個々の女が個々に担

うにはあまりに重すぎる。

女たちが長い時間をくぐり抜け蓄積したものをお互いに手渡し合うことで、この状況を少しでも変えてゆきたいと思う。女たちが、のびやかに性を生きるために……。

農村に生きて

五十嵐 愛子

私にとって産むこととは、義父母をはじめ、封建制の色濃く残る一地方の、小さな農村のムラ人たちに対して、私も産めるのよ、と宣言することであった。

男の子が生まれれば、「いやあ、あの家はでかしたの。めでたいのオ」とほめちぎられ、では、女の子はどうであるかと言えば、「あの家、産まれたってさ。女だって」でおわり。

十年ほど前までは純農村だったこのムラに、四年前から私は暮らし始めたが、それ以来、心にひっかかること、カチンとくることを、何度経験したことだろう。

価値観が違ふ、と言ってしまえばそれまでだが、東京で生まれ育った私には、この地方に根強くある価値観は「家」を

守るという、封建制そのものだった。

もうとくに、時代のかたへ去ったものとして、把えていた私の未熟な足元を、大きく揺がすものであった。都会では一見、時代が進んだかに錯覚してしまいがちだが、日本はまだ全然変わっていないのではないか、ということを実感できたのは、発見だった。

*

私は東京のサラリーマン家庭の二女として生まれた。学校を終えてからは、東京都の公務員として区役所に勤務した。社会福祉、社会教育の現場で仕事をした。

職場の雰囲気は、ともに現場Ⅱ区民と直接関わる部署ということもあり、男女の差別や仕事の上下などをほとんど感じることはなかった。ラインと言うよりスタッフ、といった意識が強かった。給料の面においても、一応男女は平等であった。私はこういう大らかな職場環境の中でかなりいい影響を受けた。

「結婚だけが女の人生ではない」と強く思うようになっていた。私と同年代の女性が、マスコミの「結婚適齢期云々……」といった記事に大きく動揺しているのを真近に見て、不思議に思ったりした。

結婚は人生の中の一つの過程であって、それ自体が目的ではないのに。適齢期なんて、人それぞれ皆ちがうのにと。

私は、風通しのいい女と男のつながりを求めている。そしてそのなかで、できることなら、産む性としての女の機能をすべて活かしてみたい、とも思っていた。

公務員生活に疑問がわき、そして、いろいろな人・ものの出合いから、私は区役所を退職した。

無農薬野菜の八百屋をグループで始めていくなかで、また新たな出合いがあった。

*

いま、私は新潟県小千谷市で、夫・Mとともに農業にいらしている。

農業青年Mとの出合いと結婚は、私自身予期しないことであった。が、私は、このMとなら、いろいろな障害にぶつかりながらも、それをなんとか乗り越えていけるのではないのか。お互いに風通しのいい関係を築き上げていけるのではないかと感じたのだった。

Mの両親とはすぐに同居はしないものの、仕事場として、この両親の家に通うという毎日が始まった。

*

五十戸余りのこのムラは、十年ほど前までは純農村地帯であり、ここ数年で兼業農家が増えたとはいえ、意識の面では「家」は継ぐもの、「家」は守るものといった封建制を色濃く持っているところであった。

私は、初めての土地、初めての仕事、初めての人たちに囲まれ、すぐには自分自身の精神の拠りどころといったものを見い出すことが出き得ず、そういうなかで、すぐには子どもを産みたくはなかった。さまざまな初めてのことに慣れる期間として、一年間ぐらいいは、体力的にも精神的にも、それ以上のリスクは背負えないと考えた。Mとも話し合い、この期

間は産まないことと避妊をしよう決めた。

しかし、義父母をはじめ、義姉妹たちやムラの人たちの意識には、結婚即妊娠・出産の図式が大きくあったのだった。

なかなか妊娠の兆候がない私（嫁）を見て、

「愛子さんのお姉さんは結婚して十年近く経つというのに、子どもがいないなんて、淋しいだろうね」

「やっぱり夫婦には子どもがいなくちゃね」

「このムラにも、結婚して三年もたつ○○さんのとこ、まだできないよ。どっちが悪いのかね」

などと、カチンとくるようなことで、茶飲み話に花が咲く始末。

「お姉さんにも子どもができないということは、もしかしたら愛子さんにもできないんじゃないだろうか」

「十姉妹^{じゅうしめい}なんか飼っているから妊娠しないんじゃないか」

これは、義父母、義姉妹の間で、ヒソヒソ話し合われてもいたらしい。

なんとも馬鹿馬鹿しい。人のことを心配してくれるのはありがたいが、どうしてこもプライベートなことにまで、あだこうだと詮索してくるのだろうか。「女は産むもの、子なきは去れ」の思想が今なお根深くあることに直面して、私は何ともやりきれない腹立たしさを覚えた。

*

この土地で一年が過ぎようとした時、私は産もうと思った。避妊しなくても妊娠するかどうかはわからない。が、農繁期を避けて、冬の時期に出産が合うように避妊は中止した。

五月のゴールデンウィークを目前にして、農作業も次第に活気を帯びてきた頃から、悪阻が始まった。朝起きると、空腹のため嘔吐、ごはんの炊けるにおいで嘔吐、車に乗ればガソリンのおいで嘔吐、と、かなりひどいものであった。一週間の入院もしてしまった。

義母やムラのおばあさんたちは、「悪阻がひどいというから、きつと男の子じゃないか。めでたいねえ」とほめるのだが、私はこの言葉にもカチンとくるのだった。

誰も決して、「女の子じゃないかな」とは言わないのだ。女と予想することがいけないこと、という歴然とした現実がここにあった。

私は、女の子を産みたいと思った。めでたくないとされる女の子を産んで、開き直りたかった。

*

ある時、義姉と二人きりで立話する機会があった。「あんた、二人目も女だとわかった時のせつなさ。それに、分娩室から出てきた直後に、おとうさん（夫）がなんて言ったと思う。またあ女かあ。この一言よ。せつなさに追い打ちかけられた感じだね。男だって女だって、陣痛の苦しみは同じだろうにさ」

「私は出産は二回で、もうたくさんと思うんだけど、おとうさん許してくれないのよ。三度目の正直に賭けよう、って言うてさ。待望の男の子が出るかもしれないってさ」

私は、この話を聞いていて、今までそれほど身近に感じているはなかった義姉が、とてもいとおしく感じられた。「女同

士、手を結ぼうよ。がんばろうよ」と肩をたたきなくなったほどだった。

*

私は、病院での出産は避けたいと考えていた。「実家でお産する」というこの土地の風習を建前にして、私は予定日の六週間前にあたる八一年十一月中旬に上京していた。東京立川で、ラマーズ法を取り入れて自然分娩を提唱しているM助産院でぜひ出産したいと考えていた。

夫も出産に立ち会うこと。医者に産ませてもらうのではなく、自分の意思で出産経過に能動的に関わること。そのために、事前に数回にわたって出産の生理や呼吸法を勉強すること。M助産婦さんの提唱する姿勢に、私は自分の出産はこの方法で、と、病院出産した知人友人たちからの話を聞くにつけ読むにつけ、考えは固まっていた。

予定日より早い十二月十二日朝、破水した。夕方から陣痛が始まる。翌日十三日未明ごろから本格的な陣痛。勉強会で習った呼吸法でがんばる。ヒ・ヒ・ヒ・フー、ヒ・ヒ・ヒ・フーが、フ・ウン・フ・ウンに変わり、夫・Mも必死に腰をさすったりして手伝ってくれる。夜明けの遅い初冬十二月の、だんだん東の空が白み始めた午前六時、私は出産した。

*

女の子だった。浅黒い皮膚をして、けっこう力強くフギャーフギャーと声をあげた。全身をふるわせて泣いた。まだへその緒がつながっているその赤ん坊を、ソッと抱き上げた時、私は宇宙を感じた。

それはまさに、神秘的対面だった。そしてM助産婦さんは、手ぎわよく胎盤などの処置に立ち回って下さった。その中で「ああ、これが産む、ということなのか」と、その実感が全身を包んだ。

一人ひとり違う出産のペースを、その妊婦のペースに合わせて、促進剤など注射することなく、最初から最後までつき合ってくれるM助産婦さん。このM助産婦さんへの大きな信頼感。そして、夫も、陣痛の痛みこそ共有しないものの、呼吸法に合わせて背中や腰をさすってくれ、まさに夫婦二人の協同作業。そして、友人や入院している妊婦さんなども立ち合ってくれて、「ガンバッター」などと掛け声もとんで。この出産の雰囲気はベストだと思った。

昔、女は母屋から離れた納屋か、粗末な小屋で、ひとり陣痛に耐え、出産したという。陣痛の大変さは、今も昔もそんなに変わらないと思う。しかし、それをひとりでも耐えるのと、夫・信頼できる助産婦さん・友人知人に囲まれて乗り切るのでは、精神的安心感は比べものにならないだろう。

*

いま、ムラでは第二子のお話に花が咲いている。「愛子さんも早くしたら」の視線が痛いほど注がれている。しかし、いつかの時代のように産めよ増やせよと、国から、周りの人たちからの干渉は絶対に受けたくない。私は自分の人生の中において、産むこと・産まないことを選びとっていける自分でありたいと思う。そして産むというその経過にも、プラスの要素として能動的に関わっていきたいと思っている。

中絶と出産と離婚と

阿部 ひろ江

産むことを決意できなかった頃
性を知り始めた頃の私は、女としての肉体——自分の意思に関わりなく性のたかみへと昇り、忘我の状態で自己を他者に譲り渡してしまう女としての肉体をおぞましい、とさえ思っていた。それは自分の肉体であって自分の肉体ではない、何か見知らぬもののようであった。そして自分の肉体を、まるで自己の精神世界とは切り離されたところにある異質なもののように感じていた。

まして自分のコピーである子どもを持つことなど、薄気味悪くおそろしい罪悪である、としか思えなかった。生を肯定的にとらえることなどできなかった。青年期に誰もがさしかかる生の深淵——自己の存在の意味を問う嵐のまっただ中に私もいたのである。自己と他者の関わりという命題のスタートラインに立ったばかりでもあった。

そんな私が、子どもを産みたい、と思うようになったのはなぜだろう。存在への問いの泥沼でもがき続けた大学生活を

終えて、中学校教師として子どもたちの生と関わり始めた頃からだろうか。それまでの私の観念的な試行錯誤が何の役にも立たないような、子どもたちのすさまじい生の合唱。とても私一人の手には負えないような、大人への過渡期の子どもたちの青いエネルギーに私は圧倒され続け、ついには自己を混乱させてその学校を辞めてしまうことになる。

その後、現在に至るまで養護学校に勤めているが、その間に娘を一人産み、離婚する。娘の父親との出会いは大学の終わり頃だった。その間、何人かの男たちとの出会いと別れがあるが、私の生を生きていく上での伴侶としての出会いには至らなかった。娘の父親・Kとの間では、出産の前に一度、妊娠中絶をしている。やはりKを、生涯の伴侶というようには感じられず、産むことを決意できなかった。

中絶することでも、もしかしたら子どもを産めない体になるかもしれない、という不安を感じながらも、一方では中絶は誰もが経験していることだ、という安易な気持ちもあった。もとより、自分の子宮の中に宿った生命に対する尊敬、愛情や感傷は持ちたくもなかった。受精した瞬間からなぜ生命の尊敬が出てくるのか。いつもは避妊すること、卵子和精子が受精する可能性を奪っているじゃないか、と思ってしまうのである。

とはいえやはり、手術台上上った時の気持ちは、これまで数えきれない女たちが抱いてきたと同じく、なぜ妊娠してしまったのか、なぜ女だけがこんな目に合わなければならぬのか、とやりきれない気持ちであった。そして本来なら女に

とって喜びであるはずの妊娠を呪いたくなるのであった。その後一週間はど続いた下腹痛は、明らかに私が自らの意志で自らの体を傷つけたのだということを、いやというほど思い知らせるものであった。

性についての思い

そんな思いをするぐらいならセックスしなければいいのだろうか。けれど、自己を他者に向かって開きにくい私にとって、性は他者との関わりにおいて突破口になるかもしれないものであった。けれど現在にいたるまで、「性は男との間のコミュニケーション」とは言い切れない思いが私の中にはある。性のたかまりの中で感じる、相手との一体感、融合感が、しよせんは幻想であるのかと、現実の相手との関わりの質に引き戻されるのである。その間のギャップに苦しみ、一時、相手との性的な関わりから遠ざかったこともあった。性的な関わりを持つ男との間の、日常的な関わり、それが培われ、問われ続けることなく、性的な関わりを持つことは空しさを倍増させる。

また性的な関わりにおいて、妊娠という問題は避けて通れない。私が、性を単なるコミュニケーションとしては、求められなくなっていたもう一つの理由はそこにある。生物の雌と雄は種族保存の本能のために自然に呼び合う。人間の女と男が求め合うのもやはり、生物としての自然体のゆえんだろう。もちろんそれだけでなく、社会的に育てられる過程で、個と個として呼び合う部分も大きいと思うが。

性のたかまり、融合の中で行なわれる射精、それに続いて妊娠し、出産する、というのは自然のなりゆきである。だから妊娠を考えないセックスというのは、どうも今の私には割りきれない思いがある。今、妊娠を考えられないとしても、将来妊娠し、出産するという思いにつながって相手との関わりを考えることが、人間としての営みであるように思えてならない。だから今の私にとって避妊することは、社会的な存在としての自分と、自然体としての自分に引きさかれる思いがある。

女としての肉体を持つていることをおぞましいとさえ感じていた私が、産む性であることを喜び（まだそうは言いきれず、引きずっている部分はあるが）、女と男の間の性のやりとりをすばらしいものと感じるようになるまでには、十年余りの年月を要したことになる。それはなぜなのだろう。

幼い頃から性は隠されたものであり、私にとっては遠いところにあるものであった。ところが肉体は嘘をつかない。今思えば、幼いころから私もまた性的な肉体を持っていたのだ、ということをお願い知るいくつかの出来事が脳裏をかすめる。肉体は確実に成熟していったのに対して、精神的な対応は未熟なままに青年期を迎え、突然に性の嵐のただ中に放り出されて混乱を重ねるしかなかったのである。

月ごとに不浄の血を流さねばならぬ女の肉体を不浄のものとして、生理の時には母を神棚へ近づかせなかった祖母に象徴されるように、私にとって女としての肉体や生理は祝福されるべきものではなく、多くの女にとってそうであったよう

に、忌み嫌うべきものであった。頭の中で、女としての生理は子どもを孕み、産むための準備とわかつていても、長い年月の間に産む道具として虐げられ、受けつがれてきた感覚は容易に変わるものではない。今の職場でも生理休暇を取れることにはなっているが、実際には取れる状態ではないし、たとえ取っても嘲笑と侮蔑の対象になるだけである。真の意味の母性保障とは程遠い状態なのだ。

私にとっては性もまた、忌み、隠されたものとして与えられたものだ。心ひかれる異性ととの間の性のやりとりに伴う罪悪感、いまだにぬぐいきれないものがある。その罪悪感はどこからくるのだろうか。がんじがらめになった結婚制度ののっとった性だけが祝福され、それ以外のものは非難され排斥される、というところにも大きい原因はあるだろう。

少女の頃から私にとって、結婚式というのとはとても恥ずかしいものとして映った。ふだん性は隠すべきものであるのに、なぜ結婚する男女だけが大々的に多くの人の前で、これからずっとセックスしていきます、ということを宣言できるのか。制度に守られることによってしか続けていくことのできない性はとても貧しいものだと思う。だからいまだに私は結婚式が恥ずかしい。あの晴れがましさが、とても恥ずかしい。もし私が結婚式で花嫁の座にすわるなら、どんな顔をしたらいいいのか、死んだほうがましだ、とさえ思っていた。これがもしも、ふだんから性をおおらかに受けとめるような土壌があったなら、私の受け取め方もちがっていただろう。

もともと自然に女と男が呼びあい、結びあい、支えあつて

いくのは制度には関係がない。ところが優生保護法改悪の動きにも見られるように、国家が性を管理し、より強く民衆を管理、支配しようとするところでは、自由な男女の結びつきはとてもむずかしい。女も男も小さい頃から、女として、男としての役割を与えられ、結婚幻想を抱きながら大きくなる。そして互いに自立をめざす人間としてではなく、補完し合う関係としての結婚の中で互いのエロスを枯渇させていく。一人の女と一人の男の関わりが、その相互関係の中で閉じてしまふものだとすると、おそれ早かれ行き詰まってしまうだろう。

それぞれ女と男は、それぞれの持つ人間関係の中で長い年月の間に変わっていく。その変わっていく互いのありようを、確かめ合い、相互に関わり合いながら、また受け止め合っていくのだろう。その時、それぞれが互いに開かれた場を持っているなければ、二人の関係がゆき詰まってくるのは目に見えている。ところが現在の結婚制度や意識、風潮の中では、結婚した一組の男女が、それぞれにゆつたりとした人間関係を広げていくのはとてもむずかしい。

結婚、出産、育児

結婚制度と性——それもまた私にとって十年来課題となり続けてきたことであった。娘を身ごもった時、私は講師。二度目の妊娠、ということ、産んでみたい、という気持ち、以前の中絶の経験のおそろしさから、産むことを決意した。しかし経済的な不安と、教師という社会的立場から籍を入れ

ざるをえなかった。日本では未婚の母に対する非難は強い。そしていつもその非難的は女に集中する。それをおそれて、望まぬ中絶を強いられてきた女がどんなにか多いことだろう。結婚後の彼の態度は一変。自由な感覚を持っていたかのように見えた彼もまた、一般的な夫婦の概念をあてはめようとする人だった。

しかし娘を身ごもっている間は、思うように動けないからだちはあっても、日ごとに確実に成長していく命の息吹きに、言い表わせない充実感があつた。そして、生に対してあれだけ否定的であつた自分が、自分以外の生命を宿していることの不思議さに圧倒されそうであつた。けれど彼との関係はあい変わらず進展せず、そして職場もまた、妊婦をゆつたりと受け止めるようなところではなかった。養護学校という特殊性からか、今も職場では流産や切迫流産が相次ぐ。

出産の方法については疑問に思いながらも、まだラマーズ法も一般的でなく、不安もあつて、結局郷里の病院を選んでしまった。これは今でも後悔している。出産が、彼との共同作業にはならず、また、産後は娘とは別室で、思うように授乳することすらできなかった。

女と生まれたからには経験してみたいと思ひ始めていた出産は、私にとって本当に自然のドラマであつた。母体も胎児も出産へと自然に向かい、高まり、共同して一つのドラマを終えた。けれど出産直後は、今まで何か月もの間おなかの中で育ってきたもの——別の命でありながらずっと一緒に行動してきたものが、突然なくなったことの空虚感におそわれ

た。これも母子別室だったせいかもしれない。

それでも母親と子どもとの関わりは否が応でもできてゆく。夜中であらうと昼であらうと否応なく起こされ、子どもが目覚めている間、母親は絶対に眠ることができない、という鉄則を私もまた思い知る。そのような日々の中で「子殺し」や「母子心中」の記事が脳裏をかすめていた。個人の尊厳、などと言つてはいられない。虚無にひたる暇などない。自己の存在のありようや他者との関わりに、悩み苦しんできた私も、我が子を得て初めて、どうしようもなく自分に関わってくる他者の存在を受け取め始める。我が子と関わっていく中で、他の生との関わりも、それまでとは違った生々しさをもつて迫ってくるようになっていった。そして、それまで考え続けてきたこと——自己の生を生き抜くことや、他の生との関わり、社会の中の様々な差別の構造などのもつれた糸が、少しずつとけて再び私の中であつていったのである。

育児休暇中の閉塞感から、共同保育の記事を見て「あごろVの門をたたいたが、フルタイムで仕事を身で、娘が五歳になる今まで、ついに共同保育には取り組むことができなかった。が、離婚したり、ボランティアをやり始めたりする中で、数人で共同生活を始め、AあごろVや地域での活動の場として、また娘の成長にとっても、よりよい人間関係を作つてやることができるだろうと思つている。

私にとって子どもとは何だろうか。やはり自分を乗り超えていってほしい存在であると思う。同性である、ということもあつて、私が悩んだような地点で逡巡することなく、先を

行ってほしいと思う。だからできるだけ娘を抑圧することなく育ててきたつもりではある。けれど子どもはきつと親の思いに関わりなく、自らの生を選んでいくものなのだろう。子どもは親のものではない。いつでも別れる覚悟すらしていなければならぬ、とは思いますが覚悟しきれない部分はある。

障害児の生

私が生命をすばらしいものと思えるようになってきたのは、やはりずっと教師として子どもたちの生命に接してきたからかもしれない。けれど養護学校教師としては複雑な思いがある。もし私自身に障害児が生まれることがわかっていたら、あえて産めるかどうか。産みたい、とは思っても今の私には即答できない。障害者とその家族が置かれている状況は、今の社会の差別的構造の中ではそれだけ厳しい。

優生保護法改悪の動きの中で、推進派の人たちは「生命の尊重」を声高に叫んでいるが、体軀をねじ曲げて緊張している障害児を前にしても、やはり「生命の尊重」を主張するのだろうか。私自身、数年障害児に接してきても、いまだに子どもを前にした時、言うに言われぬ気持ちにおそわれることがある。彼らが生きる喜び、生きる意味は何なのか、と。けれどすぐにそれは、健常者である私の不遜な問いだ、と思いつ返すのだが……。常に誰かの手を借りなければ自分の意思を全うすることができない彼ら。私たちもまた、長い目で見ればそうであるのだが……。生命は老いや死も含めてただそれ

だけですばらしい。そう思わなければ人類が生きている意味はないだろう。

「産まない」選択

田島 由理

「産まない自由が奪われているとき、産むことも自由ではない。産める社会でないとき、産まないことも自由な選択ではない」

ある集会でこのスローガンを聞いたとき、私はひどくたじろいだ。自分では「産まない」選択をしているつもりで、そして、これからもそうしていくつもりではいるのだが……。

*

子どもが欲しい人は産めばいい、養子を迎えればいい、と思っていた。

私は子どもが欲しくないから産まない。

もし避妊に失敗したら……。七対三ぐらいの割合で中絶するだろう。三というのは、その時になってみなければ、わからないという気持ち。

女が結婚し、子どもを産むと「おめでとう」と言われる。「なぜ？」と問われることは決してない。そして、子どもを産まない、必ず「なぜ？」と問われる。

そんなにも女にとって「産む」ということは自然なことなのだろうか。

私と私の両親の関係、それは私がこの世に生まれてきた時から定められていた関係で、彼らをいとおしく思い、彼らの愛情を本当にありがたくは思うのだけれど、私のどこかを縛り、私にはのがれられないもの。

その関係を、今度は私が親となることによって、また、新たに創り出してゆくことのおっくうさ、うつとおしさ、しんどさ。

「子がかすがい」という言葉を聞くとゾツとする。それは、子どもの存在が、あるいは、子どもを育てていくという女と男の行為が、より二人の関係を緊密にするということかも知れないが、それでもやっぱり、子どもがまるで接着剤のようで、手段・物のようで、すつきりしない。

友の出産に立ち会った。生命の誕生は圧倒的なものだった。頭を出したりひっこめたりしながら、その子は、よっこらしよっと出てきて、フギヤーと泣いた。私は、まるで自分が産んだかのように、体中の力がぬけていくのを感じた。

友と彼女のパートナーに、もしものことがあれば、私がこの子を育てよう、と勝手に心に決めた。

しかし、この子を育てることになっても、絶対に「かすがい」だけにはしないゾと、なぜか必死で思っている。

私が選んだ彼と、彼が選んだ私の二人だけで、この関係が続く限り年を重ねていきたいと願う。

子どもとの関係を持たないことによって、私に、そして私たちに見えないことはいっぱいあるかもしれない。

子に学ぶことはたくさんあるという。子を通して、視野が広がり、自分自身が深まっていくともいう。

けれど、私にとっては、子どもは、自分の人生に弁解を与えそうで、怖い。

*

ただ、最初に書いたスローガンを耳にした時、思った。私は「産まない」ことを、自分の意志で自由に選択したと思ってきたが、それは私が、選択できる状況にあったからにすぎなかったのではと。

健康で障害がなく、産もうと思えば産んで自分の手で育てられるんだ、という逃げ込み場所を確保しての選択。

私と同じに子を望まない夫。両親、親戚は遠方で、年に何度か会ったとき「まだ？」と問われるのさえ笑ってごまかせばすむ、気ままな東京での二人暮らし。そんな中で選択。

もし妊娠して、胎児に障害があるとわかって産む、と言い切れない私は「じゃあ、私たちは、本当は生まれてはいけなかった存在なのか」という、障害をもつ人の問いかけに、「そんなつもりじゃない。でも、私の言っていることは、結局そういうことになってしまふの？」と、本当にわからなくなつて、とまどつて、うつむいてしまふ。

昔話と思っていた家制度の軋轢の中で、子どもを、それも

男の子を産むことを強いられている同世代の友の話を聞くと、私は自分の状況の楽さを思い、その楽さに気づかずにしたことに赤面する。

やっぱり私は「産まない」ことを選択しつづけるけれども、「産みたいなら産めばいい、産みたくないければ産まなければいい」と、今、この日本で言い放つことの傲慢さを知った。

産む選択の中で

大原 立

灰色の大きな建物を出ると、あふれる光がワッと押し寄せた。

朝の雨はいつしかあがって、洗われたみどりがひとときわ鮮やかに迫る。

そのみどりをさらにきわだたせているのは、ひとむらのチューリップだ。雲のない空に向かって、紅い頭をすんと差し出す。

つい、さっきまでの、暗い室内と、何というちがいだらう。

かぐわしい四月の風を、深く、深く、私は吸い込んだ。風で心を洗ったかった。

五臓六腑を引きちぎられるような二時間が終わって、からだの中から何かが取り出された次の瞬間、その何かが視野に入った。

思いもかけぬ、太い金属の束だった。

鉗子が鉄か、長い金属の、ほとんど半ばまで、どれも、濃い紅に濡れていた。

痛かったはずだ。くらくらと目の前が霞んだ。

それを私にすすめたのはFだ。

子がほしい、子がほしいと、十年来、よいと聞くすべての手を尽くして、最後に試みたそれ。

痛いよ。それはそれは……。でも、試してみたら……。

かき消すようなやさしい語尾で、それ——、卵管通氣を語った。細い輸卵管に空気を通す。通れば脈はある、と。

痛みは十二分に聞かされて覚悟していた。まだ生まれぬその子のためなら、どんなことでも我慢する、と。

それなのに、心に深い傷を受けたのはなぜだろう。

強制された屈辱的な姿勢。奥深くさし込まれた金属。それは、想像していなかった部分だった。

「こんな思いまでして……」

みどりに包まれて歩きながら、思わず声が出た。

あわてて、あとをのみこんだ。

「これでも出来なかったら、どんなに悲しいだろう……」
不妊治療のあれこれを告げたFの、すこし眉根をよせた表情が浮かんだ。

昼近かった。

あふれる光の中に、日頃は見えないハンドバッグの薄い汚れが浮かぶ。

共働き十年。朝は七時、夕は八時。明るい陽の下を歩くという、こんなまばゆいぜいたくな世界があったのに――。

汚れたバッグのように、気づかずに私も汚れているのだろうか。生きることの悲しみ。女の性の悲しみ。

子を迎えようとする勇気が、どこかでくずれていきそうだ。あの夜、あんなに決意したのに――。

*

十年にわたる避妊を、やめよう、と思ったのは、その年の、最初の夜だった。

思いきってひと言、言いかけたとき、あ、と、夫のことがかぶさった。

同じ日、同じ夜、同じ思いに達していたことを、私たちは、どんなに飲みあつたことか。

それは、生きる方向に舵を向け変えた日でもあつた。

焼夷弾の、火の海をくぐりぬけた同世代の二人は、戦後十

数年、生きることにとまどい続けた。

漂う海の、流木にすがりついたとき、片端に彼がいた。二人が手を結べば生きられる、ということではなかった。二人を浮かせているのは、朽ちかけた浮木であり、海は変わらず、深く、冷たかった。

そんな二人の、どちらにとっても、子どもはまぶしすぎる存在で、願ってはならないことであつた。

働き続けるために避妊をしたのではない。生きる心のない私たちが、どうして新しいいのちを迎え得よう。子どもは、決して、△結果▽として生まれてはならない……。

互いがそれをことばにしたわけではないが、透影板に映し出されたレントゲン写真のように、それは透かし出されて見えた。

避妊の、あのきびしい緊張に、十年、耐え続けられたのは、互いの心の中の、白い影を見ていたからだ、と思う。

それが、産もう、に変わったのは、二人の、手と手の間に横たわっていた浮木が、一年、また一年と、小さくなり、いつか姿を消していたからだろうか。浮木が消えたとき、二人は手を結んでおり、広い海に背を浮かべていたのかもしれない。

*

やめればその日から子が授かる、と思ひ込んでいたのは、怠れば子ができる、という、長い避妊の緊張の裏返しだった

のだろうか。

緊張を一旦解いてみると、せきを切ったように子がほしかった。

安堵のしるしであった月づきのしるしは、落胆のしるしとなった。

そして、あの朝、進んで灰色の建物に入ったのだ。あらゆる苦痛を覚悟しつつ、それでも、と思ったとき、すでに「母」である自分を感じた。

*

原因は結核を病んだ私の側にあるものと、まずは私の側から手を尽くしたのは、「三年子なきは去る」のおきての中に無言のうちに示されている「不妊の理由は女の側に」、の社会通念に毒されていたためであらう。

しかし、あの、激しく苦しい卵管通気の結果は、△白Vと出た。代わって夫が病院に呼び出された。

精子の数が少ないそうだ、と、帰宅した夫は、肩を落としたり告げた。まじわりは月に一度、排卵日だけ、と指示を受けたと。

基礎体温を計る朝が続いた。

水銀柱がきわだって低い値を示した夕、私は、手にあふれるほどの花をかかえて家路を急いだ。少し遅れて帰った夫は、ピンクのリボンが鮮やかなケーキの箱を手渡して言った。

可保に食べさせよう。

いつしか彼も△父Vになっていた。

可保とは、二人の名を一字ずつとってつけた、まだ見ぬ子の名であった。女ならカホ、男ならヨシヤス。

なぜか女の子と思い定めて、二人は、カホと呼び合った。カホは、やさしい子であってほしい。

明るい勇気を持った子でもあってほしい。

その夕、私たちは風呂を立て、身を淨め、神に祈った。

三月、三度、神に祈った二週間後、いつもは下がる基礎体温が上がりっぱなしなのに気づいたとき、私は大声で夫を呼んだ。委節はもう、夏に向かっていた。

年の初め、産もう、と心に定めてから、小さな蠅も、そっと手ですくっては窓外に放っていた。

美しいものを見、いい音を聞く。心はいつもカホと共にあった。

我が身は我が身であって、すでに我が身ではない。やわらかなからだの真芯に、小さな巣をつくる。卵は、どんなふうにかえっていくのか。

基礎体温が予定より三日続けて長く上がった日、私はいそいそと病院を訪れた。

想像妊娠、と医師はあざ笑ったが、私のなかの確信はゆる

がなかった。そして、確信のほうが正しい、とわかるのに二か月はかからなかった。

確信したその日から、毎日、カホに手紙を書いた。外の世界で見えるもの、感じたこと。そして、小さなカホに、いま手ができたろう、足が動いたろう、という思いの数々……。食のすすまない口に、むりして八菜養Vを運んだ。子鳥のくちばしに餌を入れる母鳥に似ている、と、自分をわらいながら。

私たちの周りから、海はいつしか消え、二人は大地にすくくと立っていた。小さなカホの大きな重みが、重石のように私を支えた。

十月十日が経った風の吹き荒れる春の夕べ、カホは呟々の声をあげた。

*

結婚は、多くのものを破壊し、代わりに、思いもかけない何かを運んできたが、子どもは、さらに激しく、すさまじく、私たちの生活を襲った。

夜となく、昼となく、小さないのちは、自分の存在を主張し、私たちは燃える太陽の周りを公転する衛星の一つにすぎなくなつた。

太陽は日ごとにくらんだ。昨日できなかったことが、今日は突然にできる。

愛らしさ、ふしぎさ、悩ましさ……。

海でもない。大地でもない。宇宙をさまよう神秘の思いで、私は我を忘れた。

カホを連れて来てくださった神に、私は、どんなに感謝したことか。

*

それにもかかわらず、みどりの風が吹くたびに、私はなぜか、あの朝を思い出した。

苦痛の記憶は年ごとに薄らいだが、屈辱の思いは消えなかった。

屈辱というのは正確ではない。あのとき、何かが、からだをかきむしったのだ。自然ではない人工の手。冷たい金属。

そして、あれから、私たちのまじわりも変わった。

それは、聖なる行事となり、互いの間の浮木をいつしか消していった、あのやさしさと遠いものに、少しずつ変わっていった。

あのときからコンプレックスが始まった。と、ずっと後になつて夫は話した。

精子が少ないと言われたことが、それはど男の誇りを傷つけるとは知らなかった。男には男の、性の悲しみがある、と、心の深い奥で、その悲しみのいろを感じとるようになったのは、なんと後のことだったろう。

それでも私は、おろかにも思い続けていた。

私たちがカホに与え得る贈り物があるとしたら、それは、
△結果Vとして彼女を得たのではなく△折ってV△待ってV
迎えたのだということだと。

あの数々の手紙を、箱に入れ、リボンをかけて、しまっていた。私たちがどんなに愛しあったか、どんなに浄め合ったか、成人式の日に渡すそれで、彼女は知るだろう。貧しい私たちに、ほかに何の贈り物があるだろう。

そのとき彼女は、生きる勇気を、風に真向かう強さを持ってくれるのではあるまいか。流木とともにたたよった私たちとちがって……。

そうではないのだ、と思い至るまで、また長い年月が経った。

身を浄め、神に折った私たちの心の底にあったのは、生殖としての性は許されるという、根深い社会通念ではなかったのか。

子への祈りに似ていて、それは実は、内なる原罪意識への祈りではなかったのか。

性は、もっと自然で、大らかで、激しくて、吹き荒れる風の△結果として、新しいいのちが誕生するのではないのか。

ハズミで生まれたの？

そうよ。

あなた方が楽しんだ結果なんでしょう。

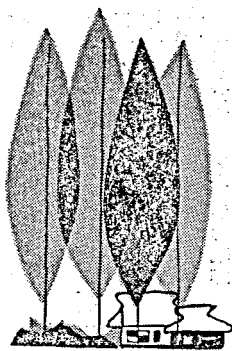
そうですとも。

そんなふうに言うのが、もっと大きな贈りものだったのではないだろうか。

——一人の男と、一人の女が出会って愛し合う。それは、春につばみがふくらむほど自然なことで、だからこそたいせつにしたい。実を結ぶ花もあるし、結べぬ花もある。ついに雄しべに出会えぬ雌しべもあるけれど、それは人間の心にまかせぬことで、どれをよいとも、どれを悪いとも言えない。リボンをかけた手紙の束を渡す代わりに、そんな話をしよう。

しかし、私はついに話さず、手紙を渡すこともなかった。カホは、成人式に着物はいらぬ、出席もしたくない、と言ひ、なぜか向こうから言った。

産んでくださって、ありがたいと思っています。



6月中旬刊行開始

愛と平和に生きてらいてう八五年の軌跡

平塚らいてう

著作集 全7巻

●編集委員 大岡昇平・柳田ひさき・古在由重・
小林登美枝・築添晴生・丸岡秀子・米田佐代子

明治・大正・昭和の三代をつうじて、婦人解放と平和・民主主義のためにささげた、らいてうの心の軌跡、思想の発展過程、主張などを時代の推移のなかでとらえなおす待望の著作集。46判・予価各三〇〇〇円

各巻の内容 ①「青箱」——元始、女性は大陽であった／②母性の主張について／③社会改造に対する婦人の使命／④むしろ性を礼拝せよ／⑤「婦人戦線」に参加して／⑥娘に母の遺産を語る／⑦私は永遠に失望しない



平塚らいてう大月書店蔵

古在由重・小林登美枝著

愛と自立

紫雲・らいてう
百合子を語る

時代に先がけて女性解放の走路を駆けぬけた三人のランナー。その生き方や世に知られざる数々のエピソードを語りあう。
46判・1200円

八木秋子著作集

I 近代の負を背負う女 一三〇〇円

● 女人芸術、婦人戦線を発行していたころの初期論文集

II 夢の落葉を 一八〇〇円

● 木曾での幼年期を綴った回想的創作集

III 異境への往還から 二〇〇〇円

● 満州引揚げから現在までの心境を描く闘いの軌跡

銃後史ノート《女たちの現在を問う会編》

I 非常時の女たち 八五〇円

● 非常時体制の中で女達の在り方を問う

II 日中開戦・総動員体制下の女たち

● 女たちが総動員されていく過程を描く 一二〇〇円

III 紀元二千六百年の女たち

● 紀元二千六百年に対する婦人団体の関り方を描く

高群逸枝論集《加納実紀代・河野信子他著》

● 高群逸枝の戦時下の未公開論文を軸に彼女の思想を問う 一八〇〇円

大逆事件と内山愚童《柏木隆法》

● 大逆事件の被告で唯一の僧侶、内山愚童の思想を描く 二〇〇〇円

明治・大正期自立的労働運動の足跡

● 水沼辰夫著 三〇〇〇円

● 近代労働運動史の一頁を飾る印刷工労働運動史の決定版

現代日本における右傾化の構造

● 《民衆の表現の自由を確立する会編・著》 一四〇〇円

● 現代の右傾化の構造を各ジャンル別に告発する。

JCA出版

東京都千代田区神田神保町1の42 ☎292-0401 振替東京7-147755

優生保護法改悪阻止!

各地での取り組み

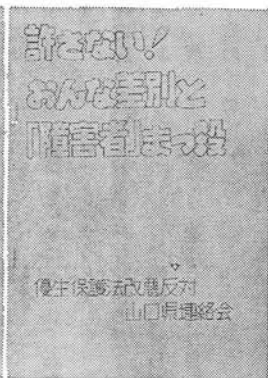
- 北海道優生保護法改悪阻止連絡会
- 優生保護法改悪に反対する三多摩女たちの会
- '82優生保護法改悪阻止連絡会・京都
- 優生保護法改悪反対山口県連絡会
- 優生保護法改悪阻止福岡連絡会
- 優生保護法改悪に反対する佐世保連絡会



〈北海道〉



〈東京・三多摩〉



〈山口県〉

スライドづくりを含め幅広い取り組み

△あこら札幌▽ 細田 英理子

札幌では、△あこら札幌▽その他のグループで署名集めなどの動きは九月頃からありましたが、具体的に反対運動が起きたのは、十一月に北海道阻止連ができてからだと思います。

十月中旬に、Yさんの会（子殺しをしてしまったYさんの問題を自分自身の問題として考え、行動する会）の人から、反安保連講座の中で、保安処分の問題とともに優生保護法の問題をやるので、興味のある人は一緒にやろうという呼びかけがありました。それで私を含めて何人かがそこに集まり、十一月三日に八人権を踏みこじる法改正「正」Vという集会をもちました。そしてその集会出现した人が集まり、北海道優生保護法改悪阻止連絡会をつくりました。集まったメンバーは十二、三人で、学生、主婦、会社員、パート労働者、教師等、さまざまです。男性も一人います。

活動としては、①『反ゆうほ通信』を発行し、今の情勢や私たちの主張を知らせる

②北海道独自の署名用紙（国会と道議会向けの二種類）をつくり署名活動をする ③通信のはかに情宜用ビラもつくり街頭で宣伝する ④北海道各市町村議会（二百十二）の請願状況を調べ、必要な所には資料を送る、などを確認しました。今までに『反ゆうほ通信』は四回発行し、情宜ビラは「中絶はイヤ！だ」けど法の規制はもっとイヤ!!」など二種類つくりました。街頭情宣、署名活動は、地下街で二回しています。

次は集会をしようということになり、一月二十三日△優生保護法「改正」を考える札幌シンポジウムVを開きました。提起者は次の六名です。細木昌子さん（弁護士）は優生保護法、刑法堕胎罪とは何か、一連の法改正「正」の関連等について。菊川寛さん（札幌南病院産婦人科医長）は女性が置かれている現実をふまえて医師の立場から。伊藤みえ子さん（草の実会員）は戦争体験から、銃後の妻や産めよ増やせよキャンペーンは二度とごめんだ！という女の立場から。五十嵐新さん（北星男

子高校教諭）は性教育を二十年実践してきた立場から。古賀清敬さん（白石伝道教会牧師）は生長の家の「生命尊重論」に疑問を持ち、靖国法案に反対するキリスト者の立場から。草山こずえさん（視力障害者）は優生思想について話をされました。それぞれの立場からの話は説得力があり、なかなか熱気のある集会だったと思います。会場には百二十名ほどの人が集まり、席が足りなくなるほどでした。最後には決議文を採択し、厚生省、生政連、各市町村議会に送ることにしました。そのあとはシンポジウムの詳しい報告と私たちの主張、各市町村議会の請願状況やその他の資料をのせたB5判、五十六ページのパンフレットをつくりました。五百冊つくったのですが、とても好評で売りきれちゃいました。（ほしい人は阻止連まで連絡してください。一冊四百円です。）

また3・13全国総決起集会に代表を二人派遣するとともに、札幌でもそれに連動して

「3・13許さない! 女をしるる法改悪」労基法改悪阻止、優生保護法改悪阻止北海道集会」を開きました。これは労基法改悪を阻止する全道婦人連絡会の呼びかけで、阻止連や女性グループ（あごら札幌等）、労組婦人部等、十一の団体が実行委となつて開かれたものです。内容は各団体がアッピールし、意見交換をするという決起集会的なものでした。そのあとと思ひのゼッケンをつけ、風船やプラカードをもちながら、子連れで三キロの道のりをデモしました。

私たちの手のつなぎ方

Ⅲ 多摩女たちの会の場合Ⅲ

立川市の都立社会教育会館が、三多摩各地の女のグループを特集した交流誌を作つたのは、もう一年余りも前のことでした。

個々ばらばらに依頼されたままに原稿を寄せあつた女たちが、その本を通して知りあい、できればお互い同士実物に会つてみたい、何かといつたときに想いを同じくする仲間として声かけあえる関係を創つていきたいということになり。数人の頼まれ世話人が準備会を

次はスライドづくりをしようという話をしています。内容は一九××年、もし優生保護法が改悪されたら……という架空の物語をみせたあと、何が問題となつてゐるかなどを説明していこうというものです。いま脚本づくりをすすめている最中です。何とか四月中に出来ればと思つています。

またこれからはいろいろな問題（優生思想、障害者の問題、避妊、私たちにとつて産むということ等々）についてもっと掘り下げたいこうと、連続討論会も予定しています。

この阻止連が動きはじめてから約半年、運動の輪は少しずつ広がつてきていると思ひます。旭川や帯広にも阻止連ができ、独自の取り組みをしていますし、△あごら札幌▽を含め、いろいろなグループや組織などが、学習会をしたり、動きはじめています。

ひとまず三月の国会上程はさけられました。次の国会に出される見通しは強いとのこと。気を抜かないでがんばつていきたいと思ひます。

△あごら武蔵野▽ 丹羽 雅代

もつて、九月に小さな場を用意しました。名づけて『出あいましょう三多摩の女たち』。ところがその当日は台風の直撃というすさまじいお天気。鉄道やバスが止まるという情報の中、それでもすぶぬれになりながら、五十人ほどの女たちがあちこちからやってきました。とりあえず名簿を作り、自己紹介、と

会を進めながらも、空が気になり、結局予定のパーティーは取りやめて散会しようとした

ところ、何人かの人から、ぜひ続きの会を、という声が出ました。忙しい世話人の何人かは、名簿も出来たし、お互い声もかけあえるようになったのだから、という気持ちを持つたものの、強い希望に押されて一か月後、『出あいましょう三多摩の女たちパートⅡ』がもたれました。

その日の討議の中で、いま一番関心を持っていることを出しあつたところ、優生保護法

改悪の働きという声が多くの人から出てきました。せっかく三多摩のあちこちからいろいろな人が集まってきたのだし、その集まり自体が女のネットワークづくりの一つであって、優生保護法改悪反対の運動等にこそ活用されるべきだということから、早速、第一回の実行委員会が、同日、引き続いて持たれました。△優生保護法改悪に反対する三多摩女たちの会Vの誕生です。

*

私たちがこの会を創り、初めて出会った人も多くいる中で常に大切にしてきたことは二つあります。その第一は、自前の言葉で話すことであり、第二には、地元でやっていくことでした。

昨年三月以来の動きに対し、漠とした不安感はあるても、なかなかその中身が明らかにできず、各グループごと、地域ごとにばつばつ学習会等が始まりかけていたのが、そのころの三多摩でした。第一回の実行委員会で、十一月二十一日に国分寺で「三多摩女たちの集い」を開くことに決めた私たちのそれから、自前で語る言葉を獲得していく過程でした。医者の立場から女の立場から反対を唱えている人の話を聞き、また七〇年ごろの状況

を知り、賛成推進派の人々の主張を読み、お互いの小さな疑問もどんどん出しあう。お互いが背伸びせず、本当に率直な話し合いを重ねました。会にずっと関わって中心的な役割を果たしている何人かの学生たちは、女たちと出会うことがこんなにすがすがしいこととは思わなかったと語っていました。その中から、時間ぎりぎりに、私たちの主張がまとめられました。

—— 私たちに問われていること（主張から）——

女は本当に自分たちで、産む、産まないを選んでいるとはいえません。国家の人口政策に大きく左右され、女個人が産む、産まないを選べる社会では決まっています。ちゃんとした性教育もなされずに育ち、また一〇〇%の避妊法がない現在、望まない妊娠は当然におこります。

産めない状況があるからこそ、女は最後のやむをえない手段として中絶を選ばざるを得ないのです。ギリギリのところでは選べない中絶を、わたしたちは女の基本的人権Ⅱ生存権だと主張します。

出産も中絶も、それを引き受けるのは女です。そして一番しわよせがくるのも女です。

国家は、この女たちの生命Ⅱ生きる権利に真剣に対処しないで、抽象的な胎児の生命尊重の論議にすりかえ、女の「産む」という決定的な力を「有効」に使うとくろんでいます。でも、ひとりひとりの女たちの人生は、国家のためのものではありません。わたしたち女、自分の、かけがえのない人生です。自分の人生の中で、いつ子どもを産むか、または産まないかといったことは、人それぞれの生き方の中で問われる問題です。

わたしたち女は、自分の人生を自分で決めていく力を持ちたいし、また多くの人たちとも対等な付き合いをして、お互いに励ましあひながら生きていきたいのです。そしてまたこれは、女だけの願いではないはずで、男たち・子どもたち・老人たち・障害のある人、すべての共通の願いではないでしょうか。そしてこの願いは、生きとし生けるものすべてが生きやすい社会をつくっていくことによって実現可能なものだと思います。

*

今まで考えてきたように、刑法堕胎罪と優生保護法は、女の産むという性を国家の都合のいいように調整Ⅱ管理するためにセットになった、女を縛る悪法だと考えます。私たちが

は、この墮胎罪と優生保護法を撤廃すべきだと主張します。しかし、今は、この優生保護法改悪の動きを断じて許してはならないのです。三多摩の自治体でも改悪反対決議を出して、反対の声で国会を包囲しようではありませんか。

では最後に、この産む・産まないをめぐる、私たちに問われていることは何なのでしょうか。いくつかあげてみます。

一、子どもを産もうとしたとき、障害のある子どもが産まれる可能性があるということ、を、どのように考えるのか、また産む前に、行政側が用意している羊水チェック、超音波装置での検診などを、受けるのか、受けないのか。

二、「障害」者が子どもを産もうとする時、またそれ以前に地域で生きていくようにする時、私たちがどのように産むことと生きることに関わっていくのか。

三、現在、私たち自身が産むことを選択する前提に、男女の関係をどう考えているのか。婚姻制度にのった結婚による出産だけを選択の基準にしていないだろうか。

人間的な欲求としての性という問題を、婚姻モラルだけで規制していいだろうか

か。そのために婚姻外の性などを認めがたいとして排除する心情を育てているのではないだろうか。

四、自分の性Ⅱ人生を大切にすること、それは、他人の性Ⅱ人生をも大切にすること。その時、他人の性Ⅱ人生と、どう対面できるのか。人との対等なつき合いを、日々の生活の中からどのようにつくっていくべきなのだろうか。

などです。

*

集会の中で、中央への取り組みと同時に、地方議会への請願、陳情等を進めることを提案した私たちは、翌日から早速各市での運動の核となって動き出しました。集会成功で得た力は大きく、初めのピラは二千枚がやっとだったのが、後の情宣のために作ったピラは向こう見ずにも五万枚。しかもそのほとんどを配り切ることができました。流ちょうではなくとも自前の言葉を獲得したことが、その大きな原動力となったと思います。

けれども賛成派の動きは、はるかに上を行っていて、三多摩のほとんどすべて、小さな町村に至るまで賛成意見書を求める陳情等が出されていることがわかりました。驚いた私

たちは、ネットワークをフルに活用し、お互いの地域でのやり方を尊重しつつ、学びあいつつ、反対の芽のない市には友達等を捜して声をかけ、何とかほとんどの地域での対応を組織することができました。学習会やピラまき、労働組合への働きかけ、対議会活動等が進められ、そんな中で十二月議会では三市、三月議会では四市の議会に反対意見書を出せることに成功しました。現在は継続中の二市を除いて他はすべて廃案になっています。

*

一方で厚生省との話し合いや葉書作戦、審議会メンバーへの手紙等、中央へのさまざまな創意をこらした取り組みも進めてきました。

今国会上程がなくなっている、反対運動は、どうしても低調になってきています、それくらい女の問題は目前の火の粉を払うのに必死ということなのかもしれません、私たちの会でも今後の進め方が大きな課題となっています。前出の「私たちに問われていること」が、いよいよクローズアップされてきています。

私たちは今こそ、次にはもっと巧妙に出されてくるであろう優生思想そのものときちんと対決しうだけの力を蓄積できる時と考へ、学習会に取り組んでいます。その内容は、

性教育、母子保健法、刑法改悪、障害者の地域での生活等々、さまざまなものに及んでいます。このつかの間の時間の使い方が、私たちの生と性に大きく関わってくるに違いありません。

この半年余りの女たちのネットワークづくりは、私自身の中にも、数々の貴重な財産をもたらしてくれました。女同士一緒に動くことがこんなにも見事なものだということが、多くの人の中に印象づけられました。女とい

自分の言葉で語る反対運動を

△あこら京都▽ 石川 美智子

昨年から、『あこらミニ』編集に付随する作業に時間を費やし、具体的なテーマをレポートできないままでした。年が明けて新年会と二月例会で、今年の各自の抱負を話していく中で、ようやく焦点がしぼられるといった状態。優保改悪の学習会を、と決まったのは三月例会で、本場に遅々たる歩みぶりです。

去年改悪の動きが出るや否や活動を開始されている方たちからみると、本場に申しわけないような気がします。

さて当日は、まず岩佐さんのレポート。本人が独身である若かりしころ、集会やデモに出かけた七〇年代の改悪の動きと、現在との出され方の違い、運動の展開の仕方等。当時のピラやチラシなどを参考に話す。続いて私が、自分一人で背負わざるを得なかった子育

ての体験からの意見を述べる。本場に人生尊重Vを言うのなら、男たちが子育てを共同作業として具現化しなければ無意味。女が産みを強要されるなら、だきあわせの法を作り、男の子育てを義務づけてほしい旨、しゃべる。最後に稲垣さんが、生長の家の歴史、現状をレポート。日本の最右翼であり、自民党と密なつながりを持つ、信者数二百五十万人以上の宗教団体が、人間の奥深い魂を揺さぶ

り、すっぱりと吸収していく姿をレポート。信仰ゆえの怖さを皆が感じました。大衆を言葉の魔術で操作していく巧みさは学ぶべき点もあります。平易な語り口でスッと受け入れやすい機関誌は、ぎりぎりに抑圧された女たちにとって、手軽で身近な解決の糸口となりやすい。「私たちだって、もし一歩違った歩

みをしていたら、そっちのほうへ行っていたかもしれない」との紙一重の危険性を一同が強く感じ、私たちの手で、女のつながりの場を！という話になりました。

この例会の一週間後、三月二十日、二百人くらいで「反対京都集会」がありました。

△あこら京都▽からは六人参加。特に集まろうと決めていたわけではないのに、各人の自由意志でそれぞれ出てきたわけで、顔を合わせてお互い感激。十三日東京集会の報告、寸劇、歌、これまでの京都の動き等の前置きがあり、メインイベント吉武輝子さんの講演が、たつぷり一時間半続きました。途中で何度も「眠らないで!」「目を開けて!」と、壇上から、よく響くハスキーな声で、ボンボンと言葉を発していました。いま、なぜ優保法改

悪なのか？ その背後にある政治の意味を、

差……。

とても論理的に明確にしゃべってくれました。問題の核心は、個人の権利対国家権力であって、中絶是否論争ではないのだと。「憲法二十四条知ってる人」と言われたが、会場の誰も手を掲げることができません。憲法、と聞いただけで非日常、となってしまう自分の現状を思い知らされました。帰宅後、六法全書を開くと、「家庭生活における個人の尊厳、両性の平等……」と、きちっと書かれています。この基本的平等を、実質的に無化しようとするのが、右翼改憲派のねらいであり、その三種の神器が、家庭基盤充実政策、労基法改悪、優待法改悪。内と外から女を身動きできなくし、右傾化への道を突進するの

たのは、十年前もそうであった「産む・産まないは女の自由」「産む・産まないは女が決める」というスローガンでした。このスローガンから受けるイメージは、女だけが決定権を持ち、胎児をどうにでも好きなように処理する身勝手さのようなもの。誰にとつても、突きつけられると何も言えなくなる人生命の尊厳に對抗するには、相手を納得させ、説得しにくいように思えたのです。隣近所、自分の周囲で訴えていく時、このスローガンではなく、もっと練られたソフトな言葉が必要ではないのか。「産む・産まないは男女の共同作業」としてはどうか、というように話が展開していききました。吉武さんの講演の後では、法律や政治の場と、隣近所や日常生活の場とは区別して、それぞれ違う言葉で戦って

いなくては！ と切実に思うようになりました。政治の場では、当然の「女の権利として」立法化し、生活の場では、この権利の身と重みをじっくりとかみくだき、各自が自分の言葉でしゃべっていくこと。どんな人にも納得してもらえぬ言葉を見い出す努力をし続けていくことが、私たちの仕事だと、今、確信し始めています。

最後に、うれしいニュースがあります。私たちも八あごら京都有志Vとして加わったのですが、二月に婦人民主クラブを中心に、いくつかの団体が連名で、京都市議会へ反対の要望書を出しました。三月十九日、社会党・共産党・公明党三党で検討された意見書を本議会へ提出。二十三日、ついにこの提案が市議会で可決され、政令都市として初めて関係各庁に、意見書が發送されるということになりました。

しなやかに、したたかに手を結ぼう

△はじめに▽

全国各地で野火のように拡がった優生保護法改悪反対運動は、ついに政府案の国会上程

を阻止させることができた。もちろん、自民

党内でこの案をめぐって利害の対立から同一歩調がとれなかったことや、「生命尊重」キ

△山　　▽　志岐　寿美栄

ヤンペーンだけではイデオロギー攻撃として不十分である——との判断など、向こうの側の態勢の不備によるところが多いにせよ、阻

止できたことは運動の一定の成果とみてよいだろう。

八県連絡会の経過報告Ⅴ

連絡会結成に至るまでの県内の情勢については前号(27号)で森川さんが触れているので省くが、各地で点のように存在していた者たちが一つの線で結ばれたのは、11・28「水俣の図」の上映終了後のことだった。

その主なメンバーは、79義務化反対闘争にかかわる教組を中心にしたグループ、韓国の民衆と連帯して闘っている人たち、女の解放を聞いてつづけている女や、共同保育を模索している女たち、福祉労働に携わる労働者、地域で生きることを闘っている「障害者」やキリスト者などなど。女も、男も、「障害者」も子どもも含む多彩な顔ぶれとなっている。

そして12・5「戦争を許さない女たちの集会」終了後、第一回連絡会をひらき、私たちの視点として次の三つを確認した。

一、中絶をしなくてもいいという状況が目に見えてくるような運動、つまり人間の住む社会が究極的に何をめざさなければならぬかを具体的にさがす。

二、「障害者」解放と女性解放、そして労働

者解放を包括するような運動の連携をめざす。そして、それは戦争への道を許さない闘いを意味するものであること。

三、既成の男と女のありようをとらえかえす。婚姻制度・家制度・個と個の出会い・存在・等々……。

さらに具体的活動として、○各地での学習会 ○連絡ニュースの発行 ○ビラの配布

○署名活動 ○県・市町村議会への反対請願の提出と動向の調査(三月議会まで県下ではとんどが継続審議、または双方とり下げになっている) ○既成組織、労組への働きかけ ○反対集会 などをとらきめ、今日までコマの少ない中で何とかやりこなしてきている。

ただ、山口県連絡会のメンバーは全県に散在しているので(下関・厚狭・宇部・小郡・防府・長門)、基本的には各地の主體的取り組みを大切にし、連絡会は、情報交換、具体的活動の相互のり入れ、運動のつき合わせなど、センター的役割を果たしており、会場も西と東をなるべく交互に移すようにしている。

各地域の具体的な例を一、二あげてみると○下関では79養護学校義務化に反対をする運動と結びつけ、子どもたちを能力でふりわけ「障害児」を普通学校からしめ出すことはま

さに優生思想そのものである、との観点から就学時健康診断に反対しようと、父母とピラマキをしたり、労組、各職場内で網の目学習会を企画したり、保健婦さんたちへの働きかけなどを行っている。

○小郡・防府では、水俣の映画の連続上映会と結びつけて人間にとって科学とは、医療とは、優生とは——という問いかけをしている。

このように連絡会は毎回十五―二十人の参加があり(顔ぶれは新しい人、毎度おなじみの人)、金なし、暇なし、組織なし、あるのはこの問題を通して人間にとって解放とは何かを希求するエネルギーのみによってつき動かされている……といった感があり、運動の展開をめぐって時にはシビアな対立もあるし、女―男、「障害者」「健常者」のところで激論もかわされるし、視点三のところでは会のメンバーに幾分かのカップルもいるわけで(私など身近にいる男ともっぱらこのところを日常的にやっている次第で、天皇制を支える戸籍のおかしさを訴え、目下夫婦別姓を実行行使している)、お互いの立場を問われたり、中には、えんやらやつと二時間以上かけて会に参加する人もいるし、乳幼児の世話をしたがらの人もいたりで、まさに一人一人

の熱い思いがこの会を支えているというところだ。

△山口県集会の報告▽

11・28、12・5、20、27、1・15、29、2・11、19と会を重ねる中で、集会に向けて準備をすめた。

// どのような集会にするのか //

// 何をめざそうとするのか //

// 既成の組織との関係をどうするのか //

// 「障害者」解放と婦人解放の運動が対立

しない運動とは何なのか //

// 子どもを産む産まぬは女の権利なのか //

などの問いかけや、

// 労働者階級が改悪を許さないという視点が要る //

// 女が女だけの思いで子どもを産める社会こそ女が解放された社会だと思う //

// 私たちにとつての生命尊重と中絶は矛盾しないのか //

など身を削るような議論が続けられ、一つ一つに充分な結論が出されぬうちに集会の日が近づき、「集会が終わりでではない。集会も一つのステップと考え、これから論議を重ねよう」ということで、基調・集会宣言の内容

を確認し、ビラ、チケット、ポスター、パンフなど、経費節約のためすべて手作りである。ばり（集会後の会計処理は何と黒字になった!!）、2・27「優生保護法改悪反対山口県集会」を小郡町でひらいた。

13時—13時30分 開会行事（あいさつ、歌）

13時30分—13時45分 基調提案

13時45分—15時 講演（宮淑子さん）

質疑・応答

15時—16時 討論

16時—16時30分 閉会行事（集会宣言）

以上の予定で行なつたが実際にはぬい縮めたり、のばしたりで何とか終了時間を守り、約百三十人の参加者を得た。

会全体としては基調と講演内容と討論、集会宣言に一本の幹をなす運びになり得なかつたところに当日の司会をつとめた私の力不足を痛感している。具体的に言えば、討論の内容がもつぱら「障害者」の側から健常者へのつきつけ……私たちの内にある優生思想を撃つ……といった形に終わってしまい、具体的な運動のすめ方、女の解放の問題、労働者総体との討議に深化させきれなかったことなどだ。（広島集会で「よそも同じところだぶつかっているんだなあ……」と感じる場面が

あった）

ともあれ、組織なし、動員なしで多数の参加者を得たことで力づけられたし、県下に連帯の可能性を秘めた人たちの存在がいることをも暗示しており、さらなる運動の拡がりを示しているといえるだろう。

この会の反省会は、3・6広島集会、3・13東京集会、3・27三里塚等々への参加で、会全体としてまだなされて、ないが、4・17で反省と今後の展望についての討議の運びになっている。

△おわりに▽

集会を終え、国会上程を阻止したことで私自身の中で緊張部分がややゆるんでいることは事実であるが、向こうの攻撃はゆるむことなく、しかも着々と水ももたらさぬ態勢で、近いうちにまた改悪をうち出してくるであろう。いちぢこつこのように出したり、引っこめたりをくり返し、こちらの運動の力、量、深さ、幅をみてとつては、我々の運動の間隙をぬってゆさぶりをかけ、人々の中に優生思想を蔓延させ、気がついたら私たち自身が体制を支える側に立たされかねない今の向こうの

やり方にとどこまで人間を愚弄するのか——と怒りで身体中が熱くなる思いがする。

教育現場で働く私は、七七年に上の子を、八二年に下の子を、出産した（八〇年に流産し体をこわしたため、下の子は流産ストレスで産んだ）。

上の子の出産でいかに保育所が不足しており、保育料が高いかを痛感させられたし（県下で乳幼児二人預ければ月八万をこえるのだ）、何より、職場—保育所—組合活動—家、をこなす中で一日が二十四時間しかないことがうらめしく思え、子どもをもつことがうとましく思え、妊娠することが恐怖と変わり、エロスは次第に失なわれていったのだ。そして私が「妻」「母」「嫁」におしこまれ

る中で、私は私の「女」をとじこめるようになった。

安心して産める社会がどこにあるのか。安心して育てられる態勢がどれほど整えられているというのか。

私が私として男と子どもとの関係で生きたられるほど女が解放されているのか。

「障害者」

79義務化——選別

保安処分——隔離・収容

優生保護法——抹殺

女の生と性の制奪

家庭基盤充実政策

労基法改悪

優生保護法

女性と「障害」者が共に生きる社会をめざす

△あこら九州▽ 小野敦子

福岡市では、昨年十一月に優生保護法改悪阻止福岡連絡会が発足しました。会内部では、優生保護法改悪の問題点について討論を重ね、改悪反対のビラまき行動を行ない、また、県・市議会への改悪推進派の「改正」賛成請願に対して、連絡会外の団体・個人と

もに反対請願を提出するなどの活動をしてきました（県・市議会に対する請願は、どちらの議会においても、また、「改正」賛成・反対の双方とも、審議未了による廃案ということになりました）。

そして今年三月十三日、全国各地での優生

このような戦争政策をおしすすめようとする彼らの手口で人が生きたまま、ゆるやかに殺され、また殺させようとすることを私は断じて許さない。

優生思想を撃ち、墮胎罪・優生保護法を撤廃し、女も男も、「障害者」も、子どもも、老人も、のびやかに、生き生きと生きられる社会の実現をめざして闘いたい。それは私の教育現場における能力主義と闘うことであり、79義務化による「障害児」の排除を許さぬこと、女であることを否定する「家制度」との対決を意味する。

全国の、そして海のむこうの、愛すべき仲間たち、点と点を糸で紡ごうではないか、しなやかに、したたかに……。

保護法改悪阻止集会と連動して、「優生保護法改悪に反対する福岡集会」を開きました。当日はあいにくの悪天候でしたが、百名を超す幅広い年代の男女が集まっていたいただきまして、まず木村ケイさん（日本婦人会議）の講演「なぜ今、優生保護法改悪か」、続いて

全体討論を行ない、集会後は雨の中をデモ行進して、優生保護法改悪反対を訴えました。

*

けれども、福岡集会までの過程がとてもスムーズなものだったというわけでは決してありません。特に連絡会内部では、「産む・産まないは女の権利」というスローガンをめぐって激論がたたかわされました。

優生保護法のもとで、「障害」者の産む権



利・生まれてくる権利が奪われてきた状況をとらえきれないまま、あるいは自分自身の中にある優生思想を洗いなおすことのないままに女性には「産まない」と決める「権利」があると言ってしまうと、「障害」者抹殺を正当化したり女性がそのに、手にされることを認めてしまうように誤解されかねない。だから、「産む・産まないは女の権利」というスローガンは使いたくない、という意見と、産むのは女性であるのに、今までずっと、国や社会の、あるいは「家」や男性の都合で、女性には産まされたり堕ろさせられたりしてきた。女性が優生思想にとらわれ、胎児に「障害」があるかもしれない場合に中絶したりするのは、女性の「産む・産まない」ことへの主体性が確立しておらず、子産み道具として、どんな子どもを産むかによって、女性が評価されてきたということが一因だろう。だからこそ、女性の「産む・産まない」ことへの主体性を確立するために、それは「女の権利」であると言いたい。という意見が対立したわけです（結局、前述のスローガンは使われず、「産む・産まないは私たちが決める」ということにはおちつきました）。

後者の意見に立つ者（筆者を含めて）が、

優生保護法の存在自体の問題性、優生思想の差別性・抑圧性を認識していないわけではもちろんありません。けれども、「障害」者の側から、「今まで『障害』者である女性や『障害』児を産んだ母親たちを組織することができないできた女性解放とは何だったのか」という問題提起を受ける時、やはり、これまでの女性解放運動には「障害」者の立場からの視点が不足していたという反省をせざるを得ません。その意味で、福岡集会の司会者が言われた、「七二年・七三年に国会に上程された改悪案を廃案に追い込んで女性の中絶する権利というものは事実上認められているわけけれども、「障害」者の人たちが毎日殺される思想的背景については安閑として見がしてきた。そういう闘いが続いてもよかつたのに、それをこの十年間私たちは運動してこなかった。そのつけが今度に残りました。」ということばが、重く心に残りました。

もともと女性と「障害」者とは、若くて「健常」な男性をモデルとする社会に対し異議申し立てをする者として、共に手をつなぎあっているはずのものです。それなのに、堕胎罪と優生保護法によって女性に「健常」

児を産み育てる「母」であるべきことが強いられるために、両者は対立させられてきたのだと思います。この対立が根本的に解消され

働く女性と手を結び力強い運動を展開

△あこら佐世保△ 内田 佳崇

エンタープライズも去り、佐世保はもとの静けさのなかに息をひそめているようです。

優生保護法改悪反対の動きも、佐世保では国会上程取り下げと同じくして、市議会提出の請願も、市議会解散のため、双方とも「審議未了」となり、燃えさかった炎は次第に下火となっています。

佐世保での第一声は、八二年九月、残念なことに改悪を推進する側の「生命尊重」「十代の性をいけにえにするな」の叫び声、街頭署名で始まりました。

佐世保△あこら△では、厚生省への葉書作戦を細々とやっていた矢先の、この改悪推進側の派手派手しい動きに、なんとか早急に阻止運動をしなければと、出遅れを口惜しい思いでかみしめておりました。

十一月、日本母性保護協会より佐世保市

るよう、女性と「障害」者が共に生きることのできる社会になるよう、今回結び合った仲間たちが、これからは堕胎罪と優生保護法の

議会へ「優生保護法の改正反対について」の請願が提出され、ついで十二月、改悪推進側より「優生保護法改正について」の請願が提出されるに至って、にわかに活発な動きの兆しが見えはじめたのです。

それから三か月遅れて、やっと「優生保護法改悪に反対する女の集い」という第一回学習会を開いたのが十二月二十八日。暮れのあわただしいなかに二十三、四名の女たちが集まり初対面の挨拶を交わしました。

職場もさまざまな働く女たち、教師、会社員、公務員、創造する女の会のグループ、専業主婦たちと、何処かでのつながりを一つの輪にして、「優生保護法って、何？」という素朴な質問者から、取り組み方を急ごうという人たちまでが渾然と集まり、赤い狼煙を上げたのです。

第二回学習会（一月中旬）からは△あこら△佐

廃止にむかって一緒にやっていければ……と考えています。

世保△を代表して私も足を踏み入れました。

前回に出た優生保護法改悪の質問や意見を再検討し、資料による意見交換等をした結果、具体的な行動を起こそうということになり、会の名称も改め「優生保護法改悪に反対する佐世保連絡会」としました。まず行動よりも、まだ学習をという声もなかにはあったのですが、国会上程の時期や三月市議会への取り組みがたが後手になっているので行動を早く、ということになりました。

一月十五日、今後の運動の展開を話し合った結果、優生保護法改悪反対のPRが足りないということで、早速その日ビラ貼りを開始。第三回学習会をもっと多くの人に呼びかけようということで、街頭でのビラ配り。

あいにくの雪模様のせいかな、商店街は人の出足も鈍く、道ゆく人の反応もなく、気持ちだけが焦ってくるのでした。

第三回学習会は、関係者のほか、呼びかけ

に応じて来てくださった方は、わずか十二、三名ほどの少なさでしたが、当時、市議の篠崎年子さん（三月の県議選挙で当選）と市議候補宮本恵美さんを囲んで、市議会への請願書提出にあたっての諸々の対策など活発に話し、やっと軌道に乗った感を深くしました。

△学習会参加者の声より▽

○改悪反対に対して実際に阻止する行動について、早く効果的な方法を考えてほしい。

○学習会も必要だが、改悪案が通過してしまわないうちに、詭弁に屈しないように、我々ももっと綿密に計画をたてなければならぬのでは？

○ピル解禁を推進する運動、避妊教育の徹底化なども阻止の一つに加えては？

○時代錯誤・逆流のこの改悪案を絶対阻止しよう。

○初めて参加してみても、優生保護法を通じ世の動きの恐ろしさを知った。我々女性だけでなく男性にも学習会参加を呼びかけては？

*

一月末日は、市議会提出のための請願書および署名用の文案作成。

二月二十日付で（紹介議員篠崎年子さん）

請願を提出し、署名用紙を片手に飛び回る日が続きました。

働く女性と手を握った心強さはこの署名運動を通じて感じました。各団体へ組織化された太いパイプ、日教組・全電通・合同労組・市職・県職・水道局・港湾労組・国労・動労（主婦の会）・連合婦人会・全九電等への働きかけ。多くの女たちがこうして立ち上げれば、なんとこの強さになるのだろうと、しみじみと思ったものです。

「声なき叫び」の上映を通じて、レイプ少女とは、そして性から、さらに優生保護法改悪の問題など、映画終了の熱気をそのままにして、男も女も熱心に話し合いました。

二月中旬、優生保護法改悪反対を声高らかに街頭での署名呼びかけ。若い男性の関心が高かったのに対して、なぜか未婚女性は素通り、という現象には首をかしげてしまいました。

三月十二日市議会建設衛生委員会において五千四百名の署名を提出し、私と、創造する女の会代表富永貴志子さんが、請願理由の説明にあたり、傍聴席には、二十名近い女たちが一言も聞き漏らすまいと耳と眼を磨き澄まして座を占めていました。

△各委員の主な質問・意見▽

A 戦争の危機？ そんな心配はしないではないよ。法改正は「生命の尊重」ただそれだけだから。あなた方は「産む権利・産まない権利」と言うのでしょが、これは性行為等に歯止めをかけるためですよ。

B 経済的理由が削られても他の理由で中絶は可能でしょう。

C 女性の生理は何歳から何歳ころまでですか？

D 避妊に対する勉強会などを、まずしましたか。

E 生命の尊さから考えると改正されるべきでしょう。

耳を疑うほど安易に考えている議員が多く、そういう議員たちが審議をし、決定してしまうのかと思うと空恐ろしくなってきました。改悪反対派の議員との話で、自民・生長の家関係者・公明・農協関係者と、推進派を指折り教えて、二けた対一けたの割で敗けていることがわかっていると事前に言われて、党派で何事も決定されるのですかと、今さらながら呆れてしまいました。

女たちの意見など真剣に聞く気もなく、ぜんぜん別のところで決められてしまったので

はたまらないと、会が終了後もあちこちから、怒りと溜息混じりの声がかきこえ、やりきれなさが残りました。ほんとうに闘う相手はもっと巨大なものでは、と、改めて思っています。

請願は残念なことに市議解散などで「審議未了」となりました。今、優生保護法改悪阻止に集まった女たちは各々、市議選、県議選

に駆け回る人、また別の問題に取り組む人、病気をした人と様々に散っているようです。「あごらに優生保護法改悪阻止の件で書くのよ、資料や記録見せて」「いいよ。職場のほうに来て」快い声が返ってきます。

今まで一面識もなかった働く女性たちとの出会い、またこれからも起こるであろう女子どもたちを脅かす問題に手を組んでいくた

いと、これを契機に「よろしく」と、手を差し出すのです。

そしていまだに私は、優生保護思想強化も断乎反対だけど、中絶がどんなに悲しくて、つらいものか、肉体も心までも傷つけることを知っている女だからこそ、中絶の自由を守り要求しなければ、と思い、胸の火が消えないでいるのです。

印刷物をつくりたいとき

本を出したいとき

連記・ほん訳・通訳など

が必要なき……



△創造力の銀行VBOCにお問い合わせください。

女性の創造力を登録したBOCには、いろいろな人材がいます。

いわゆるプロフェッショナルな仕事のほか、買い物、ごちそうづくり、るすばん、旅行のプランニングなど、さまざまな能力も預託されています。

あなたご自身の潜在能力の登録も、どうぞ。



創造力の銀行—BOC
バンク・オブ・クリエイティビティ

〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 ☎03-354-3941

つぶせ改悪! 国会上程を許すな!

——連続討論集会から3・13全国総決起集会へ——



'82優生保護法改悪阻止連絡会

昨年の三月以来、優生保護法改悪の動きはまた息を吹きかえしてきた。

十年前の七〇・七二年に改悪案が国会上程されたとき、高まりを見せていた日本のリブ運動は障害者運動としかり手を結んで、改悪案を廃案に追い込んだ。

しかし、墮胎罪、優生保護法そのものの存続は許してしまった。そしてそこを狙って反撃は開始された。「生命の尊重」という、それ自体は誰もが否定できない言葉を盾に、「十代の性」をいけにえに、「中絶許可条件からの経済的条項削除」のみを前面に出すことによって、当然予測される羊水チェックを覆い隠し、改悪の動きは各地方議会での改悪賛成請願という形で巧妙に進められていった。

自分の人生は自分で決定するという女の自立をはばみ、障害をもつ人を「障害者」として切り捨てるこの動きは、人間を効率のみではかり、管理の対象たるモノとしてしかとらえようとはしないものであり、家庭基盤充実政策や憲法改悪の動きなどと一連をなすファシズムへの道であると、各地で女たちは抗議の声をあげた。十年前の、マスコミをにぎわしたあの派手さはなくとも、反対運動はより地道に、全国各地に、さまざまな形態をとりながら広がっていった。徹底した討論は、亀裂を生むこともあった。が、その亀裂はより一層の連帯への道しるべとなるだろう。

'82優生保護法改悪阻止連絡会は八二年八月二十九日結成以来、六十団体を超乎呼びかけ団体とともに、各地の優生保護法を考えるグループと連絡を取りながら、改悪阻止、刑法墮胎罪・優生保護法の撤廃を求めて、署名運動、関係省庁との交渉、東京・山手教会での11・3反対集会、連続討論集会、国会議員への公開質問状、などの活動を行なってきた。

そして反対運動の盛り上がりの中で、改悪案の三月国会上程締切り日と言われた三月十五日に向けて、十三日、東京・代々木公園で3・13優生保護法改悪阻止全国総決起集会を、また前日の十二日には、東京・本郷の真成館で全国交流会を行なった。その一部をここに収録する。

全国から集まった女たちが夜を徹して討論

3・12 全国交流集会

修学旅行生が泊まるような旅館・真成館の玄関に入り、緑色のスリッパにはきかえて薄暗い廊下をバタバタと全体会が開かれる大広間に急ぐ。

翌十三日の総決起集会に参加しようと地方から泊まりがけでやって来た人、仕事を終えて駆けつけた人、グループ参加の人、個人参加の人……、交流を求めて来た二百人を超す参加者で、広く見えた大広間も座る場所がないほど。前や隣りに座りあわせた人と自己紹介をしあい、同じ思いをもって集まった女たちの話ははずむ。

*

せっかく全国から大ぜい集まったのだから一人でも多くの人の発言を、と、討論は分科会に分かれて行なうことになり、全体会では各地の報告やアピールから始められた。

報告によると、各々自分の住んでいる地域で、積極的に署名運動、地方議会への反対請願の提出を行ない、大半の地域で継続審議、

審議未了あるいは賛成請願との相殺という形で廃案に持ち込んでいるとのことであった。大阪連絡会からは、厚生省に対して優生思想を含めて改悪の真意をただす公開質問状を提出した旨の報告があった。

学習会も活発に行なわれている。

「議会への対応に追われて勉強不足だったので、今後は学習会を充実させたい」（徳島連絡会）。

「今回の動きは思想攻撃の意味が強いので、その辺を固めようと思う。性、家族についても話し合いたい。優生保護法自体を知らない人が多いので、堕胎罪と共に一から知る学習会を女医にも参加してもらって行なっていくつもり。いろいろな他の法律や社会の動きとの関連の中で優生保護法を捉えたい」（優生保護法改悪を阻止するゾ！ 京都）。

「自分たちが確信をもって、自分たちで全部語ろう、と生長の家に討論を申し込んだが断わられたので、メンバーが賛成派、反対派に

分かれてパネル討論を行なった。そうすることによって賛成派の意図がよくわかり、行動提起もその場でできるようになった。その後メンバーが各市町村に散って反対請願を提出し、議会に対して、請願を出した人が意見を述べる場を要求した。学習会では各市町村で行なわれており、すでに二十くらいの人へ反対する会Vが組織されている。

上程が阻まれても問題はこれからなので、障害者の声を大事にしながら、連絡会にも積



極的に関わっていききたい」(三多摩女たちの会
また、「産む、産まないは女が決める」と
いうスローガンをめぐって、さまざまな意見
が出された。

「産む産まないは女が決める」というのは、
子宮の摘出すらされる障害者の女を切り捨て
たものではないかという批判もあり、このス
ローガンはおろした。産まない自由、という
のはエリート女性の声ではないのか。まず、
産めない現実がある。その中で産むことのし
んどさ、堕すことさえできない状況での子殺
し、その殺す立場をみすえて、どう闘ってい
くかが発点ではないのか。胎児は何か月か
ら人間なのか、というような問い方自体が問

改悪阻止をかちとった2,000人の熱気

3・13 全国総決起集会

明け方から降り始めた雨は、午後になって
も止む気配をみせず、それどころか雨足はい
っそう激しくなっていた。

広い代々木公園は雨と霧でかすみ、集会開
始の三十分前になっても人かげはまばらだっ
た。集まった人々は、公園内の歩道橋の下で

題だと思ふ。母子手帳にしても、身内に障害
者がいるかどうかというアンケートと引き換
えにもらうんで、母性保護といっても優生思
想を前提にしている」(関西働く女の会大阪
連絡会)。

「改悪は優生保護法の強化であり、劣生抹殺
の優生保護法そのものに絶対反対する。優生
イデオロギーとの対決なしに勝利はない。産
む・産まないは女が決める、というのは胎児、
障害者の抹殺につながる。障害者は産む・産
まないの前に、子宮をとられることもある」
(赤堀裁判・障害者差別と闘うグループ)。
各地からの女たちが、各々の活動や考え、
迷い、反省をそれぞれに語る中で、労組の人

雨を避け、三月とは思えない寒さにふるえな
がら会の始まりを待っていた。

開始予定の一時が近づくにつれ、レインコ
ートやアノラックで身を固めた女たち男たち
が、「優生保護法改悪阻止」のたれ幕をさげ
た宣伝カーを目指して足早に集まり始めた。

たちの活動報告書風の発言が寂しかった。

全体会は時間を延長してもまだ足りず、続
きは各分科会に分かれて時間の許す限り語り
合おうということになった。分科会は、参加者
の希望によって大きく次の四つに分けられ、
小部屋にぎっしり詰めあって深夜まで活発な
討論が続けられた。

①優生思想——障害者差別と女解放
②今後の展望——当面、運動をどう進める
か。

堕胎罪撤廃のあとに望むもの。

③働く女性と優生保護法・労働基準法
④産むこと、産まないことは女にとって何
なのか。

会場のあちこちでは、ずぶ濡れになりながら
ピラまきが行なわれた。前日の交流会で知り
あった新しい友との心強い再会があった。

一時ちょうど、続々とやってくる仲間を迎
えながら、抗議の集会は始まった。

*

司会 優生保護法改悪案は十一日には幸いに提出されませんでした。また、同じ日、共産党の沓脱議員の質問に対して国会答弁の中で林厚生大臣は、反対の聲が盛り上がったということを認めたうえで、今回の改悪については慎重に対処したいという旨の発言をしました。これは、私たちの反対運動が非常に盛り上がったこととの成果と受け取ってよいと思います（拍手）。

しかし、まだ安心できません。十五日に法案提出がなされるかもしれないし、議員立法として出されるかもしれません。私たちの闘いは、まだまだこれからです。今日の闘いをさらなる前進の第一歩として、反対運動をさらに盛り上げていきたいと思います。

今日の集会の成功を皆さんとともに、かちとっていききたいと思います。それでは基調報告を。

基調報告

代々木公園に集まったみなさん、こんにちは。そして今日、おたがいに呼応して集会を開いている全国のみなさん、こんにちは。

昨年三月十五日、参議院予算委員会で村上正邦議員と森下厚生大臣との間で優生保護法

改悪の約束がなされて以来、厚生省は改悪推進派——人生長の家Vの、「経済的理由は、すでに日本の現状にそぐわない」という主張を丸呑みにし、改悪のための準備を着々と進めてきました。

「改正は、国民的コンセンサスを得て」という厚生省に対して、私たちは、優生保護法改悪が男たちによつて政治的に決められた三月十五日の一周忌として、今日、ここ代々木公園に集まり、「改正に反対するコンセンサスが得られている」ことを明らかにします。

今回の優生保護法改悪への第一歩となった昨年三月十五日、人生長の家V村上正邦議員は、「ボクは生まれそこねた子どもです」という詩を朗読、中絶を許可し、胎児の生命尊重がないがしろにされているから「夕張炭坑の爆発、ホテル・ニュージャパンの火災、日航機墜落、無差別殺人、コインロッカー事件、家庭内暴力、などが起きるのだ、と、みごとに空想推理を展開し、産む側の女の「お」の字も出ないやりとりの中で、「優生保護法の人

工妊娠中絶を許可する条項から経済的理由の五文字を削除し、堕胎罪の取り締まりを強化せよ」と、ぶちあげました。

政府との約束を取りつけた（人生長の家Vへ生政連）へ白鳩会へは、金の力と組織力、政治力をフルに動員し、彼らの二大悲願——憲法改正と優生保護法改正の早期実現にむけた運動を今日まで推進してきました。一千万署名運動、地方議会請願運動、全国網の目集会、さらにマスコミや、中学・高校の文化祭にまで介入した改悪運動は、反核の世論や、心やさしき女たちの苦悩をも逆手にとった「生命尊重キャンペーン」とあいまって、まさしく「草の根ファシズム」そのものの拡がりや勢いをもってはびこってきています。彼らは、決して少なくない人々の心をかすめとり、改正署名を増やしていったのです。さらに許せないことに、今回の改悪を選挙の票集めの道具にまで利用しているのです。

一方、「これは女の身体と心に対する攻撃だ」と直感した女たちは、ただちに、改悪反対の運動を開始しました。なかでも、十一月三日、東京で開かれた改悪反対集会には、千人をこえる女たちや男たちが集まり、「戦争への道・憲法改悪への道につながる優生保護法改悪は絶対許さない」「女の人生を、身体を、国の勝手にさせない！」と高らかに宣言を発したのです。

皆さん！厚生省に届けられている地方議会での決議の状況をご存じですか？全国三千数百の市町村のなかで、賛成が九十九、反対が五十、審議中が六百五十件と言われています。確かに改悪推進派の方がいまだ優位に立っていますが、つい二か月前の賛成九十五、反対三十五という数字と比較してみても下さい。私たちのこれまでの運動が、改悪推進派を確実に追いつめていることがはっきりしているではありませんか！

「十年前と比べて女性たちは静かですね。もつとがんばって下さいよ」とうそぶいていた厚生省の役人たちの表情が、日を追ってけわしくなっているのも、私たちの運動の進展をよく表わしています。

もちろん、だからといって運動の力を少しもゆるめることはできません。二月八日に発足した「生命尊重国会議員連盟」をはじめとする改悪推進派の、国会工作やマスコミキャンペーンは、私たちの力をあなどっていたことへの必死の巻き返しであり、これまで以上の取組みの強化となつて、私たちに襲いかかってくることは明らかです。

また、これまで「国民的コンセンサスを得てから……」という立場を前面に出して、あ

たかも公正・中立であるかの態度をとってきた厚生省は、三月八日「もし十一日に閣議提出が間に合わなくとも、予算関連法案ではないので、会期中であればいつでも上程できる」と言明。彼らの本性と本音がいよいよむきだしになってきています。

それは「日本国伝統のあるべき家庭像」を所信表明演説の中ではずかしげもなく語り、改憲と軍事費の突出にむけて、すべての犠牲を私たちに強制しようとする中曽根政権の性格そのものにはかなりません。人生長の家Vにひきずられ、あるいは徹底して利用することを通じて実現しようとする政府・厚生省の改悪の意図は、家庭基盤充実政策、労基法改悪、福祉切り捨てなどをおして国に役立つ女づくりをめざし、優生思想のもとに障害者を抹殺しようとするものです。

私たちは、中絶を余儀なくされている多くの女たちが、その理由に「胎児に障害がある場合」を少なからずあげざるを得ない現実におとし入れられていることを否定しません。厚生省は、「経済的理由の削除」反対という切実な声の中から「障害があった場合にはどうするの！」という声が出ることを、アリ地

獄よろしく待ち望み、女からの要求を理由に、障害者の抹殺を合法化する「胎児条項」を準備しているのです。母子保健法の改悪作業が同時期に進められているということ自体、まさにこのことの受け皿作りにほかならないのです。

私たちは、優生思想がすっかりとはびこっていることに直面しています。一九四一年、戦争突入を前にして成立した国民優生法の精神は今もなお生きており、国内においては「障害者」を劣生とみなし、国外においてはアジアの他民族を劣生とみなして、それぞれの人生をないがしろにする歴史は決して消えないのです。人間に優劣をつける根性そのものを問わなければなりません。

機能ではあっても宿命ではない母性を女に強要することで、女が自ら人生を決定する権利を国家の手でせばめ、女の身体の管理を通じて胎児をも国民として管理していくこと、そして国家が「障害者」に対して産むなと強制し、「健常者」に対し、「健常者」のみを産めと強制することを私たちは許しません。そして、産めない状況のある現在、経済的理由が削除されたら女は危険なヤミ中絶を選

ばされ、その上、墮胎罪に問われることになるのです。

優生保護法改悪案が通るならば、人工妊娠中絶が合法化されるまで、年間何百人という女を牢屋につないだ墮胎罪が、再び刑法墮胎罪として女たちの前に立ちはだかるのです。

しかし、その墮胎罪も当然撤廃すべきものとしてあります。一八八〇年に制定された墮胎罪は、男は「メカケ」を持つことを甲斐性としながら、女は一方的に男の意のままに夫とだけの性交渉をもち、孕んだら産むことを強いるものです。つまり子は家Ⅱ国家のものとされ、号令一下、使いやすい国民をつくることに貢献させられたのです。そして今、狸寝入りをしている墮胎罪は、孕んだ女と、その中絶に手をかした者のみを罰し、相手の男は無罪という実に不平等なものです。

私たちは、男も同罪にすべきだと要求するものではありません。むしろ、中絶の問題は人と人とのむすびつぎの中で個人が責任をとるべきものであり、国家が介入すべきものではないのです。

優生保護法そのものと、墮胎罪そのものが撤廃されなければなりません。

昨年一九八二年、アメリカ版ハ生長の家Ⅴハモラル・マジョリティⅤを後だてに、レーガン大統領が議院に提出した「中絶禁止法」はどうなったでしょう！ 広汎な市民の反対にあい議院でも不成立となりました。

フランスでは女たち男たちの一万人デモにおされて政府が中絶費用の全額負担を決定しました。女たち男たちが、墮胎罪を撤廃し、個人が責任をもつ形での「中絶法」を獲得する大きな流れがあるのです。日本の私たちも合流することで、それはやってできないことではないのです。

みなさん、ハ生長の家Ⅴは三百億円もの資金をこの法改悪のためにつぎこんでいると聞きます。あり余る政治資金と組織力をフルに使う彼らにたちむかい、そのもくろみを打ち破ってゆくのは、「私の人生は、私が決めた」という意志を持った一人一人の力なのです。

今日、ここに集まった女たち、男たち、合流しよう。そして、明日からも……。

司会 国家による性の管理に反対する、優生

思想の強化に反対する、戦争への道につながる憲法改悪に反対する、という私たちの基本的な主張、それと私たちの反対運動は確実に盛り上がりつつあるということ、そのことが今の基調で確認されたと思います。大きな拍手で今の基調を確認して下さい。（大拍手）

それでは続きまして各地から、さらに各個人から今日の集会に対して沢山のメッセージが寄せられています。その代読に入っていきます。

実行委 たくさんのメッセージが集まり、とても全部は読みきれないので、一部を紹介させていただきます。

ハあこら九州Ⅴ国がセックスまで、世話ば焼くとはせからしか（おせっかいね）。墮胎罪を生思想をなきたおそう。九州女も一緒に頑張ぶっちぎり、優るばい。（拍手と笑い声）。

ハ北海道集会参加者一同Ⅴ全国の女たちの力で優生保護法改悪を阻止しよう。東京集会の成功を祈る。許さない、女をしはる法改悪。労基法改悪阻止。優生保護法改悪阻止。（北海道で同時集会開催）

△優生保護法改悪阻止熊本連絡会▽本日の集
会に参加された皆さん、優生保護法改悪阻止
熊本連絡会より連帯のアピールを送ります。

「生命の尊重」を錦の御旗と押し立て、男を
戦場に、女を銃後の守りとしてふたたび家へ
送りこまんとする輩の靴音が響いてきます。

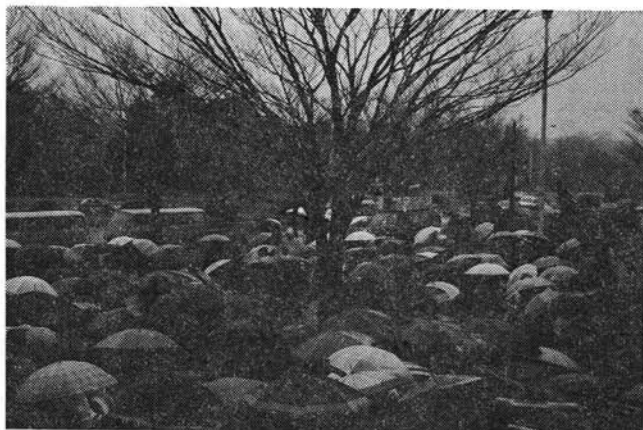
憲法改悪が天皇制、憲法九条、「家」の確立とい
う三点から「見直し」されている今、優生保護
法改悪のねらいは明白です。女を子産みの道
具としてのみとらえ、女が自分の生き方を自
分で選ぶということを許さない世を再びつく
り出そうとしているのです。私たちを取り巻
いている状況は厳しいものです。仕事、環境、
住宅等々、何ひとつとってみても、十分に安
心でき、のびのびと生きていける状況ではあ
りません。そのような中で、産む、産まない
の判断は私たちの最低の基本的人権です。そ
の最低の人権さえも踏みにじり、子を産む、
産まないことを国家の統制下に置こうとする

今回の改悪は、絶対に認めることはできませ
ん。推進論者たちよ、「生命の尊重」を唱え
るなら、戦争のない世の中、障害者や老人や
子どもたちがのびのび生きられる世の中、女
が安心して子を産める世の中を作る努力をま
ずすべきです。生命をもてあそんでいる人

たちから「生命の尊重」などと説教されるの
はまっぴらです。優生思想を前提とした優生
保護法自体のもつ犯罪性を撃っていくととも
に、今回の改悪のねらいを打ち破るために共
にがんばりましょう。

△三菱重工長崎造船労働組合▽心から敬意を
こめて挨拶を送ります。個人の領域―基本的
人権への国家の干渉、統制を許すことはでき
ません。皆さんの果敢な行動に比べて自らの
立ち遅れを恥ずかしく思います。中曽根内閣
打倒を目ざして共に頑張りましょう。集会の
成功を祈ります。

△部落解放同盟 大阪府連合会▽日頃の御活
動に心より敬意を表します。さて、優生保護
法改悪阻止の闘いは正念場を迎えているとこ
ろですが、去る三月五日、部落解放第十三回
大阪婦人集会開催の折、優生保護法について
の学習会をおこない、改悪に反対する特別ア
ピールを採択しましたので送付致します。部
落差別、女性差別という二重の鎖につながれ
た私たち部落婦人の声として、闘いの中に反
映させていただければ幸いです。



司会 たくさんの人がどんどん集まってきて
います。もつと前のほうに来て下さい。前の
ほうにつめて、うしろのほうをあげるように
して下さい。

実行委 各界の多くの方たちからも、続々と

アピールが届いていますので読ませていただきます。まず樋口恵子さんからのメッセージです。

(樋口) 優生保護法改悪派から私は、こんな質問を受けました。「経済的理由で中絶が認められることが、現在の生命軽視につながると思いませんか?」

私は答えました。「身近な歴史の中で生命が一番軽く扱われたのは、あの戦争です。『聖恩重し身は軽し』という軍歌があり、私たち戦時下の少国民は『身を鴻毛の軽きにおく』ということばもたきこまれました。そしてその時代、墮胎罪によって中絶は最もきびしく禁止されていたのです。」

今、優生保護法改悪推進派が錦の御旗として掲げる「生命尊重」。そのことばの前にはいささかたじろぐ女たち。でも、たじろぐ必要はありません。ことばというものは便利なものであり、かつ厄介なものですから、同じことばでも、誰が、いつ、どういう意図で使っているか、常にそのことばのルーツをたどらねばならないと思います。この「生命尊重」のルーツは、憲法九条改正、軍拡、民族繁栄など、まさに戦後を否定するルーツと同じだ

という事実にとどります。これこそ「生命軽視」「人権無視」の戦前への復帰にはなりません。

女の人生を中絶させ、女性を国家の侍女としての性に仕立てる今回の改悪を阻むことは、戦前への道を阻むことです。女性の総力をあげて反対しましょう。

実行委 時間がありませんので、小沢遼子さんからの議会報告や、落合恵子さん、下重暁子さん、河野信子さん、永六輔さん、日高六郎さん、俵朋子さん、黒沼ユリ子さん、なだいなださん、石垣綾子さん、駒尺喜美さん、福本英子さん、藤田敏八さんなど、たくさんの方からの連帯メッセージが届いています。が、全部紹介できなくて残念ですけれども、こういった声を受けて、今日の集会を断固かちとっていきましょう。(拍手)

司会 外国からもメッセージがたくさん届いています。ヤンソン由実子さんに読んでいただきます。

ヤンソン みなさん、こんにちは。雨の中、本当にありがとうございます。外国から

もたくさんの人たちが、私たちのこの集会を支持しています。激励と支持の電報や手紙がたくさん届いていますので、その一部を読ませていただきます。まず最初にスイス。

ハアイリス・フュミニストグループ
アイリスは、優生保護法改悪に反対する三月十三日のあなた方のデモンストレーションに對しこれを強く支持します。

オーストラリアからは三つの電報が入っています。

ハアデレイド・ウィメンズ・リブセンター
三月十三日の決起集会を支持する。中絶は女性の権利である。

ハバース・オーストラリア 現行中絶法廃止連絡会
日本の女性が中絶を選ぶ権利は、国際的な女性の権利の一部である。私たちは日本の女性の闘いを支持します。

ハキャンベラ・ウィメンズセンター
中絶相談サービス(強姦救済センター)と女性の選挙推進を主な仕事とするキャンベラ・ウィメ

ンズセンタ―は、中絶を認める現行の法律を守る運動をするみなさんを支持します。私たちは安全な中絶を女性が行得るのをはばむ、いかなる政治的介入にも反対し、抗議します。

次はスウェーデンからです。

ハフレドリ―カ・ブレイメル会Vフレドリ―カ・ブレイメル会は、男女間の対等の権利と義務を基盤とする男女平等を実現するべく運動している会です。私たちは、中絶の権利を求める日本の女性たちの運動を支持します。健康上の理由と経済的理由は、中絶を受ける十分な理由たりえると私たちは信じます。スウェーデンでは十八週目まで中絶は自由化されています。女性はいまなお子育ての責任を一人で負わされているのですから、産むか、産んだ子を育てられるかどうかを、女性が自分で決める権利を持つのは当然と私たちは考えます。

次は日本にあるインターナショナル・フェミニストグループ、IFJからのメッセージです。

ハIFJV私たちは、日本のインターナショナル・フェミニストは、中絶を認める条件として「経済的理由」を優生保護法から削除する法改正を遺憾に思っています。私たちは子を産むか否か、産むとすれば、いつ、何人産むかを自分で決めるのは、すべての女性の基本的権利だと信じます。それは国家によって決められるべきものではありません。

ここに私たちは優生保護法改悪阻止連絡会を支持し、署名します。

四十五名の署名が続いています。次にイギリスから。地球上の生命を求める女性たちの連絡会からのメッセージです。

ハレオニー・カルデコットV地球の裏側のジスターズ、私たちはあなた方が自分の体のことを決めるのは自分自身であるとして、その権利を保持するために闘っておられるのを支持します。また、いま日本の政治家が法律から「経済的理由」による中絶を削除しようという動きをしているのに、反対運動をしているあなた方を支持します。さまざまな理由をつけて、またさまざまな理論で裏づけしたように見せかけて表面的に偽装してはいま

すが、これらの動きの中に見られる女性蔑視はどの国でも同じです。

なぜ男たちは、女にも自分の行動を決定できるのだと信じていることができないのか。なぜ彼らはこの点で私たちを一人前扱いしないのか。なぜ胎児の命の尊重ばかりが議論され、子を産む女性の命の尊重が議論されないのか。私たち女性は便利な子産みの機械と見なされているのではないか。現在の男性中心の科学が完全な遺伝学技術を開発し、いまの女性の利用法が必要でなくなる時まで、私たちは子産み機械として見なされ使われるのか。もっとも、科学の力で子孫の再生産ができるようになって、その時にはまた新たな女性の活用法が待っているにちがいない。

女性の中絶の権利を認めず、自分勝手な理由から女性を操作しようとしている中絶反対運動派の人々に、私たちは日本の女性を支持する立場から次のことを、日本の女性たちとともに要望する。

世界中でいま女性が行動していること、発言していることに目を開き、耳を傾けてほしい。あなた方が作ったこの世の中に、もっと子を産み出せと我々に強いる前に、あなた方は子どもたちを迎え入れるのに足りる良い世

界を作り上げたかどうか考えてほしい、と、我々は言っているのだ。

我々は、いつも現状がどうであるかばかり指摘していいで、なぜ世の中に悪があふれるのか、その原因を考えてほしいとあなた方に訴えたい。

戦争への準備をやめよ。さもなければ、あなた方が我々に産めと押しつける子どもたちは、鉄砲持ち以外の何になるというのか。自己満足し、威厳に満ちた生活ができることばかりに固執しないで、どんな産業拡張をやめよ。

空気、地球、水を汚染し、何百万人という人間を飢えと希望のない生活に落としてきたのが見えないのか。このままでは、我々の子どもたちは工場にのまれてしまえばかりだ。私たちの中には、子どもを産むことによって回復不可能な損傷を体を受ける女性が多々いる。私たちはとても弱っており、極端に過労しており、非常に貧しいのだ。あなた方のいう理想的な家庭生活のイメージとは虚像にすぎない。

私たちは、子どもたちに生きるだけの価値のある世界を創り始めよ、とあなた方に訴えたい。きれいで、安全で、非暴力で、真にお

もいやりのある世界、機械の価値ではなく、人間の価値を第一に置く世界の実現に向けて働いてほしい。

社会のさまざまな問題を、女性に責任があることがめ、時間とエネルギーを無駄に費やすのはやめよ。我々を家畜のように扱うのをやめよ。私たちは親になるかどうかを選ぶ権利をもつ。そしてその役割を、他の私たちの能力と組み合わせるべきであらう。

日本の女性たちよ、私たちが自分の人生を自分で管理し社会に完全に参加することを喜ばず、再び女性を抑圧しようとする圧力をかける人々に、私たちは、それがどこであらうと決して黙認しないと伝えて欲しい。

私たちは私たち自身であるという尊い自由を手に入れたのだ。私たちはそれを保持するために、共に助け合おう。

司会 続きまして各団体からのアピールを受けていきたいと思います。

日本家族計画連盟 日本家族計画連盟は、すべての子どもが望まれて生まれてくるようにとの願いをもって、長年、家族計画の啓蒙普及に取り組んできました。今回の優生保護法の

改正は、産む・産まないの選択を個人から奪うものであり、家族計画の基本理念からみてもこれを見越ごしにすることはできません。

子どもをいつ、何人産むかは、まったく個人の決定にゆだねられるべきことで、国が介入することはありません。戦後の家族計画運動は、ひとことと言うと中絶との闘いでした。この三十年、中絶届出数は半減しましたが、今、法改正をすれば再びヤミ堕胎がふえ堕胎罪が復活します。

政府がまずやるべきことは、より確実で安全かつ完全な避妊法の開発であり、全人格的な性教育であり、子を安心して生み育てられる環境の整備であります。

家族計画の立場から特に訴えたいことは、避妊法を選択肢をふやし、選択の幅を保障すると同時に、情報サービスを徹底することです。

しかし一方で私たちは、人間が矛盾だけらの存在であり、ことにセックスがいかにコントロールしにくいかを認めなければなりません。宗教や道徳論で善悪を問い、法で規制すれば中絶が防げるというものではないのです。中絶を好ましいと思う女性は一人もおりません。中絶で心身ともに傷つく女性

に対し、安易に中絶を考えすぎると一方的に非難し、生命尊重という美名のもとに、現実を無視したモラルを押しつけることは、卑劣というものであります。

私たちはただ法改正に反対するだけでなく今こそ、産む・産まないの決定は基本的人権であるという点に立って優生保護法を抜本から見直し、真に母性保護をめざした法律を考える時だと思っています。

かつてパール・バックは、家族計画が女性の幸せを開く鍵だと申しました。今日の集会もまた、もう一つの幸せへの鍵になると思います。この鍵を見失なわないよう、これからも息長く闘いを続けていこうではありませんか。

日本婦人会議 皆さん、雨の中ごろうさまです。しかし、私たちの心の中はこの雨にもかかわらず、あの自民党内の右翼的な集団の陰謀を、ひとつ私たちが撤退させたという、そういう晴れやかな思いと、まだまだこれから私たちの運動が始まるのだという熱い思いにかられていると思います。

皆さん、私たちが十一日に厚生大臣に会いました。そして私どもは、生命尊重という、

このまやかしの優生保護法改悪を絶対に女として阻止するということを、そこで交渉いたしましたけれども、厚生大臣もぜったいに自分が大臣の間には改悪しないと申しました。

しかし皆さん、十年前にも本場に多くの女が結集して法案を潰した経験がありますけれども、今回は、さらに多くの女性たちが反軍拡・母性の尊重・人権の確立という運動に発展したことが私たちの大きな結集になったということをお互いに確認しあいたいと思います。

そして今回の上程阻止は本場に初歩的な勝利でございまして、まだ堕胎罪はそのままに存続しております。また、優生思想をそのままにした優生保護法もそのままという状態です。私たちの運動はこれからだと思いますけれども、幸いにして今年は、市町村の議会から国政にいたるまで三十七年ぶりという大きな選挙の年を迎えております。その選挙の中で私たちは、本場に人命を尊重し、母性を尊重し、真の中絶の自由を確立していくような議員を議会に多数送り込んでいく、そういう力に私たち女性も団結していきたいと思えます。そしてこの力をさらにさらに、本場の意味で生命の尊重される民主主義・人権・平

和の政治を確立するための大きな力に結集してまいりましょう。

実行委 今日、なるべくたくさんの方たちに話していただきたいのですが、雨がだんだんひどくなってきましたので、なるべく手短かにお話しただいて、早い時間にデモに移りたいと思います。よろしくお願いします。

それから話していらいっしやる内容に、そうだ、そうだと思っても、今日は傘を持ってらして手がたたけなくて残念だと思っちゃる方多いと思います。そんな方は、どうぞ傘を上げ下げして下さい(笑い)。それから、今お笑いになったみたい、そうだなあと思つたら、その場で声をかけて下さい。反応をそつちとこつちで示しあつて、一体になってこの集会を進めていきましょう。

それでは、アビールを続けていただきます。

戦争への道を許さない女たちの連絡会 一言アビールを申し上げます。私たちは繰り返しこのことを言い続けなければならないと思えます。この「改正」案を出しているところは、八生長の家Vという、戦争中にも活躍して再

びその道を歩もうと画策している団体だといふことです。そしてこの動きが憲法改悪といふことと、常にセットにして出されているといふことです。

「私たちが最も反対しにくい言葉といふことで、『生命の尊重』という言葉を前面に掲げてきています。この卑劣なやり方に私たちはいったいどちらが人間を大切にするのか、生命というものに、一体どちらが真剣に取り組む姿勢があるのかといふことを、人権の闘い憲法を守っていく運動を繰り広げていく中で十分に考え、五角に闘っていきたくと思っています。戦争への道を許さない女たちの連絡会は、五月五日にも憲法の問題を考えると、いふことで、一ツ橋の日本教育会館で女性たちによる大きな集会を開く予定でいます。その時もぜひ、この運動を引き続き、その場でもアピールしていきたくと思っています。運動が下火になると必ずまた、あちらも息を吹きかえしてくると思います。ひとつひとつ叩き潰していかなければならないと思います。今日のこの雨の中での集会を、今後の運動に大きく生かしていきたくと思っています。」

『2 優生保護法改悪阻止連絡会 昨年八月、優

生保護法改悪阻止連絡会が結成されて以来、私たちは三本の柱をもって運動を進めてきました。優生保護という、この文字から見てもわかる人間の質をふり分けるような優生保護法とは何か、いまだに生きている堕胎罪とは何か、そして再び出てきた改悪のねらいは何かといふことで、『優生保護法改悪と闘うために』という小冊子も作りしました。すでにこのパンフは一万五千部を完売しています。十一月には山手教会で一千五百人もの女、男、そして子どもたちによる、優生保護改悪反対の声が盛り上がりました。その後、いち早くこの問題をつきつけていた全国各地の女たちの手によって、学習会が開かれ、そこから闘う女たちの輪が更に広がってきています。今年に入ってから、多くの女たちをさらに横の連帯の輪でつなげるべく、『女が産める状況とは』、『生長の家の言うまやかしの生命尊重論とは何か』そして『今後中絶化への方向に向けて世界の女たちはどう闘っているか』などをテーマに連統計論集を行なってきました。毎回の学習会の中でも、優生保護法改悪は絶対に許さないという、熱い女たちの熱気は盛り上がっています。

・ 今後もこの熱い連帯と熱気を持続して、厚生省が、絶対に改悪案は出しませんというところまで、私たちは頑張りたいと思います。

(歓声・忙しく上下する傘)

司会 外国からそして全国各地からさまざまなアピールが届いています。カナダから届いたメッセージを読みます。

ハバンクバー・ウィメンズ・ヘルス・コレクティブV自分の生殖機能を自分の手でコントロールするために闘っている世界中の女性たちを私たちは支援します。

安全で効果的な避妊法、最後の手段としての中絶、子育てへの助けを私たちは皆必要としています。今日のデモの成功を願って。

それでは続きまして、各地からのアピールに移っていきます。

山口県連絡会 みなさまこんにちは。私たちは、女の性と、障害者の性と生を抹殺することの優生保護法改悪を決して許しません。

私たちは昨年十二月五日に、山口県連絡会を結成しました。山口県では、県議会、十二

の市、四十四の町村議会で、今までのところ、賛成請願が通過したところはありません。

私たちは三つの視点を持ちながら活動を進めています。その一つは、中絶をしなくてもいいという、そういう状況が目に見えるような運動をやらうじゃないか。二つめには、女性解放の運動と障害者解放の運動、そして労働者解放の運動を包括するような運動を目指そうじゃないか。そして三つめは、既成の男と女のありようをとらえ返し、結婚制度や家制度や、そういうものを見直していこうじゃないか、そういうものをやる中で私たちがいきいきと生きていける社会を目指していこうということです。

これからも、できることをすべてやりきって、改悪を阻止し、優生保護法と堕胎罪の撤廃を目指して頑張っていきたいと思っています。

共に頑張ります。

福岡連絡会 3・13大集会にあたり、福岡連絡会より心から連帯の挨拶をおくります。

国会上程を目前にひかえ、もし改悪されたら明日からでも困る、何としてでも阻止しよう、と、福岡でも同じ三月十三日、国会上程阻止、優生保護法改悪に反対する福岡集会を

開いています。

福岡連絡会は、十月十二日の審議会行動をきっかけに発足しました。唯一の婦人県議、大町多喜子さんを中心に緊急の連絡をとりあつて集まった約六十名の婦人団体、障害者団体、労組が足なみを揃えて抵抗し、賛成意見書提出を押しとどめました。

この集会を改悪阻止まで続けていこうと、十一月五日、七団体と個人をもつて発足しました。このあと参加者数もふえ、十二回の連絡会を開いて、情報交流、学習、抗議行動に取り組んできました。

十二月県議会に出された八生長の家Vの賛成請願に抵抗し、三十七団体が二十五通の反対請願を出して闘いました。直接の要請行動、趣旨説明で賛成派を論破したこと、医師会も積極的に反対したこと、三月議会ですいに審議未了、廃案にさせました。圧倒的に保守の多い県議会で賛成決議をさせなかったのは大きな成果です。十二月福岡市議会でも、やはり八生長の家Vの賛成請願が出され、十四団体十四通の反対請願を出して闘いました。市衛生局へも陳情をし、議会で有利な参考意見を引き出させたこともあって、三月議会では審議未了、廃案に持ち込ませることができ

ました。

この間、三回のピラまきをし、ピラの内容をつめながら、なぜ反対運動をするのかの学習を深めました。また、各団体では、大規模、小規模の学習会が数多くもたれ、署名活動、葉書行動も多様に行なわれました。医師会と連携しての学習会も開かれ、好評です。

いま、県知事選をはじめとして、統一地方選の真最中です。私たちの声を本気で反映してくれる議員がどんなに大切かを、この行動の中で学びました。選挙もあわせて、もっともっとと広く、優生保護法改悪がどんなに大変な問題かを訴えていかなければならないと福岡でも張り切っています。

もし今回の改悪が阻止できても、堕胎罪、優生保護法の反人権性はそのまま残ります。息長く、すべての差別をなくすまで、連帯して闘い続けていこうと決意しています。最後まで頑張ります。

広島連絡会 みなさん、こんにちわ。雨の中、大変だと思えます。広島では昨年十月四日に広島県議会で一括採択されていたんですが、そのことを東京からのピラで知りました。それで、議会に問い合わせたところ、審議され

ないままにやられたということで、憤激をも
って抗議したんですけれど……。

市議会に対しても改悪反対の請願書を出し
たり、それと同時に広島的女性たちに呼びか
けて連絡をとりあい、女性のグループ十二団
体、障害者団体を含めて加盟していただいで
広島、呉、尾道と三つの地域で、吉武さんを
呼んで講演会をしたりして、広島地方でこ
ういう大きな集会をしたのは初めてなんです。
その参加者が四百名でした。デモも七十名な
んですが、たくさんの人に集まっていただ
い私たち、すごく感激しています。

十二日、市議会厚生委員会で改正請願が一
つ、改悪請願が五つ出たにもかかわらずで
すね、両方廃案になりました。これからも集
会が集まって、討論しあって、少しでも多
くの女たちと手を結んで、刑法堕胎罪、優
生保護法撤廃まで頑張っていこうと思っ
ています。（雨足激しく）

東京・三多摩女たちの会 今日、はじめて皆
さんとお会いできることを本当にうれしく思
います。

皆さん、この雨は優生保護法推進派の涙雨
です。もともと雨を降らせて、私たちの

笑顔をとり戻そうではありませんか。向こう
が卑劣なやり方でやればやるほど、私たちは
豊かに横のつながりをもって、この優生保護
法改悪反対、刑法堕胎罪撤廃に向けて頑張っ
ていこうではありませんか。三多摩も頑張
ります。皆さん、一緒に頑張りますよ。

司会 今日では全国集会ですので、全国各地か
らたくさんの方が集まっています。全部の団
体からアピールをいただきたいんですが、残
念ながら時間がありません。今の四つの県以



外の参加者を紹介していきます。旭川、札幌、
帯広、仙台、山形、名古屋、長野、福井、大
阪、京都、徳島、これだけの方が集まっ
ています。拍手で確認して下さい。（拍手・
歓声）

今から紫のひもをつけた会場係がカンパ袋
をもって回ります。たくさんの方の支援のカンパ
をお願いします。

では各界からのアピールに移っていきま
す。

小西綾 私は戦前、長い間戦争のために苦し
められてきた人間です。どういう形で苦しめ
られてきたかと言いましたら、美しい言葉を
もつともらしい言葉ではめこまれたんです。
このはめこんだ言葉というのが、「八絃一字」
という言葉でした。今、黛敏郎という人が盛
んに「八絃一字の精神」ということを言うて
おります。この「八絃一字」という言葉がど
ういう意味かということ皆さんご存じでし
ょうか。

私は当時、一生懸命になって辞書をひいて
みました。そうしたら、「八絃」という
のは「地の果てまで」ということです。「一
字」というのは「一軒の家の軒の下に住む」

ということなんです。日本が「八紘一字の精神で聖戦をやる」ということは「地の果てまで、日本の国の軒下に從える」ということだったんです。これがなぜ「聖戦」なんです。これを今、黨さんという人は憲法改正を訴える時に盛んに言うております。そういう下敷の上に立つて中絶反対と言うこともあるんだということを、皆さんにしっかりと考えていただきたいんです。

男の人は女に対しては「美しいバラの花には刺がある」と言いますけれども、男の人の言う美しい「八紘一字」という言葉の陰にはこういう、日本がまた再び戦争して、自分の世界をモノにしようという、アジアをモノにしようというようなたくらみがあって、子どもがたくさんいないと困るから、そういうふうに言うんだということを、どうぞ皆さん、お忘れにならないように。

宮淑子 私は、産む産まないは女が決める権利だと思っておりますが、産まない自由を拡大するならば中絶もその権利の一つだと思います。でも、中絶はやはり、女たちが喜んでやるものではないわけですね。なぜ中絶にいたるか、その状況にこだわり、男と女の関

係性の問題を見つめていきたいと思ひます。

どうして中絶をしなければいけないのか、どうして男に避妊の話さえできないのか、女が避妊のインシアティブを持たないかぎり、いくら避妊が一〇〇％確実のほうに近づいたとしても、中絶の問題はなくなるのではないかないかと思ひます。男が、ある意味で犯す性であり、女が犯される性であるという、そういう性の力関係もくずしていかなければならないのではないのでしょうか。

十代の性もまた同じです。十代の男の子と女の子の関係も、男が犯す性で、女が犯される性のような、大人の性を二重写していつてるわけです。ですからやはり、男と女もですね。完全に対等な関わりをもち、性の関わりをもつ、そういうようなことに私はこだわって、この優生保護法改悪反対を進めていきたいと思ひます。

丸本百合子 聞きとれず（残念でした）

親鸞塾 宗教者の立場から話したいと思ひます。人生長の家Vという宗教団体が「生命の尊重」という名のもとで優生保護法改悪について、激しい運動を展開していますが、同じ

宗教者の立場から彼らの主張には異議があります。

まず第一に宗教上の罪、仏教ではこれを罪業といいますが、それと法律上の罪はあきらかに意味が違います。本来の宗教では罪を国家に裁いてもらうということはあり得ません。（そうだ、そうだと激励）。自らの信仰の内実において、自分自身が背負っていくことによって、結着をつけていくものです。

第二に、宗教は一国家に隸属する守護神ではありません。人間の本来的な解放にむけて民族の利害や国家の思惑を超えて、広く世界の人々と連帯していくものです。

あくまでも仏教的な立場から言いますと、確かに彼らの言うとおり胎児は「いのち」です。女の権利ということで削り落とされていゐるものではありません。男にも女にも国家に、誰にも殺す権利など本来ないものです。

私たちは誰も権利があって中絶するわけではないのです。しかし、やむを得ず、何といわれようが、小さな命はその実質において問引かれ続けてきました。そのことの問題を女として、社会につきつけていかなければならないことは言うまでもありませんが、人間が生きていくことはきれいごとではなく

て、かくも傷だらけなものなのだという事ではないでしょうか（激しく傘が上下）。

仏教では「私ひとり」が生きていくという事は、胎児に限らず、残念ながら、米、麦に至るまで、あらゆる命あるものを殺し続けていくことにはかならないと規定しています。その本来的な罪は、たとえ谷口何某といえどもまねがれることはできません。

信仰というのは、その自己の存在の本来的な罪に目覚め、その罪業を背負って、なお、しっかりと生きる覚悟を決めることです。

△生長の家Vのように、自分自身の本来的な罪をさておいて、「あなたは殺人者です」と自分たちだけが正義の味方になって人を裁き、果ては国家に他人の処罰を願うことなどもつてのほか、宗教としては極めて愚劣なものであるというはかありません。

最近水子供養などというものが大流行していますが、仏教は本来、靈魂の存在など認めておりません。怖いのは死者ではなくて生きた人間です。さしずめ、中曽根総理や村上議員よりも怖い死者などはひとりもおられません。

最近の靈魂はやはり、異常の一語につきます。英霊となって靖国神社に行ってもらう若

者を大量に生産するには、まず靈魂の存在をPRしておかなければならないし、戦争で死ぬ子どもたちをたくさん育てるには水子霊で女たちをおどして、中絶をやめさせなければなりません。

あらゆる宗教を国家の利害のために利用して民衆を操作するという、この体質は今に始まったわけではなく、日本国家成立以来の民衆統治のパターンなのです。ちなみに△生長の家は明治憲法復辟をその悲願としています。私たちが宗教者にとつては優生保護法改悪はまさしく女の靖国問題と言わねばなりません。

いまこそ巷に満ち満ちているインチキ宗教にまどわされることなく、しっかりと目を開いて私たちの自由を守っていかなければなりません。

本当の宗教は人間の自由を侵すものではなくて、守り抜くものです。私たちは仏教者のひとりとして、重たい責任を感じるとともに、しつこく問題にし続けていくことを約してメッセージとします。（大拍手、歓声）

斎藤千代 こんにちは。△あちらVの斎藤です。私は女の運動に関わるひとりとして、今回の改悪の動きが出てきたときに、心から恥

ずかしいと思いました。それは、この十年間私たちは何をしていたんだろうという気持ちです。十年前に阻止を一応成功させたと思つた瞬間から、本当はそこから闘いが始まるべきだったのに、私たちはそこに安住していませんではないか。私たちは今、中絶の自由など決して持つてはいないんです。堕胎罪というものすごい毒を、優生保護法というさらに大きな毒で中和させているのにすぎないのであつて、外国のリブの人たちがかちとつたような中絶の自由化ではないわけです。

この優生保護法は不良な子孫の出生を防止するための、世にも恐ろしい法律だと思ひます。それを廃絶するために、自分は本当に闘ってきたらうかと考えたときに、私は、私自身の闘いが足りなかったと思う。それは、私の中に多分、優生思想があるからだ、本当に恥ずかしい気持ちになります。

みんな、どのお母さんも子どもを塾にやり、良い学校に入れ、良い就職をさせ、良い結婚をさせたいと一生懸命です。でも、そういう自分自身の中の優生思想というものに本当に刃をつきつけることなくして、この闘いは闘いぬけないと思うのです。

ですから改悪阻止では、私はどうしてもな

まぬるいと思うんです。優生保護法そのものの撤廃、強制された堕胎以外の堕胎罪の撤廃、そして私たちが自分の体は自分で管理するということを確立すること、あらゆる優生思想をなくし、強者が弱者を痛めつけることをなくさないかぎり、たとえば横浜の浮浪者殺しのような事件は、今後とも相つくだらうと思います。

雨が降っていますが、私には、これは私たちのこれから長い闘い、苦しい闘いを象徴するもののように思われます。しかし、雨が降ったということは、いつか晴れるということ。青空のある日を信じて一緒に闘いましょう。(拍手、歓声)

司会 続きまして今日の集會に、三里塚闘争を闘いながら女性解放運動を闘っている石毛さんがかけつけてくれましたので、アピールを受けていきます。

石毛 どうも今日はごろうさまです。私たちは、三里塚で十八年間空港反対運動をやってきたんですけど、女の問題に関しては、女性差別を雇用差別だといってもまだまだわかってもらえないくらい、すごく遅れている

んです。

そういう中で優生保護法の問題にしても、私たちはまだ、どういうふうに取り組んでいったらいいか、どういうふうに関わりたいか、どういったらいいか、まだ始めたばかりで、ここでこんな挨拶するのも恥ずかしいんですが、空港反対闘争を本当にやっていこうとするならば、本当に空港をつぶして緑の大地にしようとするならば、他のすべての闘いをしてる人たちとも連帯して、いろんな形の抑圧に対して闘っていかなければならないと思うんです。

それで、女性問題に対してわからないという人には、私が若い女なら、これからしっかりとやって提起をしていかなければならないと思うって、とにかく今日、この集會に来るといことが第一歩だと思って、呼びかけあって若い女が中心になってマイクロバス三台でやってきました。これが本当の初めだと思うんで、これからも皆さんに教えてもらいながらしっかりとやっていかなければならないと思います。

反対同盟は、十八年目の闘いの中ですごく大きな岐路にさしかかっています。闘いのやり方をめぐって、一坪再共有運動をめぐって

中核派と訣別し、塚原事務局長も解任するという事態になってしまいました。けれども、私たちはあくまで反対同盟は一つだと思っているし、闘う農民の心は一つだと思っているので、反対同盟が中心になって自信をもってやっていけば、必ず今は相容れない人でもわかってくれると確信しています。

三里塚に女たちの力をもっと持ち込んで下さい。もっと私たちと一緒に闘ってもらいたいと思います。私たちも遅ればせながら、優生保護法改悪阻止の闘いや、女性差別に対する闘いを考えていかなければならないし、男たちを引っぱっていかないと覚悟しています。よろしく願います。

司会 さきほどの会場カンパは約十五万円集まりました。どうもありがとうございます(拍手)。続きまして障害者の方からアピールを受けていきます。ちょっと壇の上に加えられませんので、下から行ないます。

A(姓名不明) 今、障害者の社会参加と産むという意味で、障害者は生きてはいけなという形がとられているんです。だから社会参加と中絶という意味からみても、これは障害

に移っていきます。

者問題であります。絶対、優生保護法という優生思想……、優生という言葉自体がおかしい。障害者は社会に出て社会の中で、共に生きる社会にしていきたい。社会参加なしに、今のように、施設の中で自由を奪われ……、優生保護という、「優生」の字がおかしいのであって……、「優生」ということばは使ってはいけないと思います。(拍手)

養護学校もなくしてしまいたいと思ってるのに……。養護学校のあるうちは、世界中で平等なんかありえないと思います。だから……、優生保護法改悪を阻止しなければならぬと思います。

長裕子 優生保護法の問題は障害者にとっても、女性にとっても、生きるということから離されると思うから……。本当に考えていかないといけない問題だと思います。生きることを言ったら、女性の立場も障害者の立場も変わらないと思うから、これから、共に頑張っていけたらいいと思います。

司会 阻止連絡会では、国会議員に対して公開質問状を送りましたが、それに対して何通か返事がかえってきていますので、その報告

阻止連 阻止連絡会で全部の国会議員七百五十名に対して、優生保護法改悪に反対か賛成か、優生保護法そのものをどう考えるか、堕胎罪をどう考えるかについて公開質問状を出しました。七百五十人中、現在二百一通返ってきています。まだどんどん返ってきています。そのうち、改悪反対は九五%を占めています。賛成派の議員からは一通も返ってきておりません。つまり、賛成派は恥ずかしくてそんなこと、おもてには言えないんです。

ここで一つ言いたいのは、女の議員からは八〇%返ってきているのに男性の議員からは二五%しか返ってきていないということです。このことからみてもわかるように、男の議員というのは、わかってないんですよ、優生保護法の中身が。

めくっていて思うんですけど、女性議員は本当に少ないんです。七百五十人中で二十五人。たった三%しかいないんです。だからその女の議員たちがいくら声を大きくしても、

国会の中では本当に小さな声なんです。だから国会議員のうち少なくとも半分は女の議員にならないければ、女の本当の声は国会に届か

ないと思います。

これから統一地方選挙、参議院選挙、そしてひょっとしたら衆議院も一緒にダブル選挙をやるかもしれないんですけれども、みんな各地域ごとにそこで出ている議員の優生保護法改悪に賛成か反対かを調べて、賛成派の議員には絶対投票してはいけない。賛成派の議員が勝てば優生保護法改悪はもちろん、憲法改悪、全部つながっていくわけです。ですから私たちは、投票なんかくだらないと言ってるんじゃないくて、絶対に優生保護法改悪派を勝たせてはならないと思います。詳しい資料は阻止連にありますので、各個人名でも、問い合わせ下さい。

司会 続きまして国会議員からのメッセージです。土井たか子さん、金子みづさん、田中寿美子さん、粕谷照美さん、渡部通子さん、中山千夏さんから届いています。全部を読むわけにはいきませんので、中山千夏さんからのメッセージを読みます。

(中山) 優生保護法の改悪は、女の肉体と権利に大きな打撃を与えるものです。生命尊重とはむしろ逆の結果をまねく愚策です。これ

を強行する理由は、政治的な策略以外にないでしょう。私たちは、この政治の暴走をしつかりくい止めなければなりません。力を合わせましょう。

次に八日から厚生省前で頑張ってハンストを続けています学生の方からアピールを受けていきます。

学生の会 集会に集まった皆さん、私たち優生保護法改悪を阻止する学生の会は、厚生省に三月八日、今国会に上程をするなという申し入れにいきました。私たちは阻止連と共にこの交渉を行ないましたが、会場に入った三十人、そして外で見守る百人の女性たちの圧倒的な抗議の声にもかかわらず、厚生省は今国会に向けて上程するよう努力するという、全くナンセンスな言葉をもう一度繰り返すだけでした。

私たちは、そういうことでは全く納得がいかないということで、八日から十三日まで厚生省前においてハンガーストライキを決行しました。八日から十三日まで百二十時間、八人によるリレーによって最後までハンガーストライキを貫徹しました。八人のハンガース

トライカーは、すべてこのように元気で、最後まで闘いぬぎました。(拍手)

私たちの闘いは全国の女性たちから圧倒的な支持を受けました。ハンストをしている厚生省のテントには、全国から電報が届き、そしてテレビで見たといつてびっくりなしにカンパ、支援物資を持ってきてくれました。私たち、支援者を含めて、一度も食事の買物などいかに済むほど、食べ物がいっぱいのハンガーストライキの小屋でした(笑い)。

テントを中心に私たちは、数寄屋橋や、そのほか厚生省のある官庁街で毎日のように情宣を行ないましたが、「頑張ってネ」とか「テレビで見ました」などと激励を受けました。私たちの小屋が一つの、反対する女性たちの声が集まる場所になるようにとハンガーストライキの小屋を作ったわけですが、その中で支援に来てくれた人たちと、毎日三十人くらいで、泊り込んで討論しました。「産む・産まないは女の権利」という言葉に最初是非常にとまどっていた男性の支援者が、私たちの生活から、男性としてどうなんだというようなことをつきつけられて、非常にとまどい、悩んで眠れない人も何人か出ましたけれど、その中で、いろいろな討論ができて本



当によかったと言って、眠れないながらも次の日もまた、来てくれたり(笑い)。そういった形で、ハンストの中で十分内容討論もできてきたと思います。

全国からの電報は初めの日に、土井たか子

さんからのアピールもあり、中山千夏さんが

紹介議員になって下さるということもありましたが、そのほか、大分や京都、広島などの
八婦民主クラブや、いろいろな女性団体
から電報がありました。

私たちはそういった中で十一日、閣議において、この国会では取り扱わないといった形で、国会に政府案として上程することを確実に阻止したと思います。けれども、それは本当かどうかというのを、もう一度私たちは考えています。もう一つは、議員立法によって今国会に提出されるという可能性も残るわけです。

この八日から十三日のハンガーストライキをもって、この集会に学生が多くの隊列をもって集まってきたというわけですけれども、この力をぜひと、これからも気を許さずに、改悪を阻止するまで闘っていきたいと思います。皆さん、よろしく願います。(歓声・拍手)。

司会 拍手でもって、ハンガーストライキの健闘をたたえて下さい(大拍手・激しくゆれる傘、傘……)。

それでは、本集会の決議文の発表、採択に

移っていきます。

決議文

産まない自由が奪われているとき、産むことも自由ではありません。

産むことを奪われている女がいるとき、一方に、産むことを強いられる女がいます。産める社会でないとき、産まないことも自由な選択ではありません。

私たちが求めるのは、すべての女が産みたければ産める社会的条件と同時に、産まない選択ができる状況です。

私たちは、女も男も自分の人生を自立して豊かに生きることを選びとることと、子どもを育てることが可能な社会的条件をつくることこそが、何よりも大切だと考えます。そのために私たちは闘います。

厚生省は私たちの声を聞き、優生保護法改悪作業をストップし、改悪案の国会上程を永久に断念せよ。

そして、ここに集まった皆さんに次の決議を提案します。

一、優生保護法案の国会上程を阻止する。

一、戦争への道につながる優生保護法改悪・憲法改悪を許さない。

この二つのほかに、新たにもう一つ付け加えたいと思います。それは、

一、優生保護法そのものの撤廃と、刑法堕胎罪の撤廃まで闘う。

いかがでしょうか?(同意の歓声・拍手) それでは、以上の三点を決議します。

では、私たちの思いをさらにアピールするために、これから皆でデモ行進をしていきましょう!(拍手)。

*

二千人を超える参加者は、思い思いのゼッケン、たれ幕を下げて、明治公園まで約三キロのデモ行進を行なった。元氣いっぱいシュプレヒコールをくり返し、歌を歌い、隣りあった各地からの女たちと語り合いながら、たちこめる暗雲に押し潰されまいと、共に歩き続けた。

「もうこれっきりにしたい。十年前も反対運動をしていた。そして今また、十年後にまたなんて絶対イヤ……以前の運動を知る人が言っていた。本当にこれっきりにしたい。国会上程が阻止されたこれからが正念場。」

優生保護法改悪論の検討

いつわりの「生命尊重」論を 批判する

河野 誠

('83.2.4 連統討論集会から)

命の尊重を守る立場をとっているのだ、と主張している。

ここでは、改悪派の「生命尊重」論のギマン性を①優生思想と生命尊重論の矛盾、②出生後の人間の人権をないがしろにしておきながら胎児の人権を主張する矛盾、③「生命尊重」論のその他の論理的な不整合、に分けて考察する。

はじめに

——「生命尊重」は争点か

そもそも、「生命の尊重」が争点であるという改悪派の前提がフィクションである。彼らは、あたかも中絶賛成派と中絶反対派、あるいは生命の尊重否定派と生命の尊重肯定派が対立しているかのようにみせかけようとしているが、実際に問われているのは、中絶を法的規制のもとにおいて犯罪として扱うのかわいなかである。つまり国家権力の介入の是非が問われているのである。

優生保護法第十四条の中にある「経済的理由」の削除を要求する改悪論は、A生長の家Vが中心となっている。A生長の家Vの出版局である日本教文社から一九八二年十一月に発行された『胎児は人間でないのか』の第一部が「生命尊重への提言」となっており、第二部が「生命尊重・その争点をめぐって」となっていることからわかるように、彼らは、「生命の尊重」が争点であり、自分たちは生

改悪派は、女を産む機械に、男を労働と繁殖の機械に還元するとともに、「健常」胎児と「障害」胎児を選別しようとしている。しかし、母体を傷つけるとはいえ、中絶は、やむをえない場合の最後の手段として当事者の意思にまかされるべきである。

改悪派の「生命尊重」論の矛盾

軍備、戦争、死刑制度、化学物質（化学的合成品）の濫用、原子力開発、優生思想等々を肯定もしくは容認しながら、胎児の人権だけを主張するのは、「生命の尊重」論としては論理的な破綻である。

(1) 優生思想と「生命尊重」は 矛盾する

そもそも優生保護法の本質が優生思想であることは、「第一章総則」に次のように規定されていることから明らかである。

（この法律の目的）

第一条 この法律は、優生上の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護することを目的とする。

いわゆる「人口問題」には量的人口問題（人口過剰もしくは人口過少への対策）と質的人口問題（人口の質）があるが、優生保護法は

後者にかかわるものである。優生思想とは「すぐれた人間」を尊重し、「劣った人間」を蔑視する思想であるから、「生命の尊重」とは相容れない。

優生保護法第十四条に規定されている人工妊娠中絶の許可条件は、次の①―⑤であるが、そのうち①②は優生思想にかかわるものである。

①本人・配偶者に精神障害または遺伝性の障害
障害

②本人・配偶者の四親等内に遺伝性の障害
③本人・配偶者に癲病

④妊娠の継続または分娩が身体的または経済的理由で母体の健康を著しく害するおそれのある場合

⑤強姦による妊娠

また、第四条、第十二条（いずれも優生手術に関するもの）にかかわる別表（遺伝病と精神病が列挙されている）も、優生思想をあらわしている（なお、厚生省の国立精神衛生研究所には「優生室」がある）。

先にあげた中絶許可条件のうち優生思想にかかわる①と②をそのままにして優生思想にかかわらない「経済的理由」のみを削除することは、優生思想の色彩を強化することを意

味する。また、優生保護法全体の枠組をみとめることは、優生思想を肯定もしくは容認することを意味する。刑法第二一二条（墮胎罪）を廃絶したのちに、優生保護法も廃絶されなければならない。

* 村上らは「人口力＝国力」という考え方をもっている。

◆ 優生思想をめぐる改悪派内部の対立

改悪派の内部にも、優生思想を積極的に肯定する人と、これに対してやや批判的な人がいる。

たとえば、渡部昇一（上智大学教授）は、『胎児は人間でないのか』に登場した一人であるが、大西巨人が血友病の遺伝子をもつがゆえに自発的に断種すべきだと示唆（注一）してひんしゆくをかった。また、自発的な優生運動をおこすことを主張したアレクシス・カレル（フランス出身の外科医・生理学者）の『人間、この未知なるもの』については、戦前に桜沢如一の邦訳（戦後は日本CII協会刊）があるが、渡部は新訳（三笠書房刊）を出した。

他方、同じく『胎児は人間でないのか』に登場している河合洋（国立小児科病院精神科医長）は、兵庫県の「不幸な子を生まない運

動」に代表されるような羊水チェック・優生思想に批判的（注二）である。また、河合は、『現代性教育研究』一九八二年十二月号の論文（注三）でも優生思想に対して批判的な見解をのべており、改悪派の中では異色の人物である。

いずれにせよ、「生命の尊重」と渡部の「断種の推奨」は矛盾する。

◆ 「障害者」の生む権利

先にふれた中絶許可条件の①と②は「障害者」にかかわるものである。改悪派が、第十四条の第二項一号および第一項二号の削除を要求していないのは、「遺伝性障害」および「精神障害」の人の「子を産む権利」を否定するという意味表示とみなしうる。これは「障害胎児」の抹殺を強く示唆するものである。

改悪派は、一貫して「障害者」を差別する立場をとっている。「健常者」の人権は受精卵にさかのぼってまでみとめるが、「障害者」の人権は受精卵や胎児はもちろんのこと、成人の場合も制限されるのである。これは一貫して生命を守ろうという主張では決してない。

◆ キリスト教思想家利用の破綻

『胎児は人間でないのか』にはマザー・テレサが登場する。また、同書に登場するジェッシ・ヘルムズ(米国上院議員)はカール・バルトおよびデイトリヒ・ボンヘッファーを引用している(注4)。したがって、八生長の家Vは、間接的にバルトおよびボンヘッファーを利用しているのである。しかし、ボンヘッファーは、中絶に反対するだけでなく、

「神の前には生きるに値しない生命は存在しない」として安楽死および優生思想をきびしく否定しているのである(注5)。侵略戦争に協力した八生長の家Vが、ナチズムに抵抗して処刑されたボンヘッファーの「一貫した生命の尊重論」を利用できるはずはないのである。ファンダメンタリズムがキリスト教界でひんしゆくをかつている(?)ことをヘルムズも承知しているので、評判の高いバルト(高名な神学者)やボンヘッファーをも出したのであろう。

(2) 出生後の人間の人権をないがしろにして「胎児の人権」を擁護する矛盾

藤島宇内は、八生長の家Vについて、次のようにのべている(注6)。

この教団は「国家神道」支配のもとで、治安維持法、刑法不敬罪により「宗教の自由」が弾圧され、ほとんどの宗教が逼塞していた時代に、国家総動員・翼賛体制に積極的に協力し、天皇絶対、聖戦完遂をとえ、会社工場に進出して「労働者教育」に実績をあげ、天皇中心の家族国家となえる霊友会とともに、例外的に教勢を拡大した経験をもっているのである。

また、八生長の家Vの太平洋戦争観は、『生長の家』誌掲載の、自虐的な東京裁判史観からの脱却を主張する阪田成一「今こそ問われるもの」斎藤忠「日本の戦いは『侵略』であったか」の二論文に示されている。阪田論文からの孫引きであるが、谷口雅春(生長の家総裁)は『古事記と現代の預言』において次のようにのべている(注7)。

あの東大東亜戦争において、緒戦と同様その後のもあのまま、勝って勝って勝ち通しておつたらどうなるかといえますと、(中略)

そしたら今までアジアを侵略していた白色人種の侵略者の後継者になってしまいました。ところが日本民族は、本来侵略民族ではなく、救世主的使命をもつ民族だから、ともかく、一遍、白色人種をおい出して南方民族に民族精神勃興の種子を播いてしまつたら、あとは、もう既に日本民族の役目終りという訳で、「敗戦」という形をとって還ってくるということになったのであります。そして日本民族はアジア、アフリカの民族独立のために、十字架を背負ってキリストのように、他の民族を救って自分が敗戦したのであります。

* なお、生長の家は「太平洋戦争」ということはアメリカ製だから「大東亜戦争」ということばをつかう。

斎藤忠は、国際法においては問題の行為が「侵略」か「自衛」かを定める「解釈権」は当事国にみとめられているので日本の行為は侵略ではないと主張する(注8)。南京大虐殺、朝鮮人強制連行、石井北野の関東軍七三一細菌部隊の行為等々は、どのように判断されるのであろうか。

◆ 核問題

藤島宇内は、次のように指摘する(注9)。

八二年三月二十六日、自民党は、各都道府県連に対し、地方議会の反核決議や非核都市宣言を阻止するよう通達を流したが、これはすでに八一年六月から「生政連（生長の家政治連合—引用者注）地方議員連盟」が方針として打ち出し、自民党にも要求してきたことであつた。

このようにハ生長の家Vは、核の「平和」利用はもちろんのこと軍事利用をも肯定しているのである。なお、「平和」利用と軍事利用の区別は国家および独占資本の立場からの明確になされうるのであつて、たとえば、ウラン採掘における労働者被曝は「平和」利用と軍事利用の共通路におけるものであるから、民衆の立場からはこの区別は意味がない。核問題だけでなく公害問題一般についてもハ生長の家Vの姿勢が問われるであらう。

（国家および独占資本の責任をアイマイにした一億総さんげ式の「公害反省」である）

◆ 第三世界民衆に対する人体実験を肯定する生天目の「ビル無害論」

生天目昭一（医事評論家）は、篠原一（東大法学部教授）らとともに「丸山ワクチンの

製造認可の促進を請願する患者・家族の会」の市民運動をやっているのであるが、他方、『闇に哭く胎児たち』（泉文社、一九八〇）の著者でもある。この本で生天目は、ハ生長の家Vにびったり寄りそいながら人工妊娠中絶を攻撃し、「闇に葬られた胎児たちの代弁」をしているのであるが、その中の「ビル無害論」を考えたい。なお、生天目は高橋昴正を高く評価（注10）して進歩派を装っている。生天目は、同書の「ビルと中絶」という項の中で、「医学をよく知らない日本のマスコミ」が、ビルの副作用（血栓症など）を誇大に報道したと批判し、ビルの解禁を主張し、ビルの副作用はゼロではないにせよ利益に比べて無視できるほど小さいと示唆している。私はビルに絶対的に反対しているわけではないし、ビルの解禁に反対しているのでもない。生天目の「ビル無害論」の構造に疑問を感じるのである。彼は次のようにいう（注11）。

因みにこのビルというのは三十年ほど前の一九五〇年、アメリカのビンカス博士という内分泌学者がホルモン剤を用いて妊娠を防ぐことができることを確認したのがじまりです。プエルトリコで大規模な臨床

実験に成功し、市販されるようになりまして、「服んで避妊できるくすり」として、あつという間に、日本を除く世界中に広まったのであります。

生天目は、アメリカ帝国にとつての「国内の第三世界」であるプエルトリコの住民がモルモットにされたことを肯定しているのである。当初はヒトに対する薬用量が確立していなかったために大量投与による副作用が多発し、試行錯誤をくり返したのちに適量が確定された。そしてはじめて、白人にも解禁されたのである。

ビルだけでなくIUD（リング）も、プエルトリコで人体実験を経て黒人へ、白人貧民へ、白人エリートへと、ヒエラルキーの下から順に使われていった（注12）。また、南アフリカ共和国では、デボ・プロベラ（アップジョン社）という避妊薬が黒人に使われ、不妊症、精神障害、ガン、脱毛などの副作用が多発している（注13）。

われわれは、先進国住民の人権と第三世界住民の人権を差別する「ダブルスタンダード」を受けいれるわけにはいかない。

◆ 生長の家の明治憲法復活論と家族制度

△生長の家Vが天皇主義、改憲論（明治憲法復活論）の立場をとっているのは周知のところであるが、たとえば谷口雅春は『限りなく日本を愛す』の中で次のように書いている（注14）。

占領軍の占領政策として無理にサーベルの圧迫下に於いて定められた憲法は、日本の独立、そして占領の停止と共に停止せられるべきものであり、それを後生大事に護っている如きはまことに嗤ふべき時代錯誤であり、かかるサーベルの圧迫下ですたれさせたところの法精神、法制度も自然の理に背くが故に、その圧迫がなくなると自然にそれが復興し来るのは当然であつた、日本精神の復興も当然と云はなければならぬのであります。……『国民統合の象徴』（憲法第一条）たる天皇に對しましては、国民の一人びとりの基本的人権（憲法第十一条）を各々の「神性」に基づく以上、国民各、自の「神性」の集中的象徴として天皇を尊敬し、天皇に感謝すべきは当然であります。

なお、旧憲法（神權天皇制）の復活、すな

わち天皇を頂点とする「家族国家」の再形成を主張しておきながら、その数行あとで新憲法（象徴天皇制）を容認（？）する論旨を展開するのも論理的に不整合といえるであらう。また谷口雅春は同じく「限りなく日本を愛す」の中の「『家』の制度を復活せよ」という項で次のようにのべている（注15）。

占領下にある被占領国に一面恩恵を与へていると見せかけながら、被占領国を骨抜きにして永久に属領の如き状態にならしむるためにとられたもう一つの占領政策は、日本国家の強力なる骨組であつた所の天皇を中心とする日本国民の大家族的信念の破壊である。天皇は神格から引卸され人民と平等の格まで引落されたのは人間平等の民主主義的立場からは合理としても、家督相続を廃止して家は一代限りとしたのは、日本国民を家系的歴史なき浮浪児として歴史的連綿継続のうちの「今」に立つ一員として「家」を護る——更に進んでは

「国家」を護らうとする——愛国精神を失はしめることになつたのである。今、アメリカがその御都合政策で日本を東洋の防壁に仕立てるために日本に国防軍を組織せし

めようと願ひながらも、最も困つてゐるのは国防軍が何を目標として「国」を護るか、其の目標が家なく、歴史なく、神格のある天皇なく、浮浪児国家と云ふ觀念まで教育されて来たところの日本国民の大多数にとつては、生命を賭してまで護るべき「国」はない感じがするのであつて、その国の支配者がコスイギンであらうが、ジョンソンであらうが、毛澤東であらうがそんなことはどうでも好い。「国」はたゞ人間の住む場所であつて、「国」なる理念は破壊されてゐるのであるから、成るべく兵隊になどとつてくれず、高い租税などを誅求せず、平和に安樂にくらさしてくれる統治者であれば好いと云ふような気骨の抜けた状態になつてゐるのであつて、いつ国防軍に編成替されるかも知れない自衛隊に日本の若い人達が余り興味を持たないと云ふことは、この辺の消息を物語るものだと思ふことが出来るのである。

* 家制度復活論はもちろん、政府の家庭基盤充実政策、臨調「行革」の福祉切り捨てと運動する。

なお、「家」の制度を復活せよ」という項

の前半では共產党と「最近の学生の集团的反治安的行動」を攻撃しており、二つ前の項は「無我献身の美德を復活せよ」、ひとつあとの項は「忠孝の感情を育成せよ」となっている。以上のべたところからも、谷口の「期待される人間像」が容易に推察されるであろう。なお谷口は、同書の「避妊と墮胎の公認は性道徳を頽廃せしめる」という項の中で次のようにのべている（注16）。

折角宿った人間生命を殺すと云ふやうなさう云ふ残酷なこととはなるべくしないやうに避妊法を行へと云ふやうに宣伝され、避妊薬が氾濫し（「避妊具」の誤りであろうか？——引用者）、避妊法を政府の役人又は政府から命令を受けた人が公然と教へて歩くと云ふやうなことまで行はれてゐるのであるが、それがどんな結果になるかと云ふと、「性欲は出来るだけ恣（は）まに楽しめ。そしてその結果としての重荷を負ふな」と云ふことになって、愈々性道徳の頽廃を奨励することになるのである。

谷口は『「自然」の意志に反逆する』避妊と墮胎を攻撃しているのである。これはファ

シズムの自然観の特徴のひとつである自然崇拜のあらわれである。そして、「復活」を待望されている家族制度において、姦通罪、墮胎罪等々が不可欠のものであることはいうまでもない（婚姻外の性は厳禁される）。

◆「胎児の国民化」とは何か

それではかかる人間観、世界観を共有するハ生長の家Ⅴがとなえる「胎児の人間化」とは何であろうか。一九八二年三月十五日の参議院予算委員会において村上正邦議員（生長の家政治連合事務局長）は、次のように問うている。

それなら、個人の尊厳を規定した憲法十三条前段に言う「国民」の中には、当然胎児も含まれ、その生命は尊重されなければならぬ、つまり尊重義務があると思うがどうでしょうか。

これに対し、角田礼次郎政府委員（内閣法制局長官）は次のように答えている。

胎児の生命を尊重することは、お説のとおりまさに憲法第十三条の趣旨に沿うゆえんであらうと思います。

戦争や核問題などについて指摘したように、生長の家は出生後の人間の人権をふみこむ立場をとりながら「胎児の国民化」を主張しているのであるから、これは谷口の「期待される人間像」に向かって教育することをめざして、「胎児」の時代から国家によって管理しようという意思表示である。女を産む機械（「生命の生産」の機能）に、男を労働と繁殖のための機械に還元して、「労働力」と「子宮」と「胎児」を国家によって管理しようとしているのである。

* ボンヘッファーの「生の機械化」（人間の手段化）に対する批判を参照。（『現代キリスト教倫理』一四二―一四三頁）

なお、ファシズムの女性観の特徴が「母性主義」（女を産む機能に還元する）であることはよく知られている。清水多吉（注17）は、「ハ性Ⅴを非社会的生物学的生殖能力に還元」するナチスの「母性主義」について検討している。アドルフ・ヒトラーは「女子教育の不動の目標は、将来の母たるべきことである」とのべている（注18）。

◆ ジェッシー・ヘルムズについて

『胎児は人間でないのか』に登場するジェッシー・ヘルムズ下院議員はレーガンの大統領

当選に決定的役割をはたし、今もレーガン政権を右から突き上げている超タカ派宗教の圧力団体ハモラル・マジョリティVの政界における総帥であるが、藤島宇内はハモラル・マジョリティVとハ生長の家Vを次のように比較する(注19)。

ハモラル・マジョリティVは聖書を文字通り解釈して進化論を否定するファンダメンタリズムを信じ、強烈な反共、軍拡、古き良き強大なアメリカを理想とし、「人命保護法案」(妊娠中絶禁止)を軸とする「道德再武装」を主張する。ジェリー・フォールエルは四十四人の副牧師、千人近いスタッフをもっており、全国ネット・ワークによるテレビ・ラジオ宣伝を活用し、マスコミや連邦・州・市町村議会に圧力をかけるような運動を展開する。もちろん、大統領、上下両院など各種選挙においては好ましい候補を当選させ、氣にくだない候補をたたきおとすため強力な活動を行う。

ハ生長の家Vは進化論に反する「国家神道」の教義を絶対化して「正統憲法」(大日本帝国憲法)への復帰を主張し、強烈な反共、軍拡、靖国神社護持、優生保護法改正(経

済的理由による妊娠中絶の禁止)をとえ、
「出版宗教」といわれるほど出版活動を重視してきた。また、放送のシステムが違いため、アメリカのようにはいかないけれども、ラジオによる布教を行い、最近ではテレビにコマーションも流すようになっていく。また「生長の家政治連合」を結成してとくに自民党への影響力を拡大し、国会、都道府県市町村議会に好ましい議員を当選させる活動を活発に行い、神社本庁とともに「日本を守る国民会議」の中心的な活動部隊となつて、国会、地方議会への働きかけを強化している。

ヘルムズにおいても、反共・軍拡を主張することによってその「生命の尊重論」は論理的に破綻している。また、ヘルムズは中絶に反対するにあたってD・ボン・ヘッファーを援用しているのであるが、ボン・ヘッファーは「キリストから出発する時、悪魔の支配下にある世界とキリストの世界という二分法は禁止される」(注20)とのべているのであるから、反共主義は彼の神学とは整合しないのである。ボン・ヘッファーから自分に都合のいいところだけ切りとって利用している。ヘルム

ズにおいてもハ生長の家Vにおいても「生命の尊重」が中絶反対の真の動機でないことは明らかである(「真の動機」には軍拡のための人口増大もある)。

なお、ヘルムズが優生思想・安楽死に対してどのような態度をとっているのか、また社会ダーウィニズムの潮流との関連などについては調査を要する。

(3) 「受精卵の尊厳」をめぐる 論理的不整合

◆ 改悪派の胎児観

中絶禁止を求める勢力は、日米いずれも「受精卵から人間である」という胎児観をもってゐる。井上紫電(南山大学名誉教授・法学)は、次のようにいう(注21)。

……受精卵細胞はすでに、人間のあらゆる資質を具えた人間の生命体であり、したがって人間たるの価値と尊厳性を具えた倫理的な人格なるが故に、同時にまたこの法的保障性(Protectability)の帰属する基体である、と見るのが正しい。……要するに胎児は実在する法的基体であり、憲法第十三

条の保障する『生命に対する権利』という最基本的な人権はこれに帰属するものと解すべきである。

また、ヘルムズは、一九八一年に、次のような憲法修正案を提案した(注22)。

第二十七条 生きるという至上の権利は、受精のその瞬間から、日数、健康、依存の状態に関係なくひとりひとりの人間に賦与されている。

◆ 受精卵の安定度

出生した人間はすべて受精卵から出発したのであるが、受精卵が人為的介入(人工中絶)のない場合にすべて出生にまで至るわけではない。自然流産の全受精卵に対する頻度は、少なくとも一〇%前後はありと考えられている。「一〇%前後」(注23)、「一〇—四〇%であるが、大体二〇%程度に達する」(注24)、「一〇%くらいであるが、一五%とする研究もある」(注25)、「一〇—一五%」(注26)というように記載されている。つまり、通常の産科学書では一〇—二〇%と見積もられているわけである。

ただし、自然流産の頻度については、三七%という数値(31/84)もある(注27)し、英国のC・ロバートとC・ロワのように七五%という推定(注28)もある。

すべての受精卵を「人間」とみなすことには無理がある。

◆ 強姦による受精卵の「尊厳」

『胎児は人間でないのか』に登場する鈴木健二(NHKアナウンサー)は次のようにいう(注29)。

私は戦争を憎むのと全く同じ次元で墮胎する女性と彼女をそのかす男を憎む。私の許容範囲は、母体の生命が危機に瀕する状態になることが医学的にはっきりと証明される場合と、不幸にして暴行を受けて妊娠した場合の二つだけである。

受精卵に「生命を奪われない権利」を認める立場と、強姦による受精卵の「生命」を絶つことを許容する立場は、論理的に矛盾するであろう。したがって、「受精卵の尊厳」を本気で考えているならば、優生保護法第十四条一項四号の「経済的理由」だけでなく、第十四条一項五号の「暴行・脅迫抵抗もしくは

拒絶できない状況」についても削除を要求しなければ、論理的に一貫性がない。

また、欧米諸国では、「強姦あるいは近親相姦」というようにセットで人工妊娠中絶の許可条件となる場合が多いが、日本の優生保護法には「近親相姦」についての明文の規定がないけれども、欧米のこれらの規定に対して反対を表明しなければ論理的に一貫性を保てないであろう。

◆ 「遺伝性障害者」または「精神的障害者」の配偶子に由来する受精卵の「尊厳」

改悪派は、第十四条一項一号および二号を容認している。したがって、「健常者」の配偶子(精子、卵子)に由来する受精卵と「障害者」の配偶子に由来する受精卵を選別し、前者にのみ「尊厳」をみとめ、後者は「抹殺」することを許容しているのである。ここにも「受精卵の尊厳」の一貫性のなさがみとめられる。これは優生思想のあらわれでもある。

◆ 避妊法のうち「受精卵の尊厳」に

抵触するものについて

谷口雅春の著作にすでに引用したように避妊一般を攻撃する文章がみられるのであるが、村上正邦が改悪推進の実務にあたっている人々は、避妊法一般あるいは個々の避妊法

の「是非」について特に言及していない。また生天目昭一は、すべての避妊法を肯定しているようにみうけられる（闇に哭く胎児たち）。

もし、「受精卵の尊厳」に固執するならば、避妊法のうち、作用原理の中に「受精卵の着床の抑制」が含まれるものはすべて排斥されなければならないであろう。すなわち、IUD（子宮内リング）と一部の経口避妊薬がそれに含まれる。

しかし、少なくとも村上らはそのような主張をしていない。

◆ 試験管ベビーと「受精卵の尊厳」

米本昌平（三菱化成生命科学研究所）は、『Nature』に載った「人間の体外受精成功と失敗」という論文を紹介している（注30）。それによると、体外受精卵を子宮にもどした五十六件のうち、妊娠（着床）が成立したのは六件（一〇・七％）しかなく、その後自然流産が三件あったから、子どもをもてる確率は五・四％になったという。つまり、受精卵の九五％が犠牲となっている。

また、排卵誘発剤によって複数の卵がとれた場合、余った受精卵をどうするかが欧米で議論されているという。これまでは異常な胚

は観察の対象とし、あとは破棄してきた。余った受精卵も子宮に移す方針をとっている人もあり、余った受精卵を凍結貯蔵して、着床しなかったり、本人がもう一人子どもを望んだときに備えておくこと（優生思想的な胚銀行につながる可能性もある）も考えられているという。

このように、試験管ベビーというのは、「受精卵を粗末に扱わざるをえない」技術なのであるから、「受精卵の尊厳」を主張する改悪派はこれに反対してしかるべきであろう。

しかるに生天目昭一は、「中絶手術と正反対なのは、慶応大学病院などで行っている人工受精や、イギリスの試験管ベビーなどです」（注31）とのべて試験管ベビーを礼賛しているのである。なお、飯塚理八（慶大産婦人科教授）は、試験管ベビー推進（日本受精着床学会）の先頭に立っている。

◆ 第三世界民衆の受精卵の「尊厳」

先進国が第三世界への「経済援助」にあたって、人口抑制策をとることを強要し、また本国で許可されていない危険な避妊薬・避妊器具をおしつけていることは、非難をあびている。危険な避妊法の代表的な例は、デポ・プロベラ（排卵を抑制する合成プロジェスチ

ン剤）（注32）およびダルコン・シールド（子宮内リングの一種）（注33）で、あろう。

一九七三年以降、日本は第三世界への「人口抑制援助」を急増させている。日本からの援助は主として民間財団であるJOICFP（日本家族計画国際協力財団。岸信介会長）を通してである。岸は次のように言う。

私はカルカタのような所では、これ以上の子供を産むことは許されないと思うのです。カルカタの子供たちには、人間としての尊厳が持てなくなっている。何らかの法律でも制定して、強制的にでも不妊手術をしなければならん……。

一九七五年にバンコクで開かれたアジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）の会議に参加した黒田俊夫（厚生省人口問題研究所）は次のようにいう。

アジア・太平洋地域の全ての国々は一致して将来にわたって人口抑制計画を強力に推進する必要性を痛感しました。私たちはブカレスト会議（世界人口会議——引用者注）では提案されなかった諸々の行動計画

にも同意しました。

採択された諸提案の中には、女性の健康保護を名目とした中絶合法化の要求もあった。

日本では、第三世界に対しては、少なくとも六つの製薬会社がビルの輸出を許可されており、輸出用のビルの中には、先進諸国では使用が認められていない「前立腺ビル」(注34)も含まれているという。なお、JOICFP

のスポンサーには、笹川良一もいる(注35)。

このように日本政府と支配階級は、第三世界では中絶が行われることを肯定している。岸らは直接、優生保護法改悪推進にたずさわっているわけではないが、軍拡では人生長の家Vなどとともに動いているのだから、人生長の家Vはこのような中絶容認に反対すべきであろう。

◆ 死の判定との比較

死の判定については、従来は心臓死と肺臓死の両者の成立が基準とされていたが、最近では脳死を指標とする見解が有力となっている(注36)。しかし、受精卵には心臓も肺も脳も分化していないのだから、生命がいなかの判定の基準が、「始まり」と「終わり」ではくい違うことになるだろう。

胎児に神経細胞があらわれるのは妊娠三週目ごろであり、胎児の心音をきくことができるのは妊娠三週目ごろから、脳波をはかることができるのは妊娠二か月ごろから、という報告(これらが定説かどうかは未確認)を生天目昭一が紹介している(注37)。

* 神経細胞出現と同時に心音がきこえるというのは早すぎるように思う。

◆ 「中絶」と「安楽死」

井上紫電は、太田典礼(産科医、太田リングの考案者)が中絶の自由化と安楽死の法制化を主張していることをひきあいに出して、「中絶をみとめることは安楽死天国の実現につながる」と主張する(注38)。しかし、胎児は妊娠末期を除いて子宮の所有者の体外では生存可能性がないのだから、病人や老人とは区別される。すなわち、中絶と安楽死とは別問題である。もちろん、われわれは安楽死そのものをアブリオリにしりぞけるべきだと考えているわけではないが、安楽死法制化を肯定することはできない。

また、『産まない自由とは何か』(日本教文社)の著者であるポール・マルクス(神父、社会学者)も次のように「中絶は安楽死につながる」という意見をのべている(注39)。

* NFP (Natural Family Planning)

自然法による家族計画は力強く良いことです。NFPなしでは、終局において結婚生活や家族生活の荒廃をきたすことはいうに及ばず、人工流産と安楽死とにたどりついてしまうからです。受精調節から人工流産に移行する傾向の強い国、そしてさらに人工不妊術や安楽死に走るようなそういう国ぐにを旅してみると、このことは非常に明らかである。

* NFP……基礎体温法、分泌法、熟知法。カトリック信者の唯一の避妊法としてみとめられているリズム法(周期法)。(『フマーネ・ヴィテ』中央出版社、一九六九)

なお、太田典礼は、中絶自由化を主張する『性の権利』(三一書房、新書、一九七〇)や、『安楽死のすすめ』(三一書房、新書、一九七三)において、優生思想を肯定する立場をとっているの、これについては機会を改めて検討する必要がある。

◆ 処女生殖と未受精卵

三十年間排卵のある性周期がくり返されると仮定すれば、数万個の卵子のうち三百六十個が排卵されることになる。二回分娩が行われるとすれば、約三十二年の間に三百五十八

個の卵子が受精せずに死滅することになる。

アリマキなど一部の昆虫等では処女生殖が知られているが、ヒトを含む脊椎動物においても理論的に「処女生殖」が不可能であると断定する根拠はないと考えられるから、これらの死滅する未受精卵も潜在的に人間であったといえないこともない。とすれば、精子も未受精卵に準ずるものとしてよいであろう。また、卵管結紮のような不妊手術も未受精卵の「生命」を奪うものである。胎児↓胎芽↓受精卵↓未受精卵↓精子↓卵母細胞・精母細胞……のどこに合理的な一線をひきうけるのであろうか（「童貞生殖 (androgenesis)」という現象もある）。

おわりに

私は、いわゆる「胎児の人権」をどう考えるかということについては判断を保留している。しかし、出生後の人間の人権を尊重することが「胎児の人権」を考える前提であり、「生命の尊重」を口実に国家権力が「胎児」の問題に介入することが不当であるということについては疑う余地がないと思う。この「前提」すなわち「出生後の人間の人権」をふみにじる立場をとり、また数々の論理的な

整合にも平然としている人生長の家Ⅴに「胎児」について発言する資格はない。最後に「生命の尊重」についてのビエール・サミエールの発言（注40）を引用して結びにかえたいと思う。

『生命の尊重』をたてに妊娠中絶に反対する者には、避妊法を擁護し、このための署名に参加できるかを問うてみるべきである。もし、これを拒否するならば、真の反対理由は『生命の尊重』などではない（谷口雅春はここで早くも失格する——引用者注）。これに同意した場合には、つぎに、良心的徴兵拒否やラルザック軍事基地拡張やポリネシアにおける原爆実験反対の署名（現代の日本では、日米安保条約、靖国神社法案、原爆と原発、自衛隊等への反対署名といったところであろう——引用者注）を要求してみよ。もしこれを拒否するならば、『生命の尊重』が動機ではない！避妊に同意し、かつ積極的に良心的な平和主義者である場合には、その人と一緒に妊娠中絶の問題を掘り下げることができる人生長の家Ⅴと一緒に「掘り下げる」ことはできないことが了解される——引用者）。

（こうの まこと）

△注Ⅴ

- (1) 「神聖な義務」渡部昇一（『週刊文春』一九八〇年十月二日号、文芸春秋社）
- (2) 「胎児は人間でないのか」日本教文社編（日本教文社、一九八二年）七十六頁
- (3) 「優生保護法改正の背景をめぐって」河合洋（『現代性教育研究』一九八二年十二月号、小学館）
- (4) 注(2)に同じ。一八四—一八五頁。
- (5) 「現代キリスト教倫理（ボンヘッファー選集4）」デイトリヒ・ボンヘッファー／森野善右衛門訳（新教出版社、一九六三年）一五三—一六一頁
- (6) 「自民党を支える軍拡勢力の動向」藤島宇内（『世界』一九八二年十二月号、岩波書店）
- (7) 「生長の家」一九八二年十二月号（日本教文社）同右。
- (8) 同右。
- (9) 注(6)に同じ。
- (10) 「闇に哭く胎児たち」生天目昭一（泉文社、一九八〇年）一一九頁
- (11) 同右。二二六頁
- (12) 「新人口論入門」レ・ボンデスタム、S・ベリストローム編／奥田孝晴訳（第三書館、一九八二年）四六頁
- (13) 同右。三七四頁
- (14) 「限りなく日本を愛す」谷口雅春（日本教文社、改訂初版、一九六五年）四〇—四一頁
- (15) 同右。一一—一二頁

同右。二八頁

④『ナチス家族論・考』清水多吉（『情況』、一九七五年八月号、情況出版）

⑤『わが闘争』アドルフ・ヒトラー／平野一郎、将積茂訳（角川書店、文庫、一九七三年）下巻六九頁

⑥注⑥に同じ。

⑦注⑤に同じ。九六頁。

⑧注②に同じ。一五二～一五三頁

⑨同右。二一九頁

⑩『流産のすべて』（産科学シリーズ21）『八神喜昭編』（南江堂、一九七八年）

⑪『産科学・異常編』（改訂第2版）『三井隆吉監』（金原出版、一九七七年）

⑫『ウィリアムズ産科学・下巻』（廣川書店、一九七九年）

⑬『ランソン先生のからだの本』ルシェン・ランソン／池上千寿子訳（亜紀書房、一九七八年）

⑭『遺伝子操作と人権』米本昌平（『技術と人間』一九八二年七月号、技術と人間）

⑮『奇形ザルは訴える』辻秀一（暮しのハンドブック社、一九八一年）五一～五二頁。なお、この本には思想的にはかなり疑問がある。

⑯注②に同じ。三〇頁

⑰注②に同じ。

⑱注④に同じ。三九頁

⑲『地球号の危機ニュースレター』一九八二年十二月号（大竹財団）

⑳『消費者リポート』一九八一年九月二十七日号（日本消費者連盟）

㉑前立腺薬（Prostate gland pill）ではなく、

プロスタグランディンビル（Prosta glandin pill）かもしれない。原文にはあっていない。

㉒以上、日本の「人口援助」については、注㉑の一九九～二〇七頁

㉓『法医学ノート』石山晃夫（サイエンス社、一九七八年）

㉔注㉑に同じ。三一頁

㉕『産まない自由とは何か』ポール・マルクス／

改憲勢力と〈生長の家〉

中曽根内閣の進む道は…

藤島宇内

（'83.2.4 連続討論集会から）

今回の優生保護法「改正」の動きに関して
次の四つの面から話してみたいと思います。

土屋哲訳（日本教文社、一九七二年）の解説。二七三頁

④『図説NFP 新リズム法指針』尾島信夫（鳳鳴堂書店、訂正第4版、一九八一年）一〇一頁
この本の八四頁に「ヒトの卵が受精する瞬間」の走査電顕写真が出ているが、これなども「受精卵の尊厳」に抵触する実験であろう。

⑤『エコロジー』ビエール・サミュエル／辻由美訳（東京図書、一九七四年）一七六頁

一つは、改憲勢力、つまり憲法改悪をたくらんでいる勢力とハ生長の家Vとの関係。第二にハ生長の家Vとは何か。第三がアメリカの右翼勢力であるハモラル・マジヨリテイVとハ生長の家Vの関係。そして第四に自民党と改憲ということです。

これはひとつひとつ、みんな大きな問題でして、たとえば改憲勢力ということだけを説明するのも、大変手間がかかってしまうような状態なんで、うまく説明できるかなという感じがするんですが。

●「国家神道」の復活をねらって

ご存じのように中曽根内閣ができてから一月の下旬に自民党大会があり、その大会では、今すぐ改憲するとは言わなければならないが、将来改憲することを考えに入れながら、国民の

中にまだそういう合意ができていないので、その合意ができるように宣伝活動を強化していくという趣旨のことが、運動方針と大会宣言と決議に盛り込まれたんですね。

これは、ここ三年ぐらいつと続いてきている動きでして、一九八一年の自民党大会では、まず運動方針にそれが入りました。去年の大会では、運動方針と大会宣言に入った。そして今度の大会では、運動方針と大会宣言と決議に入った。つまり、そういうふうなやり方で、自民党自身の中にもある異論を統一し、国民のコンセンサスといえますか、合意をとりつけていこうという形なのです。

今の日本では、憲法の文章そのものは変えられていないけれど、実体としては、どんなその中身が変えられているという状況が進行しています。

いわゆる革新政党内では、憲法第九条に照らして考えた場合には、自衛隊というのは憲法違反であるとする。これに対してこれまでの自民党政権は、憲法は個別的自衛権を否定していないので、その枠内にある自衛隊は憲法違反ではないという立場です。裁判所にその問題が持ち込まれると裁判所はその判断を避ける、というふうになっています。現実の

自衛隊は、自民党政権の解釈に基づいて、違憲ではないという立場で装備の強化も日米合同演習もやっているわけです。

今までの自民党は、憲法の文章そのものはいじらなくても、そういう解釈で間に合わせできた。いま国民の大多数は、NHKの調査でもそうなってきたように、自衛隊肯定論者ではないか。つまり自衛隊はあってもいいものではないか。自衛隊に関しては、憲法違反だとか何とかうるさく言わなくなってきた。いいんじゃないか。だからそこはいじらなくていいんじゃないか。したがって憲法はいじらなくてもいい——そういう意味での、憲法は変えなくてもいいという理論なんです。

ところがここへきて、そういう自民党自身の考え方をまっとうから否定する要求がでてきた。もともとこれは、アメリカから非常に強く、昔から言われてきたことではあります。つまり、アメリカが要求するような日米共同作戦に適した軍備を日本がやる場合には、どうしても保守党Ⅱ自民党の解釈では間に合わない事態がくる、とアメリカはずっと考えていたのです。

しかし今までは自民党政権は、そこを変えないで解釈でごまかすということができたん

ですが、いよいよここへきて、七八年にできた「日米防衛協力の指針」それにもとづく共同研究、合同演習が進むにつれ、米側では八五年までに日本の有事体制を整えることを強く要求している。そしてそれに呼応して、自民党や自民党周辺に、この憲法そのものを、本当に変えてしまおうという動きがでてきたわけです。

そこで、保守党の中で、従来はタカ派だとみられていた解釈改憲論者が、相対的にみるとハト派になってしまふ。つまり、もっと右の方の勢力がでてきた。保守の中の意見が、猛烈なタカ派と従来の保守、つまり相対的なハト派——国民から見ればハト派じゃないんですかね——に、タカ派の中でタカとハトに分かれている（笑い）。そういう事態になってきているんです。

自民党としては、もともと党設立の時から、アメリカの要求する軍備のために憲法を変えなきゃならんということで、しかし、アメリカの要求で変えるというのでは具合が悪いので、国内向けにはそれを「自主的」憲法の制定、とか「自主改憲」、とか言ってきたわけです。これは自主でもなんでもない、実は従属的改憲なんですけれど、国民に向けて

は自主的な顔をしてみせ、アメリカに対しては従属してきた。

そこで、国民向けには「自主」という、これを支えるものとして、戦前、政府が国民の思想を統制する道具としてつくられた「国家神道」を復活させたがっている右翼宗教勢力があるわけです。「国家神道」というのは、明治十年から二十年代にかけて時の政府によって作られた、日本型右翼ナショナリズムといえます。国民を統制するためのもので、現人神天皇を中心にして国民をみんな、「天皇の赤子」とする擬制的な家族制度のもとに統制していく。いざということがあつたら、現人神天皇のために命を捨てる、そして靖国神社に祭られて、それを現人神がおまいりして下さるというありがたい仕組みです。

その教義をあらわしていたのが「大日本帝國憲法」と「教育勅語」「軍人勅諭」などです。そしてこの国家権力を支える擬似宗教は、一方に治安維持法と特高警察による思想弾圧をとまなっている。この擬似宗教と相容れない考え方は、すべて治安維持法、ないしは刑法の不敬罪で投獄して、拷問して、虐殺する、と。これが戦前の日本の国家神道体制といわれ、国民を戦争に、侵略戦争に狩り出した体

制です。

これは対外的に見ますと、異民族に対する差別、迫害、虐殺というもののうえに成り立つのです。殺された異民族は虫けら同然で、「神様」にはなれないのです。

そういう「国家神道」を復活させたい勢力が、現行憲法の「自主改正」という従属的改正を要求する運動の実働部隊になってきています。

*

ではいったい、具体的にはどういう形をとっているかと言いますと、まず、自民党そのものの中に八自主憲法期成議員同盟Vがあります。会長は「昭和の妖怪」なんて言われている岸信介元首相。戦前の日本のファシズム官僚の中心人物で、国民を侵略戦争に狩り出した中心人物です。この「昭和の妖怪」を中心に三百四名の会員がおります。これは全員自民党の衆・参両院の国会議員です。そのほかに、前議員あるいは元議員も七十七名ほど含まれています。これだけの人数になりますと、大体自民党の四分の三近い人数になっているということです。

そして、この自民党の議員団体を中心にして、そのまわりに右翼団体を集めています。

その数がまた、もう何十とありましてね、そこに「優生保護法改正」を言っている人生長の家Vも入っています。

中心的な団体をいくつか言いますと、まず八神社本庁V。これは明治神宮を筆頭に、全国の七万八千ほどの神社を網羅しているものです。戦前は、その中にいろいろな格づけがありまして、国家権力との近さによっていろいろな差別を作ってた。で、別格官幣社というのがあったんですが、これがあの靖国神社、陸軍省と海軍省が管理した神社です。靖国神社、護国神社、それから内務省の管理する官幣大社、官幣中社、官幣小社といった格付けがあった。神主は一種の公務員みたいなものでしてね、国民を思想的に統制する役割を担わされていた。

第二次大戦後、占領軍は、国家が神道という特別な宗教に財政的にも行政的にもテコ入れをして、国民の思想統制を行ない侵略に狩り出したとして、「神道指令」によって改革した。これが今の憲法の中に盛り込まれている。

第二十四条の信教の自由の保証、これは一番重要な条項ですが、「信教の自由は何人に對してもこれを保証する。いかなる宗教団体

も国から特権を受け、または政治上の権力を行使してはならない。何人も宗教上の行為、式典、または行事に参加することを強制されない。国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない」というような規定があり、また第八九条では公金による宗教団体への援助を禁じています。

これは「国家神道」を解体するために作られた条項なんですが、これに対して神社側は何とかその力を温存させたいと、国の財政援助・行政援助は得られなくなっても、組織そのものは温存したいということで、八神社本庁Vという全国組織を作ったんです。そして、これがずっと続いてきていて、いまその組織がふたたび国家権力と結びついて、思想統制の道具に使われる。またイデオロギー的に統制していく思想的運動の実動部隊の中心勢力として登場してきたのです。

次に八生長の家政治連合V。これは、やはり「国家神道」復活を求める実動部隊としてはもっとも活発な新宗教の八生長の家Vの政治結社。つまり、政治資金を集めるためには政治結社の届け出が必要ですね、自治省に対して。だから政治結社を作ったということですね。また、八神社本庁Vも八神道政治連盟V

というのを作っていますが。団体は同じものだけど、政治結社を作っておけば、そのパイプを通じてお金を集め、しっかりと政治家に献金することができるとね。

このほかに、八日本遺族会V、八日本郷友連盟V——これは自衛隊の外郭団体です——八生長の家Vの青年組織である八日本青年協議会V、日蓮系から分かれた八霊友会、八霊友会Vからまた分かれた八仏所護念会、八国際勝共連合V——これは宗教と言っているのかどうか、韓国系でKCIAともつながりの深い文鮮明を教主とする世界基督教統一神霊協会（略称「統一協会」）の政治団体で、猛烈な反共、ウルトラ右翼の団体で、初代の名誉会長が笹川良一——それから、八軍恩連盟全国連合会V、八全国戦友会連合会V。いずれも全国組織になっている、そういうものをたくさん集めまして、自民党の改憲団体八自主憲法期成議員同盟Vを支える形をとっているんです。

そして毎年五月三日には、九段会館に一万何千人かを集めて大会をやっています。その一方で、憲法のいろんな条項を切り崩していくという運動が組織されていく。

これはアメリカの右翼運動と非常に共通性

があります。つまり、国民は非常に多様なわけですね。単純に右とか左とか言えない複雑な要素がある。その中でいろんな目標を掲げて、いろんな形の運動体を作る。実際には、組織はすいぶんダブっているんですけど、そうすると、それぞれの運動について、ある程度コンセンサスを得られるものができてくる。そこで、全体として体制全体を変えてしまふ、という動きになってくる。だから、この優生保護法なんかも、そのひとつとして見るべきだろうと思います。憲法の条項では、第十四条とかかわっています。

●八生長の家Vとは何か

さて八生長の家Vですが、これはさっき言いました八神社本庁Vと、大変結びつきの強い団体ですが、谷口雅春という、もう九十歳すぎになる人が組織したものです。

もともとこの人は大本教という、独自の教義を作ったという意味では、明治以降の新宗教の元締的な宗教に入信していました。大本教は、国家神道の教義の基になっている古事記とか日本書記とか、つまり「万世一系」の「現人神天皇」の根拠になっているものに対して、独自の創世紀神話を作った。それで

国家神道勢力、つまり国家権力からにらまれて、大変な弾圧を受けました。

谷口は大本教に対する権力の弾圧を非常に恐れ、一九二二年に脱会しまして、一九三〇年三月一日に八生長の家Ⅴというのを作ったんですが、この教団は初めから国家神道体制に徹底的に迎合したんですね。

当時の日本のほとんどの宗教は、ものが言えない。国家神道に無理矢理迎合させられた。しかしその中で大変うまく迎合したのが、この八生長の家Ⅴと八霊友会Ⅴの二つだったんです。

特に八生長の家Ⅴの場合は、一九三八年以降の国家総動員体制を取り仕切っていた軍部に迎合して、つまり翼賛体制、国家総動員体制に協力して、天皇・現人神を絶対化し、侵略戦争を聖戦と唱え、八生長の家Ⅴを信じていれば弾丸にあたらないと(笑い)……。戦時中も会社や工場に進出して労務管理に成果をあげるとか、そういうことで勢力を伸ばした宗教だったわけです。

●アメリカと歩調をあわせて

アメリカでは一九四〇年代後半から五〇年代の前半にかけて、今日と大変似ているので

すが、右傾化した時期があります。ニューディールに対する反動という時期がきている。

その時がやはり、軍拡、大軍拡をやる一方、いわゆるマッカーシーイズムが荒れ狂って、外交官、作家、俳優その他いろいろ範圍の人々を査問にかけ、「赤狩り」をやった思想的暗黒時代でした。その思想的な中心として、聖書を文字どおり解釈して進化論を否定するファンダメンタリズムが猛威をふるいました。ところが、一九七〇年代の半ばから今日に至るアメリカ、もつとも右翼的な大統領、レーガンを登場させたアメリカでは、またそういう勢力がのさばってレーガンを支えているのです。

そして八生長の家Ⅴは、いま、このファンダメンタリズムの政治圧力団体であるハモラル・マジョリティⅤと、軍拡と妊娠中絶禁止の運動を進める上で、はつきり連携をとるようになった。

ファンダメンタリズムは昔からありました。ハモラル・マジョリティⅤという政治団体は一九七九年にできました。創始者で、宗教面での総帥はジェリー・フォールエルという宣教師で、全国にテレビのネットワークを使って、レーガン・軍拡支持・妊娠中絶禁止

などいろんな要求を行なっている。イスラエル支持——イスラエル支持だから当然、レバノンの大虐殺なんかも支持することになるんですが——、ホモの禁止、テレビのセックス番組反対、男女同権反対とか。いまアメリカでは、男女同権を憲法で規定せよ、という要求が婦人団体などからでてる。日本国憲法では男女平等が規定されていますが、アメリカの憲法にはそれがなかったので男女平等権を要求する運動をやっているのですが、ハモラル・マジョリティⅤはそれを敵視し、また、公民権運動に反対する……。要するに、人種差別、男女差別、そういったものを全部支持してするようなウルトラ保守の団体です。

レーガンが七九年に大統領に立つ時、ハモラル・マジョリティⅤの支持を得られるかどうかという時に、妊娠中絶を認めるか認めないか、進化論を否定するかしないか、などが彼を支持するかどうかの決定を下す決め手になります。そして、彼は妊娠中絶禁止政策を進めることを公約し、進化論にも疑問をもっていることを公けにすることによって、ハモラル・マジョリティⅤなど右翼宗教勢力の支持を獲得し、それが当選の決め手になったといわれています。

その要求を政治の方面で代弁しているのがニューライトといわれる政治勢力、その総帥がジェシー・ヘルムズという上院議員です。彼は、レーガンで間に合わなくなった場合、次の大統領選に立つとか立たないとか言われているくらいに男で、右のほうの、まあ総大将ですね。もちろん日本に対しては、「安保改定」による日米共同作戦のための大軍拡を強硬に主張しています。

そういうところと、ハ生長の家Vはつながっているわけです。村上議員は去年の二月にアメリカに行きまして、このジェシー・ヘルムズ上院議員あるいは同僚のヘンリー・ハイド下院議員と懇談をできています。その成果として、ハ生長の家V系の出版社が出した『胎児は人間ではないのか』という本の中に、ヘルムズが米議会に提案したものが、そっくりそのまま入っています。

アメリカでは、ファンダメンタリズムというのは特定の宗派以上に広汎で根深いものがある、アメリカ人の四〇％はファンダメンタリストだ、と言われるくらいに大変迷信深いところがあるんですね、アメリカというところは。それを基盤にした宗教および政治勢力ということなのです。

しかし、それでもなおかつ、去年の九月には、このヘルムズの提案した妊娠中絶禁止、これは否決されてしまったんですね、アメリカ議会です。ややりべらな揺れ戻しが、その後ちょっと来ている。この前の中間選挙ではもちろん、ハモラル・マジョリティV、その他右のほうの政治団体は、大金を使って徹底的な猛烈な全国選挙運動をやったそうですが、にもかかわらず退潮をまぬがれなかった、という事態がアメリカには出てきた。

日本では残念ながらそうなくなってなくて、むしろ、そういうアメリカの右翼勢力と運動した勢力が、今後ますます強まる。ハ生長の家Vが出している村上正邦議員は、今年一月下旬にも、ハモラル・マジョリティVなどが開催した「生命尊重全米大会」に出席して、「日本の我々もがんばります」などと報告をぶち、日本で妊娠中絶禁止の国際会議を開くことを約束しました。

日本ではそういうハ生長の家Vとは家族ぐるみの深い関係のある中曽根康弘の内閣が現在出現してきて、日本を右へ強引に引っばっていくこうとしています。

●改憲をめざす中曽根内閣

中曽根康弘という人は、もともとハ生長の家Vとは大変関係の深い人です。彼の奥さんのおふくろさんがもともと信者で、その縁で奥さんやその姉さんも信者になり、中曽根も深い関係になっている。

彼はたびたびハ生長の家Vの集会に出席して、本音を語っています。このあいだ、自民党の総裁予備選の時も、最終段階では、長崎県にあるハ生長の家Vの総本山に中川一郎と一緒に参拝したんです。

彼の憲法問題に対する考え方、これは去年の五月四日にハ生長の家・相愛会Vの全国大会で彼がやった講演によく表われています。

「いま国内においては、行政改革を急務とする声が起きておりますと同時に、憲法を見直す必要はない」という声が翕然として起きています。三十五年たって、ひとまわりして、もう一度日本が日本を見直さなければならないと思います。

そういうえば現在には、国際的にも財政的にも労働運動のうえにおいても、昭和二十年代、マッカーサー元帥のいない昭和二十年代に帰りたいような気がしております。私は、

谷口先生はこの時代が来ることを予言されま

して、八〇年代の我々の使命をお書きになったのだと確信しております。……まず神棚を拜む。あるいは仏壇を拜む。そうしてチーンとたたいて、こうやって手をあわせる。それが最初の仕事ですね。これは偉大なことです。これは戦争に負けても、毎年毎年行なわれ、今日も、今年も、行なわれるでしょう。あの暑い中、子どもの手を引いて、駅のホームで汽車を待っているのは大変ですね。これが何ら不思議なく、毎年行なわれている。そして故郷へ帰って神棚を拜み、神仏に手を合わせる。その人たちの相当数は、東京にいる時には赤旗かついでエイエイオーと言っている連中だ（笑い）。それが新潟県へ帰り、滋賀県へ帰って、神仏に手を合わせると自民党になってくれるだろう（爆笑）。

これが日本の力であります（笑い）。この力がつまり、グループに対する忠誠心、人智靈智信心をもって恥を知ることです。これがもう何千年来、日本に蓄積しているから、一回や二回戦争に負けたからといって、崩れるものではない。それがいま、日本に出てきつつあるのであります。その力があるからこそ、企業も、企業内組合となって労使協調で

一生けん命やる。

国がいざ、という時に、いま行政改革をやるうという決意になっているのであります。

だから私は、谷口先生が（霊的新時代の先駆）とお書きになった、日本人にある霊性がここにあると信じてやまないものであります。

この力が憲法を見直す力であります。憲法というのは書かれた文章ではない。憲法を作る力、憲法を直す力、憲法を自分の憲法にする力、これが憲法そのものであるということをお我々は知らなければならぬ。活字は憲法ではないのです。憲法を作る力が憲法なのであります。いま日本に湧き出てきているのであります。

日本は戦争に負けて不幸ではありましたが、歴史のサイクルがまわりまわって、そして三十五年もたつてくると、いいことと悪いこと、お遊びと本当のもの、日本として子孫に伝えるものと捨てていいもの、それがはっきりとわかってきた。それを我々ははつきりとかんで、日本民族のものにする時が八〇年代であると私は考えております。

いよいよ時の機運は満ちてまいりました。まず、行政改革を断行しよう。これは自分自分を試練する力であります。困難に耐える

力であります。この、自分で自らを試し、試練に耐える、この大きな仕事が失敗したならば、教育の改革もできなくなる。防衛問題もだめになります。いわんや、憲法を作る力はだめになってしまうのであります。したがって、行政改革で大掃除をして、お座敷をきれいにし、そして立派な憲法を安置する。これが我々の使命と考えているのであります。」

まあ、こういうふうに言っているわけです。そして、この行政改革はご存知のように、福祉とか教育とかの予算は、かたっぱしからぶった切って、軍拡予算だけを猛烈に増やしていくという形になってきているのです。

制度的には行政権力の圧倒的優位、議会の抑圧、というファッショ的な体制づくりをめざしています。行きつくところは、日本国憲法の眼目である国民主権を否定する体制づくりです。

そして村上議員というのは、そういう中曾根の大きな支えの一つである八生長の家Vの推している熱狂的な信者です。彼の地元の埼玉で、この優生保護法の賛成決議案が出されて地方議会で問題になった時に、革新の反対派の議員が、「これ何だか右翼勢力のにおいがするんだけど」と言ったところ、「いや、



リ ジ ン
出版センター

青木やよひ

女性・その性の神話

あなたの新しい女性論

ウーマン・リブはなぜおこったのか？ これからの男と女の関わりはどうなっているのか——こうした身近な疑問に答えつつ、文明論的な幅広い展望と文化人類学的な視点をとりにこんだ新しい女性論。

四六判二九〇頁・一六〇〇円

青木やよひ編 1,500円 戦争と女たち

女の論理からの反戦入門

鶴見和子・落合恵子・樋口恵子・
林都・丸木俊・小沢牧子・
丸岡秀子・北沢洋子他

高良留美子 1,500円 アジア・アフリカ 文学入門

A A文学とその運動の全体像／
この地域の人々の間に音や身
振りとも結びついて生きている
民衆的の文化の厚い地層や
創造の源泉を深る。

東京都新宿区岩戸町16 メジャー神楽坂402
電話 03-260-0453 振替 東京0-44705

それはデマだ」とか何とか言ったそうですよ（笑）。

それはね、反対派の議員が、全然勉強しないで直感的にそういうことを言っただけなんです。デマでも何でもありません。やっつてる本人自身が、一方で「胎児の生命尊重」を言いながら、一方でアジア諸民族を大虐殺した「侵略」を「聖戦」と言い、「侵略」と書いた教科書の改悪を支持し、人類を大虐殺するアメリカの核軍拡を支持し、日本への核持ち込みに賛成し、日本の大軍拡を要求し、改憲の旗をふっている。

「胎児の生命尊重」を叫ぶ人間が、同時に人類大虐殺の軍拡を叫んでいる。まるっきり同じ人物がやっつてるんだから、まるで化け物です。

ところがついこの間までは、優生保護法改悪に反対する人々は、村上の「胎児の生命尊重」をまことしやかに唱えている顔しか見ていない。同じ人物、同じ団体が、それとまったく反対の人権抹殺、生命抹殺、大虐殺支持、それを言い続けている勢力である、その二つの顔を持っている、その片面しか見ていなかったというくらいが、こないだうちまで大変強かったです。

相手の姿というものの、全体の像というものを、やはりとらえていかないと。その中でこそ、憲法改「正」というものの、妊娠中絶禁止というものの持っている本質が、なおさらはつきりと浮き彫りになるんじゃないかと思えます。

前に、優生思想が非常に重大だと、この優

生思想というのは、実は一方で生命尊重を言いながら、一方で生命抹殺というものを同居させている、差別思想を同居させている思想だ、というお話がでしたが、実にそのとおりです。

これは妊娠中絶禁止の思想そのものがそうであると同時に、大きく見れば国の在り方に対する思想もそうだし、あるいは対外的な関係ですね。アジアとの関係、ほかの国との関係でも、まさにそういう構造になっている。単に胎児に対する考え方、女性を管理統制する考え方がそうであるだけでなく、全体の政治に対する考え方の根底に、優生思想がある。これが、人生長の家Vあるいは「国家神道」思想の特徴なのです。

（ふじしま・うだい評論家）

308

[illegible]

(一) 優生保護法の人工妊娠中絶許可条件から「経済的理由」を削

除することをどうお考えですか。○をおつけください。

ア賛成
イ反対
ウその他

☆イに○をつけた方へ

改「正」阻止のためにどのような行動をされるおつもりですか。またどのような行動が必要だと思われますか。

(二) 優生保護法についてお答えください。○印をつけてその理由もお書きください。

アこのまま
イ手直しが必要
ウ廃止

○印をつけてその理由をお書きください。

アこのまま
イ手直しが必要
ウ廃止

全回答数 201人

女性議員 25人中 20人 80.0%

男性議員	725人中181人	25%
------	-----------	-----

全体	750人中201人	26.8%
----	-----------	-------

經濟的理由消除	回答數	回答率(%)
---------	-----	--------

替成	0	0.0
----	---	-----

反对	191	95.0
----	-----	------

長...	角	...	181	33.9
その他			1	0.5

その他	1	0.0
無回答	9	4.5

無回答
厚生保護法

そのほか	47	23.4
------	----	------

そのまゝ	47	23.4
手直し	7	3.5

手直し	7	3.5
定小	104	51.7

廢	正	104	51.7
仁	口	12	61.4

無回答	43	21.4
-----	----	------

連胎罪

そのまま	16	8.0
------	----	-----

手直し	31	15.4
-----	----	------

廢止	111	55.2
----	-----	------

312

優生保護法「改正」問題に関し

五政党の方策を聞く

女たちの強い抗議をよそに着々と進められる優生保護法「改正」作業。五政党はこの問題にどう対処しているのか、八国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会（加盟四十八団体）▽が、一月二十七日、各党代表にその方策をただした。

	「改正」に対する党見解	理 由	方 策
自由民主党 森山 真弓氏	①党としてはまとまらない ②女性議員は全員反対	①推進派が党内より出ている ②女性の声を反映していない	女性の声を反映させるよう厚相に意見書を提出
日本社会党 田中寿美子氏	党大会で反対決議	中絶の決定権は国家ではなく個人にある 優生思想に反対する 経済的理由は広義で考えるべき	地方議員に党大会決議を通達 母性保護の観点から「人工妊娠中絶及び避妊手術に関する法律」の立法化を検討中
公明党 渡部 通子氏	党大会で反対を決定	経済的理由はまだ解決されていない 産む・産まないは夫婦の問題 性教育・避妊などの社会環境の整備が先	母子保健法改正を働きかけ続けてきたが優生保護法「改正」とセットにされるのなら、とりやめる
民主社会党 安達 裕志氏	現実に改正案が提出されるまで党としての態度は決定せず	改正案が提出されていないので検討のしようがない	改正案が提出されたら十分検討する
日本共産党 省脱タケ子氏	反対を表明	宗教的理念を政治にもちこんでいる 世界の潮流に逆行 政治優先で強行している（改憲とセット）	賛成決議を出させないよう地方議員に通達 労働組合にも働きかける

妊娠・出産・中絶そして優生保護法を考える

—157人のフェミニストの回答から—

あごら編集部

優生保護法による人工妊娠中絶（以下中絶という）届出数は、1955年の117万143件をピークに漸減し、82年は59万299件となった。

村上正邦議員の国会発言によれば、日本母性保護医協会は、実数より少な目に届け出るよう指導しており、実際は2、3百万という。曰母側は「そのような事実はない」と直ちに反論したが、客観的に考えても、それでは出生数（82年は約150万）を上回ることになる。手術件数の実績に基づいて麻酔薬等も配給されるし、実数と届出数がそれほど隔絶しているとは思われない。

といって、届出数が実施数と完全に一致するとは言い切れない面もある。いわゆる「世間ていをはばかる」中絶があることも、医師の所得隠しがあることも、公然の秘密となっ

ているからである。日本の中絶には、どこか暗い部分があるのは、残念ながら事実である。

暗い原因は、日本の刑法では、中絶はまだ「罪」となっているためである。刑法二二—六条の「堕胎罪」を犯しても罪に問われないのは、「優生保護法」第十四、五条で、「条件つき」ながら中絶を認めているからにほかならない。

その「条件」とは、母体の健康など医学的な理由、強姦・近親相姦、悪質の遺伝の心配、そして「経済的理由」だが、これらの「条件」だけで、現在の中絶原因を覆い切れるだろうか。「経済的理由」の削除だけを阻止すればことたりるだろうか。

私たちが本当に望みたいことは何なのか、イデオロギーや情念ではなく、できるかぎり事実に見て考えてみたいと、私たちは、急

拠、アンケート調査を行なうことにした。

問題がきわめて私的な部分に関わるため、第一次調査対象は、私たちAあごらVの全員と、この問題に強い関心を持つフェミニストの集いA82優生保護法改悪阻止連絡会V（以下A阻止連Vと略称）3・12全国交流会参加者にしほることにした。

回答は、あくまでホンネを示すものであってほしい。そこで、調査方法は郵送式・無記名回答とした。調査数および回収数は、次のとおりである。

Aグループ（あごら会員） 83年3月10日、月刊「あごらミニ」により配布。配布数822、回収数126、回収率15・3%、有効回答率100%。

Bグループ（阻止連） 83年3月12日、交流会会場で配布。配布数200、回収数31、

回収率15・5%、有効回答率100%

(この後、長野市の主婦グループからも調査協力の申し出があり300部を郵送したが、回収は11にすぎなかったため、集計からは除外した)。

回収締切は、A・Bとも3日末日、配布から20日間に満たないうえ、経費の都合上、返信料は回答者負担としたため、回収数はごく少ないものと覚悟していたが、A・B両グループとも、15%を超えた。

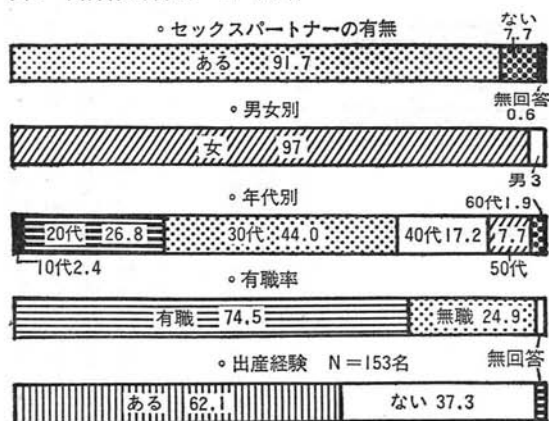
当初の計画では、グループ別集計結果を対比する予定だったが、回答数に差があり、Bは100に満たないため、集計結果を合算して概観することとする。

1 回答者の構成とプロフィール

年代別では30代が最も多く、44・0%、次が20代で26・8%、続いて40代17・2%で、他の年代は10%に満たない。配布対象の正確な年代別数が不明のため、調査数と回答数の比率は不明だが、20-30代の回答が最も多かったのは、妊娠や中絶と最も深いかわりのある年代だからであろうか。

現在職業に就いている者は74・5%で、学

図1 回答者の内わけ N=157名



生、専業主婦など、無職は24・9%であった。総数157名中、セックスパートナーを持ったことがない者は12名、7・7%。内わけは10代3名、20代2名、30代4名、40代1名、50代2名である。

男性は30代2名、40代1名、50代各1名、計4名であった。

出産経験を持つ者は62・1%(95名)、持たない者が37・3%(57名)。既婚者で子のない

図2 希望する子の数 N=153名

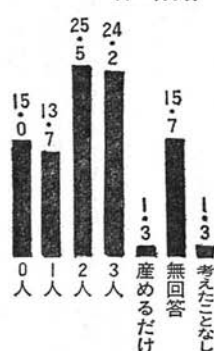


図3 子どもがないことによる影響 (子のいない女性57名の回答)



者は32・4%で、日本女性の平均(約2割)よりも多い。

希望する子どもの数は、2人が最高(25・39人)で、次が3人(24・2%、37人)、続いて0人(15・0%、23人)、1人(13・7%、21人)で、2-3名に集中している。「産めるだけたくさん」は、2名(1・3%)にすぎなかった。また、他の質問に比べて無回答が非常に多く(15・7%、24人)、「考えた

ことがない」(1・3%、2人)を加えると17・0%に達するのが注目される(図2)。

子どものいない57名に、子どもがいないことによる影響をたずねた結果は、図3に示した。影響がなかった者は66・7%、38名で、影響があった者28・1%、16名の2・3倍。

影響のうち最も大きいのは、「なぜ子どもがないか聞かれる」(35・7%)(図3-A)で、次は「仕事に打ち込めた」28・6%(同B)であった。

一般にマイナス面の影響は少なかったが「女として一人前にみられない」が17・8%、(C)また、「しゅうとめから離婚の原因にされる」などの苦しみを訴えた者も、少数ながら認められた。

2 中絶経験者は3人に1人

性体験を持つ女性142名中、中絶経験を持つ者は38・7%(55名)、ない者は59・9%(85名)(図4)で、「主婦の3人に2人は経験者」という、共同通信社の「管理職の性生活調査」(委員長 東大医学部石川 中助教授)の約半分にすぎなかった。

年代別百万比を参考までに示すと、10代0

図4 中絶経験者の割合 N=142名

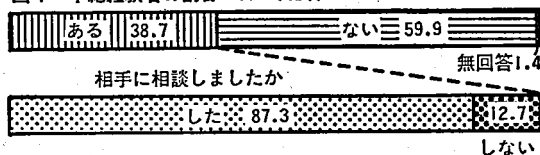


図5 中絶時の胎児の月齢 N=107件

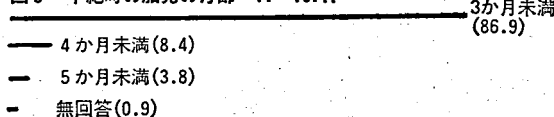
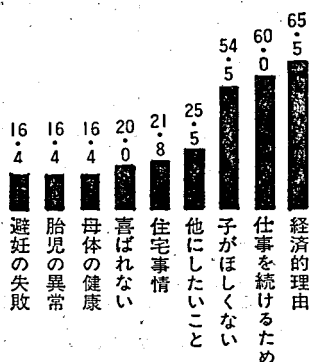


図6 中絶の理由 N=107件(複数回答)



避妊の経験を持つ者は93・7%(133名)

3 避妊は94%が経験

失敗しても半数は産む

中絶時の胎児の月齢は、3月末満が圧倒的に多く86・9%(経験回数93回)であった。4か月は8・4%(9回)、5か月は3・8%、20代15・4%、30代41・5%、40代52・0%、50代66・6%、60代100・0%となる。各年代の標本数が少ないため、統計値としては示し難いが、年齢が加わるにつれ、中絶経験がふえる傾向は、石川氏らの調査と一致している。

中絶の理由は、経済的事情(65・5%、36名)、仕事が続けられない(60・0%、33名)、子どもがほしくない(54・5%、30名)が三大理由(図6)。「子を亡くしてショックが消えないうちの妊娠だったから」「子を育てる自信がなかった」「相手と心が通じ合わなくなっていた」など、さまざまな個人的事情も、合計54・5%に達している。

に達した。避妊しなかった8名(5・6%)のうち5名は、「子どもがほしい」人であることを考えると、ほとんど全員が避妊知識を持ち、それを実行していると言える(図7)。その際の相手の協力は、「協力的」が81・2%に達し、「時による」15・8%、「非協力的」は3・0%にすぎない。協力度が非常に高いのが注目される(図7)。

それにもかかわらず、避妊実行者の48・9%(65人、84件)が、「避妊中の妊娠」を経験している。

その結果、産んだ件数は44・1%(37件)で、中絶した50・0%(42件)と、ほとんど相半ばしている。

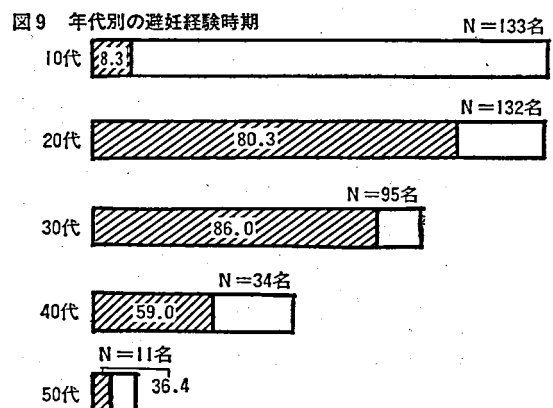
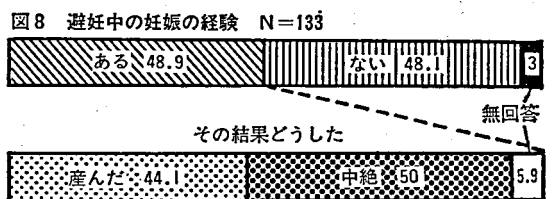
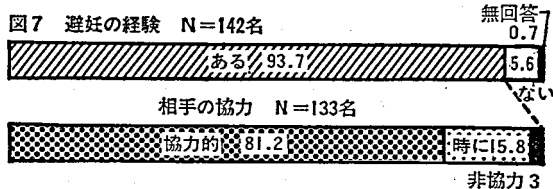
避妊経験者133名について、避妊の実行時期を年代別に見ると、10代は8・3%、20代80・3%、30代86・0%、40代59・0%、50代36・4%で、30代が最も多く、30代がそれに次いでいる。10代が少ないのは、回答者がおおむね20代以降に初体験を持ったためかと想像されるが、初体験の時期は質問しなかったため断定できない(図9)。

興味深いのは、現在50代の44・4%が、50代になっても避妊していることである。高齢だからこそ避妊とも考えられるが、女性が

30年間も避妊を続けなければならない意味は重い。

避妊の方法はコンドームが最も多く(91・7%)、次がオギノ式(54・9%)である。この両者を併用している者は51・1%に達する。比べてリング、ベッサリ類(15・8%)、ビル(8・3%)、座薬(6・7%)、ゼリー

射精、パイプカット、同性愛をあげた者が各1名いた(図10)。
避妊経験者の率に比し、避妊方法は概して古典的である。避妊中の妊娠経験が多い一因であろうか。
避妊をやめた理由は、特記しなかった者が82・7%、「子どもがほしくなったから」と記入した者は11・3%だが、恐らく、計画出



産で、避妊を中止したものと思われる。

理由と記した者は24名にすぎないが、多い順にあげると、「避妊に失敗して妊娠したから」(7)「リングが合わなかった」(4)「相手がなくなつた」(2)「めんどろになつた」(2)で、以下1名ずつが、「ピルの安全性に不安を感じて」「相手が子どもをほしがつたので」「閉経」「病氣」「ピルによる副作用(頭痛)」「夫がバイブカットした」「夫とのセックスがなくなつた」と答えている。

4 中絶は望ましいことではないが

女に決定権がある

以上のような経験をふまえて、中絶をどう

図10 避妊の方法 (複数回答) N=133名

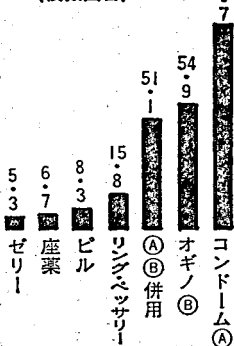
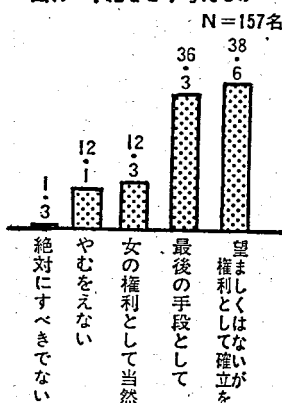


図11 中絶をどう考えるか

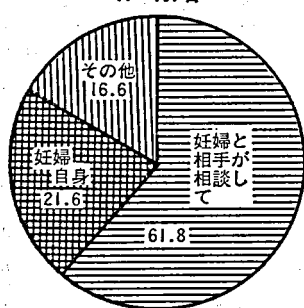


考えるか、5つの選択肢で選んでもらった結果は、(図11)のとおりである。

「望ましいことではないが、権利としては確立すべき」(38・6%)、「絶対確実な避妊法のない現在、最後の手段として認められる」(36・3%)に集中し、両者を合わせると74・9%に達した。「産む、産まないは女の権利だから当然」(12・3%)、「罪悪感を感じるがやむを得ない」(12・1%)など、権利主張型は、それぞれ1割強にすぎない。「絶対にすべきではない」は、2名のみであった。

また、「産む・産まないを決めるのは誰だと思えますか」という設問に対する答えは、「妊婦とその相手が相談して」が断然多く、

図12 産む産まないの決定権は N=157名



61・8%を占めた。女性解放運動にかかわっている人だけを対象にした調査だが、「妊婦自身だけ」は21・6%にとどまった。「相手や同居の家族の意見も聞くが、最終決定権は妊婦自身」は7・6%、「同居の家族の意見も聞くべき」は3・8%。少数意見として、「最終決定権は妊婦自身にあると思うが、周囲が反対するのに妊婦の意志だけで強行していいのだろうか」「妊婦自身が決めた相談相手」「妊婦と相手が相談、結論が出ない時は二人に関わるすべての人が真剣に考える。最終的には妊婦」などが見られたが、「相手の男の意見だけで決める」は、さすがに1名もなかった。

5 優生保護法と改「正」の動きについて

動きについて

「優生保護法の内容を知っていますか」という問いに対しては、97・7%（153名）が、「知っている」と答えている。しかも、その35・9%（55名）が条文の全文を読んでおり、「条文の一部を読んだ」「読んだことはないが内容は知っている」が共に32・0%（49名）に及んでいる。ほとんど全員が、よく学習していることがうかがわれる（図13）。

また、優生保護法改「正」の動きを知っている者は98・1%（154名）で、その全員に近い152名が、改「正」の内容も知っている。改「正」の動きがあることを知らなかった者は3名、その内容を知らなかった者は合計5名にすぎない（図14）。

改「正」の動きに対しては、95・5%（150名）が「反対」し、「賛成」は皆無である。3・8%（6名）が、「内容がよくわからないので判断しかねる」と回答、10代の1名（性体験なし）が、「どうでもいい」と答えているのが例外的である（図15）。

反対の理由は自由記入式としたため、73・

3%（110名）のみの記入だが、「個人の権利・個人の問題」と「国家管理に反対」が、共に30・0%（33名）でトップ。これに「女の基本的人権の侵害」（13名、11・8%）を加えると、7割強が「国家権力の介入」と受けとめているのが注目される（図16）。

以下、散発的だが、「避妊法・性教育の普及が先」（14・5%）、「戦争への道」「ヤミ

中絶がふえる」（各11・8%）、「女の生き方を固定化する」（9・0%）、「優生思想だから」「障害者差別」（共に6・3%）「現実的に経済的理由はある」「改正しても中絶は減らない」（各4・5%）「生命の軽視」（3・6%）「優生保護法そのものに反対」（2・7%）、「家制度の強化」「政治に宗教が入りこむな」（1・8%）が続く。このほか、「女

図13 優生保護法の内容を知っていますか N=157名

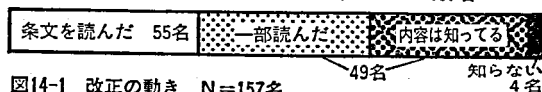


図14-1 改正の動き N=157名

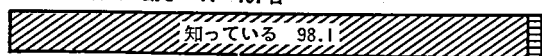


図14-2 その内容は N=157名

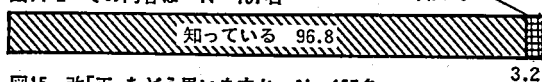


図15 改「正」をどう思いますか N=157名

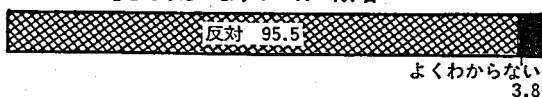


図16 なぜ「反対ですか」 N=110名（複数回答）

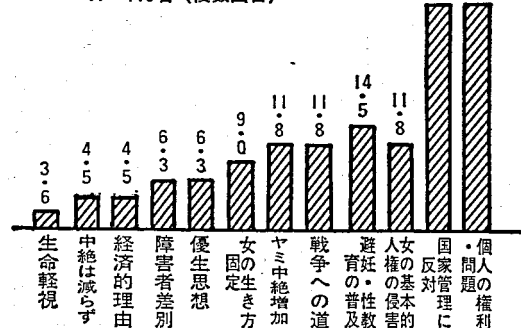


図17 優生保護法は存続すべき? N=157名

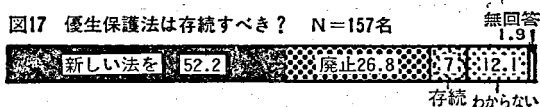
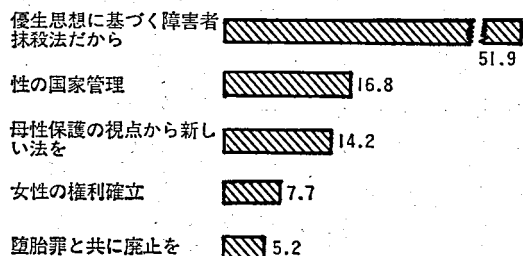


図18 廃止したい理由 N=77名



6 優生保護法の存廃

性のみ罪に問うのはおかしい」「望まない子が生まれても悲劇」「新しい法律をつくるべき」「強行してごらんさい、大変なことになるから」などの意見もみられた。

優生保護法そのものを存続させるべきか否

かについては、過半数(82名、52.2%)が、「廃止して、母性尊重のための受胎調節・中絶・避妊手術に関する法律を新たに作るべき」と答えた。「できるだけ早く廃止すべき」は42名、26.8%で、両者を加えると、8割強が廃止を望んでいる。「今後とも存続させるべき」は、7.0%(11名)、「わからない」は12.1%(19名)、無回答1.9%(3名)で、他の設問に比べ、「わからない」が多かった(図17)。

それぞれの回答の理由は、自由記入としたため、「反対理由」を述べた者は、「反対者」の62.1%(77名)にすぎないが、その44.2%(34名)が、「優生思想に基づいているから」を理由にあげている。「障害者抹殺の法だから」(6名)を加えると、51.9%が「優生思想」を問題にしているのが注目される。

以下、「性の国家管理」(16.8%)、「母性保護の視点に立った新しい法を」(14.2%)、「女性の権利確立を」(7.7%)、「堕胎罪と共に廃止すべき」(5.2%)が続くほか、「安心して産める社会、充実した性教育があれば法で規制する必要はない」「真の生命尊重のために」「男の責任も追求するべき」「100%確実な避妊法の開発を」「この法

律が存続するかぎり何度でも攻撃をかけられる」「ビルの許可が先決」「女性のみが被害を受ける」「法律は少ないほうがよい」など、多様な意見がみられた(図18)。

10年前の反対運動の時は、「中絶の自由化」「ビルの解禁」が叫ばれたのに対し、優生思想そのものに目を向け、本質的な解決を迫ろうとしているのは、大きな変化と思われる。

一方、「存続させるべき」と答えた11名の理由は、「現状ではやむを得ない」「望ましくはないが、中絶法をつくる力量がない」「堕胎罪がおかしい」など、消極派が計3名、「このままでよい」「女性の生活権を守るために必要」という積極的支持が計2名で、6名は理由を付記していない。

7 胎児チェックについて

「障害児の誕生を予防するための胎児チェックは必要ですか」という問いに、「必要」と答えた者は3.8%(6名)にすぎず、「絶対にしてはならない」が27.4%(43名)に達した。しかし、約半数にあたる54.1%が法的規制には反対しつつも「本人が望むなら」と、個人の選択は認めている(図19)。

さらに、「胎児が障害児とわかったときどうするか」という設問には、「それでも産む」(15・9%)を、「残念だが中絶する」(24・2%)がやや上回った。「わからない」(53・5%)も、半数を超えた。今回の調査では、いわゆるDK(わからない)、NA(無回答)が、一般に非常に少なかったのにもかかわらず、ここで「わからない」が過半数を超えたのは、「産みたい」気持ちを持ちつつも、産んで育てていくことが非常に困難な、現実の社会を反映しているものといえよう(図20)。

8 堕胎罪について

優生保護法ほどではないが、堕胎罪について



図19 胎児チェックは必要ですか

N=157名

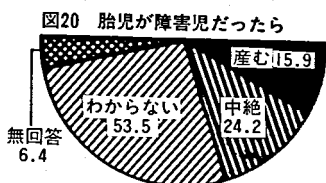


図20 胎児が障害児だったら

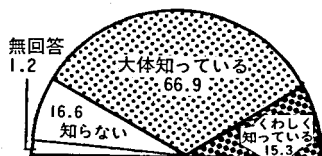


図21 胎墮罪について

N=157名

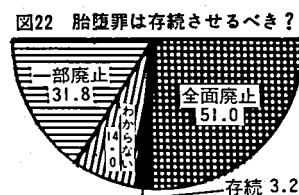


図22 胎墮罪は存続させるべき?

ても知識を持つ者は多く、8割を超えている。「くわしく知っている」者は、さすがに15・3%(24名)にとどまるが、「大体知っている」者は66・9%(105名)のほり、優生保護法同様、かなり学習されている。「知らない」者は、16・6%、26名で、内わけはAあごらV会員が18名(回答者総数比14・2%、A阻止連Vが8名(同25・8%)であった。(図21)。

その存廃については、「全面廃止」が51・0%(80名)、「堕胎の強制に関する項目だけ残して廃止する」が31・8%(50名)で、「存続」を主張したのは、3・2%(5名)だけであった。「わからない」が14・0%(23名)と他の設問に比して多かったのは、内容

9 日本に中絶が多い理由

終わりに、今後の展望を考えるために、「日本に中絶が多い理由」を、複数回答で答えてもらった(図23)。

1、2位は、女が働き続けられる条件の不備を指摘した「女が働き続けられる労働条件や法制度が完備していない」(79・0%、124名)「保育所など社会施設の不足」(63・7%、100名)であったことは、回答者の74・5%が有職者という条件のもとはいえ、興味深い。

次に「性教育が不十分」(61・1%、96名)、「女のからだについての認識が不十分」(52・9%、83名)があがったのは意外だったが、避妊に真剣に取り組みつつ、約半数が「避妊中の妊

をよく知らなければ答えにくいためかと推測される。ちなみにAあごらVとA阻止連Vの回答比を見ると、「全面廃止」が、AあごらV46・0%に対し、A阻止連V70・9%、「一部廃止」が、34・9対18・7と開いている。「あごら」27号で、『あごら』編集部的主張として、「一部廃止」(不同意堕胎罪は残す)を打ち出した結果かと思われる(図22)。

娠」を経験している実情の反映であろうか。

最も多い答えの一つと予測された「住宅事情が悪い」は53・5%（84名）で第4位、「生活苦」は43・9%（69名）で第6位であった。「ピルやIUDが許可されていないから」は33・1%（52名）で、前述したように、前回の反対運動とのちがいが感じられる。

「子どもの数や産む時期を女が自分で選べるようになった」という肯定的な見方は、15・

図23 日本に中絶が多い理由 N=157名(複数回答)

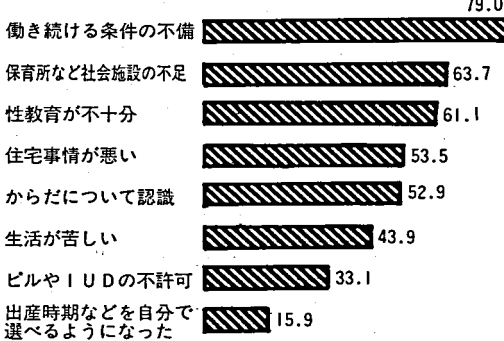
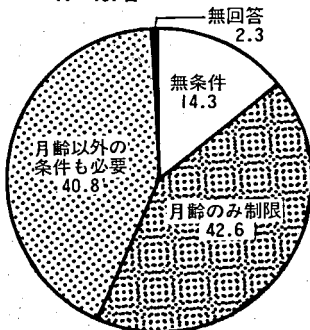


図24 新しい中絶法をつくるとしたら N=157名



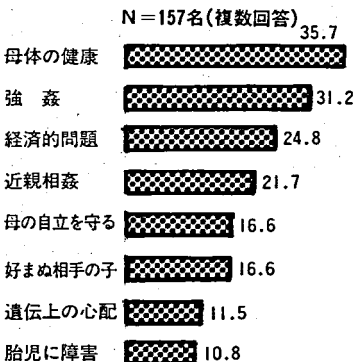
最後に「優生保護法や堕胎罪を廃止し、新しい中絶法をつくるとしたら、その基準をどこにおくか」を、三つの選択肢で選ばせた。結果は、「全く無条件に中絶を認める」は14・3%（21名）のみで、「胎児の月齢のみ制限する」という諸外国の中絶法なみの規制を求めた者が42・6%（67名）、「月齢以外の条件も必要」が、40・8%（64名）だった（図24）。その他の条件としては、「母体の健康にか

10 新しい中絶法をつくるとしたら

9%（25名）にとどまった。一方、「自己抑制できない」「性道德のたはい」など否定的な見方は、7・0%（11名）、4・5%（7名）のみである。

かわる時」35・7%（59名）、「強姦」31・2%（49名）、「経済的に苦しい時」24・8%（39名）、「近親相姦」21・7%（34名）、「母の自立が損われる時」16・6%（26名）、「好きな相手の子を妊った時」16・6%（26名）、「遺伝上の心配がある時」11・5%（18名）、「胎児が障害を持つことが明らかな時」10・8%（17名）の順で、「婚外婚」は7・6%（12名）のみ、また「人口激増などで社会の要請がある時」は1名（0・6%）にすぎなかった。そのほか、「本人がどうしても産めないと判断した時」「親として、生まれて来る子に責任を持たない時」「法律そのものが不要」が、各1名ずつあった（図25）。

図25 その他の条件



11 まとめ

以上、短い時間にあわただしく行なった不完全な調査ではあるが、女の問題を真剣に考える人びとの側面を示す回答として、いくつかの示唆は得られたように思う。

第一に、「優生保護法改正」阻止運動をするのは、放しような性関係を持ち、中絶回数も多い」という人推進派Vの声とは逆に、中絶数が一般の平均値よりは少ないことがあげられる。

その理由としては、セックスパートナーの避妊に対する協力度が高い(81・2%)ことが考えられる。男女が「いい関係」にあり、女が「主体的」で、自分の意志を持ち、自分のからだの状況を把握していれば、「中絶」にまで追い込まれずにすむケースはふえるのではないだろうか。

また、現実の「中絶」の理由として、最も多くあげたのが、「労働条件が不備」「保育

所等、社会施設の貧困」——つまり「仕事が続けられないため」であるのが注目される。経済的条件がどんなに整っても、「女が仕事を続けにくい」状況があるかぎり、中絶は続くだろう。

「中絶が多い」理由の第二として、「性教育が不十分」「女のからだについての認識が不足」があげられたことも、十分考慮されてよいことと思われる。「優生保護法」や「堕胎罪」について熱心に学習している回答者たちが、避妊の方法としては、コンドーム、オギノ式など、古典的な方法に頼っている現状は、寒心に耐えない。戦前、多くの弾圧を受けた受胎調節運動は、戦後もなく優生保護法によって中絶が実質的に自由化されたことにより、かえってその開花が遅れたのではないだろうか。医師が、めんどりでもうけにならない「避妊指導」よりも、「中絶」に熱心であることは、周知の事実である。フェミニスト自身の手による「性教育」「避妊法の実地指導」の普及の必要を痛感するとともに、国家

予算は、軍備ではなく、「避妊法の開発」や、「避妊法の指導」、「男女の正しい関わり方を本質的に考えていく性教育」にこそ向けてほしいと改めて願わずにはいられない。

中絶数を少なくし、胎児の生命をほんとうに尊重したいなら、「優生保護法」条文の、「経済的理由」を削除することでは決してあるまい。性差別撤廃条約を批准し、男女平等法を制定、女の労働条件を改善し、保育所等の社会施設を充実するとともに、性教育の徹底と避妊法の指導に真剣に取り組むことこそが急務であろう。それはまた、胎児の生命以前にあまりにも軽視されている女性そのものの生命の軽視(働くに職なく労働権を奪われている、働いても平均給料が男性の53・8%など)を改善することなしには実現し得ない。政治は、依然として女からは遠い場で、女たちの生活とは関わりなく行なわれているが、それを「人まかせ」にしているかぎり、私たちの状況が改善されることはあるまい。

あいら学習会にご参加を

△あいらVでは引き続き「優生保護法」や、「その根本となる「生命の尊重」について考えていきます。参加ご希望の方は、事務局または最寄りの拠点(382ページ)にご連絡下さい。

新聞 切抜帖

1982年9月1日から

1983年2月28日まで

法制度

生き残った母に温情判決

脳性小児まひの長男・長女を道連れに無理心中を図り、自分は死に切れず殺人罪に問われた母親に対し大阪地裁は「障害児の養育と家業に二〇年間よく耐えた」と懲役三年執行猶予四年（求刑懲役六年）を言い渡した。（9・14朝日・読売）

富士見病院また訴訟

被害者同盟は一七日、北野早苗前理事長ら七人と国、埼玉県を相手取り、総額一億二千四百万円の損害賠償を求める第二次訴訟を東京地裁に。

（9・17読売）

子の幸せに比重置く養子制度

法制審議会は二五日、未成年者の養子を戸籍上実子として届けることができる「特別養子制度」の検討など、養子制度の全面見直しを決定。人工受精子、代理妻による子の法的位置づけなども見直しの対象に。

（9・26読売、29朝日）

「男も悪い」と温情判決

産んだばかりの子を殺し、半年以上も冷蔵庫に隠したとして殺人、死体遺棄罪に問われていた元トルコ従業員に対して、東京地裁は「自己中心的犯行だが責任の半分は相手の男性にもある」と懲役三年、執行猶予四年（求刑・懲役四年）の判決。しかし相手の男性は罪に問わす。

（12・21読売）

指紋押捺は人権侵害

外国人登録で指紋押捺を拒否した在日本米女性に、拒否を理由とする再入国不許可は在日外国

人差別であり憲法違反として、法相と国を相手に慰謝料百万円の賠償を求めて、二三日、東京地裁に提訴。（12・23毎日）

国籍「父母両系」に

法制審部会が、国籍法改正の中間試案を発表。現行の父系血統主義を改め、「父母の一方が日本国民」なら日本国籍を取得できる父母両系主義に。その結果予想される二重国籍問題には、成年時の国籍選択義務化で対処、など。法改正運動を進めてきた女性たちは、父母両系の実現を評価しながらも、経過規定、帰化条件、国籍選択のきびしさに深い失望の色。

（2・2各紙）

買春ツアール禁止に

行政処分を伴う禁止条文を盛り込んだ新旅行業法が閣議で決定、四月から施行。

（2・4河北）

男女平等に大きな一石

整理解雇基準に男女の年齢差をつけるのは不当として解雇された女性職員が日本赤十字社を相手どって雇用関係の存在確認を求めていた唐津日赤訴訟控訴審は、一月二二日、提訴以来三年ぶりに原告側の実質勝訴の形で和解成立。(2・10朝日)

政治

父子家庭ヘルパー制スタート

国が都道府県に委託して十月一日から、都内では練馬区が一番乗り。従来の母子家庭へのヘルパー制に父子家庭も加えて一本化。(9・3読売)

国税「Gメン」に初の女性

大阪国税局に五五年に採用試

験の門戸が女性に開放されて以来はじめて。同国税局では今後さらに増やしていく意向。(9・11日経)

障害者福祉の充実を

仙台市の今後一〇年間の障害者福祉の基本方向と施策を検討するための「国際障害者年仙台市長期行動計画委員会」が設置され、市側がまとめた長期行動計画案について協議。(10・14河北)

婦人の地位向上へ行動計画

京都市は今後一〇年間の指針として「婦人問題解決のための京都市行動計画」を策定、発表。社会参加の促進、男女平等の教育の推進などを主要課題に、それぞれ課題別に個々の施策を計一八〇の事業として細分化。(10・21京都)

国税庁幹部候補生に紅一点

国税庁に来年四月、初めての事務系女性キャリア(国家公務員上級職試験合格者)が誕生する。技術系の上級職にも女性を二三年ぶりに採用。(11・2、9日経)

道路に女性だけの

“物申す会”

女性ドライバーや主婦の意見を道路行政にとり入れ、暮らしに密着した道路造りを進めようと、建設省は一七日、道路局長の私的諮問機関として初めて女性ばかりで構成する懇談会「レディース・ロード・フォーラム」をスタートさせる。五代利矢子さんら一七人。(11・16日経、18朝日)

困窮者は無料化へ

愛知県は老人保健法の施行に伴い、六八、九歳の上乗せ福祉医療に患者負担を導入することに決めたが、生活保護を受けて

いる老人、障害者、戦傷病者、準母子家庭、難病者など救済が必要な老人については従来どおり無料。(1・15中日)

初の「在宅ホスピス」計画

神戸市の神戸ライフケア協会は、患者を病院から引き取って自宅療養させる「在宅ホスピス」を。早ければ四月から垂水区で試験的にスタートする予定。(1・26日経)

東京都、行動計画を発表

男女平等の実現に向けた都の基本方針を示す「婦人問題解決のための新東京都行動計画」を二八日発表。現状を「性差別解決への道のりはまだ遠い」としたうえで、教育、労働などの各分野で施策を明示。(1・29朝日)

「男女平等教育研究会」

神奈川県が昨年策定した婦人

問題の長期計画「かながわプラン」に基づき学校での男女平等教育の推進、充実を図ろうと、三十一日、県教育長の委嘱した五人の委員で発足。

(2・1毎日)

格安ホームヘルパー

埼玉県川口市で、国より安い年額三六五円の入会金でホームヘルパーの世話が受けられるという「川口社会福祉コミュニティ制度」が四月からスタート。

(2・5日経)

労働

子どもを産んでも働きます!!
労働省の調査によると妊娠・出産を理由に退職する女性労働者は、五六年で二一・七%。四

〇年四九・三%、四六年四六・

九%、五三年三六・七%と年々低下。(9・14毎日・朝日)

就職厳しく「美容整形」

「顔の美醜で就職のチャンスを逃すことはない」と割り切り、美容整形外科を利用する女子学生が急増。(9・21毎日)

女子学生就職狭き門

来春、女子の採用ゼロを決めた上場企業は、大学で九六五社(八〇・一%)、短大で五七四社(五七・四%)「日本リクルートセンター調べ」。

(9・22読売・日経)

婦人労働旬間

二一三二日。三〇回目にあたることしの目標は「雇用における男女の機会の均等と待遇の平等を促進する——婦人労働者の雇用を見直そう」。

(10・18—25各紙)

差別企業では働かぬ

一本立ちめざす女たちが、体験をもとに情報交換と、具体的な方法を教え、助け合う大阪の「自営をめざす女たちの会」が、月一回の勉強会。

(10・19朝日)

働く女性像 中高年既婚型へ

三五歳以上五三・六%、既婚者五八%、全体の二〇%がパート。賃金は男性の五三・三%と三年連続で格差拡大。労働省「婦人労働白書」。

(10・21読売・毎日・朝日)

広がる婦人の再雇用制度

西武、大丸、三井銀行に続きサントリー、日航も検討中。「辞めて戻れる制度もいいが、母性保護の充実などにより、働き続けやすい環境を作って」との声も少なくないが。

(11・8河北)

女性税理士の場合

女性税理士の数は、全国で約一二〇〇人。三五歳以上が四分の三、平均三三歳で独立開業。子育て期も仕事を継続し、「生きがい」を感じながら職業生活。雇用職業総合研究所の「専門職(税理士)における婦人の就業と生活に関する調査」。

(12・14朝日)

パート保護へ条件明示

増え続けるパートタイマー保護のため、労働省は事業主に対して「雇入れ通知書」を発行するよう一七日、全国に通達。週五日勤務者にはフルタイムと同等の年休を、などパートの有給休暇に初の指導基準を示す。

(12・17日経)

パートに厳しい不況の嵐

パート入職者が前年比一〇・三%増に対し、離職者は一九・

八%増。うち「やめさせられた人」は二・二%増。給料の高くなる古手をやめさせ、新人を雇い入れる動きが出始めた。

(1・10日経)

共稼ぎでは昇任できず

沖縄県は知事部局対象に、共稼ぎの場合は夫婦のどちらかの離職を昇任条件とする人事構想を発表。「公的職場を一家二人で占めるのをなくし、社会的公平を期す。また、若者の雇用促進を図る」と説明。

(1・14琉球新報)

「憲法で保障された働く権利を奪うものであり、女性の方が辞めざるを得ない現状では、女性の働く権利を奪い、差別するもの」と抗議続出。県職労婦人部はじめ沖縄協など婦人団体が、相次いで県に撤回を要求。

(1・19) 2・10琉球新報・

沖縄タイムス)

那覇市で一月二十九日、県職労

婦人部が主催して「夫婦共働きを考える集会―県の人事方針反対」。「夫婦といえども別個の人格で別々に幸福を求める権利がある。家単位でくくられるのは問題」「女は家に帰れば、家庭基盤充実政策などの自民党の婦人政策と関連。キナ臭い動きがある今日、"銃後の守り"を連想する」など、県の構想に批判、反発が相次いだ。

(2・3琉球新報

沖縄タイムス)

主婦の在宅勤務

日立ソフトウェアエンジニアリングで、在宅勤務プログラマー誕生。第一号は同社を結婚退職した主婦。一か月五〇時間以上の労働時間が条件。将来は通勤不能な身障者の能力開発にも利用。新形態だけに労務管理や賃金についての法律面での整備が急務。

(1・18西日本)

パートバンク、福岡にも

福岡市と北九州市に二七日開設。求人情報に主婦が訪れ、好スタート。(1・28西日本)

学んだ技術を職に生かせず

職業訓練校で技術を身につけた中高年女性も厚い年齢制限の壁に阻まれて就労困難。「中高年女性に対する固定観念を捨ててほしい。若い人にはない生活の知恵もある」と学校側も訴え。(1・30朝日)

男女の賃金格差、世界一

八一年の日本女性の平均賃金は男性の四三・四%と半分以上下。しかも、七七年の四六%に比べ拡大。格差が一番少ないのはスウェーデンで九〇・一%。これでも経済大国? ILOの「男女賃金格差の国際比較」。

(2・2毎日)

「女性で勝負」住宅産業

ホームアドバイザー、インテリアコーディネーターなど、育児・家事の経験を生かして、住みよい住宅づくりに女性が進出。(2・5朝日)

紀伊国屋書店が文書

紀伊国屋書店労働組合は、一日、女性社員と同パートタイマーの採用に関する露骨な差別文書に関して会社と労働大臣に公開質問状を提出。「採用不可―ブス、チビ、カッペ」。要注意―革新支持、父が教授……」(2・10毎日、11道新)

女性を締め出すME化

ME化工程の従業員の九割が四〇歳以下の男子に集中。六割の事業所で配置転換が行われ、女子の新規、補充採用中止が増加。雇用、労働条件へのマイナス影響がジワジワと。電機労連

の「ME技術が雇用と労働に与える影響調査」で。

(2・13朝日)

活動

子育て電話相談

京都市保母会は、相談相手のいない母親の悩みにこたえるため毎週月曜日、就学前の乳幼児についての電話相談を開始。

(9・18京都)

故石井百代さんをしのぶ会

「徴兵は命かけても阻むべし／母・祖母・おみな牢に満つるとも」と、反戦・反核を短歌で訴えた石井さんをしのんで、「草の実会」が十月三日、東京で思いの会を。(9・20朝日)

子どもに学ぶ「教育講座」

三鷹の二人の主婦が、「子どもの存在をテキストに、親として、大人として勉強しよう」と自主講座開設。講師は近くの教育学者たち。(9・23朝日)

民間の有料ホームヘルパー

横浜ホームヘルプ協会、大阪家族福祉協会、神戸ライフ・ケア協会と、福祉の谷間を埋める民間組織結成。京都、尼崎などでもその機運。

(10・12日経)

「労力銀行」一〇周年

水島照子さん(大阪)が始めた「ボランティア労力銀行」、会員三六〇〇人、全国二六〇か所に。労力にインフレはない、利息は友情と。(10・18読売)

「クリッピングジャーナル

女性」

労働婦人に関する新聞記事を集めて小冊子に。発刊一周年。

関西婦人労働問題研究会が新聞にあらわれた「女」を女性の目ととらえ直そうと、「働く女」にピントを合わせた新聞切抜きの小冊子。月一回発行。

(10・21毎日)

主婦が支えた文化の輪

創作、読書、絵画など市民の文化サークル五六の連合体へ調布ブッククラブが創立一〇周年。会員の中心は主婦。男女比は二対八と、圧倒的に女性。

(10・22朝日)

これが女性の「自立」

山形市で、雇用主、女子労働者、女子高校生らが「婦人労働問題懇談会」。職場における女性の地位は低いと、女子労働者の地位確立をテーマに意見交換。

(11・2河北)

国立婦人教育会館、五周年

一〇一三〇日、「婦人教育の

充実をめざして―学習と実践の輪を」のテーマで記念事業。

(11・5毎日)

平和と教育のパンフ発行

《草の実会》が、平和・教育問題にかかわってきた今年のしめくくりとして「一九八〇年代の危険な転換を克服するために」いま、わたしたちの求めるもの」の二冊を。(11・10朝日)

婦選会館二〇周年

故市川房枝さんの業績をしのび、婦人運動の拠点「婦選会館」を来春、市川房枝記念会と改称。増改築し、国際交流の場へと活発な募金運動。

(11・10読売、15毎日)

「声なき叫び」仙台でも

東北では初めて二七、八日戦災復興記念館ホールで自主上映。企画は女性約二〇人の実行委員会。入場者千人を目標に。

(11・12 河北)

国籍法に両系主義の採用を

父系優先主義に反対する〈国籍法改正について提言する市民グループ〉が一二日、「憲法施行後出生したすべての人に適用する、二重国籍の回避に当たっては本人に自由な選択をさせる」などの提言を発表。

(11・13 毎日)

声のタウン誌好評

小金井市の主婦たち「朗読の会」が目の不自由な人のため、ボランティアで声の雑誌「こだま」を制作。すでに二六号。

(12・15 朝日)

遺伝毒性の恐ろしさを再確認

消費者グループ「遺伝毒性を考える集い」はAF2追及の外村東京医科歯科大教授を囲む会を、「疑わしきは使わず、の原則に立つべき」と強調。

(1・16 毎日)

「養子と里親を考える会」

子どもの幸せを優先した養子制度を、と発足以来二か月で会員はすでに一三〇人を突破。血縁を超えた新しい家族関係に関心高まる。勉強会、相談受けつけと同時に、制度改正運動へ。

(1・27 西日本)

《女性建築士の会》誕生

有資格者約一六万、その一％が女性。が、門閉ざす建設会社。見直しを期待し、発言力を強めて、能力発揮の場を広げたいと結成。

(2・10 毎日)

働く女たち、集合！

仙台市内で働く女性たちの連帯をめざす「仙台有職婦人クラブ」が二一日、発足。

(2・18 朝日宮城)

‘83 女の時代とパートタイマー

〈国際婦人年をきっかけに行動を起こす女たちの会〉が「パートタイマーQ&A」の出版を記念して講演会。樋口恵子さんらが、女が働くことの意味、パートで損しない法律知識などをアドバイス。(2・19、20 各紙)

信毎「私の声」三〇周年

記念県大会をきっかけに、上伊那で二二日、地区のつどいを再開。「育児と嫁姑」で意見交換。

(2・24 信毎)

有料助け合い広がる

地婦連の「ファミリー・サービスクラブ」、誕生以来半年で全国一四地域、会員は六千人に。三月一六日に東京で全国連絡会。

(2・26 日経)

「優生保護法をめぐって」

「人工妊娠中絶を考える」

再燃した優生保護法改正問題

について緊急に話し合おう、と二九日、日本性教育協会が主催して東京・築地の朝日ホールでパネルディスカッション。推進派の生長の家、自民党議員は出席せず。「優生思想排せ」で参会者の意見一致。

(10・2 朝日、4 信毎)

「優生保護法改悪反対集会」

三日、「産むのは女(わたし)たち、産まないとい決めるのも女(わたし)たち」をテーマに、82 優生保護法改悪阻止連絡会(阻止連)が主催して、東京・渋谷の山手教会で。中絶許可条件から経済的理由を削るのは、国家による性の管理化につながると。約千百人が参加。京都、大阪、広島でも同様の集会が。

(11・4 朝日、10・29 西日本)

「改正」反対訴え

日本婦人有権者同盟、日本看護協会など七婦人団体が四日、

厚生省を訪れ、森下厚相あてに「改正」反対を申し入れ。

(11・5読売)

婦人団体が相次ぎ反対

阻止連は二四日、「改正作業は即刻中止すべき」と厚生省に申し入れ。国際婦人年連絡会(加盟四八団体)も意見書作成、厚生大臣との面会を要求。

(12・25毎日)

「反対です」自民女性議員も

二七日、森山真弓議員ら三人が林厚相に反対の申し入れ。自民党女性議員六人が署名した要望書を手渡し。

(12・28朝日、毎日)

もっと女性の声を!

国際婦人年連絡会の代表が一日、林厚相に「改正」案を国会上程しないよう申し入れ、①婦人差別撤廃条約の趣旨に反する、②中絶を減らすには安心し

て産める環境の整備が先、などの会員二三〇〇万人の同意を得た意見書を提出。

(1・14朝日、毎日)

五政党の方策は?

二七日、参議院議員会館で、国際婦人年連絡会が「優生保護法改正問題に関し五政党の方策を聞く会」。女性議員には強い危機感、国家介入すべきでないと反対の姿勢。上程阻止と地方議会への反対働きかけの方向で運動を強めようと互いに確認。

(1・29朝日、2・5道新)

婦人団体が街頭署名

日本婦人有権者同盟など七団体が、改悪反対を訴えて一日から。五万人を目標に三月中旬まで。

(2・15毎日)

中絶、年間二〇〇万人は過大

「厚生省統計を上回るとしても極端に多くはない。五六年は推

計一〇〇万人」と、東京医科歯科大教授が調査報告。改正派論拠にクサビ。

(2・19河北)

集会

女性差別撤廃条約を考える

若い男女が出あう様々な人生の節目を通して、条約の精神を身近な暮らしの中でとらえ直そう、と日本婦人会議北支部が十一日から大阪で連続講演会「未来を創りだそう、女たちの手で」を。

(9・10朝日)

老人問題は女性問題

樋口恵子さんらの呼びかけで一日、東京新宿文化センターで「女性による老人問題シンポジウム」。「家庭」「地域」「老後の暮らし」の三分科会で討論。女性の自立と豊かな高齢化社会

を創造しようとのアピールを行った。

(9・11-17各紙)

シンポジウムをきっかけに、女性の自立と豊かな老いをめざす「高齢化社会をよくする女性の会」が誕生。活動の手始めに、「老人ホームに入って」、「老いて男の自立」、などをテーマに手記を募集。三月には設立記念シンポジウム「高齢化社会における女と男」を東京で開催の予定。(10・26信毎・河北)

仙台でもシンポジウム開催準備。女性の自立をめざす「あかねグループ」が、基金集めを兼ねて十二月三十五日、活動報告と即売会。

(11・19河北)

ガールズ・ビー・アンビシャス

先輩のキャリアウーマンが、「自分のやりたい仕事につこう、自分の安売りはやめよう」と、女子学生激励シンポ。九日、東京中央区の都勤労福祉会館で。

(10・4―13各紙)

老いてますます盛んな日々を

世界のどの国も経験したことのないスピードと規模で進むわが国の高齢化社会。自立した老後を、とへ日本ウエル・エイジング協会」が「82エイジングに関する京都国内シンポジウム」を京都で。(10・13河北)

軍備より自然保護

「緑の地球防衛基金」主催の国際シンポジウムが二三日、横浜で。危機回避のため巨大な軍備費を自然保護に向けよう―と決議。(11・22朝日、24毎日)

暮らしを変えよう

自然保護、反公害、リサイクル運動などの住民運動を進めているグループ一〇五団体が二八日、東京で「くらし・かえたい連統行動」第一回交流会。(11・29毎日)

子どもに平和を

太平洋戦争突入から満四一年の八日、東京で「12・8平和を守る母親集会」。一五〇〇人集う。「沖縄では六〇万の人口のうち、二〇万人が戦争の犠牲に。島をまもるという名目で子どもを銃剣で突き殺した」と怒りを新たに。(12・9毎日)

「家庭」教科書にも検定の波

日教組主催、教研集会の家庭教育分科会が宮崎で。「教科書が検定でどう変えられたか」について報告。検定は、女性の目を社会問題からそむけ、家計のやりくり、心がけに封じ込められていると批判。(1・12毎日)

ストップ・ザ・汚職議員

二二日、東京・渋谷のハチ公前で「汚職に関係した候補者に投票しない運動を進める会」が街頭演説。「これ以上政治の腐

敗を許すと、ファシズムが芽ばえる」と。(1・22朝日)

「熱年大学」盛況

〈中日くらし友の会・熱年を考える会〉が、「女ってなんなの」をテーマに名古屋で開講。(1・25中日)

「試験官ベビーを考える集い」

徳島の女性たちが研究者を招いて講演。「貸し腹業(ホストマザー)のようなことは起きないか」「母体への影響は？」と質問が続々。(2・7毎日)

風潮

障害者の自立を目指して

筋ジストロフィーと闘いながら米国へ留学していた福島あき江さん、「自立生活センター」

などでの実地研修を終えて帰国。障害者、介護人、同居人が一緒に暮らす埼玉の「共同生活ハウス」で新生活スタートの予定。(9・3、11・4読売)

女の生き方から見直す

「家事」

神奈川の主婦たちの学習グループが主婦対象に家事について意識調査、その結果を「新しい家庭をめざして―家事労働のゆくえ」と題する本に。役割分業意識が根強く、「夫の世話」(!!)が一日六時間の人も。(9・5読売)

神奈川県立婦人総合センター

女性の勉強と活動の拠点にと江の島に六日オープン。館長に前読売新聞記者の金森トシエさん。県民討論会「82江の島会議・生命の輝き―新たな男女共同社会をめざして」を皮切りに二日まで記念行事。

(9・14読売、

10・5、10・7毎日)

「働くおばあさん」の時代

平均寿命の伸び、核家族化や

離婚の増加により一人で老後を送る女性がふえる傾向に。高齢

女性の求職者は急増。年金、賃金の男女格差大きく、険しい自活の道。(9・15朝日)

十代未婚妊娠女性に問う「生」

東京・国分寺に、今後の生き方を決めるための一時緊急避難の家「麦の会」開所。産むかどうかは本人次第だが、彼女たち自身の生へのかかわりを問いかけて支えていこう、とクリスチャンが中心になって。(9・28朝日)

海外雄飛、今や女子学生主導

民族独立の援助を、そのためにはまず語学を、と開校した東京・三鷹のアジア・アフリカ語

学院。六割を占める女子学生のうち半数が海外で就職、定着。一方、男子の大半は有利な就職のためにと国内安定志向型。

(10・12朝日)

壇上に独り白チヨゴリ

関西芸術座の新屋英子さん(五四)、戦時中、日本に強制連行された朝鮮女性の悲しみを通じて平和を訴える一人芝居「身世打鈴」を各地の反核集会で。

(10・25朝日)

まじめな「うわき天国」建国

人生とにかく好奇心盛んに生きてみよう、と埼玉・川越を「首都」に。出会いの場を求める主婦たちの声をきっかけに、女性大統領も就任。(10・27読売)

婦人問題解決のために

京都市が一月から講座開設。二か月単位で週一回。社会参加、教育、労働など六コースに

分かれて講義。「聞くだけでなく自分で調べ、考えるように」と講師の一人、小西綾さん。

(11・1京都)

マタニティーのユニホーム

女性の勤続年数が伸びて、中小企業にも広がる。「職場の花にすぎなかった女性労働の質的变化のあらわれ」との声も。

(11・3毎日)

自然、上手に料理します

仙台市に自然食喫茶「おひさまや」誕生。にんじんケーキ、たんぼはコーヒ、玄米おにぎり……。この店を通じて仲間を輪を広げたい」と願う若い女性三人で経営。

(11・10朝日宮城)

せっけん運動、記録映画に

食用廃油を集めて環境を汚さない手作りせっけんを作る主婦たちの姿を追う「新せっけん物

語」が完成、各地で上映会。

(11・10読売)

売れてます、女性用手帳

「ウーマンズダイアリー」(グループ エス・アール)に続いて、「スケジュールノートB.O.K」(エディション・ミロ)、「ネットワークノート」(グルーブサンロクロク)など続々発行。SOSに答える情報やミニ女性史まで工夫こらして好評。

(11・12河北、12・7日経、9毎日)

新宿区立婦人情報センター

「主婦のために役立てて」と区民から寄付された用地に完成。女性の社会的自立・連帯に役立つ情報、資料提供の場を目指して来年一月オープン。

(11・28読売)

「泉海洋センター」に反対

公的な体育施設の不足に悩む宮

城・泉市の誘致で、B & G財団（笹川良一会長）が建設中。「笹川氏個人の思想宣伝に利用される恐れがある」と市民団体が反発。工事は一時中断。建設反対派と推進派（町内会、体協など）で署名集めを展開中。
（12・3—1・26朝日宮城）

「教授」に女性化の波

講師以上が全体の二〇・七%、四年制では六・一%と二〇年前の三倍増。二〇%以上の米国に比べまだ少数だが、助教、教授、国立大中心に着実に伸び。加野香川大助手の調査。
（12・14朝日）

女性編集長、この心意気

採算がとれぬと三号で廃刊宣告を受けた、老いを考える雑誌『いつと』、「福祉を標榜する雑誌が採算性だけで廃刊なんて」と菅原弘子編集長が独立して四号を発行。共感した執筆者、友

人たちの協力を得て奮闘中。

（12・14毎日）

大当たり「マイホーム」路線

「喜劇・家族」（芸術座）、「幸福」（日生劇場）、連日大入りの盛況。芸術座では年間六本のうち三本が家庭を材料にした舞台。テレビでもホーム・ドラマばかり。いま、なぜ——。
（12・23毎日）

離婚、三分一一秒に一組

昨年の離婚数は、戦後最高の十六万五千組、人口千人当たり一二・九人。うち二割が一五年以上同居の「熟年夫婦」。厚生省の「五七年人口動態統計の概況」から。
（1・1日経）

CMから新「女性論」

CMに登場する女性のポーズを分析しながら女と男の関係を考えようと、平安女学院短大助教・上野千鶴子さんが「セク

シィ・ギャルの大研究」を出版。
（1・4毎日）

「主人」から「夫」へ

世につれて移り変わる家族の呼び名。三十代では「夫」が多数派。「彼」にも市民権が。「うちの嫁」も姿消し「息子の嫁」に。「夫を何と呼ぶかはその人と夫のかかり方を表す。へ主人」に現代女性がこだわりをもつのは当然で好ましい変化」と女性史研究家の伊藤康子さん。
（1・18中日）

「かえておくれよ私の指紋」

外国人登録証の指紋捺捺は人権無視と押捺拒否運動を続ける在日朝鮮人二世の梁容子さん、外国人差別への怒りや在日朝鮮人女性の思いを歌って各地でコンサート。
（1・19朝日）

化粧品裁判の記録が本に

化粧品の被害の実態、提訴、

裁判の展開、証言、書類などを収録した「裁かれた化粧品」、原告弁護士と有志の手で。公害、消費者問題の参考になればと。
（1・19朝日）

「男の家事と育児を考える」

女が外で働くときの「男の自立」をテーマにRKB毎日でテレビ討論会。
（1・24毎日）

自然のいのち「すみれ通信」

大阪の主婦鳥越ゆり子さんは虫や草花など自然をテーマに、「すみれ通信」を発行。素朴な内容と手作りの温かみが共感。
（2・1朝日）

都電の歴史掘り起こす

豊島区の主婦グループが、都内唯一の荒川線の歴史を調べて本に。戦前戦後にかけて働いた女性車掌の座談会など、ひと味違う都電の本。
（2・14朝日）

保育・教育

心身障害児も幼稚園に

早期教育によって、精神の発達などの遅れが著しく改善される可能性があると、比較的障害の軽い者は可能な限り幼稚園に受け入れるよう、文部省が指針を発表。(10・8朝日)

学童保育一五万人に

全国学童保育連絡協議会のまとめによると、この二年間で八〇〇か所増加の四七三九か所。指導員の身分保障、専用施設の確保など、国による制度化が父母の願い。(11・5読売)

十二時間の延長保育

父母の強い要求を入れ、宮城県が実験的試行へ。保育料のテ

ップ、保母増員、児童への影響などの検討が今後の課題に。

(12・3朝日宮城、4河北)

女の先生、激減

新規採用の四七・二%と、過去一〇年間で初めて半数以下に。一時、七割を占めた小学校では前年比三・五%減の五七・三%。校内暴力による女性応募者、学校側双方の敬遠、待遇改善や不況の中で男性の殺到が原因？(12・19朝日)

健康

成人病予防に

“健康おばさん”

“成人病予防は食卓から”と、厚生省は、健康食にくわしい“健康おばさん”(主婦ボラnteia)を六年で四八万人養成

の方針。

(9・3朝日、11・11日経)

やせ薬、米で販売中止の判決

スターチ・ブロッカー(でんぶん消化抑制剤)利用者の間に腹痛、吐き気、意識混濁などの副作用が続出、シカゴ連邦地裁は販売中止、薬の廃棄を命じた。日本でも類似品がダイエット食品として流通、同様の問題をはらんでいる。

(10・6朝日)

増える子どもの精神疾患

精神障害や神経症、心身症などの症状を訴える子どもたちが激増していることが、北里大の調査で明らかに。発症時期も低年齢化。学校教育のあり方、親の過保護過干渉に警告。

(10・14毎日)

「食品成分表」全面改定

隠れたベストセラー『日本食

品標準成分表」が一九年前に新版を。肉・魚介類は濃厚飼料の使用でビタミンA激増、野菜・果物の「C」はハウス栽培で減少。品目は二倍に増え、食生活の変化が浮き彫りに。

(10・27毎日)

化粧品危険性がひと目で

化粧品に含まれる化学物質とその害を一覧表にした「化粧品毒性テラブル」が同志社大西岡教授の手で。(11・3朝日)

富士見産院事件の学術的報告

国際産婦人科学会で。不必要な子宮・卵巣摘出手術を裏づける統計が報告された。摘出子宮の重量、患者の年齢分布、出産回数との関連などで、他病院と明らかな有意差が。

(11・4朝日)

流産は胎児に原因

妊娠初期の転倒や過労が原因

と思われていた流産は、実は、妊娠直後に染色体異常などで死亡した胎児が、数週間後に母体から排出される現象と東大医学部が解明。
(11・4 読売)

本格化する体外受精臨床応用
徳島大で結婚八年目の主婦に臨床応用。八三年秋にも日本初の体外受精児誕生の可能性が。親の願いか、生命倫理か、広範な、冷静な論議が必要な時期に。
(11・14 朝日)

遺伝子組み換え実験を解禁
人間の遺伝子をマウスの受精卵に組み込み、遺伝子の仕組みを究明する実験に、ゴースイン。遺伝子の働きの研究に威力を発揮する反面、将来人間の遺伝子操作にもつながるきわどい技術。
(11・23 各紙)

P 式血液型不適合の母、出産
京大病院で開発された血液交

換法により、世界で初めて P 式血液型不適合での出産に成功。
(1・13 毎日)

思春期の拒食症、増加傾向
食べ物をうけつけなくなる拒食症(神経性食欲不振症)、学校実態調査によると、思春期女生徒の約五百人に一人にのぼり、都市に集中。母親が過保護で、成績の良い子が圧倒的に多いという。
(2・23 朝日)

妊娠診断薬、市販にストップ
妊娠しているか否かを自分でテストできる診断補助試薬市販計画に、厚生省が「待った」。産婦人科医の強い反対で、「女性が自分自身のことについて主体的に知ることができる」の声もあるが。
(2・28 毎日)

調査

乱戦のベビーホテル業界
厚生省の調査によると、全国のベビーホテルのうち、二割強の一二四施設はすでに閉鎖。一方、五一施設が新たに誕生。変化が激しい体質と需要の根強さ示す。
(10・3 朝日)

世界は今、家庭崩壊症候群
一家族平均四・三人と、一段と進む核家族化は開発途上国も巻き込み、離婚、未婚の母も急増。結婚前の同居も増える傾向に。世界的な家庭に対する意識の変化。国連の「世界市民の生活白書」。
(10・9 各紙)

教科書検定に批判の目
検定制度そのものには六割以

上が肯定。が、「改善の必要あり」が四四％で主流。「侵略」を「進出」に変える記述には「誤まった記述だ」二七％、「不適切」二八％と批判的。軍国主義復活のおそれについて、「大いにある」九％、「多少はある」三六％で「ない」三九％を上回った。読売新聞世論調査。
(10・11 読売)

余暇少ない働く女性
仕事・家事・育児に費やす時間は四十代で、男の八時間四〇分に対し一〇時間一四分。同年の主婦(無職)に比べても三時間以上の自由時間減。家事・育児の負担重く、なお厚い役割分担の壁。総理府の「社会生活基本調査」。
(10・12 日経)

サラリーマン人生堅実です
結婚は遅くても三〇歳ぐらいまでにと考え、フリーセックスや離婚には否定的。子どもは二

人。育児上の心配は健康や非行・暴力。教育熱心で、「美田」を残し、子どもと一緒にの老後生活を願う。意外に堅実、健全。労働省の「サラリーマンの結婚・家庭に関する意識調査」。

(10・17朝日・毎日・読売)

消費回復に「主婦の援軍」

総理府の家計調査報告によると、妻の収入は一八・八%増と一年連続して二ヶ台の伸び。消費支出の内容も和服、スポーツ教室、文化講座など主婦がらみのものが好調。

(10・23日経)

六〇歳定年制、女性はまだまだ

男子では六〇歳以上の定年制が全企業の四一%と昨年を大幅に上回る。五五歳定年制は二〇・四%と完全に少数派に転落。一方、女子は六〇歳二九・

三%、五五歳二七・四%で男子に比べ大幅に遅れる。政策推進労組会議の調査。

(10・24毎日)

“象牙の塔”での
ウーマンパワーは?

京大女性教官懇の学内調査では、教授の数は男性のわずか〇・六三%、助教授〇・五二%、講師三・一%、助手三・六%と補助的職務がほとんどを占める結果。

(11・21京都)

障害者は住みにくい日本

自国の障害者福祉施策が「十分に引き届いている」はストックホルム五八・二%、ロスアンゼルス五八%。東京は三・六%と最低。援助経験は、「募金、寄付」「席を譲る」などに集中。「話し相手になる」「手話、点訳」といった積極的なボランティア活動がまだまだ未熟。総理府の「障害者問題に関する国民

意識の国際比較調査」。

(12・15毎日・日経)

子らに無慈悲な飢えと病

世界でいま、二秒ごとに一人の子どもが死ぬ(毎日四万人)。その四分の三はアフリカ・南アジアに集中。このまま続けば、紀元二千年には栄養失調児は今より約二〇%増。ユニセフの『世界児童白書』。

(12・17朝日)

本

詩集「母の鏡台」

助結核予防協会の一般療養者を対象とする第一三回療養文芸賞受賞作品。浜田昌子著。自費出版。(神奈川県中郡大磯町寺坂五三〇)

(9・3毎日)

『朝鮮人B級戦犯の記録』

日本人として戦争犯罪をとわれた朝鮮人一四八人の記録。彼らの眼がとらえる日本国家とは。内海愛子著。朝草書房。

(9・13朝日)

『母(エミ)』

気鋭の韓国人作家による長編。尹興吉著。安宇植訳。新潮社。

(9・13読売)

『フィリピン・レポート』

マニラのスラム体験から「貧しさの共有」を呼びかける。三好亜矢子著。女子パウロ会。

(9・20朝日、10・11読売)

『就職 働きはじめのあなたへ』

女性にとつての「職業」を多角的に探る三巻シリーズ「女が生きる職業」の第一巻。樋口恵子・中島通子・向井承子編。筑

摩書房。(9・29読売)

『現代のラテンアメリカ』

キューバ革命を中心に。後藤政子著。時事通信社。(10・4朝日)

『幸福を知る才能』

宇野千代著。海竜社。(10・4毎日)

『会員制の国・ニッポン』

イーデス・ハンソン著。講談社。(10・4毎日)

『女ざかり仕事ざかり』

仕事のなかで自他共に育ち合う喜びを知った女たちの物語。佐野美津子著。同友館。(10・4毎日、17読売)

『婦人と児童の問題』

大阪の婦人解放思想の先駆者で反戦思想家でもあった岩崎盛(えい)子さんの評論集が半世

紀ぶりに復刻。「近代婦人問題名著選集」(中野邦監修)収録。日本図書センター。(10・13毎日)

『家族内暴力』

英国の家族内暴力を広範な調査をもとに。ただしわが国のいわゆる家庭内暴力は見当たらず。ジョン・レンボイツ著。山口哲生・久保絃章共訳。星和書店。(10・18朝日)

『民族意識の母 カルティニ伝』

インドネシアの先覚的女性の伝記を二人の主婦が三年半がかりで翻訳。著者は同国の女性ジャーナリスト、シティスマンダリ・スロト。井村文化事業社。(10・20毎日)

『マンガによる現代思想学校』

第一巻「フェミニズム」メキシコの漫画家で社会主義者のリウスによる六冊シリーズ

の一冊目。ラテンアメリカのフェミニズムは人民解放という視点を必然的にもつとする女性解放論は、先進国を強烈に告発。西沢茂子・山崎満喜子訳。晶文社。(10・23朝日)

『廃娼運動』

大正一昭和初期の廃娼運動を市民運動ととらえ再評価すると同時に、反戦思想の欠如をも問う。竹村民郎著。中公新書。(10・25読売)

『シャドウ・ワーク』

性と仕事を軸に、産業文明を批判。『シャドウ・ワーク』とは専業主婦の家事労働のような、賃労働と共にあって支払われない仕事のこと。I・イリイチ著。岩波書店。(11・1毎日)

『ジェーン・フォンダのワークアウト』

心身ともに自立した女のための美容体操とジェーン・自分の歴史。ジェーン・フォンダ著。田村協子訳。集英社。(11・9朝日)

『女性とロシア』

ソ連の女性解放運動が反体制となる必然性を、合法化された雑誌『女性とロシア』中心に。T・マモノヴァ他編。亜紀書房。(11・9朝日)

『どうして指がないの』

先天性四肢障害児父母の会の会長が、同会の活動を紹介。生命科学技術への不安も。野辺明子著。技術と人間社。(11・10毎日)

『女性進化しなかったか』

女性生物行動学者による女性解放論。サラ・ブラッファール・ディ著。加藤泰建・松本亮三訳。思索社。(12・3毎日)

『安らかな死のために』

—ホスピス—

若林一美さんが英・米のホスピスを取材して歩き「愛と思い

やりの共同体」を形成している実例を本に。現代出版。

(12・5 毎日)

『父親の自立と子育て』

性別役割分業への疑問から新しい父子関係の確立を説く。木村榮著。汐文社。

(12・5 読売)

『アメリカの男たちは、いま』

下村満子著。朝日新聞社。

(12・6 朝日)

『愛と希望とたたかいと』

羽仁説子著。三省堂。

(12・14 朝日)

『風灯下』

老いと共に二〇年、阿部初枝

著。ミネルヴァ書房。

(12・17 朝日)

『母親が仕事をもつとき』

副題が「子育て・職場・夫にどう向き合うか」。久田恵著。学陽書房。

(12・27 朝日)

『開化のともしび』

脱稿までに二〇年、故郷越後を舞台に、石油と金にまつわる人間の欲望を骨太いタッチで描く。英弘子さん(七七)の処女作。中央公論事業出版。

(12・28 読売)

『見えなくても・愛』

二人の子とも、回復不能の病に侵された夫をもつ全盲の女性が自らの半生を描く。河辺豊子著。グロビュ社。

(1・9 毎日)

『日本の女子労働』

女性経済学者の徹底した実証

分析的姿勢で女子労働を検討。

篠塚英子著。東洋経済新報社。

(1・10 朝日)

『婦人労働酷書』

婦人労働者による婦人労働者の実態。統一労組懇婦人連絡会編。学習の友社。

(1・15 毎日)

『私のなかの「ユダヤ人」』

ユダヤ系ポーランド人を両親に、日本人を夫にもつ著者が自己を厳しく問い直す。広河ルテイ著。集英社。

(1・24 毎日、2・7 朝日)

『塩を食う女たち聞書』

北米の黒人女性』

藤本和子の聞き書き。晶文社。

(1・24 朝日)

『祖母、わたしの明治』

志賀かう子著。北上書房。

(1・31 朝日)

『楽しんでます、共働き』

ママさん弁護士、松尾道子さん(三一)が奮戦ぶりをつづる。働く主婦への連帯のエッセイ。創元社。

(2・5 日経、27 朝日)

『女ひとり生きる』

谷嘉代子編。ミネルヴァ書房。

(2・11 朝日)

『あるおんな共産主義者の回想』

ハウスキーパー制度に象徴される女性差別を党の伝統ととらえ、さらに今後の方向を探る。福永操著。れんが書房新社。

(2・14 朝日)

『アジア・アフリカ文学入門』

高良留美子著。オリジン出版センター。

(2・21 毎日)

『夢を釣る』

大場みな子著。講談社。自分の文学の原点をなまなましく語るエッセー集。(2・21朝日)

『日系女性立川サエの生活史』

明治末期にハワイへ移住した女性の生涯。中野卓編著。御茶の水書房。(2・28読売)

人

さっそう金メダルおばあさん

「全米マスターズ水泳選手権大会」で、年齢別の六種目全部に優勝の快挙を成し遂げた、帯広市の和田梅さん(七一)。

(9・2読売)

ずしり活動半世紀の重み

婦人解放運動半世紀を超える小西綾さん(七七)。日本の婦人運動は、本当に婦人の意識を

変えてきたか、の思いから、自宅で若い世代との勉強会を始めて四年。淡々と語る自分史の中に、人間が「生きる」ことの、ずしりとした重みと尊さが。

(9・5毎日)

九一歳、まだまだ語れます

初舞台から八四年、なおバリの現役、女義太夫の豊竹団司さん。世界最高齢の現役声楽家として、ギネスブックに登録する準備がファンの手で。

(9・5読売)

名誉都民に内定

藤田たきさん(八三)。

(9・8朝日)

障害ある娘たちと生きる

就職の難しい教え子のために小さな授産施設「岐阜なずな学園」をつくった尾藤操さん。九人の娘たちと、血縁に頼らない新しい家庭づくりを目指して働

き続けている。(9・12毎日)

指揮者・松尾葉子さん、快挙

ブザンソン国際コンクールで一位入賞、「女性の優勝なし」のジंकスを破る。二九歳。日本人としては小沢征爾以来二三年ぶり二人目。(9・16各紙)

赤松さん、婦人少年局長に

国連公使三年の大役を果たした赤松良子さん(五三)、七代目局長に。「男女差別撤廃条約」を批准できるよう国内法の整備をするのが私の仕事」と意欲満満。

(9・17読売)

都女性顧問に作家の角田さん

都政全般について助言する都顧問に角田房子さん(六七)が。「豊富な海外経験による幅広い目と、女性の立場からのキメ細かいアドバイスを期待」され

(9・18読売)

骨弱症のりこえハービストに

体が不自由でも人の役に立つことによって生きるという家族の思いに育てられて。小さな体に合う小型のグランドハーブからつややかな音色を紡ぎ出す、西村光世さん。(9・19毎日)

朗読録音奉仕一九年

松本芳子さん(七五)。下読み、録音、校正と最低四度は読む、根気のいる仕事。「朗読録音感謝のつどい」で表彰。

(9・26読売)

日中交流の礎を築く

高良とみさん(八六)。昭和二七年新生中国を日本人として初めて訪ねる。第一次日中間貿易協定を締結、残留邦人引き揚げの糸口をつけ、「高良外交」とまで言われた。いま、「東洋のスイス」をめざす永世中立研究所の専務理事として世

界平和に力をそそぐ。

(9・27朝日)

あるべき医療を模索する

利潤第一の病院勤務に失望、夫と共に水俣に移り「養生所」で働く、遠藤寿子さん(三二)、薬剤師。「医療の矛盾を考へる原点、水俣病」とかわつて十年余。

(10・3毎日)

夫の遺志継ぎ 平和運動を

湯川スミさん(七五)。紛争は戦争によってではなく、世界法で解決しようと世界連邦の夢を継ぎ、核廃絶の運動を。

(10・17読売)

親たちの血の結晶

「美山育成園」

知恵遅れの子のために、また親たちが手をつなぐために、労苦を注ぎ込んだ川村つやさん(七二)。精薄の大人の終生保護施設を建設。

(10・24京都)

国連代表部公使に

黒河内久美さん(四七)、女性として三代目の就任。「オシドリ外交官」でもある。

(11・21朝日)

介護用おむつカバーを開発

後藤郁子さん。着用者の身になつて老人、障害者用を次々に開発。「おもろしはちつとも恥ずかしいことじゃない。おもろしを恐れて、部屋の中に閉じこもるほうがいけないんです」。

(12・19毎日)

アジアの子の自立を援助

フィリピンの子女の精神里親になつた、童話作家、三宅恵子さん(五九)。その体験をまとめた「足ながおばさん空をとぶ」は感銘をよび、国際精神里親運動に加わる人が後を絶たぬという。

(12・21朝日)

「もっとみんな怒らないと」

『ルイズ——父に貰いし名は』の著者、伊藤ルイさん(六〇)。反戦・反公害などの市民運動を日常的に。「感性を磨き、普通の生活の中に忍びこむ重要な意味を見抜き、主婦もはつきり意思表示を。」

(12・21朝日)

「声を出し、行動して!!」

交通事故で左足を失い、三三歳で再出発、アメリカの研究所で視聴覚障害臨床プログラム主任を務める、カニングハム・久子さん(四八)。「米国の障害児施設も親の声から生まれた。訴えることができない子どもに代わって親が声をあげなくては。」

(12・24毎日)

『婦女新聞』復刻版を編集

四万ページ分、索引も作成という忍の一字の作業を続ける、

船橋邦子さん(三九)。

(12・26読売)

「参議院をとりもどす会」

世話人の松浦三知子さん(七〇)。比例代表制に危機感を抱き、無党派層結集をめざす。

(1・5朝日)

国連人権委、首席代表に

緒方貞子さん(五六)。七六年からの国連公使、こんどの首席代表はじめ「初の女性」の肩書がいくつも。女性の社会進出のパイオニア。(1・6日経)

ドヤ街のドイツ人女性宣教師

エリザベス・ストロームさん(六〇)。乳幼児保育、断酒などの福祉活動一九年、「金ヶ崎のお母ちゃん」と慕われる。

(1・14朝日)

難民の手助けを

平賀増美さん(四七)。タイ

で難民のために日本語学校をつくる。ベトナム難民にも日本語を。手づくりの教科書でみっちり。やりかけたことはことごとく、くじけずに。

(2・10朝日)

脳性マヒ、この心意気

手足の不自由な池田久美子さん(二二)。自分が受けたやさしさを返したいと、老人ホームで、ボランティア活動。

(2・16朝日)

「自然を永久に」

阿寒国立公園内の自然林保護のため、個人の相続を放棄し三億円近い基金で財団法人をつくり、三八〇〇ヘクタールに及び所有林をそっくり財団へ寄付した前田光子さん(七〇)。

(2・26朝日)

〔賞〕

第二回女流文学賞

永井路子さんの『水輪』に。

(9・10各紙)

第一八回谷崎潤一郎賞

大庭みな子さんの『寂兮寥兮(かたちもなく)』に。

(9・15各紙)

第三〇回菊池寛賞

宇野千代さんと塩野七生さんに。

(10・8各紙)

第四回エイボン女性賞

大賞が原百代さん(七〇)に。一三年の歳月をかけて壮大な歴史ロマン『武則天』を完成させた努力が評価されて。功績賞は金森千栄子さん(五三)。ラジオ番組製作ディレクターとして、市民のコミュニケーションの充実と発展に寄与。

(10・14朝日、17日経)

紫綬褒章

『サザエさん』の長谷川町子さん。

(11・2各紙)

勲五等宝冠章

服部世津子さん(八一)。島根県の山村で医療一筋。

(11・3毎日)

日経・経済図書文化賞

『近世日朝通交貿易史の研究』を書いた、田代和生さん(三七)に。女性では慶大教授・佐野陽子さんについて二人目。

(11・8日経)

第二回婦人問題研究奨励金

山川菊栄記念会が鈴木裕子さん(三四)に。『山川菊栄集全十巻』の実質上の編集者として初出論文を掘り起こし、また解説者としてすぐれた業績を。

(11・11朝日)

わたぼうし文学賞

水間真由美さん(三七)の『あやとりの詩』に。

(12・29西日本)

朝日社会福祉賞

木口マツさん(八一)。長崎の離島で、恵まれない子らの養育活動を続けて六〇余年。信仰に支えられて苦難の連続いとわずに。

(1・5朝日)

第八八回芥川賞

加藤幸子さんの『夢の壁』に。

(1・18各紙)

第二四回毎日芸術賞

『夏の栞——中野重治をおくる』の佐多稲子さん。
『アンナ・ボレーラ』の演技で林康子さん。

(1・20毎日)

五七年度芸術選奨文部大臣賞

〔演劇〕俳優 渡辺美佐子さん

(五〇)。(映画)監督 羽田澄子さん(五七)。(大衆芸能)漫才師 内海桂子さん(六〇)、内海好江さん(四七)。

(2・26朝日)

〔計報〕

川崎静子さん。四日、肺炎のため。六二歳。二期会創立メンバーの一人、「カルメン」で鳴らしたメゾソプラノ。

(10・5各紙)

藤木イキさん。三日、肝硬変などのため。五八歳。血の通った福祉行政を求めて「藤木訴訟」をたたかった。

(10・5各紙)

菅 支那さん。七日、尿毒症のため。八三歳。日本女子大名誉教授。日本で最初の女性哲学者として知られる。

(10・8朝日)

ナデジダ・パブロワさん。一六日、皮膚がんのため。七八歳。一九二〇年、革命ロシアを

のがれ来日。日本バレエ育ての親。

(12・16朝日)

田村秋子さん。三日、急性肺炎のため。七七歳。新劇の歴史を飾る名女優。

(2・3各紙)

水谷年恵さん。一六日、老衰のため。九三歳。桜蔭学園元校長。

(2・16毎日)

和田夏十さん。一六日乳がんのため。六二歳、シナリオライター。夫・市川崑さんの映画を支えて。「破戒」では第一七回毎日映画コンクール脚本賞受賞。

(2・20各紙)

意見

パートと主婦の自立

現在の日本の社会では、男たちは本当に非人間的に働かされている。それを「仕事至上主義」と批判するのは正しいが、そう

言いながら多くの妻が扶養控除のメドになる七九万円の枠をこえて働くとはしない。パートで働くという、妻の、よりパランスのとれたとみえる生活は、夫の非人間的な働きに支えられている現実がある。

(田中喜美子・『わいふ』編集長)

(9・10毎日)

スウェーデンの男女平等教育

義務教育の九年間はすべての科目が男女共修。工業高校へ進む女子は年々増加。女子高校生の職業意識も確かになってきており、男女平等の意識変革は、学校教育での長期計画で着実な成果があがっている。

(ヤンソン由美子・翻訳家)

(9・15、16朝日)

「結婚」いま一度見据えよう

百年前、ノラは人間としてのめざめから家を出たが、私たちは結婚前にこそノラの自覚を持

ちたい。それでも人の心はかなしい。歯車のあわなくなる夫婦もいるだろう。その時、結婚という制度からはみだしても女たちが安心して生きられる社会を早く実現させたいと思う。

(円より子・ニコニコ離婚講座)

主宰) (9・22読売)

主婦と社会参加

何に向けての参加なのか。ビジョンのない社会参加は危険。愛国婦人会として兵士を送り出すのも社会参加なのだから。そして、経済的自立を伴うべき。ボランティアにしても真剣にやれば必ず出費がある。それを夫に頼っては、社会参加の意味がありません。

(清山洋子・西九州大講師)

(10・6西日本)

「らしさ」が阻む真の解放

幼児期から、男はたえず女を引き合いに出して自信を植えつ

けられ、「オレは男だ」のプライドにまで発展する。これは女を劣等視することによって獲得された虚像の優越性。逆に女は消極的に、より控えめにと押さえられる。そこに女と男のコミュニケーションは成長せず、あるのは上下の関係の男の誇示（コジ）ニケーションと、女の媚（コピ）ニケーションのみ。

（駒尺喜美・法政大教授）

（10・12毎日）

問題児通報制度の撤廃を

問題児および問題予備児をリストアップし、市立学校長が市教育委員会に提出する制度が、名古屋で二〇年間行われている。教育の荒廃を招き、子どもの人権を侵害する同制度の撤廃をめざす会をつくりたい。三月から行動開始。

（片岡洋子・「戦争を許さない女たちの集い」教育グループ）

（10・13毎日）

働く婦人の地位向上目ざせ

女性の勤続年数が年々伸び、かつての腰掛け的なものから脱しつつある。一方、企業側も、質の高い女子労働力を求めはじめた。こんな芽を育てるために「男は仕事、女は家庭」という社会通念の追放を。（社説）

（10・21読売）

お産に対して主体的に

医師から陣痛促進剤を使うと告げられたら、その理由を聞いて、不安ならば拒否しよう。女性には安全なお産をする権利があり、そのために分娩の仕方を選ぶ権利がある。

（藤本健子・弁護士）

（11・12毎日）

中年男女共学始末

地域の市民運動の場に、男は意思決定、女は補助との会社の論理を持ち帰ってくる男性たち

は、会の雑用には手を貸さず、女性会員をアゴで使おうとし、はっきり意見を言う女性には攻撃をかける。それも単身で参加の女性に対してのみ。多くの女性もそれに迎合。共学による双方のリハビリテーションの進み方いかんが運動の結果にも大きく影響するだろう。

（鈴木由美子）

（11・24毎日）

体外受精は時代の流れ

不妊女性の三分の二が体外受精によってでも妊娠したいと望んでいる。自分の子を産みたいというこの欲望を一片の倫理で抑えられるのか。不妊女性以外の者となえる反対論は一九七〇年までの考えであり、現在では希望する不妊女性に実施する医学上の一治療法と考える時期にきていると思う。

（岩城章・東邦大助教授）

（12・3読売）

地方議会にもっと女性を

地域がより見えやすい町村議会の女性議員は、神奈川県でたった一・六％。女性のほうが地域の問題を敏感に感じとれる場にいるはずなのに。圧倒的に女性が多い市民グループが協力しあって各地で女性候補を立てられないものか。

（片野トシ子（四三）

（12・16毎日）

国の婦人保護費廃止に反対

売春防止法は、売春業を処罰する刑事処分と、婦人保護行政の確立が二本柱。だが、国庫補助があつてさえ、後者は満足に機能していない。婦人保護費の国庫補助打ち切りは一番最後によ。

（高橋喜久江・売春問題ととりくむ会事務局長）

（12・18読売）

法規制より確実な避妊法を

厚生省はピルもIUDも許可せず、新しい避妊法の開発も行っていない。中絶を減らすための計画外妊娠を防ぐ努力を全くせずに法規制を厳しくするのは本末転倒。世界どこの国でも法規制で中絶を減らした例はない。優生保護法のもつ多くの問題は十分に議論を尽くして解決すべきであり、一部の政治家によって国民、とくに妊娠・出産によって死亡することさえある女性の意見を広く聞くことなしに改悪されるべきではない。

(我妻堯・国立病院)

医療センター産婦人科

(1・29朝日)

パートの待遇改善

平均寿命が延び、子どもの少産、高学歴化、社会参加意欲の高まりなど、パートで働くには「女性の生き方」の問題が大きい。

く絡む。一日も早い労働条件の改善を。(今吉まさえ・総評主婦の会副会長)(2・1西日本)

介護休暇の推進を

老人人口の増大、年少人口の減少、核家族化などで家庭介護は家庭内の女性だけではとても無理。男性も介護にあたるよう、行政は企業に休暇制度が定着するよう助成措置を講じてほしい。身体が不自由になった時、容易に家族が面倒をみられる体制を整える福祉行政こそ、家庭重視を言う政府の在り方ではないのか。

(杉田弘子・武蔵大学教授)

(2・7西日本)

人権軽視ひどい老人保健法

例えば六九歳までの点滴の注射料は七五〇円だが、七〇歳以上になると二百円しか支払われない。「老人病院」では、注射は皮下、静脈、点滴のどれをと

れだけやっても一か月に千円、目、耳、鼻、のどの処置等どれを何回繰り返しても「老人処置料」として月に三百円の算定。老人の生存権すら否定しかねない暴挙と言わざるを得ない。

(山本敬・衣笠病院長)

(2・14朝日)

戦争の影

(進む日米協力体制)

千カイリ防衛で日米共同研究

八月三〇日―九月一日の日米

安保ハワイ協議で決定。日本の有事対象一挙に拡大、個別自衛権から逸脱の危険。米は西側の一員としての日本の役割分担を強く要求。(9・2各紙)

共同訓練はこっそりと

核戦力の柱、B52と自衛隊との共同訓練の日時公表は事前・後ともに公表せず、との米要請を日本側了承。(9・11朝日)

キナ臭さ増す「北の守り」

F16戦闘爆撃機の三沢基地配備が、八月三〇日、日米防衛首脳協議で正式決定。対ソ前線基地を明確化。

(10・1朝日・読売)

F16に核搭載・攻撃能力あり

防衛庁が七日、衆院安保特別委で説明。また行動半径には沿海州などを含み、自衛隊との共同作戦もあり得ると。米のねらいが極東ソ連軍の基地攻撃にあり、日本政府はその意図を了解していることが明らかに。

(10・2―8朝日・日経)

共同訓練エスカレート

実戦色を強め次第に高度化。陸上自衛隊は米本土から実戦部

隊を招いて一〇—一八日、東富士で初の合同実動訓練。

(11・5—19各紙)

防衛力、九〇年までに整備を

米上院外交委・本会議が異例の対日決議を採択。シーレーン防衛を中心に期限を区切って圧力。(12・15各紙、22朝日)

沖縄北東を新訓練空域に

在日米軍が申し入れ。運輸省は受諾の見込みだが、民間空路との重複もあり、住民、管制官らは強く反発。(12・24読売)

なかよし中曾根・レーガン

一八日初の首脳会談で、同盟関係の強化、ソ連に結束して対応すること合意。「日米は運命共同体。日本列島を不沈空母のようにし、四海峡を完全封鎖してソ連の侵入に対する巨大な防壁を築く」と中曾根首相は米紙とのインタビューで発言。

(1・19、20各紙)

憲法は時代遅れ?

米軍事力の絶対優位こそが日本憲法の背景であり、その優位が失われているいま、「憲法上の制約」は国際情勢にそぐわぬ、とワインバーガー国防長官が議会で証言。

(2・2朝日・日経)

日本を出撃基地化

一八万人の参加で一日から行われている米韓合同大演習、日本駐屯の海・空軍が即応戦力の主力。ソ連の偵察機警戒、本国からの武器中継と、米国の前方防衛基地としての日本の軍事的役割が浮き彫りに。

(2・28朝日・日経)

〔核〕

「核抑止力が必要」

外務省が安全保障に関する基

本見解を発表。具体的な軍縮措置の裏付けがない限り核不使用は安全保障を高めるものにはならぬ、と。

(10・10読売)

五七年度原子力白書

原発の経済性強調し、民間主導の商品化路線を示すのみで、事故の多さはばかす。

(10・26朝日・毎日)

核兵器凍結決議にNON

国連総会で提案された、全核兵器所有国に対する凍結案に、日本は棄権、米ソに対する即時凍結案には反対。検討中の独自の核不使用決議案も提出断念。

(11・24毎日、25読売)

エンタープライズ、寄港通告

四月、佐世保港に。政府は受け入れる方針ながら、地方選がらみで時期変更を要請。

(12・25読売)

反核派が日本船「待ち伏せ」

フランスの環境保護団体が使用済み核燃料を積んで仏に向かっている日本船に対し、ごみ捨て場にするなど警告。

(1・14毎日)

〔軍事力増強〕

防衛力増強路線の定着狙う

五七年度防衛白書。国内諸施策の「国防上の配慮」からの見直しを要求。シーレーン防衛を強調し、海峡封鎖など具体的作戦にも言及。(9・14各紙)

国連へ要員派遣を

桜内外相は、国連の平和維持機能強化のため具体的な貢献を提唱。(9・23日経、24朝日)

自衛官募集業務再開

長沼ナイキ基地訴訟の一審、自衛隊違憲判決以来停止してい

た横浜市が一〇日から。同訴訟の上告棄却判決により業務停止の根拠を失った、と職員団体反対のまま強行。(11・11毎日)

中曾根「公安」内閣誕生

後藤田官房長官、秦野法相と警察官俸出身者でガッチリ固めの体制。大量の田中派入閣に「直角内閣」との声も。

(11・27各紙)

「質の高い防衛力の整備を」

首相が初の所信表明演説で、防衛力増強への積極的な姿勢を明らかに。また「思いやりの心」を政治の基本とし、「家庭」を最も重視すると発言。

(12・3、4読売)

軍服パーティー、堂々と

四二年目の十二月八日、都内のホテルで「防衛予算満額確保を目指す会」。軍歌、軍服、軍刀に囲まれ田中元首相も「日本

もいま一八〇度右旋回してき」と氣勢をあげ、会場は開戦前夜のような異様なムード。

(12・9毎日)

自衛隊は公益に該当せぬ

那覇市は、自衛隊が臨港地区の建物を使用しているのは違法として、退去命令。同地区の使用は港湾関連施設と、公共または公共団体に限られ、自衛隊はそれに当たらぬと。

(12・22毎日)

突出定着の防衛費

実質マイナスの超緊縮五八年度予算で、防衛費だけが六・五%増の二兆七五四億円、GNP比〇・九八%。五九年度には一%突破必至。伸び率、増加額とも福祉費を上回る。

(12・30各紙)

安保検討へ臨調新設

防衛費の新歯止め策、防衛計

画大綱の見直し、有事立法制定などを検討課題として首相が構想を発表。国民的合意作りの指針にとのものが、防衛政策のなし崩し修正の心配も。

(1・17日経)

青函「防衛」トンネル？

安全保障、防衛の点でも非常に役立つ、と首相が青函トンネルの防衛面での役割を強調。

(1・27毎日)

自衛隊の米艦護衛承認

日本防衛の個別的自衛権の範囲内、と衆院予算委で首相答弁。結果として護衛もあり得るとの従来の政府見解から踏み出し、より積極的な日米共同対処の方向を打ち出す。

(2・4朝日・日経)

米の単独海峡封鎖、容認も

首相が「有事」の歯止めをはずす見解を表明。憲法違反の集

団自衛権に抵触し、他地域の米ソ戦に巻き込まれる恐れ。

(2・20各紙)

こっそり対ソ戦略セミナーへ

効果的な対ソ戦略発動を研究する「太平洋地域陸軍管理セミナー」に、陸上自衛隊幹部が五三年から参加していたことが明らかに。米・韓国など一八か国参加で作戦計画、兵たんなどを協議。ごまかしの「出張」扱いで防衛庁長官もつんぼ枚数。集団自衛権の行使、文民統制の崩壊と大きな論議に。

(2・25毎日)

「日韓協力体制」

強まる日米韓連携

日本の首相として初めて韓国を訪れた中曾根首相は、一二日、朝鮮半島における韓国の防衛努力を高く評価、軍事協力は否定しながらも可能な限りの経

済援助の意図を表明。日韓修復を図って一八日の訪米へ地固め。

(1・13各紙)

〔武器輸出〕

武器技術、米へ無条件供与

政府は一四日、武器輸出三原則の適用除外として正式決定。紛争時もOKで三原則は完全に空洞化。武器共同開発・生産への道を開くおそれ。

(1・14各紙)

「武器輸出の完全自由化を！」

「市場を拡大すれば量産効果があり、価格競争力がアップする」と軍需産業界。日米兵器共同生産にも「意欲的」。

(1・15毎日)

日米武器共同開発OK

対米技術供与には試作品までの共同開発も含む、と政府が新見解を表明。

(2・9朝日)

〔改憲〕

首相「私は改憲論者」

衆院予算委で明言。「政治日程には乗せぬが、国会論議は自由にと、改憲志向をより明確に。」

(12・14読売)

戦後の枠組みを改革

改憲も含めて積極的に取り組む、と首相施政方針演説。

(1・24日経)

〔教科書問題〕

正誤訂正申請にすくむ出版社

高校社会科教科書の問題記述を早急に正そうと、執筆者が一律に出版社に正誤訂正を要求。出版社側は、文部省の一切認めぬという強硬姿勢に、二の足。

(9・5、21朝日)

教科書検定を見直し

教科書制度の改革案を検討中

の中教審は、検定の密室性を改善し、わかりやすい検定のための改革案を中心に再論議していくと九月答申の延期を決定。

(9・12朝日)

「侵略」記述復活を申請

五四年度分中学社会科教科書の「部分改定」検定の申請を七出版社が提出。文部省は検定基準変更後に認める方向。

(9・25朝日)

「教科書検定の政府説明は

法廷発言と矛盾」

「第一次永教科書訴訟」原告弁護団は、「今回の政府の対応は裁判で国が主張してきた検定の無謬性と矛盾。この是正約束で従来の検定が誤っていたことを認めるのか」と釈明を要求。

(10・23朝日)

教科書検定基準は正答申

①社会科検定基準に「アジア

諸国には国際理解と協調に配慮する」の一項を追加、②来春使用分の高校歴史教科書は改訂検定の時期を繰り上げて五八年度に、と検定調査審議会が答申。記述は正の具体策には触れず、新検定方針も不明瞭。

(11・16、17各紙)

〔靖国問題〕

「戦没者の日」初の式典

靖国神社公式参拝への道を開くもの、と抗議を受けながらも閣議決定されて一回目の八月十五日。日本武道館で政府主催の記念式典。

(8・15各紙)

国家行事色強まる建国記念日

総理府・文部省・自治省後援で奉祝式典。初の首相祝電も。紀元節の歌、神道の公式作法である拝礼に続き、八紘一字肯定論も飛び出す戦前の紀元節さな

がらの雰囲気。岩手県では「靖国神社国家護持」などの決議を奉祝県民大会で採択。国家行事化に反対する市民団体、キリスト教団体は各地で抗議の集会、デモを。

(2・12各紙)

〔反戦の動き〕

反核テーマに高校文化祭

被爆者へのインタビュー、映画「にんげんをかえせ」などの上映、資料展示、研究発表や教科書問題など、社会に目を向けたものが目立つ各地の文化祭。

(9・3朝日宮城)

ナイキ訴訟に門前払い判決

自衛隊の合・違憲性を問う争いでもあった長沼ナイキ訴訟で最高裁は、保安林解除の不利は解消されているとして住民の上告を棄却。憲法判断に触れぬまま国側勝訴で幕。「基地がある限り闘う」と反対派住民。

(9・9各紙)

反戦詩人の会 結成

かつて詩人たちがおかしな戦争賛美を恥じ、埋もれた反戦詩の発掘や各地での朗読会など、詩を通じて反戦・反核を訴えていること。

(9・23読売、10・1、3朝日)

「国防」に押し切られ……

軍事基地の公共性か、周辺住民の平穏な生活か、が争われた厚木基地騒音訴訟で、横浜地裁は過去の損害賠償は認めながらも、防衛行政に民事は不適と夜間飛行差し止めは却下。「被害は認めたのにがまんしろというのか」と原告住民の間から怒りの声。直ちに控訴の方針。

(10・20各紙)

徳島県が「非核」宣言

二〇日、県議会が全会一致

で。都道府県レベルでは初めて。

(10・21毎日)

中小経営者、反核に立つ

平均六〇歳、子や孫のためにと京阪神中心に千余人が署名を添えて、米ソ首脳へ核廃絶を求める声明文。

(10・21朝日)

大阪・反核五〇万人集会

「核よ、戦争よ、地球からなくなれ」をスローガンに二四日、「82反核・軍縮・平和のための大阪行動」。核廃絶を訴えて、「人類の終えんと地球の破滅を防ごう」との「大阪アピール」を採択。

(10・25各紙)

戦争止める教育を

二六―二九日、広島で、世界教職員団体総連合が主催して、「軍縮教育国際シンポジウム」。世界各国から二百余人の教育者が参加、広島・長崎の被爆体験を子どもに伝え、平和・軍縮教

育を進めよう、とのヒロシマアピールを採択。

(10・25―30各紙)

女性の力で核廃絶を！

二七日、〈核兵器廃絶と軍縮を実現するために婦人の行動を広げる会〉が、東京のひばりが丘団地、多摩ニュータウンで反核対話集会。約一五〇人に参加して、「平和のために一票をどう行使するか」など活発に討論。

(10・28読売)

反核紙芝居が米国へ

宮城県泉市の主婦常盤洋美さん(三九)が平和への願いをこめて作った「おじいさんにできること」。

(11・2朝日)

映画で考える「侵略」の実態

仙台の市民グループ〈核と戦争、そして福祉を考える一人、二人、三人の会〉が、「侵略」を様々な角度から取り上げた映

画の連続上映会。市民一人ひとりが侵略の歴史を見つめ直そうと。
(11・12朝日宮城)

「平和貢献こそ真の教育」

長野県高校長会が一五日、全員一致で「核兵器廃絶を切に念願し訴える」との意見を採択。
(11・16朝日)

私たちの反戦マラソン演説会

〈戦争への道を許さない京都女の集い連絡会〉が八日、京都・四条河原町で。約二時間にわたり女性の立場から反戦をアピール。
(12・3京都、14朝日)

「反戦」へ行動する女たち

〈戦争への道を許さない女たちの連絡会〉が四日、東京・清水谷公園で「ストップ軍事費! 女たちの大蔵省アクション」。軍事予算増大に抗議して大蔵省まで仮装デモ行進。増大ストップ

プの要請書を手渡し。

(12・6読売)

欧州中部に非核地帯を

スウェーデンのバルメ首相が

東西両陣営に提唱。

(12・9朝日)

軍縮へ国際運動を

八二年度ノーベル平和賞を受賞したスウェーデンの元軍縮相アルバ・ミューラー女史が、受賞記念講演で、現代社会への警告や危険な傾向を告発し、軍縮だけでなく軍拡がもたらす弊害を真正面からとらえる世界的な平和会議を八三年中に開催するよう呼びかけ。
(12・10、14朝日)

中曽根首相の姿勢を憂う人

全員集合!

七日、東京・九段北の私学会館で「同憂懇談会」。「中曽根内閣は安保体制を強化し、改憲ま

で突っ走る恐れがある。それに對抗する市民運動を」と呼びかけ人の一人、小田実氏。
(2・8毎日)

「核戦争防止医師の会」

一二日、全国交流集会。草の根運動の取り組みを強めること、六月・オランダの「核戦争防止国際医師会議」に代表を送ることを確認。
(2・13朝日)

草の根運動、息長く

核兵器廃絶の願いを一人ひとりの心に定着させて、草の根の永続した運動としていこう、と〈核兵器禁止・軍縮と平和をめざす愛知県センター〉が会員拡大大地域での平和集会など、本格的活動スタート。
(2・18毎日中部)

〔その他〕

「満洲建国之碑」の建設中止

「教科書の『侵略』書き換えが問題になっている際、中国の誤解を招く」と、募金やめ返還へ。
(9・17読売)

「保安処分」協議打ち切り

議論は出尽した、と法相が日弁連との協議打ち切り、三月国会への法案提出の意図を表明。「国民各層の批判を無視している」と日弁連は協議続行を要求、刑法「改正」へ反対決議。
(10・20、26、28読売)

参院比例代表制

違憲訴訟却下

改正公選法は「法の下の平等」を定めた憲法十四条などに違反するとして中央選管に、来年夏の参院選の事務差し止めを求めている地方議員一三人の行政訴訟に対して、東京地裁は「この種の訴えは、行政事件訴訟法の条文にも根拠がないので不適当」と門前払い。

(12・16朝日・日経)

旧軍の石碑、なぜが続々

軍港として栄えた呉市では一年に六基もの慰霊碑。「以前に比べ堂々と建てられるようになった」との声も。「今のうちに」と旧軍関係者は奔走中。

(1・8朝日)

「指揮権発動は悪でない」

秦野法相が、指揮権問題に言及して。また総評の田中元首相批判デモは騒ぎ過ぎで感心しないとも。(1・26、28日経)

心神耗弱者も対象に

法務省が一六日、保安処分の対象拡大の意図を明らかに。処分を言い渡された者を収容する精神病院を独自で設置する、など制度の細目を日弁連との意見交換会で発表。

(2・17日経・道新)

「スパイ防止法の検討を」

二三日の衆院法務委員会で秦野法相が立法化の必要性を強調。(2・24日経・朝日)

徴用は合憲?

徴兵制と徴用、徴発は別、公共の福祉のためには基本的人権の制限は許されており、有事の際の徴用は合憲、と角田法制局長官。(2・24朝日)

海外

米、教科書を民主化

NOWをはじめとする女性グループなどの運動の成果もあり、女性と少数民族に対する差別と偏見が一掃。「インターナショナル・ヘラルド・トリビューン」より。(9・15読売)

バングラ婦人の自立の支援を

バングラデシュの人口問題と取り組む民間組織CHCP(キリスト教協議会保健プロジェクト)の責任者マラルさんが来日。農村婦人の自立をめざす授産活動によるジュート製品等の購入協力呼びかけ。(9・29朝日)

試験管ベビーで生体実験

世界初の試験管ベビーを成功させた英国のエドワーズ博士が、受精した胎児を母体に戻さず実験材料に使用し、一七体すべてが死亡。(9・29読売)

避妊もコンピュータで

スイス人建築家エドモン・ジャックさんは、安全期間の計算などではほぼ一〇〇%確実に避妊できるミニコンを開発。WHO保証で来年から欧州と北米で販売の見込み。値段は約五九ドル

(約一万五千円)。

(10・14毎日)

女性解放 アラブ随一

イスラム世界にあって親による結婚の強制、一夫多妻、夫からの一方的離婚の言い渡し、顔を覆うベールをも廃止したチュニジアでは妊娠中絶も自由で無料。大学生の四〇%は女子。独立の父ブルギバ大統領のアラブ的伝統と西欧文化の調和策は歴史と民族性に根ざした実験ともいえる。(10・15西日本)

インド女性、まだ低い地位

インドの開発研究所教授リーラ・デューベ女史が来日。階層、宗教、貧困問題等が、同国の女性問題を特殊化し複雑化している、と語る。(11・11朝日)

避妊に朗報

スイスで月一回の服用で副作

用もない経口避妊薬を開発。生理予定日の二日前の服用で受精卵も排出される。実用化は八四年。
(11・21京都)

一人っ子なら絶対男の子

人口抑制のため一人っ子政策を進める中国で、女兒殺し、女兒出産後の母親虐待があいつぐ。ゼロ歳から五歳までの男女比が五対一の地区も。封建制の亡霊が深刻な社会問題化。
(11・22—2・17各紙)

ケニア、四女性が議会初当選

八五年国連婦人の十年最終世界会議の開催地ケニアの婦人問題担当者、E・O・J・ワンデカさんが来日。文盲追放、水道改善で組織が作られ、七九年の議会選挙で四人の女性が当選。全国で一万一三六五の婦人グループが活動中、とケニアの女性の現状を語る。
(11・24読売)

仏、女性議員進出に冷水

市町村議員定数の七五%は同性であってはならないと決めた選挙法改正案に違憲判断。与野党は強く反発、骨抜きめざす。
(11・29毎日)

仏、中絶費を公費負担

八三年一月から中絶の社会保険費を国が補てんするというもの。全国七百か所の公立病院で匿名で手術を受けられるようになる。
(12・3毎日)

英、婦人デモ米基地包圍

米国の巡航ミサイル配備の準備が進むグリーンハムコモン米空軍基地を、一万二千人の女性デモが包圍。一年三か月前から同基地前でがんばる「平和キャンプ」の核配備決定三周年を記念しての呼びかけに、英国内はじめ、欧州、米国の女性も呼応。
(12・13朝日)

苦悩するアフリカの母親たち

ジンバブエ婦人会事務局が農村婦人の声を集めた小雑誌「重荷をしょって」を編集。伝統と慣習に苦しむ十代から七十代まで約三千人の姿が。政府は女性問題省を設け、四人の女性閣僚を迎え積極的に女性問題を処理。
(12・19毎日)

漢方薬で流産

人口増に悩む中国が二〇年がかりで開発に成功。妊娠初期に飲むだけで流産できる。
(1・18毎日)

結婚と離婚の自由化進む

ローマ法王がこのほど署名、成立した新教会法は、結婚・離婚の制約をゆるめ男女平等を強調。一方、墮胎は破門と、いぜん厳しい規定も。
(1・27朝日)

障害を持つ体外受精児は……

——二万ドルで行う体外受精児の代理出産が過去二年間で百件にのぼるという米国で、障害をもって誕生した赤ちゃんの引き取りを双方が拒否、裁判に。
(1・30朝日)

「初夜権粉砕決議案」

女子社員に雇用をエサに関係迫り、拒否すると解雇で脅すケースがEC諸国で激増。中世の「初夜権」にも等しい男性横暴、と仏のイベット・フィエさんが欧州議会に提出。
(2・5毎日)

韓国、中・高校の制服廃止

新学期(三月)から「日本帝国主義の遺物」を全面廃止。すでに自由化されたヘアスタイルとともに、中・高校生の服装論議は非行問題ともからみ全国的に活発化。
(2・22読売)

汚染の町、政府が買上げ

ベトナムの枯れ葉剤として悪名高いダイオキシンで町全体が汚染された米ミズーリ州タイムビーチは、費用の九割、七五億円を連邦政府が負担し、町ぐるみ移転。
(2・23読売)

ソ連、性教育を必修科目に

世界一の離婚率と若者の性の乱れに対応策として全国の学校で採用。離婚の激増による出生率の急落が真の原因とも。米誌「タイム」より。
(2・28日経)

事件

赤ちゃん哀れ

生後五か月の長女が泣きやまぬのに腹を立て、投げ落として

死なせた一八歳の父。

(10・18毎日)

生後四か月の長男を、泣きやまぬと殴り殺した一八歳の母。

(11・7毎日・朝日)

生後三歳の長女が便をもらしたのに腹を立て浴槽漬けて溺死させた二九歳の母。

(11・7毎日・朝日)

女教師が覚せい剤密売？

下関市内の私立女子高校の元助教諭、二五歳。現職時に密売の容疑で取調べ。教育関係者にショック。
(10・18各紙)

園児に大ヤケドの体罰

大牟田市の保育所で、保母がしつけの一環として、園児の手を石油ストーブに押しつけ、一か月以上のヤケドを負わせ、偽りの報告で済ませていた。

(10・26西日本)

病苦の家出、植込みに三昼夜

六三歳の老女、墨田区の植込みで衰弱死を待ち、自殺。

(11・10読売)

国立小児病院で手術ミス

心臓手術で、同じ医師が二回も。内部告発で明るみに。

(1・4朝日・読売)

中学生、浮浪者を無差別殺傷

横浜市内で一〇人の少年が浮浪者に連続暴行し、三人を殺し、一三人に重軽傷を負わせた。「汚いので退治しよう」と思い面白半分にやった、浮浪者を追い回すのが楽しかった」と自供。

(2・12各紙)

暴力生徒を先生が刺す

東京、町田市立忠生中で、生徒の暴力におびえた教師が、果物ナイフで自衛、生徒は胸に一日間のけが。
(2・16各紙)

切り抜き運動をする方、ご連絡を

女が生き生きと活動する日、子殺しや心中がなくなる日を目指して、新聞切り抜きを続けています。しんどい仕事ですが女の情報収集活動の一つとして参加する方、また切り抜いた新聞を要約する仕事をする方、ぜひご連絡ください。図書券ですが、薄謝が出ます。

〔申し込み先〕

〒160 東京都新宿区新宿1の9の6 あごら編集部・新聞切り抜き係
ハガキに住所・氏名・連絡先電話番号、購読新聞紙名、切り抜きやリライトの経験の有無を書いてお申し込みを。

あなた自身の本をどうぞ――

自費出版のおすすめ

随想集・研究論文・私的な女性史・詩集・句集・歌集・童話・絵本・遺稿集など……

「こんなもの……」とお思いになるものでも、他者にとってはすばらしい値打ちのあるものも、たくさんあります。活字に残しておくことが、貴重な女性史の証言になることも……。

一般的に広くおすすめしたいと思うものは、BOCの出版物として、全国的に販売することも可能です。具体的にご希望を出してご相談ください。

創業20年、プロフェッショナルな編集者が、あなたのご企画、ご予算に添って、編集から造本まで、お引き受けます。

BOC出版部

あなたの声のアルバムを――

カセットプリントのおすすめ

講演・研修会・座談会・音楽会・発表会・思い出のつどいなど……

録音テープをお送りくだされば、何部でも、プリントをおつくりします。場合によっては、編集や、BGMなどもお入れします。美しいケースも、用意できます。

ビデオ・カセットのコピーもお引き受けします

学習会などにご活用ください。

お問い合わせは東京都新宿区新宿1の9の6 BOCへ。

BOC視聴覚部

窓

女性差別撤廃条約の批准に向けて

一九八〇年、コペンハーゲンの「国連婦人の十年、一九八〇年世界会議」の席上、「女性に対するあらゆる差別撤廃条約」に署名した日本政府は、いま苦しい立場に立たされている。署名国のうち四十五か国がすでに批准、八一年九月三日からすでに国際条件として効力を發揮しているこの条約を、おそくとも一九八五年までに批准しなければ、「先進国」として立つ瀬がない。

い。しかし、同条約は、「国内法の整備」を義務づけており、日本は、少なくとも、国籍法の改正、雇用平等法の制定、家庭科の男女共修の三つは実現しなければ批准がむずかしい。この三つのうち、最も早くから着手された国籍法改正は、二月一日、中間試案が出た。雇用平等法も準備がすすめられている。とはいえ、問題はないのだろうか。

救われない沖縄無国籍児 特定民族を想定した帰化制度

——右傾化路線の中の国籍法改正中間試案——

現行国籍法における父系血統主義（子の国籍は父親の国籍となる）は、憲法第十四条、

として、早くから改正の要請があったが、性差別撤廃条約の署名を契機に審議がすすみ、このほど中間試案がまとまった。全文は、本号資料篇（三七六ページ）に掲載されているが、法律家はじめ、各方面から、多くの問題点が指摘されている。

●憲法上の要請を超えた大幅な改正

男女平等の原則を貫くためには、父系主義を父母両系主義に改め、帰化条件の男女差別（夫が日本人であれば外国人の妻は無条件に帰化できるが、妻が日本人である場合は、その夫は引き続き三年以上在日していなければ帰化できない）を解消しさえすれば十分なはずである。が、法務省では、この際抜本的な改正を、と、改正の範囲を拡げた。国籍法制定以来三十年、現状に合わない部分があるというのが審議会の意見だが、はたしてそれだけだろうか。

従来の父系血統主義が、父母両系主義に改められ、父母のどちらが日本人であろうと、その子は日本国籍を取得できる法案が用意されたのは、遅すぎるとはいえ、一つの前進だが、大きな前進に見えるこの改正にも、いろいろなおとし穴が用意されているのではないかという懸念の声が、各方面から上がっている。

●色濃い家父長思想

生まれた子の国籍については、「血統主義」と「生地主義」がある。アメリカなど「生地

主義」をとっている国では、両親が何国人であろうと、生まれた子はアメリカ国籍を得ることができ、が、「血統主義」の国では、どこまでも血統を重視する。従来、父方の血統のみを重視していた日本が、「父母双方の血統」を等しく尊重することになったのは、性差別解消の見地から言えば、もちろん大きな意味をもつ。

今度の改正では、従来「嫡出子」だけに限られていた国籍の取得を、「準正子」（出生時点では父母は婚姻関係になく、出生後父母が結婚した子、または出生後認知された子）についても、条件によっては、日本国籍の取得を認めることとした。血統主義に立てば当然の措置とも言えるが、一応評価したい。しかしその条件の第一は、子が認知されていること、その子の生活状態が「日本人父の庇護下にある」ことである。これは、明らかに、家族共同体的な思想と言えよう。父とのつながりの強い子や、祖父母、親せき、養護施設などで育てられている子は、日本国籍を取得できない。

父が死んだ場合は親権者は父ではないし、再婚して父が親権者でなくなっている場合も

あろう。父の庇護がない子ほど、社会の庇護が必要なのに、逆に冷遇されているのは残念である。審議会は、「子が、外国人の養子となった場合を考慮した」と言うが、そのようなむしろ稀少例を基準にして考えるのは、逆ではないだろうか。

●個人の権利よりも、国家の政策を優先

このような疑問に対し、審議会は、「出生以後の身分の変化によって生じた条件については、国の政策を先行させてよい」という見解を示している。

しかし国民としての平等の原則から言えば、出生時から認められていようと、後に認知されようと、その子がその父の子であることに変わりはないはずである。個人の権利よりは、国家の立場を優先するもの、と言われども、やむを得ない。

●早すぎる意思決定の時期

外国籍にすでに入っている子が日本国籍を得たいときは、満二十歳までに、外国籍を放棄し、日本国籍を選択するという手続きを行なうことになっている。

しかし、年齢の上限は、二十二歳ぐらいま

でに引き上げるべきではないだろうか。二十歳までに手続きをしないと、十代のうちに決断しなければならぬ。成人に達してから熟慮していい問題ではないかと思われるのだが……。

その一方、申請の下限年齢は決めていない。これでは、本人の考えが確立しないうちに、あるいは意思表示ができないうちに、「親の意思」などによって申請される心配がある。少なくとも、満十五歳以上を、下限とすべきではないだろうか。

なお、未成年者の場合は法定代理人が届け出るようになってくるが、法定代理人は、通常、父母両方を意味する。父母の一方が賛成しない場合、あるいは父母が同居していない場合もあり得るわけで、「法定代理人」とするよりは、「父母のいずれか、または後見人」で十分ではないかと思われる。

●事実上、国籍取得が難しい立場の人も

外国籍を放棄し、日本国籍を選択する旨の手続きが行なわれると、法務大臣は、それに基づいて、相手国に外国籍の離脱を催告する。期間内にその手続きがされない時は、日本国籍を失うことになる。

しかし、たとえば、現在日本と国交のない朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）などを祖国とする人は、外国籍離脱の手続きがとれない。また、国交はあっても政情不安の国も多い。こうした時にこそ、国家が外交交渉などを守るべきではないだろうか。

また、「このような手続きをしないと、あなたは無国籍になりますよ」という警告を、早めに、度々行なわないと、無国籍になる人が出てくるだろう。無国籍になったからといっても、相手国に受け入れ体制がない場合は強制送還されることはないが、就職、結婚など、あらゆる面で不利になることは間違いない。

●きびしくなった帰化条件

配偶者が日本人である場合、夫が日本人でも、妻が日本人でも、それぞれの配偶者の帰化条件が同一になったことは、男女平等の原則から言ってももちろん喜ばしいことだが、思いがけぬおまけもついた。従来は、夫が日本人の場合、配偶者は、婚姻と同時に無条件で日本国籍を取得できたし、妻が日本人の場合、その夫は三年の在日期間があれば帰化できたが、今回の改正案では、どちらの場合

も、婚姻後一年、在日期間三年、または在日期間一年、婚姻後三年という条件が必要になった。従来に比べて帰化条件がきびしくなったわけで、「婚姻継続期間は条件にしない、居住要件は、つけるとしても二年で十分」という声が強い。

また、本人または配偶者が、「独立の生計を営むだけの資産または経済力を有すること」という条件を設けたが、「夫婦の資産および経済力を合わせれば独立の生計を十分営むことができる」に緩和してもいいのではないかと思われる。

●新たな人権問題―帰化の「取り消し」

国籍法改正にことよせる、帰化対策の一つとして、新たに打ち出された「帰化の取り消し」も、大きな問題になっている。擬装結婚によって帰化する例が多い、というのが、これを加えた理由だが、本当に擬装結婚だったかどうかという判定はむずかしい。もともと日本の帰化申請手続きは非常にめんどうで、経歴、資産、前科、家族調査など、おびただしい書類の提出が必要なうえ、十指全部の指紋をとられ、警察が厳重な聞き込み調査を行なうなど、そのきびしさは世界でも有名であ

る。そのうえに、一応申請後五年の条件つきとはいえ、あえて帰化取り消し制度を設ける必要があるのだろうか。「特定の人びとに対する過度の警戒」の印象を禁じ得ない。不服とする者には、一応、行政訴訟の道が残されているが、国を相手にたたかうなどというのは、ふつうでは容易にできることではない。「重大な不正」とは何を意味するのか内容を明記すべきだし、不正に対しては刑罰で十分という声も多い。

●重国籍者の解消が問題というが……

憲法や、女性差別撤廃条項の要請を越える、このような改悪が試みられている背景として、審議会は、「重国籍者の解消」をしきりに主張する。法務省の主張では、父母両系主義になると、一年に一人ずつ重国籍者がふえるという。国によつては、兵役などとの関係から、国籍離脱を認めない国も多いし、日本人であり、かつ外国人である人が、外国の兵役に服するようなことがあると、国際紛争にまきこまれる心配もある。教育、戸籍、民法などの問題も多い、と懸念している。しかし、現在の国籍法九条では、「外国の国籍を有する日本国民は、日本国籍を離脱することでも

きる」としており、これは、「重国籍も認める」ことを意味している。今まで、重国籍によつて問題が生じたという例は、ほとんどないと言つてもいいのに、にわかには帰化条件をきびしくしたり、重国籍問題をことさらに強く懸念する本音は、日本に在留する国際結婚者の大部分を占める、朝鮮系の人びとの日本国籍取得を強く懸念しているものと疑われてもやむを得まい。

●一方、救いのない沖縄無国籍児

国籍法に関して、早くからクローズアップされ、陳情・請願も続いていた沖縄の無国籍児問題には、しかし、残念ながら救いの手はさしのべられなかった。

沖縄が基地化したことによつて、沖縄では多くの混血児が生まれたが、生地主義をとるアメリカ人の父と、父系血統主義をとる日本人の母との間に生まれた子どもは、どちらの国籍もとることができないため、就学、就職、結婚、その他、いろいろな面で不利な立場に立たされてきた。父母両系主義になれば、母親が日本人であれば日本国籍をとれることになるはずだが、国籍選択宣言を、満二十歳までに行なわなければならないとする今

回の案では、すでに二十歳を越えている子の権利は回復されない。法案の審議が遅れば遅れるほど、二十歳に達する無国籍児の数はふえる。最も救済の必要な人びとを最優先して早急に手を打つべきではないのか。

●国際的状況に名を借りた非国際的な試案

国際人権規約でも、女性差別撤廃条約でも、「親の権利」よりは、「子の権利」を重視しようとしている。国際結婚であろうとならうと、生まれた子どもにも変わりはないし、子の権利は何者にも侵されてはならない。その子が、どの国の国民となるかを決める権利は、誰よりも子ども自身にある、というのが、今や国際的な考え方になっている。また、国際化時代を反映して、帰化の条件も緩和されつつある中で、父系血統主義打破を表面板にしつつ、民族主義や家父長思想の色をあらわにした今回の中間試案は、「日本民族による自主憲法」帰帰の動きと、相通じるものが多いように思われる。

いずれにしても、国籍の問題は、国際関係と深い関わりを持つ。最近では、海外在留邦人のうち、アメリカなど、生地主義をとる国で子を産んだ両親が、日本の戸籍に届け出を

しない例もふえているという。今回の改正案は、その対策も兼ねていと言われるが、将来の兵役予備軍としての日本人の把握もねらったと言えば疑いすぎになるうか。現在、兵

役のない我が国に、帰化志望者が殺到することを恐れて、帰化制限を強化した、とは、お義理にも言えない気がするが、ともあれ、それぞれの「国」が、現在の「県」ほどの意味

になり、国籍などに目くらまら立てなくてもよくなる日、世界のすべての国から兵役の義務のなくなる日を祈らずにはいられない。

(大原 立)

婦人差別撤廃条約を武器に

真の男女平等法制定を要求しよう

——こんなに違う、平等の前身——

男女平等問題専門家会議の報告書が出てからすでに一年近くを迎えようとしています。

ひき続き男女平等についての審議が続いている婦人少年問題審議会の結論も、今秋にはまとめられ、年末には政府の手による平等法案が上程されようとしています。平等法をめぐる情勢はきわめてさしせまってきました。

この日程にあわせて、労働省内に設けられた男女平等法制化準備室では、現在も、平等法案の検討が続けられています。準備室では、粗雑なやり方ではなく、周到な配慮のもとに作業が進められているにちがいありません。なぜなら、男女平等法は、単に政府や資本の意のままにつくられるのではなく、これにはさまざまな条件がからんでいるからです。

その一つは婦人差別撤廃条約です。あくまで八五年までにこの条約を批准するための平等法制定ですから、この条約に違反するような平等法であってはならないのです。

もう一つは、国内の労使の力関係です。三者構成である婦人少年問題審議会の審議はこれを反映して進んでいるため、政府はこの結論を尊重しながら平等法づくりを進めなければならないのです。

かつて、私たちの会で労働省にかけ、「婦人差別撤廃条約にもとづいた平等法をつくるよう」要請したところ、労働省は「条約には解釈のむずかしいところもいろいろあるので、現在、外務省で婦人差別撤廃条約の解釈について検討しています」と答えています。これ

は、制定されるべき平等法が条約に適合した内容のものでなくてはならないことを十分労働省が承知していることをうかがわせる発言ですが、決して安心することはできません。うがった言い方をすれば、これから制定しようとする平等法案から見ても、どこまで条約の解釈をねじまげ、条約に適合した平等法だと言いはれるのかを検討していることも推測されるからです。たとえば、『あごら』27号でも紹介したような「条約は暫定措置（アフターマティブアクションなど）をとつてもいい」とは書いてあるが、とらなくてはならないということではない」というような条約の基本をねじまげた解釈さえしかなない危険も大いに予想されるところです。

このように、政府は、差別撤廃条約と、婦人少年問題審議会に代表される労使の力関係をにらみながら、平等法づくりを進めているわけです。このことをおさえるならば、働く女の立場に立った真の男女平等の中身をかかげ、これにもつづいた平等法制定を要求するのみならず、差別撤廃条約をその武器として利用していくことが必要だと思っています。

「婦人差別撤廃条約に適合した、真に平等実現に役立つ平等法をつくれ！ 婦人差別撤廃条約に違反する平等法はいらない！」と。

より多くの女たちの連帯のもとに、より声を大にして、叫ぼうではありませんか。

*

すでに経営者側は、彼らの意図にそった平等の内容を徹底すべく、現場での先行実施もふくめた精力的な動きを進めています。これからの私たちのたたかいを強めるために、婦人差別撤廃条約という男女平等と、彼らの男女平等とがどう違うのかを、ここにまとめてみたいと思います。

(1) 婦人差別撤廃条約における男女平等と

経営者団体の主張する「男女平等」

① 平等の基本理念

条約——基本的人権としての男女平等

経営者団体——企業の活力低下をもたらさぬ範囲での「男女平等」

婦人差別撤廃条約(以下条約と略す)には、「婦人に対する差別は権利の平等の原則及び人間の尊厳に違反するものであり」(前文)、「男子との平等を基礎とする人権及び基本的自由の行使及び享受を婦人に保障することを目的として……」と述べられています。つまり条約は、基本的人権として男女平等をとらえています。

一方、東京商工会議所は、「当面の労働行政に関する意見」(八二年七月)の中で、「雇用における男女平等を法制化する動きが強まっているが、企業の活力低下をもたらさぬことを前提に、国民各層の合意に努めるべきであり、法制化については慎重に対処することが必要である」と述べています。これは基本理念というより、生産性をとにかくおとさない範囲内で「男女平等」を考えるという、彼らの姿勢を示すものです。いや、生産性は人権に優先するというのが彼らの基本理念だといってもいいかもしれません。

② 何を差別、何を平等というのか

条約——性別役割分業にもとづくあらゆる分野の差別↓実質的男女平等

経営者団体——生産性から見て不合理な男女の格差↓形式的男女平等

条約は、男女の差別を広い視点から全体的にとらえています。一条には「この条約の適用上『婦人に対する差別』とは、性に基づく差別、排除、又は制限であって、政治的、経済的、社会的、文化的、市民的、その他いかなる分野においても、婦人(婚姻しているか否かを問わない)が、男女の平等を基礎として、人権及び基本的自由を認識し、享受し、又は行使することを害し又は無効にする効果又は目的を有するものをいう」とあります。そして、「社会及び家庭における男女の伝統的役割及び婦人の役割の変更が、男女の完全な平等の達成に必要であることを認識し」(前文)と述べられています。

一方、条約十一条(イ)では、雇用の機会と待遇の平等の措置を義務づけるとともに、(ロ)においては、母性を理由とした差別を禁止するのみならず、効果的に労働の権利を保障するための措置(保育所の充実など)をも義務づけています。さらに四条では「男女間の事実上の平等を促進することを目的とする暫定的な特別措置は差別とみなしてはならない」とことを明記しています。

このように、条約は、平等実現を単に女の意識や能力、母性保護の撤廃に求めてはいません。形式的に男女平等を考えれば、特別措置や母性保護は女を厚遇することになり、男を「差別」することになるにもかかわらず、むしろ、この必要性を唱えています。条約は伝統的な性別役割分業の中で歴史的につくられて維持されてきた女の差別の状態を、総合的に把握し、これを実質的に不平等の状態だととらえ、それゆえに、男女平等を、実質的平等として積極的に実現しようとしているわけです。

しかし、関西経営者協会は、「労働基準法の改正に関する意見」(八二年)の中で、「男女の差別は女子を不利に扱うことはもちろん、母性保護(妊娠・出産)を除いて、女子を有利に扱うことも禁止することにある」とし、時間外労働規制の緩和や深夜業規制の削除など、具体的な保護見直しを要求しています。

経営者側は、男女平等を雇用の分野に限定し、きわめて一面的、形式的にとらえています。

すなわち「生産性が同じなのに、女のほうが賃金が安いのは差別(不合理な差別)であ

るが、生産性が劣るなら差別でなくて当然の結果(合理的な差別)である」というように、生産性をものさしにして差別を測り、この不合理な差別のみをなくすことが平等であるというのです。このように差別を定義づければ、差別をなくすには、男女が同じ生産性を保つことが必要になる、すなわち「女の妊娠出産時の保護以外を撤廃し、男女が全く形式的に同一に働くことが必要」となるわけです。そして、機会だけを均等にし、あとは個人の意欲と能力に応じて競争すればいいというのです。東商工及び関経協の意見書は、共に「機会の平等に限る」ことを強調しています。

たしかに、条約も機会の平等をうたっていますし、募集、採用、訓練、昇進の機会の平等さえ、現在の日本には無いわけですから、機会を平等にすることは必要です。しかし、現実の女の状態を見れば、女は家庭責任を一手に担わされており、保育所などの社会的条件も不備な状態で、働き続けることすら困難な状況にいます。そのうえ保護を返上すれば、女は、健康に働くことさえ不可能になるでしょう。機会のみを平等にしても、このような女の状態が変わらなければ、機会を利用する条件は、女にとってきわめて不利なものにな

ります。

このように、機会の利用条件の平等を含めた「機会の平等」のみならず、特別措置などの必要性をうたって女全体が平等を手にすることができるような「結果の平等」の実現をもめざしている条約の「平等」と、「機会の平等に限る」という経営者側の「平等」とは、大きな差があるといえるでしょう。

③母性保護

条約——母性保障、健康に働く権利の保障、経営者団体——妊娠出産時の母性保護のみ認める。

条約でいう母性保護とは Maternity Protection であり、日本でいう広い意味の母性保護ではなく、妊娠出産時の保護をさしています。産休、妊娠時の通勤緩和措置や危険有害業務の就業制限、軽易業務への配転、解雇制限などです。しかし、妊娠出産時以外の保護も、表現はちがいがこそすれ、積極的に認めています。

条約十一条(f)には「作業条件に係る健康の保護及び安全(生殖機能の保護を含む)についての権利」を明記しています。ここにてらせば、日本における女の残業制限、深夜業の禁止、危険有害業務、生理休暇等は必要な

ものとして解釈することができます。なぜなら、日本の労働条件はあまりに劣悪であり、そのうえ、残念ながら家庭責任はほとんど女だけに担わされている以上、女が健康かつ安全に働くには、せめてこれくらいいの保護は必要最小限だと言えるからです。「医学的専門家の立場から見た女子の特質」においても、既婚女子の残業は、そのまま睡眠時間の短縮につながり、入浴率の減少すらおこっていると報告されています。この状態で、さらに残業が今の男にならば（実態としてはほぼ無制限）、およそ働く女の健康は破壊されるにちがいないありません。

一方、男女の差別を撤廃するという観点から言えば、母性が保護され、女だけが健康に働いても、男が相変わらずひどい労働環境、ひどい労働条件で働いているのを放置しておいてはなりません。また、現状として家庭責任を担っているのは女だから、現状では女だけの保護として必要であっても、将来ずっと女だけの保護として固定されていいのだということにもなりません。また、これではいつまでも男女が家庭責任を共同分担することはできません。女の保護を男にも適用拡大し、男にも家庭責任を担えるような条件を

保障していくことが必要です。差別撤廃条約の後に成立したILO一五六号条約はこのことをより具体的に示しています。

④家庭責任

条約——両性の共同分担を保障→保護の男への拡大、全体の労働条件の底上げ。

経営者団体——家庭責任は両性にある→女の保護の撤廃、社会的条件の切りすて。

ILO一五六号条約とは、「男女労働者」に家庭責任を有する労働者の機会及び平等待遇に関する条約」という名称のとおり、家庭責任は男女で共同分担すべきとの前提で、これら家庭責任をもつ男女労働者が、家庭責任ゆえに差別されず、家庭責任を担ってもなお、スムーズに人間的に働ける権利を保障するものです。

これらの方向を見るならば、差別撤廃条約が、妊娠出産時外の保護を母性保護という言葉で表現してはなくても、これを保障し、差別の理由にしてはならないという立場に立っている」と解釈できます。

七八年の労基研報告は、家庭責任を担うのは男女両性であるとしながらも、だから女だけの保護はいらないのだと、条約とは全く逆の結論を導き出していました。

私たちは、今まで、次の世代を産むという社会的機能としての母性を保障せよと主張してきました。しかし、これだけではなく、女が健康に働くための権利としての保護の必要性とともに、家庭責任を両性が担えるように男にも保護を拡大適用し、労働条件全体を引き上げていくことの必要性を訴え、要求していくべきだと思います。これが、条約にのつとった平等実現の道だということを主張しつつ……。

(2) 女たちの連帯のために

——反平等主義の功罪

いま私たちは、働く女の未来を左右するような重大な時を迎えており、働く女たちの幅広い連帯が本当に問われている時だと痛感しています。この期において、女たちの連帯を困難にしているものの一つである女の側からの反平等主義について考えてみたいと思います。『あこら』27号に掲載された記念論文、深見史さんの「母子世帯より」を読んで、この思いにかられたからです。深見さんの論文の中には次のようにありました。

「差別は、はたして不平等によって生じたものだろうか？女が差別されるのは、男と平等

でないためだろうか？ 極端な例でいえば、アメリカの徴兵への女性参加である。兵役であれ、労働の場であれ、それを支える思想は一つである。男女平等主義は女を男なみの非人間的労働にひき上げ、生産性の前に自らを奴隷化することだ。

問題点のひとつは、深見さんは、「平等」という言葉を、経営者のいう「平等」と同じ意味（女が形式的に男と同一になること）と女の男への同化）でつかっているということです。内容としての反平等主義には大いに賛成ですが、このような意味で反平等を訴えれば訴えるほど、経営者側の「平等」観を裏面から支えることになりはしないでしょうか。すでに述べたように、条約をはじめとして、国際的な女性解放運動の流れの中では、決して深見さんのように「平等」をとらえてはいないのです。くりかえせば、実質的不平等の状態を差別と言い、差別からの実質的解放を平等と言うのです。また「女も兵役を」という主張は形式的平等観に支えられた要求だということをとらえておく必要がありはしないでしょうか。特に今日のような右傾化の時代、「平和なくして平等なし」との条約の思想性をもっと私たちが深く追求すべきだという問題提

起としては大いに意義あることだとは思いますが……。

そして、もう一つの問題点は、「女を男なみの非人間的労働に引き下げ、生産性の前に自分を奴隷化することだ」という表現にみられる深見さんの考え方です。確かに、長時間労働にいそむ男たちの労働のありようは決して人間的とはいえません。では、女は生産性の前に自らを奴隷化していいのでしょうか。男並みの長時間労働ではないにしても、男にはない保護を行使しているにしろ（これも一部ですが）、大きな差別を受けながら働く女たちはど生産効率のいい存在はないのです。ある経営者向けの本は、パートタイマーを称して「減量経営の守護神」だと言っていました。景気の調節弁としていつでも首を切られ、低賃金に甘んじているパート、そして、昇進昇格させられず安い賃金で働く正規の女たち。——差別に甘んじて働き続けている女は、生産性の奴隷ではないのでしょうか。女房・子どもを養うべく必死で馬車馬のように働く男たち、企業を目でしかものの見えない男たちと、女は企業に対する意識のとりこまれ方が違うのは事実です。しかし、性別役割分業観を受け入れ、それゆえに企業に自発的

にとりこまれ自らを奴隷化している男たちと、同じく性別役割分業観を受け入れ、それゆえに女にとって第二義的な務めである労働の場における差別に甘んじ、一方、仕事と家事の二重労働にあえいでいる女とに、どれほどの差があるのでしょうか。また、企業の奴隷と化した男たちの労働力を再生産すべく、主婦労働に甘んじ、その男たちに養われ、その男たちの出世と安定を願ってやまない主婦である女たちの問題を見のがすわけにもいきません。

今の男に同化しようとは思わない。——私もこれは深見さんと同じです。しかし、その反対に深見さんのいうように「むしろ女は、それまでの女のくらし、子どもと老人と『障害者』の『介護人』であった生活に、男をも引き入れる方向をとりたいたいものだ。それは社会化という名の国家管理ではなく、未来の関係を射程に入れた共同化であり、小さな共和国の道につながるであろう」とは、とても思えないのです。役割分業の歴史の中で、形は違いますが両性が共にもっている現在の矛盾を見ないわけにはいかなからです。私たちが追求すべきは、女の男への同化でも、男の女への同化でもなく、両性のもつ矛盾を止揚する

ものとしての「平等」です。しかし、平等法はあくまで個別の要求であり、平等法ですべての問題が解決できるわけではないのは当然のことです。ただ、解放につながる平等法なのか、これに逆行する平等法なのか、これが現在の私たちの闘いの課題だと言えるのです。

深見さんのいうように、アジアへの経済侵略国日本のおこぼれゆえの「豊かな」生活、その視点をもつべきだと思います。しかし、

だから平等を求めるなど言うならば、日本国内のすべての個別要求は否定されることになりかねません。

性差別、民族差別、障害者差別など、差別は重層的であり、互いに交差してあります。アジアへの経済侵略が、障害者差別が、どのように性差別と結びついているのか、共にたたかう視点をどこに求めるのかを検証し、整理していくことこそ必要でしょう。「平等」

という言葉の是非を評価するよりも、「平等」という言葉にこめるべき私たちが自身の思想を検証していくことのほうが、みのりある討論と私たちの連帯への道をひらくものだと思います。そして、解放への道すじの中で、平等要求がどのような歴史的価値をもてるのかを共に追求していったらと願わずにはいられません。(井ノ部 美千代) 私たちの男女雇用

平等法をつくる会

秋の中教審答申は

“共修”無視？

改「悪」の要素を含むにしても、法務省や労働省が、性差別撤廃条約批准に向けて国内法整備に取り組むなか、頑として重い腰を上げようともしないのが文部省である。

「教育の男女平等」は、差別撤廃条約の中の大きな眼目のひとつ。教育機関、教育内容、教師の言動、すべてに「平等」が貫かれなければならない。とりわけ「女子のみの家庭科」などは、「同一の教育課程」という条文に反するばかりか、性別役割分業固定化の基本と

して、世界各国からも注目されている。が、文部省は、「条約に反しない」の一点張り。

秋に答申を出す予定の中教審でも、一向に審議されていないという。ある委員の如きは、「共修騒動もおさまりましたな」と、うそぶいたとか。積極的な陳情、請願を行なわなにかぎり、この秋の答申では、共修には一言もふれられなくなる見とおし、と懸念されている。中央教育審議会の委員二十名中、女性は二名だけ。それも、小野清子さん、久保田キヌさ

んという保守系の二人。先行きは甚だ暗いと言わなければならない。

もつとも、審議会の中央、地方各委員の総数は八四〇八名。うち女性はい三六〇名、平均四・三％にすぎない。一〇％の中教審は、平均値をはるかに上回る(優良)委員会である。

政策決定の場に女性、それも良質の女性を送り込むことは急務のようだ。六月の参議院選挙、続く衆議院選挙の意味は、ことのほか大きい。

(R)

各省庁別一覧

(昭和57年6月1日現在)

区分 省庁名	委員が任命されている審議会数	婦人を合含む審議会数	委員数	うち婦人委員数	婦人委員の比率	職務指定		団体推薦	
						委員数	うち婦人委員数	委員数	うち婦人委員数
総理府	31	13	552	28	5.1	133	0	32	2
行政管理庁	1	0	18	0	—	7	0	—	—
北海道開発庁	1	0	20	0	—	10	0	—	—
防衛庁	2	0	16	0	—	14	0	—	—
防衛施設庁	10 { 1 9	1 { 1 0	135 { 14 121	1 { 1 0	0.7 { 7.1 —	—	—	—	—
経済企画庁	2	2	54	4	7.4	—	—	—	—
科学技術庁	3	1	55	1	1.8	2	0	—	—
環境庁	5	3	171	7	4.1	—	—	—	—
沖縄開発庁	6 { 1 5	1 { 0 1	86 { 29 57	2 { 0 2	2.3 { — 3.5	15	0	4	0
国土庁	6	3	122	4	3.3	21	0	31	0
法務省	56 { 6 50	12 { 2 11	615 { 83 532	16 { 4 12	2.6 { 4.8 2.3	23	0	2	0
外務省	1	1	5	1	20.0	2	0	—	—
大蔵省	24 { 14 10	7 { 7 0	489 { 248 241	11 { 11 0	2.2 { 4.4 —	27	0	19	0
国税庁	26 { 3 23	3 { 2 1	376 { 33 343	4 { 3 1	1.1 { 9.1 0.3	—	—	—	—
文部省	11	8	459	23	5.0	17	0	50	0
文化庁	4	2	83	3	3.6	—	—	12	0
厚生省	21	14	611	38	6.2	16	0	81	4
農林水産省	11	8	337	12	3.6	9	0	14	0
食糧庁	1	1	25	3	12.0	—	—	—	—
林野庁	11 { 1 10	1 { 1 0	215 { 18 197	1 { 1 0	0.5 { 5.6 —	—	—	—	—
水産庁	4	0	53	0	—	—	—	25	0
通商産業省	41 { 20 21	19 { 11 8	895 { 570 325	36 { 22 14	4.0 { 3.9 4.3	35	0	135	4
資源エネルギー庁	6	1	149	1	0.7	18	0	—	—
特許庁	2	1	56	2	3.6	8	0	12	0
中小企業庁	3	3	84	4	4.8	—	—	—	—
運輸省	18 { 9 9	11 { 8 3	312 { 231 81	12 { 4 8	3.8 { 1.7 9.9	34	0	—	—
気象庁	1	0	27	0	—	10	0	—	—
郵政省	5	2	82	4	4.9	5	0	—	—
労働省	112 { 12 100	60 { 5 55	2087 { 208 1879	136 { 13 123	6.5 { 6.3 6.6	—	—	128	3
建設省	9	4	178	5	2.8	8	0	28	0
自治省	3	1	28	1	3.6	12	1	5	0
消防庁	1	0	13	0	—	—	—	—	—
計	438 { 201 237	184 { 100 84	8,408 { 4,632 3,776	360 { 200 160	4.3 { 4.3 4.2	426	1	578	13

但 防衛施設庁、沖縄開発庁、法務省、大蔵省、国税庁、林野庁、通商産業省、運輸省及び労働省の { } の上段は中央、下段は地方支分部局の数字である。また、職務指定及び団体推薦の欄はすべて中央の数字である。

変わりゆく婦人労働

若年短期未婚型から中高年既婚型へ

高橋久子編
有斐閣

前婦人少年局長高橋久子、婦人労働課長佐藤ギン子、婦人課長川橋幸子、総理府婦人対策室長松本康子など、日本の第一線の婦人官僚たちが、女子労働市場の変化、労働条件、家内労働の変化を展望し、その対策と展望を概観した書である。

豊富な資料を駆使し、正確を期した「婦人労働案内書」として、教科書的に安心して使うことができる。

しかし、いみじくも序文に示された高橋展子氏の見解「日本の女子労働のハ特異性V」、すなわち国際的共通項を持ちつつも、終身雇用、企業内組合という日本型労働市場のなかにあるがゆえに、「長期勤続」が、労働そのものの要件であり、若く安い女子は歓迎され、長期勤続女子は白眼視される現状を、「しかもこの明白に差別的な制度の導入、維持には、

企業内組合たる労組の同意、支持がある」面から切り込んだなら、どんなにかおもしろい内容になっていたらうに、と惜しまれる。(さ)
(B6判 二七四ページ 1700円)

主婦論争を読む I、II

上野千鶴子編
勁草書房

石垣綾子「主婦という第二職業論」に始まる「第一次主婦論争」、磯野富士子の主婦労働の価値論をめぐる第二次、主婦こそ解放された人間像(武田京子)の第三次と、それぞれの論争を紹介、神田道子と駒野陽子が概括した、格好の主婦論争案内書である。

一九五五年から七二年まで、「婦人公論」誌上で展開されたこれらの論争を改めて読み返しつつ、その状況をいまだに脱け出せないどころか、ますます「主婦症候群」が、社会病理としてさえ問題になっている現状に、改めて嘆息する。「事象を重層的にとらえない平面的な視点が大きな混乱を生んだと考えら

れる」という神田道子氏の指摘に共感したくなる。

それにしても、梅棹忠夫「妻無用論」(一九五九年)が、今も新鮮な迫力で迫ってくるとは!

(四六判 I 二四一、II 二八八ページ 各1900円)

ある女性政治家の半生

加藤シヅエ著
PHP

六階建ての西洋館で少女時代を過ごし、石本男爵に嫁ぎ、産児制限運動に目覚め、一転して労働運動家加藤勘十と結ばれた波瀾の生涯が、やさしい聞き書きになっていて、読み始めると、読み終えずにはいられないほどおもしろい。結婚の際持参した調度品総目録まで掲載されており、史料としても興味深い。

石本男爵との別れ、勘十との出会いなど、最も人間的な部分に焦点があたっていたら、単にハおもしろいV本から、もっと(感動的)

な本になっていたろうと思うが。

(R)

(四六判 二三六ページ 1400円)

女ひとり生きる

——独身差別の中を生きぬく知恵

谷 嘉代子編
ミネルヴァ書房

「女ひとり生き ここに 平和を希う」という女の碑が京都の常寂光寺に建っているのをご存じでしょうか。これは反戦と女の自立の記念碑であり、死後の自立までを考え、共同墓としての納骨堂まで、御住職の長尾憲彰師にお願いしてあるのです。

その「女の碑の会」代表の谷さんが、戦後独身差別の中を生きぬき、老いの入口に立ちはじめた戦争独身者だけでなく、独身者の増えはじめた団塊の世代までも視野を広げ、また、高齢化社会の中で独り生きることになってしまいう人たちにとっても必要になると思われることを、助言している。

ひとり暮らす工夫の中で、一人は淋しい、わびしい、との既成の観念的な独身のイメージから脱出を、そして老年期にそなえて、偏見と差別にみちた老人イメージにも挑戦して、豊かな魅力的な老人イメージをつくっていきたいと。人間の心の発達には生まれおちてから

死ぬまで、年老いて体の機能が低下しても、心は新しい発展をつづけ得ると、谷さんの専門である心理学の面から、老年期にはその年齢までに成熟、発達した感受性で、頂上に昇って人生を眺め、味わいたいものであると、老年期に楽しみをかけようと呼びかけている。

自分の老後の時期を決め(日常生活の処理や財産の管理能力が十歳以下に下降した時)老後になるまでは自分の健康、気負い、経済など、すべての面で、人に迷惑にならないような準備をし、もし病気になるっても、その費用や手間に關しての配慮は自分で処理するように心がける。その頃までに上手に消費し、上手に人生を楽しむ、老後に入る時期をできるだけ後にはずようにしたい。

老後の生活については、自立的な結束まで具体的にいかれており、そのさわやかさは、老いの孤独におびえる方たちにも生きる活力を与えるのではないかと思う。(牧)

(B6判 二三六ページ 1200円)

おもしろ学校の日々

名取弘文著
教育出版

小学校で家庭科だけを教えている男の先生

の話——というと、ほんと?どんな授業をしているの?という好奇心をかきたてられる。婦人運動の高まりの中で、家庭科は男子にも必要です、と言われるようになったけど、まだ社会全体の認識にはなっていない。女子が家庭科を学ぶということは掛け算の八の段を覚えたら次は九の段というくらいあたりまえのこととして諒解されている。家庭科は女の領分、だから先生は女、と、きちんと思っていたことが不思議な気がする。

こうした社会通念に割って入る名取氏が、その授業ははずみがつけばどこまでも、と楽しく展開してゆく。慣れで続けている生活を点検し、授業Ⅱ生活を創り上げていこうとする意気込みは、家庭科Ⅴという教科のもつイメージとかけ離れていて迫力さえ感じる。

「感覚や感性といったものが学校の教育では欠け落ちていたのではないか……点数で子どもを見ることに慣れてしまったばかりの教師が自分の目を取りもどすのにもモノづくりは役立つ」と教師としての反省にたつて述べ、食べる期待もあって子どもはズボンやスカートをどろだらけにしながら思い思いのものを摘んでくる。採るためのマナーも教える。おいし

い食べ方を研究する。△無農薬ママレードV
を作るときは、みかんの木の持ち主に事情を
話してみかんをもぎ、自転車に積み、と、てき
ばき仕事を進めてゆく。目的のはっきりした
作業は、算数や国語の時間には見られない快
活さを子どもの中から引き出すものらしい。
家の中で生活のためのモノを作るという必
要がなくなった時、家庭や地域は子どもに生
活を伝えられなくなっていくのではないか、
とあたりを見渡してみて思う。

教室に愛と平和を！と願う名取氏の実践が
「名物」ではなくなった時、世の中は少しず
つ変わってゆくのだらうと思う。

ただ、あえて難を言えば、熱意だけではや
ってゆけない悩み、たとえば、いやでも子ど
もに点数をつけなければならないことなども
書いてはしなかった。

(四六判 二二一ページ 1300円)

夏の葉

——中野重治をおくる

佐多稲子著

新潮社

この小説は、たえ難いほどに暑かった、そ
の夏の追憶から始まる。追憶というには、あ
まりにつらい、そして緊張の日々。入院の日

から死を迎えるまでの一日一日の緊張感の中
で病床の中野重治と真向い刻々の変化を綴る
ことから始まっている。

一人の畏友を失ったことの、これほどまで
の埋め難い悲しみの譜は、うら返せば、中野
重治が作家としての僚友の存在であったこと
を超えて、著者の生涯に、ぬきさしならぬ選
定の意味を刻印しているということだろう。

一九二六年、同人誌「驢馬」に拠る人々の
間に迎え入れられた著者は、ごく自然に、中
野重治にみちびかれて、やがて「キヤラメル
工場から」を書くことによって、文学への一
歩をふみ出す。

水がしぶきを流れているような、と表現す
る「驢馬」の雰囲気の中で文学的個性は独特
の親しみに培われて著者のその後の感情の中
に根づいてゆく。

室生犀星、堀辰雄らとの交遊、窪川鶴次郎
との結婚、それらの回想の中で、にぶい光を
放つ中野重治の存在は「驢馬」の時代を背景
として最も素直な親しみの中に著者を囲いこ
む。やがて迎える一九三〇年代の暗い時代の
きびしい弾圧の中で同志として共に生きた中
野への想いと、中野重治という人間の立派さ
は際立ったものと思われる。

この存在の喪われた今、著者の寂寥感はた
とえようもなく深い。嘗て交わしたひとつひ
とつの言葉は光芒を放ち、著者はもとよりそ
のほさは読む者の心にもしみる。終章の部
分で、その寂寥感はさらに深い。

中野重治の郷里、福井で立ち合った埋骨の
場面。それを終えてひとり著者は北陸本線に
乗る。車中で、かつて中野重治と同じ北陸本
線の手窓から共に眺めた雁の列。それに感動
して発した中野重治の言葉を想い出す。

一幅の墨絵のような情景描写の中で、「こ
ういう時の中野らしいその言葉を再び聴くこ
とはもうない。そして私なりに照応するとき
どきの感動も、受けとめ手なく宙に浮くしか
ない。」

著者の喪失感はさらに深まってこの一編は
終わっている。

(四六判 一八四ページ 1300円)

父親の自立と子育て

木村 榮著

汐文社

ひところ「母原病」が話題になったとき、
「父原病」ではないかという指摘があった。
父親不在の家庭。——しかし、父親が早く帰

宅すれば、問題はすべて解決するのか。それで母子癒着が解決するわけではなく、逆に家族ぐるみのべったり状況を生み出すことも多い、という著者の指摘は鋭い。

女の自立があつてこそハ母Vになり得るように、男の自立があつてこそハ父Vとなり得る、と、出産に立ち会い、父親学級に通い、地域活動にとりくむ父親たちを紹介している。そつのない巧みな運びだが、あえて言えば、もう一つ、胸につきつけられるものがない。父親の「不在」や「喪失」を恐らく体験したことのない、幸福な筆者ではないかと想像してしまった。

(四六判 二四一ページ 1200円)

主夫と生活

マイク・マグレディ著
伊丹十三訳
学陽書房

マイクは、四十歳の売れっ子のコラムニスト。妻のコリースは、完ぺきな家事能力を発揮する専業主婦。結婚十六年で三人の子どもに恵まれ何不自由ない生活を送っている。

ところが、妻が、ウーマンズ・リブに傾倒し、事業をはじめようになり、夫自身も、自分の人生に転機を見い出そうという思いもあ

つて、お互いの役割を交換することになる。つまり、妻は外へ出て働き、夫は専業主夫になる。

この本は主夫となった著者マイクの一年間の生活の苦難と喜びを綴った体験談である。

主夫生活によつて、子どもに対する愛情も深まり、しっかりした金銭感覚も身についた。この幸せを手離したくないと思ったことも一度や二度ではない。反面、気の狂いそうな単調で閉鎖的な生活の中で、自分がとり残されていくような思いも味わった。しかし何よりよかつたのは、お互いが相手の身になって考えることができるようになったことである。

その中から、著者は、男女の役割交換は可能だが、それが決して万能の解決策ではないことを知る。そして「夫と妻が権利と義務を平等に分ちあつた階級差のない家庭」をめざして新しい結婚契約をつくるのである。生き生きとした日常生活の描写とともに著者の思いが素直に描かれていて共感を呼ぶ。

ただ、いま自分たちがおかれている社会(資本主義)の中の解決策としては、一つの理想として評価できるのだが、社会全体のしくみを変えていくという視点をもたないのので、家庭の中の小さな解放にとどまらざるをえな

いという限界も感じる。

しかし、今の日本で、男女の役割分業意識をささえる人々が全体の六〇パーセント以上にのぼることを考えると、家庭の中の解放をめざすことさえ、並大抵のことではないと思ひ知らされる。だが、私たちにしても、今生きている社会の中からしか歩み出せない以上新しい家庭像にむけて、試行錯誤をくり返すしかあるまい。その意味でも、この本は、多くのことを私たちに示唆してくれる。一人でも多くの男女に一読をすすめたい。(淑)

(B6判 二七七ページ 1200円)

原子力の政治学

労働運動と反原発——
デイヴ・エリオット編
田窪雅文訳
現代書館

原子力がなければエネルギー源は枯渇するか。推進派の「原子力必要論」を、労働者の立場から鋭く衝いた本である。

平和利用から必然的に移行する軍事利用。

直接的に労働者の安全・健康をおびやかすばかりか、労働者の「知る権利」が奪われる過程を、イギリスの学者、ジャーナリスト、公害問題研究家たちが分担執筆している。政治家としての反原発と労働運動の視点がおもし

ろいが、数人の共著のため、一貫性に欠ける部分はある。「オルターナティブ・テクノロジ」を目指す闘いは、社会主義を目指す闘いに代わるものではなく、前者は後者の一部となることができるし、またそうでなければならぬ」ことが、重層的に証明されていけば、もっと有効なものになったろう。(か)

(四六判 二三〇ページ 2000円)

レニとよばれたわたし

——戦争でさらわれた女の子の話
ズデニユカ・ベズデニコバ著
井出 弘子編訳
らくだ出版

自分の顔をながめながら、私だれに似ているかしら、ことあるごとにレニは不思議な思いにかられた。切れ切れの幼ない時の記憶を思い出しては、兄、母、祖母に尋ねても、きまって、その話はそらされた。

「……あの頃、ふたり以上の子どもをもつことは、わが民族の義務だったから……」

模範的なナチ党員であった、この母は、ヒットラーの政策にそって、チェコからの幼な子を引きとりレニと名づけます。しかし、決して、愛することなく、怖い怖いお母さんとして、そして迎えた敗戦に、困ったお荷物になった、このやっかいものは死ぬことばかり

考えていました。

しかし、ついに自分が、ナチの手によってさらわれたことを知り、自らの手でUNRR A(連合国復興救済機関)に救いを求め、無事チェコの母のもとに戻ります。「お母さん」と呼ぶその言葉も知らず、母の胸に頭をすりよせて——。

手記形式で書かれたこのお話は、小学校中学年くらいから読めます。

戦争の恐ろしさ、むごさを、静かに、しかし力強く告発しています。また、さんだ世の中にあっても、真実を見る目を持ち続けた人のあったこと。困難に出合って勇敢に自らの道を開いていったレニのこと。これはまた人間讃歌の本でもあります。

「戦争の話、怖いからイヤ」と言わず、読ませたい本です。(仲)

(A5判 一八四ページ 1200円)

女と平等

——保護ぬき平等をはね返せ!

私たちの男女雇用平等法をつくる会編発行

「真の男女平等」を目指してまじめな取り組みを続けている人々がつくる会Vが、そのテーマにどこまでも沿いつつ、問題点を解説したバ

ンフレットである。

この種のパンフにありがちな要領のよさがなく、どこまでも本質を追おうとする態度が快い。結論の第七章「有効な男女雇用平等法の必要条件」に、この会の積年の取り組みの成果が示されている。(は)

(A5判 四八ページ 300円)

いまなぜ優生保護法改悪か?

婦人協同法律事務所編著
労働教育センター

魅力的な表題、魅力的なレイアウト、明快な解説。——この種のパンフレットの中では出色のものである。それだけに少し心配にもなる。どうか、これを読んで「わかった」つもりにならないでほしい。優生保護法という、とっつきにくい名前のとっかかりとして利用されるのなら、喜ばしいことだが……。

細かいことで、気になったことの一つ。文中の「劣性な遺伝を防止する」は、「劣悪」の間違いだと思う。遺伝子としての「劣性」因子は、優性因子に比して遺伝しにくいという意味で「劣性」と名づけられている。よく混同されているが——。(な)

(A5判 七二ページ 500円)

あごらのあごら

言いたいことは何でも言おう。
感想、反論、情報。思ったこと
を率直に話し合う読者のひろば

あごらのあごら

27号

『あごら』27号に、「私の精神の在り場所から」と題する宮下喜代さんの随想があった。そこには、第二次大戦中にドイツの強制収容所アウシュヴィツで、コルベという一人のカトリックの神父が、死刑囚の身代わりになって、自分が餓死刑を受けることで、その死刑囚を救ったという事件をめぐって、作家の曾野綾子さんが新聞紙上に掲げたという論

評に関して、宮下さん自身の想いや考えが述べられていた。

宮下さんは、曾野さんが、コルベ神父が沈黙の中に死を迎えた、いや迎えることが出来た事実が、現代の私どもに二つの事柄を問うているとして、署名運動やデモなど、安易なヒューマニズムの自己満足と、「憎悪することは正義だ」と考える総ての情熱を挙げ、それらを冷たく切り捨てたことに大きな疑問を投げかけている。平和を願って

の署名運動やアッピールやデモなどが、安易なヒューマニズム、甘い自己満足、自己宣伝として、いわば、自分にも他人にも何の力にもなり得ないと冷たく切り捨てていいのだらうかと宮下さんは書いている。さらに、それでは現代の社会は、平和を保ってゆく力を、あるいは平和への努力をどのようにしてお互いが日常を生きてゆく関係の中に培ってゆくことができるのだらうか、と問いかけている。

はたして曾野さんは、署名運動やアッピールやデモを、冷たく切り捨てているのだらうか。彼女はそれらを否定したのではなく、安易なヒューマニズム、自己満足を切り捨てたのであると思う。彼女の言葉を借りるならば「今や人間が、間違ひなく人間の主人である」現代に対する警告として、コルベ神父の死を受けとったという曾野さん自身の意識があったのだと思う。

この、人間こそが、人間のみが人間の主人であり、そして、それが、どこが悪いと居直り、開き直る人間の「鉄壁のような自信」(曾野さんの言葉)に對しての問いかけでもあるのだと思う。

私は、曾野さんが、署名運動やデモが何にもならないと言っているのではないと思うし、勿論、宮下さんもそのことは理解なさっているのだと思う。ただ、署名をする自己、デモに参加する自己が、およそ「自己満足」とは関係のないところに立っているかどうかの認識の問題なのではないだろうか。宮下さんと言っているように、行為の根源のところには生死の問題を抱えていない人間が多数そろって署名運動をしようがデモに参加しようが、そんなことは何ものもないという認識はもっと厳しく問われてもいいのではなからうか。しかし、何ものでもないではない

かと言えるのは、デモに参加した人たちがであり、ストライキに参加した労働者自体である。甘えの構造うんぬんが真に言えるためには、象牙の塔から飛び下りなければならぬように。

便利さと合理性をかくも追求する現代。物も使い捨てであれば、言葉も言い捨て、言いつ放し、考えも浮かびつつ放しの思いつ放しの現代。捨てた物、言った言葉、浮かんだ思いがどうなっていくのか、何を意味するのかを追いつける生き方は、果たして現代的ではないといわんばかりである。現代、キリスト者たりえない多くの人たちは、曾野さんの次の言葉に向かい合える精神の世界が残されているだろうか。――神をお信じにならない方には、私は神父の死を一つの美学として申し上げたいのです。自分を殺しても、他人を救うほかはないこと。それはその人にとっての一つの純粋な美学

なのです。それを全うしなければ、その人にとって生涯は美しくならないので、それでその人は彼の美学に殉ずるのです。人間だけが、このような計算に合わないことをしてしまおう。私は時々思うことがあります。このなような危険な美学を持つと、私たちは損をするに決まっています。時には実際に身を亡ぼしてさえしまおう。コルベ神父は初め十人の死刑囚の一人に自分が選ばれなかったのだから、しめしめと思って喜んでいればよかったのです。しかし神父の美学がそれを許さなかった。そしてそのような強烈な美学を持たなければ、私たちはこの世を本当に生きたことにはならないのかも知れないんです（『奇蹟』文庫文庫より）。――

曾野さんはまた別の箇所で、神父がもし身代わりを申し出ないでいたらどうなるかと次のように自分の考えを語っている。

「指名されないのだから、神父は何も死ぬことはなかったのである。もし私がその場におり、終戦まで生き残ることができたのだったら、私は自分が難を免れた日のことを、一つの幸運として……純粋な幸福として繰り返して人々に語るに違いない。そして周囲の人々もまた、私が死を免れ、他人が死の機会を引き受けてくれたことを、何の不自然さもなしに喜んでくれた筈である。私は神父が、その時黙っていたら、と考えたのである。答えは明瞭であった。神父は誰がそう思わなくても、その時にその男（神父が身代わりになった相手）を見捨てたことを自覚し、生きている限り、その死は自分のせいだったと思うに違いない。神父はそこで、肉体的には生きのびても、精神の死を自覚するのである。

およそ、人間として、これほど深く他人と係わるといことが

できるものだろうか。他人が死を引き当て、自分が死を免れたことを喜べるというのは、つまり他人との間に、はつきりとした無関心が存在するからではないか。

コルベ神父は、そのような形で生きのびてみたところで少しもいいことはなかったのだ。そうだ、神父は「趣味」で死んだのだ。（中略）この世を生き尽すには人間は「好み」に命を賭けなければならぬ。すると、生命自体がそのようにして生きられなくなる場合さえある」随分長く曾野さんの文章を引用してしまった。しかし、この文章の中に、なんと率直に、私たち一人一人の心の在り様が表現されていることだろう。

私は、恐らく、母親として、我が子の身代わりになれるだろうか、という問いに、日常において悩まねばならぬのだろうか。それは、宮下さんが、自分の行

為の一番根元のところにどのような自分をおくか、と自問したことがある。

曾野さんの言う、精神の死んだ肉体的生。しかも、現代人の我々は、精神の死を果たして自覚し得るのだろうか。

必死になって何かを守り、貯える現代人。時間を売り、時間を貯め、将来の幸福の保証という幻想に生きる現代人。

このような現代人としての私たちが、解放されるとは何なのか、身代わりの決意をひき当てにすべき人生とは、一体何なのだろうか。

再び、曾野さんを引用する。

マルクス主義哲学者であるチエコスロバキアのガルダウスキ教授の『死に果てぬ神』の中の一節を、曾野さんは、まさにコルベ神父の生涯を説明するためにあるような峻烈な文章だとして引用しているが、私は、この文章を読んで、肉体、精神、そし

て靈性のすべてのレベルでうなぎすきだと思った。

「イエスは奇蹟について、もっと深い豊かな概念を持ってゐる。それはなんらかの日常的な決心、任意の利益を生み出すような行為にかかわるのではなく、必然的運命によって発せられた呼びかけへのラディカルな応答にかかわる。ここでは、その実現のために、人格全体がわれわれの存在と所有の一切に、力を尽くして賭けられなければならない意味での行為が問題なのである。なぜなら、このようにしてのみ、従来まで踏み越えられなかった限界を越えて、すべてを賭けた決定的歩みが始められうるからである。

すべての日常的な陳腐な習慣的なもの、△自然的なもの、△規格的なもの△を踏み越えて、この歩みはすめられる。ここに生起するのは、いわば唯一独自のものであり、完全な自己実

現化を意味する」

私は、すべての日常的な陳腐なもの、△自然的なもの△、規格的なもの△を踏み越えたく思う。そこには、人格全体が賭けられる行為のみが必要である。人間は、社会的な、抽象的な命題について悩むことは、本当はできないのではないかと思う、と、曾野さんが言っていることは、私もその通りだと思う。であるから、私は、子どもについて悩み、夫との関係を考え、社会変革への自己のかかわりについて苦しむのだと考える。

曾野さんのいう「何というのつべりとした一生!」というのに、私は、すべての情感を賭けて対座しなければと思う。

(神奈川・佐藤百合子)

*

「イカサの翼」、最初に読んだ時もショックでしたが、今、改めて読み直してみても嘆息がますます。語りかける口調で書か

れているのが、よけいに身にしみます。

本場に「日本のお母さんたち」のひとりでもある私はどうすればいいのだろうか。私自身は、二年ほど前にある本を読んで以来、在日朝鮮人政治犯の救援活動のほんの末端にふれることを通じて、日本の朝鮮の問題に関心をもっているほうだと内心思っていたのです。

ところが、この朴さんの朝鮮学校閉鎖のくだりを読んで、ガーンとやられた気がしました。まったく知らなかった自分もショックだけれど、「歴史」というものは、知ろうとする姿勢がなければ、普通に暮らす人々の目からはおおい隠され、簡単に埋もれていく。その場に居合わせた少数の人々の記憶の中にだけとどまって、そんな事実はなかったことになっていく恐ろしさを感じたのでした。

とにかく、私ができるささや

かな一歩として、子どもに朝鮮の民話の本を捜してくることから始めよう。幼い時に読んだ記憶が、成長してからもどこかに残って、差別に対する「歯止め」になってくれることを願って、せめても。(市川市・狩野陽子)

* 「近ごろ心にかかること」が一番心にぐさっときた。働かないでいる主婦……、うしろめたいけれど、「より人間的な所にいるのだ」ということで、自分を納得させていたから。

でも、仕事も、家事、育児も分ちあうには？——夫は脱サラということになるのでしょうか。現実的に、これならと思う道が見つかりません。

(国立市・兵藤真理子)

* 国立大学のパート職員として勤務しておりましたが、諸般の事情により昨年退職し、現在、家に居る「主婦」です。

「近ごろ心にかかること」の、「子を産み育てる女として戦争反対を叫びたくはない……いま一人の人間として戦争阻止に必死なのだ」というところに大いに共感し、『あごろ』を私も共に、育てていきたいと思ひました。

人がああしているから自分もあしなくてはならない、この年齢にはこうして、次にこうしなくてはいけない……etc、自分の生き方と、いわゆる「世間」とのズレにどこまで妥協できるのかと問うている毎日のようです。女が偏見に惑わされずに生きていける「勇気」を与えられる誌面作りを期待しています。(熊本市・柳田えり子)

あごろ

二十歳で経済的にも精神的にも自立をしたと自負している四十歳の女です。

教員生活十八年目に入りました。中学校の教師としての自分に行きづまり、現在は公立高校の教師をしています。教師聖職論、専門職論が盛んですが、私自身はひとりの労働者であるという視点を断固として変えたくないと思っています。

五歳の娘がひとりいます。十八歳になったら、親元を離れて生きていかれる女に育てたいと思っています。さて、どうなりますか……。

(稲城市・藤武礼子)

* 昨年あたりから、『あごろ』の少しきまじめすぎるものに違和感を感じ、女性問題にはもちろん一生続けて取り組んでいきたいのですが、会のはうは、少し休ませていただきたいと思ひます。

『あごろ』を読み続けて、ひととりの問題のありかを教えられました。これからは、『クロ

ワッサン』のような、もう少し楽しいところから、男も女も解放されていく道を考えていきたいと思っています。私もマスコミの端くれにいて、女の問題解決の本当の道を日々、真剣に考えております。

(京都・村井恵子)

* 女の問題は、いつも少数の女たちの本音で語られているような気がします。

平和のことも、優生保護法改悪のことも、いったい何が問題となっているのかわからない、自分自身には関係ないと考えている人が多く、女性自身の賛同すら得られないことがしばしばあります。

やはり女自身のことは、女の口から語られなければならないし、さらには、男性の問題でもあることを男性に理解させる必要もあると思います。

(川崎市・相沢みゆき)

世界各国の妊娠中絶に関する法的規制

国名	規制状況	全面禁止	合法と認める適用条件					希望により 自由である	※備考
			医学的理由 (狭義) 母体の生命の危険	医学的理由 (広義) 母体の健康	優生学的理由 (胎児の異常)	強姦や近親相姦 による妊娠	社会的・ 医学的理由		
オーストラリア				●	●		●※		南オーストラリアのみ。28週まで (胎児が胎外で生存能力をもつ前)
カナダ				●					
アメリカ合衆国								●※	28週まで
メキシコ		●				●			
キューバ								●※	10週以内
イギリス				●	●		●※		28週まで
フランス								●※	10週以内
イタリア								●※	3か月または12週以内
スペイン		●							
デンマーク								●※	3か月または12週以内
スウェーデン								●※	18週以内
西ドイツ				●	●	●	●※		3か月または12週以内
東ドイツ								●※	10週以内
ポーランド				●		●	●※		3か月または12週以内
ハンガリー				●	●	●	●※		3か月または12週以内
ルーマニア				●	●	●	●※		40歳以上または4人以上の子をもつ女性 3か月または12週以内
ユーゴスラビア								●※	10週以内
ソ連								●※	3か月または12週以内
イラン		●							
チュニジア								●※	3か月または12週以内
インド				●	●	●	●※		20週以内
バングラデシュ		●							
タイ				●		●			
ヴェトナム								●※	期間規定不明
フィリピン		●							
ホンコン				●					
シンガポール								●※	24週以内
韓国				●	●	●			
中国								●※	期間規定はないが、ほとんど3か月以内 に行なわれる
日本				●	●	●	●※		24週以内

【出典】 Induced Abortion A World Review, 1981 by Christopher Tietze, The Population Council, New York.

1967年から1977年までの10年間の妊娠中絶法の変化

(注) ●1967年以前に施行された法律に規定されている要件
 ◎1967年以降に施行された法律によって加えられた要件
 ○1967年以降に施行された法律によって廃止された要件

国名	法律に規定された要件	母親の生命の危険	母親の身体的健康の危険	母親の精神的健康の危険	胎児の健康の危険	強姦、近親相姦による妊娠	社会的、社会経済的、医学的適応	希望による(通例最初の3か月以内)	備考 (制定法、判例、および年度、中絶自由化の期間)
アメリカ合衆国		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	1973年のRoe v. Wade; Doe v. Bolton判例による3か月以内の胎児
アラブ首長国連邦		◎							1975年医療法(連邦法7)
イギリス		●	●	●	◎		◎		1967年妊娠中絶法。当初28週以内の胎児。 1980年2月15日から24週以内
イスラエル		●	◎	◎	◎	◎	◎		1977年1月31日の刑法改正
イタリア		◎	◎	◎	◎			◎	1978年法90日以内
イラン		●	◎	◎	◎		◎		1976年10月28日、墮胎及び断種に関する刑法42条3節
インド		●	◎	◎	◎	◎	◎		1971年医学的妊娠中絶法
オーストラリア キャピタルテリトリ		●	◎	◎					1971年刑法
オーストラリア 南オーストラリア州		●	◎	◎	◎		◎		1969年刑法総合改正法82A節
オーストリア		●	◎	◎	◎			◎	1974年刑法、3か月以内
カナダ		●	◎	◎					1975年 R. v. Morgentaler 1969年刑法251節
スウェーデン		●	●	●	●	●	●	◎	1974年6月14日妊娠中絶法第595号 同7月9日同法596号、12週以内無条件
チェコスロバキア		●	●	○		●	○		1973年5月16日法
デンマーク		●	●	●	●	●	●	◎	1973年法350 12週以内
西ドイツ		●	●	◎	◎	◎	◎	○	1974年第5次刑法改正法で12週以内の自由化。 1976年15次刑法変更でこれを改正
ノルウェー		●	●	●	●	●	◎		1975年6月13日法50号
ハンガリー		●	●	○	●	●	○	○	1973年大臣諮問委員会決定1040 1973年健康令
フィンランド		●	●	●	●	●	◎		1970年3月24日法239
東ドイツ		●	●	●	●		●	◎	1972年妊娠中絶法12週以内
フランス		●	◎	◎	◎			◎	1979年12月31日法
ブルガリア		●	●	○	●	●	○	○	1973年保健省令 1974年修正
日本		●	●			●	●		1948年優生保護法

《出典》IPPF国際家族計画連盟「People」1978年5巻2号より
 慶応義塾大学法学部教授中谷理子氏作成

資料 2 国籍法改正に関する中間試案（一九八三年二月一日）

法務省民事局第五課

第一 出生による国籍の取得（法第二条第一号及び第三号の改正）

子は、出生の時に父又は母が日本国民であるときは、日本国民とするものとする。

第二 準正による国籍の取得（新設）

1 認知及び父母の婚姻によりその嫡出子たる身分を取得した二十歳未満の者（日本の国籍を取得したことがある者を除く。）は、その出生の時から引き続き当該認知をした者が日本国民であるときは、法務大臣に日本の国籍を取得する意思を表示することにより、その時から日本の国籍を取得するものとする。ただし、当該認知をした者の親権に服していないときは、この限りでないものとする。

2 前項の意思表示は、日本の国籍を取得しようとする者が十五歳未満であるときは、法定代理人が代わってするものとする。

（注 第二項について、子が十五歳以上二十歳未満であるときは、法定代理人の同意を要件とするか。）

第三 帰化

一 日本国民の配偶者の帰化条件（法第五条第一号及び第六条第一号の改正）

日本国民の配偶者で次の各号の一に該当し、かつ、現に日本に住所を有する外国人については、法務大臣は、その者が第四条第一号、第二号及び第四号の条件を備えないときでも、帰化を許可することができるものとする。ただし、当該外国人が第四条第四号の条件を備えない場合には、その配偶者が同号の条件を備えるときに限るものとする。

(イ) 引き続き三年以上日本に住所又は居所を有し、かつ、その婚姻の後一年を経過した者

(ロ) 引き続き一年以上日本に住所又は居所を有し、かつ、その婚姻の後三年を経過した者

二 日本国民の子の帰化条件（法第六条第二号及び第三号の改正）

日本国民の二十歳未満の子については、法務大臣は、その子が日本に住所を有する場合（養子については、引き続き一年以上日本に住所を有するときに限る。）には、その者が第四条第一号、第二号、第四号及び第五号の条件を備えないときでも、帰化を許可することができるものとする。

三 帰化の取消し（新設）

第四 重国籍の解消

一 国籍の選択（新設）

1 法務大臣は、偽りその他重大な不正の手段により帰化の許可を得た者について、許可の後五年間に限り、その許可を取り消すことができるものとする。

2 帰化の許可を取り消された者は、その時から日本の国籍を失うものとする。
（注 事前の聴聞の手続を置くものとする。）

1 外国の国籍を有する日本国民は、重国籍となった時が二十歳に達する以前であるときは二十二歳に達するまでに、その時が二十歳に達した後であるときはその時から二年以内に、法務大臣に日本の国籍を選択し外国の国籍を放棄する旨の宣言をしなければ、日本の国籍を失うものとする。

2 前項の宣言をした者が外国の国籍を離脱することができるときは、法務大臣は、六か月以上の期間を定めて外国の国籍の離脱に必要な手続をすべき旨を催告することができるとし、その者がその期間内にその手続をしないときは、日本の国籍を失うものとする。

3 外国の国籍を有する日本国民は、その国の国籍を選択したときは、日本の国籍を失うものとする。

4 第一項の宣言をした外国の国籍を有する日本国民は、自己の志望によりその外国の兵役に服したとき又は自己の志望によりその外国の公務（その外国の国籍を有するときに限り従事することのできるものに限る。）に従事したときは、その時から日本の国籍を失うものとする。

5 第一項により日本の国籍を失った者で天災その他その責めに帰することのできない事由によって同項の期間内に宣言をすることができなかつたものは、宣言をすることができるとなつた時から六か月以内に法務大臣に日本の国籍を取得する意思を表示し、かつ、日本の国籍の取得によって外国の国籍を失わないときは、同項の宣言をすることにより、その時から日本の国籍を取得するものとする。

6 前項により日本の国籍を取得した者の子であつて、その者が日本の国籍を失わなければ、出生により日本の国籍を取得すべきものは、前項の期間内に法務大臣に日本の国籍を取得する意思を表示し、かつ、二十歳以上で日本の国籍の取得によって外国の国籍を失わないときは第一項の宣言をすることにより、その時から日本の国籍を取得するものとする。

7 第一項により日本の国籍を失った者で日本に住所を有するものが、外国の国籍を有しないこととなつたとき又は日本の国籍の取得によって外国の国籍を失うべきときは、法務大臣に日本の国籍を取得する意思を表示することにより、その時から日本の国籍を取得するものとする。

8 外国の国籍を有する日本国民がその外国の国籍を失つた場合には、一定期間（例えば、一か月）以内に法務大臣にその旨を届け出な

ければならないものとする。

- 9 第一項の宣言及び第六項の意思表示は、宣言又は意思表示をしようとする者が十五歳未満であるときは、法定代理人が代わつてするものとする。

注 (1) 重国籍者の戸籍について、特定の外国の国籍を有すること又は重国籍であることを記載事項とするか。

(2) 第九項について、当該の者が十五歳以上二十歳未満であるときは、法定代理人の同意を要件とするか。

二 国籍の留保（法第九条の改正）

（A案）

出生により外国の国籍を取得した日本国民であつて、外国で生まれたものは、戸籍法の定めるところにより日本の国籍を留保する意思表示しなければ、その出生の時にさかのぼつて日本の国籍を失うものとする。

（B案）

国籍選択制度を設ける場合には、第九条を削除するものとする。

注 A案について

(1) 留保届の期間は、相当期間（例えば、六か月）に伸長するものとする。

(2) 日本の国籍を留保する意思表示しないことにより日本の国籍を失つた者であつて、二十歳未満のものが、日本に住所を有するときは、法務大臣に日本の国籍を取得する意思表示することにより、その時から日本の国籍を取得するものとする。

第五 経過規定（新設）

- 1 次の各号の条件を備える外国人は、この法律施行の日から三年以内に法務大臣に日本の国籍を取得する意思表示することにより、その時から日本の国籍を取得するものとする。

(一) 出生の時から引き続き母が日本国民であること。

(二) この法律施行の時に二十歳未満であること。

(三) 日本の国籍を取得したことがないこと。

(四) 当該母の親権に服していること。

- 2 前項により日本の国籍を取得した者の子で次の各号の条件を備えるものは、同項の期間内に法務大臣に日本の国籍を取得する意思表示することにより、その時から日本の国籍を取得するものとする。

(一) 前項により日本の国籍を取得した者がその出生の時に日本の国籍を取得したとすれば、出生により日本の国籍を取得すべきとき。

(一) 日本の国籍を取得したことがないこと。

(二) その者の親権に服していること。

3 前二項の意思表示は、日本の国籍を取得しようとする者が十五歳未満であるときは、法定代理人が代わってするものとする。

4 天災その他第一項及び第二項の意思表示をしようとする者の責めに帰することのできない事由によって同項の期間内に意思を表示することができないときは、その期間中は、意思を表示することができるに至った時からこれを起算するものとする。

注 第三項について、子が十五歳以上二十歳未満であるときは、法定代理人の同意を要件とするか。

資料3 婦人差別撤廃条約の早期批准と

国内行動計画の推進に関する要望

国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会（全国組織四十八団体加盟）

世話人 大羽綾子
鍛冶千鶴子

中村紀伊

一九八三年三月二十六日

総理府婦人問題企画推進本部御中

私どもは、あらゆる分野に男女が平等に参加し、平和で民主的な社会の実現を願い、婦人問題解決のための諸施策の推進を再三政府に要請してまいりました。

平等・発展・平和の目標達成のため設定された「国連婦人の十年」も残すところ二年となり婦人差別撤廃条約の早期批准と国内行動計画の実効をあげるよう超党派の婦人の連帯組織として左の諸項の実現を政府に強く要望いたします。

一、婦人差別撤廃条約の一九八五年までの批准と関係国内法の整備の促進

- (一) 母性を社会的に保障すると共に女性の雇用機会平等のため、男女雇用平等法を制定し、働く女性の条件を整備すること。
- (二) 男女の固定的役割分業の慣習を改め「家庭は男女が共に築く」という考え方を徹底するため家庭科の男女共修を実現するよう学習指導要領を改訂すること。

二、福祉と教育の充実

経済の低成長下で福祉政策の見直しがうたわれ、自立自助の名のもとに家庭責任の重視がいわれております。社会福祉が当然負うべきことを婦人に肩代りさせることには反対です。男女差別を撤廃し婦人の社会参加を推進するため教育、福祉の拡充こそ重要です。

- (一) 優生保護法の人工妊娠中絶条項から「経済的理由」を削除するとの改正はおこなわないこと。

- (二) 保育所・学童保育などの拡充と制度化、老人及び障害児者をかかえる家庭への福祉施策を充実すること。

- (三) 婦人の年金権を確立し生活できる年金を保障すること。医療、老人福祉施設、住宅など婦人の老後保障を拡充すること。

- (四) 1、教育の機会均等を推進する中で、家庭科の男女共修の実施及び女子の科学技術教育への参加を奨励すること。

2、家庭及び子どもの養育について男女が共に責任を果たすよう家庭、学校、社会において教育を行うこと。

三、婦人の労働権の確立

- (一) 雇用における男女平等の確保と差別を是正すること。

- (二) 母性に対する保障を充実すること。

- (三) 労働者全体の労働条件の引き上げをはかること。

- (四) 育児休業法を早急に制定すること。

- (五) パートタイムの身分保障と労働条件の差別を是正すること。

四、行政改革と婦人関係行政の強化

- (一) 行政改革において、婦人、児童、高齢者など社会的、経済的に困難な問題をもつ人々へのしわよせを行わないこと。

- (二) 総理府婦人問題担当室を法的に位置づけると共に労働省婦人少年局等婦人関係行政機構の強化を図ること。

- (三) 臨時行政改革推進審議会委員に今度こそ必ず婦人を参加させること。

五、政策決定への婦人の全面参加

- (一) 婦人の公務員試験合格者を平等な立場で採用すると共に婦人公務員に昇進の道を開き管理職等に登用すること。

(二) 審議会への婦人委員を五〇%目標とし、すべての審議会に婦人を登用し複数の婦人委員とすること。人選に際しては婦人団体の意見を聴くこと。

六、戦争のない平和な社会の実現

最近の防衛費突出、改憲への動きに強い危機感をいだいております。

(一) 平和憲法を擁護し改憲をしないこと。

(二) 世界の全面的な軍縮をすすめると共に一切の核兵器を廃絶すること。

六、国際協力の推進と「第二次国連婦人の十年」の提唱

(一) 一九八四年のESCAP地域準備会議の東京開催を実現すること。その際婦人団体は民間の立場から同会議開催に関する協力を行う。

(二) 日本政府は「第二次国連婦人の十年」（一九八六～一九九五年）を率先して国連に提唱し、婦人差別撤廃条約批准後の平等達成を国際的連帯のもとに推進すること。

以上

資料4 優生保護法の改正に反対する要望書

衆・参婦人議員懇談会

土井たか子、金子みつ、藤田スミ、四ツ谷光子、藤原ひろ子、栗田翠、箕輪幸代、岩佐恵美、小林政子
石本茂、大鷹淑子、山東昭子、志村愛子、林寛子、森山真弓、粕谷照美、田中寿美子
小笠原貞子、沓脱タケ子、下田京子、安武洋子、山中郁子、柏原ヤス、渡部通子、中山千夏

政府は、優生保護法第十四条一項四号の条文より、「経済的理由」を削除する改正案を、九八国会に提出するための検討を行なっているが左記理由により、衆・参婦人議員懇談会として、改正案の提出に反対する。

記

一、人工妊娠中絶を減少させるためには、法改正の以前に、青少年に対する適正な性教育、社会教育を通じて国民に対し妊娠や育児について、人間としての使命や責任を自覚させることが必要であり、同時に成功率の高い受胎調節法の開発や普及、母子保健対策の充実、母性保護の拡充など安心して産み育てる社会環境の整備を図るべきである。

二、中絶件数の大多数が「経済的理由」によるものと考えられ、社会に与える影響はきわめて大きく、世論の動向、関係各機関、団体の意向

等に十分配慮し、慎重に検討すべきである。
依って、右決議し、改正案の国会会上程を中止するよう要望する。

一九八三年一月二八日

厚生大臣 林 義郎 殿

全国各地の〈あごら〉で合評会

——お問い合わせは下記へ——

- ◆あごら旭川
・旭川市神楽岡1条5丁目3 田代慶子
・窓0166 65 6237 〒078-111
- ◆あごら札幌（毎月13日に例会）
・札幌市西区琴似1条6丁目 グランドハイツ琴似408号 細田英理子
・窓011 64 42927 〒063
- ◆あごら仙台
・仙台市八幡2-13-40 山内満貴子
・窓0222 75 4655 〒982
- ◆あごら千葉
・千葉県印旛郡白井町大山口1-7-20 桑原ちえ子
・〒270-114
- ◆あごら北東京
・豊島区東池袋1-45-11 メゾン金子22 婦人協同法律事務所 志賀由美子
・窓03 985 3308
- ◆あごら新宿（8月26日（金）18時30分～21時に合評会）
・新宿区新宿1-9-6 あごら読書室
・窓03 354 3941 〒160
- ◆あごら武蔵野（毎月第4土曜19時～20時に例会）
・小平市小川町1-763-86 丹羽雅代
・窓0423 43 6749 〒187
- ◆あごら京王
・調布市仙川町3-12-32 福井浅子
・窓03 308 7871 〒182
- ◆湘南あごらを読む会
・平塚市山下726 県住15-825 福本寛子
・窓0463 32 2021 〒254
- ◆あごら東海（毎月第4木曜10時～12時30分に例会）
・愛知県愛知郡東郷町白鳥4-5-1 押草団地113-305 石川方 加藤登紀子
・窓0561 39 2308 〒470-001
- ◆あごら京都（毎月第2日曜11時～16時に例会）
・京都市左京区一乗寺築田町56-1 塚崎美和子
・窓075 79 4623 〒606
- ◆あごら大阪（毎月第3日曜11時30分～15時に例会）
・茨木市西駅前町10-323 遠藤由美
・窓0726 23 3495 〒567
- ◆あごら九州（毎月第2日曜14時30分～17時30分、第4土曜18時30分～21時に例会）
・福岡市西区笹丘2-4-6 小島豊子
・窓092 52 17624 〒810
- ◆あごら佐世保
・佐世保市瀬戸越町1415-25 内田佳崇
・窓0956 49 8591 〒857-001

資料5 母性の福祉を推進する議員連盟

I 結成趣意書

高度経済社会の進展の中で、何よりも尊い母性の価値がともしれば軽視されがちであるのは、まことに憂慮すべきことであります。

尊い生命が、母性によって産まれ、育てられるのは、いかなる社会でも不変のことであって、政治の根本は母性を人間として大切に、母親が安じて子を産み育てることのできる社会を作ることにあります。

本連盟は、母性の尊厳を高め、その役割を正しく位置づけるという立場から、性急な、短絡的な優生保護法改正の動きには賛成できず、女性の意見を十分尊重して、慎重に対処するよう求め、母子保健、母子福祉の充実強化、保育体制の改善、育児休業の普及促進等関連のあらゆる施策をすすめるため結成するものであります。

何卒趣旨ご賛同の上ご加盟下さいますよう、お願い申し上げます。

昭和五十八年三月

発起人 石本 茂・鯨岡兵輔・山東昭子・田澤吉郎・友納武人

八田貞義・鳩山威一郎・森山真弓・山崎竜男

II 要望書

昨年優生保護法の一四条一項から「経済的理由」を削除するという改正問題がもち上がり、政府は今国会提出を目的として検討を続けていた模様であるが、性急な進め方に疑問を感じる世論が澎湃として起り、特に当事者たる婦人たちの間に反対の声が強い。

この問題は医学、道徳、宗教、教育、婦人の地位等に深い関係がある、大きな社会問題であって、短兵急に事を運んでは長く悔いを残すおそれがある。

真に生命を大切に、母と子の健康と幸福を確保する観点から、広く関係各層の意見を十分聴取し、これを尊重して、慎重に対処するよう要望する。

昭和五十八年三月二十三日

厚生大臣 林 義郎殿

母性の福祉を推進する議員連盟会長 田澤 吉郎

Ⅲ 加盟議員 (五十八年三月三十一日現在)

(○…生命尊重国会議員連盟にも入っている人)
★…の世話人

会 長	田澤 吉郎	白井 莊一	●衆議院	○粕谷 茂	○坂田 道太	○竹中 修一	○吹田 惲	与謝野 馨
会長代行	八田 貞義	○大西 正男	愛知 和男	金子 岩三	板井 新	○津島 雄二	福島 譲二	○近藤 鉄雄
幹 事	石本 茂	山東 昭子	池田 淳	○木村 武雄	島村 登生	○辻 英雄	○藤井 勝志	山崎武三郎
"	大石 千八	長野 祐也	石原慎太郎	○木村 守男	○正示啓次郎	★羽田 亮一	○前田 正男	●参議院
"	鯨岡 兵輔	○栗山 明	今枝 敬雄	北川 石松	○砂田 重民	○森田 一	水野 清	井上 裕
"	中西 啓介	○工藤 巖	上村千一郎	○久野 忠治	○住 榮作	葉梨 信行	村山 達雄	○岩動 道行
"	○真鍋 賢二	友納 武人	植竹 繁雄	○小坂善太郎	染谷 誠	○橋口 隆	森山 欽司	衛藤征士郎
事務局長	森山 真弓	鳩山威一郎	○大村 襄治	中村正三郎	○田村 元	鳩山 邦夫	○安田 貴六	小澤 太郎
員	山崎 竜男	加藤 紘一	○三枝 三郎	★竹内 黎一	○原田昇左右	山下 元利	○大木 浩	○山本 富雄

Ⅳ 加盟議員への挨拶

「母性の福祉を推進する議員連盟」はおかげをもって八二名の御参加をいただき、去る三月二十三日に設立総会を開き、発足いたしました。総会においては、規約及び役員の見、又、優生保護法の改正問題について慎重な対処を要請する旨を決議して、総会の席上厚生大臣に要望書を手交いたしました。翌三月二十四日党社会部会において優生保護法改正問題が論じられ、同部会内に優生保護法等検討小委員会を設けることになり、田中正巳議員が委員長に就任されたことは、公報等で御承知の通りであります。またこの小委員会で検討中は、優生保護法問題についての政治活動は休止してはしい旨の要請が社会部会長よりあり、生命尊重国会議員連盟とともに私共も了承いたしました。

なお本議員連盟は、優生保護法問題のみを扱っているわけではありませんで、他の活動は当然続けて参ります。

母性の福祉を推進する議員連盟会長 田澤吉郎

資料6 生命尊重国会議員連盟加盟議員名簿 (昭和58年2月4日現在)

役員

顧問 齊藤 邦吉 (衆・福島)

三原 朝雄 (衆・福岡)

會長 小沢 辰男 (衆・新潟)

副會長 齋藤 十朗 (衆・三重)

幹事長 橋本龍太郎 (衆・岡山)

事務局長 森下 元晴 (衆・徳島)

世話人 竹内 黎一 (衆・青森)

戸沢 政方 (衆・神奈川)

羽田 孜 (衆・長野)

戸井田三郎 (衆・兵庫)

初村滝一郎 (参・長崎)

遠藤 要 (参・宮城)

森下 泰 (参・大阪)

安西 愛子 (参・全国区)

山口 淑子 (参・全国区)

扇 千景 (参・全国区)

玉置 和郎 (参・全国区)

衆議院議員

北海道 北海 道

地崎 宇三郎

箕輪 登

上草 義輝

川田 正則

阿部 文男

三枝 三郎

高橋 辰夫

渡辺 省一

安田 貴六

北村 義和

青 森

竹中 修一

田名部匡省

津島 雄二

木村 守男

秋 田

佐々木義武

笹山 登生

岩 手

玉沢 徳一郎

工藤 巖

志賀 節

山 形

鹿野 道彦

木村 武雄

近藤 鉄雄

三塚 博

伊藤 宗一郎

渡辺 省一

安田 貴六

北村 義和

青 森

竹中 修一

田名部匡省

津島 雄二

木村 守男

秋 田

佐々木義武

笹山 登生

岩 手

中村喜四郎

丹羽 雄哉

登坂重次郎

栃 木

船田 元

藤尾 正行

熊川 次男

長谷川四郎

中島源太郎

小島源太郎

松永 光

山 梨

金丸 信

中尾 栄一

牧野 隆守

静 岡

原田昇左右

木村 俊夫

藤波 孝生

野呂 恭一

柳沢 伯夫

大塚 雄司

石原慎太郎

越智 通雄

粕谷 茂

中村 靖

天野 公義

小澤 潔

石川 要三

神奈川

小柴彦三郎

小泉純一郎

龜井 善之

福 井

稻村佐近四郎

大野 明

渡辺 栄一

古屋 亨

山本 幸雄

木村 俊夫

藤波 孝生

野呂 恭一

佐藤 隆愛知

桜井 新

渡辺 秀央

久野 忠治

江崎 真澄

海部 俊樹

中野 四郎

村田敬次郎

上村千一郎

武藤 嘉文

松野 幸泰

大野 明

渡辺 栄一

古屋 亨

山本 幸雄

木村 俊夫

藤波 孝生

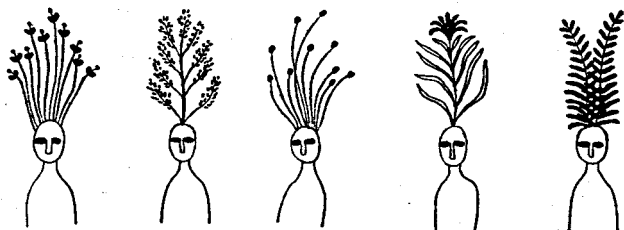
野呂 恭一

柳沢 伯夫

京 都

奥田 幹生	岡山	大西 正男	田原 隆	鈴木 省吾	熊谷太三郎	岡山	福岡日出磨	堀江 正夫
谷垣 專一	平沼 赳夫	福岡	宮崎	鈴木 正一	山梨	加藤 武徳	長崎	堀江 圭三
大阪	大村 襄治	太田 誠一	江藤 隆美	茨城	降矢 敬雄	鳥取	中村 楨二	岡山 雅也
中山 正暉	藤井 勝志	山崎 拓	堀之内久男	岩上 二郎	中村 太郎	小林 国司	熊本 清充	岡部 三郎
原田 憲	広 島	辻 英雄	小山 長規	栃木	静岡	島根	園田	岡部 三郎
塩川正十郎	中川 秀直	古賀 誠	鹿兒島	岩崎 純三	熊谷 弘	亀井 久興	田代由紀男	大河原太一郎
木野 晴夫	池田 行彦	櫛橋 進	山崎武三郎	大島 友治	戸塚 進也	山口	宮崎	田沢 智治
左藤 恵	亀井 静香	山崎平八郎	有馬 元次	群馬	愛知	江島 淳	坂元 親男	板垣 正
兵庫	佐藤 守良	佐賀	二階堂 進	山本 富雄	八木 一郎	香川	鹿兒島	梶原 清
砂田 重民	山口	愛野興一郎	山中 貞則	埼玉	大木 浩	平井 卓志	金丸 三郎	松浦 功
石井 一	田中 龍夫	山下 徳夫	橋口 隆	名尾 良孝	岐阜 卓	真鍋 賢二	田原 武雄	村上 正邦
永田 亮一	佐藤 信二	三池 信	沖繩	千葉	井上 裕	藤井 孝男	内藤 健	井上 吉夫
原 健三郎	高村 正彦	長崎	國場 幸昌	井上 裕	藤井 孝男	内藤 健	川原新次郎	増岡 康治
渡海元三郎	吹田 悞	西岡 武夫	参議院議員	東京	滋賀	亀長 友義	沖繩	井上 孝
松本 十郎	香川	久間 章生	北海道	原 文兵衛	河本嘉久蔵	愛媛	稲嶺 一郎	
河本 敏夫	藤本 孝雄	中村 弘海	北 修二	安井 謙	京都	植木 光教	仲川 幸男	源田 実
谷 洋一	木村武千代	熊本	高木 政光	神奈川 章	上田 稔	高知	楠 正俊	西村 尚治
奈良	森田 一	藤田 義光	岩手	新潟	兵庫	林 道	石本 茂	長田 裕二
奥野 誠亮	加藤常太郎	坂田 道太	岩手	長谷川 信	中西 一郎	谷川 寛三	梶木 又三	古賀雷四郎
前田 正男	愛媛	園田 直	岩動 道行	塚田十一郎	奈良	福岡	梶木 又三	古賀雷四郎
和歌山	塩崎 潤	大分	秋田	富山	奈良	福岡	梶木 又三	古賀雷四郎
中西 啓介	関谷 勝嗣	村上 勇	佐々木 満	高平 公友	堀内 俊夫	遠藤 政夫	梶木 又三	古賀雷四郎
正示啓次郎	森 清	羽田野忠文	山形	福井	和歌山	前田 勲男	大坪健一郎	竹内 潔
鳥取	越智 伊平	畑 英次郎	降矢 敬義	福井	和歌山	前田 勲男	大坪健一郎	竹内 潔
相沢 英之	高知	佐藤 文生	福島	山内 一郎	前田 勲男	大坪健一郎	竹内 潔	

女の問題を共に考える〈あごら〉



△あごらVでは、女が真剣に生きようとするとき、その行く手に立ちはだかる問題を考え合っています。

△あごらVには規則はありませんが、運動の原則としては、次のようなことを掲げています。

- 1 自分も他人もかけがえのない存在として尊重し、人権を侵害するあらゆる差別・戦争・公害に反対する。
- 2 イデオロギーを先行させず、現実根ざし、地域に密着した運動を行なう。
- 3 個人の意識変革を中心に、着実に持続的な運動を。
- 4 ゆるやかな連帯。ゆるやかな方向性。
- 5 「人はすべて可能性を持つ」を信条に、女性の可能性の開花に力をつくし、社会的活動と結びつける。
- 6 フェミニズム運動の中で、特に情報部門を専門的に受け持つ。
- 7 どの政党・企業・団体とも関係なく、自主独立を続ける。
- 8 会費・基金および事業収益を資金とする。
- 9 会員は、自分の情況と、さき得る時間や力に応じて運動する。絵を描く人は絵を、歌を歌う人は歌を……。病床からでも参加できる運動が基本。
- 10 どの部門にも「長」は置かない。運営の最終責任は、運営会議とする。

現在、『あごら』『あごらミニ』を発行するほか、読書室・可能性教室・創造力の銀行などを運営しています。

産業社会への窓口としては株式会社バンク・オブ・クリエイティビティ(BOC)が、女性の創造力の売り込みや出版活動などを行なっています。

地域活動は、北海道から九州まで十四の拠点が軸です。もよりの拠点にご連絡ください。近くに拠点のない地域の方は、事務局までご連絡を。あなた自身が呼びかけ人になることもできます。

〔編集後記〕

この28号編集作業の中で42歳の誕生日を迎えた。皇紀二千六百年のある年である。産めよ殖やせよのかけ声のもと、どうか男児をとの両親の願いをよそに、四番目の女の子（一人はすでに死亡）として誕生した私。

もし羊水チェックができていたら、XY染色体の分離が可能であつたら、ひょっとしたら私は、本当は私は……十年ほど前だつたらどうか。著名な経済学者が、「こんな生きにくい世の中に、子どもを産むなどという恐しいこと、とてもできない」と発言。それに對し、「だからこそ、私たちは、次の世代と共に努力しようとするのではないのか。人間だから」こんな主旨の反撃が巻き起こった。

すでに二児の母親であつた私は、動揺し、安堵したのを憶えている。（仲）

＊

子どもが欲しいと彼は言い、彼と私の子を育てたいと私は思った。妊娠して私は自分が自分でなくなるような不安におそわれ続けた。『魅せられたる魂』の主人公がおなかの中の子どもと共に新しい世界を発見していく姿に感動したのは高校時代。現実には……経済的には自立していたから、なんとかなるだろうと安易に考えて産んだ。そして自問が続いている。「子どもが欲しい」とは一体どうということなんだろう。（澄）

＊

「節をとすとか、ケジメをつける」とか言う言葉がある。一冊の本は、まがりなりにも節とかケジメにこだわってゆく……なんて頭の中で考えて歩いているうちに、もう本ができあがると言う。

そのエネルギーに感心しながら、優生保護法の改「正」問題だけにかかわらず、ちゃんとしたケジメが世の中にはないことが多いのにならながら驚いている。私自身も結局は、「この次こそは……」とケジメもなく編集後記を書いているのです。（利政）

＊

「優生保護法」が流行語になってしまった。ちょうど「右傾化」のように。街には、この関係の本があふれ、テレビ、新聞、雑誌でも特集が組まれた。そして——「もうこの問題はいい」「またか」という声さえ聞こえ始めてしまった。

問題が提起され、運動が起こり、広まる。が、深まる前に「流行」になってしまふ。「流行」が下火になったところで、サツと足をすくわれる。

生半可な知識の積み重ねは、「評論家」への道を示すのみ。消化不良を起こさぬよう、何万回もよく咀嚼しようと思う。「優・生・保・護」の意味することと考え続けるとともに、これまた手垢にまみれてしまった「女性の自立」を基礎に新たな道を探っていききたい。（ゆ）

＊

「学習会」の名前につられての、卒業のない上級学校に入学したつりの、初参加です。

できるならば、黙って、読む喜びだけに浸っていたい。その私が、知れば知るほど、学びたい、行動しなければ、ものいえる女に变身したい、と欲深くなりました。

＊

そして、いま、一人でも多く、この「あごろ」を手にしてほしい！（桑原）春にはできあがる予定だったのが、とうとう梅雨になってしまった。今回こそは、薄く読みやすい本にしよう、と言っていたのに、できあがってみたら、何と三八八頁。今までで一番厚いものになった。学習会を終えると、そこから出てくる問題点をふまえて、やつぱりこの視点からの学習会も……と次々に予定外のものも飛び入り。

＊

取りこぼしもない、いっばいあるだろうがこの号を一つの資料にして、さらに学習・討論・運動を深め合っていたらと思う。（あ）

＊

妊法が多いのに驚いたり、女と男のいい関係が保たれていれば中絶も少ない、ということこそを再認識したり。気がついたら、みんな自分の避妊や性体験をフランクに話していた。（こ）

しんどい号でした。途中で何度も降りたくなつたのは、トンネルというよりは、地下に穴を掘っていくような思ひだつたからでしょう。中絶や間引きの歴史も、すこし掘り返してみても、人間の長い性の歴史は、男にとつては「快楽の性」であり、女にとつては「産む性」であつたことに、今さらながら、愕然としてます。三十七条の優生法の中に二条だけ加えられた中絶法で、実質的には野放しの中絶が行なわれている日本の女の現状。しかもその陰に、子宮を摘出される「障害者」がいる……。こぼが陳りそうです。

動物学者の説によれば、「人間ほど性行為の好きな動物はない」ということです。一年三百六十五日が発情期ともいえる人間とつて、性に向かうエネルギーをどう昇華させていくか、メスとオスが、それをどう共有していくかは、人間の根底にかかわるたいへんな問題ではないでしょうか。この号では、優生思想の問題に迫られて、この部分は考えることができませんでしたが、優生思想とともに、しっかり見すえたいと思います。（千）

へあごらは、ギリシャ語で「ひろば」の意味。

女の生き方、人間の解放について話しあう「ひろば」。さくのない「ひろば」です。

学歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、

と、一九七二年以来、雑誌『あごら』（年二回刊）を、また一九七七年からは『あごらミニ』（月刊）も発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにほしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなたの自身の情報を、どしどしお寄せください。全国各地の「あごら」拠点にもお出かけください。

●「あごら」は、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係。

会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①雑誌『あごら』および『あごらミニ』の発行

②拠点を軸にした勉強会や社会活動

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行（BOC）の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室（英語教室、再就職準備講座など）の運営、その他。

●会費は年額六千円（雑誌『あごら』『あごらミニ』誌代および送料を含む）。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あごら事務局（TEL 03-354-3941）へ

「あごら」28号 1983年6月25日発行

●編集 赤羽ひとみ／石川房子／石川陽子／市川玉実／井手さよ子／稲垣良代／賀来まゆみ／梶山真希
河上友子／北村三和子／日下恵津子／黒沢照代／桑原ちゑ子／向後裕子／小坂啓子／小島豊子
後藤多見／斎藤千代／嶋田ゆかり／白井博子／村主啓子／高橋倭子／田代慶子／利波京子
中山紀代子／野口淑子／長谷川衛子／東由美子／松岡佳子／源 啓美／三船照子／宮前澄子
武藤輝子／横山れい子／若山玲子／福田光子

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 ●TEL 03-354-3941 ●振替 東京3-39331

●発行人 くあごら運営会議 ●定価1,800円

へあごら」はひろば。さくのないひろば。
共に生き共に考える女のひろば。
1972年以来、資料誌『あごら』を発行、
女の問題を考え続けています。

- 1 女が働くこと
- 2 女性の進出のために
- 3 主婦の解放をめぐる
- 4 何かしたい主婦のために
- 5 運動を進めよう
- 6 子殺しを考える
- 7 働く女と主婦の接点を求めて
- 8 女と法
- 9 女と教育
- 10 国際婦人年世界会議
- 11 国際婦人年国内集会
- 12 国際婦人年国内集会
- 13 女の記録
- 14 職場の中の女性差別
- 15 女と結婚
- 16 女と生涯教育・生涯学習
- 17 女と生涯教育・生涯学習
- 18 いま女性解放は
- 19 女にとつて子どもとは
- 20 女性解放と雇用平等法
- 21 子と母の関係を問う
- 22 男女平等と母性保障
- 23 女たちはいま変わる
- 24 女と戦争
- 25 女と情報
- 26 いま女がモノを言うということ
- 27 いま平和を支える
- 28 産む産まない産めない

